

国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語基本語彙：文献解題と研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001284

日 本 語 基 本 語 彙

－ 文献解題と研究 －

国立国語研究所

2 0 0 0

刊行のことば

本報告書『日本語基本語彙 文献解題と研究』は、日本語の基本語彙に関する研究文献を、語彙表を掲げている文献に絞って調査し分析したものである。語彙表を備えた日本語基本語彙は大正期に取り組みはじめ、平成10年3月までの約80年間に200編ほどの研究文献が編集刊行されている。それらの文献は、言語学、日本語学、国語教育、日本語教育、幼児語研究など近接する研究領域でそれぞれ編まれ刊行されたものである。個々の領域でなく体系的系統的に位置づけることによって、各文献の役割などが明確にとらえられることがある。

本報告書は全体を4章構成とする。第1章は本報告書の研究目的や方法などを提示する。第2章は主要な研究文献122編の文献解題を行う。この第2章が本報告書の中心にある。第3章はそれらの122編の研究文献を研究目的・領域別に整理して注解を付ける。第4章は第2章で取り上げていない残りの80編弱の研究文献を全14種に分けて解説する。これは、それぞれの文献を第2章に採用できなかった理由の記述を中心としている。

平成10（1998）年12月に創立50周年を迎えた国立国語研究所は、各種の語彙調査を行ってきた。本報告書の第2章には、国立国語研究所が行った調査研究の成果として29編の文献を紹介している。全体の4分の1に及ぶ文献数であるが、国立国語研究所としては、文献数が問題ではなく、語彙調査や基本語彙研究にどういう役割を果たしてきたか、あるいは、これから果たそうとしているかを問題にしている。特に平成13年度からは独立行政法人制度による研究機関に移行する。基礎的な調査研究だけでなく、その成果を積極的に国民に普及する必要も出てくる。そういう意味で、本報告書がこの時期に刊行されることは、語彙調査に限定したことではあるが、半世紀に及ぶ国立国語研究所の業務の見直しという役割を持つことになる。

本報告書は、平成2年度から平成9年度までの8年間、言語教育研究部及び日本語教育センターに籍を置いてきた甲斐睦朗が、継続的に取り組んできた基本語彙に関する調査研究の成果をまとめたものである。本報告書の作成にあたっては、国立国語研究所が所蔵する図書資料や国立国語研究所が昭和29（1954）年以降刊行している『国語年鑑』を活用した。

本報告書が，広く言語研究，国語教育，日本語教育などの分野で活用されることを願うものである。

平成12(2000)年3月

国立国語研究所長

甲斐睦朗

日本語基本語彙
— 文献解題と研究 —

目 次

刊行のことは

1	研究の目的と方法	3
1・0	はじめに	3
1・1	本報告書の目的	6
1・2	基本語彙, 基礎語彙等の概念	6
1・3	本報告書の「2」で取り上げる研究文献の数	7
1・4	各研究文献の所在	7
1・5	データベースの作成	7
1・6	担当者及び研究経過	8
2	基本語彙研究文献解題	9
2・1	基本語彙研究文献名一覧	11
2・2	基本語彙研究文献の紹介の方針	15
2・3	基本語彙研究文献解題	19
3	各文献からとらえた基本語彙研究	265
3・0	はじめに	267
3・1	児童・生徒の理解語彙の調査	268
3・1・1	新入学児童の理解語彙の調査	268
3・1・2	文部省の理解語彙の調査	269
3・2	児童・生徒の使用語彙の調査	270
3・2・1	作文の使用語彙	270
3・2・2	話し言葉の使用語彙	271
3・3	教科書の用語調査	272
3・3・0	教科書の用語調査	272
3・3・1	国語科教科書の用語調査	272
3・3・2	他教科教科書の用語調査	274
3・4	幼児・児童の読物類の調査	275
3・5	漢字と語彙の調査	276
3・6	基礎日本語の選定	277
3・7	基本語彙の作成	278
3・7・0	基本語彙文献の分類	278
3・7・1	理論的な試みとしての基本語彙	278
3・7・2	表現力を支える基本語彙	279
3・7・3	理解力を支える基本語彙	280
3・7・4	思考力・認識力を支える基本語彙	281
3・8	日本語能力育成のための基本語彙	282

3・8・0	日本語教育の基本語彙の展開	282
3・8・1	一般初級用の基本語彙表	282
3・8・2	留学生などを対象とした基本語彙表	283
3・8・3	日本語能力測定のための語彙表	284
3・8・4	日本語教育映像教材の使用語彙	285
3・8・5	児童・生徒用の学習語彙	286
3・9	言語調査のための基礎語彙	287
3・10	学校生活全領域学習用語	288
3・11	国立国語研究所の語彙調査	289
4	本報告で取り上げなかった文献	291
4・0	はじめに	293
4・1	国語辞典・日本語辞典等の見出し語	294
4・2	教科書の巻末につけられた語彙表	300
4・3	国語・日本語学習者の独習用に編集された語彙表	303
4・4	漢字との関係で取り上げられている語彙表	304
4・5	乳幼児の言語発達を取り上げた語彙表	307
4・6	小学校1年生を対象として作成された語彙表	308
4・7	生活に密着した児童の語彙表	311
4・8	古典関係の基本語彙表	311
4・9	特定の品詞など部分的な領域・分野の語彙表	313
4・10	外国語の基本語彙表	315
4・11	調査の目的を異にする語彙表	317
4・12	学会の研究発表会で紹介された語彙表	318
4・13	その他の理由で取り上げていない語彙表	319
4・14	原本が確認できなかった文献	323
索引		325
1	研究文献名索引	327
2	編著者名索引	335

1 研究の目的と方法

1・0 はじめに

1・1 本報告書の目的

1・2 基本語彙，基礎語彙等の概念

1・3 本報告書の「2」で取り上げる研究文献の数

1・4 各研究文献の所在

1・5 データベースの作成

1・6 担当者及び研究経過

1 研究の目的と方法

1・0 はじめに

最初に、本報告で取り扱う基本語彙の研究文献に関する大まかな見取り図を掲げてみよう。この見取り図は、日本で最初に基本語彙の語彙表が刊行された大正8(1919)年から平成10(1998)年3月までの80年間をほぼ10年ずつに区切って、それぞれの期間にどういう先駆的あるいは画期的な文献が刊行されているかについて略述し、日本の基本語彙の調査研究の展開の方向を見定めようとするものでもある。

さて、日本で作成された語彙表は、大正8(1919)年に成城小学校の創始者澤柳政太郎氏が自ら調査研究を企画・推進した文献(1)『児童語彙の研究』に始まっている。澤柳政太郎氏は、欧米の児童語彙研究に触発されて開校2年目の成城小学校の新入生の理解語彙の調査に乗り出した。そして、同じ澤柳政太郎氏が企画した千葉県鳴浜小学校の文献(3)『新入学児童語彙の調査』は、文献(1)が都会の児童を対象としていた関係で、千葉県の児童の語彙力を調査したものである。これら成城学校叢書の研究文献は、使命感にあふれるものであり、現在でも資料的価値を失っていない。続く大正13(1924)年に刊行された久保良英氏の文献(2)「幼児の言語の発達」も、欧米の研究に触発されて自らの3人の子供の語彙発達を3年間にわたって記録したものである。本文献(2)もまた平成の現在にあって資料的な価値を失っていない。こうした文献(1)や文献(2)などの先駆的な研究文献に導かれて、以後、日本では様々な調査研究が行われるようになる。

昭和年代に入ると、国語教育の普及や指導法の質的な向上の観点から国語読本の用語調査が盛んに行われるようになってくる。内山薫氏の文献(4)『国語読本 語句教授の指針』は、学習者の語彙能力の育成を願って作成されたものである。同様の文献に文献(7)『国語読本の語彙』がある。この文献は、全12巻の用語を五十音順に整理し、その出現する課の番号のすべてを記載している。そして、垣内松三氏の文献(6)『小学国語読本 巻一 形象と理會』は、わずか国語読本の巻一だけの調査ではあるが、国語教育の世界で語句を語彙として、また、統計的にも扱った最初の文献になっている。「語彙として」というのは、巻一の用語をほぼ1,000項目の意味に分類する分類語彙表的な見方を提案していることである。この調査は、その後、国定読本の巻四までを扱った文献(12)『基本語彙学 上』に結集する。なお、垣内松三氏の何編かの文献によって語彙的及び統計的な成果が公表された結果、後続する文献の調査研究の在り方が問題になってくる。例えば、大槻芳廣氏の文献(13)『小学校に於ける言語の教育』などは、国定読本全12巻の用語を調査したものではあるが、異なり語を五十音順に配列しただけで頻度も示されていないので、同じく全12巻を調査した文献(7)『国語読本の語彙』よりも、また、4巻までしか調査できていない文献(12)『基本語彙学 上』などよりも後退した印象をもつ。

昭和10年前後になると、欧米の調査研究に刺激を受けながら、独自の基礎日本語や基本語彙の作成に力を入れるようになる。まずは、イギリスのBasic Englishに触発されて1,000語を選定し、五十音順に配列するだけでなく意味別にも配列した土居光知氏の文献(5)『基礎日本語』、次に、7種の国語教科書の用語約30万語を調査して約9,000語の見出しに整理し、五十音順に配列し、各語句の使用度数も記した南満洲教育会教科書編輯部の文献(11)『基礎日本語』、そして、国定読本全12巻の用語を調査し、五十音順に配列するだけでなく、各用語の出現する巻数を掲げた湘南国語研究会の文献(7)『国語読本の語彙』のように貴重な成果が刊行されはじめている。

昭和10年代後半には、国家的な事業として何編もの優れた語彙表の作成が試みられている。国語協会の文献(25)『日本語基本語彙』は当時の語彙表としては精選されているものと見ることができそうであるが、選定した用語をただ配列しただけの語彙表ということで、当時もその後もほとんど活用されていない。他方、同時期

に同様の趣旨で選定された国際文化振興会の文献(26)『日本語基本語彙』は意味を記述し、文法的な検討を加え、多くの用例を付けたものである。次に、この時期に刊行された阪本一郎氏の文献(23)『日本語基本語彙 幼年之部』は、個人の研究ではあるが、膨大な資料を調査して説得的な基本語彙表を編集している。ただ、戦時色の強い時代の児童文学作品などを資料にしているために、現在では歴史的な価値しか認めにくいものになっている。

昭和20年代に入り社会が安定してくるにつれて、各種の画期的なあるいは精緻な調査に基づく語彙表が作成されてくる。まず、すべての用語の出現数について巻ごとに明記し、全体の語数まで記載した東京書籍の文献(30)『小学校用 新しい国語 語い調査表』が挙げられる。国語教科書の改訂ごとに綿密な用語の調査が4冊作成されている。教科書用語調査の典型と評価すべき文献である。次に、漢字中心に幾種類もの教科書の語句を整理した横浜市立教育研究所の文献(34)『小学校国語教科書における漢字調査』が挙げられる。そして、国立国語研究所が大型の用語調査に取り組むようになって、文献(31)『語彙調査 — 現代新聞用語の一例』、文献(33)『現代語の語彙調査 婦人雑誌の用語』などを刊行している。語彙表の調査は、研究者集団による共同研究の時代に入ってきたのである。

昭和30年代に入ると、様々な分野・領域の語彙表が作成されてくる。まず、服部四郎氏の文献(38)『基礎語彙調査表』は基礎語調査のための語彙表の試みを具体的に展開している。次々に手を加えているので、完成した姿をどこに求めるべきかがよくわからないほどである。この文献は、人間がこの世で生きていく上で、どういう語彙が必要かという見方ととらえることができそうである。次に、阪本一郎氏の文献(40)『教育基本語彙』は、その検討資料に当時の国語辞典では定評のある『言林』を使用したこと、文献(31)『語彙調査 — 現代新聞用語の一例』をはじめとする語彙調査の成果を追加したこと、何人もの教育関係者や有識者のそれぞれの語についての教育的な判断を採用したこと、義務教育期の児童・生徒の理解語彙として、22,500語という語数の基本語彙を区分して掲げたことなどによって、教育の現場で安心できる語彙表が選定されている。次に、文部省の文献(42)『児童・生徒の語い力の調査』以下の一連の調査は、昭和32年から取り組みはじめて最終の中学1年の報告書の刊行までに10年を要しているが、その間に、小学校低学年の調査表から中学生用の調査表まで、全部で5種類の語彙表を提案している。そして、児童生徒がその語の意味を知っているかどうかという判断を優先する見方を普及させた。

次に、国立国語研究所の文献(44)『現代雑誌九十種の用語用字』は共同研究によってはじめて可能な大量の語彙分析の成果を報告したものである。また、文献(49)『分類語彙表』は、国立国語研究所のそれまでの語彙研究の成果である現代語の語彙を文法及び意味の上で体系的系統的に精緻に分類した文献で、刊行して30数年経過した現在でも意味分類の基準に取り上げられている。次に、加藤彰彦氏の文献(47)『日本語教育における基礎学習語』は、日本語教育の初級の基礎学習語の選定の方法として、6種類の日本語関係の語彙表等を資料に採用し、学習基本語彙がその6種類の中の何冊に出現するかという見方を採用している。多くの資料に出現する用語が重要だとする見方である。この見方は、是非は別として、その後、日本語教育のための語彙表の作成の上でよく使われるようになっていく。

昭和40年代に入ると、留学生を対象とする日本語教育のための基本的な文献が刊行されてくる。まず、海外技術者研修協会の文献(56)『実用和英辞典』は英語圏の日本語学習者のために作成された優れた辞典である。次に、樺島忠夫・吉田弥寿夫氏の文献(57)『留学生教育のための基本語彙表』は高校の理科、社会科の教科書の用語から統計的に導き出した語彙表である。そして、文化庁の文献(59)『外国人のための基本語用例辞典』は、昭和19年に国際文化振興会によって編集・刊行された文献(26)『日本語基本語彙』を新しく作り改めたような体裁・内容になっている。また、この時期、国立国語研究所では電子計算機を駆使して調査した文献(55)『電子計算機による新聞の語彙調査』などを刊行している。

昭和50年代は、最も文献数の多い時期で、全122編中の30編余りが刊行されている。語彙表としても基礎的あるいは啓発的な文献が数多く出されている。まず、中央教育研究所の文献(62)『学習基本語彙の基礎調査』は、国立国語研究所の複数の大規模な語彙調査の成果を統計的に処理した内容である。いくつかの補正を行っているが、全体としては国立国語研究所の電子計算機による成果そのものといえる。そして、その文献(62)や文献(40)『教育基本語彙』など先行する優れた文献を資料として選定された東京書籍の文献(73)『学習基本語彙表 小学校国語科用』は、統計的な裏打ちをもつと同時に教育的な配慮を備えている。次に、平山輝男氏の文献(72)「全国方言基礎語彙調査項目」は、幅広い生活用語までを含みもっているため、基本語彙の考えを作る上で重要な意味をもっている。そして、文献(80)『小学校国語教科書の学習語彙表とその指導』は、東京書籍の文献(30)『小学校用 新しい国語 語い調査表』と同様の国語教科書の用語調査であり、意味分類表などを加えている。この文献は、その後の教科書の改訂ごとに版を改め、平成8年版の国語教科書まで6冊の語彙表を刊行している。

次に、国立国語研究所の文献(83)『高校教科書の語彙調査』は、これまで手つかずであった高校の教科書、それも国語科以外の社会科、理科の教科書の用語を明らかにした調査で、日本の高校生だけでなく外国人留学生の日本語力の育成の基礎としての価値をもっている。次に、同じく国立国語研究所の文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』は、日本語教育センター設立以後10年に及ぶ一連の語彙調査の一大成果と評価することができる。ただし、この調査研究は、昭和30年代の最後に紹介した文献(47)「日本語教育における基礎学習語」の方法と同じく、これまでの各種の調査研究の成果を統計的に整理したものである。(この種のデータベースは、今でも幾編も作成されているが、新しい見地によって選定された語彙表の提案が期待されるところである。)

昭和60年から平成10年3月までの10数年間は、基礎的な調査に本格的に乗り出すと同時に日本語教育のための実用的な語彙表の作成も試みられている。基礎的な調査としては、まず、大量の児童の作文資料の使用語彙を調査した国立国語研究所の文献(103)『児童の作文使用語彙』が挙げられる。教科書等の使用語彙の調査は数多く行われているが、いわゆる作文の用語調査は極めて少ない。その中で大量の作文資料の使用語彙を調査したのが本文献である。次に、テレビの音声・映像を資料として話し言葉の用語調査に取り組んだ国立国語研究所の文献(114)『テレビ放送の語彙調査』が挙げられる。(実は、教室の談話研究などが盛大に行われているので、そうした資料を活用して話し言葉の用語調査を行うことが考えられるし、期待もされるが、そうした調査研究はまだ1編も報告されていない。)次に、国立国語研究所が行った全6期の国定読本の全用語調査から導き出した文献(118)「国定読本自立語見出し一覧」が挙げられる。

日本語教育のための実用的な文献としては、成人用及び年少者用の語彙表が作成されている。成人用としては、国際交流基金・財団法人日本国際教育協会の文献(113)『日本語能力試験 出題基準』の中で提示された1級から4級までの語彙がある。これは全部で約7,000語を1級から4級に分けて提示したものである。

児童用としては、横浜国立大学の工藤真由美氏の文献(115)『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』がある。これは、国立国語研究所の文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』と同じ方法で児童生徒用の語彙表を対照させて基本的な用語を導き出したものである。次に、波多野ファミリースクールの文献(116)「算数教科書使用語彙一覧」は算数の教科書の用語を教育の場で洗い直したものである。また、東京外国語大学から刊行された文献(122)『小学校教科書語彙項目一覧』は、小学校の算数と理科・生活科の用語を調査し、文献(115)、文献(116)と対比させたものである。

1・1 本報告書の目的

本報告は、大正8(1919)年の澤柳政太郎氏の調査研究に始まり、平成10(1998)年の東京外国語大学の調査研究に至る80年間に、日本国内を中心に、教育用あるいは調査用に作成された現代日本語の基本語彙・基礎語彙等の語彙表を掲げる研究文献約200編を調査したものである。本報告書の構成について、簡単に述べると、「2」では主要な文献122編を作成年代順に配列してそれぞれの文献について2ページずつの解説をつける、「3」ではそれらの文献を11種類に分けて各種類ごとの特徴等を記述する、「4」では〔2〕に含めなかった約60編の文献について種別ごとに記述する、という構成になっている。この「4」は、本報告の作成の過程で結果的に生じたものであるので、各文献の説明の仕方には統一がとれていないところがある。

1・2 基本語彙，基礎語彙等の概念

本報告の文献採集及び文献の選択においては、次の6つの条件を立てている。

- (1) 共通語を中心とした現代日本語の語彙表であること
- (2) 基本語や基礎語などというように、選定の考え方や語数に制限を加えた語彙表であること
- (3) 領域や品詞等の上で、部分的でなく全体を取り上げた語彙表であること
- (4) 一覧表を提示していること
- (5) 語彙選定の観点や手順などを記していること
- (6) 言語教育あるいは言語調査を念頭において作成していること

これら6つの条件に関しては、「4 本報告で取り上げなかった研究文献」で具体的に述べる。

次に、用語「基本語彙・基礎語彙等」は広い意味で使用している。現在、基本語、基本語彙、学習基本語彙、学習語彙、重要語、重要語彙、基礎語、基礎語彙、基幹語彙などといった用語が、ある限定した領域や意味を表す趣旨・意図によって使用されている。本報告で使用する「基本語彙，基礎語彙等」は、それらの領域や意味を広く含む用語として使用している。本報告の目的が語彙表自体の解明・紹介にあること、また、実際の語彙表の考察を通して概念規定等を行おうとしていることがあるからである。なお、こうした用語の使い分け、あるいは基本語彙等の考え方に関しては、林四郎氏の文献(58)「語い調査と基本語彙」(国立国語研究所報告39『電子計算機による国語研究 III』)、水谷静夫氏の文献(86)『朝倉日本語新講座2 語彙』(朝倉書店 昭和58(1983)年4月)などに考察が展開されている。そして、真田信治氏の「基本語彙・基礎語彙」(『岩波講座日本語9 語彙と意味』岩波書店 昭和52(1977)年6月)がそれらの考察を理論的にまとめている。本報告は、語彙表の実際の調査研究を通して、この問題に取り組もうとしたものである。

なお、編者の編著書に『国語教育基本論文集成』(飛田多喜雄・野地潤家監修 明治図書)の第21巻『国語科言語教育論(3) 語句・語彙指導論』(1993年 A5判 509ページ 共編者：石黒由香里氏)がある。本文献は、戦後の優れた語句・語彙指導関係の論文42編を掲載し、戦後の語彙指導に関する解説を付けた内容である。目次の大綱を掲げておきたい。

- I 語彙指導の理論と方法……………15編の論文を掲載
- II 語彙指導理論から実践へ……………14編の論文を掲載
- III 語彙指導の実践開発 …………… 9編の論文を掲載
- IV 学習基本語彙研究 …………… 4編の論文を掲載

解説 語彙指導の方法—戦後の実践研究文献から (未掲載論文リスト18編付)

本文献『国語科言語教育論(3) 語句・語彙指導論』は、『フロッピー版・日本語研究文献目録』(国立国語

研究所編 秀英出版) 及び『国語年鑑』等で検索することで、戦後40年間の語句・語彙指導関係の論文約900編を収集し、それら900編の各論文から、今後大きな意味をもつと考えられる文献42編を選定するとともに、戦後約40年間の語句・語彙指導の動向を追究しようとしたものである。『国語科言語教育論(3) 語句・語彙指導論』は、本報告書の姉妹書の関係にあるとすることができる。

1・3 本報告書の「2」で取り上げる研究文献の数

本報告のために実際に手にとって検討を加えた研究文献は200編弱である。本報告の「2 基本語彙研究文献解題」では、その中の122編を取り上げている。また、「2」の中で、それらに関係づけて10数編の文献名を紹介している。そして、「2」で取り上げることができなかった60編弱については、原則として、「4 本報告で取り上げなかった文献」で文献名を掲げて、その趣旨や輪郭、また、なぜ「2」で取り上げなかったかの理由などについて説明を加えるようにした。

1・4 各研究文献の所在

本報告の「2 基本語彙研究文献解題」で見開き2ページを使って紹介する研究文献全122編の所在について記しておく、約90編は、国立国語研究所図書館をはじめとする所内の3つの施設に所蔵されている。多いほうから示すと、重複する文献があるので合計数は合わないが、最も多いのが国立国語研究所図書館で約90編中の80編ほどを所蔵している。次が日本語教育センター資料室で20編近くを所蔵している。そして、残りが日本語教育センター日本語教育研修室リソースルームで、数編を所蔵している。国立国語研究所では、原則として、国語学・日本語学、国語教育、及び日本語教育関係の中でも研究的な文献は図書館に、日本語教育の基本的な文献は日本語教育センター資料室に、日本語教育の教材や研究報告の類は日本語教育研修室リソースルームに分けて収蔵している。なお、文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』の作成に至る一連の内部資料は、日本語教育センター第一研究室に収蔵されている。

次に、文献(34)『小学校国語教科書における漢字調査』(上下2冊)は、横浜市立森東小学校の松永立志氏の御好意で横浜市教育委員会所蔵の図書を借用できた。また、文献(71)『低年齢層を対象とした日本語教育教材のための基礎調査』は、その調査研究の指導者であった中野洋氏所蔵のものである。それら以外の約30編は編者が収集してきたものである。なお、「4 本報告で取り上げなかった文献」で紹介している各研究文献も、国立国語研究所の各施設の所蔵、あるいは編者が収集してきたものである。

1・5 データベースの作成

国立国語研究所では、特に言語教育研究部第一研究室(室長; 島村直己)が中心になって、文献(40)『教育基本語彙』をはじめとする研究文献7編の語彙表を一つにまとめた「教育基本語彙データベース」の作成に取り組んでいる。本データベースは、配列順に示すと、阪本一郎氏の文献(40)『教育基本語彙』及びその改訂版である文献(88)『新教育基本語彙』、田中久直氏の文献(36)『国語科学習基本語彙 指導の実際』、大阪市立矢田小学校の文献(39)『国語教育のための基本語体系』、児童言語研究会の文献(45)『言語要素指導』の「児言研・国語科教育基本語い(第一次試案)」、中央教育研究所の文献(62)『学習基本語彙の基礎調査』、そして、国立国語研究所の文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』の7文献である。そのデータベースの見出し語数は27,234語で、五十音順に配列されていて、それぞれの文献の難易や重要度などが明記されている。また、

文献(40)『教育基本語彙』, 文献(88)『新教育基本語彙』の2文献は各見出しのランクが掲げられている。また, 文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』は, 2,000語には「◎」を, その他の語には「○」を施している。このデータベースから, 目的に応じた基本語彙を選定することが可能である。なお, この成果は近々報告書とCD-ROMのかたちで公表する予定になっている。

ところで, これまでにも, 国立国語研究所の文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』や文献(115)『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』を挙げるまでもなく, 冊子体あるいは電子媒体のかたちで各種文献に関するデータベースが作成されてきている。問題は, その基礎資料にどのような文献を取り上げるかである。本報告は, その選定の参考になる資料として使用されることが期待される。すなわち, 目的や用途によって適切に選定した文献を組み合わせることによって基本語彙のデータベースの作成が可能であるが, 先ずは, 信頼のおける文献の起用が期待されるのである。

1・6 担当者及び研究経過

本調査は, 最初は編者が『学習基本語彙の研究』第1集(愛知県学習基本語彙研究会編 昭和54(1979)年B5判132ページ)所収の「学習基本語彙文献解題 — 基本語・基本語彙研究」(3~30ページ)の増補を目的として平成2年度以降に取り組み始めたものである。「学習基本語彙文献解題 — 基本語・基本語彙研究」は, 主要な研究文献22編を各2ページずつで解説したものである。

語彙表を中心とした先行する語句・語彙の研究領域の文献解題としては, 小学校入門期の文献に限られはするが, 『入門期の言語能力(国立国語研究所報告7)』(秀英出版 昭和29(1954)年3月 A5判217ページ)の「Ⅶ この問題に関する研究の大勢」(198~213ページ)の「A 日本の文献」「B 外国の研究状況」が参考になった。本報告書の編者は, 初めは「A 日本の文献」の増補版を作成しようとしていたのである。

国立国語研究所の研究課題としては, 編者甲斐睦朗が, 言語教育研究部第一研究室の「語彙指導のための基礎的研究」(平成2~3年度), 日本語教育センター第一研究室の「日本語運用能力育成のための準備的研究」(平成4~5年度), 「日本語運用能力育成のための基礎的研究」(平成6~8年度), 「日本語運用能力育成のための総合的研究」(平成9年度)のテーマで継続的に行ってきた成果の一部である。

なお, 本報告書の編集及び刊行に際して, 「2」の122編の文献の編著者及び出版社には引用許諾を頂いた。何人もの編著者には原稿に目を通してくださった。最後に, 表記等の点検等について所員の協力を得たことを記しておきたい。

2 基本語彙研究文献解題

2・1 基本語彙研究文献名一覧

2・2 基本語彙研究文献の紹介の方針

2・3 基本語彙研究文献解題

2・1 基本語彙研究文献名一覧

(全122編)

文 献 名 (※印は語彙表名)	編 著 者 名	出 版 社 名	発行年月
1 児童語彙の研究	澤柳政太郎・他	同文館	T 8. 5
2 幼児の言語の発達	久保良英	中文館書店	T 13. 6
3 新入学児童語彙の調査	千葉県鳴浜小学校職員研究会	文化書房	T 13. 11
4 国語読本 語句教授の指針	内山 薫	山口県師範学校	S 3. 6
5 基礎日本語	土居光知	六星館	S 8. 3
6 小学国語読本巻一 形象と理會 巻一	垣内松三	文学社 不老閣書房	S 8. 4
7 国語読本の語彙	湘南国語研究会	講学社	S 9. 2
8 国語教育の諸問題 (上)	垣内松三	文学社	S 9. 9
9 速成日本語読本 上巻	在満日本教育会教科書編輯部	東亜印刷	S 10. 9
10 児童の語彙と教育	岡山県師範学校附属小学校	藤井書店	S 10. 11
11 基礎日本語	南満州教育会教科書編輯部	(謄写印刷)	S 11
12 基本語彙学 上	垣内松三	文学社	S 13. 6
13 小学校に於ける言語の教育	大槻芳廣	小学出版社	S 14. 2
14 小学国語読本 巻一の研究	国語協会教育部	(謄写印刷)	S 14. 7
15 小学国語読本 新出語句総覧	兵庫県加古川町永丘小学校	永丘尋常高等小学校	S 14. 12
16 基礎日本語の試み	土居光知	朝日新聞社	S 16. 7
17 基本簡易ニッポンゴ	情報局	日本読書新聞	S 17. 4
18 ヨミカタ 1～4 総合語彙の品詞別調査	廣瀬榮次	『コトバ』5-2	S 18. 2
19 幼児の言語発達	恩賜財団愛育会愛育研究所	目黒書店	S 18. 2
20 国民学校教科書の語彙 一	国語協会	国語協会	S 18. 3
21 基礎語 (『日本語の姿』)	土居光知	改造社	S 18. 6
22 児童読物の語彙調査	財団法人日本語教育振興会	『日本語』3-10	S 18. 10
23 日本語基本語彙 幼年之部	阪本一郎	明治図書	S 18. 11
24 児童の語彙と国語指導	長野師範学校男子部附属国民学校教科研究会	信濃毎日新聞社	S 19. 3
25 日本語基本語彙	国語協会	国語協会	S 19. 3
26 日本語基本語彙	岡本禹一	国際文化振興会	S 19. 6
27 教科書用語集 小学校第一学年の部	文部省国語課校関係	(謄写印刷)	S 23. 5
28 低学年向け基本語い※	與水実・沖山光	金子書房	S 25. 9
29 富山市児童言語調査	富山市教育委員会	富山市教育委員会	S 25. 12
30 小学校用 新しい国語 語い調査表	東京書籍編集部第一編集課	(謄写印刷)	S 26
31 語彙調査 一 現代新聞用語の一例 一	国立国語研究所	秀英出版	S 27. 3
32 基本語による国語の学習指導	與水実・賀根俊榮	刀江書院	S 27. 6
33 現代語の語彙調査 婦人雑誌の用語	国立国語研究所	秀英出版	S 28. 3

34	小学校国語教科書における漢字調査	横浜市立教育研究所		S28.3
35	小学校の国語教科書の語彙	田中久直	(謄写印刷)	S29.6
36	国語科 学習基本語彙 指導の実際	田中久直	新光閣書店	S31.9
37	現代語の語彙調査 総合雑誌の用語	国立国語研究所	秀英出版	S32.3
38	基礎語彙調査表	服部四郎	科研・総合研究	S32.8
39	国語教育のための基本語体系	大阪市立矢田小学校・池原楯雄	六月社	S32.10
40	教育基本語彙	阪本一郎	牧書店	S33.8
41	基本語彙と語彙調査	水谷静夫	朝倉書店	S33.4
42	児童・生徒の語い力の調査 準備調査(昭和32年度)全2冊	文部省(国語シリーズ41・42)	明治図書	S35.2
43	児童・生徒の語い力の調査 本調査(昭和33年度)小学校第6学年	文部省(国語シリーズ51)	光風出版	S37.3
44	現代雑誌九十種の用語用字 第一分冊	国立国語研究所	秀英出版	S37.3
45	言語要素指導	児童言語研究会	明治図書	S37.9
46	児童・生徒の語い力の調査 本調査(昭和34年度)小学校第4学年	文部省(国語シリーズ52)	光風出版	S38.2
47	日本語教育における基礎学習語	加藤彰彦	『日本語教育』2～5	S38.3
48	しょうがくこく1ねんの1, 2, 3, における語い調査	大島孜	(謄写印刷)	S38.3
49	分類語彙表	国立国語研究所	秀英出版	S39.3
50	児童・生徒の語い力の調査 本調査(昭和35年度)中学校第3学年	文部省(国語シリーズ58)	教育図書	S39.9
51	児童・生徒の語い力の調査 低学年の学習語(昭和37年度)	文部省(国語シリーズ59)	教育図書	S39.9
52	言語要素とりたて指導細案	横浜市立奈良小学校	明治図書	S40.3
53	幼児言語の発達	大久保愛	東京堂出版	S42.11
54	言語要素とりたて指導入門	林進治	明治図書	S45.2
55	電子計算機による新聞の語彙調査	国立国語研究所	秀英出版	S45.3
56	実用和英辞典	海外技術者研修協会	海外技術者研修調査会	S45.6
57	留学生教育のための基本語彙表	樺島忠夫・吉田弥寿夫	『日本語・日文化』(大阪外大)	S46.3
58	語い調査と基本語彙	林四郎	国立国語研究所	S46.3
59	外国人のための基本語用例辞典	文化庁	大蔵省出版局	S46.8
60	語い指導の系統と方法	安達隆一・豊橋市二川小	明治図書	S48.2
61	語句指導と語い指導	倉澤栄吉	明治図書	S49.4
62	学習基本語彙の基礎調査	中央教育研究所	中央教育研究所	S51.5
63	用例集 幼児の用語	岩淵悦太郎・村石昭三	日本放送出版協会	S51.11
64	絵本の研究 ― 6才児の親近語彙集付 ―	阪本一郎	日本文化科学社	S52.2
65	A Classified List of Basic Japanese Vocabulary	J. V. Neustupný	Monash University	S52
66	学習語彙表 ― 語彙指導のための基礎作業 ―	内子中学校	内子中学校	S52
67	小学校国語科における学習語彙の調査	中央教育研究所	中央教育研究所	S53.2
68	日本語教育基本語彙第一次集計資料(1) ― 上位二千語 ―	日本語教育センター	国立国語研究所	S53.3
69	日本語教育基本語彙第一次集計資料 ― 六千語 ―	日本語教育センター	国立国語研究所	S53.8
70	小学校における教育用語(国語・社会・算数・理科)の学年別の実態	後藤忠彦・他	教育システム普及会	S53.10
71	低年齢層を対象とした日本語教育教材のための基礎調査	藤田正春・他	(手書複写・簡易製本)	S53.12

72	全国方言基礎語彙調査項目※	平山輝男	明治書院	S 54. 2
73	学習基本語彙表 小学校国語科用	「新しい国語」編集委員会	東京書籍	S 54. 2
74	日本語教育語彙資料 — 低学年初級500語 —	日本語教育センター第二研究室	国立国語研究所	S 54. 6
75	漢字語彙資料	林四郎	文部省特定研究「言語」	S 55. 3
76	日本人の知識階層における話しことばの実態 — 語彙表 —	志部昭平	国立国語研究所	S 55. 3
77	文字・語句教育の理論と実践	松山市造・小林喜三男	一光社	S 55. 5
78	生徒の言語環境を整えるための重要語い集	岡山市立丸之内中学校	丸之内中学校	S 55.11
79	小学校における効果的な語彙指導	福沢周亮・岡本まさ子	教育出版	S 56. 2
80	小学校国語教科書の学習語彙表とその指導	甲斐睦朗	光村図書	S 57. 1
81	日本語教育基本語彙七種比較対照表	国立国語研究所	大蔵省印刷局	S 57. 3
82	就学前幼児の語彙	大久保愛・川又瑠璃子	国立国語研究所	S 57. 3
83	高校教科書の語彙調査	国立国語研究所	秀英出版	S 58. 3
84	光村図書版 学習基本語彙表	甲斐睦朗	光村図書	S 58. 3
85	小学校低学年用国語教科書の用語	島村直己	国立国語研究所	S 58. 3
86	基本度 f 上位七百語※	水谷静夫	朝倉書店	S 58. 4
87	語彙標準表※	文化庁国語課	文化庁	S 58. 8
88	新教育基本語彙	阪本一郎	学芸図書	S 59. 1
89	作文の語彙	井上一郎・他	『文教国文学』14	S 59. 2
90	日本語教育のための基本語彙調査	国立国語研究所	秀英出版	S 59. 3
91	学習基本語彙	中央教育研究所	中央教育研究所	S 59. 9
92	豊かな文章表現力を育てるための基礎研究	生稲陽一	千葉県長期研修報告	S 60. 3
93	教育基本語彙の体系化とその指導方法の究明	神戸大学教育学部語彙指導研究会	神戸大学教育学部	S 60. 3
94	学習基本語彙の選定に関する研究 I	教育調査研究所	教育出版	S 60. 6
95	小・中学生の作文の用語調査	日本児童教育振興財団	財団法人日本児童教育振興財団	S 60. 7
96	日本語教育映画 基礎編 総合語彙表	国立国語研究所	日本シネセル	S 61. 1
97	中学校教科書の語彙調査	国立国語研究所	秀英出版	S 61. 3
98	基礎日本語学習辞典	国際交流基金	凡人社	S 61.12
99	日本語教育基本語彙2570語※	玉村文郎	アルク	S 62. 9
100	日本語教科書語彙リスト※	国立教育研究所	国立教育研究所	S 63. 3
101	小学校国語教科書(学図・61年版)総索引	落合一郎	(謄写印刷)	S 63. 4
102	小学校教科書教科別語彙資料 理科・本文編・索引編	京極興一・細川英雄	信州大学	H 元. 3
103	児童の作文使用語彙	国立国語研究所	東京書籍	H 元. 3
104	小学校教科書漢字別語彙表	国立国語研究所	(内部資料)	H 元. 6
105	日本語教育映像教材 中級編 伝えあうことば2語彙表	国立国語研究所	大蔵省印刷局	H 3. 3
106	日本語初級教科書によく使われる語※	日本語教育学会	凡人社	H 3. 5
107	品詞別・レベル別 1万語語彙分類集	専門教育出版編集部テスト課	専門教育出版	H 3.10
108	児童作文の語彙に関する研究 — 語彙表 —	中田敏夫	『愛知教育大学研究報告』第41輯	H 4. 2
109	簡約日本語の創成と教材開発に関する研究	日本語教育センター第2研究室分室	国立国語研究所	H 4. 7

110	日本語指導教材 にほんごを まなぼう	文部省	ぎょうせい	H 4 . 9
111	絵本の語彙	中曽根仁・川又瑠璃子	国立国語研究所	H 6 . 3
112	教科語彙一覧・学校生活語彙一覧※	お茶の水女子大学附属中学校	お茶の水女子大学附属中学校	H 6 . 11
113	日本語能力試験 出題基準	国際交流基金/日本国際教育協会	凡人社	H 6 . 11
114	テレビ放送の語彙調査	国立国語研究所	秀英出版	H 7 . 10
115	児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査	工藤真由美	横浜国立大学教育学部	H 8 . 3
116	算数教科書使用語彙一覧※	波多野ファミリースクール	波多野ファミリースクール	H 8 . 3
117	初期指導基本語彙※	目黒区立東根小学校	東根小学校	H 9 . 3
118	国定読本自立語見出し一覧	国立国語研究所国語辞典編集室	(内部資料)	H 9 . 6
119	入門日本語辞典 試用版	海外に日本語教材を送る会	京都橘女子大学	H 9 . 10
120	日本語教育映像教材 初級編 日本語でいじょうぶ 語彙表	国立国語研究所	国立国語研究所	H 9 . 11
121	第4期国定算数教科書見出し一覧	国立国語研究所国語辞典編集室	(内部資料)	H 9 . 12
122	小学校教科書語彙項目一覧※	東京外国語大学	東京外国語大学	H10 . 3

(注記)

上記122編の文献名の中には、書名でなく、それらの中に掲げられている語彙表の名称を記したものがある。それは、次の11編で、右側に書名を掲げておく。

番号	語彙表名	書名
28	低学年向け基本語い	『言語教育と言語教材』
72	全国方言基礎語彙調査項目	『全国方言基礎語彙の研究序説』
86	基本度 f 上位七百語	『朝倉日本語新講座2 語彙』
87	語彙標準表	『外国人に対する日本語教育の振興に関する報告集』
99	日本語教育基本語彙2570語	『日本語教師養成通信講座 日本語の語彙・意味』
100	日本語教科書語彙リスト	『パソコンによる外国人のための日本語教育支援システムの開発』
106	日本語初級教科書によく使われる語	『日本語教育機関におけるコース・デザイン』
112	教科語彙一覧・学校生活語彙一覧	『帰国生はこうして学ぶ』
116	算数教科書使用語彙一覧	『帰国子女適応教育教室 研究調査報告書 平成7年度』
117	初期指導基本語彙	『場面を重視した日本語指導の改善』
122	小学校教科書語彙項目一覧	『外国人子女の日本語指導に関する調査研究《最終報告書》資料集5』

2・2 基本語彙研究文献の紹介の方針

0 「2・1」に掲げた全122編の基本語彙研究文献は、以下の20項目の要領で紹介する。なお、以下の要領の多くは「原則として」の立場で述べている。

- 1 全122編は、それぞれ見開き2ページの範囲で紹介する。
- 2 各文献とも、最初に文献番号を掲げて書誌情報を付ける。その情報は次の3～9項目で構成されている。
- 3 1行目に、書名（論文名）、講座名（シリーズ名）などを掲げる。その際、語彙表の所在が明確になるように、書名（論文名）を先に掲げるようにし、講座名（シリーズ名）などの大きな単位は後に回すようにする。長い標題の場合は、例2に示すように2行にわたることがある。

(例1) 文献(1) 児童語彙の研究（成城学校研究叢書 第一編）
 (例2) 文献(20) 国民学校教科書の語彙一
 —『ヨミカタ』『コトバノオケイコ』各巻一から巻四まで

- 4 2行目にその文献の編著者名を掲げる。講座などに収められる論文の場合は執筆者名を掲げる。

(例) 文献(18) ヨミクター～四 総合語彙の品詞別調査（『コトバ』第五巻第二号）
 廣瀬榮次

- 5 3行目の前半に出版社名を掲げる。なお、文献(11)『基礎日本語』などのように出版社名を掲げていない文献、あるいは自費出版による文献はその限りでない。

(例) 文献(1) 児童語彙の研究（成城学校研究叢書 第一編）
 澤柳政太郎・田中末廣・長田新
 同文館 大正8(1919)年5月25日

- 6 3行目後半に初版の刊行年月日（元号と西暦の併用）を掲げる。ただし、実際に当たった文献の刊行が再版以降の版である場合は、原則として初版とその版の両方の刊行年月日を記すようにする。なお、刊行年月日の「日」を記していない文献がいくらかある。また、次の例のように初版の刊行年月を記していない文献もある。『国語年鑑』などで判明した場合は初版の刊行年月を補って記すようにする。

(例) 文献(54) 言語要素とりたて指導入門

林進治

明治図書 昭和45(1970)年2月初版(昭和52(1977)年3月3版)

7 4行目の前半にA5判, B5判など文献の判型を掲げる。昭和20年までの文献及び外国の文献には, A判, B判以外の判型のものがある。その特別な判型が明白な場合は, その判型名を掲げるが, できるだけA5判, B5判などの判型を記すようにした。

8 4行目の後半にページ数を掲げる。文献によって総ページ数を示すものと, 序文, 目次などのページを別々に提示するものがある。別に立てている場合は, 別々に記載する。なお, 紹介する文献が論文である場合は, 例に示すようにその論文のページ数を示す。

(例) 文献(16) 基礎日本語の試み(『国語文化講座 第一巻 国語問題篇』)

土居光知

朝日新聞社 昭和16(1941)年7月20日

A5判 全24(290~313)ページ

9 文献に同じ趣旨の続編がある場合は, 次のように扱った。①下に掲げる例のように, 文献名を2行にわたって表示する。②文献(42)『児童・生徒の語い力の調査』の一連の文献は, それぞれ別々の文献として採用している。③文献(115)『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』の続編は本冊の紹介の中で紹介している。この②と③の扱いは, ここに紹介した文献だけである。

(例) 文献(114) テレビ放送の語彙調査Ⅰ — 方法・標本一覧・分析 (国立国語研究所報告 112)

テレビ放送の語彙調査Ⅱ — 語彙表 — (国立国語研究所報告 114)

10 謄写による印刷は, その旨を記す。謄写印刷の特徴は, 余白と字数などを自在に調整できる点にある。その意味で引用する上で困難さがある。また, 謄写印刷の場合は, 紙質や印刷の具合のよくない文献が見られる。

11 目次に関する情報は必ず提示する。特に, 語彙表の理解に必要な章節は詳しく提示する。なお, 目次を掲げていない文献については, 本文の見出し等を参照して, その文献の「構成」を紹介するようにする。「目次」の表現と, 本文の見出しの表現に食い違いがある場合は, その旨を断るなどして, 本文の見出しを優先させるようにする。

12 本報告の仮名遣い等は, 原則として「常用漢字の書き表し方」に従っている。

- 13 原文の引用に際しては、表外漢字及び送り仮名、仮名遣いの上では原文を忠実に引用する。しかし、常用漢字に関しては、旧漢字で表記されていても、人名は別として、書名や論文名をはじめとしてすべて常用漢字で表記している。なお、本文を引用する場合、明らかに誤植等と判断される場合は、本文を正して掲げた箇所もあるが、原則として「(ママ)」を付けるようにした。
- 14 原文の引用に際して、ルビは原則として省くようにした。昭和10年代までの文献には、強調法として語あるいは文節だけでなく、文全体あるいは段落全体に圈点を施す修辭法が行われていた。しかし、本報告書は横書きであるので、読みやすさを考慮に入れて圈点を省く。
- 15 本報告では、内容が変わる箇所でも1行空けを用いるようにした。近年は、引用に際して、2字下げでなく5字近く下げる表記法が行われ始めている。これは、欧米語における引用形式の影響によるのかもしれないが、1行40字程度の本文の中で、わずか2字だけ下げるのでは引用であるのかがはっきりしないことは確かである。しかし、本報告では、2字下げはそのままとして、1行空けの読みやすさを採用した。
- 16 書名、目次、本文における漢数字は、原文通りとした。横書きの引用文の中に漢数字をそのまま引用すると、読みづらくなる。そこで、引用における漢数字を算用数字に改めることを検討したが、そうした規則が定着できていないということで、横書きであっても、原文のままとした。
- 17 一覧表については、その形式が伝わるように、その一部分を引用するようにした。なお、謄写印刷や写植印刷などの中には、特殊な記号を使用したりして、引用が困難である文献がある。そうした文献については、複写の形で掲げるようにする。
- 18 凡例や概要などのように、語彙表の趣旨がよくわかる箇所は引用することに努めた。
- 19 その文献の成立に関わること、覆刻版のこと、引用の事例等についても記述するようにした。ただし、それぞれの文献を、見開き2ページで紹介することから、十分な指摘ができていないことがあるかもしれない。
- 20 各文献の紹介の結びでは、全体を評価したまとめの言葉を付けるようにした。

2・3 基本語彙研究文献解題

文献(1) 児童語彙の研究 (成城学校研究叢書 第一編)

澤柳政太郎・田中末廣・長田新

同文館 大正8(1919)年5月25日

菊判 序10ページ 目次13ページ 本文372ページ

〔目次〕(前編の序及び節以下の見出し、後編の各見出しを省く)

序	澤柳政太郎・田中末廣	
前篇 新入児童の語彙	-----	1ページ
第一章 調査の目的及び方法並びに結果	-----	第一節 調査の目的
第二章 児童の言語の特色	-----	第二節 調査の方法
第三章 語彙取得の心理的考察	-----	第三節 結果の整理
第四章 内容より観たる語彙		
後篇 欧米に於ける児童語彙研究の概観	-----	215ページ
附録 児童の言語習得に関する臆説	-----	361ページ

序と附録は澤柳政太郎氏が、前篇は澤柳政太郎氏の指導によって田中末廣氏が、そして、後篇は長田新氏が、それぞれ執筆している。本報告では、前篇第一章「調査の目的及び方法並びに結果」の内容を紹介する。

第一節「調査の目的」では「児童が小学校に入学するまでに於て、凡そ幾何の言語を収得してゐるかといふことを明かならしむる」こと、「従つて斯くの如き實際上の研究の結果を以て児童の言語の力に適したる国語教育を行ふべき一の根拠となすことが出来る」という目的が述べられている。

第二節「調査の方法」は6項目構成である。その一、二、五の本文を抜粋しながら説明しておきたい。

一 調査の準備 「先づ斯くの如き言語は児童が理解し居るべしといふ大体の予想」をもって、「金澤庄三郎氏の『辞林』を基本として、かゝる語彙を選択し、其他特殊なる語彙を蒐集するには其他の書籍を参考」にした上で、6,867語を選ぶ。次に、質問の進行の都合として、自然現象、動植物以下、祭祀、戦争に至る「項目に依つて分類した。之は内容の近似せる語彙を集めて置けば質問の進行に都合がよい」という立場から、「例へば火鉢、火箸、左、右、紋、紋附、紋附羽織、齒磨、楊枝、水白粉、練白粉」のように配列するのである。名詞以外については「分類をなさずして、各品詞別に五十音順に排列する方がよい」という判断が述べられている。

次に、「調査しなくとも理解せることが予想さるゝ語」として、上記の6,867語から1,618語を除くことにしている。それは「一々質問することは不経済」という理由によっている。

二 調査の人員 大正7年4月、成城小学校第1学年に入学した男子25名。平均年齢6年5ヶ月。

五 質問の方法 語の性質によって次の10種の質問を試みる。

1. 「病院」とはどんな所。というようにその語を単語として説明させる。
2. 「約束をする。」とはどういうことかと文の形で質問することもある。
3. 反対の内容を有する語は、「こちらは何といふか。」という問いで十分。
4. 七曜などのように列挙するだけでよいものもある。
5. 「蜥蜴」などは、児童の経験や、その動物の特徴などを確かめてみる。
6. 「交番には誰があるか。」などを聞く。
7. 「亜鈴」などは図解を用いた。

8. 実物を指示させる。
9. 動詞などは実行で説明の代わりをさせる。
10. 感動詞、接続詞などは、談話の中に入れて調査した。

次に、順序を変えて、先に、第二章第一節「内容より観たる特色」で指摘されている三つの特色を紹介しておきたい。

第一、児童の解釈は多く実例をもつてすることである。

紳士＝口鬚を生やしたステツキをついたハイカラ。

第二、児童がある語の質問を受けた時、その語を使用して説明に代へることが多い。

お転婆＝僕の妹がお転婆で困ります。

第三、経験及事実そのものに依つて解釈に代へること。

泣別＝女中の藤やがお父さんの病気で国へ帰る時僕の家の子が寝てゐるのを見て別れにくいといつて泣きました。

第一章に立ち帰って、第三節「結果の整理」では、次の記述が重要である。

之に就いて見れば最も多くの語彙を有するもの五、一六二、最も少く語彙を有するものは三、五〇〇である。然して之を平均すれば四、〇八九である。即ち入学当時の児童の語彙は殆んど四千であることが分る。(数字に付けられた圈点は省略した。)

ここで、「如何なる語がよく理解されたか」についての「品詞別分類統計表」から、人数別の理解語数欄だけを掲げてみたい。合計欄の数字は本文献のままである。参考として、形容詞各8例を例示してみた。

	25人	21～24人	16～20人	11～15人	6～10人	1～5人	合計
理解語数	2,090語	875語	546語	645語	636語	739語	
累計語数	2,090語	2,965語	3,511語	4,156語	4,792語	5,531語	5,531語
形容詞 各8例	浅い 暖かい 明るい 暑い 暗い 寒い 高い 近い	暑苦しい 涼しい まぶしい 蒸し暑い お乳臭い 丈夫な 親切な ずるい	気の毒な 怪しい 見悪い 上品な けちな けち臭い 失敬な 恥ずかしい	険しい ひもじい 羨ましい 活発な 楽しい づうづうしい 厄介な 腕白な	穏やかな 口惜しい 心安い そそつかしい 情けない 無礼な 不幸な 不親切な	長閑な 下品な 懇意な 親しい 不器用な 不正直な 平気な 不屈な	

この、全員が理解した2,090語、少し広げて21人までが理解した約3,000語は、基本語彙を策定する上で貴重な資料になるものと考えられる。

本文献は、『近代国語教育論大系 別巻II』（光村図書 昭和62(1987)年12月)に、文献(3)『新入学児童語彙の調査』、文献(10)『児童の語彙と教育』、文献(24)『児童の語彙と国語指導』とともに複製されている。しかし、本文献に掲げられた語彙表は、その後、活用されたことがない。単に、新入学児童の理解できる語数の根拠として使われているだけである。

文献(2) 幼児の言語の発達 (『児童研究所紀要』(5)(6)(7)合輯 久保良英編)

久保良英

中文館書店 大正13(1924)年 6 月20日

B 5 判 163(137~299)ページ

〔目次〕(第二～第三の細目を省略)

第一 序論	137ページ
第二 叫声期	140ページ
第三 単語期	148ページ
第四 文章期	197ページ
其一 文構成の条件	
其二 満二歳より六歳までの名詞の発達	
其三 満二歳より六歳までの名詞以外八品詞の発達	
其四 各品詞の出現及び使用の割合	
其五 数詞の発達	
第五 結語	298ページ

本文献は、乳幼児がどのように語彙を獲得していくかについて綿密な調査を行ったもので、現在でも引用されることが少なくない先駆的な文献である。

その研究の経緯については、同文献の「第一 序論」の中で、「孰れの研究にも多く見らるゝが如く、幼児の言語の研究に於ても同年輩の児童の言語を多数集めて之を比較する横断的研究と、或る特殊の児童に就て出生より一定の期間絶えず観察する縦断的方法とがある。」と二つの方法を提示し、両者を比較考察した上で、「故にこれは多数の観察者が続々自己の観察せる一人なり二人なりの子供の言語発達を發表し、その結果を比較する方が最も捷徑であると余は信ずるのである。」という結論を引き出し、そこから、「余が茲に余の長男二男三男に就て過去六年間の観察の結果を發表するのは如上の考から起つたもので、若し余の挙に賛して続々各自の観察を發表されたらば、これによりて比較研究が出来て、横断的と同時に縦断的の完全なる研究が出来上る訳である。」と述べている。そして、その補いとして、「前述したるが如く余のこの論文は余の三男児の観察を主としたるものであるが、時に一定期間託児所並に幼稚園を訪問して余の子供の材料と比較するを怠らなかつた。」と述べている。

次に、目次の「第四 文章期」の「其二 満二歳より六歳までの名詞の発達」の最初に、語彙調査の方法として、誕生日を中心に使用語彙を記入する方法を採用したことについて述べている。

余は更に満二歳の誕生日を中心として前後十日間即ち合計三週間に於てその子供が使用する凡ての言語を精細に記入する方法を企て、見た。所がその結果は前の方法よりも却つて正確のやうに思はれたので、同様の方法によりて満二歳半、満三歳、満三歳半、満四歳と半歳置きに語彙を集めた。それ以後は従前ほどまで語彙が増加しないので一年毎にし、満五歳並に満六歳の誕生日を中心に前後十日間の語彙を蒐集してみた。

さて、本文献における2歳から6歳までの語彙獲得の数量を一覧表としてまとめてみると、次の表のように

なる。この一覧表は、本文献で別々に提示されている名詞の表と代名詞以下の表を引用者が一つにまとめたものである。

	2 歳	3 歳	3 歳半	4 歳	5 歳	6 歳
名 詞	165	461	701	981	1237	1364
代名詞	7	19	20	23	25	29
動 詞	51	179	221	301	366	403
形容詞	20	50	62	86	98	116
助動詞	11	33	41	47	50	56
副 詞	24	64	92	129	154	184
接続詞	2	5	8	10	12	18
助 詞	3	44	54	66	76	86
感動詞	12	31	32	32	32	33
合 計	295	886	1231	1675	2050	2289

ところで、この表に「3 歳半」の資料が出ているが、「第五 結語」によると、満 2 歳半時の資料を紛失したということである。満 3 歳以上の用例は、長男だけのものである。

ここで、語彙表の実際例として、用例数の少ない接続詞を紹介してみよう。

2 歳	3 歳	3 歳半	4 歳	5 歳	6 歳	
又 チョイカラ	又 ショレカヤ ショウシテ ソシテ ダッテモ	又 ソイカラ ソウシテ ソシテ ダッテモ ソレダカラ ソコデ ソレデモ	又 ソイカラ ソウシテ ソシテ ダッテモ ソレダカラ ソコデ ソレデモ ダッテ ダカラ	又 ソイカラ ソウシテ ソシテ ダッテモ ソレダカラ ソコデ ソレデモ ダッテ ダカラ ケドモ スルト	又 ソイカラ ソウシテ ソシテ ダッテモ ソレダカラ ソコデ ソレデモ ダッテ ダカラ ケドモ スルト ダケド デハ ソシナラ シカシ ソレデハ チヤア	

次に、名詞は15種に分類され、その各用例及び数量は、一覧表として提示され、年齢と種類の関係からの考察が述べられている。「雑に属するものを除いては、飲食物に関する語彙が各年を通じて最高位を示して居る。」といった考察が述べられている。

本文献は、日本の幼児の言語発達についての出発点ともいべき研究で、本報告で取り上げる文献(19)『幼児の言語発達』、文献(53)『幼児言語の発達』をはじめとする幼児の言語発達の調査研究に、多大の影響を与えている。

文献(3) 新入学児童語彙の調査 (成城小学校研究叢書第十二篇)

千葉県鳴浜小学校職員研究会

文化書房 大正13(1924)年11月20日

菊判 序10ページ 目次2ページ 本文236ページ

〔目次〕(序及び細目を略す)

第一章 調査の目的	1ページ
第一節 語彙調査の目的一般	
第二節 国語教育と語彙の調査	
第二章 調査の方法	12ページ
第一節 調査の準備	
第二節 調査の経過の概要	
第三章 調査の結果(細目は後掲)	32ページ
第四章 結果の考察	174ページ
第一節 結果に現はれたる児童語彙の特色	
第二節 語彙収得の心理的考察	
附録 甲, 調査日誌 乙, 調査を終りて	211ページ

序は、澤柳政太郎、田中末廣の二氏がそれぞれ書いている。本書の目的や成果を知るために、澤柳政太郎氏の「序」を引用しておきたい。

さきに成城小学校で其の新入児童の語彙の調査をなし、之を「児童語彙の研究」と題して世に公にした時から私は地方の小学校で同様の調査を為すことを切望して時に地方の教育者におすゝめした。私共の調査に依れば殆んど信じられない結果を示して居る。即ち新入の児童が既に四千余の語彙をもつてゐるといふことが示された。(以下、中略)

今度鳴浜の調査に於て私の予想外に感じたのは農村児童の語彙の驚くべきほど豊富であることである。即ち平均五千二語を示し、最多の語彙を有せる児童は男児にありて五千七百七十七語、女児にありて六千七十二語である。実に驚くべき事実ではないか。私は地方の児童は都会の児童よりも、其の有する語彙は幾分少ないであらうと想像してゐた。調査の結果は却つて其の多きを示してゐる。尤もこれで地方の児童の方が豊富な語彙をもつと断定することはできない。成城小学校の調査は不十分であつたのである。若し鳴浜に於ける調査の如く選び出した予定語数を多くして調べたら少くも略々同数の結果を得たかもしれない。しかし都会と地方と児童の語彙は何れが多いかといふことは余り必要のことでない。児童が新入の時に四五千の言語を理解してゐることは今は疑ふことのできない事実である。而してかく多数の言語は児童が自ら独りで収得したものといつてよい。此等の事実は小学教育に於て抑々如何なることを明示し暗示するか。教育者は大に学ぶ所があると信ずる。

次に、第二章第一節「調査の準備」から語彙選択等の記述を引用する。まず、児童の使用語の調査を行う場合は、「3、4ヶ月の長日目を要する」ので理解語彙の調査を行うことを述べる。

然るに、我校に於ける調査は、児童の理解し得る語の調査である。児童の理解し得る語の数は、児童の使用し得る語の数よりも、遙かに多数である。(中略)従つて、我校に於ける調査では、主として質問法に依つて、使用し得ると否とに関はず、児童が意味を理解し居る語は、之を収得語として集録したのである。先づ、斯の如き語は理解し居るならん、との予想の下に、予定語彙なるものを選択し、之を本とし、一々、児童につき理解の有無を問ひ糺して、調査を進めて行つた、のである。

調査に際して、予定語彙として、上田萬年・松井簡治両氏の『大日本国語辞典』を基本として、金澤庄三郎氏の『辞林』など5種を参考として、11,908語を選ぶ。方言では、千葉県山武郡方言調査会編『山武方言集』などを参考にしている。その予定語彙を品詞に分けたのが、次の表である。

名詞	代名詞	動詞	形容詞	助動詞	副詞	接続詞	助詞	感動詞	計
8,939	82	1,566	203	45	873	25	104	71	11,908

次に、分類された各品詞の予定語彙の配列は、動詞、形容詞、副詞、接続詞は五十音順、名詞は意味上8類23種37項目に分類し、その他の品詞は用法中心に分類している。

調査児童 大正11年、尋常科1年に入学した者から、男子14、女子15、計29名

質問の方法 調査の方法中、語彙の捕捉は、主として発問法を用いた。然し、実物指示、自由会話等の際の使用語を捕捉した場合もある。(以下、省略)

調査の結果 最多、最少、平均の一覧表は次の通である。

性別	最多		最少		平均
	氏名	語数	氏名	語数	語数
男	FH	5,777	OK	3,972	5,002
女	IM	6,072	IA	3,373	5,036

次に、第三章の目次には、次の細目が立てられている。これらから第三章の内容を推察できよう。

語彙の計算、各個人品詞別統計表、最多最少平均、個人別項目別統計表、語数の頻数表、如何なる語がよく理解されたか、男女全部の児童の理解せる語彙、男女各全部の児童の理解せる語彙、男児の自一〇人至一三人の理解せる語彙、女児童の理解せる語彙、その語数統計表

この中の「男女全部の児童の理解せる語彙」及び「男女各全部の児童の理解せる語彙」などは、基本語彙の策定の貴重な資料になると思われる。これらは、名詞、動詞、形容詞をはじめ各品詞に属する語を順に配列した一覧表である。名詞は意味別に配列していて、各語の基本度や普遍性などが容易につかめるようになっている。しかし、本文献は、その後、平均理解語数が5,000語を超えるという指摘だけが喧伝されて、肝心の語彙資料が粗略に扱われてきた。

一例として「男女全部の児童の理解せる語彙」から形容詞を順に紹介してみよう。(表記は原文どおり)

有難い。青い。浅い。暖かい。あぶない。甘い。忙しい。痛い。うまい。うるさい。嬉しい。おそい。
 おつかない。重い。面白い。堅い。かい。辛い。臭い。暗い。こすい。こはい(疲)。細い。酒臭い。
 少い。涼しい。すっぱい。せまい。冷たい。強え。長い。苦い。ぬくい(温)。ぬくとい(温)。ぬるい。
 ねぶたい(眠)。ひやつこい。広い。深い。太え。ほしい。短い。むずかしい。珍しい。めでたい。
 もつたいない。やかましい。弱い。やさしい。おかしい。

本文献は、『近代国語教育論大系 別巻II』(光村図書 昭和62(1987)年12月)に、文献(1)『児童語彙の研究』、文献(10)『児童の語彙と教育』、文献(24)『児童の語彙と国語指導』とともに複製されている。しかし、文献(1)などと同じく、その後は、語彙資料として活用されていない。

文献(4) 国語読本 語句教授の指針

内山 薫

山口県師範学校附属小学校国語研究会 昭和3(1928)年6月7日

A5判 300ページ

〔目次〕

前篇 原論 (第1章～第8章の見出しは省略)

後篇 各説 1 新出語句一覧表 2 卷一 解説 3 卷二 解説 4 卷三 解説
5 卷四 解説 6 語法指針 7 敬語法指針

まず、山口県師範学校附属小学校主事の「序文」の一部を引用しておきたい。

読方科の教材研究は読本の研究である。読本の研究には既に沢山ある。特に文章に関するものはかなり進んで居る。併し、語句に関するものはまだ全く系統的研究の緒についてゐないと言つてよい。例へば、ある課を教授する際に此の課の文章中で、「まだ子供の教はつてゐない語句がどれであるか、それを如何に教へたらよいか」と言ふ様な事は、研究が出来てゐない。

著者内山君は、我が附属小学校に於て読方教授について真摯なる研究を続けて居られる篤学の士である。今回此の点に着眼せられ、語句の研究について精細な研究を遂げられた。本書は即ちそれである。

此の研究が、読方科教授法研究の基調として、特に前人未踏の処女地たる此の方面に於ける、極めて有意義なる好参考資料たるを疑はない。

さて、本文献は、大正8(1919)年から使用されている第3期の『尋常小学国語読本』の巻一から巻四までの用語を整理し、授業にそのまま使用できるように仕立て上げたものである。

前篇「原論」の「第8章 結論」には、各巻、各課別の「新出語提出数」が一覧表として掲げられている。その一覧表から合計数だけを引用してみよう。なお、その下に参考として、第9課～第11課の各語数を掲げてみた。

		巻一	巻二	巻三	巻四	合 計
語 数		258	392	539	560	1,749
語 数	第9課	3	6	29	32	
	第10課	44	18	28	18	
	第11課	10	14	29	62	

参考として掲げた第9課～第11課の新出語句の語数を見ると、課による語数の違いの大きさに注目される。

次に、前篇「原論」の最後のページに付けられている「注記」を紹介しておきたい。

此の書でいふ語句の意味

- 一、単語
 - 1 独立して何等かの意味を表はす語（観念語）
 - 2 他に附属して之に一定の意味を表はす語（関係語）
 - 3 文法上言語の単位として取扱はれる語
- 二、熟語
 - 1 熟語名詞 2 熟語動詞 3 熟語形容詞 4 熟語副詞 5 熟語接続詞

三、疊語 名詞、動詞、副詞、感動詞及び、形容詞の語根からなる疊語

四、連語、句については触れる機会が少い。

次に、後篇「各論」の「1 新出語句一覧表」は、国語読本巻一～巻四の新出語句が、巻ごとに語頭で五十音順に配列され、見出し、漢字表記、課、ページ数が掲げられている。ここでは、参考として、用例数の少ない「わ」の全用例を示してみよう。(片仮名、平仮名の表記は原本通りである。)

巻一			巻二			巻三			巻四		
語句	課	頁	ワンワン	17	42	わらび	08	20	わらふ	02	06
			ワル	17	47	わら	09	27	ワニザメ	05	12
ワケ		15	ワルモノ	25	71	わすれる	14	43	ワタシ	05	12
ワタクシ		28	ワカル	25	74	わたす（渡）	14	45	ワル口	09	36
ワタル（渡）		35				私ドモ	16	48	わらはれる	11	42
ワレル		46				わかい	18	54	わらぶき	20	75

上掲の表は、「ワ」に関して言えば、巻一の「ワ」の4語の表を掲げたあとに、巻二の4語の表が続く、そして、巻三、巻四が更に続くという形式になっているものを、引用者が一枚の表にまとめたものである。なお、次の「凡例」が掲げられている。

一 五十音順 二 濁音は清音の後に 三 動詞形容詞は終止形 四 括弧内は品詞名、或は漢字

次に、「各論」の「2 巻一 解説」以下「5 巻四 解説」までの各解説は、新出語句の語釈をそれぞれ提示している。例えば上掲の巻二・第25課・74ページの「ワカル」は本文では「ワカリマセン」の形で使われていて、「ワカリマシタ」(巻三・一九)と関連があることが示され、「分ラヌ(巻三、九〇)の意。不明と同じ。ワカル(動)は明らかになる意である。」と説明されている。また、巻四・第5課・12ページの「ワタシ」は「自称代名詞で、巻一、二八の『ワタクシ』より粗末な言ひ方である。」と説明されている。

次に、「各論」の「6 語法指南」は、品詞ごとに新出語句を説明している。例えば、接続詞では、次のような表が掲げられている。

種 類	巻 一	巻 二	巻 三	巻 四
並列・累加		ソレカラ (31)	又 (27)	シカシ (70)
反 意		ケレドモ (65)	それでも (13)	それで (70)
当 然	ソレナラ (31) ソレデハ (31)	スルト (29) ソコデ (73)		

この文献(4)は、昭和3(1928)年という早い時期に作成されていること、新出語句が巻、課、ページごとに整理されていて、その語数も巻・課ごとに計上されていること、また、各語釈も他の語との関連が図られていること、の点からいって、貴重な資料として高く評価することができる。

文献(5) 基礎日本語

土居光知

六星館 昭和8(1933)年3月23日 普及版昭和9(1934)年5月15日

菊判 内容の見出し5ページ 本文62ページ 読本115ページ 付表3葉

〔構成〕(「内容の見出し」を省く)

端書き	1 ページ
基礎日本語の文章の法則……第一章～第十二章	13ページ
基礎日本語読本 第一部……第一章～第十六章	3 ページ
第二部……第一章～第三十章	31ページ
基礎日本語第一表 (意味分類表)	1 葉 (巻頭)
基礎日本語第二表 (五十音順表)	1 葉 (巻末)
基礎日本語第三表 (ローマ字順)	1 葉 (巻末)

本文献の意図・目的は、「端書き」の書き出しに述べられている。

この基礎日本語はできる限り単純な、しかし何事でもはつきりと言ひ表し得る、整理された、また記憶することがたやすい、基礎となるべき日本語を組織することを目的とした試みであります。私は数の限りもない語のうちから意味の重なつた語を省略し、同じことを表すのに五六種もあるいひ方のうちから一種のいひ方で満足することゝし、応用の範囲の広い、そして実際に使用されて居る語を選択しました。そして僅か千語を以つて普通のことは何でもいひ表すことのできるやうにしました。そのすべての語は紙の一ペイチに印刷することができます。音が同じで意味の異なる語をできる限り使用せぬやうにし、一語に二種の読み方を与へず、働きを表す語はできる限り、「し・する・すれ」と尾の部分に変化する語を選択し、また書く文章と語をする言葉とを全く同じにしましたので、幼い時から日本語に慣れぬ人々も、たやすく了解し、また使用することができ、ローマ字で書いても不確かになる点がなく、はつきりとたやすく了解されます。

本文献は、簡単にまとめると「次の五つの目的を以つて考案され」た。

- 1 小学校の教育を受けた人なら、言葉のむずかしさに妨げられずに内容を了解できる。
- 2 朝鮮や台湾、満州の人々に日本語を教えることができる。
- 3 欧米の人も話し、書くことができる。
- 4 ローマ字で表してもたやすく了解できる。
- 5 わかりやすい文章を作ることができる。

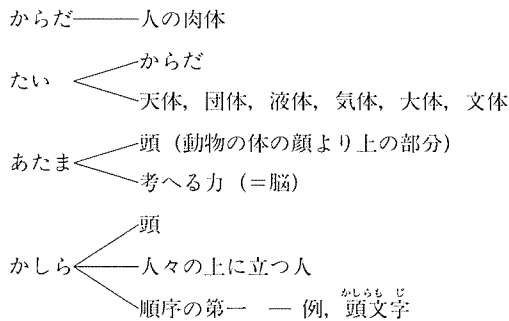
本書の執筆のきっかけは、次の「端書き」の引用に明らかである。

この基礎日本語はイギリスの国ケムブリヂの Orthological Institute の C.K.Ogden 様の考案した Basic English から間接の教へを受け、昭和七年一月に語表を作り初め、昭和八年一月に文章の規則その他を書き終ることができました。

「基礎日本語の文章の法則」は、12章構成である。

第一章「いかにして一千語が選択されたか」では、語彙選択の方法として応用範囲、言葉の経済などが述べ

られている。ここでは、『体』『頭』を『からだ』『あたま』とせず、『たい』『かしら』とした理由は次の表によつて了解されませう。」と述べて掲載している例を紹介しておきたい。



右の表によつても基礎になる語としては応用の範囲から考へ、言葉の経済といふ点から考へても何を選択する方が正しいかが了解されるであらう。

第二章「語の分類」では、語を品詞の上で8種に分け、感動詞は「感情が自然に声となる語」ということで表から除いている。第三章以下第九章は、それぞれの品詞に属する語を順に取り上げて説明している。第十章「文章のうちに於ける一々の語の位置」では、「主部と説明部」で構成される文構造を説明する。第十一章「語の種類の変化」は、「ある語は名を表はす語として使用されると共に、働きを表はす語として使用され、ある語は形容の語として使用されると共に添への語として使用されるやうに種類」が変化することを用例を引用して説明している。第十二章は「音が同じくて意味が異なる語」を取り上げている。

次に、基礎日本語読本は、第一部が基本文型の習得を目的とした16章構成で、第二部は文章を盛りこんだ30章構成である。その第二部の各章の本文は『尋常小学国語読本』の本文を基礎日本語で表現し直したもので、各課の末尾には「尋常小学国語読本巻三、第一課と比較して下さい」といった注記が見られる。

次に、基礎日本語の第一表は、1,000語が、体・人・住居など43類に分類されている。第二表はアイウエオ順、第3表はABC順に配列されている。なお、名目は1,000語であるけれども、Basic Englishと同じく、名詞「受け」は動詞「受ける」にもなるし、複合動詞「受け取る」、複合名詞「受け取り」などにもなる。複合サ変動詞の数まで含めると、実質は数倍になりそうである。

本文献刊行の直後に『国語科学講座 Ⅹ 国語問題』(明治書院 昭和8(1933)年5月)の1分冊として『国語純化と基本語』(A5判 35ページ)が刊行されている。これは、本書を簡便に書き直した内容と見ることが出来る。掲示されている基礎日本語表は、本文献の第一表(分類)であるが、「スタンプ、チッキ、中央」を「はがき、預け、中心」に差し替えた。翌昭和9(1934)年5月に普及版『基礎日本語』が刊行された。これは、本文献からいうと8語の入替えに意があった。上の3語を別にとすると、除去した語は「鋤、鍬、ホテル、穢れ、細目」で、追加された語は「礼、堀り、生活、級、調子」である。その後、本文献の改良版が2種作成されている。第1の「基礎日本語の試み」(『国語文化講座』所収 昭和16(1941)年7月)は文献(16)に、第2の「基礎語」(『日本語の姿』昭和18年6月)は文献(21)に取り上げてある。

本文献は、語数を1,000語に制限して日本語を表現する試みを提案した文献として日本語教育界を中心に多大の影響を与えてきた。

文献(6) 小学国語読本巻一 形象と理會 巻一

垣内松三

文学社 不老閣書房 昭和8(1933)年4月15日

B6判 序6ページ 目次8ページ 本文308ページ 附録11ページ 附表2葉

〔目次〕(序及び一～四の細目次を省略する)

一 新興国語教育の動向	2ページ
二 形象理論と読方教育	19ページ
三 初学年国語教育の出発点	60ページ
四 小学国語読本巻一研究	128ページ
五 小学国語読本巻一各課研究	149ページ
一 序説	一 1.語彙研究の意義 2.基本語の問題 3.語彙指導の原則
二 言表の研究	二 4.語彙総数(表1を掲げる)
三 語彙の研究	5.語彙の種類(191ページの一～六の特性を引用)
四 様式の研究	6.語の長さ(語の構造形式を21種に分類)
	7.最頻出語
五 意義の研究	三 8.名詞(表6;内容に従って名詞を分類)
六 結論	(表7;「語彙分類要綱」を提示)
附録	9.動詞 10.助動詞 11.代名詞 12.形容詞 13.副詞 14.感嘆詞
一 語彙集覧	15.接続詞 16.助詞
二 文字頻数表(一)	四 17.語と絵
三 文字頻数表(二)	五 18.語と語との連関

『小学国語読本巻一 形象と理會 巻一』は、書名に示されていることもあって形象理論の分野で有名である。世界教育学選集の一冊として覆刻された『形象と理會』(横須賀薫編 明治図書 昭和45(1970)年9月)は、形象理論に関係しない部分は大幅に省略してしまっている。しかし、本文の書名には、「小学国語読本巻一」という修飾語を伴っているし、「五・三 語彙の研究」には統計に基づく図表が43葉も掲げられていることから言えるように、小学国語読本の分析に意が置かれている。

以下、「五 小学国語読本巻一各課研究」の「三 語彙の研究」(172～240ページ)を取り上げる。その細目は上記の〔構成〕に掲げた通りである。(各見出しはゴチックで提示されている。1.～18.の各番号は、引用者が仮に施したものである。以下、この番号で紹介する。)

まず、「4.語彙総数」では、小学国語読本巻一の語彙が1,441語であることを述べ、品詞別、頁別、語の長さ(文字数)別、構造形式(漢字、かな、促音)別のそれぞれに区分して検討している。

続く「8.名詞」以下は、品詞ごとに分類している。例えば「8.名詞」は、「動物83, 人倫62, 自然39, 数量36, 植物24, 器物16, 方向16, 家屋15, 身体14, 軍事14, 動作13, 心理12, 抽象11, 食物10, 色彩4, 金属2, 雑5」の17種類に分類している。また、「名詞総数の一六語をオグデン氏提唱の基本英語によって指示された『語彙分類網』に従って配分し」ている。

次に「9.動詞」では、次の1文の導入文をすえて〔表9〕を掲げている。

次に大体これ等の基本動作を本として全動詞一〇三を分類すれば〔表9〕の如くなる。

〔表9〕動詞分類

<p>(身動)</p> <p>アル、牛ル、 ナル、 スル(イタス) ツクル、コシラヘル、 カゾヘル、ウエル、ナラベル、ツム、 クル(ヤツテクル)、オイデニナル イラツシヤル、カヘル、 イク、マキル、デカケル、 ウゴク、ユレル、フル、 ススム、トマル、 アルク、ハシル、カケル、トブ、 ラドル、マハル、ニゲル、 トヘル、ツク、 モツ、ハコブ、 ヤル、モラフ、 ヒロフ、トル、 クダサル、イタダク、 イフ、ハナス、マウス、ヨブ、 ヨム、カク、 ミル(ミツクル)、キキツクル、 サガス、 カム、ヒツカク、 ウナル、ナク、 サマス、ネル、</p>	<p>(所有)</p>	<p>(運動)</p>	<p>(作業)</p>	<p>(存在)</p>
<p>(可能)</p> <p>デキル フク、ナガレル、ウク、 ハレル、サク、ウマレル、 ムカヘル、ワレル、 ヨル、ヒカル、</p>	<p>(休息)</p> <p>セメル、マメル、 タタカフ、カウサンスル、 ユルス、タスケル、 ヤム、ヤスム、キエル、ツク、</p>	<p>(心理)</p> <p>ヨロコブ、クルシム、 タノム、ホメル、 カツ、マケル、 セメル、マメル、 タタカフ、カウサンスル、 ユルス、タスケル、 ヤム、ヤスム、キエル、ツク、</p>	<p>(出入)</p> <p>デル(ダス、サシダス)、ハイル(イレル)、 アケル、シメル、 ヒロガル、フクレル、 オモフ、 ヨロコブ、クルシム、 タノム、ホメル、 カツ、マケル、 セメル、マメル、 タタカフ、カウサンスル、 ユルス、タスケル、 ヤム、ヤスム、キエル、ツク、</p>	<p>(上下)</p> <p>アガル(アゲル)、ノボル、タツ、 オリル、フル、 デル(ダス、サシダス)、ハイル(イレル)、 アケル、シメル、 ヒロガル、フクレル、 オモフ、 ヨロコブ、クルシム、 タノム、ホメル、 カツ、マケル、 セメル、マメル、 タタカフ、カウサンスル、 ユルス、タスケル、 ヤム、ヤスム、キエル、ツク、</p>

〔表9〕に於ける分類綱目はたゞ便宜的に過ぎない。この表によつて多くの動作が対偶的に提出されてゐることが分る。ヨム・カク、アケル・シメル、セメル・マメル等々の如きそれである。これは基本語の理論の要求するところであり、就中学習の容易からいつても理会の深化からいつても是非とも必要なことである。同意語も亦多い。例へばウゴク・ユレル、ツクル・コシラヘルの類である。

これも学習指導上相互に有機的関係を保ちつゝ進めらるべきである。最後に自動詞と他動詞との区別について〔表10〕に示されてゐる如く大体に於て自動詞が多い。しかしこのことは助動詞の項に於て論ぜられる。又動詞の時や法については助動詞と共に考察される。

次に、「17.語と絵」では、『トマレ トマレ ナ ノ ハナ ニ』といへば何人も、如何なる児童も『テフ』を思はざるを得ないであらう。(中略)文字として出てゐないまでも、教材中に含まれてゐる語が沢山にあると謂はざるを得ない」という趣旨のことが述べられている。

次に、附録「一 語彙集覧」は、その凡例的な文を引用しておきたい。

読本中ノ語彙総数ハ一四四一語、重出ヲ除ケバ全語数ハ三四〇語、一語平均頻度四・二、本表ニテハ動詞・形容詞ハ大体原形ニ還元シテ掲ゲ、但、読本所載ノモノガ甚シク原形ト遠カル場合ハソノママトス。従ツテ本表所載ハ四三八語。

本文献は、本文にふれたように『形象と理會』(横須賀薫編著 明治図書 昭和45(1970)年9月)に覆刻され、また、『垣内松三著作集』(光村図書 昭和62(1987)年12月)にも覆刻されているが、その巻末の解説は、いずれも形象理論の面から取り上げているために、語彙の観点が脱落している。

文献(7) 国語読本の語彙

松岡静雄監修 湘南国語研究会

講学社 昭和9(1934)年2月28日

A5判 緒言2ページ 凡例1ページ 資料112ページ

〔構成〕

緒言

第一部 普通語

3ページ

第二部 熟字

79ページ

第一類 常用語

第二類 記述語

第三類 専門語

第四類 文飾語

まず、「緒言」の本文を引用しておきたい。(引用者注；三カ所の圈点を省略した。)

国語教育の基礎となるべきものは小学校に於て授けられる国語読本である。其故に之が編輯には大なる注意が払はれて居るやうであるが、惜しいことには文字の学習が主になつて居る嫌がないでもない。例へば新出字は必ず贅頭に標記してあるが、新出語については何等の注意も与へられて居らぬ。或は表記法さへ教ふれば語其のものは学童が既に知つてゐるか、若しくは自然に会得するものであるといふ見解のもとに編纂せられてゐるのではないかと疑はれるが、仮に其が彼等の日常語であるとしても、尚之について正しい概念を与へることが国語教育の本旨ではあるまいか。(中略)

然るに我々の知る限りに於ては現在の小中学校の教職中、此点に留意して居るものは殆ど絶無で、其筋からも何等之に関する指示を受けたことはないというてゐる。さりながら之を無視しては国定及び検定教科書の編纂は出来ぬ筈であるから、当局を始め其道の人達は其々相当の注意を払うて居られるに違はなく、或は十分の調査も出来てゐるのかも知れぬが、世に公表せられて居らぬことは事実で、国語教育の基礎事業として極めて必要であると信ずるから、本会に於て奮つて之が調査に従事し、多くの日月を費して漸く完了した。其結果、固有名詞並に計数及助語(助語及助動詞)を除き、約七千零六十三語が国語読本十二冊中に収めてあることを発見したが、此多数の語彙と之が表記法とを、十三歳未満の学童をして六ヶ年間に修得せしめんが為には、教授法について幾多の工夫を要することは勿論で、語彙の整理といふことが第一の急務である。

本篇に於ては右の七千余語を其本質により普通語(字音から出たものを含む)と、漢字の熟語即ち二つ又は其以上の漢字を連結することによつて或意義を表現する所謂熟字とに大別し、其々所要の整理を施して表示することにした。第一部普通語に属するものは四九三五語で、第二部の熟字は二一八語を算する。

次に、第一部「普通語」の「凡例」を引用しておきたい。

一、排列は五十音順による。但し字音は伝統的仮字づかひに従うた。其は読本に於ても「ぎふ(雑)木山」, タイサウ(体操), 「ちやうだい(頂戴)」の如く、之に準拠して居るからである。

二、同一語にして、活用又は変用のため多少異なる形態を呈するものは一括して掲げ、各形態を繋ぐに長線—を以てした。

三、活用言に在つては其原形(名詞形)を以て標記することを例とする。蓋し其は諸形態の基礎となるも

のであるからである。

四、○点を冠したものは別語の標識で、其から導かれた複合語又は派生語には・点を施して之を区別した。但しコ（此）コノ、コレ等は其々独立の一語と見なした。— 其数は二〇七九で、従つて厳密なる意味に於ての普通語は二八五六語に過ぎぬのである。

五、各語及各形態の直下の数字は其所出巻数であるが、頻出語にあつては或は脱漏があるかも知れぬ。同語又は同形態が同一巻に重出することもあり、検出の便からいうても巻号の外に課の番号を記入することが望ましいけれども、繁を厭うて割愛することにした。

ここで、第一部「普通語」の〔ア〕の最初のページを部分的に引用しておきたい。

○あゝして 8	・赤とんぼ 9
○愛 9, 10	・赤み 6
・愛想よく 11	・紅紫 7
・愛らしき 8 — 愛らしい 10	・赤し 8 — 赤い 1, 2, 3
○アイサツ（挨拶） 7, 10	— 赤く 3, 12
○赤々 10	○明し 10 — 明した 10
・赤子 7, 8	○アカツキ（暁） 11
・赤ちゃん 3	○アカリ（明）（灯） 3, 8

次に、第二部「熟字」の凡例の「一」及び「六」の項目を引用しておきたい。

一、本表に収めた熟字の数は総計二千二百二十七語で、整理上の必要から之を次の如く分類する。

第一類 常用語。 日常口にする漢語で、普通教育を受けたものならば、字音を聞いて直に了解し得られる程度のもの — 一三二五語

第二類 記述語。 耳で聞きわけける事は多少困難でも、字を見れば容易に会得することのできる慣用漢語 — 六九〇語

第三類 専門語。 学芸技術、法規、軍事等に専用せられる漢語で、字義だけでは意味が判然たらず、定義を下す必要のあるもの — 八四語

第四類 文飾語。 修辭的に使用せられる漢語または成句 — 二八語

六、本表には固有名詞及数称は収められて居らぬ。又、「電車道」の如き漢和複合語及「生活スル」といふやうな活用形態は其漢語部分のみを分離して掲げた。

なお、本文献の第一部は、『国語と民族思想』第一輯（松岡静雄監修 湘南国語研究会 昭和8（1933）年9月）に掲載された「国語読本の語彙」である。続く『国語と民族思想』第二輯（昭和9（1934）年2月）の論説「国語の整理」は、この用語調査を踏まえた考察内容になっている。その中心は、国語教科書の複合語が4,918語中の42%強を占めていることへの批判である。

本文献は、初めて国語読本全巻の用語調査を行った文献として先駆的意味をもっている。

文献(8) 国語教育の諸問題(上) (独立講座 国語教育科学 第十卷)

垣内松三

文学社 昭和9(1934)年9月10日

A5判 320ページ

〔目次〕(第五章は細目を掲げる)

序説 純正国語	一 語彙の研究	
第一章 基本国語	二 語彙に関する諸統計	
第二章 言語技術	三 語彙の科学的選定	
第三章 言語経済		
第四章 基本語彙		
第五章 語彙整理	一 語彙分類の基準	一 集輯と排列
		二 分類の項目
	二 対語の方法	
	一 同意語と反対語	二 反対の意味
	三 論理学的と言語学的	四 実例分析
	五 方向的基礎	六 図式的総括
	七 定義による反対	八 文法的要素
	三 語彙分類の実際 (小学国語読本巻一・巻二語彙分類)	

日本の国語教育が研究実践両面で大きく進展する上で、垣内松三氏の著作物は大きな役割を果たした。その第1は垣内松三氏が大正11(1922)年に刊行した『国語の力』(不老閣書房 B5判320ページ)で、毎年のように版を重ね、例えば昭和11(1936)年には第40版記念の菊判『国語の力』を刊行している。現在でも複数の複製版を入手することができる。その中で、ローゼット(垣内松三氏特有の呼称。英国の Peter Mark Roget を指す。ロジェイ、ロジェなどと呼ばれる)の「セザウラス」(垣内松三氏特有の呼称。Thesaurus, シソーラス、分類語彙表のこと)について詳細に紹介した。第2は、文献(6)として掲げた『形象と理會』で、小学校国語読本巻一の用語を分析し、それらの用語を、垣内松三氏が翻訳したシソーラスに当てはめている。そして、第3は本文献で、小学校国語読本の巻一・二の2巻の意味分類に進んでいる。垣内松三氏のこの意味分類の完結版は日の目を見ていないが、文献(12)の『基本語彙学 上』で、巻四までの用語を同じ意味分類体系に位置づけている。本文献は、その中間に位置しているので、本報告から除外したとしても流れが変わるわけではないが、文献(12)『基本語彙学 上』の成立過程をとらえる上では、本文献は素通りしがたい。

さて、目次の「純正国語」などの用語に現れているように、本文献は当時の国粋化の動きと密接に関係している。本書の内容に最も影響を与えているのは、オグデンの「基礎英語」(Basic English)であり、その点で、土居光知氏の文献(5)『基礎日本語』に共通した性質・志向をもっている。

本文献は、第四章の「三 語彙の科学的選定」で、基本語彙を得る方法として、次の3種を紹介している。

- ① 統計的方法……統計のみからでは真に正しい結論といふものは理論上期待されない。
- ② 心理的又は科学的方法……オグデンの基礎英語は、基本語的方法である。
- ③ 体系的又は哲学的方法……各語句は何らかの範疇に属し、その範疇の同意語、反対語は残りなく集め

られている。

本文献では、基本語構築のために、②の「基礎英語」の考え方を紹介しながら、結局、その紹介も、次に引用するように、③のローゼットのシソーラスの構築のために行われているようである。

ここにわれわれは、既に同意語・反意語による語彙整理が基本語の考察に欠くべからざるものなることを認め、更に進んで基本名詞の選定に於て語彙の段階組織的分類がその基底であることを見たのであるが、この要求を満足せしむべき辞典が、即ちローゼット式辞典である。

さて、第五章の「三 語彙分類の実際」では、本文献の趣旨が次のように記されている。

上来既に種々の理論を吟味して来たのであるが、ここにその実例として、小学校国語読本巻一卷二の語彙七八〇語を、ローゼットの「セザウラス」の分類の要綱の中に排列して、国語整理の実際に資したいと考へる。次表に於て、分類要綱のみで空白な部分は、読本巻一・巻二中に未見であるからであるが、その進行につれて、これ等が補充せられるであらうかとも考へる。

その一覧表の最初の部分を引用しておきたい。

第一類 抽象的關係ヲ表現スル語	
第一項 存 在	
一 存在，抽象ニ於ケル	
一 存在	二 非存在
(動) アル，イラッシャル，	
キル，ヲル	
二 存在，具体ニ於ケル	
三 実在	四 非実在
(名) コト	
三 形式的存在	
— 内的状態 —	— 外的状態 —
五 内在	六 外在

このような形式で、780語が合計1,000項目の語彙表に組み込まれている。これは、すでに述べたように、巻二までの用語を当てはめるかたちである。文献(12)『基本語彙学 上』では、巻四までの用語が当てはめられているので、本文献に比べると語の集合がいくらか密な感じがする。逆に、本文献の表は粗い感じがする。

本文献は、文献(12)『基本語彙学 上』にまとめてしまうほうがよいかも知れない。しかし、当時の国語教育界は、垣内松三氏の国語教育の提唱に強い関心を寄せていたこと、また、氏の基本語彙学の成立過程を考えようとする、本文献を省略しにくいことがあるので、本文献を採り上げることにしたのである。

文献(9) 速成日本語読本 上巻

在満日本教育会 教科書編輯部 昭和10(1935)年9月5日改訂発行

東亜印刷

昭和14(1939)年5月15日17版発行

A5判 緒言・五十音表4ページ 本文122ページ 附録20ページ

〔構成〕

緒言	1～2ページ
五十音表	3～4ページ
本文 (一)～(七十四)	1～122ページ
付録 数エ方	1ページ
語彙表	2～20ページ

本文の著作兼発行は「在満日本教育会 教科書編輯部」である。当時は「速成・速修」などの用語を用いた日本語教科書が少なかった。まず、「緒言」を引用しておきたい。なお、本文は、緒言を含めてすべて総ルビで、下段に本文の中国語訳を掲げている。

一、本書ワ、日本語オ速成的ニ学習ショオトスルモノノタメニ、編纂シタモノデアル。

一、本書ワ、上・下二冊デ完結スル。

一、本書ノ仮名遣ワ全部表音式ノモノオ用イ、漢字ニワ振仮名オ附シ、其ノ上対訳オ載セテ学習ノ便オ図ツタ。

一、本書ワ殆ド全部会話ノ形式オ採ツタ。其ノ僅カニ挿入シタ文章デモ、直チニ会話練習ノ資料トナルベキモノオ選ンダ。

一、課中◇オ附ケテ練習資料オ添エテアル。本文ノ形式オ模倣シテ、十分ニ応用シテホシイモノデアル。

一、附録トシテ数エ方及ビ語彙表オ添エタノワ、一般的知識ノ附与オ目的トシタモノデアル。

次に、「本文」は、(一)から(七十四)までである。その(一)の全文と(七十四)の頭の部分を引用してみよう。(すでに断ったように、本文は総ルビであるが、ここでは省略した。)

(一)

「コレ ワ ナン デス カ。」

「メ デス。」

◇

ハナ。 クチ。 カオ。 ミミ。 アタマ。 テ。 アシ。

(七十四)

「春日町エ行クニワ、ドオ行ッタラ イイデショオカ。」

「コノ道オ少シ行クト、右手ニ警察署ガアリマス。ソノ角オ右ニ曲ルト春日町デス。」

「春日町三丁目ワドノヘンデショオカ。」

「ソコカラ二三町行クト、大キナ劇場ガアリマス。ソノ劇場ノアタリデス。」

以上、少し引用したように、表音式の仮名遣いで会話練習の本文が展開されている。

次に、「附録」は「数エ方」と「語彙表」の二種で構成されている。「数エ方」は、横に「一」～「十」の漢数字が並べられ、縦に、次に示すように空欄を第1, 「石・卵・年齢」を第2とする10の欄が用意されている。これは、生活言語に関係するものの数え方を示すとともに、「一匹」で言えば、「ヒキ・ビキ・ビキ」の使い分けが示されることになる。なお、次の表は縦と横を改めている。

項 目		石・卵 年 齢	人	獸・虫	鳥	紙	筆 木・草	本 帳 面	月	日
数え方	イチ 一	ヒト 一 ツ	ヒト 一 人	イツ 一 匹	イチ 一 羽	イチ 一 枚	イツ 一 本	イツ 一 冊	ヒト 一 月	イチ 一 日

次に、「語彙表」は、(1)時、(2)天文以下、全部で15項目の見出しを立てている。その見出しと各用例数は、次の表に掲げるとおりで、引用者の数えるところでは、その語数は1,478語である。

次に、これら15の見出しで導かれている各語は、意味と文法の両面で配列されているようであるが、説明のつきにくい所もある。

見出し	(1) 時	(2) 天 文	(3) 地 理	(4) 人 事	(5) 身 体	(6) 病 気	(7) 学 問	(8) 飲 食	(9) 殺 物等	(10) 衣 服類	(11) 家 具屋	(12) 草 木	(13) 動 物	(14) 工 ・商	(15) 雑	合計
用例数	72	45	44	99	166	83	40	95	65	70	156	50	78	107	308	1,478

ここで、語彙表の7ページ目の上部の複写を掲げてみよう。

持 ツ	握 ル	拾 ウ	取 ル	消化 スル	手ガ放 サレヌ	轉 ガル	轉 ブ	咽喉 ガカワク	破 ル	跌 坐オカク	喫 ヲスル	怪 我オスル	抱 キ起ス	倒 レル	打 付ッカル
拿	握・指	撿	食 糞・腹	消 化	離 不開手	滾 倒	跌 倒	嚔 子渴	破	婦 腿坐	吃 驚	受 傷	抱 起來	倒	相 撞
舌 オ 出 ス	息 オ スル	肌 オ スグ	懐 手	手ガ足 リナイ	鼻 オ 作ル	田 オ 耕ス	船 オ 漕グ	壁 オ 塗ル	家 オ 建 テ ル	筋 イ 所 ヲ サ ス ル	痒 イ 所 ヲ オ カ ク	帯 オ 結 ブ	不 自 由	自 由	投 ゲ ル
伸 舌 頭	呼 吸	光 上 身 子	袖 手	不 發 手	種 地	耕 地	划 船	埴 土	蓋 房 子	掻 疹 處	擦 擦	擦 擦 子	不 自 由	自 由	扔

この中の「咽喉ガカワク」の「咽喉」は、別に「舌・上顎・頤・顎・咽喉・鬚」のように提示されている。また、「怪我オスル」の「怪我」も「(6)病気」の中で取り上げられているから、ここは、「怪我オスル・咽喉ガカワク」という一続きの語句としてとらえていると見るべきであろう。

本文献が、土居光知氏の文献(5)『基礎日本語』の影響をどのようにうけているのかは明確でない。本文献のもつ価値はまだありそうである。そのためには、当時の日本語教科書の系統的な調査が必要である。

文献(10) 児童の語彙と教育

岡山県師範学校附属小学校

藤井書店 昭和10(1935)年11月28日

菊判 序 4 ページ 目次 4 ページ 本文264ページ 付表 2 葉

〔目次〕(序, 第一編第三章の小見出し, 第二編の各章の見出しは省略)

第一編 児童語彙の研究	1 ページ
第一章 児童語彙調査の結果	第一節 語彙調査結果の概要 1 ページ
第二節 聴解語 (聴き言葉) の調査	第三節 使用語 (話し言葉) の調査
第二章 児童語彙調査の方法	第一節 調査方法の概要 120ページ
第二節 語彙調査の準備	第三節 語彙調査の実際 138ページ
第三章 児童語彙調査の考察	
第二編 児童語彙と教育	193ページ

本文献の目的・意図は、岡山県師範学校附属小学校の主事による「序」に明らかである。全 4 段落構成の「序」の第 1 段落, 第 3 段落の本文を引用して, その目的・意図を紹介したい。

本書は主として新入学児童の語彙を実際に調査研究し其の結果に立ちて教育上の重要問題を論じ進んで話聴教育を提唱して其の教育方法を述べんとするものである。

本研究は昭和九年の岡山県師範学校附属小学校児童即ち関西地方に於ける新入学児童の語彙を調査し, 之を大正七年の東京市成城小学校児童即ち関東地方に於ける新入学児童の語彙調査と比較し以つて日本に於ける児童の語彙をより正確に研究せんとする事を念願とするものである。之に加ふるに児童の聴解語のみならず使用語をも明かにし且児童の生活に力強く活用されつゝある地方語, 幼児語, 並外来語にも及んだのである。尚ほ本書に於ては驚くべき児童の豊富なる語彙の実情に基づき国語の純化統一の見地に立ちて, 教育上の諸問題を論及し, 或は現在の教育に基礎を与へ, 或は之に反省を促がし, 最後に小学校に於ける言語教育上の重要問題として話聴教育の必要を説き, 其の目的, 材料を明示し現に本校に於て実施して相当の成果を収めつゝある具体的の方法をも述べて広く教育関係者の御批判を得んとするものである。

ここで, 第一編第一章第一節に提示された「語彙調査結果の概要」として提示された表を掲げておきたい。(横書きの表に組み直したので, 数字はすべて算用数字に改めた。)

調査児童数		種 類	数 量			
男	女	聴解語 (聴き言葉)	最大頻数	5,100	最多数	6,906
			語彙平均数	5,230	最少数	3,338
14	14		中間数	5,100		
28		使用語 (話し言葉)	3,132			

次に, 第一編第二章第一節「調査方法の概要」の必要項目を, 表記・表現を少し改めて掲げてみよう。

- 四 被調査者 昭和九年四月一日尋常科第一学年新入学児童男女各十四名宛合計二十八名
- 五 調査学校 四校 (附属小学校一校と岡山県上道郡の農村児童中心の公立学校三校)
- 八 予定語数 予定語を選定して之を基準として調査をなす。(引用者注; 具体的には28,661語)

九 調査方法 発問法及び観察法。

さて、上掲九の「調査方法」は◎「語彙調査指針」に示されている。

1 調査方法は主として検出發問法を以てし、会話法指示法を加味して行ふこと

2 使用語と理解語とは左の如く区別して記入すること

(例) ◎草履 △雑巾がけ ◎＝使用語 △＝理解語

3 質問は左の要領に準じて行ふこと

- (1) 先づ単語として適確に説明さす。 ・「病院」とは何ですか。
- (2) 次に文章、会話によりて検出する。 ・注意してお聞きなさいといへばどうしてきくのですか。
- (3) 内包を挙げ又は具体的事例を述べさす。 ・孝行するにはどんなことをしたらよろしいか。
- (4) 反対、類似、及同一語を以つてする。 ・右 — 左 東 — 西
- (5) 説明を求めず列举しただけでよいもの。 ・月曜が理解されたら、他の六曜は列举に止める。
- (6) 経験、特徴を云はしめて知る。 ・「交番」にだれがゐるか。
- (7) 実行に訴へる。 ・「うつふし」でござらん。
- (8) 実物模型掛図標本等の指示による。

この調査では、最多6,906、最小3,338、平均5,230語という結果が出ている。それを、他の調査と比べると次のようになる。なお、本文献の調査語は27,660語で、その内訳は（標準語24,879、方言及訛語2,289、幼児語492と記されている）である。

	最多	最少	平均	調査語
大正7 成城小	5,162	3,500	4,089	6,867
大正11 鳴浜小	6,072	3,373	5,019	11,908
昭和9 岡附小	6,906	3,338	5,230	28,661

表の聴解語数6,906語の児童の使用語数は3,132語であり、ほぼ半数に当たっている。

五節では、新国語読本巻一、二の語彙を附小の児童12名がどの割合で理解できたかを品詞別に分析している。例えば、形容詞では、全員の共有する語として、

甘イ、青イ、赤イ、有難タウ、アカルイなど32語が挙げられ、11名の共有する語として、アツタカイ、恐ロシイ、惜シイ、コンナ、少シ、ドノ（人モ）、ニガイ、ヨイ、ヨウ（ゴキゲン）の9語が挙げられ、10名の共有する語として、薄暗イ、ニクイ、ノロイ、ビックリ、メヅラシイの5語が挙げられている。この種の調査は語の難易度を考える上で参考になる。

「第三章 児童語彙調査の考察」の「第六節 外来語と児童語彙」では、外来語を平均150語所有していること（最高237語）などが述べられている。

成城小学校の文献(1)に始まる一連の語彙調査は、次第に数量を競う感じが見られる。文献(1)では、俗語や幼児語は当然として数詞なども除外していた。ただし、数詞に関しては別に数量を掲げてある。ところが、本文献では、方言、幼児語も含め、身に付けているあらゆる言葉を計上する方針をとっている。

本文献は、『児童の語彙と教育』（岡山県師範学校附属小学校編 第一書房 昭和57(1982)年7月）として覆刻された。また、『近代国語教育論大系 別巻II』（光村図書 昭和62(1987)年）に、文献(1)『児童語彙の研究』、文献(3)『新入学児童語彙の調査』、文献(24)『児童の語彙と国語指導』とともに覆刻されている。本文献は、学習基本語彙を考える上で、まだ活用する価値がありそうである。

文献(11) 基礎日本語

南満州教育会教科書編輯部

昭和11(1936)年 (謄写印刷)

B 5 判 69丁

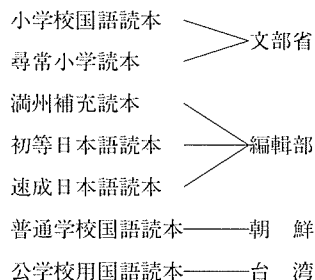
最初に本文献の体裁及び構成について略記すると、青インキによる謄写印刷で、B 4 の用紙を二つ折りにした体裁になっている。用紙は和紙。表紙、裏表紙等を別にして全69丁、その最初の1丁の表と裏に緒言が充てられ、表に「緒言」、裏に「基礎日本語分類標準」が収められている。残りの68丁が語彙表で、表の右下に漢数字で丁数が記載されている。奥付はない。各ページは5段16行の見出し語の欄が設けられている。ただし、五十音順の「ア」や「イ」の各見出しに1行ずつが当てられている。

国立国語研究所図書館所蔵の本文献は、三宅武郎氏から寄贈されたもので、受入れの日付は昭和28年3月6日になっている。本文献がどこで何部作成されたのかなどは明確でない。なお、刊行の時期を昭和11年としたのは、緒言の「調査には昭和九年からかゝり昭和十年十月頃から整理にかゝつた。」によっている。

次に、一丁表の「緒言」の全文を掲示しておきたい。

一、基礎日本語はその調査には関東州公学堂及満鉄公学堂が当り南満州教育会教科書編輯部で整理した。

一、本調査は左記七種の教科書に拠つた。



一、調査には昭和九年からかゝり昭和十年十月頃から整理にかゝつた。

一、調査した総語数は約三十万に達し、整理後の本調査物は約九千の語数に及んでいる。

一、分類標準は大体次のやうである。(以上、1丁の表)

次に、1丁裏の「基礎日本語分類標準」は、次の内容である。

(一) 文章中の語は一品詞を以て分類の単位とし、大体書きあらはされたものを改めないで取ることを原則としたが語尾の活用を有するものは終止形を以て統一した。

(二) 文題の語も取つた。(文の作者の名、作者所属の府県名、学校名、挿画の説明、劇中の発言者の表はす人名等は取らなかった。)

(三) 文語文は省いたが口語文中に含まれてゐた文語は其のまゝ取り口語には書きかへなかつた。

(四) 品詞は名詞・代名詞・数詞・動詞・形容詞・助動詞・助詞・副詞・接続詞・感動詞の十種。

(五) 接続語、接尾語は独立した品詞ではないが便宜上一語と見做した。

(六) 熟語で分けても意味を破壊されないものは分類の便宜上之を分けたが、分けると意味の破壊されるものは分けなかつた。

(七) 漢語の熟語は分けなかつた。(以上、1丁の裏)

語彙表は、緒言に示されるやうに、約9,000語が五十音別にまとめられ、それぞれ頻度順に配列されている。

各ページは、上に紹介したように5段に分割されていて、「語」と「頻度数」が提示されている。また、同音語などの場合は、例えば「ツク」を取り上げると、「ツク（着）317、ツク（突）35、ツク（附）22、ツク（ ）17、ツク（息ヲツク）1」のように漢字をカッコの中に用意している。この中の「ツク（ ）17」は、漢字を充てることを忘れたのであろうか、空白になっている。

この「ツ」で言えば「ツク（着）317」が最も頻度が高くて、そのページには頻度数5までの80数語が頻度順に取り上げられている。そして、続く2ページ分には、頻度1の用例が配列されている。

次に、本文献は、青インキによる謄写印刷で作成されて歳月が経っているので、写真等による提示が困難である。そこで、原本を忠実に転写した複写本の写真を提示することにしたい。この複写本は、B4判の原稿用紙の裏面を使用してカーボン用紙に転写したもので、ページ数も各ページの行数も原本と違いがない。

ツ

語	頻度数	語	頻度数	語	頻度数
ツク（着）	317	ツク（突）	35	瓜	17
ツクル（附）	209	ツカレル	33	ツク（ ）	17
ツ	161	ツクエ	29	ツナ	16
ツクル（造作）	123	ツツム	29	次々	16
使フ	100	ツボ	26	ツリ（釣）	16

次に、本文献の9,000語の中で頻度200以上の語は124語、100以上の語は158語である。この累計数282語は、最高頻度語と言うことができる。そして、頻度5以上の語数は、全体で2,624語である。それらの中には、固有名詞も助詞、助動詞なども含まれている。

石黒修氏の執筆した「国語の世界的進出 — 海外外地日本語読本の紹介」（『教育・国語』5月号別冊附録昭和14(1939)年5月 翌15(1940)年1月には単行本として厚生閣より刊行）には、本文献について次の記述が見られる。

在満州日本語教育会教科書編纂部の総単位300,000語、別単位9,000語の調査によると、頻度数は

イヘ 381	美シイ 161	者（モノ） 244
ウチ 300	綺麗 98	人（ヒト） 730

となつてゐるが、これもその語彙の一面の価値を語るものである。

本文献は、資料的価値は高いと考えられるが、海外の教科書を資料としているためか、発行部数が少なかったためか、理由は明白でないが、その後はほとんど活用されていない。

文献(12) 基本語彙学 上 (国民言語文化体系・第三卷)

垣内松三

文学社 昭和13(1938)年 6 月20日

菊判 目次 6 ページ 本文400ページ 索引27ページ

〔目次〕

第一章 国民言語文化と基本語彙学	1 ページ
第二章 方法の問題	85ページ
第三章 統計的研究	153ページ
一 語彙の統計的研究 二～五 語彙統計 (其一～其四)	
第四章 類型的研究	229ページ
一 語彙の類型的研究 二～五 卷一～卷四品詞別研究	
第五章 体系的方法	285ページ
一 語彙の体系的研究 二 語彙合計 三 語彙の体系的分類	
附 語彙索引	

内表紙に続く鏡の部分に本文の〔趣旨〕が述べられている。附言を除く本文の全体を引用しておきたい。
なお、第一章は、この〔趣旨〕を具体的に述べた内容である。

本書は国民言語文化体系の第三巻として、その具体的な象面である語を対象とし、特にその出発対象として、基本語の研究を必要とするために、小学国語読本（巻一～巻四）を資料として、日本言語文化の進展を考察することを目的とするものである。

第二章は、語彙の分類及び整理に関する三つの基準について説明している。

- 1 先づ第一に、類型的方法としての品詞分類を行ふ。さうして名詞、動詞を除いた他の語についてはそれぞれ文法的点検を行ふ。但しその場合でも、品詞論的立場からでなく、言語事実といふ点を主とする。
- 2 名詞については、体系的分類を行ふ。殊にページック、ローゼットの両者を、国語の実際に即して修正しつつ進める。
- 3 動詞については、統計的方法を主とする。同時に分析的方法を考慮に入れて基本的なものと、合成的なもの、派生的なものとの分出に留意する。

ここに引用した3項目が本書の方法であり、それを『小学国語読本』巻一～巻四に適用したのが第三章以下の3章であるが、「一つの有機的全体としての基本語彙の体系」という目標を掲げている。

第三章では、『小学国語読本』巻一～巻四の巻ごとの語彙統計が「五十音順語彙索引」の形で掲げられており、それぞれ、範囲（どこどこに、現はれて居るか）、頻度（何回、現はれるか）という統計的観点が示されている。

第四章では、第三章に掲げた各巻の語彙を、まず品詞別に分け、次にそれぞれを細目を設けて分類している。名詞は、意味によって分類している。その見方は、「爾雅」や「倭名類聚抄」など古辞書の分類項目、Ogden の Basic English における「語彙分類綱」などを参照し、Roget's Thesaurus に従っている。

動詞は頻出度で分類し、合成語を別に掲げている。形容詞は、色彩・形状、感覚・心理、性質、場所、時間、分量の6類8項に分けている。副詞以下はその用法から分類している。

第五章では、まず語彙合計を巻一～巻二、巻一～巻三、巻一～巻四の単位で掲げている。次に巻一～巻四の語彙全部を体系的に分類している。その分類は、Roget's Thesaurus に倣ったもので、全体を、抽象的關係、空間、物体、知、意、情の6類に分け、1,653語を、1,000の細目に分けている。その1例を、二「目的への役立ち」の(一) 實際的有用で見てみよう。

第五類 意志ニ関スル語	634 代理
第一部 個人的意志	635 材料
第二項 予望的意志	636 貯蔵
二 目的への役立ち	637 蓄積
(一) 實際的有用	638 浪費
631 有用性	639 豊富
632 手段	(副) うんと
(助) テ	(副) やっと
633 道具	641 過多
	(副) アンマリ、あまり

上引のように、(一)「實際的有用」は空見出しが続き、対義関係として「うんと」と「やっと」は豊富と欠乏という対義関係に位置づけられている。それらを包む意義として「實際的有用」が立てられている。

さて、これらの分類の後に次のような要約が述べられている。

語彙の体系的分類としては、ローゼット辞典の方式に従ったのであるが、その効用については、再び説く必要を認めない。これによつて、低学年の語彙を整然たる体系の下に透視しうるばかりでなく、語彙指導上の原則たる

(1) 類語 (同類語) (2) 対語 (反対語)

についても、大きな支柱を得ることであらう。即ち、ローゼット項目の一々を、一つの固有の坐としてこれを、その附近にある類語、対語との諸連関に於て把握するならば、語に於ける形象性の問題が、われわれの目前に明かに浮かび上つて来るであらう。そして、基本語彙学への寄与が明かにせられるであらう。

なお、本文献は『基本語彙学 上』という、少なくとも下巻を予定している書名を掲げている。その下巻がどのような内容になる予定であったかの記述はない。垣内松三氏の国語読本の用語調査は、巻一を扱った文献(6)『形象と理會』に始まり、巻一～巻二を取り上げた文献(8)『国語教育の諸問題 (上)』を経て、巻一～巻四を整理した本文献(12)『基本語彙学 上』に至っている。

本文献は、文献(49)『分類語彙表』、文献(52)『言語要素とりたて指導細案』、文献(54)『言語要素とりたて指導入門』などに影響を与えたが、基本語彙研究には活用されていない。

文献(13) 小学校に於ける言語の教育 (小学読方教育叢書)

大槻芳廣

小学出版社 昭和14(1939)年 2 月25日

A 5 判 序25ページ 目次 2 ページ 論文10ページ 本文268ページ

〔目次〕(細目次を省いた箇所がある)

序	井上越・保科孝一・五味義武・峰間信吉・富田繁	
自序		
確信なき我が国語教育	保科孝一	
一、言語と国語教育		1 ページ
二、国語と小学国語読本		8 ページ
イ、国語の概観	ロ、児童の言語	ハ、日本語
ニ、読本と日本語		
ホ、本書の調査	一、小学国語読本総語彙	二、各巻各課別新出語彙
三、言語の教育	イ、言語集団と新読本	ロ、言語教育の方法
		257ページ

本文献の巻頭を飾る識者 5 人の「序」は、いずれにも、次のような記述が見られる。これは、序文を依頼する際の大槻芳廣氏の文書等に基づいているものと推察される。

新小学読本全十二巻の新出語句検出のため五万余枚のカードを作製し、之に一枚六七回の手数を煩はして完全に整理をなしとげた如き、到底普通人の速く及ばざる努力の姿である。(富田繁氏の「序」)

次に、二・ホ「本書の調査」では、当初の予定について、次のように述べている。

本書は当初小学国語読本全十二巻の全語を品詞別に採録し、その総語彙を明らかにし、かつ各巻各課の新出を検出し、その頻出数を明らかにし、更に観念別、語層別に排列する予定であつたが、本叢書の公刊を發表すると同時に国語問題に関心を有せられる学界、実践界の各位から種々の御助言・御示教を賜はり、中には研究援助まで申出で下さつて感謝にたえない次第である。寄せられた御示教の中、著書の調査当初より心配してみた点を指摘されるものが最も多く、遂に予定を変更するに至つたのであるがそのよせられた御示教を要約すれば左の三点となる。

一、調査が専門的に過ぎる。

二、語にアクセントを附せよ。

三、基礎日本語の確立に資せ。(引用者注；以下、これら 3 項目に関する本文を省略する。)

以上の如く緊要であり、著者としては全く不可能な問題に御援助の申出があり、かつ、その実現も可能となつたので、本叢書の刊行終了後公刊することとなり、今既に各位有志によつて着手されてゐる状態である。よつて当初の方針を変更し、次の「小学国語読本総語彙」に於ても、「各巻各課別新出語彙」に於ても示されるものは取扱の単位としての語であると御承知ありたい。語の頻出数も省略してあるがこれは読本に於ける頻出数にのみよりて語の価値を判定するよりも、他教科書及び新聞用語等を含めた頻出数が価値判定の基準として有力であると信ずるためである。

この方針の下で、次のように語彙選定の方針を定義している。

次の「総語彙」及び「新出語彙」は前述の如くに、児童が読本以外より絶対に語彙を習得しないと云ふ不自然極まる仮定の下に検出したものであり、その採集の基準は視覚と意義とに置いてなされたものであ

る。全巻全課の語彙を品詞別に採録し、同義語を同一表記に書換へ、新出の語のみを残し他を省き、かくて新読本使用の全語彙を定め、これを発音五十音順に語の第二次音までを整理して「総語彙」を作成し、更に各巻各課別に配当し、同一課は更に教科書の提出順に排列したのが「新出語彙」である。

続いて、一覧表の前に、次の注記が置かれている。全3文の前2文を引用する。

次の総語彙に於て、語の下に漢数字は新出の巻と課を示すものである。(巻一は内容より三十六課に分つ) 尚語の品詞・内容等誤認のおそれあるものには語の下に括弧を以て注記を加へて置いた。

本文献の二・ホ「本書の調査」には「一、小学国語読本総語彙」「二、各巻各課別新出語彙」の2種の一覧表を掲げている。「一、小学国語読本総語彙」は、五十音順に見出し語を配列して、その下に巻・課の数字を提示した一覧表である。例えば「あ之部」の頭の一部を提示してみよう。

相手	相打つ	相籠	哀音	あひ(相)	會ひ	藍	ああん	ああ(感)	ああ(代)	あ(感)	
五・二	一・二・二六	一・二・二四	一・二・二六	一・〇・二四	一・二・一九	九・二	六・五	三・二	九・三	一・二五	卷・課

この一覧表の見出し語を試みに数えると、

11,242語になる。

本文献には、その一万語余りを五十音順に整理した一覧表は提示されているが、それらの分類案や統計にかかわる数量は一切提示されていない。それらの考察は続く研究書にまとめる予定であったようである。

次に、第2の「各巻各課別新出語彙」に置かれている前書きの前半部を引用しておきたい。

本表は新出語を各巻別・各課別に配し、かつ同一課の語は教科書に於ける提出順によつて排列したものである。語形は教科書に提出されてゐる通りであつて、用言も前表に於けるやうに、終止形に還元することを避け、仮名に漢字を当てることも避けてある。これは教科書との対照に便することを考へてしたものであつて、これ以外に意味を有するものではない。

なお、『コトバ』第三巻第三号に「垣内先生国語文化賞 受賞者(大槻芳廣氏)略歴及び謝辞」「推薦のことは(石黒修・岡本千万太郎・三宅武郎)」という記事が掲載されている。その中の石黒修氏の「大槻さんの本」から本文献の問題点を引用しておきたい。

この機会にもう少し批評とか注文めいたことをそへると、せつかくのこの調査が結局、読本の語彙索引としてしかまとめられてゐないのはいかにも惜しい。即ち「頻度」が欠けてゐる。「索引」としても、各巻各課別の表が別にあるのだから、総語彙の方は、各語彙の索引を各巻各課でなく、むしろ各巻とページにして欲しかった。さうすると、その語彙を実際読本で求める時に、ずつと楽に出るが、課では範囲が広くて探しづらい。(中途省略)それから各語彙のとり方についての凡例をもう少しはつきりあげて欲しかったし、語彙整理の方法にもう一苦勞ありたかつた。

本文献の価値は、一方では同じ教科書の用語調査を行った文献(15)『小学国語読本 新出語句総覧』と対比してとらえる必要がある。ただ、両文献とも、石黒修氏の指摘にあるように、初出索引で終わっているので活用ににくい。

文献(14) 小学国語読本 巻一の研究

国語協会教育部

国語協会教育部 昭和14(1939)年 7 月

A 5 判 52ページ (謄写印刷)

本文献は、表紙をはじめとしてすべて謄写印刷によっている。本文はA 4判用紙二つ折りの体裁になっている。奥付はない。表紙の表に「小学国語読本 巻一の研究」という書名が二段に分けて掲げられ、その下に「昭和十四年七月」という日付が記され、下部に「国語協会教育部」と記されている。

まず、表紙裏に印刷されている「前がき」の全文を引用しておきたい。なお、「前がき」の下に「備考」が続くが、これは、品詞の略名を提示した内容であるので、引用から除くことにする。

教育部が新読本巻一の調べをはじめたのは、昭和12年5月18日で、国語愛護同盟時代であつた。研究会を毎月一回開くことにして、その当時殆んど毎回出席して居たのは、宮川菊芳、杉原勇、畠道夫、大石譲、野上有道、石坂艶治、宮田幸一、井之口有一、湯山清、岡崎常太郎等の諸氏で、高山茂七郎、前野慶治、加藤因、鈴木磐雄氏等も時々参加した。

こゝに示す案は杉原勇氏 の努力によつて出来た原案を審議し更らに湯澤幸吉郎君を煩わして修正したものであるが、最後の決定案を得ることはなかなか容易のことでないので、昭和13年5月18日正に1ヶ年を経過した時を以て、一先打ち切ることにした。今未定稿のまゝ謄写して発表し、各位の叱正を得てさらに研究をすゝめたいと思う。

昭和14年 7 月21日

教育部世話人

代表 岡崎常太郎

一覧表は、次の体裁になっている。「アノ部」の最初の部分を引用してみよう。

番号	提 出 語	頁	提 出 形 式	備 考
1	ア	29	<u>ア</u> 、ミンナ ガ ワット ニゲテ イッタ。	感
2	アヲ (アオ)	31	クルクル マハル、 <u>アヲ</u> ガ デル。	名
3	アヲイ (アオイ)	21	ヒカウキ、ヒカウキ、 <u>アヲイ</u> ソラ ニ、	形
4	アカ	9 30	シロ カテ <u>アカ</u> カテ クルクル マハル、 <u>アカ</u> ガ デル	名 名
5	アカイ	6 6	オヒサマ <u>アカイ</u> アサヒ ガ <u>アカイ</u>	形 形
6	アガル	13 13	パイチク、パイチク、ヒバリ ガ <u>アガル</u> 。 テン マデ <u>アガル</u> 。	動 動
7	<u>アケ</u> <u>マシ</u> <u>タ</u>	68	モン ノ ト ヲ <u>アケマシタ</u> 。	動、助動、助動
8	<u>アゲ</u> <u>マセウ</u> (マシウ)	52	シシサン、タスケテ <u>アゲマセウ</u> 。	動、助動、助動
9	<u>アゲ</u> <u>マシ</u> <u>タ</u>	36	オミヤゲニ ツツラ ヲ <u>アゲマシタ</u> 。	動、助動、助動
10	アサガホ (アサガオ)	45	<u>アサガホ</u> ガ サキマシタ。	名

この一覧表について簡単に説明しておく、一番左側の番号は、アノ部、イノ部というように部ごとに打た

れた提出語の番号である。したがって、順に行数の計算を行うと、全体の延べの語数と異なりの語数が分かるようになっている。なお、異なりの語数は、475語である。

次に、各提出語は上掲の「アケ マシ タ」などに明かなように、文節単位で取り上げられている。

この一覧表の特徴は、ページ数の右に続く「提出形式」である。例えば「アサガホ ガ サキマシタ。」という本文表示は、その用例の具体的な文脈を示すことになっている。

次に、それぞれのページの最下段に飛び飛びに施されている29項目の注記について説明を加えてみたい。これらの注記の内容から、「前がき」に述べられている「最後の決定案を得ることはなかなか容易のことではない」という討議の状況を推測することができそうだからである。

以下、「ア」の最初の注記と「マ」以下の最後の注記を引用してみよう。左側は本文、中間に品詞、右側に、注記を掲げる形で示すことにする。

アナタ モ <u>アソビ</u> ニ イラッシャイマセン カ	名	<u>アソビ</u> 動詞ノ名詞的用法
アレ、 <u>アノ</u> モリ ノ スギノ木 ノウヘ ニ	代	<u>アノ</u> 代名詞ノ「ア」ニ助詞ノ「ノ」ガツイタ モノデアルガ、コレヲ一語ト見ナシタ。
<u>アル</u> 日、ウサギ ト カメ ガ カケッコ ヲ シマシタ。	名 (副詞的用法)	<u>アル</u> 日 「アル」ハ接頭辞、動詞“アリ”ノ連 体形。“アル日”デ名詞トナル、副詞的用法。
<u>イクツ</u> サイタ カ カゾヘ テ ゴラン ナサイ。	名	<u>イクツ</u> 名詞 「ツ」ハ接尾辞
<u>イソイデ</u> アマド ヲ オシメ ニ ナリマシタ。	動、助 (副詞的用法)	<u>イソイデ</u> 副詞トスル説モアル
ネズミ ハ (<u>イッショウケンメイ</u> ニ) ナッテ、	名 (副詞的用法)	<u>イッショウケンメイニ</u> 副詞トスル説モアル。
モモトラウ ハ 犬 ト <u>イッシ</u> <u>ヨ</u> ニ セメイリマシタ。	名、助	<u>イッショニ</u> コレヲ一語トシテ副詞ト見ルコト モ出来ル。
(中略)		
<u>マックロナ</u> クモ ガ ソラ ー パイ ニ ヒログリマシタ。	名、助 (形容詞)	<u>マックロナ</u> コレヲ形容動詞ト呼ブ説モアル。
ネズミ ハ スグ <u>ヤッテ</u> キマ シタ。	動、助	<u>ヤッテ</u> 「ヤッテクル」ヲ一語トスル人モアル、 コノ場合「ヤッテ」ハ接頭辞的ニ見ルノデア ル。

本文献は、巻一だけの用語調査であるから、語数などについては貧弱なものでしかないが、当時の優れた研究者が、小学国語読本巻一の語の認定で、様々なやりとりをした結果、各種の注記が必要になり、その注記を掲げることで、本文献の刊行の価値が生じたのであろう。

文献(15) 小学国語読本 新出語句総覧

兵庫県加古郡加古川町氷丘尋常高等小学校

昭和14(1939)年12月 3 日

A 5 判 序 3 ページ 凡例 4 ページ 一覧表301ページ (謄写印刷)

〔構成〕

序	氷丘尋常高等小学校長 栗本捨次郎	2 ページ
凡例		4 ページ
五十音別索引		1 ～167ページ
数詞		168～170ページ
各課別索引 卷一～卷十二		171～301ページ

「序文」から本文献作成の主たる意図を述べた本文を引用する。

読本に於ける新出語句が明らかになれば語句の指導態度は自ら確立される。即ち語句指導の重点が的確に把握され指導が合理的になるのみならず、語法語脈の指導も系統的、科学的となる。世に所謂重要語句、難語句も此の研究の上に立つて初めて正しき選択が出来るといふもので、単なる教師の主観で場当たり式に拾ひ上げたものを以て教壇に立つと云ふことは甚だ危険といはねばならぬ。

尚新出語句を考察して得たるもの、中、特に付言したいことがある。それは新出語句が学年的に展開されて極めて整然とした体系を有することである。例へば低学年に於ては生活語の整理を主とし中学年では語彙を拡充することに努めてゐる。高学年に至つては、之等取得したるもの、運用に、即ち国語のあやの感得に力を注いでゐるのである。この事は直ちに以て語句指導の根本方針とならう。

次に、「凡例」から重要な指摘箇所を抜き書きしておく。

本書「新出語句総覧」は文字通り「総覧」であつて読本の新出語句を原形のまゝに於て忠実に採録した。又其の分類に於ても便宜的小分類は飽くまで避けて研究家の自由なる利用を俟つことにした。

1. 編纂の概要並びに機構

先づ語句採録の方針を別項の如く決定し、それによつて読本の語句を一語一句も余さずカードに取つた。其の数約三万一千語。第二着手はカードの整理であつた。右三万一千余枚のカードを五十音順に類別して同型の語を一所に集め提出時期の最も早いものを残し他を捨て所謂新出語句の選定が成つたのである。其の数約一万四千八百五十語。かくして整理されたものを五十音順に記載したのが本書の前半五十音索引である。第三着手は更に之をほぐして巻別課別に類別した。之が本書の後半「巻別索引」である。第四着手に於ては巻別に類別されたものを指導態度の上から分類し各語に就いて夫々第一類二類三類に分類した。即ち巻別索引の語に附記した類字がそれである。

語句採録方針

(1) 活用言は活用形の形でとり一般辞書の如く終止形に止めない。

例 答へ、 危く、 進んで、 進めた、 すゝめて、 進める、 進む。

(2) 助動詞、助詞は原則として独立して取らず、使用された形に於てとつた。

例 下されたく候、 なかるべし、 ひかへたる。

(3) 表現上、修辞上一の合成語化したものは品詞分類上の如何にかゝらず一語として取つた。

例 一にして、二にあらず。

(4) 同一の語型でも当てる漢字の異なるものは全部新出として採録した。

例 のぼつて(登)1/16 のぼつて(昇)9/1

(5) 固有名詞は実在仮想の如何を問はず全部とつた。(引用者注；「例」は省略した。)

(6) 数詞は助数詞的なものを重視した。(数詞篇参照)

次に、「2 使用例23」から「(2) 語句の指導態度確立」の前半を引用しておきたい。

新出語句を具に見れば其の間に自ら三段の類別が可能である。即ち新出語句の中には児童が既に生活上使用し来れる語が随分多い。之等は話しことばから文字ことばへの橋渡しをしてやり、発音を正してやればよいものがある。之を第一類と称した。

次に生活語には惜々離れてゐるが、既習語彙の上から類推が可能であり、了解された後は直ちに生活語の中に包摂されて行かねばならぬ語がある。之を第二類と称した。

扱て、其の次には、新しく拡充された語で、何かに頼らねば了解困難なもの。之は所謂語句指導の中樞をなすもので、適格な解釈をするだけの用意を有つて教壇上に望まねばならない。之を第三類と称する。

(以下、略)

ここで、「五十音別索引」から「あか…」の語句のすべてを原文のとおり順に掲げてみよう。なお、一覧表に掲げられている初出の巻・ページ数は、ここでは省いた。そして、参考のために、同じ国定国語読本の用語を調査した文献(13)『小学校に於ける言語の教育』の一覧表の語句を右側に対比させてみた。なお、文献(13)の語句は文献(15)に合わせるために語句の配列の順序を変更したところがある。特に、「赤い」や「上げる」などは、文献(15)が2カ所に分散させている。そこで、文献(15)は、そのいずれかにまとめて掲げた。

文献(15)	文献(13)	文献(15)	文献(13)	文献(15)	文献(13)
あか	赤	アカシヤ	アカシヤ	あかるく	
あか(垢)	垢	赤だすき	赤だすき	明かるかつた	
	赤々	あかちゃん	あかちゃん	明かるさ	
あかい	赤い	暁	暁	あかり	あかり(燈)
赤絳威	赤糸絨	赤つばい	赤つばい	上らう	あがる(上)
赤馬	赤馬	赤とんぼ	赤とんぼ	上る	あがる
赤色	赤色	上つた		上り	(上簇)
赤き		上つて		上ります	上る(敬)
赤くて		赤人(人名)	赤人	上りました	
赤城山	赤城山	赤帽	赤帽	上り始め	上り始め
赤黒い	赤黒い	赤穂	赤穂	阿寒(地名)	阿寒
赤坂離宮	赤坂離宮	赤練瓦	赤練瓦	阿寒湖	阿寒湖
明かした	明かす	あがめらるゝも	崇む	赤んぼう	赤んぼう
明かしました		あかるい	明るい	赤松	赤松

本文献は、一小学校が力を合わせて調査した貴重な資料である。ただ、文献(13)について石黒修氏が指摘している問題点がやはり克服できていない。そのために初出索引としてしか使えない。

文献(16) 基礎日本語の試み (『国語文化講座 第一巻 国語問題篇』)

土居光知

朝日新聞社 昭和16(1941)年 7月20日

A 5 判 全24(290~313)ページ

土居光知氏は、昭和 8 (1933) 年に『基礎日本語』を刊行したが、その後も検討を加え続けて、同じ昭和 8 (1933) 年に「国語科学講座」の一冊に『国語純化と基本語』を刊行、また、その翌昭和 9 (1934) 年には『基礎日本語』の普及版を刊行し、更に、文献(16)の本論文を執筆した後、昭和18年の文献(21)『日本語の姿』の刊行に至る。その根本及び大綱には違いがないが、語彙表には少しずつ改訂が加えられ、解説にも違いが見られる。本報告書では、普及版及び「国語科学講座」を除いた3種類を採り上げている。

この朝日新聞社刊行の『国語文化講座』は全 6 巻構成で、その第一巻『国語問題篇』には16名の言語関係者が起用されている。その一人石黒修氏の「国語問題の展望」の「三」では、土居光知氏の『基礎日本語』が紹介されている。その紹介文は、当時の土居光知氏の基礎日本語の解釈を知る上で意味があるので、注記は省いて本文だけを引用しておきたい。

まとまつた一つの試みとしては、イギリス語のベーシック・イングリッシュ Basic English. London に示唆を得ておこなはれた土居光知氏の「基礎日本語」がある。

これは基本的な語彙制限による一つの体系をもつた簡易日本語ともいふべきであるが、これと似て語彙を制限せず、第一次的に重要なものを選定して、必要により第二、第三と増して行く方針のものがある。これを区別するために、前者を基礎語といふ呼び方もおこなはれてゐる。しかし、実際上においても基礎語彙と第一基本語彙とは半数以上一致するのが常である。

この石黒修氏のとらえ方は、当時の主流を示すものと見ることができる。そこで、こうした時代の判断から『国語文化講座』への基礎日本語執筆の要請が土居光知氏に行われたものと推察される。

「基礎日本語の試み」は、次の構成になっている。

- 一 基礎日本語は如何な人々のためになり得るか
- 二 知的な言葉としての基礎語
- 三 民衆のための基礎語
- 四 基礎語と「基本語」
- 五 基礎語に対する誤解
- 六 基礎語表

以下、上記の章立てに従って、紹介をしたい。まず、「一 基礎日本語は如何な人々のためになり得るか」では、次の本文を引用しておきたい。

基礎語は上述の如く十歳前後の小学生を相手とする場合と、二十歳以上の高等教育を受けた外国人を相手にする場合と選択の標準を異にする。後者の必要とする基礎日本語は知識的な言葉である。

基礎語は現在のところ少年と外国人に対する日本語教育の問題として考へられてゐるが、国民に常識としての科学的知識を与へる必要からも考慮されなければならぬ。

「二 知的な言葉としての基礎語」では、次の本文を引用しておきたい。

かくの如く、言葉、字、語、声、音等の内容を明確に規定することが出来るのならば、僅かの語を用ひることによつて正確な表現が可能になる。例へば「言葉」があれば「事」と紛ひやすい「言」、学者ぶつた「言語」なども避けることができる。「言葉」は「言語」よりも用途が広い。(中略) 基礎語として「言語」をとらず「言葉」をとるのは当然である。

次に、「四 基礎語と『基本語』」では、次の本文を引用しておきたい。

基礎語は僅かに千数百語を用ひて知的な文章を書き、国民の大多数に生活に必要な新知識また科学的常識を与へ得ることを目的としてゐるのであつて、用ひられる度数の多い点から選ばれた三、四百の語は基本語と共通であるが、その他の語彙は異なる立場から選ばれ、互に補足し合ひながらも、異なる方向に発展すべきものであらう。

次に、「五 基礎語に対する誤解」では、次の本文を引用しておきたい。

私の考へでは基礎語だけを以て表現することは、初等学校以上の教育を受けなかつた人々に対して講演をし或は本を書く人だけで宜しく、聴衆及び読者はたゞ基礎語を了解すればよいのである。これは国民学校の上級に於いて力を用ひてくれるならば容易にできることである。またその用語を窮屈に限定することを欲しない講演者或は著者も基礎語の体系やその云ひ換への方法を理解されるならば、大衆に理解せしめるやうな文章を書きまた講演をなすために多少得るところがあらうと思ふ。

次に、「六 基礎語表」では、文献(5)『基礎日本語』でいう「意味分類表」だけが掲げられている。ここでは、例として、「住居・着もの・道具・家の道具・食するもの・飲むもの」の6種を紹介してみよう。

住居	家 屋根 戸 階 室 窓 壁 柱 床 畳 棚 庭 門 便所
着もの	服 帯 袖 袴 羽織 帽子 外套 足袋 靴 紐 カラ ボタン
道具	櫛 刷毛 時計 鎖 眼鏡 紙 筆 ペン 鉛筆 インキ ナイフ 傘 籠 袋 カバン 陶器 壺 針 鎌 杖 鞭 梯子 ねじ 釘 棒 包み 杵 刀 網 ベル
家の道具	箆 筥 箱 鍵 机 席 膳 箸 皿 盃 匙 コップ 蓋 鍋 鹽 バケツ
食するもの	米 麦 豆 芋 野菜 塩 砂糖 蜜 卵 果物 菓子 飯 パン バタ 蜜柑 葡萄 林檎 桃 苺
飲むもの	汁 乳 茶 酒 コーヒ ビール ソーダ 煙草

これらの各見出して選定された語を見ると時代の変遷を覚える。現在、こうした見方で選定するとすればこれらの中のどの語が残り、どの語が消えるであろうか。

ここで、語数について整理しておくと、文献(5)『基礎日本語』で1,000語を提案し、続く『国語純化と基本語』で3語を差し替え、『基礎日本語』の普及版で更に5語を差し替えているが、本文献では20数語を削り100語余りを追加することによって、1,085語を提案するに至っている。そして、続く文献(21)『日本語の姿』で1,100語を提案するに至る。なお、本文献については、『近代国語教育論大系 別巻Ⅰ』(昭和62(1987)年12月 光村図書)に再録されて、井上敏夫氏の「解題・解説」が付けられている。

本文献は、著者の1,085語の考え方を国の内外に普及させる役割をもっていたといえることができる。

文献(17) 基本簡易ニッポンゴ (『日本読書新聞』)

情報局選定

昭和17(1942)年4月6日

本文献は、日本語の会話をわずか300語で行わせようとするもので、次の3種の資料で紹介されている。

- (1) 『日本読書新聞』(昭和17(1942)年4月の①特集記事, ②「情報局選定ニッポンゴ」, ③座談会)
- (2) 大久保正太郎「南方への日本語対策」(『教育』第10巻第5号 昭和17(1942)年6月10日)
- (3) 小泉蓼三『日本語文の性格』(附録 基本簡易ニッポンゴ)(昭和19(1944)年1月 立命館出版部)

資料(1)には、上記のように、①「特集 南へゆくニッポンゴ」という見出し及び記事, ②「情報局選定ニッポンゴ」という見出しのついた300語の表, ③「絵入りで覚えさす大東亜の共通語」という見出しによる座談会, の3種が掲載されている。その座談会は記者が司会を担当し、日本語教育振興会理事西尾実氏が選定側の発言、国語協会主事石黒修氏が評価側の発言を行っている。まず、記者の言葉を引用してみたい。

結局日本語を共栄圏共通の公用語としなければならぬ、(中略)そこで応急の暫行案として差当たつて必要な少数の日用語を選定してそれを普及さしたらいふことになった、そしてこれを二群とし第一群は簡用語で最も基本的な日用語三百以内、第二群は公用語といふやうな意味で約二千語を選ぶ、簡用語は身の雑用を足す程度のもので、(中略)仮名で現すが、文字を覚えさすより言葉そのものを覚えさす、(中略)そこでとりあへず三百語の方から着手しようと、三月の初旬に情報局三部二課の主催で陸海軍からも出席して最初の会合が開かれた結果小委員会を作つて選定しようといふことになり、日本語教育振興会の西尾実氏を始め松宮一也氏、岡本千万太郎氏その他が小委員に選ばれ、数回集まつて原案を作成したといふのが大たい今までの経過です。

次に、西尾実氏の説明から、要点を簡条書きに整理しておきたい。各項目の頭に置かれた見出しは、本紙に掲げられた小見出しである。(ただし、⑤の見出しは、別の箇所の見出しを借用した。)

- ① 住民の発表語 — 言葉を選ぶに当たっては、現地人の発表語とすることにした。
- ② 連想で暗記さす — 事柄の連想による分類の方法をとった。
- ③ まず片仮名を — これまで外国の人名や地名を表記している片仮名とした。
- ④ 動形は終止形 — 動作を表す動詞は終止形で出す。「(アナタホンヨム)」禁止の場合は「ナ」を付けばよい。(引用者注:「動形」は「動詞の形」を縮めたもの)
- ⑤ これで身の用事は果たせる — ちょうど三百語でなく二百八十数語であるのは、軍政上必要な言葉を付加するために残している。(座談会の出席者情報局情報官箕輪三郎氏の発言には、南方の沐浴を習慣とする国では「アビル」を加えるというように国によって必要な言葉を足す見方が示されている。)

ところで、資料(1)と(2)には「簡用語」という呼称が見られる。本報告書で「基本簡易ニッポンゴ」という呼称を用いたのは、発表後2年ほど経過して出版された資料(3)が当時通用していた呼称を採用したのではないかと推測したからである。

さて、本文献は、次に引用者が枠を設けて提示するように「第一類 人」から「第十三類 雑」に至る構成になっている。次の一覧表では、全13の種別ごとの語数を掲げておいた。各語のカタカナ表記は、元の一覧表のとおりである。ただし、原文は縦書きで、それぞれ、「第一類 人」という見出しで書かれている。

類	種別	数	基本簡易ニッポンゴ (全295語)
1	人	32	ニッポン ニッポンジン ニッポンゴ ヒト オトコ オンナ コドモ オトーサン オカーサン キョーダイ シュジン オクサン トモダチ オキヤクサン アタマ カオメ ミミ ハナ クチ テ アシ ワタシ アナタ ダレ ナマエ サン ミル キクユー トル タツ
2	生活	85	ウチ ヘヤ マド ト カギ イス ツクエ ベンジョ ソージ アケル シメル スワル オキル ネル コメ ゴハン パン ニク サカナ タマゴ ヤサイ クダモノ ミズ コーリ ユ オチャ シオ サトー カシ サケ タバコ ヒ (火) マッチ セキタン セキユ ニル ヤク タベル ノム チャワン ハシ (箸) サラ コップ ナイフ ホーク サジ イレモノ アラウ キモノ オビ シャツ ボタン ボーシ クツクツシタ キレ ハリ イト ハサミ テヌグイ キル (切る) セッケン キル (着る) ヌグ ハタ ホン シンブン カミ エンピツ ペン インキ エ シャシン ジヨム カク ミセ オカネ ウル カウ シゴト アソブ ビョーキ イシャ クスリ
3	数	22	イチ ニ サン ヨン ゴ ロク ナナ ハチ キュー ジュー ヒャク セン …ニン …ネン …ガツ …ニチ …ジ …フン イクラ ミンナ タクサン スコシ
4	時	11	キョー キノー アス アサ ヒル ヨル イツ マダ アトデ ツギ トケイ
5	場所	19	コレ ソレ ドレ ナニ ココ ソコ ドコ ウエ シタ マエ ウシロ ミギ ヒダリ ナカ ソト ヒガシ ニシ ミナミ キタ
6	自然	20	イヌ ネコ ウマ ウシ ブタ トリ ハエ カ キ クサ ハナ タケ ヒ (陽) ツキ アメ カゼ ヤマ ウミ カワ モリ
7	交通	19	ユービンキョク テガミ キッテ デンワ デンポー ラジオ エキ キシャ デンシャ ジドーシャ ジテンシャ フネ キップ ノル オリル トマル ニモツ ミチ ハシ
8	社会	11	マチ ムラ ヤクショ ケーサツ ジュンサ ギンコー カイシャ コーバ ガッコーオテラ キョーカイ
9	陸海軍	18	リクゲン カイゲン グンシレーブ タイチョー ショーコー ヘータイ ケンペイ グンカン ヒコーキ センシャ ホー ジュー センソー テキ ミカタ メーレー カツ タスケル
10	形容詞	26	イー ワルイ オーキー チーサイ ナガイ タカイ アツイ ハヤイ ツヨイ ヨワイ オモイ カタイ トーイ アトラシー シロイ クロイ アオイ アカイ キーロイオナジ ホントー スキ キライ キレー イタイ アブナイ
11	動作語	20	アル ナイ スル イク クル アツマル ハイル ダス モッテユク ワカル デキ ル コシラエル ナオス ヤメル シヌ マツ アゲル トブ ヨーイ チューイ
12	挨拶	8	ハイ イーエ コンニチワ オハヨー サヨナラ クダサイ アリガトー バンザイ
13	雑	4	…ト… …ノ… ……カ (疑問) ……ナ (禁止)

本文献は、わずか300語という語数であって、文献(5)『基礎日本語』とはまた違ったかたちの提案になっている。日本語によるコミュニケーションに最低何語必要かを考えさせる貴重な文献といえることができる。

文献(18) ヨミカタ〜四 総合語彙の品詞別調査 (『コトバ』第五卷第二号)

廣瀬榮次

国語文化研究所 昭和18(1943)年2月1日

A 5 判 31ページ(33〜63)

まず、本文献の前置きに相当する書き出しの文章を引用しておきたい。(なお、本文献は縦書きであるので、数字はすべて漢数字で表示してある。そこで、引用するに際して、数字にかぎり算用数字に改めた。)

ヨミカタ及びコトバノオケイコに出てゐる語彙の総数は、私(引用者注; 廣瀬榮次氏)の調査ではおよそ2,221語である。品詞別に見ると次のようになる。

一 名詞	1084語
1 普通名詞	1013語
2 固有名詞	71語
二 数詞	100語
三 代名詞	34語
四 連体詞	8語
五 動詞	498語
六 形容詞	82語
七 形容動詞	48語
八 副詞	187語
九 接続詞	18語
十 感動詞	97語
十一 助動詞	16語
十二 助詞	49語
この他 接頭語の主なもの	9
接尾語の主なもの	11

こんな調査に「連体詞」などあげるのはどうかと思つたが、それの方が都合がよかつたからである。

この分類は垣内氏の「基本語彙学」に殆どよつてゐる。これは小学国語読本の語彙と比較するのに幾分都合がよいかと考へたからである。前著作で名詞に入れてあるものを、これには形容動詞に入れたり、副詞に入れてあるものを、感動詞に入れたり等の幾分の違ひはある。これは私の気に入るやうに分類したものであるから、全く主観的な点が多いと思ふ。色々と御指導、御批正を賜りたい。

次に、「一 名詞」の最初の分類を引用しておきたい。

- 1 名 詞 (1,084語)
 - 1 普通名詞 (1,013語)
 - 1 自然 (248語)
 - 1 天 (33)
 - 2 地 (45)
 - 3 植物 (60)
 - 4 動物 (110)
 - 2 人事 (386語)
 - 1 超人 (10)

- 2 人倫 (46)
- 3 地位 (34)
- 4 施設 (76)
- 5 衣食住 (衣27 食28 住37 道具その他128)
- 3 状態 (82語)
- 4 動作 (123語)
- 5 関係 (175語)
 - 1 時間的 (62)
 - 2 空間的 (68)
 - 3 数量的 (9)
 - 4 一般的 (36)
- 2 固有名詞 (56語)
 - 1 地名 (18)
 - 2 人名 (32)
 - 3 物名 (6)

さて、上記の普通名詞の「1 自然」の「1 天」の33語は、次のとおりである。なお、各見出しに続く1～4の数字は、提出の巻数を示す。何も書いていないのはどの巻にも出ている語である。

天	1	4	夕日	1	3	星	1	3	4	雪	1	2	4	かすみ	4	
空			夕やけ	1	2	3	あまの川	1		大雪			4	にじ	1	
秋空		4	夕やけ小やけ	1	2	4	天気			あられ	2		4	風		
青空	1	4	月				はれ			ゆふだち	1			北風	4	
日			お月様	1	2	4	はれま			かみなり	1			南風	3	4
お日様	2	4	月夜			4	雨			空気			3	4		
朝日	1	2	4	十五夜	1	4	大雨	1		雲	1	2	4			

次に、「あとがき」を引用しておきたい。

本誌の一七年六月号に発表した「漢字の調査」と同時に着手したヨミカタ及びコトバノオケイコに表れた語彙の調査を漸く完了することが出来た。

何分この方面の知識の乏しい者の仕事であるので、語彙をよるのも、分類するのも、随分勝手な解釈によつてゐるところが多いと思ふ。最も科学的であるべきこの種の調査として、こんな非科学的なものは一顧の価値もないかもしれない。けれど編輯部のすすめに随つて分類してみた。(1文省略)尚各巻別総語の頻数調査は国語協会の方で印刷して頂くことになつてゐる。

この「あとがき」で紹介している「各巻総語の頻数調査」は、文献(20)として紹介する『国民学校教科書の語彙 一』のことである。

本文献は、教科書の語彙を品詞別に整理した資料であつて、文献(20)と併せてであるが、今後活用できるものになっている。

文献(19) 幼児の言語発達（愛育研究所紀要・教養部第二輯）

恩賜財団愛育会愛育研究所

目黒書店 昭和18(1943)年2月5日

B5判 口絵4ページ 序文2ページ 本文132ページ

〔目次〕（第二篇から第四篇までは省略）

第一篇 語彙頻数調査

1～53ページ

第一章 問題

第二章 方法

第三章 結果 語彙頻数一覧表 頻数順位表 基本的日本語の選定 主要英語との比較
動詞の活用 助詞 言語に現れた児童心性 基本的語彙の適用

概括

語彙頻数表

本文献は、牛島義友、森脇要の両氏が共同で執筆したものである。

「第一篇 語彙頻数調査」は、目次に示したように、問題、方法、結果の3章構成で、その後に14項目からなる「概括」が続き、24ページ分の「語彙頻数表」が掲げられている。まず、第一章の主要な箇所を紹介した上で、14項目の概括を抜粋、あるいは要約するようにしたい。

「第一章 問題」では、次のような問題意識及び目的が記されている。

組織的な言語教育を受けない幼児期に既に斯くも大多数の語彙を蓄積してをる事は全く驚異に値し、国語教育に反省させられる処も大であるが、組織的な言語教育を行ふには先づ斯る多数の語彙の中から重要なものと然らざるものを区別し、其順に従つて教育することが大切である。（中略）

重要な語彙、所謂基本語彙の決定には斯く発達順序から考へる事が出来るが、尚其他に成人の言語生活に於て各語の占める役割を統計的に研究する事も考へられる。即ちソーンドイク等は書物、新聞、学芸雑誌等印刷された言葉を分析し、各語彙の現れる頻度を測り、それに基づいて基本語を設定してをる。

吾々は此発達の標準と使用頻数的標準から幼児の基本語を設定して行き度いと思ふ。即ち幼児の語る言葉を年齢別に集録し、其中から頻繁に使用される百語、五百語、或いは千五百語を選定して行き度いと思ふ。

第二章の「方法」では、幼児の言葉の二種の集録法について設定している。いずれも子供の自由な会話における発語、会話をとる事を前提としている。一種は児童観察室に園児三人を遊ばせて、その一人を被観察者に定めて、その子供の話すすべての言葉を30分間記録する。もう一種は、女子専門学校の心理学の受講をしている生徒に、自分の家族あるいは知人の中で学齢前の者について30分ずつ3回観察記録をさせる。

子供の数は、児童観察室で取り扱った者23名、家庭で行った者89名である。家庭では1人3回であるので、30分記録で数えると、延べ265名、合計288名である。

第三章の「結果」では、延べ約十万語から、異なりとしての「語彙頻数一覧表」を導いている。そこでは頻数2回以下の語を除去している。また、「愛育会、浅草」などの固有名詞も除去している。すると、残りが1,367語で、その中に子供特有の児童語や方言などが107語含まれているので、基本的な1,500語を提示するた

めに、240語を補っている。その240語は小学校国語読本巻十前半のページの中の主要と思われるもの若干と、頻数2以下から若干を拾って選定している。なお、延べ約十萬語であることは提示されているが、頻数1を含めた異なりが全部で何語であったかは示されていない。

次に、「概括」14項目から繰り返しになるが、重要な内容を紹介しておきたい。

3. 観察は子供の自然遊びの場面において、30分間に話された言葉を全部記録する事とし、満1歳児から満6歳児まで延人数288人分の記録を得た。
5. 以上の方法で記録された総語彙数は約十萬語であった。
6. 各語の頻数は使用回数を人数で除した指数で示し、各語をアイウエオ順に表示した。表には幼児前期(1 - 3歳)と後期(4 - 6歳)及び合計の指数を示した。
10. 米国で選定した幼児の基本英語の上位百語と比較するとその半数は同一意味の語であった。
14. この1500語の語彙で絵本、小学読本、成人の会話における語彙を測ってみると、基本語彙以外のものは、小学一学年では10%位で、四学年まで徐々に増加し、五学年から急に増加し30%位にまでなる。成人の会話の中には平均15.4%含まれている、即ち吾々の基本語彙で成人の会話の85%まで間に合うと言える。

以下、五十音順に排列された「語彙頻数表」から例として「バナナ」以下の言葉を掲げてみよう。

番号	語彙	1-3歳	4-6歳	計	段位
1075	バナナ	0.02	0.05	0.04	C
1076	はなび (花火)	0.01	0.05	0.03	C
1077	はなや (花屋)				E
1078	はね (羽)	0.01	0.02	0.02	C
1079	はは (母)	1.43	2.04	1.73	A
	┌ かあさん	1.10	2.04	1.55	
	└ かあたん	0.34	0	0.18	
1080	パパ	0.40	0.04	0.23	B
1081	はひ [灰]	0.02	0	0.01	C
1082	はひる [入]	0.83	0.86	0.85	A
	┌ はひる	0.71	0.76	0.73	
	└ はひりませう	0.01	0.04	0.03	
1083	はふ [這]	0.02	0.08	0.05	C
	パパ	0.02	0.007	0.01	D

この一覧表の「段位」のA～Eは、次の通りである。

- A 最も重要な100語。 B 101番から500番までの語。 C 501番から1500番までの語。
D 特殊な音声等を指す。児童語や方言、子供の生活に重要な語。表には入れるが、番号から外す。
E 全体を1,500語にするために、小学読本から選んだ主要な基本語240語。

本文献は、幼児の語彙調査の貴重な資料として、しばしば引用されてきた。今後も、その「語彙頻数表」は活用すべき価値を有していると考えられる。

文献(20) 国民学校教科書の語彙一

—『ヨミカタ』『コトバノオケイコ』各巻一から巻四まで

国語協会

国語協会 昭和18(1943)年3月31日

A5判 鏡・前がき・凡例など7ページ 語彙表313ページ(謄写印刷)

本文献の鏡に掲げられた刊行趣旨は次のとおりである。

本印刷物は、本協会が廣瀬榮次氏に委嘱した、国民国語教育の基本となる国民学校国語教科書『ヨミカタ』と『コトバノオケイコ』の巻一から四までの語彙の調査である。

尚これにつゞく分も、廣瀬氏の調査報告をまつて、逐次発行の予定である。

こゝに、第一冊の印行にあたり、同氏の非常な御努力に対して感謝すると共に、各方面においてひろくこれが活用せられることを望む次第である。

昭和十八年三月十五日

国語協会

上記の廣瀬榮次氏の筆になる「前がき」の最初の部分を引用しておきたい。

ヨミカタ及びコトバノオケイコに出てゐる「ことば」の頻度を調べてみました。この動機は昨年本校が兵庫県指定研究校として低学年の研究を命ぜられて特に授業細目を作ることに中心をおいて研究にあたりました。本校は主として国語の方面を担当致しました。従来の国語読本には、漢字の新出、読替は掲げられてあり、又新教科書の教師用書にも漢字の新出、読替は出てをります。が「ことば」の方は出てゐません。

次に、「凡例」の記述の主な事項を引用しておきたい。

1 ことばは出来るだけ教科書に出てゐるまゝを示してゐる。随つて重複してゐる場合もある。大体アイウエオ順に排列してゐる。

2 数字は頁数である。

例 9 ヨミカタ (56) コトバノオケイコ 6 コトバノオケイコの書き方の手本

3 アクセントは殆ど「アクセント教本」によつてゐる。が中には「アクセント辞典」によつたものもある。(以下に続く「注記」は省略。)

5 接頭語「お」等がついて話される場合が普通と思つたものは「お」の部に、さうでないものはそれぞれの部に入れてゐる。

例 おみき は「お」の部 おもち は「も」の部

次に、品詞別の頻度数は、「前書き」に次のようにまとめられている。

1 名詞	1,084	4 連体詞	8	9 接続詞	18
(1) 普通名詞	1,013	5 動詞	498	10 感動詞	97
(2) 固有名詞	71	6 形容詞	82	11 助動詞	16
2 数詞	100	7 形容動詞	48	12 助詞	49
3 代名詞	34	8 副詞	187	総語数	およそ2,221語

例として、語彙表の1ページ目を掲げてみよう。

<p>ア 69 カリ マシ タ</p> <p>オ 31 アカ 65 リク (42) タ 31 サイ</p> <p>ア 19 カル 19 (ヒ バリ)</p> <p>ア 52 カル 68 55 ク</p> <p>ア 69 カル 69 イ</p> <p>ア 50 カ チ ヤ ン</p>	<p>赤 65 チ ヤ ン</p>	<p>赤 38 チ ヤ ン 80 96 (48) 26</p>	<p>あ 73 か つ た り</p> <p>あ 94 か つ た</p> <p>あ 88 か 91 り ま し た (54) 55</p> <p>あ 91 か り ま す</p> <p>あ 15 か 83 ら (8) う (52) (森)</p> <p>あ 26 か 30 め ま せ う (飛)</p> <p>あ 62 か 31 る</p> <p>明 37 か る く</p> <p>明 20 か る い 34</p>	<p>ア カ ッ タ リ</p> <p>ア ガ ッ タ</p> <p>ア カ リ マ シ タ</p> <p>ア カ リ マ ス</p> <p>オ ア カ リ ク タ サイ</p> <p>オ ア ガ リ</p> <p>ア カ ロ</p> <p>(ア カ ル</p> <p>ア カ メ マ シ ヨ</p> <p>ア ガ メ ル</p> <p>ア カ リ</p> <p>(ア カ ル ク</p> <p>(ア カ ル イ</p> <p>ア カ チ ヤ ン</p>	<p>あ か る (の む の 意) (動)</p> <p>あ か る (上) (動)</p> <p>あ か め る (動)</p> <p>あ か り (意)</p> <p>明 か る い (形)</p> <p>赤 ち や ん (名)</p>
---	-----------------------------------	---	---	---	---

あ
か

本文献は、この1ページ目の例で明らかなように、「ヨミカタ一」から「よみかた四」までのそれぞれにどのような語句が使われているかを分けて提示すると同時に提出語句を全体として掌握できる形式に仕立てている。そういう細やかな配慮から、例えば「あがる」で言えば、「あがらう」「あがります」などを別々の見出しに立てることにしたものと推測される。次に、「アクセント」の項目では、各語句のアクセントを示すと同時に鼻濁音を濁音と区別して表示している。

本文献は、国民学校の用語を調査した内容であるので、戦後は一度も取り上げられる機会がなかった。しかし、文献(13)『小学校に於ける言語の教育』に関して石黒修氏が指摘した問題点のすべてを克服した信頼すべき資料になっている。なお、この品詞別の調査は文献(18)「ヨミカタ一～四 総合語彙の品詞別調査」で取り上げられている。

文献(21) 基礎語（『日本語の姿』）

土居光知

改造社 昭和18(1943)年 6 月 6 日

A 5 判 はしがき 4 ページ 目次 1 ページ 本文449ページ

『日本語の姿』には8編の論文が収められている。ここでは、その6編目に収められている「基礎語」(299～337ページ)を取り上げる。「基礎語」は、次の体裁になっている。(鏡は省く)

一 日本語のむづかしさ	301～311ページ
二 基礎語の選択	311～317ページ
三 基礎語に対する批評	318～328ページ
四 基礎語表についての説明	329～332ページ
基礎日本語分類表	333～337ページ

以下、目次の項目に従って順に取り上げると、「一 日本語のむづかしさ」では、日本語が難解であることを指摘して、全体の前置きとしている。

「二 基礎語の選択」では、まず、使用度数の多い語を選択することの問題として、例えば「見る」という基礎語に対して「使用度数により選択さるべき語」として「拝見、おめにかゝる、お目にかかる、御覧、観覧、視く、望む、眺める、睨む」を採用しなければならなくなる問題点を指摘している。そして、「基礎語」は「知識を伝えることを目的とした文体に適当な語を集めた」と述べた上で、「私の選択のし方は基礎的な観念を体系的に考へ、それらをいひ表はす、一番普通な、そして意味がはつきりと確に定められてゐて、誤りの起らないやうな語をとること」と述べている。

基礎語は千百語を以つて、何事でもいひ表はし得ますが、之れは基礎語にとつて誇りとすべきことでもなく、またそれが基礎語の目的でもありません。基礎語の目的は国民学校の教育を受けたすべての日本人に理解されるやうな文体を以て知識を伝へ得る新らしい文体を作りあげることにあります。基礎語ばかりでいひ表すことが不自由な場合には百分の二三語の、基礎語でない、必要で適当な語を混ずることもよいと思ひます。(中略)基礎語は、その言葉通りに、知的な文体の基礎語であつて、新らしく人工的な言葉を作るものではありません。

次に、「三 基礎語に対する批評」では、まず、昭和8～9年に刊行された『基礎日本語』に対して出されている批判を3つに整理して紹介した上で、それら一つ一つに対する反論を詳しく述べている。ここでは、その批判だけを簡単に挙げておきたい。

- 1 基礎日本語は一種の人工語である。人工語はどんなにしても成功し得ない。
- 2 基礎日本語は、ベイシック・イングリッシュから思いついたもので、それに似せて作ったものであるから、国語の性質を破壊するものである。
- 3 基礎日本語は、話し言葉としては不自然で、不自由である。

次に、「四 基礎語表についての説明」の内容を、3つの項目に分けて取り上げてみよう。

- 1 私は千百語よりなる語をアイウエオの順序にした表と、観念的に分類した表とを作りましたが、こゝには分類表を示すことにしました。これらの語を選択する時には語の経済といふことも考へに入れてしました。例を取つてみますと、「からだ」は「^{たい}体」よりも使用度数の多い語でありませうが、ただ人の肉体を

意味するばかりでありますのに、「^{ない}体」は肉体、団体、液体、ガス体、文体、字体、死体、全体、国体など基礎語の範囲のうちでも多くの組合せ語ができます。(以下、省略)

- 2 基礎語を組み合わせた語は自然にその意味が了解されるやうな語であれば、それらもまた基礎語として使用することになりました。(引用者注；以下の「例」は抄出した。)

例 大、 大部、大部分、大地、大国、大休、大学、大砲
文、 文章、文体、文学、文語、文語体、論文、説明文

しかし、二語を合せて、全く異なる意味になる語は基礎語とはしないことにしました。

例 犬歯 (鋭い人の歯)、虫歯 (不健康な歯)、朝顔 (草の名) など

- 3 次の語は二語として勘定しました。

ひと — 人 ひ — 日

土居光知氏の基礎日本語の作成・精選の努力は、次のように整理することができる。

- A 『基礎日本語』初版 (昭和8年 文献(5)) 基礎語1,000語を提案している。第一表 (分類)、第二表 (アイウエオ順)、第三表 (A B C順) の3表を提示している。分類表では43項目に配分している。
- B 『国語純化と基本語』(昭和8年) 基礎語1,000語中の3語「スタンプ・チッキ・中央」を「ハガキ・預け・中心」に差し替える。本文献は「基礎語分類表」だけを掲げている。
- C 『基礎日本語』普及版 (昭和9年) 上記Bの差替えに加えて5語「鋤、鋤、ホテル、穢れ、細目」を「礼・堀り・生活・級・調子」に差し替え、合計8語の基礎日本語読本の正誤表を付けている。
- D 「基礎日本語の試み」(昭和16年 文献(16)) 基礎語1,085語を提案。Cの普及版から20数語を除去し、100語強を補充している。項目の差替えはないが、「地の表面」を「地」に、「関係を表はす語」を「関係語」に改めている。
- E 『日本語の姿』(昭和18年 文献(21)) 基礎語として1,100語を提唱している。また、これまでの43項目の分類項目を46項目に増加させ、意味の上で順序を入れ換えたりしている。Dで改めた「地」と「関係語」は、元の表現に戻っている。この46項目の領域設定では、「機械」と「工業」を「機械・工業」に、「状態」と「性質」を「状態・性質」にそれぞれまとめているので、新しく5項目を追加したことになる。まず、「食するもの」と「飲するもの」に「食事」を追加、「心」と「心の働き」に「感情」「感覚」を追加、そして、「肉体の働き」を「手の働き」「足の働き」「体の働き」の三つに分けたことである。なお、それとは別に「音楽」を「声」に改めた結果として「ラジオ」と「聞く」の基礎語を追加したが、この「聞く」はもともと「心のはたらき」に置かれていた語であるので、2度出てしまっている。

この「聞く」の重複については、玉村文郎氏が『語彙の研究と教育 (上)』(日本語教育指導参考書12 国立国語研究所 大蔵省印刷局 昭和59(1984)年9月)の中で次のように指摘している。

「聞く」は「聲」の欄と「心の働き」の欄の両方に提示されているので、表9では「聲」の欄の数値からこれを削除した。なお、合計が1,100語でないのは、「聞く」の重出を除いたためである。

文献(21)は、『土居光知著作集 第四巻』(岩波書店 昭和52(1977)年6月27日)に現代仮名遣いで採録されている。著者は、「はしがき」の中で文献(21)について、「これは日本語を学ぼうとする外人のために、基礎となるような一千語を選び、平がなを用い、あまり不自然でない、日本語で書いてみた、一つの見本である。」と記している。

土居光知氏の基礎日本語の一連の試みは、日本の学習基本語彙の研究に多大の影響を与えてきた。

文献(22) 児童読物の語彙調査（「児童読物の語彙調査を終つて」『日本語』第三巻第十号）

浅野鶴子

財団法人 日本語教育振興会 昭和18(1943)年10月 1 日

A 5 判 50～55ページ

『日本語』第2巻第11号（昭和17(1942)年11月1日）に、浅野鶴子氏の「基本語彙調査の方法 — 本会研究部の語彙調査について」が掲載され、翌年の第3巻第10号（昭和18(1943)年10月）には「児童読物の語彙調査を終つて」が掲載されている。

まず、「基本語彙調査の方法 — 本会研究部の語彙調査について」では「日本語教授の言語的方面の基準たらしめたいといふ意図に基」いて児童読物の語彙調査に取り組みはじめる経緯について述べている。

本会の調査は目下進行中で、まだ完成には至つてゐないが、次の様な計画である。第一次調査は児童の文字言語を対象とし、第二次は成人の文字言語を取扱ふ（音声言語及び活用語彙に就いては又別の計画による筈である。）第一次調査の材料は国民学校教科書より四万語、児童用読物より十一万語、合計十五万語である。十五万語中に表れた単語の種類、語形、使用頻度を調査する事を最初の目的とし、続いて、成句、表記法の調査に移る計画である。児童の文字言語といつても之は児童の理解する範囲の語彙といふ意味であつて、児童が意志表示に用ゐてゐる語彙の意味ではない。国民学校教科書は、国民科、理数科の教科書二十冊から各々二千語づゝ取つた。児童用読物は主として文部省推薦図書から選んだ次の五十五冊である。（引用者注：55冊の資料名（番号及び作者名と作品名）の引用は省略する。）

その翌年に発表された「児童読物の語彙調査を終つて」では、使用頻度15回以上の語の提示に力を割いてゐる。そこで、冒頭からの本文を引用しておきたい。

日本語教育振興会の研究部に於ては一昨年来児童読物の語彙調査を行つてゐたが此程第一次の調査を終了した。この調査の目的は現代標準語に用ゐられてゐる語彙、語形、語法を調査分類して、日本語教授の言語的方面の基準を定め、併せて基本語彙選定の参考とすることである。

本調査に使用した材料は国民学校教科書及び児童用読物で、教科書二十冊から四万語、児童読物五十五冊から十一万語、合計十五万語をとつたのである。児童読物は入学前の幼児に聞かせる童話集から六年生程度の科学的読物に至るまで主として文部省推薦図書を用ゐた。調査延語数は十五万であるが、分類の結果得た単位は一万二千五百六十八で、その中に地名、人名等固有名詞千二百五十語を含んでゐるから調査の対象となる語彙は僅かに一万一千三百十八単位といふことになる。（以下、省略）

この「児童読物の語彙調査を終つて」は、本文の意図を次のように説明する。

一万二千単位全部を掲げることは到底紙面が許さないのであるから、全体を通じて使用頻度十五回以上の語彙を次に示すことにする。

語の下に数字は頻度を示し、括弧の中の数字はその語の出た本の冊数であるから範囲を表すことになる。

七〇（三〇）は、七十五冊中の三十冊に七〇回使用されたことを意味する。

なお、引用の本文には「全体を通じて使用頻度十五回以上の語彙」とあるが、言語文化研究所の山下秀雄氏から「15回以上は誤りで75回以上のはずだ」という御教示をいただいた。確かに語彙表では最も少ない使用頻度が75回になっている。

参考までに、語彙表の最初からの20語を2段に分けて提示してみよう。

あひだ (間)	180(62)	～いく (補助動詞)	207(60)
あし (足)	81(31)	いち (一)	200(75)
あたま (頭)	98(44)	いちばん (一番)	86(39)
あと (後)	87(42)	いつ (何時)	82(38)
あの	117(44)	いふ (言ふ)	156(75)
ある (動詞)	1082(74)	いへ (家)	97(27)
～ある (補助動詞)	94(39)	いま (今)	200(59)
ある (或)	107(43)	ゐる (居る)	214(56)
いい (良い)	192(45)	～ゐる (補助動詞)	2182(74)
いく (行く)	306(64)	いれる (入れる)	90(40)

ところで、言語文化研究所研究部長であった上甲幹一氏は、この語彙表に「日本語最高頻度語彙」という名称を付与した。氏の著書『日本語教授の具体的研究』(旺文社 昭和23(1948)年3月30日)には、附表五に「日本語最高頻度語彙」として、浅野鶴子氏の論文を簡潔に要約した上で語彙表を転載している。

次に、加藤彰彦氏は文献(47)「日本語教育における基礎学習語」に、この「日本語最高頻度語彙」を資料として活用している。その解説は、次のようになっている。

財団法人日本語教育振興会で行なった、国民学校教科書および児童読み物の語い調査の結果の一部の報告である。調査の延べ語数 約15万語、異なり語数 12,568語 (内、固有名詞 1,250語)。この中で、使用頻度15回以上の語い210語が報告されたのであるが、音声言語を直接対象としたものでないの、「かれ(彼)、ず(助動詞)、ぞ(助詞)、わが(連体詞)」などがはいっている。その他の語は、全部台本と共通している。

ところで、日本語教育振興会では、児童読物の語彙調査に引き続いて、「成人読物の語彙調査」にも取り組もうとしていた。その計画は、浅野鶴子氏の最初の論文に記載されており、また、『日本語』第4巻第4号の「日本語教育振興会研究部事業報告」(主事 山口正)では、次のように述べられている。

日華辞典編纂 この辞典を作るための準備として創立当初から続けてゐる仕事に、語彙調査がある。十五万語の児童読物用語彙の調査については、浅野研究員の中間報告が既に本誌上に発表されてゐる。全体の成果は近く一本にして世に出したい。二十五万語の成人用読物語彙の調査も大分出来上がった。語彙調査と共に漢字の頻度も調査中である。

この延べ語数25万語のカードは緑あって、国立国語研究所が創立時に購入し、ほぼ50年間保管していた。そこで、戦前の日本語教育振興会につながる財団法人言語文化研究所が国立国語研究所から一時貸与を受けて、これらのカードの整理に取り組むことになった。これは、本報告書の作成を機縁としている。半世紀も前の語彙調査の作業がこのようなかたちで目の目を見ることになることには感慨深いものがある。

本文献は、日本語最高頻度語彙という名称でよく活用されている。そこで、更なる充足が期待される。

文献(23) 日本語基本語彙 幼年之部

阪本一郎

明治図書 昭和18(1943)年11月10日

B 6 判 序3ページ 凡例1ページ 目次2ページ 本文236ページ 跋3ページ

〔目次〕(序, 凡例, 目次, 跋は省略する)

一、序説

第一 基本語彙の研究 1ページ

一、基本語彙の意義 二、基本語彙の研究の概観 三、基本語彙の応用

第二 本調査の方針 14ページ

一、幼年基本語彙 二、調査の範囲 三、語彙の基本的価値 四、基本語彙表の種類

第三 本調査の経過 24ページ

一、資料の蒐集 二、語彙の蒐集 三、分類 四、整理

第四 語彙表の構成 27ページ

一、単語のとり方 二、語彙表の構造 三、語彙表の活用例 四、別表(複語尾, 助詞)

二、幼年基本語彙 37ページ

甲表 基本語彙表(基本的価値順五千語)

乙表 基本語彙表(五十音順五千語)

別表 基本語彙表(複語尾, 助詞)

本文献は、著者阪本一郎氏が8年の歳月をかけて作成した基本語彙表である。

まず、「序」の次に掲げられている「凡例」の「六」を除く本文を掲げておきたい。

一、本書は現に幼年児童読物に使用せられてゐる国語につき基本語彙を撰出し、国語の醇化並びに国語の世界化工作への基礎資料たらしめると共に、直接には少国民文化建設への一貢献とせんとするものである。

二、本調査に用いた読物の資料は十種百二十七冊、延べ語彙数百三十四万である。この中助詞・複語尾の五十八万八千を除き、七十五万余の延語彙数から一万四百種の単語が得られた。その中から基本語彙五千を撰んだのである。

三、単語の基本語彙としての価値は、その使用せられてゐる範囲と頻度とを経緯として定めた。

四、幼年基本語彙は、之を基本的価値の順に排列せる甲表と、五十音順に排列せる乙表とに掲げ、別に助詞と複語尾を別表とした。

五、序説は、基本語彙の意義、本調査の方針ならびに経過、および語彙表の構成を平易に解説せるものである。一とおりの之を読んでから幼年基本語彙表を活用せられんことを望む。

次に、本文献の基本語彙調査の方針は、およそ次のとおりである。

- 1 基本語彙を「読み言葉」だけから撰定する。即ち幼年児童の現に読んでゐる絵本や雑誌などに実際に用ひられてゐる語彙を調査して基本的なるものを撰定する。
- 2 基本語彙としての価値は主として頻度の原理による。即ち最も使用せられることの多い語を以て最も重要な語と見做し、使用せられることの少ない語ほどその価値の低いものと見做す。
- 3 幼年と称する程度を初等科三年以下とする。(以下、省略)

以上の要件を2つに整理しておきたい。

- (1) 本調査に用いた資料は、広く児童読物10種127冊を数える。
- (2) 語彙の基本的価値は、範囲と頻度の2条件からとらえられている。

次に、調査の方法として、次の4種を掲げて、具体的に解説を加えている。

- (1) まず範囲の広い語は少ない語よりも重視する。
- (2) 次に頻度の多い語は少ない語よりも重視する。
- (3) 範囲と頻度とによって価値の系列を造り、これを段階に切る。
- (4) 同一段階の中では範囲に拘はらず頻度のみによって各語の価値の順位を決定する。

そのようにして選定した語5,000語は、次の表のようにまとめられている。

段階	小段階	語 位	各範圍に於ける最低頻度								
			10	9	8	7	6	5	4	3	2
1	A	1— 500	243								
	B	501—1000	33	23	110						
2	A	1001—1500	59			59	60	11			
	B	1501—2000	21			11	9				
3	A	2001—2500						30	30		
	B	2501—3000						5	15		
4	A	3001—3500							15	15	
	B	3501—4000							4	9	
5	A	4001—4500								7 8	
	B	4501—5000								3 3	

なお、その表の1Aの500語は、100語ずつに分けられている。すなわち「1A3とあれば、その語は第一段階の前半第201位から第300位までの間に位することを示している。

次に、甲表は、幼年基本語彙5,000語を、その基本的価値の順、つまり、左の表の「語位」の順に配列したものである。そして、乙表は「五十音順」に配列した表である。

次に掲げる表は、甲表の1Bの最初の7語、乙表の最初の7語である。

甲表の例	B (第501—第1000位)		範囲	頻度	乙表の例	語 彙		段階	語位
	アカルイ	明・形容	9	241		ア	噫・感動	2B	1532
	トシ	歳・名	9	241		アア	噫呼・感動	1A1	168
	ニンギョウ	人形・名	9	241		アア	彼・副	5A	4197
	ノコル	残・自動	9	241		アイカワラズ	不相愛・句	5A	2295
	マンナカ	真中・名	10	239		アイサツ	挨拶・名	2A	1487
	サカナ	魚・名	9	239		アイスル	愛・他動	4A	3117
	ウゴク	動・自動	10	239		アイズ	合図・名	2B	1723

本文献は、絵本や読み物を中心に作成した信頼できる本格的な基本語彙として高く評価されるべきである。ところが、昭和18年刊行という時期の関係で、当時もその後も、活用されることがほとんどなかった。なお、昭和16年11月の日付のついた跋文は読む者の胸をうつ内容になっている。

文献(24) 児童の語彙と国語指導（長師附属国民学校叢書）

長野師範学校男子部附属国民学校教科研究会

信濃毎日新聞社出版部 昭和19(1944)年3月25日

A5判 序・目次5ページ 本文449ページ

〔目次〕（序、目次、及び第二章、第三章以外の節の見出しを略す）

第一章 国民科国語指導の特質	第一節 調査の目的	1ページ
第二章 児童語彙の調査	第二節 調査の方法	6ページ
第三章 児童語彙の考察	第三節 調査語彙の整理	20ページ
第一節 第一期、第二期、第三期における児童語彙	第二節 生活環境と児童語彙	
第三節 品詞別に見たる児童語彙	第四節 性別による児童語彙	第五節 時代と児童語彙
第六節 方言・訛言・幼児語	第七節 国民科国語教科書の語彙と児童語彙	
第四章 児童語彙と国語指導		101ページ
第五章 児童語彙の実際		136ページ

まず、全3段落構成の「序」の第2段落の本文の前半部を引用してみよう。

本書「児童の語彙と国語指導」も亦かゝる教育実践に生れたる一収穫である。収める所、国民科国語指導の特質を究め、国語教育の母胎である音声言語について、児童が如何なる語彙を如何に駆使してゐるかの実状を、当校男子部附属国民学校初等科第一学年、第三学年、第六学年児童男女各一名宛について、その全使用語を調査し、これを品詞別に分類し、尚名詞は各部門に分けて整理考察し、更に国民科国語の教科書についても同様に調査して、これと比較対照して考察し、国語指導上の諸問題の究明に及んでゐる。従来見らるゝ児童語彙の研究は理解語の調査が多く、又使用語の調査も多くは幼児或は初等科第一学年児童に限られてゐるのであるが、本書に於ては初等科第一学年、第三学年、第六学年児童の使用語に及び、更に国語教科書との比較対照をなしてゐるのであつて、かゝる研究は未だその例を見ざる所である。

次に、第二章第一節「調査の目的」では、児童語彙の調査目的について「児童使用語の現段階を知り、国語指導の基礎的地盤を獲得する」と述べた上で、次の七項目の問題を提起している。

- 一 児童は如何なる語彙を習得し、それを日常生活において如何に駆使してゐるか。
- 二 児童語彙の習得過程は如何なる方法を辿るものであるか。
- 三 児童各期の発達に即応して児童の語彙は如何に拡充せられ、如何に意味づけられていくものであるか。
- 四 性別による児童語彙の差異、関係。
- 五 時代の変遷によつて児童語彙は如何に変化するものであるか。その変化に及ぼす時代的条件は如何なるものであるか。
- 六 品詞別にみたる児童語彙とその関係及び活用形の使用について。
- 七 国語教科書の語彙と児童語彙は如何なる関係にあるか。

次に、第二章第二節「調査の方法」を簡単にまとめる形で紹介してみよう。

- ・調査児童 ― 初等科第1学年、第3学年、第6学年の男女各1名ずつを選定した。（第三学年の児童は第一学年の児童2名を2年後に再度調査したもので、調査期間は一年間である。）
- ・調査の方法 ― 「児童の日常生活において自由に駆使してゐる使用語を観察し捕捉しそのすべてを手帳

に記載し、これをカードに転載して品詞別に整理し五十音順に排列し」た。

なお、児童の使用語の採集にあたっては、次の3点に注意している。簡単にまとめて提示しておきたい。

- (1) 児童に気付かれないように工夫したこと。
- (2) 範囲を広くしたこと。学校生活だけに限定するのではなく、家庭と連絡をとり、家庭における使用語を捕捉することにした。そして、全生活にあらわれる語彙を採集することに努力した。
- (3) 文字言語として綴り方に使用されているものも採集し、又唱歌その他遊戯の際に歌うものも使用語として採集した。

次に、第三章第一節「第一期、第二期、第三期における児童語彙」では、第一学年、第三学年、第六学年の各児童の使用語彙を分類整理している。ここでは、固有名詞を除いた使用語彙の数量を、第二～第四表から引用してみよう。

	第1学年	第3学年	第6学年
男児	5,135	7,857	11,307
女児	5,081	7,674	11,028

この表から、第1学年の男女2名の児童の語彙量が5,000語を超えていること、同じ児童が2年後には更に2,500～2,700語の増加を見せていること、小学校6年生の時点で、11,000語を獲得していることが確かめられる。

次に、第五章「児童語彙の実際」で、児童の使用語彙を一覧表として掲げている。例として、形容詞の最初の部分を引用しておきたい。

初一	初三	初六	国語教科書	提出頻数	<ul style="list-style-type: none"> ・△印は女兒のみの使用語、○印は男児のみの使用語を示す。 ・提出頻度は、ヨミカタから初等科国語二までに用いられた頻数を示す。 ・例えば、「愛らしい」は初六で初めて使われたこと、教科書に出ていないことがこの表からわかる。
青い	青い 青白い 青黒い	愛らしい 青い 青白い 青黒い	アライ(ヨミカタ-27) 青白い(初国38)	11	
赤い	赤い	赤い	アカイ(ヨミカタ-6)	17	
明かるい	明るい	明るい △あくどい	アカルイ(ヨミカタ-52) あげたい(初国二80)	18	

本文献は、第1に、文献(1)『児童語彙の研究』に始まる新入学児童の理解語彙の調査の展開としてとらえられる、第2に、小学校3年、6年の児童の使用語彙の調査を行っている、第3に、国語教科書の用語を対比的に示しているという特色をもつので、後世に残る文献となっている。

文献(25) 日本語基本語彙

国語協会（代表者 石黒修）

国語協会 昭和19(1944)年3月31日

A5判 まえがき1ページ 凡例1ページ 語彙表45ページ 見出し1ページ

〔目次〕

見出し

五十音順基本語彙

1～16ページ

品詞別基本語彙

17～45ページ

まず、本文献の「まえがき」の全文を引用しておきたい。（なお、この「仮名遣は「凡例」の「六」に記されているように、臨時国語調査会発表の仮名遣改訂案」によって記されている。）

さきに本会理事下瀬謙太郎氏を委員長に、石黒修、岩倉具実、加茂正一、熊澤龍、三好七郎、湯山清の六氏を委員として、基本語彙を選び、一応報告されたのであるが、これには尚多少整理を加える点があるため、今回理事保科を委員長に、細井房夫、井之口有一、福田武雄の三氏を委員として、その事に当った。本基本語彙はベーシックの立場から選んだものでなく、南方圏における日本語教授上、その基本たるべきものを目標としたのである。

これを整理するに当り、便宜上第一部と第二部とに分け、第一部では選ばれた語彙を五十音順に配列し、第二部では右語彙を品詞別に配列した。品詞により、使用上注意すべき事柄のあるものは、その品詞の終りに、これに関する説明を掲げ、または日本語の会話に必要な注意を書き添えた。

日常普通に用いられる抽象的な漢語で、これに代るべき和語のあるものは、なるべく避けて採らなかった。また他の語と結びついていろいろの新しい熟語を作ることがあるが、それらの熟語中きわめて普通なものを選び、その他は省いた。しかし、この基本語彙を自由に使いこなすためには、各語彙の用法や熟語の作り方等について、特に説明した辞書を編纂することが必要であろう。すくなくとも語彙の用例を二三掲げて置くことが、これを利用する人のためには便利である。

日本語の会話では、敬語の用法がもっとも大切であるから、その用い方についても、必要な注意を書き添えた。

昭和十八年十月

委員長 保科孝一

次に、「凡例」の全文を引用しておきたい。

- 一、本表は日本語を教え、または学ぶときに、その基本となるものを選んだものである。
- 二、日本語を教え、または学ぶ便宜上、本表を二部に分け、第一部は基本の言葉を五十音順に、第二部はこれを品詞別に並べた。
- 三、数の数え方やその使い方には、いろいろのきまりがあるから、これを数詞の終りで説明し、なおその他の言葉を使うときに必要な注意をそれぞれ各品詞の終りに載せて置いた。
- 四、あいさつの言葉を参考として、第二部の終りに添えた。
- 五、仮名書きのために語意の不明なものには、特に漢字を注し、感動詞、助動詞および助詞には、【感】【助動】【助】をその言葉の下に書き加えた。
- 六、本表の仮名遣は臨時国語調査会発表の仮名遣改定案によった。

次に、語彙表は、「五十音順基本語彙」、「品詞別基本語彙」の2部構成になっている。その「五十音順基本語彙」として掲げられた語句は引用者が慎重に数えてみると、1,519語である。これは、次に例示するように、語を五十音順に配列するだけの体裁になっている。

【ア】	ああ【感】	あいさつ	あいだ	あいて	あう（会う）
あお	あおい	あか（赤）	あかい	あかり	あがる（上る）
あかるい	あき（秋）	あく（開く）	あける（明ける）	あける（開ける）	

「品詞別基本語彙」は、それぞれの語を名詞以下の各品詞に整理している。その名詞に続く「数詞」の後ろには「ちゅうい」が掲げられている。この「ちゅうい」は、「日本語ではもののかずをあらわす」表し方について全体を14項目に分けて具体的に示すものである。

ところで、「品詞別基本語彙」の語数は、「五十音順基本語彙」の語数よりはやや多くなりそうである。例えば「感動詞」に掲げられた9語の中の「あら」は、「五十音順基本語彙」には掲げられていない。また、品詞の最後に掲げられている「挨拶語」16語は、「五十音順基本語彙」には掲げられていない。

以下、参考までに、「副詞」として掲げられた語句のすべてを提示順に紹介しておきたい。

あさって	おもに	しっかり	ただ	なんども	みな[みんな]
あした	おわりに	じゅうぶん	たとえば	にぎやかに	もう
あまり[あんまり]	かえって	じょうずに	たてに	ねっしんに	もし
あんなに	きっと	じょうぶに	たびたび	はじめに	もっと
いくら	きのう	しんせつに	だんだん	はっきり	やっと
いちばん	きょう	すぐに	ちょうど	ひだりに	やはり[やっぱり]
いつ	きよねん	すこし	ちょっと	ほんとうに	やわらかに
いっしょうけんめい	けさ	ぜひ	つまり	まいにち	ゆうがた
いっしょに	けっして	せんげつ	ていねいに	まえに	ゆうべ
いっそう	こう（斯）	そう（然）	どう（何）	まじめに	ように（様）
いつも	ことし	そまつに	ときどき	まず	よこに
いま	こまかに	そんなに	どうぞ	まだ	よほど
いよいよ	こんげつ	だいじに	どんなに	まっかに	らいげつ
いろいろ	こんな	たいてい	なお	まっくろに	らいねん
うえに	さかんに	たいへん	なかなか	まっさおに	りっぱに
うしろに	さきほど	たいらに	なぜ	まっしろに	
おだやかに	しずかに	たくさん	ななめに	まっすぐに	
おととい	したに	たしかに	なるべく	みぎに	

本文献は、同じ年に国際文化振興会から刊行された同じ書名の文献(26)の陰にかくれてあまり知られていないが、この副詞の語彙選択からもおよそわかるように今後も活用する価値を有している。

文献(26) 日本語基本語彙

岡本禹一

国際文化振興会 昭和19(1944)年6月5日

B5判 そへ書き等29ページ 本文597ページ

〔目次〕

基本語彙選定の方針	5ページ
そへ書き	9ページ
語彙調査の目的 語彙調査の価値 語彙調査の方法 本調査に採用した方法 本調査の経過 本調査の関係者 参考対照書目	
日本語基本語彙	(1)ページ
目次 解説について 解説に使用の略語	
解説	1ページ
附録 ― 助数詞 数詞 諸等数 挨拶用語 基本語彙漢字表	483ページ
索引	497ページ

「基本語彙選定の方針」は、まずは8項目にまとめられている。そこに記された方針を3項目に整理して掲げてみよう。

1. 現代日本語への手引としての基本語彙であるから、整理、改善による純化といふ国語運動の立場にも傾かず、ありのままの現在の日常普通の日本語の基本語彙を採ることに努めた。
2. 基本語彙をオグデンの“Basic English”のやうに一定数に限られたものにするか、それとも学習上の便宜として、第一次の基礎になる語彙の標準とするかについては、後者に従った。
3. 選定語彙はその中心的、或は代表的な意味により、派生的な意味は派生語、合成語、実例によつて説明して、それを採ることにした。

次に、「そへ書き」には、語の頻度と範囲を調べる方法として、主観（連想）、客観（数量、系統）、経験の3方法があるとし、その第3、つまり主観と客観を併用する経験的方法によることが述べられている。その経験的方法は具体的には、次の5つに細分されている。

- ア 選定した辞典で候補語彙を予選する。
- イ 一覧表に作成し検討する。
- ウ 参考資料と比較し吟味する。
- エ 採用語彙を使って要不要を検討する。
- オ 同意語、反意語など語彙の体系面から過不足を調査する。

次に「解説」から、その形式を見るために「あかい」「あかり」の2語を引用しておこう。なお、この実例に用いられている記号等についての説明を先にしておきたい。

（活用）は、本会編纂の「基本文典」によっていて、形容詞、動詞ともにⅠ～Ⅴの形。

（X）は熟語、慣用語的なものを示す。

（成）は接辞、結合による造語などを示す。

【参】は「見出語の意味規定に対する同意語、反意語、類語、参考語など」を示す。

あかい 【アカイ】(赤い) 形
 (活用) I 赤から, II 赤く, III 赤い, IV 赤けれ, V 赤かつ (た)
 赤い花, 空が赤い。
 赤くする, 赤くなる。
 (X) 顔を赤くする, 顔が赤くなる。
 (成) 赤, 赤み, 赤さ, 薄赤, 赤靴, 赤黒い。
 【参】 色; 青い, 黄いろい, 白い, 黒い, 緑。

次に, 「附録」としては, 「助数詞」「数詞」「諸等数」「月の名称」「曜日の名称」「挨拶のことば」「基本語彙漢字表」が掲げられている。なお, 「諸等数」は「長さの単位」「重さの単位」「容積の単位」「時の単位」「貨幣の単位」の総称である。

次に, 本書の索引には, 約8,400語が収められているが, 造語などが含まれているので, 見出しには, およそ2,000語が取り上げられている。文献(81)『日本語教育基本語彙七種比較対照表』の「はしがき」には「収録語彙2,012語」と数え上げられているが, 本文献にはそういう語数についての資料は掲げられていない。今後は, 基本語辞典としての価値を詳しく調べる必要がある。

ここで, 五十音順に配列されている「調査語彙索引」の一部を引用してみよう。

ああ〔感〕	アイロン	あき (空き)	
ああ〔代〕	あか (赤)	○あきらか (明らか)	3
○あい (愛)	○赤い (赤い)	○あきらめる	3
あいこく (愛国)	○あかり (明り)	○あきる (飽きる)	3
○あいさつ (挨拶)	あがり (上り)	あきれる	
あいさつする (挨拶する)	○あがる (上がる)	○あく (開く, 空く)	4
あいする (愛する)	○あかるい (明るい)	あく (倦く, 飽く)	
○あいにく	あかんぼ (赤ん坊)	あくしゅ (握手)	
あいらしい (愛らしい)	○秋 (秋)	あくしゅする (握手する)	

これは, 「調査語彙索引」の最初の27語である。○印は見出しに付けられている。後の数字は, その語の出ている本文のページである。

なお, 編者の手元には, 本文献編集時に使われた資料『基本語彙解説第3次試案』全5冊(「17-1-27」の日付け)がある。これは, 文献(26)の編集委員の一人であった吉田澄夫氏の書き込みをもつ資料で, 5人の委員(石黒修, 佐藤孝, 吉田澄夫, 松宮一也, 湯山清の各氏)が見出しをほぼ均等に分担して意味や用法を提案し会議で熱心に検討し合った過程がよく伝わってくる内容になっている。

本文献は, 同じ書名の文献(25)『日本語基本語彙』と違って現在でもよく活用されている。

文献(27) 教科書用語集 小学校第一学年の部 (草案)

文部省国語課校関係

昭和23(1948)年 5 月

A 5 判 袋綴じ 全72丁 (謄写印刷)

まず、本文献の体裁を説明しておきたい。A 4 判の質の悪い用紙 (藁半紙) に謄写で印刷した資料で、表紙の用紙は、何かの「答案用紙」を流用したもので、表題等は万年筆による手書きである。

〔構成〕

はしがき	1 丁
用語集	67 丁
見出し語による語数調査	1 丁
漢字一覧	3 丁

本文献の全容をつかむために、「はしがき」を全文引用しておきたい。(「4」の「尚書き」だけは省略)

- この表は文部省発行の小学校の教科書「こくご 一」(昭和22年3月発行)「こくご 二」(昭和22年10月)「さんすう」(昭和22年3月)「一ねんせいのおんがく」(昭和22年5月)の用語を調査し、すべての自立語をあげて各巻ごとにその「ひんど」を示したものである。但し、もくろくはとらない、算用数字、ローマ字だけの単語はとらない、これらに助数詞や数詞などのついた単語はとる、「おんがく」の譜の部分とはとらない。
- ことばの採り方については「単語」を単位とし、単語の認定については、下記の諸点を除いてはおおむね「中等文法」の所説によっている。
 - 活用する語は各活用形をそれぞれ一語とみなす。
 - 用言に助動詞の附属するものは、そのついたもの全体を一語とする。「の」をはきんで「だ」「です」が用言につく場合も同じ。例 “行くのだ” “あるでしょう”
 - 助詞の「て」「ても」「たり」「ば」は用言につけて一語とする。
 - 補助用言の「なさる」は〔B〕と同様の扱いとする。
 - 「ようだ」「そうだ (伝聞)」は助動詞とせず、「よう」「そう」を名詞として採る。
 - 「れる」「られる」「せる」「させる」のついたものは、ついたもの全体が一つの別の動詞となる。たとえば、“打たない” “打ちません” “打てば” は、基本形「打つ」の変化であり、“打たれる” “打たれない” “打たせません” “打たせて” は、それぞれ基本形「打たれる」「打たせる」の変化である。
- この表は大体五十音順に並べてあるが、時に便宜に従ったところもある。
- 採録した語は、かなだけで書かれたものと漢字を用いているものとにわけて、それぞれ「かながき」の欄と「漢字」の欄とに区別してあげた。この場合、活用する語はまず基本形 (用言の終止形) を掲げ、その次におのおの活用形の実際を、一字右にずらしてあげてある。見出し語はこの活用語の基本形と、その他の語とをあげた。活用語以外の単語も、接尾語などがつき、品詞も変わらず、いみも著しい変化をきたさぬものは、基本の語だけを見出し語とした。たとえば、“まさお” “まさおさんたち” は「マサオ」の見出し語の下に、“一つ” “一つずつ” は“ヒトツ”の見出し語の下にある。番号は見出し語につけてある。常識的な語の数は、この番号によればよいと考えられる。CIEに報告する必要上、すべての語について、そのよみ方を、ローマ字で示し、その表記にヘボン式を用いた。

次に、A 4 判の用紙に合計42行分の欄を用意し、先頭の欄には事項を掲げて、以下の41行にはそれぞれの用語を記入している。そして、印刷が少しずれた場合でも、表側に用語を20語掲げられるように折ってある。

次に、本表の「ウ」の最初から14行分を引用しておきたい。

ローマ字がき	番号	見出し語	かながき	漢字	ひ ん ど				
					こくご (一)	こくご (二)	さんすう (一)	おんがく (一)	計
ue	1	ウエ	うえ	上	4		1	3	8
ue						5			5
ueki-bachi	2	ウエキバチ	うえきばち				1		1
ukaberu	3	ウカベル	うかべる						
ukabetai			うかべたい		1				1
uguisu san	4	ウグイスサン	うぐいすさん			3			3
uketoru	5	ウケトル	うけとる						
uketorimasu			うけとります			1			1
ukeru	6	ウケル	うける						
uke			うけ			1			1
ukete			うけて			1		1	2
ukemasho			うけましょう					1	1
ugokasu	7	ウゴカス	うごかす						
ugokasu			うごかす			2	1		3

次に、「見出し語による語数調査」の合計数だけを引用しておきたい。なお、合計欄の1,281語が、本文献の異なりを表す。「こくご (一)」以下の語数は、教科書ごとの語数を表す。

こくご (一)	こくご (二)	さんすう (一)	おんがく (一)	合計
521	620	403	300	1281

なお、上掲の「見出し語による語数調査」は、単語の提出をていねいに数えた表からの引用であるが、単語の認定の仕方に問題があるので、他の資料と並べて論じることができない。

本文献は、戦後直後の日本の学校教育の実態を示す資料ということができる。ローマ字による表記を最初に掲げているのは、CIE (Civil Information and Education Section の略。GHQ に置かれた民間情報教育局。近年は CI&E と称する) への提出用として作成したことを示している。なお、単語の認定の仕方などに、そうした「指導」があったのかどうかはまだ明確でない。終戦直後の教科書編集上の事情は伝わってくるが、語彙表としてどういう価値があるのかについてもまだ十分にはつかめていない。

本文献については、文献(33)『現代語の語彙調査 婦人雑誌の用語』に指摘がある。

文献(28) 低学年向け基本語い (『言語教育と言語教材』新国語教育大系(5))

興水実・沖山光 (東京教育大学内新国語教育学会編)

金子書房 昭和25(1950)年9月15日

A 6判 276ページ

〔目次〕(細目は省略)

前編 言語教育と言語教材の理論 (興水実)	3ページ
第一～六章 (各章の見出しは省略)	
後編 言語教育と言語教材の実例 (沖山光)	49ページ
第一～十章 (各章の見出しは省略)	

本文献は、目次に示すように興水実氏が前編、沖山光氏が後編の執筆を分担している。沖山光氏は、『国語教育研究大辞典』(国語教育研究所編 明治図書 平成3(1991)年)には、「昭和二一年文部省入省。石森延男監修官を助け、戦後の国定国語科教科書『おはなをかざるみんないいこ読本』の編集に尽力。以来、教科調査官として、国語科学習指導要領同指導書の作成をはじめ、各種学力調査の実施、～(中略)～戦後国語教育の基盤を確立した。」などと紹介されている。

まず、本文献の「まえがき」を引用しておきたい。

本書は、「新国語教育大系」の一冊として、言語教材の問題について、興水が理論的な面、沖山が実際の面を受持つということでお引受けしたものである。当時、言語教材を中心とした詩教材・物語教材・随筆教材・劇教材という教材分類原理が国語教育の中心問題であったから、われわれへの執筆割り当ても、主としてこの線に沿ってなされたものであるらしい。けれども、その後国語学習指導の中心問題が単元学習の方向に移ろうとしていることは、すでに周知のことであろう。本書の執筆にあたっては、そうした志向も含めて、言語教材の問題を通して、新しい時代における言語教育のあるべき姿を明らかにしようと申し合わせた。まず沖山が「後編」の執筆をはじめて、昭和二十四年八月脱稿、興水はそれに目を通した上で「前編」を書き、こうして出来上がった結果に基づいて、「言語教育と言語教材」という表題をつけた。

昭和二十四年十二月五日

国立国語研究所 興水 実
文部省初等教育課 沖山 光

さて、後編の各章の見出しは、「一 考える人間」「二 正しい目あて」「三 ことばのはたらき」というように、戦後の新しい国語教育の息吹を感じさせる新鮮な表現がとられている。

その続きの「七 いいにくいことば」の結び近くに、「基本文型」の説明に続いて「低学年向けの基本語い」が提示されている。まず、目次に掲げられていて、本文にはない「七」の細目を引用してみよう。(下線は引用者が引いたものである。)

七 いいにくいことば — 真実のことば —

生きたことば (中等国語 一) — ことばの背後にあるもの — 新しい出発 (国語 五の中) — 明確な判断力 — ロダンの遺言 (高等国語 一の下) — 自分みずからの目でみる — 自分のことばで — ロゴス問題 — 言語は文化活動 — 語り聞く関係 — 世界をつなぐもの (中等国語の一) — 人間の力の根源 — 基本文型 — 基本語い — 国語学習の目標と現場と教材

この下線部の「基本語い」の本文を全文引用しておきたい。

さらに、「基本文型」と同時に、「基本語い」の問題を考えなければならない。この問題については、土居光知氏の「基礎日本語」を検討されるがいい。この書は、その後改造社から出版された同氏の「日本語の姿」の中にも再録されているから、それについて見られるのもいいと思う。そのほか、垣内松三氏のもの、阪本一郎氏のものなども、その研究の前半が発表されている。いずれも戦前の著書である。これらのものを参照しながら、現行の国定教科書とも連絡して、低学年向けに、約千二百語、わたくしの選定したものを参考に掲げておきたい。これだけの語いがあれば、まず低学年向けの読みものは書けるということを目やすとして、低学年の読みもの、会話など約五六千語の中から再三吟味してみたものであるが、完全とはいえない。助詞、特殊な固有名詞などは省略してある。

この本文に引き続いて、1,142語の低学年向けの基本語彙がほぼ五十音順に示されている。「あ」の最初からの16語を掲げてみよう。なお、表の枠組みは、引用者が作成したものである。

本書の「基本語い」の提示	引用者の加えた同音異義語あるいは多義語の意味等
1 アイスクリーム	
2 あいさつ	
3 あう (逢う, 正しい)	「逢う」「正しい」以外に「合う」「会う」などがある。
4 あおぐ	「仰ぐ」「扇ぐ」のどちらであるか。
5 あおい	「青い (青)」(形容詞「青い」を見出しに出している。)
6 あか	「赤 (赤い)」(名詞「赤」を見出しに出している。)
7 あがる (上る)	「上にすすむ, 食べる, 上気する」などのどれなのか。
8 あかるい	
9 あかちゃん	
10 あかり	
11 あき (秋)	
12 あきる	
13 あきらめる	
14 あく (開く)	悪 明く 空く
15 あけがた	
16 あける	明ける 開ける 空ける

この引用からおおよそ推測できるように、同音異義語の判断などに甘さが見られる。また「あおい」と「あか」のように、語の認定・提示の仕方にも問題がなくはない。この一覧表は、そういう初歩的な誤りの問題を到る所に持ちながら、しかし、昭和24年という世情不安定な時期に作成されたことを考慮に入れると、新しい提案として受け入れることができる。

本文献が当時、どのように活用されたかは明確でないが、低学年の読み物などに使用する基礎的な資料として作成された意味は小さくない。

文献(29) 富山市児童言語調査

富山市教育委員会

昭和25(1950)年12月～昭和31(1956)年4月

A 5 判 全 8 冊 (「手引」だけは B 5 判)

全 8 冊の書名、体裁、発行年月は、次のとおりである。

昭和25年12月	富山市学童言語調査の手引	全31ページ。
昭和26年3月	富山市児童言語調査 別 集 (各科指導語彙編)	
昭和26年5月	富山市児童言語調査 第1集 (形容詞篇)	
昭和26年10月	富山市児童言語調査 第2集 (代名詞 連体詞 助詞 接続詞篇)	
昭和28年1月	富山市児童言語調査 第3集 (助動詞 形容動詞篇)	
昭和29年3月	富山市児童言語調査 第4集 (副詞・感動詞篇) (ママ)	
昭和30年3月	富山市児童言語調査 第5集 (動詞篇)	
昭和31年4月	富山市児童言語調査 第6集 (名詞篇)	

まず、「富山市学童言語調査の手引」から本調査の意図及び方法を表す「はしがき」の主要な本文と「調査要領」の本文を引用してみよう。なお、執筆は、富山市教育委員会教育長山村潔氏である。

新教育旧教育を問わず、或は躰の問題と言い、或は学力低下の問題と言い、生活指導の全領域にわたつて、言語指導と結びつけて考えられねばならないものが非常に多いのであります。

その言語指導に関して、児童の生活中最も広い場を持つ話し方の実態調査が、読書力や書字力、作文の能力調査にくらべて、ほとんど行われないう実情は、全くその困難性によるものでありましょう。

しかるに富山市小学校が、この重要な問題をあえて取り上げたのは、児童の実生活から一語一語を克明に検討し、それを哀惜陶冶することにより、文化的な富山市民を直接に目標としたものであると考えられて、この人間教育に対する画竜点睛的な試みに対し、心から敬意を表するものであります。

次に 「調査要領」全18項目の前半から7項目を引用しておきたい。

- 一 この調査は、富山市学童の言語生活の実態を調査して、言語指導に資せんとするものである。
- 一 言語生活の実態は、いわゆる方言訛語だけでなく、標準語と考えられているものと同じいものをも調べなければならないが、この調査は、前者を主として行う。
- 一 言語の調査は、語彙、語法、音韻について行う。
- 一 年齢や生活経験のいかんによつて、使用する言語にちがいがあ、例えば、「はちはん」「がかえがある」というような言葉は、児童の語彙にはない。方言語彙が、学年的にどのようにちがうかをも明らかにしたい。
- 一 児童の生きている言葉をとらえるには、児童の生活のあらゆる時と場を、客観的に綿密に観察する事が必要である。使用頻度の多いもの、少ないものを調べることは、言語指導において大切なことである。
- 一 富山市以外の地で育つた児童の言葉を調べることは、この調査では意味がない。
- 一 話し言葉から方言をもとめるために、児童の生活経験を考えて、天文、地理、動物、植物、人倫、肢体、住居、飲食、服飾、生業、人事、年中行事におけるいろいろの標語を予想しておいたり、名詞、代名詞、数詞、連体詞、副詞、形容詞、形容動詞、動詞、助動詞、助詞、接続詞、感動詞等の品詞別に探がす方法を考えたり、使用教科書の新出語彙、語法に照合してみたりされることは、遺漏を防ぐ方法と

してよいことである。

この趣旨を受けて、第一集以下では、次に例示するように、各品詞ごとに方言語彙を提示している。ただ、その提示の方式は、品詞によっていくらかの違いがある。例えば、第三集「助動詞 形容動詞篇」では、次のような形で、それぞれの語が集められている。

No.	基本語彙	標準語彙	方言訛語	備考
93	B 0.11	じょうずだ	(うまい) ○じょうじだ	あんたの歌い方じょうじだ
94		じょうとうだ	○じょうとうはくらいだ	このシャッポじょうとうはくらいだ
95		じょうひんだ		

この表の「基本語彙」は、文献(19)の『幼児の言語発達』所載のものである。Aは第100位までの語群、Bは第500番までの語群、Cはそれ以下1,500番までの語群である。0.11は、その「使用回数を人数で除した指数」である。次の「標準語彙」は昭和26年度に富山市で使用されていた国語教科書等に使用されている用語を中心としている。

次に、第1集から第6集までに登録されている見出し語数は、次に通りである。

冊子	第 1 集	第 2 集				第 3 集		第 4 集		第 5 集	第 6 集	合計
品詞	形容詞	代名詞	連体詞	助詞	接統詞	助動詞	形容動詞	副詞	感動詞	動詞	名詞	
語数	267	51	32	72	49	29	263	349	20	318	806	2,256

次に、「別集（各科指導語彙編）」では、社会科、算数科、理科、音楽科、図工科、体育科、家庭科、習字の8教科の各科指導語彙を選定して、調査することが述べられている。その調査では、「その科において、どうしても指導しなければならない語彙、指導した方がよいと思われる語彙、それを使用して生徒を教育した方が都合がいいと思われる語彙」を選定している。その結果、一覧表では、各学年の各科の語数も提示されているが、ここでは、その全体の語数だけを引用しておきたい。

科	社会	算数	理科	音楽	図工	体育	家庭	習字	計
用語数	932	546	411	230	215	301	92	101	2,828

例えば、第一学年の理科以下の教科の用語を、少しずつ漢字仮名交じりの表記で提示してみよう。

(理科) 葉 花 根 おたまじゃくし 苗 芽 天の川 押し花 押し葉 赤チンキ 磁石
 (音楽科) 音譜 二拍子 楽器 大太鼓 小太鼓 カスタネット ミハルス タンバリン シンバル
 (図工科) 作る 折る 飾る 描く 切る ちぎる 並べる 色 赤 黄 青 白 黒 灰色 黄緑
 (体育科) 前にならえ 休め 気をつけ 右向き 左向き からかい鬼 からかう 中側 外側
 (家庭科) 縄ない 御飯の支度 蕨打ち 筵 はたき ちりとり 反故 布巾 幼児 乳児 針 糸
 (習字) 筆 墨 硯 紙 硯箱 平仮名 七夕 書き初め

本文献は、①小学校の学習すべき専門用語が教科ごとに集められている、②富山地方の子供の使用する方言語彙が幅広く集められているという特徴をもっている。

文献(30) 小学校用 新しい国語 語い調査表

東京書籍編集部第一編集課

昭和26(1951)年ごろ作成(国立国語研究所受領印 27.1.30)

B 5 判 355ページ(他に 目次 1 ページ 後記 1 ページ)(謄写印刷)

この文献としては、国立国語研究所の図書館に、上掲昭和26年度用以外に、次の3冊が収蔵されている。

- ・小学校用『改定 新しい国語』語い使用度数表 昭和28年度用(B 5 判 323ページ)
- ・小学校用『新編 新しい国語』語い使用度数表 昭和31年度用(B 5 判 394ページ)
- ・小学校用『新編 新しい国語』語い使用度数表 昭和32年度用(B 5 判 392ページ)

〔目次〕(ここでは完成した構成をもつ昭和32年度用を提示する。「後記」を省略)

目次	2～3 ページ
「新編 新しい国語」語い使用度数表について	4～6 ページ
「新編 新しい国語」語い数一覧	6 ページ
「新編 新しい国語」品詞別語い数一覧	7 ページ
I 本 表	1～312ページ
II 別 表 1 擬音語 2 固有名詞	313～356ページ
付 録(「まとめ」における新出語い一覧表)	357～392ページ

昭和26年度用の「目次」は、[あ] から [わ] までのページ数を提示しているだけであるが、昭和28年度用からは「凡例」が置かれている。昭和31年度用からは、本表として五十音順表を掲げると同時に、擬音語、固有名詞を別表として別に整理していることが目次に示される。目次の形式は昭和31年度用と32年度用は同一である。ただ、昭和32年度用は、目次の次に置かれているいわゆる凡例が詳細になっている。そういう次第で、ここでは、4冊の中で最もよく整備されている昭和32年度用の目次を引用したのである。

次に、同じ昭和32年度用の前書きである「『新編 新しい国語』語い使用度数表について」の前半部を引用しておきたい。

★ この語い使用度数表は東京書籍発行昭和32年度小学校用国語教科書「新編 新しい国語」六学年十三冊(そのうち、入門書1年(1)を省く)の本文の語いの使用度数を各巻別に表示したものである。

★ 語いは自立語のみを取り上げ、助動詞・助詞のような付属語は省いた。

「I 本表」は教科書本文の自立語(擬音語・固有名詞を省く)の使用度数を示したものである。

「II 別表」では「本表」で除外した本文中の擬音語・固有名詞の使用度数を示している。

なお、「付録」として、本文以外(各教材の終わりに付された「まとめ」)の語いについて、「本文より早く提出された語い」および「本文に提出されなかった語い」の初出ページの一覧表を、この「語い使用度数表」の巻末に加えた。

★ 語いの排列は五十音順によった。

同音異義の語の排列は大体において教科書に初めて提出された順序に従った。

形容動詞は語幹の形で排列の順序を決めた。

接頭語及び接尾語のついた語いも一つの語いとして数えている。

語いの表記は教科書本文中に記載された最終の表記で記してある。

次に、昭和26年度用から昭和32年度用までの4冊の「語い使用度数表」に掲載された各国語教科書の用語の使用度数を整理して提示したい。

国語教科書	新出語彙	備 考
昭和26年度用	7,606	助詞・助動詞は語いの範囲から除外した
昭和28年度用	8,923	固有名詞、擬音語、慣用句を含む
昭和31年度用	10,599	自立語一般は8,387語
昭和32年度用	10,623	自立語一般は8,417語

この一覧表の「備考」の記述の仕方には違いが見られるが、それでも、これら新出語彙がほぼ同じ見方で計測されていることが導かれる。この新出語彙の増加から、国語教科書が次第に分量的に分厚くなっていることが導かれる。

次に、昭和26年度用から、「あの部1」の最初の部分を引用してみよう。

語い	品詞	初出ページ	学年別ひん度数													全学年合計
			1上	1中	1下	2上	2下	3上	3下	4上	4下	5上	5下	6上	6下	
あ	感	48		1	0	1	3	0	1	2	4	5	0	0	0	19
ああ	感	60			1	0	2	2	2	4	6	7	3	1	13	41
ああ(する)	副	94									1	1	0	1	2	5
あああ	感	62										1	0	0	0	1
アーク燈	名	110										2	0	0	0	2
愛	名	145													7	7
あい色	名	93													1	1
相変わず	副	62							1	1	0	1	0	1	0	4
あいさつ	名	46				2	2	1	1	3	1	1	0	1	0	12
あいさつし合う	動	47										1	0	0	0	1
愛し合う	動	145													1	1
新出語い総計			10	216	435	564	444	497	378	704	726	808	886	1074	864	7606

この一覧表の形式は、昭和28年度用では、「漢字初出」の欄を付加、昭和31・32年度用ではそれを「最終表記」に改めるという変更が見られるだけである。

この表の1上の10語は「おかあさん、おとうさん、お話、おはよう、さよなら、しろ(犬の名)、せんせい、ただいま、友だち、はるおさん」である。また、全学年合計で100を超える語は80語を数える。

本文献は、国語教科書の用語調査を本格的に行った資料として現在でも大きな意義を有している。国語教科書の用語調査はこれまでに何度も行われてきているが、本文献のように精密に用語調査を行い、その成果を精緻に報告した資料は、本文献が初めてである。ただ、その後、学習基本語彙の研究や語彙指導などに生かされていないのが残念である。

文献(31) 語彙調査 — 現代新聞用語の一例 — (国立国語研究所資料集 2)

国立国語研究所

秀英出版 昭和27(1952)年 3 月

A 5 判 104ページ

〔目次〕(各見出しは「目次」からでなく、それぞれの題目を用いた。)

刊行のことば	1 ページ
はじめに	2 ページ
調査の概要	1 ページ
1. 調査の目標と調査の対象	2. 調査単位の切りとり方
3. 記事の種類分け	4. 作業の経過
語彙表	19ページ
1. 五十音順による語彙表	2. 使用度数順による語彙表
附説(1～3の小見出しを省略)	91ページ

まず、「刊行のことば」全2段落の最初の段落の本文を引用しておきたい。

国立国語研究所は、国語の合理化の確実な基礎を築くために、基本語彙を選定し、現代標準語辞典を編修することを目標の一つとしている。このため、第1部第2研究室では、書き言葉を中心として語彙調査を行っているが、その準備的作業としての新聞語彙の調査がまとまった。ここに「国立国語研究所資料集」の第2冊として刊行する。

次に、「はじめに」は、上引の「刊行の言葉」を具体的に述べた内容になっている。

われわれは、現代語に行われる単語について基本性を明かにしようと努めている。すなわち基本語彙の選定が予定される。そうして、方言語彙その他の調査と相まって一々の単語の標準性を明かにし、その成果は将来、標準語辞典という形で現わしたいと考えている。

このような語彙調査は、しかし、語彙調査の方法論が確立せず語彙論的研究の充分進んでいない現段階では、いろいろの難関が横たわっている。われわれとしては、その難関の一つ一つを切り抜けて行かなければならない。そのための試みとして行ったのが、この新聞語彙の調査である。

次に、「調査の概要」の「1. 調査の目標と調査の対象」から、内容を箇条書きにまとめてみたい。

- (1) この調査は、ある1種の新聞について、1か月間には、どれほどちがった種類の語が用いられるか、それぞれの語がどれほどくりかえし用いられるかを知ることをおもな目標としたものである。そのために、調査の対象として、朝日新聞東京本社最終版の昭和24年6月1日から6月30日までの1か月間の全紙面をとりあげた。
- (2) 紙面から採集するものは、いわゆる自立語だけで、助詞・助動詞はとらないこととした。
- (3) 採集したカードのうち、固有名詞と本数詞は、整理・分析の対象からは除外した。

「4. 作業の経過」では、次の作業を行っている。

- (1) カードの採集 — 所定のカードに、所定の方式で記入し、総計、約24万枚のカードを採集した。
- (2) カードの整理・集計 — 1.無活用語、2.活用語、3a.固有名詞、4b.数詞の四つに分類した。

(3) 語彙表の作成 — 簡単な形式の度数のカードを作った。

次に、整理した語彙表の数量を一覧表に整理すると、次のようになる。

	語種の数	総使用度	度 数		
			10以上	100以上	300以上
(a) 無活用語の部	11826	148500	2408	257	75
(b) 動詞の部	2035	52333	507	68	
(c) 形容詞の部	324	4573	55		
(d) 接頭辞の部	214	5368	45	49	
(e) 接尾辞の部	511	19840	204		
(f) 助数詞の部	203	11144	74		

この一覧表の(a)には、自立語の活用しない品詞以外に、①形式名詞の類 ②形容動詞の語幹を含めている。

次に、語彙表は、目次にあるように、上記(a)～(f)の各部別の「五十音順による語彙表」と、度数300以上の上位75語及び度数100以上の上位374語の「使用度数順による語彙表」が提示されている。

「(b) 動詞の部」を紹介してみよう。

語	使用度数	使用日数	語	使用度数	使用日数
相 —	27	19	— あう	68	25
会う	28	16	あおる	14	7
合う	12	9	あがる(上る, 揚る, 挙る)	36	17
合う (間に —)	10	6	— あがる	43	20

ここに例示した一覧表についていくらかの解説を加えてみたい。

- ①「相 —」や「— あう」などに明らかなように、複合語は「原則として分割」している。
- ②「合う」「合う (間に —)」「— あう」に明らかなように、語構成を異にする語・語基は別に計上する。
- ③「あがる (上る, 揚る, 挙る)」に明らかなように多義語あるいは同音異義語の動詞は一つにまとめる。
- ④同音語は、使用度数の順に配列している。
- ⑤使用日数の上限は30 (日) である。

次に、「目次」の大きな柱の一つである「附説」は、「1. 日と用語」「2. 記事別と用語」「3. 用語の品詞別」で構成されている。その「3. 用語の品詞別」では、自立語に限定して、使用度数と品詞を組み合わせた一覧表を提示している。その総数だけを引用してみよう。

度数	1	2	3	4	5	6～10	11～20	21～50	51～99	100以上	総計
総数	5362	2165	1206	810	570	1531	1101	937	410	325	14417

本文献は、期間が1か月間という短い期間の新聞1紙の用語の調査ではあるが、国立国語研究所の大量の用語調査の出発点となる調査としての意味をもっている。

文献(32) 基本語による国語の学習指導

興水実・賀根俊栄

刀江書院 昭和27(1952)年6月15日

B6判 はじめに2ページ 目次2ページ 本文247ページ あとがき1ページ

〔目次〕(第一章・第二章の各節の見出しを省略)

第一章 新しい国語教育のありかた (興水)	1 ページ
第二章 新しい国語教育の具体的設計 (賀根)	21 ページ
第三章 国語教育と基本語の問題 (興水)	66 ページ
第一節 基本語的な考慮	第二節 読み書き能力低下といわれる現状をどう考えるか、 おおよび「日本人の読み書き能力調査」について
第三節 漢字および語彙の指導とテスト	
第四章 学習基本語彙試案 (賀根)	83 ページ
第五章 漢字習得のための基本語 (賀根)	119 ページ
第一節 漢字指導の問題	第二節 漢字用語の学年配当試案
第三節 現行教科書五種の漢字提出法調査	
あとがき (賀根)	248 ページ

以下、第四章「学習基本語彙試案 (賀根)」を紹介する。なお、賀根俊栄氏は、本文の背表紙、中表紙、奥付では誤って「賀根俊学」と表示されている。山口県下の小学校に勤務していた間に、国立国語研究所に内地留学をして指導者興水実氏と一緒に本文を刊行したのである。なお、賀根俊栄氏は、光市、下松市の小学校長、光市の教育長などを歴任した人物である。

共著者興水実氏は「はじめに」で、賀根俊栄氏と本文刊行の経緯について、次のように説明している。

賀根俊栄君は先年山口県から派遣されて東京文理大学に学び、特に垣内松三先生の御講義に出席していたが、垣内先生の御紹介で私のところに来られ、その後国立国語研究所の私たちの研究室でしばらく勉強されたかたである。そうした勉強の上に、それまでの十数年の教室実践を反省して「国語教育の基本秩序」と題した相当の分量のものをまとめられた。それは、垣内学説の中心である言語形象性への思索を主として、基本国語に関する調査研究、特に新しい国語教育における基礎修練の方法にかかわるものであったが、なお今後の研究を要する点もあったので、それ等の中で特に価値のあるものを残し、また、私の最近の講演筆記の中から賀根君の求めに応じて二編を提供し、このようにしてできあがったのが本書である。

次に引用するのは、賀根俊栄氏の担当する第四章「学習基本語彙試案」の書き出しの部分である。

私が現在まで約十三年間、教育にたずさわっていて、痛感しているものの一つに児童の語彙整理の問題がある。語彙整理といっても児童たちが日常使用する言葉一切の整理を企てるものではなく、比較的使用度数の多いものであるとか、日常の会話や、作文の場合、基礎となるとされるものの整理であって、私は約一千八百四十語を選び出して児童語の醇化につとめて来ているもので、それを参考として次にかかけたい。これ等の語彙は山口県一部の児童を対象として実態調査をし現行の国語教科書、辞書に表われている語彙を比較しながら選び出したものであり、一覧表は品詞別、大体五十音順に並べ、同時に習得学年を示してあるのでカリキュラム構成にも役立つと思う。(中略)

名詞は紙数の関係でここでは省略してある。なおこの一覧表は謄写印刷にでもして、児童にあたえ、児童自身の自己評価の基準にさせるならば一層効果的であって、これがために児童の日常会話も作文能力も著しく向上して来るように思われる。(以下省略)

次に、基本語彙表は、次の語数になっている。なお、この語数は、掲げられている語彙表を、引用者が数えたもので、誤りがあるかも知れない。筆者の「私は約一千八百四十語を選び出して」と比較すると、語数の上でどう考えるとよいのか判然としない。助動詞及び助詞を削った自立語の語数であるのかもしれない。

品詞	語数	各基本語彙例 (丸付き数字は習得学年)
代名詞の類	68 (68)	あなた① あなたがた② あなたたち③ あの方③ あの人① あの人たち① 君① 君たち③ この人① この人たち①
動詞の類	1,050 (1,118)	ある① あそぶ① あらわれる② あらわす④ あばれる① あう① 合わせる① 歩く① 開ける① 開く① 明ける①
形容詞の類	222 (1,340)	青い① 愛らしい⑤ 赤い① 明るい② 浅い① 浅ましい⑤ 新しい① 暖い② 暑い① あつくるしい② 甘い①
副詞の類	389 (1,729)	あきらかに⑥ 青々と③ ありったけ② あざやかに⑤ あちこちと④ ありありと⑤ いつ① いつでも① いつか①
接続詞の類	47 (1,776)	しかも⑤ こうして② それに② そうして① そして① それから① さて④ その上④ 次に③ なお⑤ また①
感動詞の類	56 (1,832)	あ① あっ① あら① あれ② ええ① えっ② お① おお① おや① おやおや① さて③ しまった② しめた④ そうだ①
助動詞の類	32 (1,864)	れる (受け身) ① られる (受け身) ① れる (可能) ① られる (可能) ① せる (使役) ① させる (使役) ① さい①
助詞の類	40 (1,904)	へ① を① が① から① だって② で① と① ながら① に① には① にも① の① や① より① のが①

本文献は、約1,900語のそれぞれを品詞別に提示しているが、その選定の方法などは一切述べられていない。また、どのように指導するかについても述べられていない。しかし、一人の国語教育者が、これまでの経験と国語教科書の資料を生かして基本語彙を選定し、品詞及び学年の2面で分類した一覧表を提出したことの意義は小さくない。

文献(33) 現代語の語彙調査 婦人雑誌の用語 (国立国語研究所報告 4)

国立国語研究所

秀英出版 昭和28(1953)年 3 月

B 5 判 338ページ

〔目次〕〔刊行の言葉〕〔附録〕〔事項索引〕等は省略)

はじめに (附 各章のあらまし)	1 ページ
§ 1 調査の輪郭	1 ページ
§ 2 方法 — 語彙表の作成まで —	10ページ
§ 3 語彙表	51ページ
§ 4 語の使われる度合に関する分析	239ページ
§ 5 意味論上の試み	263ページ
§ 6 語構造に関する分析	284ページ
§ 7 『婦人生活』の実用記事に使われた助詞・助動詞	295ページ
§ 8 この調査の反省	315ページ
§ 9 漢字に関する調査	322ページ

まず、「はじめに」の「附 各章のあらまし」から「§ 1」と「§ 2」の本文を引用してみよう。

§ 1 調査の輪郭 書き言葉としての語彙の実状を知るために、まず雑誌を材料とすることとし、婦人雑誌のうち日常生活的な記事に重点のある種類から、『主婦之友』と『婦人生活』を選んだ。両方とも昭和25年の12箇月分(『婦人生活』は実用記事の部分だけ)を調査対象として、一定の割合で記事の種類ごとにページを抜き出し、抜き出されたページの本文に現われる語をすべて、カードに転写して調査した。

§ 2 方法 — 語彙表の作成まで

- (1) 調査単位 — 2 単位とする。
- (2) 記事の部類分け (層別法) — 記事を内容面で 4 つの層 (第二次の分け方では15の層) に分類する。
- (3) 全体3700ページ余りから700ページ余りを選び出す。
- (4) 各語をカードに採集し (延べ語数)、五十音順に整理し、更に「集計カード」(異なり語数)を作成する。
- (5) 「基本度数表」を作り、各語の標本度数が層ごとにまた全体として見られるようにした。
- (6) 標本度数 9 以上の語を拾い出し、五十音順語彙表及び使用率順語彙表を作成した。

ここで、五十音順語彙表及び使用率順語彙表を例示して簡単に説明しておきたい。

第 1 表 五十音順本表

五十音順本表 見出し	使 用 之 友									
	本文 全体	特別 読物	小 説	雑 誌	表 生活	食 生活	家計 経済	衛生 美容	その他	実用 記事
アの (指)	1.144	1.376	2.954	.702	.057	.105	.140	.106	.385	.159
アア (感)	.233	.324	.219	.780	-	-	-	.106	.077	.035
アイ 愛	.274	.486	.401	.312	-	-	-	-	.077	.018
アイ・ッ*	.802	.890	1.313	1.014	.172	.941	.280	.740	.231	.423
アイコ 子 (人)	.082	-	.438	-	-	-	-	-	-	-

第3・1表 使用率順総合表（主婦之友）

順位	見出し		使用率 ‰	各層での順位					全記事 での 順位	婦生 での 順位
				衣	食	経	健・美	他		
1	シ・スル	為	22,092	1	1	1	1	1	1	1
2	ナリ・ル	為	9,899	19	11	4	2	4	5	2
3	コト	物・者	9,828	73	22	5	3	2	6	3
4	モノ	有	9,529	21	5	2	6	7	9	5
5	アリ・ル		9,229	53	21	3	4	3	3	4
6	ヨイ	良・好・善	8,276	14	2	8	8	10	10	6
7	イル	居言	7,570	107	47	6	5	5	2	7
8	イイ・ッ		7,005	192	31	7	7	6	4	9

本文献で得られた数量を「第18表 標本の大きさ」から抄出して掲げてみよう。本来の表は、「記事別」すなわち、「実用記事、特別読物、小説、娯楽読物および雑」の4種類に分けられている。そして、「実用記事」はさらに「衣生活、食生活、家計経済、衛生美容、その他」に細分されている。ここでは全体の語数だけを引用したのである。

記事別	主婦之友		婦人生活	
	延べ語数	異なり語数	延べ語数	異なり語数
全 体	145,930	27,275	52,237	9,866
頻度9以上	—	2,176	—	951

この表の「頻度9以上」の語数であるが、『主婦之友』は「第4表 使用率順表（『主婦之友』全記事）」により、『婦人生活』は「第3・2表 使用率順総合表（婦人生活）」によっている。

ここで、「第4表 使用率順表（『主婦之友』全記事）」の順位799の最後の5語と順位837の最初の2語を引用してみよう。

順位	見出し	使用率 %	実用記事 での順位
799	マツリツケル 纏附	.171	318
799	マワリ 周	.171	638
799	モドリ・ル 戻	.171	*
799	ヤヨイ 弥生 《人》	.171	—
799	ヨウイシ・スル 用意	.171	401
837	アラ (感)	.164	—
837	イダキ・ク 懐・抱	.164	*

本文献は、2種の婦人雑誌の用語を探索しているが、2種それぞれの語彙表の作成が主たる目標になっていて、それらを一つにまとめた語彙表及びその考察というところまでは考えられていない。

本文献は、以上に示したように、頻度9以上の基本語彙を提示すると同時に、「§5 意味論上の試み」では、文献(49)『分類語彙表』の作成に至る1過程を示している。

文献(34) 小学校国語教科書における漢字調査 — 語彙を中心として — (前編・後編)

横浜市立教育研究所

『研究紀要』第3・4集 昭和28(1953)年・昭和30(1955)年

前編 A 5判 176ページ 後編 B 5判 253ページ

〔構成〕

前編 (A 5判 縦書き)

まえがき (杉山彦一郎)	1～2ページ
漢字語彙調査について (松川文太・蒲原静美)	1～4ページ
凡例	5～7ページ
一覧表	1～167ページ
索引	1～7ページ

後編 (B 5判 横書き)

序 (杉山彦一郎)	1ページ
まえがき (蒲原静美・松川文太)	1～4ページ
凡例	5ページ
一覧表	1～217ページ
索引	221～253ページ

まず、本文の前編の「まえがき」と「凡例」の中間に置かれている「漢字語彙調査について」から、本調査の趣旨を表す本文を引用しておきたい。(なお、本文に関しては、本文を引用するに際して表記等を改めた箇所がある。タイプ印刷であるために誤植が少なくないこと、促音「つ」の表記が困難だったといった問題があるからである。なおまた、部分的に施されている圈点は省略した。)

かかる観点に立って、本市教育研究所において「前記の諸問題を貫き、且つその根底に横たわる実態を把握するに必要であって、真に合理的な国語教育上の基礎的調査は何か。」を追求した結果、その重要なものの一つとして取り挙げられたのが、本書に収められた「漢字と語彙の調査」である。

この調査によって、児童生徒に必要な漢字語彙と、それを記載するのに必要な漢字の数が割出され、その基準を発見するのに役立つ(文部省及各地研究所における習得率調査と共に)のみでなく、漢字とその語彙が、特定の場合と、日常生活の中で頻繁に出るものとを改めて認識し、日常生活中でも読む必要あるもので、書く必要の少い漢字、或は読み、書き何れも必要とするもの等種々に類別して考察することができるであろう。

次に、同じく前編の「凡例」の「一 調査対象」及び「三 漢字と語彙」を引用しておきたい。

一 調査対象 本書に収録した漢字語彙は、本市において展示された昭和二十八年度使用検定本で、小学校国語教科書全冊十一種(但文部省発行を含まず)に就いての調査における一過程、即ち一年から三年までの七十七冊を調査した結果である。(1文省略)

三 漢字と語彙 従来各地で発表された漢字頻度調査は、「国語」を「国」・「語」と切放し、夫々の「漢字」についての頻度を発表されているが、本書はあくまでそれを切放さず、一つの語彙として抽出することを主要な目的とした。ために、語彙として精選不足のものがあるのは今後の改訂にまつことにした。

次に、後編の「まえがき」の一節を引用しておきたい。そこには、後編に取り組んでいる2年間に、全国で何種もの漢字に関する論文が刊行されたことに触れたあと、本文献の目的を次のように確認している。

かかる現象から、私共が取り得た究極の目的は、広義の利用度に耐え得ることを念願とし、小学校国語教科書に表れた語いの実態を浮き彫りにすることによって、初等教育の基礎として、学習しなければならない語いにはどのようなものがあるか、又それ等の実態を通して、各語い間に横たわる性格の種々層を分析し、混同を生じ易い類似形の漢字又は語いはないか、同音異義、異音同意等の読み誤りや理解に混乱を生じ易いものはないか、字画が複雑で学習に困難なものはないか、特殊な読み方をする漢字にはどのようなものがあるか、等々、漢字本来の使命からしても、容易にそれらの要求に答え得る資料でなければならないという立場から、できるだけ実態を細かく捉えたと共に度数調査をも合わせて試みることにした。従って、このような広義な利用価値を持たしめる為には、何といっても調査の方法が特に重要なことの一つとなるわけであるので、度重なる検討の結果、単独の漢字調査では、殆どそれら漢字の性格を知るまでにいかないのみでなく、限られた利用範囲にとどまることを知り、調査の困難さは有りつつも、とにかく、漢字を単なる表音文字乃至は表意文字として見るのではなく、最も具体的な「コトバ」の一環として見ることに定めたのである。(引用者注；引用に際し表記等を正した箇所がある。)

漢字と語彙			教科書										
			A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
休	キュウ やす・む	一休さん(人名)							1				
		休み時間					1		1				
		休む	6	5	1	3	2	2	2	8	6	3	7
		休んで	1	4		2	3		3	5	1		4
		おひる休み							1				
		お休み								2			
		ずる休み	2										
		なつ休み			3	8	2		9	1			

本報告に引用するに際し、原典では各教科書の欄が1～3学年の3つの欄に細分されていて、それぞれ学年ごとの語数が示されているが、ここでは、一覧表作成上の都合で3学年の合計数だけを掲げた。

後編は、次に提示する形式になっている。同じ「休」で言うと、4年から6年までの3年間、まぜ書きを別々に数えて合計25語の熟語が集められている。

語	い	四年	五年	六年	合計
【休】(キュウ)					
休か			2		2
休暇			1	1	2

本文献2冊は、横浜市教育委員会教育センター図書資料室の蔵書を借用したものである。漢字指導は語彙指導だという言い方をするが、本文献は、その意味でも、また、作成された年代においても、大変貴重な資料になりえている。

文献(35) 小学校の国語教科書の語彙

田中久直 (謄写印刷 — わら半紙二つ折り・紙縫りによる仮綴)

昭和29(1954)年6月7日

B5判 まえがき等4ページ 本表152ページ

本文献は表紙上部に「小学校の／国語教科書の語彙」という書名が2段にわたって記載され、下の方には「新潟県三島郡日越小学校 田中久直」という校名と編者名が記されている。質の悪いわら半紙(B4判)に青インクの謄写印刷で、二つに折り紙縫りで仮綴した体裁になっている。その本表は、鉛筆でチェックした跡があるので、田中久直氏が文献(36)『国語科 学習基本語彙 指導の実際』に収録するための資料として使用した原本の可能性が高い。なお、上記の発行年月日は、「まえがき」の最後に記された日付を用いた。

「まえがき」は、次の構成になっている。

- (1) 調査の趣旨 (2) 調査の資料 (3) 調査の手続き (4) 調査の経過

まず、「まえがき」の「(1) 調査の趣旨」では、教科書の語彙の扱いにおける困難点5項目を指摘した上で、この調査の趣旨を次のように述べている。

以上のような困難を打開するためのひとつの手がかりとして、現在の国語教科書に盛られている語いの内容がどのようになっているかを明らかにしようと試みた。すなわち、この調査の趣旨は、

1. 現在の国語教科書で児童はどんな語いを学習しているか
2. その語いは、それぞれ どんな範囲で使われているか
3. その語いは、それぞれ どの学年で初出することが多いか

を見極めようとするところにあるわけである。

次に、「(2) 調査の資料」は、昭和25年度の教科書展示会に出された検定教科書で、全学年分のそろっている下記の教科書を取り上げたことを記している。

東書	新しい国語
日書	太郎花子国語の本
二葉	国語の本
光村	新国語
学図	国語〔日本新教育研究会編〕
学図	国語〇年生〔学校図書研究会編〕
学図	〇年生の国語〔教育図書研究会編〕

次に、「(3) 調査の手続き」は、次のように記されている。

- 1 語いの抽出は各教科書巻末の語い表によった。但し、東書の「新しい国語」は高学年の分には語い表がついていないので、同社編集部の「新しい国語・語い調査表」によってその分を補った。
- 2 固有名詞・擬声語・1回しか出ない動植物名は例外的なものを除いては省略してある。
- 3 抽出した語いは、これを50音順に配列し、それぞれに頻数と初出学年を示した。たとえば、

あいじょう(愛情) 5 ⑤-6

というのは、5種の教科書で使われ、5-6年生用で初出し、特に5年生で初出する場合が多かった

ことを示している。

4 以上のようにして本稿に収録した語い数は12,541語である。

ここに付け加えておきたいことは、この調査には次のような不備の点があることである。例えば「近い」は3種の教科書に、「近く」は1種に、「近づく」は3種に、「近よる」も3種にしか使われていないように出ている。これは教科書によっては、これらの中の1語で「近い」や「近く」のすべてを代表させるという語い表の整理をしているものがあり、本稿では、それをそのまま用いたためである。

従って「近い」は実質的には、もっと頻数が多いものと考えてよい。このような例はいくらかないけれども、もし頻数が少なすぎておかしいと思われる場合があったら、同類語を併せ考察してもらいたい。

さて、語彙表は、次のような形式になっている。見やすくするために、罫線を付けて提示してみよう。

見出し	頻度	初出学年	見出し	頻度	出出学年
あ [436語]			あいことば (合言葉)	2	6
ああ (~する)	2	3 - 4	あいさつ	6	1 - ②
アークとう (燈)	1	5	あいじょう (愛情)	5	⑤ - 6
アーチ	2	5 - 6	あいず (合図)	7	② - 4
あい (愛)	2	4 - 6	アイスクリーム	5	④ - 6
あい (藍)	1	5	あいする (愛)	4	④ - 6
あいいろ	1	6	あいそ (愛想)	1	2
あいかわらず	2	3 - 4	あいだ (間)	4	1 - 2
あいきょう (愛敬)	2	4	あいだがら	2	4 - 6
あいけん (愛犬)	2	5 - 6	あいちゃく (愛着)	1	6
あいこ (じゃんけんの)	2	2 - 3	あいちょう (愛鳥)	1	4
あいご (愛護)	1	6	あいづち	1	5
あいこくてき (愛国的)	1	5	あいて (相手)	6	1 - ③ - 4
			あいにく	4	2 - 6

この語彙表について、「(3) 調査の手続き」をもう一度確認しておきたい。

- ① 「見出し」欄に掲げた語は、固有名詞や擬声語、動植物名などは除外している。
- ② 「見出し」欄の括弧内の漢字表記は、必ずしも教科書の表記とは言いがたい。
- ③ 文献(35)の「まえがき」では「頻数」を用いているが、語彙表では「頻度」と表示されている。7種の教科書の何種に出現しているかという「範囲」の意味である。
- ④ 「初出学年」は、「あいて (相手)」の「1 - ③ - 4」で言えば、第1学年、第3学年、第4学年の3つの学年を初出とする教科書があったが、特に第3学年の教科書が多かったという意味。

本文献は、昭和30年前後の国語教科書の使用語を見るのに便利である。ただ、各語ごとの頻度数は示されているが、それ以上の整理は行われていない。なお、本文献については、続く文献(36)『国語科 学習基本語彙指導の実際』に詳しい紹介がある。

文献(36) 国語科 学習基本語彙 指導の実際

田中久直

新光閣書店 昭和31(1956)年9月20日

B 6 判 まえがき・目次・本文226ページ さくいん3ページ

〔目次〕(まえがき・目次及び第二章以下の下位項目、さくいん省略)

序章 語彙指導の原理	7ページ
第一章 学習基本語彙の選択	19ページ
一 読みの学習基本語彙による指導	
二 読みの学習基本語彙のための資料	
三 読みの学習基本語彙とその学年配分	
第二章 語彙指導の学年段階	106ページ
第三章 語彙指導の実際	122ページ
第四章 語彙力検査法	171ページ
第五章 語彙指導に関連ある指導	189ページ
参考文献	221ページ

まず、「まえがき」から、筆者の学習基本語彙の調査に取り組む契機等についての記述を引用したい。

語彙指導についての実践的な方策を打ち出したいというねがいは、以前に「教育漢字の学年配当と効果的な指導方法」を書いたときから、ずっと私の頭をはなれなかった。ことに、最近、語彙指導についての関心が高まりつつあるにもかかわらず、指導法についての考え方が国語教室の現場ではまだ実践的には確立していないことを思い、しかも重要な基本語彙による指導のための資料がほとんど整っていないことを痛感するにつけ、一つの踏み石としての私の仕事をまとめておきたいと考えずにはいられなかったのである。

この学習基本語彙の選定及び分類に関しては、「第一章 学習基本語彙の選択」で取り上げている。その中で、次の(1)、(2)の手続きで学習基本語彙のための資料を得る仕事を行っている。

(1) 国語教科書の語彙の調査

○昭和二六年度使用の小学校国語教科書七種(引用者注；以下、東書から学図まで七種の教科書名を掲げた一覧表が提示されているが、引用を省略する。)の語彙調査を行った。

○語彙の抽出は、各教科書巻末の語彙表によった。ただし、東書の「新しい国語」は、高学年の分に語彙表がついていないので、同社編集部の「新しい国語 語彙調査表」によってその分を補った。

○固有名詞・擬声語・一回しか出ない動植物名は、例外的なものを除いては省略した。

○抽出した語彙は、これを五十音順に配列し、それぞれに教科書頻度と初出学年とを示した。(以下、略)

○このようにして収録した語彙の数は、全部で、一二、五四一語である。

(2) 国語教科書学習のための基本語彙の選択

前述の小学校国語教科書の語彙調査によって得た一二、五四一語の中から、三種以上の教科書に共同的に提出されている三、四六九語を取り出し、これを国語教科書学習の基本語彙と考えることにした。

各教科書の編集者の考えている学習基本語彙の最大公約数を見たわけである。

筆者は、このようにして得た3,469語を、学年に配分すると同時に、意味の上で語彙を分類している。その学年配分は、教科書の学年配分の最大公約数を重視している。そして、語彙の分類では、次に提示するような分類項目を作成している。これは、9種11類86項目で構成されている。(各語数は原文の通り。)

A 事物の名称

1	自然にあるもの	(1)総称	(2)空にあるもの	～	(10)その他	488語	合計 3,467
2	作られたもの	(1)総称	(2)身につけるもの	～	(10)その他	582語	
3	社会的なこと	(1)総称	(2)人	～	(8)経済	343語	
B 4	働き	(1)知的な働き	(2)情意的な働き	～	(8)その他	1,001語	
C 5	状態	(1)総称	(2)色	～	(9)その他	492語	
D 6	時	(1)総称	(2)季節	～	(8)時のよび方	101語	
E 7	場所や方向	(1)総称	(2)地形上の場所	～	(8)場所一般	115語	
F 8	関係	(1)総称	(2)順序的關係	～	(6)その他	78語	
G 9	数量	(1)総称	(2)数え方	～	(5)総量	72語	
H 10	観念	(1)総称	(2)性状	～	(10)その他	142語	
I 11	その他	(1)代わりのことば		～	(5)ていねいないいい方	53語	

これら各項目にどういう語が配列されているかについて、A・3「(1) 総称」の19語の一覧表を掲げてみたい。

一年	二年	三年	四年	五年	六年
(1)総 称					
歌 名まえ	仕事 世界 用	社会 ねがい 望み 用事	話題	行事 組織 できごと 土木 歴史	傑作 産業 美術 生産

この19語の配分を見ると、各語の難易度や各語の意味の関係を考えているようである。

本文献のもつ意義として、次の3項目を挙げることができる。

- ① 当時の国語教科書7種の用語を調査し、頻度及び範囲に基準を置いて、12,541語から学習基本語彙3,469語を選定した。
- ② 自ら意味分類語彙表を考案して、それらの学習基本語彙を9種11類86項目に配列した。
- ③ 学習基本語彙を、語彙指導の観点から6学年に配分した。

なお、本文献を簡潔にまとめた論文に「五 語彙教育の体系と方法」(『国語教育のための国語講座・4 語彙の理論と教育』(昭和33(1958)年4月 朝倉書店)の「A 小学校」がある。

本文献は、文献(35)『小学校の国語教科書の語彙』に基づいて作成されたものである。また、本文献は文献(49)『分類語彙表』の参考文献にも掲げられている。そして、語彙指導の質的な側面で大いに貢献したと評価することができる。

文献(37) 現代語の語彙調査 総合雑誌の用語（前編 国立国語研究所報告12）

現代語の語彙調査 総合雑誌の用語（後編 国立国語研究所報告13）

国立国語研究所

秀英出版 （前編）昭和32(1957)年3月 （後編）昭和33(1958)年2月

B 5 判 182ページ

B 5 判 117ページ

〔目次〕

前編（「刊行のことば」及び「第3表～第5表」を省略）

解説 1 調査の輪郭

2 語彙表の性格

3 語彙表の引き方

第1表 五十音順語彙表 11ページ

第2表 使用率順語彙表（全体） 96ページ

後編（「刊行のことば」及び「付録Ⅰ～Ⅲ」を省略）

1 調査の輪郭 1ページ

2 方法 6ページ

3 語彙構造の量的分析 26ページ

4 意味から見た語彙の構造 45ページ

5 語構成に関する分析 78ページ

まず、本文献の調査目的、調査対象及び調査結果などについて、見出しを掲げて内容をまとめてみよう。

1 調査目的 — この調査は、国立国語研究所が創立以来行ってきた現代語の実態の調査、特に書きことばにおける語彙に関する調査の一段階をなすものであって、先に結果を公にした婦人雑誌の語彙調査に引きつづき、総合雑誌およびそれに近い内容を持つ雑誌13種について、その用語の実態を記述しようとするものである。

2 調査対象 — 総合雑誌およびそれに似寄りの雑誌の語彙を調査した結果の報告である。調査対象は下記の13種の雑誌の昭和28年7月号から29年6月号までの本誌・付録とこの期間に発行された増刊号との本文に使われた語 — 正確には β 単位から成る集団であって、これを更に雑誌の性質により三つの部分集団に分けた。すなわち、

第Ⅰ層：『改造』の本誌と『開放』『世界』『中央公論』との範囲。

第Ⅱ層：『文芸春秋』およびその増刊号に性質の似ている『改造』増刊号「日本を動かす一〇〇〇人」の範囲。

第Ⅲ層：上記二層の雑誌に近い性質の『学園評論』『国民』『心』『人生手帖』『日本及日本人』『ニュー・エイジ』『平和』の範囲。

3 調査単位 — β 単位

4 調査方法 — 無作為標本抽出法

次に、前編に掲げられている第1表「五十音順語彙表」について説明してみたい。

これは、「調査対象の13誌にわたって抽出した標本で使用度数が7以上になった語を、五十音順に排列した」表である。約4,200語を数える。

五十音順表 見出し		使用率 (%)				相対精度 (%)				分類目
		全体	I層	II層	III層	全体	I層	II層	III層	
アの	〔指〕	.629	.579	.692	.676	7.94	12.50	11.15		1・10
アア	〔指〕	.069	.050	.147	.047					3・10
アア	〔感〕	.117	.109	.084	.157					4・30
アイ	愛	.056	.034	.084	.079					1・30
アイ ¹⁾	合	.056	.076	.063	.047					1・11
アイ	〔接頭〕相	.148	.126	.231	.126	*10.82	*18.53	*16.96	*16.41	1・11
アイ・ウ	合・会・逢 遭	.825 ⁻	.802	.908	.809					2・15
～		.800	.752	.908	.809					
アエル		.017	.034	—	—					
アワレル		.009	.017	—	—					
アイコク	愛国	.087	.101	.042	.094					1・30

この第1表「五十音順語彙表」の各欄についての説明を引用しておきたい。

- (1) 見出し 見出し欄には見出しの形と、必要があれば簡単な注記を掲げた。
- (2) 使用率 13誌の全体および各層に対する値をあげた。
- (3) 相対精度 使用率の大きな語についてだけ、13誌の全体および各層に関する値をあげた。
- (4) 分類目 意味分類語彙表の分類項目に属する項目の番号をしるした。

次に、第2表「使用率順語彙表」(全体)は、「調査対象の13誌にわたる標本全体で使用度数が大きい方から15までの語を、使用率順に排列した」表であって、次のようになっている。

順位	見出し	使用率	95%の信頼区間			精度
		%	%	%	%	%
1	シ・スル	38.466	36.204	40.728		*2.27
2	イル	20.450	18.799	22.101		*3.12
3	イイ・ツ	18.463	17.005	19.921		*3.05 ⁻
4	コト	14.557	13.518	15.596		*2.76
5	ナリ・ル	10.591	9.550	11.632		*3.79
6	ソの	8.870	7.557	10.183		*5.71
7	モノ	8.233	7.200	9.266		*4.85 ⁻
8	アリ・ル	7.898	7.219	8.577		*3.29
9	コの	7.141	6.251	8.031		*4.81
10	テキ	7.055 ⁻	6.245	7.865		*4.43
11	ヨウ ¹⁾	6.564	5.878	7.250		*4.03
12	ソレ	6.556	5.940	7.172		*3.63
13	ノ	5.283	4.639	5.927		*4.71
14	イチ	5.248	4.647	5.849		*4.42
15	ワタクシ	5.105 ⁻	3.959	6.251		*8.67

この表の各欄についての説明を引用しておきたい。

- (1) 順位 — 使用率の大きいものから小さいものに順に語を並べてつけた番号。
- (2) 見出し — それぞれ標本の全体で7回以上使われているものに限る。
- (3) 使用率 — 13誌の全体に対する値をあげた。
- (4) 95%の信頼区間 — 左側は信頼区間の下限、右側は同じく上限である。
- (5) 精度 — 標本使用率が大きい約一千語については各語の推定精度を算出して語彙表に掲げた。

後編の「4 意味から見た語彙の構造」に掲げられた「分類語彙表」は、文献(49)『分類語彙表』に至る一過程を示すもので、文献(33)『現代語の語彙調査 婦人雑誌の用語』で試みられた分類語彙表を修正したものである。

本文献は、総合雑誌の語彙を調査し、1,000語及び4,200語の基本語彙を提案した資料である。

文献(38) 基礎語彙調査表

服部四郎

科学研究費研究・総合研究成果報告(簡易製本) 昭和32(1957)年8月

B5判 序・凡例等7ページ 本表110ページ 索引17ページ 附記2ページ

〔構成〕(本表の前後に付けられた「調査に関する注意事項」「目次」「索引」「附記」を省略)

序	I ~ III
凡例	V
本表	1 ~ 110ページ

まず、「序」の前半の本文をそのまま引用することにしたい。省略する場合はその都度断る。

基礎語彙表の作成を目指して、一昨年(1955年)来研究を進めて来たが、今回ほぼ最終的な試案を得た。

1955年度の第一次調査表は、日本語の基礎語彙に関する下記資料(4種)に現れる単語をカードにとってほぼ網羅的に集め、事項別に分類して、そのうち最も基礎的と考えられる単語に、主として主観的な判断によって、○印をつけたものであった。(1文省略)

1956年度の第二次調査表は、英、独、仏、露の諸国語の基礎語彙に関する下記資料に現れる全部の単語を諸氏の協力により翻訳を付してカードにとり、同じく事項別(前年度のものを多少修正した)に分類し、頻出度などを参考にしつつ主観的な判断にも基いて最も基礎的と考えられるものに番号を付して並べたものであった。西洋人の生活に特有の事物に関する単語以外は、できうる限り採用し、同時に Swadesh の言語年代学語彙は全部包含させた。

今年度の第三次調査表は、北村甫氏の協力を得て作成した。まず、第二次調査表に M.Cohen の調査表に現れる項目を全部加えた上で、主として主観的な判断により厳選して、最も基礎的と考えられるものだけを残した。その方針は：

1. それを表わす単語がなければ生活に支障を来すであろうと考えられるような事物を表わす単語は採集できるように項目を選ぶ。
2. そういう事物の一部分を表わすやや特殊な単語に該当しうる項目はできるだけ省略する：例えば「眼」はとるが、「まつげ」「ひとみ」「めじり」などはとらない。
3. 意味のあまりに抽象的な、あるいは不明確な単語はとらない。例：「意味」「礼儀」「性質」「to feel」。
4. できるだけ諸民族に共通して、その生活に関係が深いと考えられる事物に関する項目を採用し、少数の民族にのみ特有の事物に関するものは除くように努める。(2文省略)
5. 同一あるいは類似の事物に関係した単語をできるだけ重複してとらないようにする。例えば、「食物」ととったから「食事」はとらない。「働く」ととったから「仕事」はとらない。「近い」ととったから「近づく」はとらない。「盗む」ととったから「泥棒」はとらない。
6. Swadesh の言語年代学語彙は全部とる。

以上の原則により選定した項目に○印を付し、通し番号をつけたところ457となった。

なお、1955年度に使用した資料4種は、次の文献である。

- 1 文献(26)『日本語基本語彙』(「ただし、そのうちより大野晋氏の選択された語彙」)
- 2 文献(21)『日本語の姿』

3 文献(19)『幼児の言語発達』

4 文献(23)『日本語基本語彙 幼年之部』

さて、上記の457項目は、次のように分類されている。

分類項目	数量 (番号)	分類項目	数量 (番号)
I 人体	62 1～ 62	XV 一般動作	8 233～240
II 衣	8 63～ 70	XVI 知識・精神活動	9 241～249
III 食	25 71～ 95	XVII 天文・地文・鉱物	39 250～288
IV 住	19 96～114	XVIII 植物	11 289～299
V 道具	9 115～123	XIX 動物	21 300～320
VI 生活・戦い	22 124～145	XX 形・色・音・匂	19 321～339
VII 人間・人間関係	14 146～159	XXI 性質	13 340～352
VIII 社会・職業・生産	7 160～166	XXII 空間	23 353～375
IX 移動・交通	16 167～182	XXIII 時間	17 376～392
X 言語・伝達	6 183～188	XXIV 数・量	20 393～412
XI 遊び・芸術	3 189～191	XXV 代名詞など	19 413～431
XII 授受	1 192	XXVI 副詞・接続詞など	4 432～435
XIII 対人動作	3 193～195	XXVII 助詞など	17 436～452
XIV 対物動作	37 196～232	XXVIII 重要単語・連語	5 453～457

次に、例えば「I. 人体」は、「1. 頭」から「62. 叫ぶ」までの語が配列されていて、下位分類を有するものもある。ここでは、その下位分類をもつ「1. 頭」を引用してみよう。

p-1. ○ 1. 頭 [S-38. head ; B-4.20. ; C-1. tête]	1.
1-1. かみのけ [C-6. cheveux—hair] (cf. 48.)	1-1.
1-2. 禿げた [B-4.93. bald]	1-2.
1-3. 脳みそ [B-4.203. brain ; C-294. cerveau]	1-3.

この下位番号は、①除外することが適当かどうか疑わしいもの、②○印項目との対照上その意義素を明確にするのに役立つもの、③Cohen の調査表で比較的不適当と考えられるもの、などに付けてある。[] 内は見出し語に当たる英語、Swadesh の英語(S)、Buck の英語(B)、Cohen のフランス語(及び英語) (C)である。

本文献は、日本語の基礎語彙の優れた研究の成果を提示している。

文献(39) 国語教育のための基本語体系

大阪市立矢田小学校・池原檣雄

六月社 昭和32(1957)年10月30日

B 5 判 235ページ

〔目次〕〔序〕〔はじめに〕〔目次〕〔おわりに〕を除く)

本書の内容について

第一篇 序説	9 ページ
第二篇 基本言語の体系	31ページ
A表 語位順総合頻度表 (3000語)	B表 五十音順基本言語表 (3000語)
C表 学年別・五十音順基本言語表 (3000語)	
第三篇 助詞・助動詞の体系その他	211ページ
D表 語位順助詞・助動詞の総合頻度表	E表 五十音順助詞・助動詞一覧表
F表 品詞別・学年別の基本言語一覧表	G表 学年別・五十音順助詞・助動詞一覧表

全12項目からなる「本書の内容について」の最初の5項目に、本文献の主要な内容が整理されている。それを引用しておきたい。

1. 本書は昭和28年度使用（1，2年用）並に昭和29年度使用（3年用）の小学校国語教科書全14種91冊に使用せられている国語の単語から基本言語を抽出し、純正な日本語の展開と言語文化の進展への一資料たらしめると共に国語教育における言語指導の基礎であり出発点としての参考に供するものである。
2. この調査によって上記教科書に収められた延単語数42万余から助詞・助動詞を除いた単語実数8810語を得、更にその中から基本言語3000語を選んだ。
3. 3000語の基本語はその使用価値によって順位を附けた。その言語価値の位置付けは使用順位と提出範囲によって定めた。
4. 単に頻度と範囲を見るのみでなく原票（本書に収め得なかった）では14種の教科書ごとの提出分布を記入した。本書ではそれを総合したものの学年別の頻度分布状態が一覧出来る様にした。
5. 教科書における基本語提出の学年分布の実態から帰納して学年配当を定めた。

なお、上記2.の「3000語を選んだ」根拠として、次の「註 基本言語3000語選定の例」が施されている。

1. 農民の普通の語彙3000語（1929年、ピエロンの「実験心理学の原理」）
2. パーマ^(ママ)が客観的・主観的両方法によって3000語を選んだ。（1931年）

さて、現行国語教科書14種91冊を単語に分解した結果の総数として、次の第11表が掲げられている。

学 年	延単語総数	各教科書平均	教科書種類	教科書冊数
1	58,786	4,899	12	36
2	146,064	11,236	13	28
3	214,263	16,482	13	27
合 計	419,113	32,617	14	91

なお、異なり語数は、教科書の各冊ごとには計測されているが、それ以上の統計は掲げられていない。例えば、第12表「小学校国語教科書 単語数調査表 1年の部」は「延単語数」の下に括弧書きで「実数」が記載されているが、「計」の欄では、A種からL種までの実数が単純に合計されている。すなわち、本文献は、教科書の異なり語数やそれに対する基本語の価値などの考察は一切行われていない。延べ語数を提示するだけで、そのまま基本語3000語の考察に移っている。次の「頻度から見た高語位の価値率」もそういう観点で受け取る必要がありそうである。

頻度の多いものから1000語を選び、その総頻度に対する割合を算出すると、最高頻度の50語は40%を占め、次の250語で36%となった。1000語の中でも高語位の300語で実に76%を占め、語数の多いあとの700語で僅か24%しか占めていない事が、わかった。これから見ても頻度の高い「ことば」が、基本語としても主要な位置を占め、このたび選定した基本語3000語が、生活言語としても必須なことばであることが、認められる。

ここでは、第二篇「基本言語の体系」のA表の一部を引用して、その内容を具体的に説明してみよう。なお、A表とは基本言語を基本的価値の語位順に配列したものである。

語位	基本語・漢字	品 詞	初 出 学 年	最 終 出 学 年	配 当 学 年	頻 度 分 布									頻 度 合 計	提 出 範 囲	語 位 段 階
						1 年			2 年			3 年					
						上	中	下	上	中	下	上	中	下			
2722	まどガラス 窓硝子	名	2	3	3						3	2	0	1	6	3	3B
2723	まずしい 貧	形	3	3	3									6	6	3	3B
2724	ひびき 響	名	1	2	2			1	4	0	1	1	0	0	7	2	3B
2725	カナリヤ	名	1	2	2		1	0	6	0	0	0	0	0	7	2	3B
2726	ほかほか	準名	2	2	2				3	0	3	0	0	1	7	2	3B
2727	はりがね 針金	名	2	3	2				1	0	1	5	0	0	7	2	3B

この表の見出しのいくつかについて引用者の立場から説明を加えておきたい。

- ・「語位」は、全3,000語の基本語としての順位を表す。
- ・「最終出学年」は、14種の教科書の中で最も遅く提出している学年を表す。
- ・「配当学年」は、その基本語をどの学年に配当するかを表す。
- ・「頻度分布」は、教科書のどこに何例使用されているかを表し、「頻度合計」は、その累計を表す。
- ・「提出範囲」は、14種の中の幾種に出現しているかを表す。
- ・「語位段階」は、3,000語を1、2、3の級に分け、各級を更にA、Bの段に分け、1級Aの500語を順に100、200、200語の3段階に、1級Bの500語を200、300語の2段階に分けている。

次に、B表は五十音順の表、C表は学年別・五十音順の表である。第三篇は、助詞・助動詞をD～Gの4表に配列している。

本文献は、小学校国語教科書14種91冊の用語調査を行った上で基本語3,000語を提案しているが、その3,000語の選定の仕方が不明確であるためか、3,000語という語数が中途半端であるためかはっきりしないが、その後の調査研究に、参考書としては掲載されても、実際に引用されたり活用されたりすることが少ない。

文献(40) 教育基本語彙

阪本一郎

牧書店 昭和33(1958)年8月31日

A 5 判 はしがき等7ページ 本文377ページ

〔目次〕(「はしがき」を省く)

教育基本語彙表の組み立てと使い方 4～7ページ

教育基本語彙表 1～369ページ

教育基本語彙表ができるまで 371～377ページ

1. 教育基本語彙の意義 2. 第1次選定の経過 3. 第2次選定の経過 4. 第3次選定の経過

まず、「教育基本語彙表の組み立てと使い方」は、1～5の項目に分け、その3は更にa～iに細分して、詳細な説明が行われている。ここでは原則として、1～5のそれぞれの第1文を引用することにした。

1. この教育基本語彙表は、小学校から中学校までの義務教育期間に、子どもに学習させることが望ましい単語を選んで、五十音順に配列したものである。
2. おのおのの単語には、それを学習させることが望ましい学年段階と、その重要度が記号で示してある。その記号は、

A……	小学校1年～3年の段階
B……	小学校4年～6年の段階
C……	中学校1年～3年の段階

 というように示す。
3. おのおのの単語には、それを漢字で書くばあいの漢字と、その漢字が当用漢字であるか教育漢字であるか、教育漢字であればその配当学年(文部省発表)を示した。
4. おのおのの単語には、品詞を書き添えた。
5. 今日一部では用いられている単語でも、言い換えたほうがよいものは、その言い換えの例を“→”で示した。

次に、「教育基本語彙表ができるまで」を取り上げる。目次に掲げたように、4節に分かれている。

1. 教育基本語彙の意義

基本単語の選定の方法に、(1)基礎国語をきめるやり方、(2)単語の使用頻度を計上するやり方、(3)子どもが理解できる単語を調べるやり方、(4)国語教科書の語彙の使用頻度を計上するやり方、(5)専門家の意見によって選定する方法、の5種があるとし、本書は(5)の方法によることが述べられている。

2. 第1次選定の経過

新村出編『言林』(全国書房 昭和27年)の150,152語を10人の国語教育の実践人が取捨選択し、基本語彙を選定する。最も基本的なものの……○、やや基本的なものの……レ、など。10人中の4人が選定している単語をカードに写し取った。

3. 第2次選定の経過

第1次選定の語に、文献(23)阪本一郎「日本語基本語彙 幼年之部」、文献(26)国際文化振興会「日本語基本語彙」、文献(35)田中久直「小学校の国語教科書の語彙」、文献(31)「語彙調査 — 現代新聞用語の一例」(国立国語研究所資料集2, 昭和27年(1952) 104ページ)の各語彙を加えたものを、国語教育の専門的研究者5名が同じく○レで選定する。その単語カードは約4万5千枚である。

4. 第3次選定の経過

- (1) 単語の整理……同根の単語は一つにまとめる。
 (2) 段階別教育基本語彙表の作製……次に掲げる表のように分類し、取捨選択をした。

低学年語彙	高学年語彙	中学校語彙
A 1 2,500語	B 1 2,500語	C 1 2,500語
A 2 2,500語	B 2 2,500語	C 2 2,500語
	B 3 2,500語	C 3 2,500語
		C 4 2,500語
計 5,000語	計 7,500語	計 10,000語
合計 22,500語		

- (3) 五十音順教育基本語彙表の作製……段階別基本語彙のカードを、五十音順に配列しなおした。

さて、この五十音順の表が本文献の語彙表である。ここでは、例として9ページの上部（見出し語・漢字表記・漢字配当・品詞・段階の順）から引用してみよう。

あめあがり	雨上がり①④	名	A 2	あらう	洗う	動	A 1
アメーバ	【動】	名	C 2	あらうみ	荒海②	名	B 3
あめかぜ	雨風①②	名	A 2	あらかじめ		副	B 1
あめつち	天つち②	名	C 2	あらかた		副	C 4
あめふり	雨降り①	名	A 2	あらくれる	荒くれる	動	C 4
あめもよう	雨模様①	名	B 3	あらげずり	荒削り	名	B 3
アメリカ		名	B 2	あらさがし	あら捜し	名	C 4
あやうい	危〔う〕い	形	A 1	あらし	(嵐)	名	A 1
あやか		動	C 1	あらず	荒〔ら〕ず	動	A 1
あやしい	怪しい	形	A 1	あらずじ	あら筋	名	B 2
あやしむ	怪しむ	動	A 1	あらそい	争い④	名	A 1
あやす		動	A 2	あらそう	争う④	動	A 1
あやつりにんぎょう				あらだてる	荒だてる	動	C 2
	～人形①③	名	B 3	あらたに	新たに④	副	B 1
あやつる		動	B 1	あらたま	改まる④	動	A 1
あやぶむ	危ぶむ	動	C 1	あらため	改め④	名 (B2)	
あやふや		副	C 4	あらため	改める④	動	A 1

本文献は、①総語数が22,500語というスケールの大きな語彙表である、②何人もの専門家の判断が入っている、③それまでの幾種もの語彙表を資料として使用している、④編者への信頼性が高いなどの理由があって、学習基本語彙の資料として最もよく活用されてきた。特に「A 1 2,500語」「A 2 2,500語」を中心によく引用されてきている。

問題点としては、最初の資料に用いた『言林』がやや古い用例を保有していたこと、「A1」以下の語数が2,500語よりも多めであることが指摘される。「教育基本語彙データベースの構築」（島村直己『平成5年度国立国語研究所年報-45-』平成6年12月 秀英出版）には、本文献及びその改定版である文献(88)『新教育基本語彙』のランク、品詞、語種別の語数に関する調査の成果が示されている。

文献(41) 基本語彙と語彙調査

(『国語教育のための国語講座 4 語彙の理論と教育』)

水谷静夫

朝倉書店 昭和33(1958)年4月10日

A 5 判 61(304~244)ページ

〔目次〕(「基本語彙と語彙調査」の目次。細目は省略)

はじめに	302ページ
1 問題点の整理	299ページ
2 学習基本語彙をめざせば	289ページ
3 結果だけでお急ぎなく	279ページ
4 語彙調査の統計技法	270ページ
おわりに	257ページ
付録 児童読物の用語表と解説	256ページ

著者は、「基本語彙と語彙調査」の中で題目に関係する「基本語彙」「語彙」「語彙調査」「学習基本語彙」などの考え方についての厳密な考察及び定義づけを行っている。そして、「付録」として「児童読物の用語表」を掲げている。本報告では、その「付録」の「児童読物の用語表」を紹介することにしたい。

「付録 児童読物の用語表と解説」は、まず、「以下に引くのは、三省堂教科書出版部が昭和29年秋から31年末までに行った児童読物用語調査の結果の一部である。」という文に始まる前置きに続いて、「1 調査の概要」が記されている。以下、この用語表の概要を知る上で重要な事項を箇条書きに整理しておきたい。

- (1) この調査は、小学生を読者に予定した出版物で現に、どのような語がどれほど使われているかを知ることであった。
- (2) 調査対象は諸種の事情を勘案して次の通り定めた。昭和26年1月から28年12月までの三年間に、初版が発行されまたは重版が出た児童読物の単行本であって、学習参考書・絵本・漫画本を除き、叢書をなすものを含む範囲のもので、その本文と認められる部分に使われたあらゆる語の集合である。
- (3) 調査単位は、「国立国語研究所の総合雑誌語彙調査で用いる β 単位の認め方、その方針」にほぼなっている。

- (4) 日本出版年鑑と栗田書店発行の図書目録で児童読物を調査し、約1,000ページを抜くこと、つまり、調査対象の3609冊から100冊を、そのページ数に比例した確率で抜き、更にその本から各10ページを等確率で抜くことにしている。

更に低学年に配慮を加えて、右の表の冊数を得ている。

(右表の外枠は、引用者が付けた。)

区 分	標 本 の 冊 数			
	低学年	中学年	高学年	計
人文科学系	2	5	19	26
自然科学系	3	3	10	16
文芸 日本・東洋	11	6	27	44
文芸 西洋	3	5	14	22
計	19	19	70	108

次に、「2 用語表」としては、下記の使用率順用語表が掲げられている。それを一覧表にまとめて提示してみたい。

番号	品詞名	語数
I	助詞	52
II	助動詞	25
III	動詞	97 (41)
IV	形容詞	38 (13)
V	人名・地名	—
VI	体言	145 (70)
VII	その他	54 (17)

左の表は、品詞別の見出し語数である。助詞・助動詞、固有名詞等を除いた自立語の合計は、334語である。ただし、そこには、注に示すように「御」なども含まれている。

左表の数量の括弧内は、使用率が高くない語の数量である。

(注1)「体言」は「形容動詞語幹、名詞的接尾語を含み、地名を除く」いた語数である。

(注2)「その他」は、連体詞、感動詞、副詞、接続詞、「御」などの接頭語である。

ここでは、「第Ⅳ表 形容詞」の一部を引用してみよう。

順位	語	使用率 (%)			
		全体	低	中	高
1	ヨイ、イイ	2.74	4.97	2.46	2.60
2	ナイ 無	2.25	1.50	1.66	2.44
3	オオキイ、オオキナ	1.15	1.58	1.64	1.01
4	チイサイ、チイサナ	.62	1.30	.89	.49
5	ハヤイ 早、速	.57	.89	.72	.51
6	ウツクシイ	.49	.34	.81	.43
7	ナガイ	.47	.48	.58	.44
8	ワルイ	.39	.55	.17	.44
9	タカイ	.38	.24	.35	.40
10	オオイ	.36	.14	.37	.38
		.33	.52	.26	.33
(中略)					
23	アカイ 赤	.22	.55	.32	.17
24	オモシロイ	.20	.24	.29	.18
25	カナシイ	.20	.31	.17	.19

この第Ⅳ表の「解説」を引用しておきたい。

日本語で形容詞の貧乏なことを反映し、0.2%までの語はこれだけしか現われなかった。なお形容詞は学年別によって、動詞の場合より使用率の大小差がはなはだしい。参考までに、低学年層で0.2%を越えた語をあげよう。

アリガタイ コワイ (恐) 楽シイ カワイイ 寒イ ウマイ 青イ 太イ 冷タイ
オカシイ・オカシナ マルイ オイシイ

本文献は、基本語彙検討の資料として見落としてはならない文献である。なお、詳細な資料については、「詳しくは三省堂から発表される機会があると思う」と記されているが、その後、発表されていない。

文献(42) 児童・生徒の語い力の調査 準備調査(昭和32年度) 全2冊

文部省(国語シリーズ41・42)

明治図書 昭和35(1960)年2月15日

B6判 第1分冊(413ページ) 第2分冊(267ページ)

[目次]

まえがき

【第1部】(以下、全17章構成の中から特に必要だと考えられる§1, §2, §10を紹介する)

§1 この調査の目的 §2 基準の設定について §10 調査語の選定

【第2部】調査語(問題)

【第3部】50音順整理表(以下、第2分冊)

【第4部】児童・生徒の語い力の調査についての協議会における議事の要約

この『児童・生徒の語い力の調査』のシリーズとしては、次の6種の報告書が刊行されている。

国語シリーズ号	調査学年・段階		調査語総数	調査年度	刊行年月	本報告書の採否
41・42	準備調査		14,241	昭和32年度	昭和35年2月	文献(42)
51	本 調 査	小学校第6学年	10,047	昭和33年度	昭和37年3月	文献(43)
52		小学校第4学年	5,451	昭和34年度	昭和38年2月	文献(46)
58		中学校第3学年	6,874	昭和35年度	昭和39年9月	文献(50)
59		低学年の学習語	2,048	昭和37年度	昭和39年9月	文献(51)
63		中学校第1学年	6,874	昭和36年度	昭和42年5月	取り上げない

本文献は、この一覧表に明らかなように、この一連の語彙力の調査の準備調査としての重要な意味を有している。

まず、本調査の目的は、「まえがき」に、次のように述べられている。全6段落構成の「まえがき」の最初の2段落の本文を引用しておきたい。これは、第1部の§1と§2の本文と密接な関連がある。

この「児童・生徒の語い力の調査」は、本文にも述べてあるように、義務教育において、各教科を通じて学習上取り扱うのがふさわしい基準的なことばを選定し、学年に応じた段階づけをおこない、学習上のよりどころとすべき語いの表を作ろうとするものであって、これによって、選出された語は、いわゆる「基本語」とか「基礎語」とかいわれるものとは、おのずから違ったものである。すなわち、選出されるべき語は、「基本語」「基礎語」に対して、いわば学習指導上における基準語ともいうべきもので、個々の語を児童・生徒の理解度の面から取り扱っていかうとするものである。こういうわけで、この基準語のなかには、基本語とか基礎語とかいえないような語も含まれてくるが、また、その反面、基本語や基礎語のなかに含めるべきだと考えられる語であっても、義務教育の課程において、学習上わざわざ取り扱うに及ばないようなことばや、取り扱うことがふさわしくないとと思われるようなことばは省いてある。

次に、§10「調査語の選定」から、調査語い表選定に関する内容をまとめておきたい。まず、調査語について、次のように規定し、以下のような手順を立てている。

調査語とは、この調査において、児童・生徒に対し、知っているかどうか、知っているにしても、その程度はどれほどであるかを聞くために提出する一つ一つの語、もしくは、それらの語の集まりをいう。

(手順の概要の紹介)

- ・第1次選定 — 昭和25年に国立国語研究所が、竹原常太氏の『スタンダード和英辞典』(大修館 昭和16(1941)年3月25日初版)所載の見出し語(約38,000語)を調査した「義務教育終了者に対する語彙調査の試み」で、80%以上の理解を示した語を抜き出すと、約25,000語となった。なお、「義務教育終了者に対する語彙調査の試み」は『昭和25年度 国立国語研究所年報—2—』に報告されている。
- ・第2次選定 — 次に紹介する基準を立てて、あまりにもやさしすぎる語、むずかしすぎる語、また、特殊な語や学習上取り扱うまでもない語などを省こうとした。1語1語について、総合的に適用して取捨選択した結果、第2次選定では約12,000語を得た。

A類：ごく平凡な語で、知っているかどうかを調べるまでもないと思われる語

B類：特殊な用語 (1)専門語、(2)古典語など

C類：語のなりたちや活用形からみて。

D類：固有名詞、物品の名まえ

E類：その他 (いわゆる時局語、学習語として採り上げるのがふさわしくない語)

- ・第3次選定 — 12,000語と、次に列挙する資料とを照合し、第2次選定の際に用いた基準を適用しつつ、調査語としてふさわしい2,000語余りを採録した。このようにして、調査語の総数は、14,241語となった。

- 1 明解国語辞典改訂版 (三省堂発行)
- 2 例解国語辞典 (中教出版発行)
- 3 婦人雑誌の用語 (国立国語研究所)
- 4 総合雑誌の用語 (国立国語研究所)

次に、これら14,241語を、1語について150人の小学校6年生に調査した。児童は、それぞれの語について内省によって、右下の1～4のいずれかを選ぶ調査である。

第2分冊の第3部では、次のような形式で、調査結果を50音順に配列している。

		1	2	3	4
1	アース	56.7	22.7	12.0	8.7
51	アーチ	15.3	16.7	27.3	40.7
101	あい (色)	72.0	19.3	7.3	1.3
151	愛	54.7	24.7	13.3	7.3
201	合かぎ	39.3	16.0	24.0	20.7
251	相変わらず	69.3	20.0	8.7	2.0
301	哀願	2.7	13.3	26.7	57.3
351	愛機	19.3	16.7	30.7	33.3
401	合着	28.0	29.3	26.7	16.0
451	相客	18.7	31.3	32.7	17.3
52	あいきょう	45.3	28.7	18.0	8.0

左の表の上段の1～4は、次の4つの段階を表している。

1	よく知っていることば
2	だいたいわかることば
3	ほんやりわかることば
4	知らないことば

(引用者注；この4段階の言い方は、文献ごとに少しずつ違っている。)

本文献は、以下に行われる本調査の出発点となる資料である。なお、この資料は「文部省の調査による級別学習基準語い表」(『新国語学習辞典』光文書院 昭和36(1961)年6月)として小学校4年から中学3年までの6級に分けて提示されている。

文献(43) 児童・生徒の語い力の調査 本調査(昭和33年度)〔小学校第6学年〕
 文部省(国語シリーズ51)
 光風出版 昭和37(1962)年3月10日
 B6判 511ページ

〔目次〕(細目・付録は省略)

まえがき

§1 本年度の調査について 1～68ページ

1 事前の調査について

2 本調査について

§2 資料 69～511ページ

1 調査語(問題)

2 50音順整理表

3 児童・生徒の語い力の調査協議会要録

この『児童・生徒の語い力の調査』のシリーズとしては、次の6種の報告書が刊行されている。

国語シリーズ番号	調査学年・段階		調査語総数	調査年度	刊行年月	本報告書の採否
41・42	準備調査		14,241	昭和32年度	昭和35年2月	文献(42)
51	本 調 査	小学校第6学年	10,047	昭和33年度	昭和37年3月	文献(43)
52		小学校第4学年	5,451	昭和34年度	昭和38年2月	文献(46)
58		中学校第3学年	6,874	昭和35年度	昭和39年9月	文献(50)
59		低学年の学習語	2,048	昭和37年度	昭和39年9月	文献(51)
63		中学校第1学年	6,874	昭和36年度	昭和42年5月	取り上げない

本文の解説は、文献(42)として取り上げた国語シリーズ41・42『児童・生徒の語い力の調査準備調査(昭和32年度)』の記述をふまえたところがある。

まず、「§1 本年度の調査について」の「2 本調査について」の「(1) 調査語の選定」の本文を引用しておきたい。

本年度の調査は、前年度に実施した準備調査の結果を受けて、小学校の第6学年の児童を対象として実施した本調査である。

調査語は、準備調査に提出した14,241語のなかから、主として、その理解度が著しく高いと認められる語、および、その反対に著しく低いと認められる語(すなわち、小学校の第6学年の児童の多くがよく知っていると思われることば、および、たいていの者が知らないであろうと思われることば)を省き、総合雑誌の用語等を若干補充して、総数10,047語を選び出した。

この小学校第6学年の調査語の総数10,047語の選出に関する記述は、以上のとおりで、これ以外の情報は提示されていない。しかし、「§2 資料」の「2 50音順整理表」は、小学校高学年の学習基本語彙を選定する上で大きな意味をもっている。

そこで、そうした調査の結果を整理した「50音順整理表」の解説の書き出しの部分を用いておきたい。

この50音順整理表は、昭和33年度に実施した調査の調査語全体（10,047語）を、50音順に整理し、一つ一つの語について、第1段階・第2段階・第3段階・第4段階の各段階ごとに、○印を付けた人数の総計を、百分率に換算して示したものである。

この整理表では、調査語を、便宜上適宜漢字を使い、あるいは簡単な注を添えて示し、また、送りがなは、昭和34年7月11日づけ内閣告示第1号「送りがなのつけ方」によった。したがって、ここに掲げた表記の形で調査したのではない。

以下、50音順整理表の「あ」の最初から20語を提示しておきたい。

		1	2	3	4
1	愛	58.3	23.3	11.7	6.7
51	合いかぎ	48.3	19.0	13.0	19.7
101	愛機	22.3	16.0	26.7	35.0
151	合い着	15.3	23.7	26.7	34.3
201	相客	26.0	26.3	25.0	22.7
251	あいきょう	51.3	27.7	14.3	6.7
301	愛くるしい	14.7	25.3	35.3	24.7
351	愛犬	71.3	13.3	8.7	6.7
401	愛護	22.3	26.3	27.0	24.3
451	愛国	43.3	28.7	17.3	10.7
2	愛児	38.7	19.3	18.7	23.3
52	哀愁	7.3	15.3	34.0	43.0
102	相性	8.7	19.0	29.0	43.3
152	愛称	15.3	17.0	31.0	36.7
202	愛唱	17.3	23.7	28.0	31.0
252	愛情	69.7	18.3	9.7	2.3
302	愛書家	15.3	19.7	29.0	36.0
352	あいそ	29.7	25.3	21.0	24.0
402	相対する	20.3	23.3	30.3	26.0
452	間がら	47.6	22.3	19.3	11.3

引用者注1；左の表の見出しは、原本では、5語ずつのまとまりが示されているが、本文献では列挙形式にした。

引用者注2；左の表の1～4は、次の4段階を表している。

1	よく知っていることば
2	だいたいわかることば
3	ほんやりわかることば
4	知らないことば

(引用者注；この4段階の言い方は、文献ごとに少しずつ違っている。)

これら20語は、第1段階だけで50%を超えることば（愛、あいきょう、愛犬、愛情の4語）、第1段階と第2段階を合わせて50%を超えることば（合いかぎ、相客、愛国、愛児、あいそ、間がらの6語）、逆に、第3段階と第4段階を合わせて50%を超えることば（愛機、合い着、愛くるしい、愛護、哀愁、相性、愛称、愛唱、愛書家、相対するの10語）、などという見方で分類することができる。

本文献は、その後、学習基本語彙等の調査・選定の面で引用されたり活用されたりしていない。

文献(44) 現代雑誌九十種の用語用字 第一分冊 総記および語彙表 (国立国語研究所報告21)

国立国語研究所

秀英出版 昭和37(1962)年 3 月

B 5 判 321ページ

『現代雑誌九十種の用語用字』という書名で全3分冊が次のように出版されている。

- (1) 第一分冊 総記および語彙表 (国立国語研究所報告21) 昭和37(1962)年 3 月
- (2) 第二分冊 漢字表 (国立国語研究所報告22) 昭和38(1963)年 3 月
- (3) 第三分冊 分析 (国立国語研究所報告25) 昭和39(1964)年 3 月

以下、「第一分冊 総記および語彙表」を採り上げる。「第一分冊」は、次の構成になっている。

〔目次〕

総記 1 調査の輪郭 2 報告書の構成 3 方法

第一部 語彙表

解説 1 語彙表の性格 2 語彙表の体裁・引き方

語彙表 (第4表以下第7表までは省略)

第1表 五十音順語彙表 (助詞・助動詞以外)

第2表 使用率順語彙表 (全体)

第3表 使用率順語彙表 (第一層…評論・芸文)

(第4表～第7表は第二層～第五層の各表)

第8表 五十音順語彙表 (助詞・助動詞)

付録

まず、「総記」の「1 調査の輪郭」の「1・1 目的」の本文を引用しておきたい。

この調査は、現代の一般の雑誌でどんな語や漢字がどう使われているかの実態を明らかにし、語彙の構造や表記法の問題を追求することを目的とする。われわれは今までに、新聞の語彙調査、婦人雑誌や総合雑誌の語彙・用字の調査を行ない、その結果を報告書・資料集の形で公開した。今回の調査はそのあとを受けて、特殊な部門でなく一般の雑誌について概観することをねらった。

調査結果は実態の記述をまずもって目標とするが、それにとどまらず、基本語彙の選定その他の国語国字問題を考える際の参考資料としても役立つ事を念願した。

次に、「1・22 調査対象」では、昭和31年に刊行された「月刊・週刊・旬刊・季刊等の雑誌のうち発行部数の割合に多い」雑誌で、次の90誌が対象に選ばれている。

評論・芸文……………12誌 (第1層) 生活・婦人……………14誌 (第4層)

庶民……………14誌 (第2層) 娯楽・趣味……………35誌 (第5層)

実用・通俗科学……………15誌 (第3層)

これらの雑誌の調査の対象は、次の通りである。

昭和31年発行の刊記を持つ上記90誌の本誌・増刊・付録の、本文と認めた部分に使われている、すべての語および語に相当するような記号から成る集合。

次に、「1・23 調査方式」では、「雑誌一ページ分の八分の一の面積に相当する本文をランダムにまとめて抽出単位を操作的に構成し（この抽出単位を集落と呼ぶ）、層化集落抽出法によって標本を抜く」方法を採用している。なお、本文の調査単位は、 β 単位を採用している。

次に、「第一部 語彙表」の「解説」の「1 語彙表の性格」の「1）表に載せた語の範囲」の最初から2段落の本文を引用しておきたい。

どの語彙表にも、標本使用度数が7以上の見出し語をすべてあげた。（参考のための項目、すなわち二次見出しのものでは、その形の出現回数が6以下の場合もある。）標本度数1のものまではあげなかったのは、これが標本調査であり、従って使用率の小さい見出し語については標本使用度数の変動が大きく、標本に現われたか否かが相当地に偶然に左右されるという理由による。

掲載見出し語数は、助詞・助動詞以外の範囲で約七千二百であり、これは標本異なり語数約四万の一割八分にとどまる（調査対象全体の語彙量を規準に取ればこの比率は更に下がる）が、延べ語数の観点からすれば、この約七千二百語で総使用度数の八割六分ほどを占める。

なお、次の指摘は重要である。

標本度数20以上の見出し語は約三千あるから、母使用率の大きい方から三千語はほとんど確実に語彙表に載っていると考えられる。

次に、「第一部 語彙表」の第1表「五十音順語彙表」（助詞・助動詞以外）は、次のようになっている。

意味 分類	見 出 し	使 用 率 (%)						備 考
		全 体	一層	二層	三層	四層	五層	
3100	アの [指]	.787	.934	.771	.119	.542	1.256	0 1 #2 4 5
4310	ア, アア [感]	.242	.109	.183	.024	.172	.472	
3100	アア [指]	.062	.152	.039	.036	.037	.073	
3112	アイ 相	.135	.152	.144	.191	.111	.106	
1302	アイ 愛	.098	.109	.118	-	.209	.080	
21550	アイ・ウ 合・会・逢	.872	1.000	.875	.250	1.023	1.096	0 1 2 4 5
	アワセル	.826	.913	.862	.250	.924	1.050	
	アエル	.014	-	.013	-	.049	.007	
	アイカワリ・ル ¹⁾	.032	.087	-	-	.049	.040	
21500	アイカワリ・ル ¹⁾	.044	.022	.026	.024	.025	.080	
1209	アイク [人] Ike	.027	-	.013	.083	.012	.020	
13121	アイサツ 挨拶	.096	.109	.091	.024	.037	.166	

この一覧表の解説を、簡条書きにまとめておきたい。

- ① この表には4つの欄が設けてある：意味分類、見出し、使用率、備考。
- ② 「見出し」の欄の左半分には、見出し語が掲げてある。右半分はその注記である。
- ③ 見出し欄を一字下げで書き始めているものは「二次見出し」である。
- ④ 「意味分類」の欄は、意味分類語彙表の項目番号である。
- ⑤ 「使用率」の欄は、順に、90誌全体、第一層（評論・芸文）、第二層（庶民）、第三層（実用・通俗科学）、第四層（生活・婦人）、第五層（娯楽・趣味）に仕切ってある。
- ⑥ 「備考」は上記の使用率の精度に関する索引の意味を帯びさせている。

本文は、特に第1表「五十音順語彙表（助詞・助動詞を除く）」が、以後の学習基本語彙等の資料に活用されている。特に、文献(56)『実用和英辞典』、文献(62)『学習基本語彙の基礎調査』などの基礎資料として活用されている。

文献(45) 言語要素指導（国語教育の体系化1）

児童言語研究会（代表・大久保忠利）

明治図書 昭和37(1962)年9月

A5判 206ページ

〔目次〕（第Ⅲ章及びその「五」のみ細目次を掲げた。見出しは本文の表現を採用した）

総論 国語科教育の今日的課題

第Ⅰ章 音声

第Ⅱ章 文字

第Ⅲ章 語句 一 語体系論

二 語指導論

三 とりたてての語句指導

四 読解の中での語句指導

五 児言研・国語科教育基本語イ（第一次試案）

（１） われわれの基本語いの選びかた

（２） なぜ国語辞典を母体としたか

（３） 語の重要度の基準性

（４） この表の生かしかた

児言研・国語科教育基本語い（第一次試案）

六 論理語いと思考力たかめ

第Ⅳ章 文法

ここでは、第Ⅲ章の五の「児言研・国語科教育基本語イ（第一次試案）」の（１）～（４）及び「児言研・国語科教育基本語い（第一次試案）」を取り上げる。なお、当時の教育現場では「語彙」の「彙」が当用漢字に入っていないので、「語い」「語イ」という交ぜ書きの表記をとっていた。本文献も交ぜ書きを採用しているが、平仮名、片仮名が混在している。

「（１） われわれの基本語いの選びかた」では「読解・聴取理解はもちろんですが、特に小中学生が、『それらを所有していることによって、よりよく思考や認識を活動させる表現・通達することができる語を。』という観点から選んだ、特に国語科で与えたい教育基本語いです。」と述べている。『三省堂・国語辞典』（金田一京助編 昭和35(1960)年12月発行）の5万7千語の各語について、12名が検討するという選定方法により、「この基本語いには、A語い729語、B語い1,126語、合計1,955語が選定」されている。これは、「ぜひこれだけは身につけさせたい」という最低の量の提示である。「A語い」は「特に大切な語い」、B語いは「A語いに次ぐもの」という点の区別である。

（引用者注；A語いとB語いの合計は、1,955語でなくて1,855語になる。）

次に、「（３） 語の重要度の基準性」では、「①自然に覚えられるものはとらない。」「②小・中学校より高度のものはとらない。」「③他教科で主として指導するものはとらない。」「④頻度数にはこだわらない。」「⑤語構成や語体系からの観点は、今のところ問題にしない。」「⑥自分でつかえるようにさせたい語い（能動語い）としてとりあげる。」「⑦特に論理語いに重点をおく」という7項目の基準を設けている。また、問題点とその決定事項を8項目に分けて掲げている。（「⑧動詞の自他をどうするか。○必要なら両方をとる。ふつうはどちらかをとる。」など。）

「（４） この表の生かしかた」では、現場の教師への提案を6項目に分けて述べている。

この試案が具体的に述べられるのは、文献(52)『言語要素とりたて指導細案 小学1・2・3年』（横浜市

奈良小学校 昭和40(1965)年3月)であり、そこでは「学習基本語イ」が1年から6年まで学年ごとに配当され、それぞれに指導の細案が述べられている。(1～3年、4～6年の2分冊)

児童研・国語科教育基本語い(第一次試案)

	小学校		中学校	
	A	B	A	B
愛	愛	相変らず	アイデア	愛護
愛国	愛国	愛情	アウトライン	あおる(煽)
あいまい	あいまい	合図	あかし(証)	アカデミック
あえて	あえて	あいにく	あこがれ(憧)	あっせん(斡旋)
上がり	上がり	仰ぐ	圧倒的	圧迫
明らか	明らか	赤字	あわれ(哀)	アトム
悪	悪	あかつき(暁)	アンケート	あらばこそ
あくまでも	あくまでも	アクセント	安定	アルファー
足場	足場	あけぼの(曙)		アンサンブル
味わう	味わう	あざむく(欺)		
与える	与える	あざやか(鮮)		案ずる

さて、上の表は、第Ⅲ章第五節の最後に付けられた「児童研・国語科教育基本語い(第一次試案)」の最初の11行である。小学校と中学校に二分し、それぞれAとBに二分している。そして五十音の見出しの区切りの箇所には実線を、10行ずつの箇所には点線を引いている。

表の最後に、次の表が掲げられている。なお、この表の数字は、上に引用した数字と少し違っている。

	合 計		
小A	487	719	1,850
小B	232		
中A	577	1,131	
中B	554		

本文献は、児童言語研究会の考える「思考や認識を活動させる表現・通達することができる語を。」という趣旨で選定した基本語彙が提案されている。この提案は、日本の語彙指導の考え方に少なくない影響を与えた。なお、本文の見出しには片仮名交じりの表記「基本語イ」が使われているが、本文では平仮名交じりの「基本語い」が使われている。他方、目次では、その「イ・い」の文字部分が空白(欠字)になっている。

本文献は、その後、直接には文献(52)『言語要素とりたて指導細案』、文献(54)『言語要素とりたて指導入門』、文献(77)『文字・語句教育の理論と実践』などの改訂版や新版を生み出すことになる。

文献(46) 児童・生徒の語い力の調査 本調査(昭和34年度)〔小学校第4学年〕

文部省(国語シリーズ52)

光風出版 昭和38(1963)年2月15日

B6判 409ページ

〔目次〕(細目は省略)

まえがき

§1 本年度の調査について

- 1 事前の調査について (1)～(7)の小見出しは省略
- 2 本調査について (1)～(7)の小見出しは省略

§2 資料

- 1 調査語(問題)
- 2 50音順整理表
- 3 児童・生徒の語い力の調査協議会要録

この『児童・生徒の語い力の調査』のシリーズとしては、次の6種の報告書が刊行されている。

国語シリーズ番号	調査学年・段階		調査語総数	調査年度	刊行年月	本報告書の採否
41・42	準備調査		14,241	昭和32年度	昭和35年2月	文献(42)
51	本 調 査	小学校第6学年	10,047	昭和33年度	昭和37年3月	文献(43)
52		小学校第4学年	5,451	昭和34年度	昭和38年2月	文献(46)
58		中学校第3学年	6,874	昭和35年度	昭和39年9月	文献(50)
59		低学年の学習語	2,048	昭和37年度	昭和39年9月	文献(51)
63		中学校第1学年	6,874	昭和36年度	昭和42年5月	取り上げない

この一覧表から、本文献が、文献(42)国語シリーズ41・42「準備調査」、及び、文献(43)国語シリーズ51「小学校第6学年」の2種の調査研究を踏まえていることがわかる。

まず、「まえがき」から、本文献の調査の目的を表す本文を引用しておきたい。

「児童・生徒の語い力の調査」というのは、義務教育の期間における各教科を通じての学習の過程において、提出され、使用される可能性があると思われる語を中心とし、児童が、日常の社会生活において接するであろうと思われる語をも含めて、このような語を、児童・生徒が知っているかどうか、知っているにしても、はたしてどの程度に知っているのか(これを、この調査では「理解度」、あるいは、「理解の度合い」という。)を調査しようとするものである。(中略)

すなわち、選び出されるべき語は、「基本語」・「基礎語」に対して、いわば、学習指導、その他の面において、必要とする語の理解の度合いを知る手がかりとしての「基準語」ともいうべきもので、個々の語を、児童・生徒の内省による理解度の面から取り扱っていかうとするものである。

次に、本文献の調査語の選定については、§1・2「本調査について」で、次のように述べられている。

前年度(昭和33年度)、小学校の第6学年の児童を対象とした本調査の結果に基づいて、理解度が低か

った語を削除し、昭和32年度に実施した準備調査で理解度が高かったため、昭和33年度の調査ではやさしい語として削除した語、および、これまでの、この調査では提出していないが、小学校の中学年の児童に学習させるのがふさわしいと思われるような語を、いろいろの資料から補充して、計5,451語を得た。(引用者注：前年度の小学校第6学年の調査語は10,047語であった。その語数から理解度が低かった語を削除して、なにがしかの語を加えた結果が5,451語ということになる。)

ところで、小学校第4学年の児童に対して、内省法が適しているかどうかが問題になっている。内省法による調査とは、例えば「あえぐ（あつぎにあえぐ）」「あく（あくをぬく）」「あざわらう（人をあざわらう）」のそれぞれを知っているかどうかについて、4つの段階に分けて答えてもらう方式の調査である。そういう判断が、4年生に確実にできるかが問題になっているわけである。

次に、そうした調査の結果を整理した§2・2「50音順整理表」の解説の書き出しを引用しておきたい。

この整理表は、昭和34年度の調査語の全体(5,451語)について50音順に整理し、一つ一つの語について、第1段階・第2段階・第3段階・第4段階の各段階ごとに、○印をつけた人数の総計を、百分率に換算して示したものである。

この整理表では、調査語を便宜上、適宜漢字を使い、あるいは簡単な注を添えて示した。また、送りがなは、昭和34年7月11日づけ内閣告示第1号「送りがなのつけ方」によった。

ここで、「50音順整理表」の最初の部分を引用してみよう。

		1	2	3	4
1	愛	24.7	40.3	21.7	13.3
21	合いかぎ	27.3	26.7	22.3	23.7
41	相変わらず	39.3	38.0	14.0	8.7
61	あいきょう	22.3	30.7	22.7	24.3
81	愛犬	30.0	28.3	18.0	23.7
101	あいこ	42.7	21.3	13.0	23.0
121	愛国	10.7	22.3	30.0	37.0
141	あいさつ	90.0	5.7	1.3	／
161	愛児	5.7	18.7	25.7	50.0
181	愛情	22.3	27.0	28.3	22.3

左の表の上段の1～4は、次の4つの段階を表している。

1	よく知っていることば
2	だいたいわかることば
3	ほんやりとしかわからないことば
4	全然知らないことば

(引用者注；この4段階の言い方は、文献ごとに少しずつ違っている。)

本文献には、この「50音順整理表」以外に、例えば、第1段階「よく知っていることば」と第2段階「だいたいわかることば」を合わせると、80%を超える語がいくつあるか、といった情報、あるいは、第4段階の「全然知らないことば」が50%を超えることばがあるかどうか、といった情報は一切提示されていない。

本文献は、学習基本語彙を選定する場合に、各語句の学年・程度の適否を調べる資料として使用できる。

文献(47) 日本語教育における基礎学習語 (正・続) (『日本語教育』 2, 4・5号)

加藤彰彦

(昭和38(1963)年3月15日, 昭和39(1964)年12月15日)

A 5判 (正) 10ページ(46~55ページ) (続) 13ページ(60~72ページ)

〔構成〕(正)

1. はじめに
2. 調査資料
3. 調査手順
4. 語い表
5. 語い表の分析
6. おわりに

〔構成〕(続)

1. はしがき
2. 語い表
3. 語い表の分析
4. おわりに

国立国語研究所日本語教育センターの資料室には、『日本語教育重要語比較表 (未完)』(昭和43年5月30日文化庁国語課日本語教育係)が収蔵されている。この文献は、B 4の用紙30枚を二つ折りにして表紙を付けて綴じた冊子で、表紙裏面には、一覧表の簡単な説明がある。ただ、その説明と、実際の一覧表には食い違いがある。説明では、文献(40)『教育基本語彙』のA 1の2,500語を五十音順に各ページに25語ずつ縦に配列し、横の欄には、下記の(1)~(5)の資料に載るかどうかを記す、という意味のことが記されている。しかし、実際の一覧表は、文献(40)を含めて6種の文献に採り上げられている語のすべてを見出しに掲げる形式になっている。その未完の「日本語教育重要語比較表」は、あ行の「ああ」で始まり、合計1,500語までを見出しに掲げた表になっているが、さ行の最後の「さわる (触り)」で終わっている。

以下に6種の資料名等掲げるが、語数に関しては、本文献の記述によっている。

- | | |
|--|------------------|
| (1) 阪本一郎『教育基本語彙』— 文献(40) | A 1の2,500語 |
| (2) 長沼直兄『GRAMMAR AND GLOSSARY』(昭和31(1956)年3月 長風社) | 1,429語 |
| (3) 国際学会友会日本語学校『NIHONGO NO HANASIKATA』(昭和36(1961)年4月1日改訂第3刷) | 1,098語 |
| (4) 国際文化振興会『日本語基本語彙』— 文献(26) | 2,012語 |
| (5) 日本語教育振興会「日本語最高頻度語彙」— 文献(22) | 使用頻度15回以上の語 210語 |
| (6) 高橋源次『ジュニア和英辞典』(昭和37(1962)年3月15日 旺文社) | |

(重要語521語 次位重要語 1,035語) 1,556語

(1-25)	1	2	3	4	5	6	
あがる (上がる)	○	○	○	○		◎	3 あがる あがって
あがる (食)	○	○					
あかるい (明るい)	○	○	○	○		◎	3 あかるい, あかるくて
あかんぼう	○	○				○	

さて、筆者は、本資料「日本語教育重要語比較表」を完成させた上で、本文献をまとめられたのであろう。なお、上に紹介した資料「日本語教育重要語比較表」が公表されたら、今後も活用されるに違いない。

正編の「3. 調査手順」には、次のように記されている。

阪本のA 1の2,500語は、見出し語を数え直すと、3,358語になる。それに(2)～(6)の資料の基本語を加えると、総計3,937語である。総計3,937語のうち、4資料以上に共通している語の数は次のとおりである。

共通資料数	語数	累 計
6 資料共通	110	110
5 資料共通	274	384
4 資料共通	373	757

「4. 語い表」では、5資料共通の384語を五十音順に提示している。6資料共通の110語は、その見出しの頭に○印を付けている。「あ」の見出しを引用しておきたい。(引用者注；外枠は引用者が設けた。)

○あいだ (間)	あさ (朝)	あちら	あめ (雨)
あおい (青)	あし (足)	あつい (暑)	あらう (洗)
あかい (赤)	あした	○あと (後)	○ある (有)
あがる (上)	あそこ	あなた	ある (或)
あかるい (明)	あそぶ	あに (兄)	あるく
あき (秋)	○あたま (頭)	あね (姉)	あれ [代名詞]
あげる	あたらしい	○あの	

次に、続編では、上記6資料中の4資料、及び3資料に採り上げられている語を合わせて1,005語を五十音順に提示している。そして、正編の384語に、4語落ちていたので、合計388語、そして、続編の1,005語を加えた1,393語をもって日本語教育の基礎学習語としている。その語い表は、解説文に続いて、下記のように並べられている。(引用者注；引用の語群に外枠を設けた。)

あいさつ	あきる (飽)	あたる	あと (跡)	あまる (余)
あう (会)	あく (開)	あつい (厚)	あな (穴)	あむ (編)
あう (合)	あける (開)	あつい (熱)	あぶない	アメリカ
あかり	あさい (浅)	あつまる (集)	あぶら	あやまる (謝)
あかんぼう (赤ん坊)	あさって	あつめる (集)	あまい	あらそう (争)
あきらめる	あじ (味)	あてる (当)	あまり [副]	あらためる (改)

本文献は、比較的早い時期に、日本語教育用の基本語の選定に取り組んだ貴重な資料であって、その後の研究に比較的良好に活用されている。なお、この、何種類もの資料を検討してその中の何種類以上に含まれているから採用するという採択基準の立て方は、以下の調査研究に大きな影響を与えている。

文献(48) しょうがく こくご 1ねんの 1. 2. 3. における語い調査

大島 孜

昭和38(1963)年3月(謄写印刷 仮綴)

B5判 前書き4ページ 語彙表50ページ

この語彙調査は、当時青森県教育研究所に勤務していた大島孜氏が、小学校国語教科書「しょうがく こくご」(日本書籍版)の1年用(1, 2, 3巻)の用語調査を行い、それ以前に調査していた東京書籍版、学校図書版の用語調査2種と比較対照させたものである。なお、それらの資料は確認できていない。

〔構成〕

一 はじめに	1 ページ
二 調査方法・他	2 ページ
三 凡例	3～4 ページ
語彙表	
5・6・7月の部	1～5 ページ
10・11・12月の部	5～12ページ
1・2・3月の部	13～18ページ
合計の分	19～49ページ
後記	50ページ

まず、「一 はじめに」の最初の本文を引用しておきたい。

この調査の目的は、前回の「小学校一年の国語教科書における語イ調査(学図版)」や「あたらしいこくご 1ねん I II IIIにおける語い調査」において示しておいたものと同じである。

要約すれば、次のようになる。

- (1) 教科書は科学的、系統的に編集されていなければならない。もし、科学的、系統的でないならば、指導過程こそ科学的、系統的にしなければならないだろう。文字指導の立場でも、語い指導の立場でも。
- (2) 三つの比較をした。教えている子どもの実態と比べるなら、よりよい指導のめやすも出るし、教科書間のちがいによる差もうずめ得よう。
- (3) (引用略)
- (4) 幼児語の実態調査の手がかりともなる。(幼児語の実態が明らかになれば逆に、入門期の国語教育の系統性も明らかになるのである。)

× × ×

三つの教科書の総異なり語い数は2003、そのうち三社共通なのは、わずかに362語、一社のみの語いは1225となっているのは、入門期の国語教育のあり方に少しく疑義をいだかせるものである。また、右のように1000語前後を収録する根拠をも、いまいちど考えなおす必要があろう。この年齢の理解語い数は、約5,6000といわれている。

学 図	1081
東 書	1095
日 書	968

次に、「二 調査方法・他」「三 凡例」から小見出しを掲げて、簡単に紹介しておきたい。

「月別区分」— 再検討を容易にするために5～7, 10～12, 1～3の月別区分を採用した。

「見出し語の表記」— 教科書の最終段階の表記とした。

「語順」— アイウエオ順とした。

次に、「しょうがく こくご 日書 合計の分」の一覧表の一部を引用してみよう。

		5～7	9	10～12	1～3	計	東	学
あたま	頭	0	0	0	0	0	5	2
あたらしい		0	0	0	0	0	0	1
あたり	辺	0	0	1	0	1	0	1
あたる	当	0	0	0	0	0	2	0
あたる	火に～	0	0	0	0	0	0	3
あちら		0	0	0	0	0	1	0

この表に見られるように、成果が細やかに提示されている。上の欄の「5～7」などは月を表している。

ここで、「後記」に掲げられている二種の表を一つにまとめて提示しておきたい。

日	東	学	合 計	
○	○	○	362	
○	○	—	127	416
○	—	○	106	
—	○	○	183	
○	—	—	373	1225
—	○	—	423	
—	—	○	429	
合 計			2003	

- ・「日」は日本書籍版,「東」は東京書籍版,「学」は学校図書版を表す。
 - ・符号「○」は収録されている,「—」は収録されていないことを表す。
 - ・3種の教科書に共通する語は362語である。
 - ・2教科書間で共通する語は416語あるが,日書と東書,日書と学図の関係は,東書と学図の関係よりも薄い。それだけ,日本書籍版は独自の編集方針があるといえる。
 - ・1種しか収録されない語が1,225語とだんぜん多い。
 - ・擬声語・擬態語の多いことも考察すべきであろう。
- (引用者注;上記6項目は後記の簡条書きから取捨選択して引用したものである。)

最後に,3種に共通している語を最初から少し紹介しておきたい。

あ	〈感〉	あける	開	あそぶ	ありがとう	いう	言	いそぐ
青い		あげる	くれる	あひる(鳥)	ある	有	いく	行
赤		あげる	〈補〉	雨	ある	〈補〉	いく	〈補〉
赤い		足		あら(感)	あるく	歩	いけ	池
あかちゃん		あそび		あらう	洗	いい	良	いし
							石	五つ

本文献は,謄写印刷で作成されているが,誤記箇所は,薄い紙を貼って修正するなど丁寧な作業になっている。1年生用だけの調査とはいえ,3種の国語教科書の語彙調査を行って,それらを比較している。

上に少しふれたが,3種に共通する語はかなり基本的な語であるように判断される。

文献(49) 分類語彙表 (国立国語研究所資料集 6)

国立国語研究所

秀英出版 昭和39(1964)年 3 月31日

A 5 判 362ページ

〔目次〕

刊行のことば

まえがき	分類語彙表の意味	1 ページ
	この分類語彙表の性質	
	この本の体裁	
分類項目一覧		10ページ
分類語彙表		21ページ
五十音順索引		169ページ

「刊行のことば」全4段落の第2段落の本文に、本文献の内容が簡潔に取り上げられている。

本書は、現代語三万語あまりを、意味によって分類排列し、あわせて、さきに刊行した『現代雑誌九十種の用語用字』の語彙表に掲げた、使用率の高い約七千語のそれぞれが占める意味分類上の地位を示す一覧表である。

次に、「はじめに」で分類語彙表の意味・性質、そして、体裁について指摘している。

まず、「分類語彙表の意味」では、分類語彙表を定義して、「一つの言語体系の中で、その語彙を構成する一つ一つの単語が、それぞれどのような意味で用いられるかを一覧できるように、単語が表わし得る意味の世界を分類して、その分類の各項にそれぞれの単語を配当したものである。」と述べている。そして、その役割として、次の4項目、そして、更に2項目のことを指摘している。要約するかたちで紹介しておきたい。

- 1 表現辞典としての役割。すなわち、会話や作文の際、適当な、またはより適切な表現を選び、また同一の表現の単調な繰返しを避けるために、用いられるのである。
- 2 方言の分布や命名の変遷を知る手がかりとしての役割。一つの意味、一つのカテゴリについて、どのような命名が分布し、どのように変遷したかを知る。
- 3 ある個人またはある社会の言語体系もしくはある言語作品について、表現上の特色を見る物指しとしての役割。このような「意味の一覧表」に語彙をあてはめると、表現の過不足や、用語特徴的な集中が明らかになる。
- 4 基本語彙設定のための基礎データとしての役割。すなわち、類義語間のつりあいを、広い見渡しの上で、狭くも広くも見ることができ、したがって適切な語の選択ができるということになる。
- 5 辞書編集における解説作業に寄与する。
- 6 分類を妥当に組織だて、かつカテゴリに系統的に番号を与えることは、翻訳や情報処理たとえば文献要約などの機械化の一つの方法に、基礎的な作業となる。

次に、「この分類語彙表の性質」では、この研究が、文献(33)『現代語の語彙調査 婦人雑誌の用語』及び文献(37)『現代語の語彙調査 総合雑誌の用語』後編に収めた分類語彙表の分類の仕方をほぼ踏襲することを述べている。それは、大分類として「1. 体の類、2. 用の類、3. 相の類、4. その他の仲間」の4類に分

けるものである。

次に、各類の細分は、次のようになっている。

1.1	2.1	3.1	抽象的關係（人間や自然のあり方のわく組み）
1.2	—	—	人間活動の主体
1.3	2.3	3.3	人間活動 — 精神および行為
1.4	—	—	人間活動の生産物 — 結果および用具
1.5	2.5	3.5	自然 — 自然物および自然現象

次に、「分類語彙表」の前に挿入された黄色の紙に記されている凡例（1～7）を引用しておきたい。

- 1 約三万二千六百の語句が、意味の上から4類、13部門、798項目に分類してある。
- 2 分類の各項目には、分類番号と見出しが与えてある。
- 3 見出しは、その項目の内容がなるべくよく代表されるように選んだが、意味上の大体の目安に止まる。
- 4 各項目に収めた語句は、小グループをなすごとに行を変えて一括した。グループごとにさらに番号をつけた場合もある。
- 5 *印をつけた語は、国立国語研究所報告21『現代雑誌九十種の用語用字』第一分冊(1962)の語彙表の中に掲げられた語である。すなわち、それらの語の標本使用度数は、それぞれ7以上である。
- 6 語のあとにつけた括弧内の小さい数字は、その語について参照すべき他の項目の分類番号である。整数位の数字を欠くものは、同じ「類」の中の項目の番号である。
- 7 分類を概観するには、前に分類項目一覧がある。語を検索するには、後に五十音順索引がある。解説は、まえがきを見られたい。

本文献に収めた語およそ32,600語は、文献(44)『現代雑誌九十種の用語用字』第一分冊の語彙表に掲げた高使用率の語から、固有名詞と記号類を除く約7,000語を中心とし、それに続く約5,000語を補い、阪本一郎氏の文献(40)『教育基本語彙』に選ばれた22,500語の中の、上と重複しないものを加え、また、それらの語を各項目に分類したものを通覧した上で主観的に増補したものを含んでいる。

例えば、「1.517 熱」は、「1.5 自然物および自然現象」の下位分類で、「1.516。物質の変化」「1.516。火」そして、「1.517 熱」という順になっている。その「1.517 熱」は次のようになっている。

*熱 白熱 灼熱 加熱 放熱 ほとぼり 冷却 *冷凍(.385)
地熱 電熱 余熱 焦熱 暑熱 熱気

本文献の〔フロッピー版〕が平成5(1993)年10月に秀英出版から刊行された。なお、本文献の大幅な増補の作業およびソーラスの研究は何年も前から試みられていたが、昭和56(1981)年から科学研究費をとって組織的かつ本格的な取組が開始され、現在まで続けられている。

そのソーラスの研究の発表としては、平成9(1997)年度の第5回国立国語研究所国際シンポジウム「言語研究と世界のソーラス — 講演とシンポジウム — 」(平成9(1997)年8月27日～29日)が外国からの研究者をも招聘して3日間開催された。

本文献は、刊行後、数多くの研究文獻に活用され、また、引用されている。その活用・引用については国立国語研究所報告104『研究報告集13』(平成4(1992)年3月)所収論文「言語研究におけるソーラスの利用」(宮島達夫・小沼悦)の「年代順文獻目録」に119編が提示されている。

文献(50) 児童・生徒の語い力の調査 本調査(昭和35年度)〔中学校第3学年〕

文部省 (国語シリーズ58)

教育図書 昭和39(1964)年9月20日

B6判 まえがき等9ページ, 本文418ページ

〔目次〕(まえがき等を除く)

§1 本年度の調査について

- | | |
|-------------|--------|
| 1 事前の調査について | 1 ページ |
| 2 本調査について | 63 ページ |
| 1) 調査語の選定 | |
| 4) 調査の方法 | |

§2 資料

- | | |
|--------------|---------|
| 1 調査語 (問題) | 97 ページ |
| 2 50音順整理表 | 237 ページ |
| 3 学習語調査協議会要録 | 381 ページ |

この『児童・生徒の語い力の調査』のシリーズとしては、次の6種の報告書が刊行されている。

国語シリーズ番号	調査学年・段階		調査語総数	調査年度	刊行年月	本報告書の採否
41・42	準備調査		14,241	昭和32年度	昭和35年2月	文献 (42)
51	本 調 査	小学校第6学年	10,047	昭和33年度	昭和37年3月	文献 (43)
52		小学校第4学年	5,451	昭和34年度	昭和38年2月	文献 (46)
58		中学校第3学年	6,874	昭和35年度	昭和39年9月	文献 (50)
59		低学年の学習語	2,048	昭和37年度	昭和39年9月	文献 (51)
63		中学校第1学年	6,874	昭和36年度	昭和42年5月	取り上げない

この中の文献(50)の「中学校3年」と国語シリーズ63の「中学校1年」の2種は、調査語がまったく同じで、「中学校語い」という観点で調査語の選択が行われている。この中学校語いの選定の基準は次のとおりである。すなわち、文献(43)の「小学校第6学年」の児童に対して実施した調査の結果、第1段階（よくわかる）と第2段階（だいたいわかる）を合わせて50%以上あった語は、原則として省くことにした。また、その際、特殊な用語や物品名など約100語を省いた。このようにして省いた語は計約4,800語であり、昭和33年度に提出した語が10,047語であったから、約5,200語が中学校語いとして残った。

これに、次の手続きで1,600語余りを補充して、合計6,874語の調査語を選び出した。

- 1) 昭和32年度の調査で提出したが、小学校第6学年の児童にむずかしすぎるとして、昭和33年度の調査で省いた語。
- 2) 国立国語研究所、その他が行った各種の語彙調査の結果。
- 3) 市販されている国語辞典類。

この1,600語が実際にどのようにして選定されたのか、つまり、上記の1)～3)のそれぞれがどのように検討

されたかなどについては何も記されていない。

次に、国語シリーズ63として刊行された〔中学校第1学年〕の調査語は、すでに記したように、文献(50)と同一であるので、両学年の調査の結果を併記することにした。なお、「調査語」の括弧内の語句は、問題用紙の各調査語に添えられた用例である。また、各学年の1～4の欄は、次の各段階を表す。

- 1……よくわかることば、
- 2……だいたいわかることば、
- 3……ぼんやりとしかわからないことば、
- 4……全然わからないことば。

調査用紙	調査語	中学校第1学年				中学校第3学年			
		1	2	3	4	1	2	3	4
1-1	アーチ (緑色のアーチ)	9.3	12.3	27.0	51.3	24.3	21.3	26.3	28.0
2-1	あいがん (哀願する)	6.0	7.7	22.7	63.7	19.0	29.0	29.0	23.0
3-1	あいき (愛機)	22.7	17.3	23.7	37.3	31.0	18.7	23.3	27.0
4-1	あいぎ (合い着)	28.0	23.0	31.3	17.7	33.7	25.7	28.3	12.3
5-1	あいくるしい (愛くるしい)	10.0	28.7	39.3	22.0	23.3	34.3	28.0	14.3
6-1	あいご (愛護する)	35.3	28.3	18.3	18.0	56.7	26.7	12.7	4.0
7-1	あいしゅう (哀愁をおびた声)	8.7	20.0	39.0	32.3	26.7	39.0	27.0	7.3
8-1	あいしょう (愛唱する)	19.7	33.0	31.3	16.0	41.3	35.3	17.3	6.0
9-1	あいしょう (愛称)	20.0	27.0	33.7	19.3	49.0	29.7	16.3	5.0
10-1	あいしょう (相性)	8.7	24.3	37.3	29.7	16.7	30.7	31.0	21.3

ここには表の最初の部分を引用した。中学校第1学年で言えば、第1段階と第2段階を合わせて10%以下の語が全体で220語あるが、ここに掲げた中にその1語（あいせき）が含まれている。

最後に、この『児童・生徒の語い力の調査』という一連の調査は、その後の学習語彙選定の資料としてほとんど活用されていない。それは、次のような問題点があったからだと考えられる。

- ① 調査語の選定のための最初の資料が比較的古い語を含んでいた。
- ② 内省法、つまり、回答者の主観的な判断に任せるしかないという問題があった。
- ③ 多義語についての配慮が欠けていた。
- ④ 各語についての比率は掲げられたが、全体を整理するに至っていない。
- ⑤ 例えば、1年と3年の発達段階といった調査の結果の考察ができていない。

本文献は、調査語の選定の方法、そして、その結果として選定された調査語の2点において、現在もなお、貴重な意味を有していると考えられる。他方、すでに35年余りが経過しているので、このまま使用するわけにはいかなくなっている。

文献(51) 児童・生徒の語い力の調査 低学年の学習語（昭和37年度）
文部省（国語シリーズ59）
教育図書 昭和39(1964)年 9 月20日
B 6 判 350ページ

〔目次〕（「まえがき」及び「付（名簿，調査しなかった語の表）」は省略）

第 1 調査の意味と方法	第 2 調査問題の作成	
第 3 予備調査	第 4 本調査	
第 5 吟味調査	第 6 調査語の成績	
〔調査語の表〕		121ページ
出題順表		121ページ
音順表		199ページ
得点順表		237ページ

この『児童・生徒の語い力の調査』のシリーズとしては、次の6種の報告書が刊行されている。

国語シリーズ番号	調査学年・段階		調査語総数	調査年度	刊行年月	本報告書の採否
41・42	準備調査		14,241	昭和32年度	昭和35年 2 月	文献（42）
51	本 調 査	小学校第 6 学年	10,047	昭和33年度	昭和37年 3 月	文献（43）
52		小学校第 4 学年	5,451	昭和34年度	昭和38年 2 月	文献（46）
58		中学校第 3 学年	6,874	昭和35年度	昭和39年 9 月	文献（50）
59		低学年の学習語	2,048	昭和37年度	昭和39年 9 月	文献（51）
63		中学校第 1 学年	6,874	昭和36年度	昭和42年 5 月	取り上げない

これら6種の中で、本文献は、調査語選択の上で特別な意味をもっている。なお、この『児童・生徒の語い力の調査』の目的などについては、本文献より先に刊行されている文献(42)以下の各文献で紹介してあるので、本文献では、「低学年の学習語」に重点をおいた紹介を行うようにしたい。

「第 1 調査の意味と方法」の「これまでの調査の経過」では、昭和32年度分から年度ごとに簡潔に調査内容・方法を紹介した上で、「昭和37年度」では、次のように説明している。

以上のような経過をたどって、調査の第 6 年度にあたる本年度は、小学校の低学年の段階で指導すべきことばにはどんなものがあるかを知る手がかりをつかむ資料を得ようとして、小学校の第 2 学年の児童を対象に、2,048語について調査することとなった。調査地域は、東北・中国両地方である。

その2,048語は、未調査語及び既調査語の 2 種を合わせたものである。

まず、既調査語から紹介すると、文献(46)の小学校第 4 学年の調査で、第 1 段階（よくわかる）と第 2 段階（だいたいわかる）の和が80%以上の語に限定した上で、「次のような考えで、多少の変更を加えることとした。」と述べて、次の 4 項目を掲げている。ここでは整理して引用してみよう。その結果、既調査語として 1,074語を得ている。

- ① 接頭語・接尾語・助数詞は省く。
- ② 代名詞・感動詞・接続詞・助動詞・助詞・曜日の名・数詞は省く。
- ③ 動植物名・地名・人名・擬声語・擬態語は省く。
- ④ 小学校の第1学年の児童の大半が知っていると考えられる語、児童の大半が第3学年以後にわかるようになると思われる語、第2学年の児童に対する調査語としては不適切と思われる語は省く。

この既調査語については、次のような配分で出題している。

- ア 理解度95%以上の100語(100問) イ 理解度90%以上の348語(347問)
ウ 理解度85%以上の344語(344問) エ 理解度80%以上の274語(273問)

この調査の採用は、内省法を採用しているので、第2学年の児童の回答の信頼性を確かめる上で必要なことであった。「出題順表」には、対比できるように「市・郡・総合・4年」の各欄が用意されている。

次に未調査語については、次の5種の資料から適切な語を求めている。

- 1 〈主観的に選んだ表〉文献(40)『教育基本語彙』の低学年用5,000語と高学年用7,500語の中で、これまでの第4学年以上で調査した語を除く。また、動植物名などを除くと、合計3,521語が残る。
- 2 〈日本語教科書の用語〉次の2種の語表を資料として、同じ手続きで924語が得られた。
ア 東京日本語学校 Grammar and Glossary 1,415語
イ 国際学友会日本語学校 NIHONGO NO HANASIKATA 498語
- 3 〈国語教科書の用語〉昭和37年度の7種の教科書から3種を選び、第3学年までの新出単語を調査した結果、次のような数が得られた。
第1学年 1,709語 第2学年 1,361語 第3学年 1,512語
- 4 〈雑誌の用語〉文献(44)『現代雑誌九十種の用語用字』の4層及び5層にわたって用いられているものを拾うと、4,534語となった。ここから、動植物名などを省くと、1,516語が得られた。

これらの未調査語のカードを整理したところ、約3,200語が得られた。ここから、国語課で「入学前の子どもでも当然知っていると思われることば」約1,200語を除き、残りの約2,000語について、調査の協力委員に「第1学年の児童の大部分が知っていると考えられることば」「第3学年の児童の大部分にとってわからないと思われることば」にしるしを付けてもらい、第2学年で調査する語974語を選んでいる。

次の表は、延べ2,048語を、五十音順に並べたものの最初の部分である。

	用紙のページ	語	得点の段階
あ	1	あいさつ	A
	1	あいず	B
	6	あいてのひと	B
	40	からだにあう	C

この得点の段階は、平均点78.66、標準偏差15.52によって分けたもので、平均から上下へ標準偏差の1倍までの区間をB・C、2倍までの区間をA・D、3倍までの区間をEとしたものである。

本文献には、この2,048語の五十音順表、得点順表以外に、「調査しなかった表」として、「やさしい語の表」「ややむずかしい語の表」「その他調査からはずした語の表」などが掲載されている。また、本文献の調査語に関しては、分析・検討がていねいに行われていて、たいへん参考になる。

文献(52) 言語要素とりたて指導細案 小学1・2・3年

神奈川県横浜市立奈良小学校（初版。再版以降は「林進治著」）

明治図書 昭和40(1965)年3月

A5判 293ページ

昭和30年代は民間教育団体が教育研究に力をいれていた。その一つの児童言語研究会は、次に掲げる文献を刊行し、日本の言語の教育の実践研究に有力な道を開いた。そこでは、1,000語程度の論理語彙を中心とした学習基本語彙を提案していた。

文献番号	書名	編著者	分類案	分類の基準
文献(45)	言語要素指導	児童言語研究会	AB別・五十音順	
文献(52)	言語要素とりたて指導細案	奈良小学校	学年別・五十音順	文献(12)
文献(54)	言語要素とりたて指導入門	林進治	学年別・意味別	文献(12)
文献(77)	文字・語句教育の理論と実践	松山市造	学年別・意味別	文献(49)

まえがき

I 言語要素指導総説（一～八章の中から関係する章節だけを提示する）	11ページ
二 語イ指導の内容	17ページ
六 語イ指導の系統と方法	37ページ
1 認識・思考のための観点から	3 学習基本語イの学年配当
2 学習基本語イ選定の具体的手続き	4 語イ指導の方法
II 各学年の実践計画（章節を省略）	91ページ

まず、「I・六・2 学習基本語イ選定の具体的手続き」の本文を引用しておきたい。

学習基本語イ選定の実際にあたっては、①三省堂 明解国語辞典 ②光文書院 新国語学習辞典によって、記載されているひとつひとつの語について、前記①認識・思考を高める ②語イそのものの系統的な理解のうえに重要だと思う語をマークし、①阪本一郎氏 語イ調査 ②児・言・研選定の学習基本語イ等を参照して、小学校六年間にとりあげる語をえらんだ。なお、その後に垣内氏の語イ体系による分類で、それぞれの系統が必要でじゅうぶんであるかどうか検討した。つぎに、こうして選んだ語を、

- ①前記、新国語辞典の学年配当（4年～中学3年）
- ②横浜教育研究所 教科書の学年別語イ提出頻度調査
- ③現在使用の学図の教科書

等を参考としながら、ひとつひとつの語を職員全員で検討の上、学年配当を決定した。

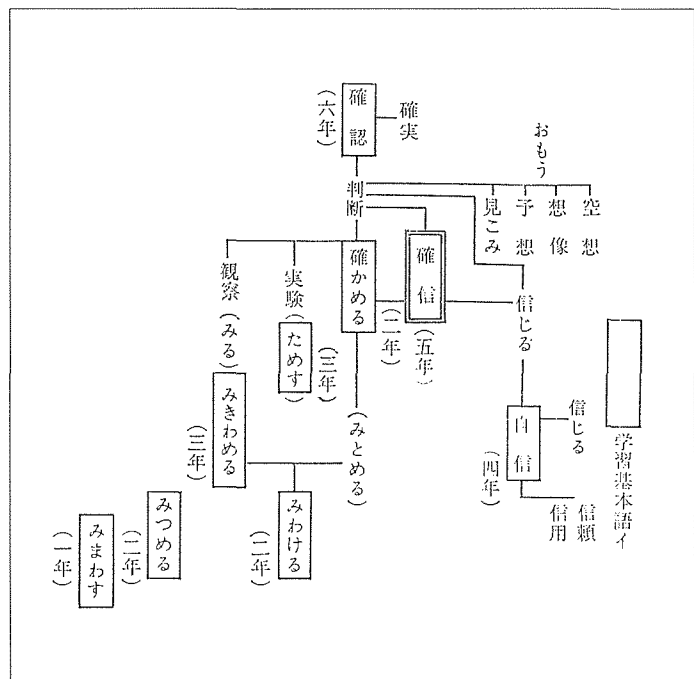
ここでいう「②光文書院『新国語学習辞典』（昭和36(1961)年3月）」は、文献(42)『児童・生徒の語い力の調査 準備調査』の全見出し14,241語を、4年生から中学3年までの学年段階に分類している。また、「①阪本一郎氏 語イ調査」は文献(40)『教育基本語彙』のこと、「②児・言・研選定の学習基本語イ」は文献(45)『言語要素指導』の「児言研・国語科教育語い（第一次試案）」のこと、「②横浜教育研究所 教科書の学年別語イ提出頻度調査」は文献(34)の『小学校国語教科書における漢字調査』のことである。

次に、上記の語彙選定についての「なお書き」①～④を引用しておきたい。

- ①一つの単語として、教えるのではなくて、語イとして、その語をあみの結びめとして、上・下・周辺の語をすくいあげて指導する。例えば、「確信」についていえば、確信という語にスポットをあてて、その周辺をとりあげていくわけだから、二年生からとりあげた基本語イをはじめ、そのあいだあいだに、無数の単語が介在している。それらを、一つの群として指導することになる。したがって、確信の周囲の「見こみ」「予想」「見通し」「信じる」「信用」などは基本語イとしてはとりあげない。
- ②また、反対語は特別双方が重要な意味をもたないかぎり一方だけをだす。(「不可能」をだすが「可能」はださない、これは同時に教える)
- ③他教科の中で教えるものは省く。
- ④具体的な事物をあらわす名詞は特別なものをのぞいて、基本語イとしてはあつかわない。

以上のような方針で、次に掲げる数量の「学習基本語イ」を選定している。

学年	語 数
1 年	96
2 年	102
3 年	117
4 年	205
5 年	238
6 年	238
合計	996



上掲の「確信の図表」で少しわかりにくいのは、「□で囲っていない語は「基本語イ」として取り上げない」というように考えられていることである。確かに本表中の「みる」「信じる」「実験」の3語は996語の中に入っていないが、それ以外の語はすべて採録されている。また、例えば1年用の96語から少し引用してみると、上掲の方針に反して、次のように反対の関係にある語の両方が採録されている。

〈はじめる — やめる〉 〈にている — おなじ — ちがう〉 〈うそ — ほんとう〉
 〈あわせる — わける〉 〈さんせい — はんたい〉 〈そうだん — はなしあい — きめる〉

本文献に認められる問題点は、垣内松三氏の文献(12)『基本語彙学 上』による点検が十分でなかったことに関係しているのであろうか。そうした問題点のあることが、文献(54)『言語要素とりたて指導入門』の刊行につながるようにも思われる。

文献(53) 幼児言語の発達

大久保 愛

東京堂出版 昭和42(1967)年11月10日

A 5 判 406ページ

〔目次〕(細目は省略)

序

まえがき

第一部 幼児言語の発達

9 ページ

一 語彙の発達

二 助詞の発達

三 活用語の発達

四 疑問表現の発達

五 文構造の発達

第二部 一幼児の言語生活の記録

202ページ

一 ことばの準備期

二 一語文の時期

三 二語文の発生

四 第一質問期

五 多語文・従属文の発生

六 第二質問期

七 文章構成期

八 おしゃべりの時期

九 「大人ことば」模倣期

一〇 就学前期

第三部 幼児言語の研究法(細目を省略)

309ページ

あとがき

付 Y児の使用語一覧(五十音順)

398ページ

索引

本文献は、著者が自分の長女の言語発達を5年間追跡した成果を掲げている。

この仕事に手をつけたのは昭和33年12月、この幼児の満1歳1ヵ月の時でした。それから昭和39年11月、満6歳までのことばを追跡しました。(まえがき)

資料は、毎月誕生日と同日(このばあい毎月18日)前後に三十分から一時間Y児の話しことばをテープに録音する。(6歳までの全テープ数は、両面で一時間のもの約30本であった)と同時に随時メモおよび、ある時間を限っての速記をとった。また4歳では二十四時間調査、5歳では発問法による語彙調査を行った。延語数は約二万余語であった。(一・一 語彙の発達)

第一部の「一 語彙の発達」は、次の3節構成になっている。その第2節の最初の本文を紹介してみよう。

- | | |
|--------------------|------------|
| 1 意味分類法によるY児の語彙の実態 | ……………11ページ |
| 2 6歳までの使用語彙数 | ……………64ページ |
| 3 語彙の使用と理解の状況 | ……………70ページ |

ここでは、1の意味分類からみたY児の語彙の実態でとりあげられなかった面をあきらかにしようとしている。まずその一つとして、Y児の使用語彙数を調べてみることにする。

Y児から満6歳までに採集した初出語数は、三、一八二語で、のべ使用数は二一、九八五であった。これを五段階に分けてみた。前にもものべたが、6歳までに百回以上の使用数を持つ語をA段階の語とし、以下50回以上をB段階、20回以上をC段階、2回以上をD段階、1回をE段階として、年齢別に段階別初出

語数を見ると表1のようになる。

第1表 段階別初出語数

	A	B	C	D	E	計
1:1~1:11	23	30	117	144	46	360
2~2: 5	4	22	117	193	77	413
2:6~2:11		4	32	148	72	256
3~3:11			27	285	203	515
4~4:11			9	249	358	616
5~6			1	200	821	1,022
計	27	56	303	1,219	1,577	3,182語

次に、「付」として掲げられた「Y児の使用語一覧（五十音順）」を取り上げてみよう。まず、その一覧表の前に掲げられた説明を全文引用しておきたい。

これは、Y児の6歳までの使用語を全部五十音順に並べたものである。自立語のみで、助詞・助動詞の類はあげなかった。第一部第一章「語彙の発達」の項の年齢別意味分類語彙表の索引にもなっている。一応使用段階もつけておいた。A段階は100回以上出たもの、B段階は50回以上、C段階20回以上、D段階2回以上、E段階1回のものである。（意味分類番号のうち、かっこのものは、『分類語彙表』に語があがってないので著者が補充したもの。また幼児語もあげたが、話しことばの発音は標準的な発音にして並べた。詳しくは本文12~13ページ参照。）

次に、「Y児の使用語一覧（五十音順）」の最初のページの一部を複写で掲げてみよう。

語	意味分類 番 号	使用 段階	語	意味分類 番 号	使用 段階
〔あ〕			青 い	3.502	E
ああ(いう)	3.100	E	青木先生	(1.6)	E
あい《烏呼》	4.310	C	青 空	1.520	E
あーあー	4.300	D	赤	1.502	C
アーモンド	(1.434)	E	垢	1.5111	E
あーん(て泣く)	(3.503)	D	赤 い	3.502	C
愛	(1.6)	D	赤 組	(1.281)	E
あいうえお《文字》	(1.3113)	D	赤ずきん(ちゃん)	(1.6)	D
あいこでしょ	(4.301)	D	赤ちゃん	1.205	C
(ご)あいさつ	1.3121	D	赤チン	1.436	E
アイスクリーム	1.434	C	あかとんぼ	1.565	D
アイスクリーム屋	(1.2412)	E	明 り	1.460	D
愛す(る)	2.302	D	上 り	1.1540	E
あいそ	1.3030	E	上 る	2.1540	D
あいだ	1.176	D	あがる《食》	2.333	D
あいだがら	1.1110	E	明るい	3.501	D
あいて	1.220	D	秋	1.1624	E

本文献は、幼児1名の使用語彙を調査した資料ではあるが、使用段階まで検討できているので、確かな価値をもつといえる。

文献(54) 言語要素とりたて指導入門

林進治

明治図書 昭和45(1970)年2月初版(昭和52(1977)年3月 3版)

B 6 判 224ページ

児童言語研究会は、次に掲げる文献を刊行し、言語の教育の実践研究に有力な道を開いた。語彙指導で言えば、1,000語程度の論理語彙を中心とした学習基本語彙を提案している。ここでは、林進治氏の著書である文献(54)を取り上げる。なお、本報告で使用した文献は「1977年3月3版」という刊記になっていて、初版の刊記がない。そこで、初版の刊記は『国語年鑑』で補った。

文献番号	書名	編著者	分類案	分類の基準
文献(45)	言語要素指導	児童言語研究会	AB別・五十音順	
文献(52)	言語要素とりたて指導細案	奈良小学校	学年別・五十音順	文献(12)
文献(54)	言語要素とりたて指導入門	林進治	学年別・意味別	文献(12)
文献(77)	文字・語句教育の理論と実践	松山市造	学年別・意味別	文献(49)

本文の目次は、学習基本語彙を中心に上げると、次のようになっている。

II章 言語要素とりたて指導の系統と方法(一、三節の見出し等を省略)

二 語彙指導の体系と方法(4～11は省略)

1 学習基本語彙を中核として 2 基本語彙選定の手順 3 学習基本語彙の学年配当

まず、「II・二・2 基本語彙選定の手順」の第4段落以下を引用しておきたい。

認識をたしかなもの、ゆがみのないものにしようとするねらいから考えれば、外に対しては、抽象的關係や空間・物体をどうとらえるかというための語、内にむかっては、知・情・意のはたらきやその結果をどうおさえるかというための語、これを幅ひろくひろいあげる必要があります。このためにたいへん参考になるのは垣内松三氏の研究です。わたしたちはその労作「基本語彙学」の体系的分類にもとづいて、小学校という教育的段階を考え、一部を修正してつぎのように項目をたてました。

本文では、6類24項目の分類案を提示している。これは、垣内松三氏の文献(12)『基本語彙学 上』の分類を修正した分類案である。ここでは、その表を使って選定語句の数量を掲げてみよう。なお、その数字は、引用者が数えたものである。

類	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計	項目数
第一類 抽象的關係	45	50	71	90	73	76	405	①存在 ～⑩原因
第二類 空間	19	20	32	33	26	22	152	⑪一般 ～⑭運動
第三類 物体	8	15	26	32	30	46	157	⑮一般 ～⑰有機物
第四類 精神一般・知	19	16	34	41	60	37	207	⑱精神一般～⑳觀念の伝達
第五類 意	5	9	10	10	13	4	51	㉑個人的 ～㉒社会的
第六類 情	12	14	11	16	7	9	69	㉓個人的 ～㉔社会的
合 計	108	124	184	222	209	194	1,041	

本文献は、続いて、『新国語学習辞典』（興水実監修 光文書院 昭和36(1961)年6月初版）の巻頭に置かれた「文部省の調査による級別学習基準語い表」で点検を行っている。これは、文献(42)『児童・生徒の語い力の調査 準備調査（昭和32年度）』に掲げられた調査語（50音順整理表）14,241語を「学習の便となり、学習に直結するものとして、級別にして五十音に配列」した表である。小学校4年程度を1級語彙とし、中学校3年程度の6級語彙までの6級に整理している。その表で点検を行ったとあるが、本文献は、小学校の1年から6年までであるから、限られた点検ということになる。

本文献は、その上で、「基本語イ」の取捨選択の基準として、次の5項目を掲げている。

- ① 他教科で教えた方がよいものはそれにゆずる。（例 和・比重・明度・メロディー）
- ② 反対語・同義語などについては、基本となるものを一つ選ぶ。（需要をあげれば供給は省く。）
- ③ 同じ類・同じ群に属するものの中からは代表的なものを選ぶ。
- ④ 具体物の名称は原則としてはとりあげない。
- ⑤ 基本的であり、重要であっても、すでにおおかたこどものものになっているものはとりあげない。

次に、「3 学習基本語イの学年配当」は縦に学年、横に類・項を立てて各語を配列している。例えば、第5類の「意」を引用してみよう。なお、引用に際して、漢字仮名交じりの表記を用いた。

類	項	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
第5類 意	21 個人的	決める 用意	決して 進んで ねらい …つもり 望み こらえる	意見 意外 決心 目的 注意 勇気 求める	改める 決意 実行 集中 努力 願い 熱意 目標 やむを得ず	あえて 意志 確信 自治 自発的 貫く 訴える 報いる	意欲 故意 償う
	22 社会的	賛成 約束 守る	与える 受け取る 賛成する	協力 励ます 任せる	同意	一任 一致 要求 追及 委員	使命

本文献の基本語彙も、本書の語彙指導の実際を見ていると、必ずしも活用されているとは認めがたい。

文献(45)『言語要素指導』に端を発する論理語彙の考え方は、認識力・思考力に働く語彙の学習を目指している。その見方・考え方は後に続く実践研究に大きな影響を与えた。

なお、著者には『一読総合読みにおける言語事項の系統的指導細案 総説編』（明治図書 昭和57(1982)年5月 A5・180ページ）があり、その「VI 語イ指導の系統と方法」に「学習基本語（学年）指導系統表」が掲げられている。そのことについては「一九六四年、横浜市奈良小学校で、全職員が各学年ごとに、学年ごとの試案をつくり、全学年つき合わせて（中略）一次案を作り、五年間継続指導し、横浜市の標準テストなどの結果とも合わせて検討し、さらに、一九七〇年、第二次案を作成しました。一九八〇年、新教科書が誕生したので、これと比較して加除訂正したのが今次案です。」と説明されている。その「一次案」は文献(52)、「第二次案」は本文献を指している。そして、この「今次案」である「学習基本語（学年）指導系統表」は語数及び語選定の基準の上で文献(52)や文献(54)の改良版とは認めがたい。8ページにわたる一覧表ではあるが、説明がなくて分かりにくいので、本報告では採り上げていない。

文献(55) 電子計算機による新聞の語彙調査 (国立国語研究所報告37)
国立国語研究所
秀英出版 昭和45(1970)年 3 月
B 5 判 342ページ

本文献は、上掲の報告書名で合計 4 冊が刊行された。なお、II 以下との関係で、第 1 冊目の文献に「I」を付ける。以下、それぞれの文献の目次の大きな柱を掲げておく。

- (I) 電子計算機による新聞の語彙調査 I 昭和45(1970)年 3 月 B 5 342ページ
I 調査の概要 II 短単位表・長単位表の説明
○五十音順短単位表 ○度数順短単位表 ○簡易五十音順長単位表
○度数順(層別)長単位表 ○長単位層内順位表
- (II) 電子計算機による新聞の語彙調査 II 昭和46(1971)年 3 月 B 5 314ページ
I 調査の概要 II 語彙量の分析 III 度数順外来語表 IV 品詞別度数順短単位表
V 五十音順索引 VI 同音短単位表 VII 同形短単位表
- (III) 電子計算機による新聞の語彙調査 III 昭和47(1972)年 3 月 B 5 159ページ
I 調査の概要 II 短単位連接表の処理と分析 III 短単位位置別集計表(度数順)
IV 名詞性接辞連接表(五十音順) V 用言性接辞連接表(五十音順)
VI 形容動詞語尾別表(五十音順) VII 助動詞・助詞連接表(五十音順・度数順)
- (IV) 電子計算機による新聞の語彙調査 IV 昭和48(1973)年 3 月 B 5 530ページ
調査の概要 ▽頻度順(層別)長単位表 ▽長単位層内順位表 ▽簡易五十音順長単位表

第 I 冊の「刊行のことは」の前半及び「I 調査の概要」の「2.2. 調査対象」を引用しておきたい。

国立国語研究所は、現代語の語彙の実態を明らかにすることを目的として、早くから語彙調査を行ってきた。(中略) これらはいずれも雑誌の用語を調べたものであるが、現代語の実態を知るための資料として、なお、新聞を見のがすことができない。

上記のように新聞を対象として取りあげたが、取り扱いの便宜と適当な調査規模ということを考えて、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の三紙とし、昭和41年 1 年分について日曜特別版を除く朝夕刊全紙面をその対象と考えた。

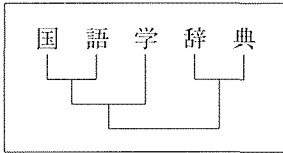
この調査で得た主要なデータは、次のとおりである。(27ページの「主要データ一覧」による)

	単位	全体	部分	語数
延べ	長単位	679342	556264	約200万
	短単位	940533	431186	約300万
異なり	長単位	101081	100458	11044
	短単位	47805	29822	13234

- (注)
- (1) 「語数」欄の数字は、長単位度数 6、短単位度 5 以上の語数。
- (2) 「全体」は記号や算用数字を含める。活用語については、各活用形(変化形)が別々の見出しとして集計されている。
- (3) 「部分」は、「全体」の中から固有名詞・助詞・助動詞・算用数字・記号類を除いたもの。終止形を採用。

以下、主として短単位の異なり語について紹介する。

「短単位」は、「最小単位が、ある条件を満たす形で結合した（または結合しない — これは0回結合と考える）結合体」と定義されている。次の例で言えば、短単位が一次結合の「国語」「辞典」であり、「国語学」



は二次結合、「国語学辞典」は三次結合の長単位ということになる。

基本語や基礎語を検討する点では、長単位は用途が限られることになるので、短単位を検討するほうがよい。ただし、教室で実際に語句指導を行う際は、長単位を取り上げることが多い。

ここで、「五十音順短単位表」の「部分」（固有名詞・助動詞・助詞・数字・記号を除いた短単位見出しについての集計結果）の最初の箇所を紹介してみよう。

全 体		見出し	語種・品詞	度数	部 分	
順位	出現率				順位	出現率
3353	.024	ア	外・名	23	2822	.053
6713	.013	ああ	和・感	12	4723	.028
9648	.006	アート	外・名	6	7686	.014
9648	.006	アートシアター	外・名	6	7686	.014
961	.095	愛	漢・名	89	773	.206
10844	.005	相	和・名	5	8567	.012
4500	.017	あい	～	6	3787	.037
10844	.005	*相営む	和・動	5	8567	.012
8664	.007	アイカ	漢・名	7	6947	.016
8664	.007	*相変る	和・動	7	6947	.016
7196	.010	愛好	漢・名	9	5862	.021
9648	.006	愛国	漢・名	6	7686	.014
1906	.047	あいさつ	漢・名	44	1610	.102

この一覧表について少し解説を加えると、「全体」は「すべての短単位についての集計結果」を表す。また、「部分」はすでに引用したように「固有名詞・助動詞・助詞・数字・記号を除いた短単位見出しについての集計結果」を表す。そして、ここでは「部分」に該当する見出しだけを引用している。「全体」の見出しを数えると、この「あいさつ」までで合計20語を数える。20語中の13語が「部分」に該当している。次に、見出し「相営む」「相変る」の頭に付いている「*」は「用言（動詞・形容詞）の代表形見出し」を表す。また、度数5の「相」「相営む」が部分順位8567番で、度数順の最後に位置する語群に属している。

次に、「度数順短単位表」は、総度数30、全体順位2699番、部分順位2288番までの語について上掲の「五十音順短単位表」と同じ形式で提示したものである。そして、総度数29以下6以上については、度数ごとに各見出し語を五十音順に整理して、語種・品詞の情報だけを示している。なお、本報告では、長単位語彙表については採り上げることができなかった。

本文献は、文献(44)『現代雑誌九十種の用語用字』などと並んで国立国語研究所の大型の語彙調査として位置づけられる。そして、文献(62)『学習基本語彙の基礎調査』などの基礎資料として活用されている。

文献(56) 実用和英辞典(PRACTICAL JAPANESE-ENGLISH DICTIONARY)

財団法人 海外技術者研修協会 (編集主幹 玉村文郎)

海外技術者研修調査会 昭和45(1970)年 6 月 1 日 初版

昭和49(1974)年 6 月15日 改訂版

新書判 271ページ (凡例等 7 ページ 本文228ページ 付録36ページ)

[目次] (以下の目次に「(凡例)」を補った)

PREFACE(Fumio Tamamura) (1 ~ 3) ページ

(凡例) (1 ~ 4) ページ

SPECIAL FEATURES OF THIS DICTIONARY

INTRODUCTORY REMARKS

SPELLING AND PRONUNCIATION

ABBREVIATIONS

本文 (1 ~ 228) ページ

APPENDIX I ~ V (1 ~ 36) ページ

序文によれば、従来の和英辞典は漢字と仮名を使っているの、日本語学習者に使いにくいこと、小型のよい辞典がないことなどを挙げて、ローマ字で見出しを掲げる利点などについて述べている。その編集上、留意した 6 項目の中から最初の 3 項目を紹介しておきたい。

- 1) 採録語の選定基準は、語彙の使用頻度に関する統計的な調査に基づくが、日常生活で最も必要となる語彙を重視する。
- 2) 見出し語にはできるかぎり多くの意味説明を付与し、その語の意味が十分理解されるようにする。
- 3) 同義語、対義語、派生語などの関連語も採録する。これによって、利用者は各語の全体像を把握することができる。

次に、本文献は、見出し語として3,209語を選定している。その選定の仕方について、解説を加えながら紹介したい。まずは、文献(44)『現代雑誌九十種の用語用字 第一分冊 総記および語彙表』の「第2表使用率順語彙表(全体)」の順位1番から1207番までの語を採り上げている。順位1207番までの語は第2表の中でも、見出し以外に、使用率、95%の信頼区間、精度の3種の情報が付けられている語である。

そして、それらに追加して、次に例示するような文献の語彙表から、日本語学習者に必要な語を2,000語近く補っている。ただ、掲げられている6種の文献から、どのような操作で2,000語を選定したのかは記されていない。この見出し語全体の選定は、上に引用した「1)」に示される二種の選定の方法を組み合わせたものである。つまり、全体のほぼ三分の一の選定が統計的な調査に基き、残りの三分の二が基礎語彙的配慮、すなわち、「日常生活で最も必要となる語彙を重視する」立場に立っている。

- ・List of Basic Japanese Words. 土居光知
- ・English-Japanese & Japanese-English Dictionary. Oreste Vaccari.
- ・Practical Japanese Conversation. 海外技術者研修協会

さて、本文献の本文は、次の形式になっている。5 ページ上段の「汗」以下の箇所を引用してみよう。

ase 汗(あせ) N. sweat, perspiration: ~ *o kaku*=to sweat, to perspire
ashi 足、脚(あし) N. foot, leg, paw [cf] *ashi-ato* =footprint, footmark
ashita 明日(あした) N. tomorrow: ~ *no asa* =tomorrow morning / ~ *no ban*=tomorrow evening (Ant) *kinō*=yesterday (Syn) *asu*
asob-u 遊(あそ)ぶ (asobi, asonde) Vi. I ① to play ② to amuse oneself, to enjoy oneself [cf] *asobi*=game, sport, pastime, relaxation

この引用に明らかなように、本文献は、ローマ字で見出し語を掲げて、漢字交じりの平仮名で表記形を示している。訳語を提示しているが、「ase 汗(あせ)」の「~*o kaku*=to sweat, to perspire」のように慣用的な言い回しもいくらかは提示している。

次に、最初の見出し60語を漢字仮名交じりの表記で順に掲げてみよう。この表の「a」は文献(99)「日本語教育基本語彙2570語」,「b」は文献(59)『外国人のための基本語用例辞典』(見出しは約4,000語)をそれぞれ参考までに掲げたもので、○印が見出しにあることを示している。

見出し	a b	見出し	a b	見出し	a b	見出し	a b
ああ	○○	味	○○	網	○○	改める	○○
浴びる	○○	赤, 赤い	○○	穴, 孔	○○	洗う	○○
危ない	○○	赤ちゃん, 赤ん坊	○○	あなた, あんた	○○	表・現・顕われる	○○
油, 脂, 膏	○○	明るい	○○	あなた方	△	凡ゆる	
あちら, あっち	○○	開ける	○○	姉	○○	あれ	○○
上・揚がる	○○	秋	○○	兄	○○	ありがとう(ございます)	○○
上・揚・挙げる	○○	諦める	○○	暗記(する)	○○	有る	○○
あげる		飽きる	○○	あんな	○○	或る	○○
顎	○	開く	○○	案内(する)	○○	或は	○○
愛(する)	○○	欠伸	○	あの	○○	歩く	○○
間	○○	アクセサリー		安心(する)	○○	朝	○○
アイロン	○	甘い	○○	安全(な)	○○	麻	
あいさつ(する)	○○	あまり	○○	青, 青い	○○	浅い	○○
相手	○○	余る	○○	アパート	○○	明後日	○○
合図(する)	○○	雨	○○	粗い	○○	汗	○○

わずか60語の比較であるが、文献(99)にない語は7語、文献(59)にない語は5語である。表中の「b」欄の「△」は小見出しのかたちで採られていることを表す。なお、本文献とこれら2文献にはアルファベット順、五十音順の違いがあるのでこの60語に限っての逆の比較はできない。それにしても、およそ2文献との共通性が高いとすることができる。

本文献は、長年活用され続けた結果、見出し語を9,272語に増やし、例文などを数多く掲げるなどして、新たに、『THE AOTS NIHONGO DICTIONARY FOR PRACTICAL USE (日本語実用辞典)』(玉村文郎編集主任)として、平成5(1993)年3月に株式会社スリーエーネットワークから刊行された。

文献(57) 留学生教育のための基本語彙表 (『日本語・日本文化』第2号)

樺島忠夫・吉田弥寿夫

大阪外国語大学研究留学生別科 昭和46(1971)年3月25日

A5判 119ページ

〔目次〕

解説	1 この基本語彙作成の目的	2 この基本語彙の性格	
	3 この基本語彙の能力	4 この基本語彙の構成	
表1	五十音順語彙表		5ページ
表2	科目別語彙表		20ページ
表3	使用率順語彙表		87ページ
	付・品詞別表		111ページ

まず、「解説」の「1 この基本語彙作成の目的」の全文を引用しておきたい。

外国人留学生がわが国において大学教育を受けようとするとき、大学教育に必要な日本語を習得していることはぜひ必要である。大学教育受講に必要な語の知識は、日常生活に必要な語の知識と全く重なるものではなく、異なりがある。そこで大学受講に必要な基本語彙を作ること、これがこの基本語彙作成の目的である。特に

- (1) 学生および教育者に、大学受講までに習得すべき最小限度の語彙の表を与える。
 - (2) 留学生教育のために必要な教科書を作成するために、基本的な語彙の表、および基本的度合を示す。
- 以上を目的としてこの基本語彙表を作成した。

次に、「2 この基本語彙の性格」では、昭和40年度版の高等学校教科書「倫理・社会、政治・経済、高等地理、物理B、化学B、生物」の6種（引用に当たって編者名、出版社名は省く）をもとにして、次の基準で作成したことが示されている。

1. 文科系（倫理・社会、政治・経済、高等地理）における使用率、理科系（物理、化学、生物）における使用率が0.3パーミル以上である語。
2. 使用率だけでなく語の使用範囲がひろいものも基本語彙の中に入れる必要がある。したがって使用率0.2パーミル（文科系または理科系において）以上で二種類以上の教科書にわたる語。
3. 基本語に入らなかった語で複合語である語は語構成部分に分解し、使用率の大きいものを基本語彙に加える。したがって語彙表の中で「あげる、*あげる」のように同じ語がならんでいるのは、「*あげる」が複合語の成分として使われたものであることを示す。

なお、「基本語彙に入れない語」として、外来語、固有名詞、数詞が挙げられている。

その結果、この基本語彙の構成語数として、右の語数を得ている。

上掲の〔構成〕に示される「表1 五十音順語彙表」は、これら1,803語を五十音順に配列した表である。

複合成分以外の語	1429語
複合成分の語	374語
計	1803語

次に、「3 この基本語彙の能力」では、この基本語彙におさめられた語が、もとの教科書の延べ語数のど

れだけをまかなうことができるかを計算したもので、推定の95パーセント信頼区間は、次のとおりである。なお、これは、複合成分の語を含めていない数値である。地理の値が小さいのは「地理に固有名詞が多く出ているため」である。

倫理・社会	71～74%	物理	82～86%	政治・経済	73～76%
化学	73～77%	地理	57～61%	生物	74～78%

ここで、「表1 五十音順語彙表」の例として、「せ」の全96語を掲げてみよう。

*性	生産	*精神	*政党	世界	せっこう	*選挙
*～性	*生産	*生成	政府	*世界	接触する	戦後
*制	生産する	製造	生物	積	接する	*選出
生育	生産性	精製する	生物体	赤かつ色	*絶対	*染色体
生育する	生産物	生存	成分	石炭	絶対温度	先進国
生活	生産量	*生存	生命	脊椎動物	絶対的な	戦前
*生活	政治	生態系	制約	脊柱	説明	全体
生活水準	*政治	成長	西洋	責任	説明する	*全体
生活する	政治制度	*成長	西洋思想	石油	世論	*選択
世紀	政治体制	制定する	成立	*石油	線	前庭器官
世紀末	性質	*製鉄	成立する	是正する	*線	全部
*請求	政治的	制度	生理的	積極的な	*繊維	線膨張率
政策	成熟する	*制度	勢力	絶縁体	繊維工業	
*政策	精神	政党	*勢力	石灰石	選挙	

これら96語の中の26語に「*」印が付けられている。その中の15語は、例えば「生活」「*生活」のように基本語と重なっている。また、「生活」関係で見ると、他に「生活水準、生活する」も掲げられている。そこから、この表は、このままがよいのか、基本語彙の表としての整備を検討したほうがよいのが問題になってくる。なお、「複合成分以外の語」の1,429語だけを取り上げることも考えられる。

次に、「表3 使用率順語彙表」は、「語を全体における使用率の大きいものから順にならべたもの」で、「教科書を、基本的語の数をかぎり、1000語以内で作る、1500語以内で作るなどを行なうときに役立つ」という意図で作成されている。

なお、編者の一人である樺島忠夫氏は「基本語彙」(国語シリーズ別冊1『日本語と日本語教育 ― 語彙編 ―』文化庁 昭和47(1972)年8月25日 大蔵省印刷局発行)で、「基本語彙」について「ある範囲の文章(たとえば新聞だとか、高等学校の教科書とか日常会話など)において、比較的少数の見出し語で、延べ語数の多くをまかなうことができるように見出し語を選んで作った語彙である。」と規定した上で、「たとえば」として本文の五十音順表を掲示している。

本文献は、文献(81)『日本語教育基本語彙七種比較対照表』などに引用されている。

文献(58) 語彙調査と基本語彙 (『電子計算機による国語研究 Ⅲ』国立国語研究所報告39)

林 四郎

秀英出版 昭和46(1971)年 3 月

B 5 判 全164ページ (内 1 ～35ページ)

〔目次〕

1. いろいろな基本語彙

1.1 基礎語彙 1.2 基本語彙 1.3 基準語彙 1.4 基調語彙 1.5 基幹語彙

2. 基幹語彙の求め方のテスト

3. 新聞語彙調査から求められる新聞基幹語彙

新聞基幹語彙 (昭和41年 3 紙の場合)

4. 基本語彙について

本文献は、「昭和44年 2 月15日、国立国語研究所創立二十周年記念講演会の席上で行なった講演をもとにして書いたもの」という説明が、冒頭部分に示されている。

まず、「1. いろいろな基本語彙」では、〔構成〕に掲げたように、5 種類の概念を立てて、それぞれについて具体的に解説を行っている。それぞれについての定義に近い説明を引用しておきたい。

- 1.1 基礎語彙 「基礎語」は、Ogden や土居氏が考えたように、英語なり日本語なり、一つの言語体系にもとづき、現実の言語体系に手を加えて作った半人工的モデル機構である。その範囲内で、普通のことは一応何でも言い表わせるはずの、一つの完結体であり、小宇宙である。
- 1.2 基本語彙 今後「基本語彙」という場合には、「基本」の本義に立って「何かの事を行なうために、第一段階でまず必要とされる語彙」という意味で使うことにしたい。従って、「何かの事」が何であるかによって、基本語彙の性格も内容も規定されることになる。「国語教育基本語彙」といえば、母国語教育の中で教育機関が責任をもってその意味用法に習熟させるべき語彙をさす。
- 1.3 基準語彙 ある社会にはいて生活するについて、その社会で最も普通に行なわれていることや言い方に慣れさせようとする。その社会での特殊な用や、さらに細分化した社会内での用を弁ずることはできないが、一般的な生活は不自由なくできる — というために必要な語彙が、その社会での基準語彙である。
- 1.4 基調語彙 源氏物語の語彙調査をした寿岳章子氏は、見出された語彙と作品との関係を考えて、テーマ語彙を名づける一群の語を指定している。これなどに、基調語彙の好例を見ることができる。
- 1.5 基幹語彙 基幹語彙とは、ある語集団の中に、その集団の骨格のような部分として、その集団をささえる基幹的部分として、現に存在する、語の部分集団を呼ぶ。

次に、「3. 新聞語彙調査から求められる新聞基幹語彙」を取り上げると、「基幹語彙」について、「調査された言語資料の中で、幅広く用いられ、かつ、どの方面でも高い頻度で用いられている語の群れをさしている」と指摘している。そして、具体的に、次のように述べている。

今度材料に使うのは、今回の語彙調査の全データの三分の一に当たる長単位延べ68万をまかなう、異なる長単位約10万、そのうち度数10以上の6411語、その中から、さらに、記号類や無意味な数字を除いた5417語 (長単位) である。

次に、新聞は、「政治」「外交」など話題分野区分で12層に分けている。そして、それぞれの層の使用度数から、どの層も6つのグループに分けて、「層別度数階級」と呼んでいる。

次に、「広さと深さのかけ合わせによる12区画と所属語数」の表を引用してみよう。

		深 さ			(層の幅)
		1. 深い	2. 中位	3. 浅い	計
広 さ	A 極めて広い	A 1 162	A 2 229	A 3 198	(12～10) 589
	B かなり広い	B 1 10	B 2 405	B 3 766	(9～7) 1181
	C 中 位	C 1 213	C 2 580	C 3 1330	(6～3) 2123
	D 狭 い	D 1 987	D 2 409	D 3 128	(1～2) 1524
					5417

引用するにあたって、「計」欄に「(層の幅)」を書き加えた。

また、A 1からB 2までの五区画を示す線を太線で表示した。「A 1からB 2までの五区画に属する語は、今回の資料の範囲内で文句なしの基幹語彙と指定」できることが述べられている。

次に、「新聞基幹語彙 (昭和41年3紙の場合)」では、上に引用した指摘を受けるかたちで、A 1～B 2の5種類の一覧表が掲げられている。ここでは、A 1として提示されている語を引用しておきたい。

1) 極めて広く、深さも深いもの (A 1)

〔名 詞〕 こと もの ため とき ところ 方 点 わけ ほど ◆ 前 以上 ほか 中 次
一方 上 他 あと 中心 はじめ 間 後 ◆ いま 午前 午後 昨年 夜 現在
最近 ◆ 私 人 手 話 問題 場合 考え 結果 必要 政府 世界 日 一部 ◆
東京 日本 昭和 アメリカ

〔数 詞〕 一 二 三

〔コソアド〕 この その これ それ どう

〔動 詞〕 いる ある いう なる する つく よる いく できる 対する 出る 聞く かける
くる 見る とる

〔形容詞〕 ない (助動詞も含む) 多い 同じ 強い いい

〔連体詞〕 大きな 約 同

〔副 詞〕 さらに よく とくに

〔接続詞〕 また しかし

なお、A 1をはじめとする各語数は、引用者が数えたところ、A 1=80、A 2=139、A 3=130、B 1=9、B 2=308語であって、上掲の表の語数とはずれをみせている。何か理由があるのであろう。

次に、「4. 基本語彙について」では、教育基本語彙の求め方として、(1)いくつかの語彙調査を行い基幹語彙をもとめる、(2)各基幹語彙からの基幹語彙を求める、(3)これに論理的操作を加える、(4)基礎語彙の試作をしてみる、(5)表記法との関係を見る、など有益な指摘が記されている。

本文献は、その後、『言語表現の構造』(明治書院 昭和49(1974)年11月)に収録されている。なお、著者林四郎氏には、「基本語彙はきめられるか」(『新・日本語講座1 現代日本語の単語と文字』汐文社 昭和50(1975)年4月9月)をはじめとして基本語彙研究に関する啓発的な研究がある。

文献(59) 外国人のための基本語用例辞典

文化庁

大蔵省印刷局 昭和46(1971)年8月15日(初版) A5判 1,335ページ

昭和50(1975)年6月10日(第二版) A5判 1,336ページ

平成2(1990)年10月1日(第三版) A5判 1,337ページ

〔目次〕(以下、本文の引用を含めて第三版による)

刊行のことは

この辞典の内容(ねらい)

用例辞典の構成およびその使用法 (1)～(16)ページ

〔別表〕この辞典に用いられている漢字(363字) (17)～(22)ページ

本表 1～1123ページ

付録など(あとがき、執筆者名簿は省略) 1～188ページ

- | | |
|------------|---------------|
| 1 日本語の文法 | 2 語の構成法 |
| 3 親族関係のよび方 | 4 数えることは |
| 5 コソアドについて | 6 擬声語・擬態語について |
| 7 常用漢字表 | 8 索引 |

まず、巻頭に置かれている「この辞典の内容(ねらい)」の全文を引用しておきたい。

- この辞典は、日本語の中で特に基本的であると思われる語を中心として解説し、適切な用例を付して、外国人の日本語学習の効果を高めるのに役だつことをねらい、かねて、教師が学習者を指導するのにじゅうぶん利用できるように意を用いて編集したものである。
- 本書を使用する学習者は、日本語を500時間内外学習した外国人学習者、およびそれ以上の日本語の学力のあるものとする。
- 本書は学習者の立場から見れば、これまで、それほど広く、また、厳密にでもなく学習した基本的な語の意味・用法を再確認するとともに、さらにそれらの語についての認識を広げることがねらいとする。したがって、500時間ぐらい学習した程度の者にだけ利用されるのではなく、それ以上の高度の学習者にも大いに役にたちうるものである。
- 本書を使用する学習者の程度を考えて、あまり特殊な意味・用法には及ばない。
- 基本語として採録した語は、日本語の学習書や諸種の語彙調査などに見られるものを資料とし、その中から日本語学習の初級の段階において出あうことが多く、かつ必要度が高いと考えられるもの約4500語を編集委員会で選定した。(引用者注；以下に続く付帯条件は省略。)
- 本書には、採用語を解説する本文と、本書の使い方を説明するまえがきのほかに、次のような付録を用意した。(引用者注；上記「目次」の「付録」として掲げた1～8の8項目。)

次に、本文献に見出しとして掲げてある基本語約4,500語がどういう語句であるかについて「用例辞典の構成およびその使用法」から、5つの事項を簡条書きに整理して提示してみよう。

- この辞典では、次の品詞を立てている。

名詞。代名詞。形容詞。形容動詞。副詞。連体詞。接続詞。感動詞。助詞。助動詞。そのほか接頭語。接尾語。連語。

- 2 「連語」は、「ほかならない」など、二つ以上の語がいっしょになって、一つの語のようなはたらきをしているもの。
- 3 名詞とⅣ型（がた）動詞、あるいは名詞と形容動詞の二つの用法がある語は、名詞を見出し語とする。
- 4 活用のある語は、終止形を見出し語とする。
- 5 見出し語と関連の深い語を、小見出しで掲げたものがある。（例えば「あお〔青〕」のあとの「あおあおと〔青々と〕」「あおじろい〔青白い〕」「あおぞら〔青空〕」「あおみ〔青み〕」）

次に、本文献が取り上げている総語数は、巻末の「索引」で確かめることができる。この「索引」は「本文中に見出し、小見出し、から見出しとして採録した語、および、付録の『擬声語・擬態語』に掲げた語」を五十音順に配列したもので、およそ4,600語が配列されている。

以下、その「索引」の最初のページの左側一列の34語を引用しておきたい。

ああ	あう（合う）	あか（垢）
あい（愛）	あう（会う）	あか（赤）
あいかわらず（相変わらず）	あえて（敢えて・取て）	あかあかと（赤々と）
あいさつ（挨拶）	あお（青）	あかあかと（明々と）
あいじょう（愛情）	あおあおと（青々と）	あかい（赤い）
あいず（合図）	あおい（青い）	あかみ（赤み）
あいそう（愛想）	あおぐ（扇ぐ・煽ぐ）	あかり（明かり）
あいだ（間）	あおぐ（仰ぐ）	あがりさがり（上がり下がり）
あいついで（相次いで）	あおじろい（青白い）	あがる（上がる・揚がる）
あいて（相手）	あおぞら（青空）	あかるい（明るい）
あいにく	あおみ（青み）	
アイロン	あおむけ（仰向け）	

この平仮名表記による見出しの後ろには、語の識別のためなのか、常用漢字だけでなく表外漢字が何の区別もなく併用されている。上に引用した箇所だけでも「挨拶、扇ぐ・煽ぐ、垢」がある。

ところで、本文献は、例えば文献(26)『日本語基本語彙』（昭和19(1944)年6月）などと同じく、漢字表記、品詞などを提示した上で、語の意味を説明し、用例を掲げている。その意味の説明は、見出しに掲げた用語だけでなく、かなり難解な用語を駆使したものになっている。1例として「しんぞう（心臓）」を引用してみよう。選定された基本語以外に「内臓」「血液」「ポンプ」の3語が使用されている。

しんぞう〔心臓〕（名詞）

- 1 たいせつな内臓（ないぞう）の一つで、血液（けつえき）をおくるポンプのようなはたらきをするもの。（用例の引用は省略）

本文献には、4,500～4,600の基本語が見出し及び小見出しに掲げられていて、中級以上の学習者の学習に役立つように編集されている。例文も豊富である。

文献(60) 語い指導の系統と方法 (国語科の授業改造)

安達隆一・豊橋市二川小学校

明治図書 昭和48(1973)年 2 月

A 5 判 166ページ

〔目次〕(まえがき、あとがきを略す)

I 語い観と語い指導観	9 ページ
一 言語生活と語い	1 言語活動と語い 2 語いの習得
二 語いの体系	1 形態面からみた語い 2 意味面からみた語い 3 意味と意義素
三 語い指導の目標	1 概念体系の形成 2 意味の深化 3 単語習得の方法化
	4 語いの性質の理解
四 語い指導と読解指導との関連	
II 語い指導の系統と方法	28ページ
一 語い指導の観点	1 単語の形式 2 単語の意味系列 3 単語の構成
二 語い指導の系統	1 基礎指導 2 総合分野指導
三 語い指導の内容	1 中心語の選定 2 語い指導の内容
四 語い指導の方法	1 分野指導の方法 2 分野の構成 3 「意義特徴」の抽出方法
III 語いとりたて指導の実際	72ページ
一 学習内容の教材化	二 教材の具体化 三 語いとりたて指導の実際
IV 研究の成果と反省	124ページ
一 語い指導後の子どもの変化	二 研究の成果 三 研究の問題点と課題
付章 年間指導計画表と指導案	132ページ
一 年間指導計画表	二 指導案と指導資料

本書は、学習基本語彙を、「語彙指導を行う上で必要な中心語のグループ」ととらえている。その説明を行っている一節を引用しておきたい。

一つの単語を語い体系の中でとらえさせるということは、一つの単語を中心語としてとりだし、分野を構成させるということになる。この分野を構成させるプロセスを通して、ばらばらに習得されていることを組織だて、さらにそれを系統化した方式で積み重ねた指導を展開すれば、語いの能力の向上が可能であると考えている。(II・四・1「分野指導の方法」)

この言葉の世界は、次に示すように、全6類24項目に分類されている。この「選定基準は、林進治氏の『基本語い』選定の手順である。ただし、この『基本語い』は、あくまでも中心語であり、量的拡大を第一義的目的としないわたくしたちの立場から林氏の選定による語い数よりも、少なくなっている」と説明されている。なお、次の第1類の「存在」から第6類の「社会的」に至る24項目には順に①から②④までの番号が付いているが、ここでは省略した。

第一類 抽象関係	存在 状態 組織 関係 量(程度) 順序 数 時 変化 原因(結果)
第二類 空間	一般 延長 形 運動
第三類 物体	一般 無機物 有機物
第四類 精神一般・知	精神一般 観念の形式 観念の伝達

第五類 意 個人的 社会的

第六類 情 個人的 社会的

この「あみの目を中心語選定の中心的柱とし」て、すでに選定してある語彙をあてはめたものが、学習基本語彙ということになる。以下、その一覧表の一部を提示しておきたい。

学 習 基 本 語 一 覧 表

5			4	3	2	1	学 年	項	
詞形 容	動 詞	名 詞						抽 象 関 係	空 間
		要素		父親	ぶどう	ぶどう	1	存在	物 体
	燃え	構え	簡単熱暑 単純いい	かわいか いらやた		い大き	2	状態	
		任務		合う	学校家 校ぞ	家	3	組織	
	すおか			全全 部体	いは や	下上 と	4	関係	
	るは か	余分			ないも といふ 少多と		5	量	物 体
				わる始 る終め			6	順序	
い等 し久 し				少小 数数			7	数	
				眺朝日 昼週	よひ る		8	時	
	る改れ やめる ぶ		動す現 静わ	わる変 る代わ			9	変化	物 体
		原因					10	原因	
		戸外		林海 湖	高低 いい		11	一般	
いし果 なて			方方 角向				12	延長	
		構図		丸円			13	形	物 体
	編む		るつる付 着入出 立けく る	登る上 が	る止は き走 まくる		14	運動	
		設備	器機 械械	つさび ぼおん う	物乗 り		15	一般	
	す保 存す 応用						16	物無 機	
			作準仕 造建作 備事つ 業			も生 のき	17	物有 機	精 神 一 般 ・ 知 意
		精神					18	一般	
		印象	勉学 強習	発発 見明			19	成の観 形念	
		主張	す表事 辞わ典 典			さあ つい	20	達の観 伝念	
いろこ よこ	る断 わ	確信	用意	会 う			21	的個人	情
	す支 持 い親 し						22	的社会	
							23	的個人	
		同情					24	的社会	

この一覧表に載せている語は、多めに数えると、1年6語、2年17語、3年30語、4年28語、5年30語、6年29語で、全部で140語である。「多めに数える」とは、例えば対義関係にある「高い」と「低い」、「かたい」と「やわらかい」をまとめて掲げてあるものを、別々に数えるという意味である。

本文献は、文献(45)『言語要素指導』をはじめとする児童言語研究会の語彙指導の流れに立って、学習基本語彙を「小さな語句のグループの中心語を集めたもの」という見方で推進している点に特徴がある。

文献(61) 語句指導と語い指導 (国語教育の実践的課題)

倉澤栄吉

明治図書 昭和49(1974)年4月

A 5判 265ページ

〔目次〕(算用数字による小項目の見出しを略す)

まえがき	1 ページ
I 語い指導と他教科	7 ページ
一 内容教科における読みの能力	
二 国語科の語いと内容教科に出てくることばの連けい調査	
三 語い選定の手続き	
II 各教科の語い調査の実際	67ページ
く1> 社会科 く2> 算数科 く3> 理科 く4> 道徳	
III 指導の実際 — 語い指導実践の一例	221ページ
三年 算数科の指導事例 四年 理科の指導事例	
五年 社会科の指導事例 六年 道徳の指導事例	
終章 語い指導の意義と方法	251ページ

「まえがき」から、本書の編纂意図を引用しておきたい。

国語教育の中で最も不振だとされているものが「語句・語いの指導」である。われわれは、この問題を、実践的課題に据え、それを新しい方法論のもとで解明しようとした。すなわち、語いを、子どもの側から捉えてみようとしたのである。「語い — ことば — というものは子どもにとってどんなものであるか」を、国語科を超えて、かれらの学習と生活の全面から、見直そうとしてみたのである。

次に、Iの「一 内容教科における読みの能力」では、本書の調査・研究の方針を次のように述べている。

もちろん国語科の守備範囲ではあるが、他教科に提示された語句をその教科で指導しようとするのはかなり困難であり、実際には内容の指導で終わってしまうことが多く、語い指導としては、国語科の教科書に提示されるごくわずかの動植物や歴史教材の中で指導されるにすぎない。

しかし他教科で提出される語い群は、量的にも質的にも示す割合はきわめて大きいので、これらの語いは、国語科だけでなく内容教科群の中で指導していかなければ、いつまでたっても子どもの語い力は伸びない。

本文献は、教室で対処する「語句・語いの指導」のための語句・語いの選定を、国語科にとどめずに、社会科、算数科、理科の3教科及び道徳にまで広げているところに特質をもっている。そして、〔構成〕のIIの「く1>の社会科」から「く4>の道徳」までの各項目は、すべて次の構成になっている。

1 概観 2 三年の実態 3 四年の実態 4 五年の実態 5 六年の実態

本文献は、それぞれの教科等の専門語を中心に、まず学年ごとに70語ずつを選定し、それらを更に15語ずつに厳選している。例えば、社会科の三年では、はじめに選定した70語から重要語15語を厳選している。本文献には、それらの教科等の3～6年生の各15語が掲載されている。各学年60語、全体で240語である。

次に、「三 語い選定の手続き」の「1 教科書から選ぶ」の見出しを引用してみよう。

(1)選んだ教材と教科書 (2)すべての語をひろう (3)70語に精選 (4)さらに15語に精選

この70語から15語に選定する手続きは、次のように説明されている。

ア 阪本語い調査やその他の語い調査を参考にし、70語すべてにランクづけをした。

イ これをもとに全員に一覧表をくばり、自分を含め、全員の投票を受ける。

ウ 投票された語いは集計され、投票数によって上位から選ぶ。

この場合担当者は、次のようなことを考慮して、15語を決定した。

○ その語いが、その教科の専門性をもち、かつ拡散性のある語いであるかどうか。

○ その語いは、その教科的色彩はもっているが、すでに日常の言語生活の中に定着し活用されていると考えられる語いであるかどうか。

○ その語いは、いまだ専門性を失わず、なお日常性を保っている語いであるかどうか。

次に掲げる一覧表は、例として、4年生の社会科、算数科、理科、そして道徳の各教科等の専門語を15語ずつ提示したものである。社会科、算数科、理科の3教科は、15語を、専門的な語彙か日常的な語彙かで分類し、道徳の15語については、その一覧表の左側の欄の括弧内に提示したように、日常的な語彙であるかどうかを基準にしている。なお、次の表は引用者が作成したものである。

基準 \ 教科等	社会科	算数科	理科	道徳
①専門的な語彙 (日常生活から 遠い語い) (26)	原野 内陸 海流 しょく人 しゆく場 本陣 6	合同 対応 平行 垂直 がい数 切り捨て 単位 公式 容積 9	記号 位置 平均 一等星 電波 しおのみちひき 6	ねうち 不公平 まごころ 悪がしこい いさぎよい 5
②日常的な語い (16)	ようしょく 熱帯 地方 位置 4	回転 位置 記号 集合 4	胃 温せん なっとう みそ 4	はげます はじ 言いふらす 希望 4
③両者の接点に たつ語い (18)	そくりょう けいしゃ 台地 縮尺 おろし 5	平面 要素 2	いのしし うなぎ 伝せん ぶどう酒 わたり鳥 5	成長 せいしつ あやまち ちゅう こく いたわる なしとげる 6

本文献には、こうして選定した語句・語彙を、学年、教科ごとに提示している。なお、それら6年間分の語句を集計した一覧表は提示されていない。また、最初に集めた70語ずつの語彙は提示されていない。

本文献は、その後も実践研究が続いて『語句・語彙の指導過程』(倉澤栄吉・青年国語研究会編著 新光閣書店 昭和57(1982)年6月)、『楽しい語句・語いの指導』(東京都青年国語研究会編 東洋館出版社 平成6(1994)年7月)に展開している。

文献(62) 学習基本語彙の基礎調査(研究報告 第7冊)

財団法人 中央教育研究所

財団法人 中央教育研究所 昭和51(1976)年5月15日

B5判 116ページ

〔構成〕

まえがき	林 四郎	1 ページ
I 調査の概要		4 ページ
1. 調査資料	2. 調査の要領	
II 語彙表の説明		10 ページ
1. 収録語数の内訳	2. 五十音順表	3. 意味別表
学習基本語彙表 — 五十音順表 —		12 ページ
— 意味別表 —		63 ページ

まず、「まえがき」は、行空けによって3つの部分に分けられている。その中間部を引用しておきたい。

国語教育の科学化ということが叫ばれてから久しいことですが、まだ、なかなか、適切な教育基本語彙が提出されません。阪本氏の教育基本語彙22,500語は確かに出されましたし、それは大変りっぱな業績にちがひありません。しかし、私たちは、そこで止まっていたてはならないと思います。

外国語なら、そこに提出された基本語彙を、何はともあれ、覚えるというだけで、まず、大きな効果がありますが、自国語の場合は、基本語彙を、児童は、もうとっくに知っているのですから、これこれの語は基本語彙だと言って指定してみても、大した意味は、もち得ません。基本語彙は、その意味・用法をよく教えて、それらの語によって、できるだけ多方面のことが、できるだけ深いところまで言い表わせるように指導することが必要です。

私たちは、せっかく国立国語研究所の調査でわかった現代日本語の語彙の実態を、充分認識して、効率の高い基本語彙を選んでみたいと思いました。オグデン、リチャーズの基礎英語や、土居氏の基礎日本語のように、850語とか1,100語とかの極めて少数の単語に限定して、無理をしてでも、その範囲で、ものごとを言い表わしてみようとがんばるやり方とはちがって、現実社会での実際の言い方に従いつつ、有効な用語を無理なく使って、表現の範囲を大きく広げていくのに役立つ、そういう基本語彙の選定を試みたいと思います。

次に、上記の〔構成〕で提示した「I・2.」の「(2)作業手順」の③～⑦から部分的に引用しておく。

- ③ 「現代雑誌九十種の用語用字(1)」から取り出した7,200語(固有名詞を除いて6,200語)と、「電子計算機による新聞の語彙調査」から取り出した10,500語(固有名詞・助詞・助動詞・記号を除いて7,400語)のうち、どちらにも入っていた語 4,363語を基本語彙として選ぶ。五十音順に書き並べる。
- ④ この4,363語について、小学校教師5名によって、語彙指導にあてるべき学年を決める。区分は次の通り。 低学年(A)、 中学年(B)、 高学年(C)、 上級段階(D)
- ⑤ 4,363語の表にあらわれなかったもので、教育的に重要だと思われる語を、補置として加える。
(中略) 新しく選ばれた語は226語である。
- ⑥ 補遺選定作業により得られた226語について、5人の先生により、学年配当の評価を受ける。
- ⑦ 合計4,589語を学習基本語彙とし、「五十音順表」「意味別表」を作成する。

(引用者注；上引⑤の「補置」、⑥の「補遺」は共に補足・補充などの意味で使われている。)

次に、「II 語彙表の説明」の「1. 収録語数の内訳」の最初の箇所を引用しておきたい。

この表は、雑誌・新聞でよく用いられ、また教育上重要と思われる語彙4,589語を、その学習すべき学年をつけて、五十音順、および意味別に並べたものである。

A (低学年) — 1,202語 B (中学年) — 1,312語
C (高学年) — 1,705語 D (上級段階) — 370語

ここで、「五十音順表」の「あ」の最初の10語を引用しておきたい。

意味分類	見出し	表記	品詞	学年配当	雑誌	新聞
3.100	ああ		副	A	4	2
4.310	あ、ああ		感	A	5	2
3.112	あい①	相		B	4	1
1.3020	あい	愛		B	4	5
3.165	あいかわらず		副	B	3	1
1.3121	あいさつ	挨拶		A	4	4
1.3020	あいじょう	愛情		C	5	3
2.302	あいする	愛する	動	C	5	3
1.176	あいだ	間		C	5	3
1.200	あいつ		代	B	3	1

この一覧表の形式等について簡単に説明しておきたい。

- ① 最初の「意味分類」は、文献(49)『分類語彙表』の番号である。それは、「『分類語彙表』の索引によっており、その先頭の番号を使った。」と説明されている。
- ② 「見出し」は五十音順に配列されている。上の引用中の「あい①」は注記番号で、脚注欄に「『相成る』など」と注記されている。
- ③ 「表記」は、例えば「挨拶」に明らかなように、当時の当用漢字にこだわらない表記になっている。
- ④ 「学年配当」は上に引用したA～Dの4段階である。
- ⑤ 「雑誌」「新聞」は「使用率区分」である。文献(44)『現代雑誌九十種の用語用字(1)』と文献(55)『電子計算機による新聞の語彙調査』のそれぞれの使用率を5つに区分して、最高を5、最低を1としている。後で補充した226語の使用率区分は0になっている。

次に、意味別表は、低学年 (A)、中学年 (B)、高学年 (C)、上級学年 (D) の4段階に分けて、文献(49)『分類語彙表』に従って各語を分類している。

本文献は、①用語の選定が国立国語研究所の研究成果に基づいている、②『分類語彙表』に従って用語を配列している、③語彙の選定の仕方が説得的である、などの特性をもつために、その後の学習基本語彙の作成に大きな影響を与えた。

文献(63) 用例集 幼児の用語

岩淵悦太郎 村石昭三

日本放送出版協会 昭和51(1976)年11月20日

A 5 判 358ページ 索引15ページ

〔構成〕(「はじめに」「索引」を省略)

本書についての解説

3～16ページ

1 本書の資料と編集の仕方について

(1)資料 (2)調査対象児 (3)編集の仕方

2 本書の構成

(1)見出し語 (2)品詞名 (3)使用度数 (4)意味用例

(5)誤用 (6)解説 (7)参照記号

付 1,051語の選定について

(1)用例カードの作成 (2)見出し語1,051語の選定

(3)使用度数の多い100語 (4)固有名詞

この本の使い方

〈あ〉～〈わ〉

1～358ページ

まず、本調査研究の発端等について、「1 本書の資料と編集の仕方について」から引用してみよう。

本書を作成するため、資料に使ったすべての語用例は、NHK「ことばの誕生」調査で収集した録音資料にもとづいている。

NHK「ことばの誕生」調査は、昭和36年10月から5年間にわたって、NHK学校放送部が行なった「人間は、誕生してから満5才になるまでに、どのようにして言語を身につけていくか」をテーマとする、録音観察による追跡調査である。(中略)

こうして、5年間の研究がすすめられたが、この間の中間的な報告は、NHKラジオ第2放送の教養特集「ことばの誕生」として、昭和36年11月から42年3月までの間、20回にわたって放送された。また、昭和43年8月、全体的な報告として『ことばの誕生』(岩淵悦太郎他著)という書名で日本放送出版協会から刊行された。

次に、「はじめに」から、本文の概要を述べた全10段落中の第7～9段落を引用しておきたい。

調査の対象になった幼児のうち、女児2名、男児1名、計3名の語彙について集計分析した。対象児3人全体で、延べ語数は86,855語であるが、そのうち異なりは、対象児の1人は1,709語、1人は2,159語、もう1人は2,267語であった。(中略)

3名ともに共通して使用しているのは778語、3名のうちの2名が共通して使用しているもののなかで、2名の使用回数が合計して8回以上のものが273語であった。本書では、これらを合わせた合計1,051語を収めた。この1,051語は、共通性が高いこと、使用回数の多いことなどから、基本度の高いものと言えるだろう。

この1,051語を五十音順に並べ、どういう意味で使ったか、どういう文脈で使ったかを明らかにした。また、誤用についても、くわしく記述した。それぞれの語が、幼児に、何歳ごろから使われ、何歳ごろで定着したかなどを、ただちに知ることができる。

次に、目次の「付 1,051語の選定について」から「はじめに」の記述を補う内容を要約しておきたい。

(ア) 3名の自立語のカードの枚数は、①36,351枚、②29,645枚、③20,859枚、合計86,855枚である。

(イ) 自立語の異なり語数は、①1,709語、②2,159語、③2,267語、全体で3,974語である。

(ウ) 見出し語1,051語の選定は、次の方針によった。

- ①固有名詞、感動詞の一部(叫び声など)は最初から除外。
- ②3名の幼児が共通に使用している語を抽出する。…………… 778語
- ③3名の幼児のうち、2名が共通に使用している語を抽出する。…………… 635語
- ④上記③の635語から使用度数(2名の合計)が8以上の語を抽出する…………… 273語
- ⑤見出し語 ② + ④ …………… 1,051語

ここで、一例として「かう」の用例を引用してみよう。

かう〔買う〕動詞

f = 228

	1:0	1:6	2:0	2:6	3:0	3:6	4:0	4:6	5:0
J		○	○	◎	○	○	○		○
K		○	◎	◎	○	○	○	○	
I			○	◎	○	○	○	○	○

【用例】①買う。

・「コレ ナニ?」おべべよ。「ユカタ。」「Kチャンニモ カッテ クダチャイマチェンカ? ユカタ カッテ クダチャイマチェンカ? コレ コレ ピンクノ ユカタ。」今度ね、買ってあげますよ。(K. 1:6)

【誤用】発音:「買わないと」と言うとき、ワがはねて「カンナイト」(J. 3:0)となる。

【解説】(a)「売る」にくらべて、「買う」は用例が圧倒的に多く、「売る」に先行して習得される。

(b)ただし、金銭と結びついた「買う」が現われるのは3才以後である。

・「コレハ ドウデスカ?」はい、どうも。「モウ、ウッチャイマスヨ、ハヤクカンナイト ウッチャイマス。」いくらですか?この本。「コレハ サンジュウエンデス。」30円ですか。「コレハ ゴジュウエンデス。」(J. 3:0) ⇒うる

本文献は、こうした解説をつけて1,051語が順に提示されている。品詞上の内訳は、次のとおりである。

《 名詞626 動詞246 副詞50 代名詞20 形容詞61 接続詞10 連体詞9 形容動詞18 感動詞11 》

これらの見出し1,051語の用例を、巻末の「索引」から、漢字仮名交じりの表記で引用してみよう。

相子	赤	上がる	開ける・明ける	あした	新しい
アイスクリーム	赤い	明るい	上げる・揚げる	あそこ	当たり前
合う	赤色	上がれる	朝	遊び	当たる
青	赤ちゃん	開く・明く	足・脚	遊ぶ	暑い・熱い
青い	開かる	握手	味	頭	あったかい

本文献は、幼児の使用語を録音資料に基づいて調査した成果であるので、今後の基本語彙選定などの重要な資料になると考えられる。

文献(64) 絵本の研究 — 6才児の親近語彙集付 —

阪本一郎

日本文化科学社 昭和52(1977)年2月20日

A 5判 218ページ

〔目次〕(1～10及び巻末の索引等は省略)

11	6歳児の親近語のリストの選定	149～158ページ
	親近語とは	
	第1次選定	
	第2次選定	
	参考 — 居住地区の親近語の差	
	親近語のリスト	
12	6歳児の親近語彙のリスト	159～209ページ

本文献は、絵本を言語的観点にとどめず、多角的な見地から考察した文献で、全12章の中の最後の2章は親近語について取り上げた内容になっている。まず、「親近語」の説明を引用しておきたい。

自然に生育した普通の子どもで、6歳前後に達しておれば、当然意味を理解し、必要ならばその語を自由に使用することができる語は6歳児の「親近語」(familiar words)とする。ただし、生育環境によって明らかに方言・地方語とみなされる語は、親近語からは除外する。

次に、「第1次選定」では、次の5種の文献をはじめとする8種の資料を使っている。(Ⅳ～Ⅵは省略)

I 文献(23)『日本語基本語彙・幼年之部』

異なり語数5,000語の中から、今回は上位3,000語までをとる。

II 文献(40)『教育基本語彙』

低学年語彙5,000語から感嘆詞・擬声語・擬態語を除いて今回の原案とし、戦前と戦後のリストを勘案して「番外語」を選んだ。

III 文献(53)『幼児言語の発達』

今回の原案にない語は、番外語に入れた。

VII 文献(51)『児童・生徒の語い力の調査』

「低学年の学習語」384語を参考にした。

VIII 文献(47)「日本語教育における基礎学習語」

今回の原案にない語は、番外語に加えた。

以上の資料を検討して、6歳児の親近語として2,237語を選定し、その他の「番外語」として447語を残している。なお、どういう手続きで2,237語が選定されたかの経緯は説明されていない。言い方を変えたとIの3,000語から「現在の子どもにはなじみがうすくなっている語」を除外した上で、次にどのように検討を加えたのかに関する記述はない。

「第2次選定」では、番外語447語について、文章完成法を用いた調査を実施し、6歳児の親近語として155語を選出した。

「親近語のリスト」では、第1次選定の2,237語に、第2次選定の155語を加えて、計2,392語を6歳児の親近語としている。

次に、「12 6歳児の親近語彙のリスト」の凡例から、大切な項目を引用しておきたい。

1. このリストは、6歳児（5歳7か月～6歳6か月）の親近語2,392語を50音順に配列したものである。
2. 語はなるべく小単位の語根をとった。したがって、たとえばあしあと（足跡）はあしとあととに、あとおし（後押し）はあととおしとに、それぞれ別置した。ただし、あおむき（仰向）やうばぐるま（乳母車）のように、あおぐやうばが6歳児の親近語ではない場合には合成語で示した。
3. 助詞、助動詞、形容動詞はとらなかった。また、感動詞、擬声語、擬態語は原則としてとらなかった。しかし、これらの語は、6歳児の親近語と認められてよいものである。

リストの例として、「あ」の初めの28語を掲げておきたい。

あ					
ああ（する）		副	あか（い）	赤	名形
あいこ	相子	名	あか 垢		名
あいさつ		名	あか・ちゃん（んぼう）	赤	名
あいず	合図	名	あ・かり（かす・ける・かるい）	明	名動形
アイスクリーム		名	あ・がり（がる・げる）	上・食	名動
あいだ	間	名	あき	秋	名
あいつ	彼奴	名	あき（る）	飽	名動
あいて	相手	名	あ・き（く・ける）	空・開	名動
アイロン		名	あきらめ（る） 諦	諦	名動
あ・う（わす・わせる）	合・会	動	あくしゅ	握手	名
アウト		名	あくび	欠伸	名
あお（い）	青	名形	あくま	悪魔	名
あおぐ	扇（×仰）	動	あぐら	胡座	名
あおむ・き（け・く・ける）	仰向	名動	あくる	翌	頭

なお、「あがり（がる・げる）上・食」の「食」は「おあがりください」などの意味・用法である。

試みに、本文献の「あ」の107語を、文献(40)『教育基本語彙』で確かめると、A1が87語、A2が18語、そして、B1が2語になる。本文献が資料とした文献Ⅰ及びⅡの時代性が残っているので、実際に利用する際は、いく分の加除が必要である。試みに、「あ～い」で、幼児に分かりにくそうな語を指摘してみよう。

ア あびる（あびせる）、あぶらげ、ある（或）、あんま

イ いいわけ、いかり（碇）、いくじ、いじ、いたす、いっとう（最）、いま（居間）

本文献は、難解な語の手当てを行えば、小学校入学時の児童の語彙力の測定、絵本などの使用語彙の基準として活用することができそうである。

文献(65) A CLASSIFIED LIST OF BASIC JAPANESE VOCABULARY (初版)
BASIC JAPANESE VOCABULARY (新版)

J. V. Neustupný

1977年 MONASH UNIVERSITY, Department of Japanese (Melbourne)

B 5 判 52ページ (初版)

1985年5月 JAPANESE STUDIES CENTRE (Melbourne)

B 5 判 100ページ (新版)

[構成] (本報告では、新版の構成を示す。なお、原文に施されている下線はすべて省略した)

PREFACE

TABLE OF CONTENTS

本表 (細目の最初と最後の項目は必ず掲げるようにした。他は余白を考慮した掲示である)

1. JAPAN/AUSTRALIA	1 Japan ~ 9 Australian animals/plants	1 ページ
2. NATURE	1 Nature and directions 2 Sky ~ 9 Animals	3 ページ
3. MAN	1 Man 2 Human body ~ 14 Names/pronouns	5 ページ
4. ETIQUETTE	1 Etiquette 2 Basic Greeting ~ 6 Departure	11ページ
5. EATING/DRINKING	1 Eating 2 Mealtimes ~ 9 Smoking	13ページ
6. CLOTHING	1 Clothing 2 Clothes ~ 5 Colours	15ページ
7. SHOPPING	1 Shops 2 Shopping 3 Prices/money	17ページ
8. HOUSING	1 Houses 2 Living in a house ~ 11 Repairs	18ページ
9. PLACES/TRAVELLING	1 The world ~ 8 Luggage 9 Sightseeing	21ページ
10. SOCIETY	1 Society ~ 14 International relations	25ページ
11. CULTURE	1 Culture 2 Religion 3 Art ~ 10 TV/radio	28ページ
12. EDUCATION	1 Education 2 Schools ~ 7 Study 8 Tests	31ページ
13. COMMUNICATION	1 Language/languages ~ 7 Mail 8 Telephone	33ページ
14. FREE TIME	1 Friendship 2 Party ~ 5 Kinds of sport	36ページ
15. RELATIONS	1 Being 2 Relations ~ 9 Certainty	38ページ
16. SPACE	1 Movement 2 Arrangement ~ 5 Demonstratives	40ページ
17. TIME	1 Time 2 Beginning/end ~ 15 Temporal suffixes	42ページ
18. QUANTITY	1 Size and number 2 Measurement ~ 8 Counters	46ページ
19. CONNECTIVES AND SUFFIXES	1 Connectives 2 Suffixes	49ページ
ALPHABETICAL LIST		51ページ
APPENDIX 1 ~ 4		87ページ

まず、全5段落構成の新版の「序」の最初の3段落の本文を日本語に訳して紹介することにした。なお、新版の「序」を取り上げるのは初版についてもふれているからである。

この冊子の初版は、1977年にモナシュ大学日本語学部から出版された『A Classified List of Basic Japanese Vocabulary』である。今回の新版では、分類リストの他に、収録語彙のアルファベット順のリスト、および、二つの付録(英語から入った外来語の発音と、日本語のエチケット)が新しく加えられている。

本書は当初、ビクトリア州のHSC(高等学校卒業、大学入学試験)受験者のための教材としてつくられた。しかしながら、1,500～2,000語レベルの日本語基本語彙リストとしては唯一のものであったため、数多くの国において、各種の日本語初級コースで広く用いられることとなった。この新版が、学習者、教授者の双方にとって、より使いやすい教材となることを願うものである。また、Japanese Studies Centreからの同じシリーズで、本書の姉妹編の英和版が近く発売されることも申し添えたい。

本書の利用に際しては、以下の点に留意されたい。(引用者注;「3)」は省いた)

1) 配列

分類リストでは、語はトピック別に配列されている。各語は1回のみしかリストにあらわれないが、同音異義語はその限りではない。(たとえば、【ひく】1 引く、2 楽器を弾く、3 風邪をひく、は別個の語として分類されている。)

2) 意味

各語について、対応する英語の簡単な訳語がつけられている。それらの訳語は、もとの日本語の単語の意味範囲をすべてカバーするものとは限らない。類義語の区別の説明や、日本特有のことがらの意味の定義は、体系だて行われていない。それらの説明は、教授者に委ねられている。

次に、例として、「3.6.Health」の最初の7語を掲げてみよう。

3.6. Health

<i>kenkoo</i>	health; healthy
<i>joobu</i>	healthy; strong
<i>gēnki</i>	vigour; in good spirits
<i>tsykkarēru</i>	to become tired
<i>kībun</i>	feeling
<i>byooki(suru)</i>	sickness, disease; to be ill
<i>kegā(suru)</i>	injury; to be injured

次に、アルファベット順に配列されたおよそ1,750語から「a」で始まる63語を漢字仮名交じりの表記で掲げてみよう。なお、そのいくらかの語には、参考までに英語訳を付けることにする。

ああ (like that) ああいう (that sort) 危ない あちら (there) 上がる (to go up)
 あげる (to give, to raise) 上げる 間 (time, period, while) あいさつ アイスcream 味
 アジア 赤ちゃん 赤い 明るい 開ける 秋 開く 甘い あまり (not very much) 雨 アメリカ
 あなた 姉 兄 暗記 (する) あんな (such) あの (that) あのひと (he, she) 安心 (する)
 安全 青い アパート 嵐 洗う あれ (that) ありがとうございます (or ございました)
 ある (a certain, to be, to exist) アルバイト 歩く 朝 朝御飯 浅い あさって 足 明日 遊ぶ
 あそこ (over there) 頭 新しい 当たる 暖かい 温まる 温める あっち (over there)
 後 (subsequent, after) 厚い 熱い 集まる 集める あう (to meet, to fit, to agree with) 預かる
 預ける

この「a」で始まる各語から、日常の会話語が考えられている (「ああ、ああいう」「あのひと」などが選ばれている) ことなどを指摘することができる。

本文献は、国内及び国外を合わせて日本語教育の入門期の基本語彙を選定した最初の文献である。オーストラリアにおける日本語教育の基本語彙の選定という観点で作成されている。

文献(66) 学習語彙表 — 語彙指導のための基礎作業 —

内子中学校

内子中学校 昭和52(1977)年 (謄写印刷)

B5判 はしがき等10ページ 学習語彙表300ページ 人名36ページ 書名24ページ

〔構成〕

- はしがき 1. 「学習語彙表」作成の趣旨 2. 「学習語彙表」作成の手順
3. 本表の組み立て 4. 活用に当たって

学習語彙表	本表	1～300ページ
	人名の部	1～36ページ
	書名の部	1～24ページ

まず、「はしがき」の「1. 『学習語彙表』作成の趣旨」に、次のように趣旨が示されている。

さて、「教育基本語彙」が設定されていない現状で現に行われているそれらの語句の指導は、おおむね教科書に依存し、教科書教材に出てくる語句は、一応基本的なものとみなして指導する形になっている。

いったい児童・生徒は、教科書を通して、どのような語句をどれほど学習させられているか。とにかく、それを全教科にわたって現に使用している小学校1年から中学校3年までの教科書の中から拾いあげてみようというのがこれを作成する動機であった。

次に、「2. 『学習語彙表』作成の手順」の各小見出しは、次のように示されている。なお、その説明は引用者が抄出したものである。

- 1) 調査対象語彙の検討 — 教科語彙は大別すると、どの教科にも共通にあらわれる「一般語彙（生活語彙）」と、各教科において学習する教科固有のいわば「専門語彙」とがある。今回は、後者すなわち各教科に固有の専門語に限定して調査することにした。
- 2) 調査対象材 — 校区の小学校、中学校で使用している全教科の教科書を対象とする。
- 3) 語句のカード化 — B6のカードに、見出し音（語句）、段階、教科・学年、関係語句を記入。
- 4) 段階づけ — 次の3段階に分ける。
 - A 教科の学習あるいは一般の学習において最も基礎となる語
 - B 教科の学習において、文脈の中でおおむね理解可能な語
 - C 教師の指導または辞書等の助けがなければ理解困難の語
- 5) カードの分類整理 — 総採録語数は、約5,750語（内、書名260語、人名680語）である。

教科	割合(%)	教科	割合(%)
国語	約 11.4	美術	約 6.6
社会	26.7	保体	5.2
数学	7.9	技術	8.5
理科	15.8	家庭	10.4
音楽	6.4	英語	1.1

(引用者注)教科別の語数は示されていないが、教科別の百分率が提示されている。そこで、その百分率から、例えば国語科の用語の語数を仮に逆算してみると、ほぼ650語になる。

教科名の「保体」は、「保健・体育」の略語である。

次に、学習語彙表の見本として、第1ページの左側の列の全体を引用してみよう。なお、「用例・関連等」の「用」は、本表では何行にもなる場合があるが、ここでは可能なかぎり1行で示すようにした。

語 句	段階	科・学年	用 例 ・ 関 連 等
アース	A	家 小6	用：感電しないように <u>アース</u> する。
アール	A	算 小4	用：1 a (<u>アール</u>)=100m ²
合方 (あいかた)	C	音 中2	用：長唄に出てくる器楽の間奏を <u>合方</u> といいます。
合い印 (あいじるし)	A	技 中3	用： <u>合い印</u> に注意して組みたてる。
		家 中1	用： <u>あいじるし</u> を合わせてあらく縫う。
アイデアスケッチ	A	図 小5	用：飾り棚を作るのにはまず <u>アイデアスケッチ</u> が大事です。 類：発想
愛知用水	A	社 中1	用：明治用水や <u>愛知用水</u> など多くの用水が引かれている。
アイロン	A	家 小6	用：せんたくした上着のしわをのぼし、形を整えるため <u>アイロン</u> を……関：アイロン台 (小6)
			用：線のさし方には、 <u>アウトラインステッチ</u> や……
アウトラインステッチ	B	家 中2	関：クロスステッチ、シャドウステッチ、サテンスステッチ (以下は第1ページの右側の事項である。)

試みに、国語科の用語を「あ」から順に30語だけ引用しておきたい。なお、用例は省略した。

アクセント	A	中2	意志 (行こう)	B	中2	歌枕	B	中3
足がかり (能舞台)	C	中1	遺著 (遺著の出版)	B	中3	SF (エスエフ)	B	中2
後座 (能舞台)	C	中1	已然形	C	中3	応答	A	中2
あめかんむり	A	小5	意図	B	中3	応答の表現 (肯否)	B	中3
あら筋	A	小6	いとへん	A	小3	欧米語	A	小6
案	A	中2	インタビュー	B	中2	大文字 (ローマ字)	A	小4
暗示 (桃の花も)	B	中2	韻文	B	中2	送りがな	A	小3
委員会	A	中2	うかんむり	A	小5	音 (おん)	A	小4
意義	B	中2	受け身	B	中2	おりかえし (筆法)	A	小1
意見	A	小3	うたい	C	中3	おれ (習字の筆法)	A	小1

本文献は、愛媛県内子市立内子中学校の教職員が力を合わせて作り上げた義務教育9年間の全教科専門用語集と呼ぶべき語彙表である。児童生徒にとって各教科の専門用語の習得は重要な問題である。全校の教職員がそこに着目して、このような「学習語彙表」を作成したことはまさに快挙というべきである。ただ、上に例示したように、そこに選定された用語が、児童生徒に必要な専門用語であるのかどうかは今後の課題であろう。

本文献の改訂版の作成が期待されるところである。

文献(67) 小学校国語科における学習語彙の調査 (研究報告 第11冊)

財団法人 中央教育研究所

財団法人 中央教育研究所 昭和53(1978)年 2 月10日

B 5 判 106ページ

〔構成〕

小学校国語科における学習語彙の調査について (林 四郎)	1 ページ
調査の概要	2 ページ
学習語彙表 — 五十音順表 —	3 ページ
学習語彙表 — 意味別表 —	82ページ

昭和52年12月の日付で巻頭に掲げられている、林四郎氏の「小学校国語科における学習語彙の調査について」は、全9段落で構成されている。この本文から、本書の調査の趣旨をよく表す第1, 3, 4, 6, 8段落の本文をそのまま引用する。

中央教育研究所では、昭和48年から50年にかけて、「学習基本語彙の基礎調査」を行った。

教育基本語彙の選定が大事であることは、広く国語教育にたずさわる人々の間で、早くから指摘されていながら、なかなか、真に有効適切な教育基本語彙が求められないでいる。この現状に、何か前進のための一石を投じようと、私たちは、まず、できるだけ客観的な方法で、現代日本語の基本的な語彙を求めることを試みた。

数十年前と今とで、状況に、一つ大きなちがいがあある。それは、国立国語研究所の大規模な語彙調査が、雑誌や新聞を資料として、すでに何回も実施され、その成果が発表されていることである。私たちは、まず、この国語研究所の語彙調査の成果を利用することを考えた。雑誌でも新聞でもある程度以上用いられていた単語を求めることを基礎作業として、これに教育的観点からの評定を加え、多少の修正を施すというやり方で、四千数百の語を選び、国立国語研究所の『分類語彙表』によって、意味分野の広がりを見渡せるようにしたのが、この調査であった。

私たちは、次に、国語教科書の語彙を調べることを必要と考えた。東京書籍の小学校国語教科書の語彙調査は、二十数年前に行ったことがある。今度は、それとはちがう方法によることとし、現行5社の国語教科書の1年用をすべて資料とするが、2年用以上は、用語の全部を調査することは避け、各教科書の脚注語彙を調査することとした。

ここに、5社の小学校国語教科書の脚注語の調査がまとまったので、学習基本語彙の調査の第二冊目として、公表することにした。このたびも、基礎調査の範囲内にあるもので、これをもって直ちに教育基本語彙、あるいは、その一部とすることはできないが、前回の調査と、この調査とを併せ考えるならば、学習基本語彙選定に向かって、重要な一歩を進めることになると思ふ。

次に、「調査の概要」の全文を引用する。

この調査をするにあたって、対象とした小学校国語教科書は、「小学校国語」(学校図書)、「新版国語」(教育出版)、「新編新しい国語」(東京書籍)、「小学国語」(日本書籍)、「小学新国語」(光村図書)の5社で、いずれも昭和52年度用版を使用した。これら5社発行の教科書の欄外に掲げてある学習重要語彙、および前記5社の1年用教科書に現われた語彙を収集整理し、五十音順表・意味別表にまとめた。分類の方法は、国立国語研究所編の『分類語彙表』に準拠した。語彙総数は、7,791語である。

五十音順表には、意味分類、見出し、表記、品詞の欄を設けた。なお、これらの語彙のうち、前回行った『学習基本語彙の基礎調査』（研究報告・第7冊）に収録されている2,788語には、見出し語の左肩に*を付して明示した。また、それぞれの語彙が、5社のうち何社に掲げられているかを、5～1の数字で右端に示した。

（5社 — 671語、4社 — 580語、3社 — 784語、2社 — 1,407語、1社 — 4,349語）

意味別表は、それぞれの分類番号によって、意味分類したものである。

次に、「学習語彙表 — 五十音順表 — 」は、次の形式で提示されている。

意味分類	見出し	表記	品詞	意味分類	見出し	表記	品詞
4.310	*あ		感 2	1.3150	あいしょう	愛唱	1
4.310	*ああ		感 2	1.3020	*あいじょう	愛情	3
1.442	アーチ		1	1.3121	あいず	合図	4
3.112	*あい	相	頭 1	1.434	アイスクリーム		1
1.3020	*あい	愛	1	2.302	*あいする	愛する	動 1
3.165	*あいかわらず		副 3	1.3030	あいそわらい	あいそ	1
1.3030	あいきょう	愛嬌	2	1.176	*あいだ	笑い	5
1.3121	*あいさつ		2	1.561	あいちょう	間	2
1.3020	あいじゃく	愛着	2	1.200	*あいつ	愛鳥	代 1

次に、この表に見られる意味分類1.3020及び1.3021に含まれる語を「意味別表」から引用してみよう。

1.3020 対人感情 (好悪など)	情け、思い、選り好み、好感、悪気、わだかまり、慈しみ、同情、愛、愛情、愛着、親愛、博愛、仁愛、仁術、親心、友情、あこがれ、やきもち、恨み、遠慮、謙遜、恐懼、親切
1.3021 対人感情 (敬意など)	敬意、尊敬、崇拜、感服、軽蔑、孝行、不孝、尊重、珍重、鑑賞、感謝、信用、信頼

本文献は、すでに見てきたように、①昭和52年版小学校第1学年用国語科の各教科書における全用語の整理、②小学校第2～6学年の各国語教科書の欄外に提示している語句の収集、という内容構成になっている。それは、①が基本的あるいは基礎的な語彙であるのに対して、②が難語句中心という異質なものの組み合わせになっている。上に「対人感情」として引用してみた語群には、小学校で学習させるには難解すぎる語が数多く含まれている。教科書の欄外には、理解困難であるために、学習させるのに適切でないという意味で掲げている難語句もあり、それらも合わせて集められた感じがする。

本文献は、何らかの手を加えれば、小学校でなく中学校の学習基本語彙を検討する上で、意味をもつようにも考えられる。

文献(68) 日本語教育基本語彙 第一次集計資料(1) — 上位二千語 —
(特別研究「日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究」資料1)

国立国語研究所日本語教育センター第一研究室 昭和53年(1978)年3月5日

A4判 67ページ

本文献は、国立国語研究所日本語教育センター第一研究室が、昭和50(1975)年度～昭和53(1978)年度の特別研究「日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究」を行った研究成果の一部である。

本文献は、「上位二千語」として昭和53(1978)年3月5日にまとめられ、その半年後の昭和53(1978)年8月には「資料2」として「六千語」が刊行されている。同じ研究から生まれた成果であり、「六千語」には、この「上位二千語」も含まれているが、この「上位二千語」は、日本語教育の世界で重要な文献として引用されることが少なくないので、本報告では別に取り上げるのである。

本文献は「国立国語研究所」のロゴが印刷されている罫紙(A4判 全34行)を使用して作成した一覧表の複写67葉を綴じた白表紙本である。その罫紙の右下には「日本語教育研究室」というゴム印が押されている。その白表紙の報告書には、「まえがき」や「凡例」等は付けられていない。罫紙は全34行の第1行を各種コードの記載に用いて、残りの33行を集計に使用している。各種コードの記載及び各語の記載は手書きで、それら以外の数字や符号の印字は電子計算機によるものである。なお、各欄の仕切りは鉛筆が使われている。そして、罫紙の右上には枚数を記す線があり、そこに電子計算機で1～67の番号が記されている。

まず、文献(69)の「日本語教育基本語彙 第一次集計資料 — 六千語 —」の全6項目構成の「まえがき」の第5項目までの本文から、「上位二千語」の説明として必要な項目を抜粋しておきたい。

1. この資料は、留学生等外国人の日本語学習者が、専門領域の研究または職業訓練に入る基礎としてはじめに学習すべき日本語の一般的・基本的な語彙について妥当な標準を得るための基礎資料として作成されたものである。
2. 選定の方法としては、専門家判定方式により、判定材料としては、類義語のリストである『分類語彙表』(国立国語研究所資料集6, 1964)を用いた。

専門家の判定には、日本語教育・国語学・言語学の専門家20人に『分類語彙表』を提示し、所載の約33,000語のそれぞれについて以下(3.)の三段階の判定を求め、その得点を集計した。

3. 判定

第1判定；1. を基準として、6,000語を目安に選定する→1点として集計

第2判定；第1判定で選定されたもののうち最も基本的と考えられるものを2,000語を目安として選定する→2点として集計

0 判定；第1・第2判定のいずれにも判定されなかったもの→0点として集計

5. 見出し語の排列は『分類語彙表』の排列順に従った。

「体」の類(名詞のなかま)→「用」の類(動詞のなかま)→「相」の類(形容詞・形容動詞のなかま)→その他(接続詞・感動詞のなかま)

次に、本文献の中心である一覧表の構成について、「まえがき」の第6項目から必要な事項を引用しておきたい。なお、一覧表としては、最初の部分を例として掲げることとする。

1. 語彙領域コード；『分類語彙表』の意味分類別項目番号を示す。
2. 語種コード；1. 和語 2. 漢語 3. 外来語 4. 混種語
3. 得点（順位）；得点はそれぞれの語の判定結果20人分の集計である。40（2点×20人＝40点）を最高とし、0点（0点×20人＝0点）を最低とする41段階である。
4. 判定型コード；各語に対する判定者による偏りを調べるためのもので、2桁のコードよりなる。

1.1

番号	語	語彙領域(品詞)		語種	得点	(順位)	判定型(2, 1, 0)				備考	
1.1	1	これ	1100		1	40	1	A 1	20	0	0	
	2	それ	1100		1	40	1	A 1	20	0	0	
	3	あれ	1100		1	40	1	A 1	20	0	0	
	4	どれ	1100		1	40	1	A 1	20	0	0	
	5	どちら	1100		1	29	1292	A 3	12	5	3	
	6	何(なに, なん)	1100		1	40	1	A 1	20	0	0	
	*7	何 (なに)	1100		1	28	1446	X	14	0	6	
	8	何か	1100		1	29	1292	A 3	12	5	3	
	9	もの (者, 物)	1100	1	1	39	125	A 2	19	1		

この「上位二千語」は、得点25点以上の2,183語である。

次の表は、文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』の表1から必要な部分を抜き出したものである。
これによると、第1次資料の「上位二千語」の得点25点以上の累積語数は2,090語ということになる。

得点	語数	累積	得点	語数	累積	得点	語数	累積
40	124	124	33	116	921	26	172	1912
39	118	242	32	130	1051	25	178	2090
38	113	355	31	111	1162	24	195	2285
37	107	462	30	129	1291	23	216	2501
36	126	588	29	154	1445	22	225	2726
35	102	690	28	157	1602	21	39	2965
34	115	805	27	138	1740	20	232	3197

本文献は、文献(74)『日本語教育語彙資料(1)(2) — 低学年初級500語 —』の基礎資料として、また、文献(81)『日本語教育基本語彙七種比較対照表』の基礎資料として使われた。その資料の中では、1,968語という収録項目数になっている。それは、第一次資料の「上位二千語」が上に例示したように同根の語を別々に立てているのに対して、文献(81)では、それらを一つにまとめているからである。

なお、日本語教育センター第一研究室には、『日本語教育基本語彙第一次集計資料 2000語索引』（全53葉）が内部資料として保存されている。その資料には、上記の得点24・23点の語約400語も#を付けて収録されている。

文献(69) 日本語教育基本語彙 第一次集計資料 — 六千語 —
 (特別研究「日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究」資料2)
 国立国語研究所日本語教育センター第一研究室 昭和53 (1978) 年8月
 A 4判 227ページ

〔構成〕

まえがき	i ~ iii ページ
目次	iv ページ
一覧表	1 ~ 227 ページ

本文献は、国立国語研究所日本語教育センター第一研究室が、昭和50 (1975) ~ 53 (1978) 年度の特別研究「日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究」を行った研究成果の一部である。その調査の目的は「留学生等外国人の日本語学習者が、専門領域の研究または職業訓練に入る基礎としてはじめに学習すべき日本語の一般的・基本的な語彙について妥当な標準を得る」ことに置かれていた。

まず、本文献の全6項目構成の「まえがき」から第5項目までの全文を引用しておきたい。なお、第6項目は一覧表の具体的な説明であるので、後に回すのである。

1. この資料は、留学生等外国人の日本語学習者が、専門領域の研究または職業訓練に入る基礎としてはじめに学習すべき日本語の一般的・基本的な語彙について妥当な標準を得るための基礎資料として作成されたものである。

2. 選定の方法としては、専門家判定方式により、判定材料としては、類義語のリストである『分類語彙表』(国立国語研究所資料集6, 1964)を用いた。

専門家の判定には、日本語教育・国語学・言語学の専門家20人に『分類語彙表』を提示し、所載の約33,000語のそれぞれについて以下(3.)の三段階の判定を求め、その得点を集計した。

3. 判定

第1判定; 1. を基準として、6,000語を目安に選定する→1点として集計

第2判定; 第1判定で選定されたもののうち最も基本的と考えられるものを2,000語を目安として選定する→2点として集計

0^{ゼロ}判定; 第1・第2判定のいずれにも判定されなかったもの→0点として集計

4. この資料は上の集計結果について、得点の高い順に「6,000語」を目安に取りだしたものである。

このうち、より得点の高い上位「2,000語」については、語番号の前に#記号を附した。

「6,000語」(得点9点以上); 7,487語(内 *語305語)

「2,000語」(得点25点以上); 2,183語(内 *語87語)

5. 見出し語の排列は『分類語彙表』の排列順に従った。

「体」の類(名詞のなかま)→「用」の類(動詞のなかま)→「相」の類(形容詞・形容動詞のなかま)→その他(接続詞・感動詞のなかま)

次に、本文献の一覧表の構成について、「まえがき」の第6項目から必要な事項を引用しておきたい。

1. 語彙領域コード; 『分類語彙表』の意味分類別項目番号を示す。
2. 語種コード; 1. 和語 2. 漢語 3. 外来語 4. 混種語

3. 得点 (順位) ; 得点はそれぞれの語の判定結果20人分の集計である。40点 (2点×20人=40点) を最高とし、0点 (0点×20人=0点) を最低とする41段階である。
4. 判定型コード ; 各語に対する判定者による偏りを調べるためのもので、2桁のコードよりなる。

ところで、日本語教育センター第一研究室に保存されている本報告は、表紙の左上部に「漢字表記台帳」と墨書されている。それは、備考欄に、黒エンピツと赤ペンによる書込みをもつ資料である。一覧表の1ページの上覧に、「黒エンピツ 学研辞典表記」、「赤 阿左美校正のもの」という注記が書かれている。その書込みの比較的多く見られる箇所 (215ページ上部) を少し引用してみよう。なお、備考欄記載の語が黒エンピツ、下線を施した語が赤表記のものである。また、「阿佐美」は第一研究室で働いていた阿佐美厚子氏である。

番号	語	語彙領域	語種	得点	(順位)	判定型 (2 , 1 , 0)				備考
7063	花やか	3330	1	19	3198	O 3	1	17	2	・華やか <u>華やか</u> 派手 地味
#7064	はで	3330	1	30	1163	A 3	11	8	1	
#7065	じみ	3330	2	29	1292	A 3	10	9	1	
7066	粋 (いき)	3330	1	14	4632	O 3	1	12	7	
7067	スマート	3330	3	19	3198	O 3	3	13	4	
7068	素朴	3330	2	16	4025	O 3	2	12	6	素ほく <u>そほく</u>
7069	粗末	3330	2	9	6688	V 3	1	7	12	<u>そまつ</u>
7070	幸 (さいわい)	3331	1	19	3198	O 3	5	9	6	幸い <u>幸い</u>

なお、特別研究「日本語教育のための基本的な語彙に関する比較・対照研究」資料1として、『日本語教育基本語彙第一次集計資料 — 6,000語索引 — 』(昭和55 (1980) 年B 5 判 72ページ) が刊行された。本文献は次の「まえがき」を掲げている。

本索引は、先に刊行された『日本語教育基本語彙 第一次集計資料 六千語』(国立国語研究所日本語教育センター第一研究室, 1978.8) の50音順索引である。

なお、各語彙項目のうち、左肩に*を附したものは、専門家判定の結果、より高い得点を得た上位約2,000語である。

以下、「あ」の最初の12語を引用しておきたい。

あ	4.310	相変わらず	3.165	アイスクリーム	1.434
*ああ〔副〕	3.100	*あいさつ	1.3121	*愛する	2.302
ああ (嗚呼)	4.310	愛情	1.3020	愛想	1.3030
*愛		*合図	1.3121	*間	1.176

本文献は、日本語教育のための重要な語彙表として引用・活用されていたが、その後比較対照する資料を増補するかたちで、文献 (90) 『日本語教育のための基本語彙調査』に集約された。

文献(70) 小学校における教育用語（国語・社会・算数・理科）の学年別の使用実態

— 教科書の言語分析と実践のためのハンドブック —

後藤忠彦・他（岐阜大学教育学部附属カリキュラム開発研究センター）

教育システム普及会 昭和53（1978）年10月

A 5 判 序 1 ページ 一覧表171ページ

本書は、最初の1ページに「序」が置かれているだけで、「凡例」も「解説」も見られない。すぐに一覧表が続いている。そこで、まず、巻頭に置かれている「序」の全文を引用しておきたい。

この調査は、小学校の国語・社会・算数・理科において、それぞれの教科の内容を言語的に伝達するために重要と思われる文例を教科書の記述の中からとり出し、文例に含まれる「語句」のレベルの学年別出現頻度を一覧化したものである。

抽出した約一万の文例を、京都教育大学教育学センターの西之園・永野両氏によって開発されたコンピュータによる機械検索の方法によって「語句」に分割し、その学年別出現頻度を新学習指導要領に示す学年別に割当てられた教育漢字を検索語として配列した。検索語には機械による情報検索のためのコードを4桁の数値で与えた。

この教育用語集は、教科書の編集や研究に従事する人たちに資料として提供すると共に、現場の実践者に教育用語の学年段階による使用事例の指標として広く利用していただくことを目的として刊行するものである。とくに、経験の浅い教師が日常的な指導と計画の実践活動の中で、この調査結果を利用し発達に即した用語の選択に心掛けることによって、こどもたちの言語生活を豊かにする指導に役立てていただきたい。

調査に当たっては岐阜大学のカリキュラム開発研究センターと京都教育大学の教育学センターが分担協同して、短期間に困難なしごとをなした。協力していただいた方々の氏名を記して感謝の意に代えたい。（引用者注；氏名の引用は省略した。）

なお、研究費の一部は文部省科学研究費補助金によって行われた。

昭和53年10月11日

岐阜大学教育学部附属カリキュラム開発研究センター

センター長 成瀬 正行

さて、本書の一覧表は、大きく1年から6年に分けられ、それぞれの学年は、各配当漢字が音（訓）順に配列されている。そして、その漢字を含む用語を50音順に配列している。当時の小学校の学年別漢字配当表の漢字は、次の表のとおりである。

学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	合 計
字 数	76	145	195	195	195	190	996
語 数	1,412	1,746	1,541	996	558	393	6,646

例えば2年で示すと、配当漢字145字のそれぞれを検索語として見出しに掲げて、その右にその漢字を含む

言葉を配列している。上の表の1,746語は、2年に配当されている145字の漢字を使った熟語の6年間の合計数である。(2年配当の漢字であるから、1年の用例数は0になる。) 後で例として「家」を取り上げるが、この漢字は、「家」を含めて合計17語の熟語を構成している。これは、漢字の学習と語彙力の育成を関連づける意味をもっている。また、国語科だけでなく社会科、算数科、理科の4種の教科書の用語調査を行ったことも評価することができる。

問題点として、各教科書の中から「教科の内容を言語的に伝達するために重要と思われる文例」を取り出したという調査の過程のことがはっきりしない。例えば、どういう文例なのか、「教科の内容を言語的に伝達する」とはどういうことか、などのことが明記されていない。

例えば35～36ページの「家」は、次のようになっている。この表の見方を6項目にまとめてみよう。

〔二年〕		I	II	III	IV	V	VI	TOTAL	
〔1840〕 家	家	0	1	5	2	6	2	16	1. 漢字の配列は、学年別漢字配当表による。
	家来	0	1	0	0	0	0	1	2. 「家」の前の番号は、区点番号。
	家族	0	0	1	1	0	0	2	3. ローマ数字は、各学年を示す。
	一家じゅう	0	0	0	1	0	0	1	4. この表の枠組みの線は、引用者が補ったものである。
	ひゃくしょう家	0	0	0	1	0	0	1	5. 各熟語の配列は、教科、学年、五十音順などによるものと推察される。はっきりしたことは言えない。
	人家付近	0	0	0	0	1	0	1	6. 「家」が仮名で表記された1年の語・熟語は取り上げられていない。
	人家	0	0	0	0	1	0	1	
	一家	0	0	0	0	2	0	2	
	家庭訪問	0	0	0	0	0	1	1	
	法治国家	0	0	0	0	0	1	1	
	政治家	0	0	0	0	0	1	1	
	兼業農家	0	0	0	0	1	1	2	
	劇作家	0	0	0	0	0	1	1	
	家臣	0	0	0	0	0	1	1	
	家具	0	0	1	1	0	0	2	
	農家	0	0	3	1	1	0	5	
	家畜	0	0	0	0	0	1	1	

例に「家」を取り上げたのは、その漢字を用いた語句を使って様々な学習指導が考えられそうであること、例えば「ひゃくしょう家」「政治家」などにおける「一家」の読みと意味の違い、「家来」「家臣」などにおける「家」の読みの違いなどの問題を導くことができそうだからである。

本文献に取り上げられている漢字は、わずか千字足らずであるが、それによって導かれる語数は、ざっと計算して6,600語強であった。その中には、すでに指摘したように、さらに整理しなければならない語句もありはするが、国語教科書だけの用語分析では求めがたい広い範囲の用語が含まれている。

文献(71) 低年齢層を対象とした日本語教育教材のための基礎調査 (第2期研修了報告書)

日本語教育センター研修室第2期長期研修生 (藤田正春他 簡易製本)

国立国語研究所・日本語教育センター研修室 昭和53 (1978) 年12月

B 5 判 198ページ

〔目次〕 (細目は、第4部を除いて省略。また、「参考文献」を省略)

第1部 基礎調査の概要と経過 (1.1~1.8)	1~22ページ
第2部 児童読み物30冊の選択とサンプリングについて (1~4)	23~56ページ
第3部 語彙調査にあらわれた擬音語・擬態語について (I~III)	57~85ページ
第4部 語彙表の説明 (4・1 収録語数の内訳 4・2 五十音表の説明)	86~88ページ
第5部 教科書五十音順語彙表	89~189ページ
第6部 低学年国語教科書の頻度別リスト	190~197ページ

本文献は、国立国語研究所日本語教育センター日本語教育研修室の長期研修生が研修了の報告のために取り組んだ調査研究である。

まず、第1部の「基礎調査の概要と経過」から本調査の目的、調査対象などについてまとめておきたい。

〔調査の目的〕 年少者向けの日本語教材作成の資料とするための語彙調査を行う。

〔調査の対象〕 1) 国語教科書 東京書籍の1~2年版4冊

2) 児童読物30編 (「あかずきん」など翻訳作品と「いよいよえん」などの創作) のサンプリング調査 (これらの児童読物の選定に関しては、アンケートによる調査を複数の小学校児童約200名に実施してよく読まれている児童読物を決定。)

〔調査の単位〕 β 単位

〔難易度の設定〕 文献 (62) 『学習基本語彙の基礎調査』に基づいて、難易度をA~Dに区分する。

次に、「第4部 語彙表の説明 (教科書の部)」の「4. 1 収録語数の内訳」では、まず、次の表が掲げられている。なお、「教科書の部」という限定は、「児童読物の部」を想定したものであるが、本文献にはその語彙表は掲げられていない。また、延べ語数の各巻ごとの語数は記されていない。

	総 数	1 ウエ	1 シタ	2 ウエ	2 シタ
延べ語数	16,725				
異なり語数	1,980	478	736	937	1,064

この表に続く「4. 2 五十音表の説明」の全文を引用しておきたい。

- ① この表には、見出し語、漢字表記、意味分類、難易度 (学年配当)、総頻度数、各巻の頻度数 (1 ウエ, 1 シタ, 2 ウエ, 2 シタ) の計9つの欄がある。
- ② 「見出し」には、外来語はかたかな表記、その他はひらがな表記で示した。動植物名は、かたかな表記で統一すべきであるが、学術的動植物意識、及び、外来語意識の低いものはひらがなで示した。この件に関しては再考の余地があると思える。
- ③ 「漢字表記」は、見出しに対する注記である。数種に書き表わせる場合は、その語を掲げた。調査対象

においての表記及び用字法を示したものではない。

- ④ 「難易度（学年配当）」は、見出し語の学習すべき学年を、A（低学年）、B（中学年）、C（高学年）、D（上級段階）で示した。
- ⑤ 「意味分類」は、「分類語彙表」の分類番号を、その語の代表的意味に対し、一つだけ示した。

次に、第5部「教科書五十音順語彙表」の1枚目の上半分を引用してみよう。この語彙表は、手書きの用紙でちょうど100ページ分になっていて、1枚に見出し語が20語ずつ掲載されている。なお、総頻度数の数字は原文のままである。

見出し語	漢字表記	分類番号	難易度	総 頻 度 数	各巻の頻度数			
					1 ウエ	1 シタ	2 ウエ	2 シタ
あ、ああ、あっ		4.310	A	17	2	6	8	
ああん				1		1		
あいさつ	挨拶	1.3121	A	2				2
あいだ	間	1.176	C	9		3	3	3
あいて	相手	1.220	A	3			2	1
あいどり				1				1
あう	合う	2.1550 (2.112)	A	4	1			3
あおい	青い	3.502	A	9	1	3	3	2
あおじろい	青白い	3.502		1				1
あおぞら	青空	1.520		2				2

「第6部 低学年国語教科書の頻度別リスト」では、頻度10以上の語を10刻みで9種に分けて、五十音順に提示している。その一覧表の後に置かれた「考察」の前半を引用しておきたい。

上位20語から幼児語の特徴をひろえば、「御」「～さん」「～ちゃん」「～達」といった接頭語、接尾語が多いということがあげられよう。この傾向は、「雑誌九十種」などでは見られないのに対して、阪本氏の幼年を対象とした調査は同じように出てくるので、幼児のもつ語彙構造の一般的特徴として捉えられよう。

さらに、頻度数10以上のものについて、その特徴的な語彙を二、三挙げてみよう。まず、動物に関する語彙である。総称としての「動物」をはじめとして、数の多い順に「熊」「キツネ」「ウシ」「オオカミ」「タヌキ」である。ここで、おもしろいことは、日常身近であるだろうと思われる「イヌ」や「ネコ」が出てきていないことである。ちなみに、イヌー0、ねこー2がその頻度数である。次に親族語彙である。「おかあさん」「おとうさん」「おにいさん」（下線部が出現 β 単位）が、具体的に本文に現れている形である。（「おじいさん」に関しては、親族語としてよりも一般的な使用の方が圧倒的に多いので、この中には含めないものとした。）

本文献は国内で初めて年少者の日本語教育用に選定された基本語彙表としての歴史的価値を有している。なお、本文献は、この調査研究の指導者中野洋氏の所蔵になるものである。

文献(72) 全国方言基礎語彙調査項目 (『全国方言基礎語彙の研究序説』)

平山輝男

明治書院 昭和54 (1979) 年 2 月28日

B 5 判 728ページ

〔目次〕 (細目は、関係する第 I 章だけを提示する)

第 I 章 総論

1 方言基礎語彙とその調査研究	11ページ
2 資料表記の統一について	14ページ
2-1 資料の記述形式	14ページ
2-2 音韻的カタカナ表記	14ページ
2-3 特殊音のカタカナ表記	18ページ
3 全国方言基礎語彙調査項目	20ページ
付 項目索引	58ページ
4 「全国方言基礎語彙研究」のためのモデル研究について	76ページ
第II章 地域別方言の特色 (1~47)	77~244ページ
第III章 方言基礎語彙部分体系の記述 — 人体語彙を中心として —	245~448ページ
第IV章 全国方言人体語彙一覧とその考証	449~724ページ

第 I 章・1 で、まず、「方言基礎語彙」を「各地域社会の日常生活に密着している重要な語の集団」と規定し、次のような性格の語が含まれるとして、3 項目を挙げている。

- 1 日本全体に広く共通なもの (例、口・鼻・木・水・書く…)。
- 2 音韻・アクセント・文法・語彙それぞれの部分体系を比較的によく反映しているもの (1 の語も大部分含まれる)
- 3 通時的反映を示し、かつ現在の生活の中に生きているもの (1, 2 の語もかなり含まれるが、各方言において特色のあるものが多い)。

こうした観点で、昭和50 (1975) 年に、6,400余項目からなる「暫定的基礎調査項目」を選択した。これは18の分野に分けてある。この項目を選定するために参考にした「参考文献」名が、例えば文献 (59) 『外国人のための基本語用例辞典』 (文化庁 昭和46 (1971) 年) をはじめとして、数十編記されている。なお、それらの中に、国立国語研究所刊の研究文献「日常基本語彙表」が取り上げられているが、何を指すのかははっきりしない。

その後で、6,400項目の適不適の検討を加えて補完を行い、その補完した「暫定的基礎調査項目」に基づいて、北海道から琉球に至る20地点の主要方言の臨地調査を行うことによって、11月には前記の「暫定的基礎調査項目」を2,500項目に削減した。これは、全研究者が分野別に調査項目を検討して選んだものである。この調査表が「全国方言基礎語彙調査項目」と呼ばれている。この「全国方言基礎語彙調査項目」は、その後も補完を行い続けている。「調査表と方言調査とは車の両輪のようにして相助けて互いに向上」する関係にあるから、これからも方言調査を続けることによって、調査表が少しずつ補完されていくのであろう。現行の文献でも、何十人もの研究者が携わった成果として、きめ細かい調査表になっているように思われる。

次に、「3 全国方言基礎語彙調査項目」を紹介したい。

調査項目は、次の18分野からできている。分野番号1の「天地・季候」の「季候」は季節と気候の2語から作り上げた熟語のようである。

分野 番号	分野名	数量	分野 番号	分野名	数量	分野 番号	分野名	数量
1	天地・季候	159	7	住居	151	13	行動・感情	121
2	動物	160	8	民俗	117	14	時間・空間・数量	276
3	植物	165	9	遊戯	64	15	職業	68
4	人体	202	10	教育	73	16	農林漁業	143
5	衣	141	11	人間関係	96	17	勤怠・難易・経済	46
6	食	188	12	社会・交通	149	18	助詞・助動詞・其の他	179

次に、各項目の配列は、「各分野のもとでの体系を考慮し、なるべく調査がしやすいように配列」されている。以下、分野番号3の「植物」を取り上げてみると、次に記号「/」で示すように、あるまともごとくに五十音順に配列されている。便宜上、調査項目の見出しだけを漢字で表記する。

1. 草 2. 野菜 3. 菜^な/ 4. 小豆 5. 粟 6. 虎杖^{いたどり} ~ 54. 辣蕪^{らつきょう} 55. 山葵^{わさび} 56. 蕨^{わらび} /
 57. 朝顔 58. 女郎花^{おみなえし} 59. 薊^{あじ} ~ 79. 牡丹^{ぼたん} 80. 百合 81. 蓮華^{れんげ} / 82. 麻 83. 綿 84. 木
 85. 果物 / 86. 通草^{あけび} 87. 無花果^{いちじく} 88. 梅 ~ 97. 蜜柑 98. 桃 99. 林檎^{りんご} / 100. 公孫樹^{いちじょう}
 101. 漆 102. 楓^{かえで} ~ 116. 藤 117. 松 118. 柳 / 119. 葎 120. 椎茸 121. 松茸 / 122. 苔
 123. 羊歯^{しだ} / 124. 昆布 125. 藻 126. 若布^{わかめ} / 127. 枝 128. 落葉 ~ 135. 幹 136. 脂^{やに} / 137. 皮
 138. 蕾^{つぼみ} ~ 146. 実 147. 芽 148. 種 /
 149. 落ちる ~ 165. 腐る (動詞用例17例が取り上げられている。五十音順ではない。)

次に、例えば、上記の146.~150.の5例の項目は、次のようになっている。

146. み (実) みかんのみ。※植物の実。くるみ。
 147. め (芽) めが出る。※若芽, 新芽, 脇芽。
 148. たね (種) たねをまく。果実のたね。
 149. おちる (落) 棒の花がおちる。
 150. ちる (散) 花がちる。

本文献は、方言調査のために編まれたものであるが、これまでに考えられてきた学習基本語彙とは違って、日常生活に密着した言葉が取り上げられているので、国語教育および日本語教育で活用できそうである。

文献(73) 学習基本語彙表 小学校国語科用

「新しい国語」編集委員会

東京書籍 昭和54(1979)年2月第1刷 B5判 67ページ

昭和60(1985)年4月改訂版第1刷 A5判 160ページ

〔目次〕(本文の引用を含めてすべて改訂版を用いる。語彙表の前におかれた「凡例」を省く)

学習基本語彙の選定にあたって 倉持保男 1ページ

1. 選定の意義 2. 選定の基準 3. 選定の経過 4. 選定を終えて

小学校における語彙指導の方法 藤井園彦 4ページ

学習基本語彙(五十音順) 10ページ

学習基本語彙(意味別表) 114ページ

「分類語彙表」における分類の仕方について 160ページ

まず、「学習基本語彙の選定にあたって」の「2. 選定の基準」の全文を引用する。

健全な社会人として豊かな言語生活を営むためにその理解と使用が必要不可欠であると考えられる語を選び出すことを基本として、次の条件に合う語を選定の基準とした。

a. 話し言葉・書き言葉の両面において、それぞれ使用度数が高いと考えられる語。

b. 使用度数はそれほど高くなくても、語彙体系の上から重要度が高いと考えられる語。

ア. 一群の語の上位概念を表す語。

イ. 親族呼称など相関的な対立を示す一群の語。

ウ. 話し言葉に対する書き言葉や常体を用いる語に対する敬語など、教育上の配慮を必要とすると認められる語。

上の条件に合う語でも、次の場合には選定の対象外とした。

c. 学習者の精神発達の段階や社会的な事柄に関する知識の点からみて、指導対象とするのに無理があると判断される語。

d. 使用度数が高くても著しく俗語的な語や規範からずれた形をとっている語。

(引用者注；なお書きは省略)

次に、「3. 選定の経過」の全文を引用する。(なお、各文献の発行年月は本文のままである。)

a. 「学習基本語彙の基礎調査」(中央教育研究所研究報告第7冊、昭和51年5月)に採録された4589語及び「教育基本語彙」(阪本一郎著、昭和40年5月、牧書店)からA1・B1の5000語を基礎資料として、両資料を整理した8048語を一語ずつ基準に照らして検討し約4500語を抽出する。

b. 上記基礎資料のかたよりや不備を、「新明解国語辞典」(第2版、昭和49年11月、三省堂)の重要語、及び「外国人のための基本語用例辞典」(文化庁、昭和46年8月)を参考にして補った。特に話し言葉的な表現に用いられる語にもれがないように留意した。

c. 「分類語彙表」(国立国語研究所編、昭和48年4月)を参照して語彙体系の面についての配慮を加えた上で、a, b段階で抽出された語に再度検討を加え、最終的に4161語を選定した。

d. 最終的に選定した4161語にA(低学年)、B(中学年)、C(高学年)の3段階による学習段階を示した。(A, B, Cの3段階のそれぞれは、さらに学年別に細分したが、それを各学年に厳密に適用しようとするには、種々の無理があるので、一応の目安ということにしたい。)

次に、学習基本語彙（五十音順）の最初の部分を引用してみよう。なお、引用に際して外枠を設けた。

見出し	表記	品詞	意味分類	東書	中研	阪本	初出
ああ		副	3.100	A	A	A 1	5 下35
あい	愛④	名	1.3020	C	C	B 1	5 上34
あいかわらず	相変わらず④④	副	3.165	C	B	A 2	2 下109
あいさつ	〈挨拶〉	名	1.3121	A	A	A 1	2 下27
あいじょう	愛情④⑤	名	1.3020	C	C	B 1	4 上29
あいず	合図②②	名	1.3121	B	A	A 1	1 下14
あいする	愛する④	動	2.302	C	B	B 1	3 下70
あいだ	間	名	1.176	A	A	A 1	1 下15
あいて	相手④①	名	1.220	B	A	A 1	3 上76
あいにく		形動副	3.133	C	C	A 1	
あいまい	〈曖昧〉	形動	3.306	C	C	B 1	
アイロン		名	1.454	A		A 2	
あう	合う②	動	2.112 2.1550	A	A	A 1	3 下16
あう	会う②、(遭う)	動	2.351	A	A	A 1	2 上 5
あお	青①	名	1.502	A	A	A 1	1 下57

この一覧表について、「凡例」から大切な事項を引用しておきたい。仮にここでの番号を打っておく。

(なお、この「凡例」は、昭和60年の改訂版から設けられたものである。)

- 「表記」欄の表記は、各語の意味をとらえやすくするために記しているものである。
- 「表記」欄の①～⑥の数字は、教育漢字の配当学年を示す。
- 「品詞」欄の表示は、一つの語の該当する品詞名のすべてをあげているものではない。
- 「東書」欄は、「新しい国語」編集委員会による学習段階を表示した。
- 「中研」欄は、『学習基本語彙』（中央教育研究所研究報告第25冊，昭和59年9月）による学年段階を表示した。 A…低学年 B…中学年 C…高学年
- 「阪本」欄は、「新教育基本語彙」（阪本一郎著，昭和59年1月，学芸図書）による学習段階を表示した。 A1～A2…低学年 B1～B2…高学年 C1～C2…中学校
- 「初出」欄は、「新しい国語」（昭和60年度）における，それぞれの語の初出箇所である。
- 意味別表の分類基準と配置は、『分類語彙表』（国立国語研究所編，昭和48年4月^(ママ) 秀英出版）に従っているが，配置を改めている語も若干ある。

次に、意味別表は、上引の「8」に示されるように文献（49）『分類語彙表』に従っているが、学年段階をA，B，Cの3段階だけでなく，1～6年の6段階に分けて提示している。これは，きめ細かい設定である。

本文献は，学習基本語彙を検討する上で，重要な文献として高く評価できる。

文献(74) 日本語教育語彙資料 (1) (2) — 低学年初級500語 —
(日本語教育の内容と方法についての調査研究) 資料集 (1) (2))

国立国語研究所日本語教育センター第二研究室

国立国語研究所 昭和54 (1979) 年 6 月

B5判 (1) まえがき2ページ 本表17ページ (2) まえがき1ページ 本表17ページ

〔構成〕(資料 (2) との関係で資料 (1) に「分類語彙表順」という名称を補った)

日本語教育語彙資料 (1) — 低学年初級500語 — (分類語彙表順) —

日本語教育語彙資料 (2) — 低学年初級500語 — (五十音順) —

日本語教育語彙資料 (3) — 年少者の日本語教育における初級50時間のための基本的文型

(引用者注; 資料 (3) は昭和55 (1980) 年の刊行, B5判32ページ。本報告では取り上げない。)

まず, (1) の「まえがき」の1~5をそのまま引用しておきたい。

1. この資料は, 外国語としての日本語教育のためのものであり, 低学年初級の段階で学習すべき500語の標準を得るための基礎資料として作成されたものである。
2. 500語の選定には当日本語教育センターで行っている日本語教育研究連絡協議会の委員14名の協力を得た。

はじめに, 国立国語研究所日本語教育センター第一研究室で作成した「日本語教育基本語彙第一次集計資料 (1) — 上位二千語 — 」(以下「2000語資料」) に基づき, 低学年初級の段階で学習すべき500語を目標として委員がそれぞれに選出した。また500語に含まれるべき語彙のうち, 「2000語資料」に選定されていないものについてはこれらを含めて500語とした。

次に各委員の選定結果を1語につき1点とし, これを集計し, 得点最高14点より順に選び, 目標500語に最も近い得点7までを含む530語を選定した。(引用者注; 注の引用は省略。)

3. 見出し語の配列は「2000語資料」の選定に用いられた『分類語彙表』(国立国語研究所資料集6, 1964年, 秀英出版) の配列の順に従った。

『分類語彙表』では「体」の類 (名詞のなかま), 「用」の類 (動詞のなかま), 「相」の類 (形容詞・形容動詞のなかま), その他 (接続詞・感動詞のなかま) の順に配列されている。

- ・本資料の語彙領域の欄のコードは『分類語彙表』及び「2000語資料」に用いられたコードであり, 左端のコード1, 2, 3, 4がこの順にそれぞれ「体」の類, 「用」の類, 「相」の類, 「その他」に相当する。
- ・語種の欄のコードは1, 2, 3, 4の順にそれぞれ和語, 漢語, 外来語 (漢語を除く), 混種語を表わす。

例: いつ (1), 毎日 (2), ページ (3), 毎朝 (4)

- ・なお, 備考欄に*印のある語彙は「2000語資料」には含まれていないものである。

4. この資料の他に, 見出し語を五十音順に配列した資料も合せて作成した。これには, 見出し語の表記に二種類以上の読み方のあるものについては, 読みの別に見出し語をたてた。

例: 年 (ねん, とし) → 年 (とし), 年 (ねん)

5. 語彙の選出に協力していただいたのは以下の委員である。(引用者注; 委員名は省略。)

資料 (1) の語彙表は, 「まえがき」に記されたとおり, 選定した530語を文献 (49) 『分類語彙表』の順に配

列したものである。表に提示した項目は、次に掲げる資料(2)と同一である。この資料から、品詞情報を得ることができる。

分類	体言	用言	相言	その他	合計
語数	1～371	372～424	425～513	514～530	
	371	53	89	17	530

例えば、この用言の53語は、次のとおりで、基礎語的な性質をもつと言えそうである。

ある いる 出る 出来る 起きる 始める 終わる 休む 止まる 立つ すわる 走る 飛び
来る 行く 帰る 出る はいる あける 閉める 寝る 笑う 泣く 待つ 忘れる 知る
わかる 数える 見る 見える 見せる 聞く 歌う 言う 話す 答える 書く 読む 休む
着る 食べる 住む 泳ぐ 遊ぶ 歩く 走る 持つ 飲む する 買う 使う 作る 生まれる

次に、資料(2)は、資料(1)に掲げた530語を五十音順に配列したもので、(1)の資料に比べると、見出し語が21語増えている。これは、上引の「はしがき」の「4」に記してあるように、違う読みの語句を別の欄に立てているからである。

例えば、資料(2)の本表の12ページの上段は次のようになっている。

記号	番号	語	語彙領域	語種	得点	順位	2000語資料の中の番号	備考
な	6	何(なに, なん)	1100	1	12	93	6	
に	98	二	11950	2	14	1	319	
	259	肉	14323	2	10	211	1062	
	77	西	11731	1	8	348	242	
	107	二十	11950	2	13	53	330	
	36	日(にち)	11634	2	7	438	147	
	153	日(にち, か)	11962	2	10	211	393	
	35	日(ひ, にち, じつ)	11634	2	7	438	145	
	34	日曜・日	11633	2	13	53	144	
	187	日本(にっぽん, にほん)	1259	2	7	438	548	

この「日」の欄は、36番が「日(にち)」, 153番が「日(にち, か)」, 35番が「日(ひ, にち, じつ)」になっているので、他の語彙表と比べると分かりにくい。これは『分類語彙表』の順に配列した文献(68)の「2000語資料」を資料として選定しているからである。

本文のサブタイトルの「低学年初級500語」の「低学年」は、日本への留学生を指しているのであって、「初級」は、いわゆる中級、上級に対する「初級」の意味である。しかし、それにしては、家族を表す「父、母、両親、兄、姉、弟、妹」などがなくて、「お父さん、お母さん、お兄さん」などが選択されている。それは、「低学年」という用語に惑わされたからであろうか。それとも日常言語としては「お父さん、お母さん」などがより重要だと考えられたのであろうか。ところで、謝罪を表す「ごめんなさい、すみません」が含まれていないのは元の資料に起因している。なお、家族を表す語の中で文献(68)の「2000語資料」に入っていない語は、「おにいさん、おねえさん、おじさん」の3語である。

文献(75) 漢字語彙資料

文部省特定研究「言語」林四郎班報告

昭和55（1980）年3月20日

B4判 133ページ

〔目次〕

まえがき（林 四郎）	（1～2）	第4学年配当漢字	40ページ
教育漢字学年配当一覧	（1）	第5学年配当漢字	53ページ
第1学年配当漢字	1ページ	第6学年配当漢字	66ページ
第2学年配当漢字	10ページ	教育外当用漢字	79ページ
第3学年配当漢字	24ページ	表外の字	129ページ

本文献は、文部省特定研究「言語」林四郎班報告『基礎的語彙と教育漢字学年配当との関連表』（昭和54（1979）年10月 B4判 133ページ。以下、『関連表』と略称）を下敷きとして、林四郎氏が増補等を行って作成した報告書である。

まず、『関連表』の「はじめに」の初めの3段落の本文をそのまま引用することにした。

漢字の学年配当を定めることには、教育の対象とする語彙の学年配当をすることに、ある程度、準じた意味がある。漢字には、表意文字であるよりは、表語文字であるといわれるように、漢字を学習することは、その漢字で表わされる語を学習することである。

それは、確かにそうである。しかし、漢字は、現在、日本語の中で、1字が1語を表わす働きよりも、他の漢字と結合して、2字で1語を表わす働きのほうが、はるかに大きいものとなっている。

このことから、漢字の学年配当と語彙の学年配当とは、やはり、大きくくいちがうことになり、結局は、全く別のこととなる。

林四郎氏は、漢字の学年配当を、語彙のそれと関係づけることが必要だと考えて、本報告で紹介している文献(62)『学習基本語彙の基礎調査』に掲げた4,589語を、「語彙表に記載された語の表記に従って、漢字表の各漢字に、用語例として記載」した。それが、上記の『関連表』である。その関連の示し方については次のように説明されている。

漢字を学年配当に従いつつ、字音の五十音順にかかげ、国語審議会の制定した音訓を示す。各音訓の適用該当例を、資料内の語によって示す。その際、2字で書かれる語は、相手の字の配当学年の位置に記す。

この『関連表』の問題点として、文献(62)の4,589語だけが対象になっていること、漢字表記もまた文献(62)に従っていること、外来語など500語が除外されていること、などが指摘されている。

本文献『漢字語彙資料』は、そうした問題点を克服しようとしたものであって「内容に即して正確に言えば『教育漢字を基準にした学習語彙考案第一次資料』というべきもの」と説明されている。すなわち、本文献は「教育漢字の学年配当を基準とし、各漢字につき、その字を用いて書くべき語で、学習することが望ましいと考えられる語を、組み合わせる相手の字との関係によって配列したもの」である。

すなわち、林四郎氏は、『関連表』を基本台帳にして、次のように、大幅な増補改訂を試みている。

国立国語研究所の婦人雑誌、総合雑誌、雑誌九十種の各語彙調査、および新聞の語彙調査の結果を総覧し、また、一般の国語辞典の収録語彙をも参照して、学習上必要と、林が考える語を集めなおして、増補する一方、不要と思う語を除いた。

「まえがき」には、この引用の「学習上必要と、林が考える語」の「学習」について、5項目にわたる説明を行っている。その中の3項目だけを取り上げておきたい。

- 1 考慮の対象とする学習者を、小中学生に限定せず、義務教育を終了して、社会生活を営み始めた一般人と考える。
- 3 学習者の語彙を、内側の輪としての使用語彙と、外側の輪としての保有語彙とに分ければ、ここでは、外側の保有語彙を対象と考えた。
- 5 漢字を基準にして語彙を考えたことの必然的結果として、この語彙表は、次のような性格を帯びることになった。
 - a 漢字表記を必要としない語は考慮の対象外となった。
 - b 名詞に重点が置かれ、動詞・形容詞は比較のおろそかになっている。副詞・接続詞等は、ほとんど考慮されていない。

次に、『関連表』及び本文献『漢字語彙資料』の第1学年の「音」の各一覧表は、次のようになっている。

（関連表）		1	2	3	4	5	6	教育外
	音	オン	音	音楽		・録音		
		イン						
		おと	音					
		ね						

（漢字語彙資料）		1	2	3	4	5	6	教育外
	音	オン	音 音楽 音声 ・高音	音階 音波 音感 ・発音 鼻音	音信 音節 ・録音 低音	音程 ・防音 雑音	音訓 音域	音響 ・擬音
		イン	・子音 ・母音 知音					
		おと	音 ・足音	・物音			・羽音	
		ね	音 音色 ・弱音 声音					

なお、上掲の表の例えば「・録音」の「・」は、「音」が後ろに付いた熟語であることを示している。
本文献の問題点は、上に引用した「5」に明記されているとおりである。そして、本文献が含み持つ価値は、後に続く者に、まだ十分には継承されていない。

文献(76) 日本人の知識階層における話しことばの実態 — 語彙表 — (文部省科学研究費特定研究「日本語教育のための言語能力の測定」資料集2)

志部昭平

国立国語研究所 昭和55(1980)年3月25日

A4判 245ページ

本文献は、全体としては報告書『日本人の知識階層における話しことばの実態』(B5判150ページ)及びその資料集第1輯～第3輯の3冊として刊行された。ここでは報告書の1～8の中の「5. 語彙調査とその分析」63～85ページ 志部昭平、真田信治)及び資料集第2輯である語彙表を紹介する。

〔構成〕

5. 語彙調査とその分析

- | | | |
|-------------|---------------------|--------------|
| 1. 語彙調査の概要 | 1.1 目的 | 1.2 方法 |
| 2. 語彙表 | 2.1 語彙表の性格 | |
| 3. 語彙の分析と知見 | 3.1 語彙表全体及び場面別語種の分布 | |
| | 3.2 高頻度語彙の分布 | 3.3 語種・品詞の構成 |
| 4. おわりに | | |

まず、本調査の目的を、引用しておきたい。

1.1 目的

本調査の目的は、留学生等外国人の日本語学習者が、日本の社会において接することが多い、日本人の知識階層の言語行動場面において、如何なる語彙が、その場面との関わりにおいて如何に使用されているか、その実態を把握し、以て話しことばの側面、言語運用の側面から、外国人の日本語学習者への語彙教育のあり方、日本語学習が求められている基本的な語彙能力について考察を進めるための基礎的資料を作成しようとするものである。

この目的のために、東京並びに東京近郊在住、在勤の7名の調査者のすべての言語行動面におけるあらゆる発話を録音する。すなわち、調査者自身の言語行動におけるあらゆる発話と、その言語行動場面において、それと関わるすべての話し手(相手)のあらゆる発話を対象としている。

調査対象となった録音記録は、各人1日1時間、1日の午前8時から夜8時までのおおよそすべての時間帯に渡るように按分して調査録音された6時間のテープで、7人分、延べ42時間である。次に、語彙調査では、他の書きことば調査の結果との比較を考慮に入れて、原則として、 β 単位を採用している。

次に、それぞれの語は、発話された「場面」によって、次に示す3つの場面に分類・整理している。

場面1 公的生活の場面 — 調査者の公的生活場面において行われたすべての言語行動を対象。ここでは具体的に大学及び研究所での研究と、学園生活の行動に限定されている。これが量的に多い。

場面2 私的生活の場面 — 調査者の私的生活場面において行われたすべての言語行動を対象。ここでは主に自宅での言語行動に限定されている。

場面3 外出先の場面 — 上の場面1及び場面2以外の場面で行われたすべての言語行動。

さて、本調査で得られた語彙全体の延べ語数は、66,329語、その異なりの語数は、5,341語である。ここで

語 種	和 語	漢 語	外来語	混種語	語種計	固有名詞	総 計
語 数	2,166	1,850	465	136	4,617	724	5,341
割 合	(46.9)	(40.0)	(10.1)	(3.0)	(100)		
雑誌九十種	(36.7)	(47.5)	(9.8)	(6.0)	(100)		

は、「表 5 語 種 分 布 (異なり語)」から場面ごとの数値を外して全体だけの数値を掲げてみよう。なお、() の中の数値は比率 (%) である。

本文献と対比的に掲げてみた文献 (44)『現代雑誌九十種の用語用字』における和語と漢語の割合が逆の関係になっている。つまり、本調査では和語の割合が大きいのに対して、文献 (44) は漢語の割合が大きくなっている。

次に、資料集 2『日本人の知識階層における話しことばの実態 — 語彙表 — 』は、次の構成になっている。なお、第 2 表以下には、使用度数及び語数を掲げた。(引用者注；各見出しは、目次の表現である。)

1	五十音順語彙表	(表 1)		
2	頻度順語彙表		(使用度数)	(語数)
	全体における高頻度語彙	(表 2)	20以上	465
	場面 1. における高頻度語彙 (表 3)		10以上	607
	場面 2. における高頻度語彙 (表 4)		10以上	245
	場面 3. における高頻度語彙 (表 5)		10以上	135

第 1 表の五十音順語彙表は、次の形式になっている。(212ページの「わ」の最後の 6 例)

見出し	使 用 度 数				意味分類	語種	備 考
	全体	1	2	3			
われる 割	1	1			2.1571	1	
われわれ 我々	23	21	1	1	1.200	1	
わん 腕	1		1		1.452	2	
ワン one	8	6	2		1.1950	3	
ワンピース one-piece	1		1		1.422	3	
わんわん	2		2			1	

次に、第 2 表の「全体における高頻度語彙」では、上掲の資料集 2 の「構成」で記したように、使用度数 20 以上の 465 語が示されている。仮に順位 340 の 12 語を漢字交じりの表記で引用してみよう。

一般 関係 九十 結構 子供 さあ (感) 授業 楽しい チーム 使い 年 (とし) なんか

本文献は、話し言葉の使用語彙の調査に基づく確かな資料としての価値をもっている。

文献(77) 文字・語句教育の理論と実践（新・国語教育シリーズ9）

松山市造・小林喜三男

一光社 昭和55(1980)年5月

B5判 282ページ

〔構成〕（「まえがき」「目次」・細目を略す）

第一部 語句教育

I 語句教育の目標と課題	11～43ページ
II 語句指導の原理と方法	44～64ページ
III 読みの中での語句指導	65～125ページ
IV とり立てての語句指導	126～156ページ

第二部 文字教育（細目は省略）	157～279ページ
-----------------	------------

〔付録〕「教育基本語い・関連重要語い」分類表	280ページ
------------------------	--------

児童言語研究会は、まずは昭和37（1962）年に文献（45）『言語要素指導』（明治図書）を刊行し、「教育基本語い」を提案した。その文献（45）と本文献の関係について、「まえがき」に次のように記している。

語句指導という、大方の読者は、文章の中の難語句の扱い方やそれを使つての短文作りなどが、パッと頭に浮かぶことでしょう。指導要領に「表現したり理解したりするための文字や語句を増す」とあり、それに基づいて教材を扱ってきた現場人の反応としてしかたのないところです。けれども、語句指導はそこにとどまるのではなく、そこを出発点として、こどもたちの脳裏に望ましい語い体系を作り上げてやることこそが重要なのです。望ましい語い体系の要所要所に位置するものが教育基本語いです。

（1文省略）先の「言語要素指導」は、一読総合法の生まれる以前のものもあり、語句指導の理想像といった観がします。本書では、一読総合法における語句指導の実践、体系への組み入れを図るとりたて指導の実践等を提示し、教育基本語いを中心にした重要語い表を提示するなどして、読者の実践にすぐ役立つようにしました。

次に、第一部・Iの「二 語句教育の目標と教育基本語い」から「教育基本語い」の考え方に関する本文を引用してみたい。

「教育基本語い」の理念なしに、語句指導をしたのでは、教材べったりのデタコ指導という愚におちいらざるを得ません。

では、教育基本語いの実際の姿はどうでしょう。これまでに、学者によっていくとおりかの案が示されていますが、選択基準として、使用頻度数に重きが置かれています。したがって、先にあげたような自然習得の見こまれる語句も数多く含まれています。

児言研では、昭和35年⁽⁷⁷⁷⁾に『言語要素指導』〈明治図書刊〉の中で、一八五五の教育基本語いを提案しました。その選定に当たって、

「それらを所有していることによって、よりよく思考や認識を活動させ、表現・通達のできる語を」ということを、最も根本的な基準にし、しほりにしほって、二千足らずの数にしたのです。この選定の意義は高く評価されるべきものと思っています。

ただ、残念なことに、五十音順に配列しただけなので、活用という点からみると不親切でした。

次に、「〔付録〕『教育基本語い・関連重要語い』分類表」の本文から、新しい提案に関係する項目を整理してみたい。本文献は、『言語要素指導』の五十音順配列を克服するために、文献(49)『分類語彙表』に分類の基準を求めて、次のような作業を行っている。なお、括弧を付けた注釈は引用していない。

- ① 児言研「教育基本語い」に一応目を通した。
- ② 『分類語彙表』の各語を見て、「基本語い」およびこれに準ずる語句をチェックした。
- ③ チェックした語句を、『分類語彙表』の類別に従って表に書き出す。体の類(名詞)については、小学校低・中・高・中学の四段階に分けた。
- ④ 『分類語彙表』の項目を統合して、表を整理し直す。例〔関係、本、因果、理由、目的、証拠、異同、類似・一致、相対、連絡、連続〕を一括して「関係」とした。(引用者注；読点等は原文のまま。)
- ⑤ 配列した語いのうち、先に児言研「基本語い」に選ばれている語には・印を付す。

次に、本書に添付されている一葉の「教育基本語い・関連重要語い分類表」を紹介しておきたい。本表は、横長の一覧表で、縦に「体(名詞)」「用(動詞)」「相(形容詞・副詞)」に大別される「種別」が設けられている。その「体(名詞)」は、「小・低」「小・中」「小・高」「中学」という4段階の「程度」が設けられている。次に、横は、文献(49)『分類語彙表』を参考にして「区分」が設けられている。その「区分」は、大きくは「1. 人間や自然のあり方」(1～8)、「2. 人間活動の主体」(1)、「3. 人間活動」(1～2)、「4. 自然物・自然現象」(1)に4分されている。この括弧内の数字は、中段階の区分で、その中のいくつかは下位段階にまで区分されている。1例を掲げておきたい。

「1. 人間や自然のあり方」は中段階として、「(1) もの・こと (2) 関係 (3) 存在・成立 (4) 組織・性質 (5) 状態 (6) 力・作用 (7) 変化・運動 (8) 時間・空間」の8類に分けられている。そして、その「(7) 変化・運動」で言えば、更に「変化 改革 始終 運動 進行等」など14項目に細分されている。その「(7) 変化・運動」の「変化」及び「改革」の一覧表を紹介しておきたい。なお、引用に際して縦欄と横欄を入れ替えている。

種別 程度 区分	体(名詞)				用(動詞)	相(形容詞・副詞)
	小・低	小・中	小・高	中 学		
変 化		変化 入れかえ 一定	安定 逆転	変革 転化 変更 同化 変遷 強化 変動	変わる	ひとりでに 自然 自由 おのずから
改 革	直し とりかえ	改良 改正 改心 切りかえ 交代	改善 修正 改造 回復 復興	改革 変換 改新 安定 転換 交換 刷新	改める	

本文献は、児童生徒が論理的思考力を身に付けるために必要な語句という見方を提案していて大変啓発的である。

文献(78) 生徒の言語環境を整えるための重要語い集

岡山市立丸之内中学校

岡山市立丸之内中学校 昭和55（1980）年11月10日

B 5 判 763ページ

〔構成〕（引用者が、構成を配慮して簡略化して提示する。〔注記〕〔編集後記〕は省略）

この「重要語い集」を使う生徒諸君へ 2 ページ

日常の言語生活

日常使用するあいさつと手紙のあいさつ 10ページ

日常生活における敬語の使い方 27ページ

各教科の語彙一覧（教科の多くが学年別に提示されている）

国語（1～3年、文法、書写） 37ページ

社会（地理（日本・世界）、歴史、公民の別に提示されている） 310ページ

数学（1～3年） 458ページ

理科（第一分野上・下、第二分野上・下） 480ページ

音楽（1～3年） 537ページ

美術（1～3年） 581ページ

保健体育（1～3年） 592ページ

技術・家庭（男子1～3年、女子1～3年） 634ページ

英語（1～3年） 708ページ

まず、生徒へ呼びかけている「この『重要語い集』を使う生徒諸君へ」から、第3段落、第4段落の本文を引用しておきたい。本文の趣旨を明確に言い表していると思われるからである。

この「重要語い集」には、生徒諸君が毎日使っている1年から3年までの全教科書（ただし、副読本と地図は除く。）の中から、日常生活や授業に直接役立ち、しかも、大切だと思われる語いを集め、それぞれに、説明を中心にして、類義語・対義語・同音異義語などを加えています。それに、「生徒の言語環境を整えるため」という観点から、あいさつ（手紙を含む。）と敬語に関するもの（後述3を参照）もまとめています。

そのまとめ方は、原則として各教科書ごとに整理しました。ただし、国語の文法に関するものと書写は全学年共通としました。したがって、各教科や、同一教科の中でも、学年が異なれば、同じ語いが繰り返し取り上げられている場合があります。ということは、その語いはそれだけ重要語いだともいえます。しかし、教科によっては、重複を避けて整理された教科もあれば、語いを精選してまとめられた教科もあります。また、同じ語いの説明なども、教科や学年によって異なる場合もあります。

上掲の〔構成〕に明かなように、教科ごとの重要語が五十音順に取り上げられている。それらの数量などは明記されていない。例えば、国語科1年の見出し語を2ページ分だけ掲げてみよう。なお、引用に当たっては、意味のつかみやすさを考慮して漢字仮名交じりの表記に改める。

あいまい 仰ぐ あかし（証） 明かす 明かり障子 上がり框に 悪徳 明けぬるを 鮮やか
足固め あし（脚） 足どり 足をはさむ 汗にまみれる あたい（値） 与えた教訓 暑い季節
扱う 悪漢 圧倒する あなどる 甘柿 天の川 綱 危うい 過ち 謝る 荒々しい 著す

ここに例示したように、①語の単位に限っていない（「上がり框に」など）、②古文の語句も含む（「明けぬるを」など）、③教科書教材による偶然性を有する（上引の語句の中にも、「悪漢」をはじめとして、なぜこうした語句が入っているか、明確でない語句が取り上げられている）などの特徴をもっている。

例えば、その国語1年の最初は、次のように記述されている。

あいまい aimai あいまい	〔説〕 はっきりしない。疑わしい。あやしい。 〔用〕 あいまいなところ。あいまいな態度。あいまい模糊。 ＝ あやふや	あざやか azayaka あざやか	〔説〕 はっきりして美しい。みごとだ。生き生きしている。 〔用〕 あざやかな色。あざやかな新緑。あざやかな姿。 ＝ 鮮明 鮮白 ・ 鮮麗 鮮魚 鮮血 鮮度
あおぐ aogu 仰ぐ	〔説〕 上を向く。敬う。求める。一息に飲む。 〔用〕 空を仰ぎ見る。師と仰ぐ。指示を仰ぐ。毒を仰ぐ。	あしがため ashi-gatame 足固め	〔説〕 できやすい状態にすること。登山の前に足慣らしをすること。物事の基礎をしっかりとすること。柱

こういう見出し語が、国語の1年～3年で、約3,000語取り上げられている。なお、国語には別に「文法」と「書写」の一覧表が掲げられている。「文法」ではいわゆる文法用語が中心に取り上げられている。「書写」では、書写に係わる専門用語と、例えば「少年老い易く学成り難し」などといった教材の語句が取り上げられている。試みに10ページ目の全見出しを掲げると、「硬筆の用具 興福寺断碑 皇甫誕碑 剛毛 高野切古今集 踰える 快く 湖水 梢 ご都合 小鳥 古筆 小筆 古墳群 今昔」というように、書写に直接関係する用語と、教材に出てくる語句に二分される。ここから、広義の国語科は、一般用語が中心の「国語」、専門用語が中心の「文法」、両者混用の「書写」というように整理することができる。そして、他の教科も、この3種のいずれかということになる。

次に、例えば、「アクセント」を取り上げている音楽、技術・家庭、英語の3教科の扱いを取り上げてみよう。国語は、合計3,000語を超える用語が取り上げられているが、残念ながら教科専門用語である「アクセント」は見出しに掲げられていない。

各見出し	音楽（1年）	技術・家庭（3年女子）	英語（1年）
あくせんと akusento アクセント	〔説〕 その音を特に強く。 ＝ 強調	〔説〕 強調すること。 重点。	〔説〕 語の中のある音節の特に際立った抑揚。

本文献は、まだ、パソコン等の出回っていない段階での手作業によるものである。そこから、「このような不統一をなくすために、当初、国語以外の全教科を校長自らが目を通され、収録してはどうかという語いにチェックされたのですが」云々という断りの言葉が、本報告の実態を如実に表している。

本文献は、文献（66）『学習語彙表 — 語彙指導のための基礎作業 —』（内子中学校）や後続文献（112）『教科語彙一覧 学校生活語彙一覧』（お茶の水女子大学附属中学校）などと同じ試みとしてとらえることができる。

文献(79) 小学校における効果的な語彙指導

福沢周亮・岡本まさ子

教育出版 昭和56（1981）年2月5日

A5判189ページ（まえがき2ページ 目次5ページ 本文189ページ）

〔目次〕（まえがき、あとがき、及び、各節名を略す）

第1章 語彙指導の理論的背景	1 ページ
第2章 学年別語彙指導の実際	19ページ
第3章 語彙指導の展開案	71ページ
第4章 語彙指導年間計画	108ページ
第5章 学習基本語彙表－梁田小学校版	119ページ
一 はじめに 二 学習基本語彙（梁田小）設定の手続き 三 学習基本語彙表	

第5章の「一 はじめに」の全文を引用しておきたい。

本章では、学習基本語彙表（梁田小学校版）を紹介する。

この学習基本語彙表は、次に述べる「設定手続き」でも明らかなように、一地方都市の一小学校の児童を対象としたものである。しかし、だからといって、一小学校の児童以外に対し、何らかの意味もたないとは考えたくない。少なくとも、今後、各校で、自校の学習基本語彙表を作成しようとする際、一つの資料として、有意義な役割を果たすであろうと考えるのである。

次に、同じ第5章の「二 学習基本語彙（梁田小）設定の手続き」、特に「② 本調査」の箇所から必要な事項を紹介する。

(1) ア 調査問題の作成と調査実施に先立っての留意点

(ア) 調査対象語は、『学習基本語彙表』（東京書籍、1979）の4160語^(マア)とした。

(イ) 調査用紙は、その「ことば」について、「知っている」と「知らない」の欄を設けた。

(ウ) 「知っている」の定義は、「使用したことがある。聞いたことがある。読んだことがある」言葉とした。

(キ) 同音異義語については、全学年とも、同一例文の中で示した。

イ 調査対象 足利市立梁田小学校児童250名

(2) イ 整理・語彙の選定

- ・ 低・中・高別に検討した結果をもとに、全体を通して再検討し、「知らない」と応答した児童が10パーセントに満たない語については、特別の理由のないかぎり削除する。（引用者注；削除した語数は示されていない。）
- ・ 『ことばのずかん』（福沢周亮、講談社、1974）に示されている言葉については、幼児を対象とした言葉であるため、原則として削除する。（引用者注；削除した語数は示されていない。）
- ・ 熟知度を算出し、参考とする。算出の仕方は以下のとおり。2段階の評定法をとったため、「知っている」に2点を「知らない」に1点を与え、言葉ごとに調査対象児童全員の合計得点を出して、その合計得点を調査対象児童数で除するのである。

以上の結果、本文献は、配当段階別に示すと、次のようになる。なお、どういう検討を加えることによって、

低学年、中学年、高学年の3段階に分類したのかについての具体的な説明はない。

合計	A	B	C
3,790	1,443	1,445	902

次に、「学習基本語彙」の第1ページ目の上段3分の1をそのまま引用しておきたい。

語位	基本語	熟知度	配当段階	語位	基本語	熟知度	配当段階
	あ			32	あじ(味)	1.916	A
				33	あしもと(足もと)	1.928	A
1	ああ	1.732	A	34	あじわう(味わう)	1.800	B
2	あい(愛)	1.868	B	35	あす(明日)	1.908	B
3	あいかわらず	1.828	B	36	あずかる(預かる)	1.824	A
4	あいさつ(挨拶)	1.948	A	37	あずける(預ける)	1.932	A
5	あいじょう(愛情)あ	1.716	C	38	あせる(焦る)	1.844	C
6	いず(合図)	1.920	A	39	あそこ	1.940	A
7	あいする(愛する)	1.884	B	40	あそび(遊び)	1.968	A
8	あいだ(間)	1.932	A	41	あたえる(与える)	1.768	B

本文献は、簡単にまとめると、文献(73)『学習基本語彙表』(東京書籍版)の4,161語を資料として、梁田小学校の児童の熟知度調査で洗い直して、3,790語を得た、ということである。ところが、上引のように、『ことばのずかん』に登録されている語句のすべてを、「幼児を対象とした言葉である」という理由で除去している。全体として言えば370語が除去されているが、その大部分が、『ことばのずかん』に取り上げられた言葉になっているようである。例えば、上掲の部分では、「あした、あせ、あそぶ」の3語が削られている。そして、「第2章 学年別語彙指導の実際」,「第3章 語彙指導の展開案」で取り上げられている中心語句あるいはキーワードは、その多くがまさに除去された言葉になっていて、この学習基本語彙3,790語に含まれていないという結果に陥っている。例えば、中学年の予備学習課題の「大きい・小さい・かわいい・こわい・白い／犬が、ほえています。」の「犬」を修飾する5語で言えば、「こわい」「白い」の2語だけが学習基本語彙に登録されている。しかし、それらを除外しなければ、東京書籍版とほとんど変わらないことになりそうである。

同じ編著者による『定着をめざした学習基本語彙の指導 小学校』(福沢周亮・岡本まさ子編著 教育出版 昭和58(1983)年5月)の第6章「段階別学習基本語彙表 — 梁田小学校版」は、本書と同じ学習基本語彙を、A段階(低学年)1,441語、B段階(中学年)1,446語、C段階(高学年)903語に分けて提出している。その一覧表は、「基礎番号・段階別番号・基本語・熟知度・学年別漢字配当表との関連」の順になっている。その「学年別漢字配当表との関連」は、1～6年、及び「外」の7項に分けられている。やはりすべてに熟知度を記載しているが、その熟知度は、小学校全体で配列したときよりも、低中高で分類したほうが高くなっている。

本文献は、信頼性は別にして、小学生の熟知度を調査した基本語彙調査資料としての価値をもっている。

文献(80) 小学校国語教科書の学習語彙表とその指導 (初版)
語彙指導の方法 語彙表編 (改訂版以降)

甲斐陸朗

光村図書 昭和57 (1982) 年 1 月 10 日

A 5 判 278ページ (初版)

〔目次〕

前書き	5 ページ
語彙表	
○国語科専門用語一覧表	15ページ
国語科専門用語学年別一覧表	
○本表 (一般自立語)	25ページ
低学年語彙一覧表	
○別表 (5～10は省略)	185ページ
1 あいさつ言葉	2 専門用語
3 外来語	4 擬音語・擬態語
○意味別分類表	225ページ
語彙指導の方法と実際	253ページ

まず、「前書き」は、次の構成になっている。

- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1 なぜ、国語教科書の語彙分析を行ったか | 2 学習基本語彙とはどういうものか |
| 3 学習基本語彙選定の歴史 | 4 国語教科書の分析 |
| 5 語彙カードの作成 | 6 語彙表の作成と各一覧表の内容 |
| 7 各語彙用例数 | 8 本書成立の経緯 |

まず、「1 なぜ、国語教科書の語彙分析を行ったか」では、(1)教科書・指導書の編集に役立てる、(2)学習国語辞典の編集に役立てる、(3)教科書の語彙の全容を知る、(4)学習基本語彙の選定の基礎資料とする、(5)実際の語彙指導に役立てる、の5項目を掲げて、それぞれについて説明をしている。

次に、「2 学習基本語彙とはどういうものか」では、小学生を中心に、日本語の語彙を、(ア)基礎語彙、(イ)学習基本語彙、(ウ)学習語彙、(エ)一般語彙の4種に分けて、それぞれを説明している。その(イ)学習基本語彙は「(ア)を含む約5,000語で、小学生が作文など様々な表現活動に十分に駆使できる語彙」と規定している。そして、学習基本語彙を確かに選定するには、①教科書の語彙分析、②読み物などの語彙分析、③理解語彙の調査、④使用語彙の調査、⑤学識者による選定、のいずれも欠くことができないと述べている。

そして、「6 語彙表の作成と各一覧表の内容」では、国語科専門用語、国語科専門用語学年別一覧表、一般自立語、低学年語彙(1, 2年)、あいさつ言葉、専門用語(国語を除く)、外来語、擬音語・擬態語、欄外及び慣用句、動植物名及びそれを含む語、位相語、数詞、固有名詞、教材名、意味別分類表の15の語彙表を作成したことを述べている。その中の「意味別分類語彙表」は、文献(49)『分類語彙表』に従って一般自立語を分類した一覧表である。例を掲げておきたい。

意 味 分 類		学 習 語 彙
1.180	形・型・姿・構え	形(かたち) 格好 輪かく 大型 大判 字形 たれ 詩型 姿 後ろ姿 姿勢 構え 門構え 白地
2.18	形	形作る 丸める とがる 引っこめる くぼむ 曲がる ひねる
3.1800	形	具体的

次に、本表の最初のページの初めの部分を引用しておきたい。

見出し語	表記	品	初出	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	分類番号	版本	文部	国研	光村	備考
ああ		副	6F 7						1	1	3.100	☆☆☆	☆	☆☆☆		
あい	愛		5L 121					1	1	2	1.3020	☆☆☆		☆☆☆		
——する	愛する	動	6F 107						1	1	2.302	☆☆☆		☆☆		
あいことば	合い言葉		5L 74					2	2		1.3121	☆☆		☆☆		
あいさつ			3F 99			3	3		2	8		1.3121	☆☆☆	☆☆	☆☆☆	
——する		動	2F 60	1						1						
あいじょう	愛情		4F 56				3			3	1.3020	☆☆☆			☆☆	
あいず	合図		1F 5	1		3	1	1	2	8	1.3121	☆☆☆	☆☆	☆☆	☆☆	
あいだ	間		1F 58	1	11	8	19	39	10	88	1.176	☆☆☆	☆☆	☆☆☆		
あいつ		代	2F 104		1			3		4	1.200	☆☆☆	☆☆	☆☆		
あいて	相手		2F 79		2	5	4	6	6	23	1.220	☆☆☆	☆☆	☆☆	☆☆	昭和57
あいにく		副	5F 99					1		1	3.165	☆☆☆			☆☆	
あう	合う	動	2F 24		8	2	4		2	16	2.112 2.1550	☆☆☆	☆☆	☆☆	☆☆	

本文献は、教科書の改訂ごとに版を改めている。昭和58年版からは、名称を『語彙指導の方法』に改め、また、「語彙表編」と「指導事例編」に分けている。その「語彙表編」が本文献を踏襲する内容である。

ここで、昭和57(1982)年版『小学校国語教科書の学習語彙表とその指導』から平成8(1996)年版『語彙指導の方法 語彙表編』までの6冊(文献A～F)に挙げられている、教科書の用語数を提示しておきたい。なお、用語数は異なり語数だけを提示する。

文献	教科書	全用語数	刊行年月日	判型 ページ	編集上の主な特徴
A	55年版	10,491	昭和57(1982)年1月15日	A5・278	パンチカードで作成。
B	58年版	10,331	昭和58(1983)年2月25日	A5・303	「語彙表編」を独立。下接語一覧表。
C	61年版	9,275	昭和61(1986)年2月25日	A5・336	学習基本語彙表。コンピュータ使用。
D	元年版	9,571	平成元(1989)年2月25日	A5・336	全用語数を計上する。
E	4年版	7,995	平成4(1992)年2月25日	A5・314	この8年版から、松川利広氏が編者と
F	8年版	9,458	平成8(1996)年2月25日	A5・327	して名を連ねている。

これら6冊の文献から、次に提示する2種の調査・考察を導き出すことができそうである。

- ①全6種に共通する語を調査する。(これは基礎語彙という性格をもつことになりそうである。)
- ②これら6種の全学年に共通する語を整理する。

本文献は、教科書の教師用指導書の別冊として刊行されていて出版情報に載らないので、学界では上記Aだけが引用されていて、B以降がほとんど知られていないようである。

文献(81) 日本語教育基本語彙七種比較対照表 (日本語教育指導参考書 9)

国立国語研究所

大蔵省印刷局 昭和57 (1982) 年 3 月20日

A 5 判 刊行のことは1ページ 目次1ページ 本表278ページ

〔構成〕

刊行のことは

目次

はしがき

1 ページ

0. はじめに

1. 比較資料

2. 各語彙表の特徴

3. 比較対照表

4. おわりに

日本語教育基本語彙七種比較対照表

13ページ

まず、「0. はじめに」の第1段落の本文を引用しておきたい。

この資料は、国立国語研究所日本語教育センター第一研究室において進められてきた、特別研究「日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究」並びに「比較対照研究」の一環として作成されたものであり、日本語教育のための学習基本語彙を検討・選定するに当たっての基本的な参考資料として、主に外国人に対する日本語教育を直接の目的として選定あるいは編集された、既存の語彙表七種について、それらに収録された語彙を集め、それぞれの語彙項目について各語彙表間の異同を比較対照させたものである。

次に、本語彙表を作成するに当たって、比較対照された原資料に用いた資料7種を「3. 4. 語彙表コード」の揭示順に掲げてみよう。なお、文献 (68) には仮に「(7)」を補った。

1 文献 (26) 『日本語基本語彙』

2 文献 (47) 「日本語教育における基礎学習語」

3 文献 (56) 『Practical Japanese-English Dictionary (実用和英辞典)』

4 文献 (65) 『A Classified List of Basic Japanese Vocabulary』

5 文献 (59) 『外国人のための基本語用例辞典』

6 文献 (57) 「留学生教育のための基本語彙表」

(7) 文献 (68) 『日本語教育基本語彙第一次集計資料 (1) — 上位二千語』

以上の外に、参考となる資料として、次の2種の語彙について併せて収録している。

a 国語研 文献 (74) 『日本語教育語彙資料 (1) (2) — 低学年初級500語』

b 志部 文献 (76) 『日本人の知識階層における話しことばの実態 — 語彙表』

なお、本文献の前に『日本語教育基本語彙六種比較対照表』(昭和56 (1981) 年 B 5 判 57ページ) が日本語教育センター第一研究室の特別研究「日本語教育のための基本的な語彙に関する比較・対照研究」資料2として作成された。これは上記の文献中の「3」の文献 (56) 『Practical Japanese-English Dictionary (実用和英辞典)』を含まない6種の比較対照表である。

次に、「3. 4. 語彙表コード」の表を引用する。

code	語 彙 表	収録項目数	比較対象語数	一致語数	一致度	注 1 ; 外枠の一部は引用者が付けた。
1	岡本 1944	2,012	2,012	1,342	0.455	注 2 ; 語彙表の呼称は原文に従った。但し、刊行年月の表示形式は改めた。
2	加藤 1963, 4	1,393	1,379	1,098	0.444	
3	玉村 1978	3,209	3,205	1,652	0.433	
4	Neus. 1977	1,796	1,762	1,167	0.393	
5	文化庁 1975	3,691	3,638	1,566	0.343	
6	樺島・吉田 1971	1,803	1,606	583	0.108	
a	国 語 研 1978	約2,000	1,968			注 3 ; 「比較対象語数」は「比較対照語数」の誤植かどうか。 注 4 ; 「国語研1978」は見出し語をゴチック体で表記している。
b	国 語 研 1979	534	527			
	志 部 1980	460	454			

なお、「一致語数」及び「一致度」とは、上掲の文献(68)『日本語教育基本語彙第一次集計資料(1) — 上位二千語』(国語研1978)を基準として比較した場合のものである。

次に、「4. おわりに」の本文及び表を引用する。その本文と表から、本文献が、「日本語教育のための基本語彙調査」の一環として調査研究されていることが伝わってくる。

最後に各語彙表間での語彙の共通度がどの程度のものであるか、参考のために掲げておく。

	共通語彙数	累積	(引用者注 ; 左の表の外枠に手を加えた。)
七種共通語彙	278(4.6%)	278(4.6%)	
六 "	551(9.1%)	829(13.7%)	
五 "	428(7.0%)	1,257(20.7%)	
四 "	474(7.8%)	1,731(28.5%)	
三 "	538(8.8%)	2,269(37.3%)	
二 "	866(14.3%)	3,135(51.6%)	
一 種 の み	2,938(48.4%)	6,073(100%)	
総 計	6,073(100%)		

この表によれば、同じ日本語教育を目的とする基本語彙として選定されたものといえども、各語彙表で採用された語彙の共通性が意外に少ないものであることに気がつく。このことから、いずれの日本語教育にも向くような、またいずれの日本語教育にもその基礎となるような基本語彙を選定することは、非常に困難を伴うことが予想される。

本文献は、文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』が刊行されるまでの2年間ほどは、7種もの語彙表を比較対照させた一覧表として、学界に歓迎された。

文献(82) 就学前幼児の語彙 — 4児による日常生活語の実態 —
(国立国語研究所報告 71『研究報告集 3』)

大久保愛・川又瑠璃子

秀英出版 昭和57(1982)年3月

A 5判 90ページ(237～326ページ)

[構成]

1 はじめに	237ページ
2 調査法	237ページ
3 整理法	238ページ
4 語彙表の見方	240ページ
5 語彙表の分析	242ページ
6 おわりに	247ページ
4児の五十音順語彙表	248ページ

まず、「1 はじめに」の本文を引用して、本調査の目的及び対象を明らかにしておきたい。

就学前の幼児は、どのような語を用いて、日常生活を送っているのだろうか。その実態を知ることは非常に興味深いことである。しかし、使用している全語彙をあげることは、残念ながら不可能である。できるだけ至近な語彙群があげられることが、われわれの願望である。また、他の調査者もこの方法を用いると調査結果が比較できるようなものでありたいと思う。調査経過の詳細について以下に述べるが、この調査は、幼児の一日のことばの調査及び、友だちとの遊びの場面での調査から成っている。また、この報告は、調査の結果から得られた五十音順語彙表及びその分析の一部である。

本文献は、次の2種類の調査をまとめたものである。

(1)「幼児・低学年児童の語彙調査」の一部

対象児 3名

A児(男) — 6歳5カ月 U児(女) — 6歳3カ月 R児(女) — 6歳4カ月

採集法 — 親が録音機で日常生活場面合計12時間分を録音

(2)「一女児の一日の語彙調査」

対象児 1名

N児(女) — 6歳3カ月

採集法 — 親が録音機で一日の日常生活場面14時間分を録音

この録音から、KWIC(key word in context — 文脈つき用語索引)を作成している。その成果としての「4 語彙表の見方」の記述を整理しておきたい。

(1) この語彙表は自立語から成っている。ただし、次の用語は除いている。

- ① 固有名詞
- ② 擬音・擬態語の中の音まね語
- ③ 「ている」の融合形の「てる」, 「ておく」の融合形の「とく」など
- ④ 「きょうはのくワ」はくハと書く?の「は」など

(2) 表の記載順は、「見出し語」「品詞名」「幼児名の略称A；U；R；N」「備考」になっている。

「幼児名の略称」の欄は見出し語の使用回数を記載してある。見出し語は片仮名で表記し、外来語には下線を引いてある。

(3) 見出し語は、『新明解国語辞典』（三省堂）に従うようにしている。（例：「風」と「風邪」、「経つ」と「立つ」、「優しい」と「易しい」は、それぞれ辞典に従って1語とした。）

次に、五十音順語彙表の一部を引用してみたい。

見出し語	品 詞	A	U	R	N	備 考
ア＊	感	321	200	53	117	*「アッ、ア？」を含む
アア＊	感	7	28	12	63	*「アアッ、アアア」を含む
アア（落胆の意）	感	19	13	4	34	
アアイウ＊	連体	1	1	2	1	*一語とした
アイコデショ	感				1	
アイサツ＊	名		1			*「ゴアイサツ」
アイスクリーム	名		5＊	2＊	1	*「アイス」を含む U ₂ R ₂

この語彙表について、(1) 品詞別・個人別使用語数、(2) 使用頻度の高い語、(3) 共通に使用している語、の各分析を行っている。以下、それぞれについて簡単に紹介しておきたい。

(1) 品詞別・個人別使用語数（異なり、延べ）

縦に品詞名、横に異なりと延べ、そして、それぞれ4児の欄を立てるといった詳細な語彙表が提示されている。その表から、4児の異なり語数、延べ語数だけを引用しておきたい。

	4児計	A児（男）	U児（女）	R児（女）	N児（女）
異なり語数	3642	1475	1904	771	1582
延べ語数	38490	11777	12280	3850	10583

(2) 使用頻度の高い語

4児の使用頻度の高い語各30語を記した第2表と、その表の30語の中で4人ともに共通する17語を記した第3表が掲載されている。それらを見ると、「これ・うん・はく（わたし）・する・あ」などのように、その1語で伝達ができる語が少なくない。

(3) 共通に使用している語

4人全体の使用語3,642語の中の4人全員の共通語は318語で、異なり全体の8.7%である。これは、延べでは全体の65%をまかなっている。掲載されている「[[図2] 4人の共通使用語一覧]」は、横に名詞以下の各品詞の欄、そして、文献(49)『分類語彙表』を参考にして意味で分類した順に全318語を配列した表になっている。

本文献は、文献(53)『幼児言語の発達』の継承・発展として、就学直前期の児童の使用語彙を調査した貴重な資料といえることができる。

文献(83) 高校教科書の語彙調査Ⅰ (国立国語研究報告 76) (Ⅱとの関係で仮にⅠを加えた)
 高校教科書の語彙調査Ⅱ (国立国語研究報告 81)

国立国語研究所

秀英出版 I 昭和58 (1983) 年 3 月30日 B 5 判 574ページ

II 昭和59 (1984) 年 3 月30日 B 5 判 479ページ

〔目次〕(第Ⅰ巻の目次だけを掲載する)

I 調査の概要	1～39ページ
1. 調査の目的	2. 調査の規模
3. 調査の手順	
4. 調査単位について	5. 同語異語判別
6. 機械処理システム	
II 語彙量	40～44ページ
III 五十音順M単位語彙表	45～394ページ
1. 本表(自立語)	2. 付表(付属語・数字・記号)
IV 度数順M単位語彙表(全教科)	395～480ページ
V 度数順M単位語彙表(各教科別)	481～574ページ

まず、「刊行のことは」(3段落構成)の最初の段落を引用しておきたい。

昭和49年に着手した高校教科書の社会科・理科教科書を対象とした語彙調査が、このたび、ようやく作業を終了したので、ここに語彙表を公表します。昭和41年の新聞三紙を対象とした語彙調査は、電子計算機を使った最初の大量語彙調査でした。本調査は、それに続くものとして、一層計算機処理を多く採り入れ、語彙表までも、高速漢字プリンターで打ち出したものをそのまま版にしています。今後、各種の分析・記述のための語彙表・集計表を、計算機で作成して、詳細な分析・記述を進めていく予定であります。

以下、本文献の概要を理解する上で必要な事項を紹介する。

I.1. 調査の目的

高校教科書の語彙調査の目的について、次のように述べている。

国民が一般教養として、各分野の専門知識を身につける時に必要と思われる語彙の実態を明らかにすることを目的として、この高等学校の語彙調査は企画された。高等学校進学率の増加に伴い、現今では高等学校教育は、国民大多数の基本的な教養の場となっている。また、大学教育は、この高校教育の基盤に立って進められるものであり、とくに高校の理科と社会は、大学における専門教育の基礎となっていると考えることが出来る。われわれが高校の理科・社会科の全教科を対象とした語彙調査を企画したのは、以上のような理由からである。

I.2.1 調査対象 — 昭和49年度に使用されていた高等学校教科書のうちの、社会科・理科の全教科の中から、次の9教科を選んでいる。

理科 — 物理Ⅰ・化学Ⅰ・生物Ⅰ・地学Ⅰ

社会科 — 倫理社会・政治経済・日本史・世界史・地理B

(ここでは、教科名だけを紹介し、どの出版社の教科書を対象にしたかは省略する。次に、各教科書の調査対象としては、教科書の本文部分に限定している。)

I.4.1 調査単位の種類と長さ — この調査では、高校の社会科・理科の教科書という文章の性格を考慮に入れて、次の長短2種類の単位を用いている。

長い単位 — 文の構成にあずかる要素（いわゆる文節）にもとづく単位で、wordの頭文字をとってW単位と名付けている。

短い単位 — 語の構成にあずかる要素（いわゆる最小単位）にもとづく単位で、morphemeの頭文字をとってM単位と名付けている。

次に、「II 語彙量」の「表1. 語種別の語彙量」と「表2. 共出現の語数」の2種類の表から情報の骨の部分を用意しておきたい。次の表1は、各教科の語数を省略し、全体だけを掲げた表である。

表1. 語種別の語彙量

	和 語	漢 語	外来語	混種語	人名	地名	自立語
延べ	128,612	167,790	5,745	2,295	3,883	12,733	321,058
異なり	2,279	9,121	941	107	1,586	1,485	15,519

表2. 共出現の語数（固有名詞を除いた自立語の異なりだけを掲げる）

共通度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	社会科	理 科	理社共通
異なり	6,658	2,238	1,149	763	523	319	248	206	344	7,445	2,350	2,653

次に本文献は、IIIとして「五十音順M単位語彙表」を掲げている。その語彙表は「それぞれの語に、九教科全体での使用度数・比率・全体順位、のほか、理科系、社会科系各教科の使用度数、および理科系・社会科系ごとの合計使用数、比率」を示したものである。

次に、「IV 度数順M単位語彙表（全教科）」についての説明を引用しておきたい。

この表は、自立語について、その使用度数の高いもの順に並べたものである。付属語・数字・記号については、度数順語彙表は出さない。それらは、異なり語数が少ないので、五十音順語彙表の、付表を見れば容易にわかるからである。

この度数順語彙表は、最も度数の高い「する」にはじまり、度数1のもので終わる。使用度数の高い語（度数57以上）は、各教科別の度数から、理科系・社会科系別のそれぞれの度数・比率、全体の度数、比率、順位までを示してある。（以下、省略）

次に、『高校教科書の語彙調査II』は、同じ資料を、W単位語で調査したものである。M単位語の語彙表との違いは、延べでは、W単位語のほうが、594,266語に対して451,550語というように語数の上で少なくなるが、異なりでは、15,662語に対して40,998語というようにはるかに増えることになる。これは、単位語の求め方に応じた語数の増減である。

本文献は、高校教科書の基本語彙を検討する上で貴重な資料を提供している。国立国語研究所では、この後、文獻(97)『中学校教科書の語彙調査』『中学校教科書の語彙調査II』を刊行し、更に、これらを総合的に分析・考察した『高校・中学校教科書の語彙調査分析編』をまとめるに至っている。

文献(84) 光村図書版 学習基本語彙表

甲斐睦朗

光村図書 昭和58(1983)年3月

A4判 40ページ

光村図書は、編者の考えを受けて文献(80)『小学校国語教科書の学習語彙表とその指導』(昭和57(1982)年1月)の刊行を終えた段階で、学習基本語彙の選定・作成に着手した。その学習基本語彙は、直接には、小学校の6年生が自分の思いや考えを言い表すときに自在に使用できる語彙という意味である。それらの語は、低学年や中学年段階では、まず理解語彙として出会い、その意味・用法を学習するが、学年が上がるにつれて、自分の気持ちや考えを正確に表現するために駆使できるようになるべき語という意味である。それは、国語教科書の編集に役立てることを第一の目的として企画された。その手順等については、編者が『国語教育の基本語彙 — 小学校の国語科教育の視点から』(『日本語学』特集「基本語彙」昭和59(1984)年2月号)に述べているので、それに基づいて紹介してみたい。

さて、その語彙選定は、次のような手順で行われた。

まず、文献(40)『教育基本語彙』のA1～B2合計10,000語、文献(80)『小学校国語教科書の学習語彙表とその指導』の最初に掲げた「国語科専門用語一覧表」の303語、本表の末尾の「低学年語彙一覧表」の約1,500語、別表の一部の「あいさつ語」15語、専門用語約270語、の合計約2,100語、『光村学習国語辞典』(昭和57(1982)年初版)の赤刷りの見出し約3,200語を整理して、第一次検討資料を作成する。その五十音順に配列された11,000語強の見出しから、40%程度を拾い出す作業を、それぞれ5人の小学校の教諭に1人2,000語ずつ依頼する。依頼した教諭は総勢30人である。

ここで、その第1次資料から「あく」で始まる11語を引用してみよう。

見出し語・漢字表記		A1・ 2,500	A2・ 2,500	B1・ 2,500	B2・ 2,500	語彙表 2,100	赤字語 3,200	基本語 の選定
あく	悪			○			○	●
あく	空・明						○	●
あく	開	○				①	○	●
あくじ	悪事				○		*	
あくしゅ	握手			○		②	*	●
アクセント				○			*	●
あくにん	悪人				○		*	
あくび	欠伸	○					*	
あくま	悪魔	○					*	
あくまで				○			○	●
あぐら	胡座	○					*	

(注1) ○は、そこに掲げられていることを表す。

(注2) 「語彙表」の①は第1学年、②は第2学年であることを表す。

(注3)『光村学習国語辞典』の「見出し」の○は赤刷り、＊は黒刷りの見出しであることを表す。

(注4)右端の欄の黒丸は、学習基本語彙選出の語を表す。これら以外に「アクセク」が選ばれた。

さて、調査の結果を、11,000語強の一覧表に記入して、5人の中の4人までが○を付けた語はそのまま採択し、3人が○を付けた見出し語は、編者が一語一語検討を加えて、ほぼ採択する方向で検討した。

第2次資料は、文献(49)『分類語彙表』及び、それに基づいて作成した文献(80)『小学校国語教科書の学習語彙表とその指導』の「意味別分類表」で確認する。その作業は、次の検討を加えることにあった。

- 1) 国語教科書に使用されている一般自立語で、基本語として大切な語は収まっているかを検討する。
- 2) 例えば和語で「遊ぶ」「遊び」、のように、動詞形と名詞形がある場合は、動詞形で提出する。
- 3) 漢語サ変動詞は名詞形で提出する。
- 4) 形容動詞は語幹の形で提出する。([あざやかな]→[あざやか])
- 5) 自動詞と他動詞という見方でどちらかを削除する場合は、慎重に検討する。
- 6) 類義語・反義語などで落ちがないかを確かめる。

次に、第3次資料は、以上の成果を五十音順に配列し、①多義語か同音異義語か、②基本語彙として適切か、の面で検討を加え、再度、③大切な語を落としていないかを検討した。

このような手続きで、自立語3,955語を五十音順に配列した語彙表を作成した。なお、この学習基本語彙は、2年後の昭和60(1985)年には4,023語に改められた。これは、まだ落としている基本語を補充するだけでなく、自動詞と他動詞の両方を立てるといった修正が中心になっている。

語彙表の最初の5語分を掲げておきたい。なお、外枠は引用の際に付加したものである。また、ミダシゴの

No.	ミダシゴ	ヒンシ	(備考)	語順は当時の電子計算機の都合によっている。 (引用者注;「ヒンシ」欄等の略号は次のとおり。 フ＝副詞 メ＝名詞 オ＝擬声語・擬態語)
1	アッサリ	フ	第2版ではヒンシ「フオ」に訂正	
2	アットウ 圧倒	メ		
3	アッパク 圧迫	メ		
4	アア	フ		
5	アイ 愛	メ1	(メ2－相 メ3－藍 メ4－間)	

この語彙表は、昭和61年版の国語教科書の脚注欄に新出語句として掲げられた。また、文献(80)の改定版『語彙指導の方法 語彙表編』(昭和58年版)では、一般自立語の一覧表に＊印を付けて、教科書に出現しない学習基本語彙は「学習基本語彙一覧」として掲げてある。教科書に取り上げられなかった学習基本語彙は昭和61年版では980語である。原則として既成の文章をそのまま教材化する方向の現行の教科書編集では、これらの学習基本語彙を本文中にすべて取り入れることは至難の技というべきである。

本文献は、光村図書の内部資料として作成したもので、学習基本語彙表としては刊行されていない。作成過程の資料の多くが残っているので、文献(73)『学習基本語彙表』などと比較することができる。

文献(85) 小学校低学年用国語教科書の用語
(『国立国語研究所報告74 研究報告集4』)

島村直己

秀英出版 昭和58(1983)年3月

A5判 228ページ (内77～207ページ)

〔構成〕

1. はじめに	77ページ
2. 調査の内容	77～78ページ
3. 調査の結果	78～89ページ
4. おわりに	89～90ページ
◇ 五十音順語彙表	91～207ページ

まず、本調査の目的及び調査の内容について、番号・見出し語を立てて順に整理してみたい。

- (0) 調査の目的 — 本文献は、小学校低学年(1・2年生)用国語教科書の本文を対象にした語彙調査の成果を、全語彙の一覧表にまとめたものである。
- (1) 調査の対象 — 用語調査を行うに当たり、次の各項目を除く。①表紙、②注、さし絵に含まれた部分、③「てびき」「ことばのけいこ」「さくぶんのれんしゅう」などの部分、④「かたかなのひょう」「あたらしくでたかんじ」などの部分。
- (2) 調査単位 — 教科書の分かち書きに近い α 単位を採用した。
- (3) 集計単位の定め方 — α 単位から助詞・助動詞を除いたものを集計の対象(単位語)とした。

次に、「3. 調査の結果」から、いくつかの項目を紹介する。

(1) 異なり語数と延べ語数

	異なり語数	延べ語数
光村図書	2,078	8,853
東京書籍	2,017	7,995
教育出版	2,105	9,015
全体	3,826	25,863

- ① 左の表に明らかなように、三種の教科書の異なり語数にはほとんど違いがない。
- ② 三種ともに2,000語強であるのに対して、全体の異なり語数がそのおよそ2倍の3,800語であることから、各種の教科書の用語にはかなりの違いがある。
- ③ 延べ語数は三社の間でおよそ1,000語の開きがある。

(2) 語種別異なり語数

3種の教科書の異なり語の語種を見ると、和語2,655(74.0%)、漢語575(16.0%)、外来語120(3.3%)、混種語239(6.7%)という数値が得られている。

(3) 見出し語の共通性

全見出し語について、三社のうち何社の教科書に用いられているのか、について調べた結果、

一社だけ2,286(59.7%) 二社共通706(18.5%) 三社共通834(21.8%)

という数値を得ている。

また、見出し語の教科書間の共通性を調べた結果、例えば光村図書の場合、

一冊のみ68.9% 二冊共通16.5% 三冊共通8.8% 四冊共通5.8%
という数値になる。この数値は他の2社の教科書も類似している。そこから、「どれか一冊の教科書からしか
学習できない語が7割近くある」ことを指摘している。

次に、五十音順語彙表について紹介する。これは、次に提示する形式で配列されている。

見 出 し		便 用 度 数											
		光 村 図 書				東 京 書 籍				教 育 出 版			
		1上	1下	2上	2下	1上	1下	2上	2下	1上	1下	2上	2下
ア①	感 副	3		4	2	2	1	4	4	3			2
アア													1
アア②			2	5	3		3	3	4	1		5	3
アアア							2						
アアン(ト)	感 副						1						
アイカワラズ				1									
アイサツ	動								2	1			
アイサツスル				1						1			
アイズ(合図)			1										
アイスクリーム					1								
アイダ(間)	<代>			5	4		3	2	3		1	3	6
アイダジュウ(間中)					1								
アイツ					1								
アイテ			1		1			3	1				
アイドリ(相取り)	動				1				1				1
アウ					8								1

ここで、五十音順語彙表から、全12冊のすべてに使用されている全49語を順に取り出してみよう。見出しの
表記は、原文通りである。

アカイ	オオキナ	スル(為る)	トブ	マタ
アシ(足)	オカアサン①	ソシテ	ナカ(中)	ミエル
アル(有・在る)	オモウ	ソノ	ナニ・ナン	ミル
イウ(言う)	カク(書・描く)	タクサン	ナル(成る)	ミンナ
イク(行く)	クル(来る)	ダレ(誰)	ハナシ(話)	ヤマ
イチ<数>	クレル(呉れる)	ツクル	ハナス(話す)	ヤル(遣る)
イル(居る)	コエ(声)	テ(手)	ハヤイ(早・速い)	ヨイ②(良・善い)
イロイロ	コト	デキル	ヒト(人)	ヨム
ウエ(上)	サン<数>	トキ(時)	ハウ(方)	ワタシ
オオキイ	シマウ(仕舞う)	トコロ	ボク	

①「オカアチャン」を含む ②「イイ・エエ」を含む

本文献は、低学年の教科書の用語の確かな調査であるので、基本語彙検討の資料として引用されている。

文献(86) 基本度 f 上位七百語 (『朝倉日本語新講座 2 語彙』)

水谷 静夫

朝倉書店 昭和58(1983)年 4 月 5 日

A 5 判 227ページ

〔目次〕(ここでは、「7.基本語彙の問題」の細目だけを掲げる)

7.1 基本語彙とその類似概念	165ページ
7.1.1 問題の在り所	165ページ
7.1.2 概念規定の試み	168ページ
7.2 基本度函数	172ページ
7.3 用語網	178ページ

まず、7.1.1で「語彙が豊かである即ち語彙量が大いという事は、表現の面から見れば持ち駒が多くて結構な事である。」と述べた上で、実務や技術の部門、教育、特に国語教育や外国人への日本語教育では用語整理、即ち「語彙は多様な語から成るといっても、割合に少数の見出し語で様々の表現域の大部分が覆われるし、部門を限れば使用語彙はそう大きくもない」という見方を提示し、続いて、次の5種の見方を提示している。

- I) 用語習得の負担が軽ければ《基本語彙》的なものの要求は起るまい。
- II) 表現対象となり得るものは無限に多く在る。
- III) 語彙は時代と共に動く。個人の表現欲求も様々である。
- IV) 表現部門を限定すれば、そこでの語彙は割合に小さいと考えてよさそうである。
- V) 《基本語彙》的なものを、語彙の実態に関する純粋に言語研究上のものとして考えるか、言語生活をしる実践的な部分語彙として考えるかで、議論は別性格のものとなる。

次に、これらの条件を順に取り上げた上で、7.1.2の冒頭で、「基本語彙」の制定は困難であるが、V)の「語彙の実態に関する純粋に言語研究上のもの」としては考え得る、と指摘している。

次に、林四郎氏の文献(58)「語い調査と基本語彙」について検討を加えた上で、次のように述べている。

仮に林の五通りの呼び分けに従えば、初めの三つ基礎語彙・基本語彙・基準語彙が言語生活上の実践面に関わる概念であり、後の二つ基調語彙・基幹語彙が言語研究上の概念である。但しその「基幹語彙」を水谷は「基本語彙」の名で呼んでいいと考える。～(中略)～林の「基本語彙」と「基準語彙」とは一つにまとめて「標準語彙」と称する方が適切であろう。

次に、本報告で問題としている基本語彙は、本文献では「標準語彙」という用語で扱われているので、その「標準語彙」についての記述を引用しておきたい。

また、標準語彙は、言語教育用(学習標準語彙)と業務用とで選定法の実際かなり差が出るであろう。前者は、たとい開いた系であっても、その語彙だけで多くの表現が賄えることを企てるはずである。従って副詞や接続詞のようなものまで当然含まれる。(この点は基本語彙も同じである。) 後者にはその必要は乏しい。～(中略)～ 言語研究者の立場から理想を言えば、標準語彙はその分野の基本語彙を踏まえて選定するのがよい。

そして、「基本語彙」について、次のように規定する。

- 0) 基本語彙は、対象表現域の（可能態まで含めて）かなりの割合を賄い得るような部分語彙でなければならない。
- 1) その語を封じたら、他の語での代用が利かず従って文章が綴れないか、他の語での代用がしにくく強いて言い換えるとかえって不便であるかである。
- 2) それらの語の組み合わせで、他の複雑な概念や新たな命名が必要な概念などが作りやすい。また現に、そうして作られた複合語が沢山在る。
- 3) それら以外の語の説明が必要な時にも、結局はそれらの語の範囲で行える。
- 4) そういう語の多くは、昔から使われて来たり、将来もまた使い続けられるであろう。
- 5) その語は多方面の話題を通じて割合よく使われる。

次に、文献(44)『現代雑誌九十種の用語用字（第三分冊）分析』で得た「基本度上位の七百語」の引用の規定について、く体裁を少々簡略化した。区分けの「抽象的關係」等は『分類語彙表』の分類目に従った。また層立てには九十誌調査の5層が採ってある。と説明している。

以下、その表の最初の一部と最後の「その他」の一部（接続詞類）を引用しておきたい。

表14 基本度 f 上位七百語

初めの三百語					それに次ぐ四百語				
抽象的關係									
コト モノ クライ タメ ジツ [実]					事実 事件 違イ 実際 代表 カワリ				
ホカ 他 關係 反対 側					結果 条件 原因 効果 同 理由				
(ラ) レル ヨル [依・因・拠] 対スル					似ル 以ツ 含ム				
ツク [about] 違ウ 於ク									
トモ [共] テキ [的] 同ジ ママ [儘]					ナゼ イッショ 如シ ミタイ [接尾] 当然				
トオリ 本当					正シイ アイ [相] チョウド				
その他									
シカシ ソシテ シカモ ツマリ トコロが、で					アル (い) は タトエバ ナオ オヨビマタは				
					モットモ 但シ サテ				
必ズ モチロン ヤハリ モシ					トニカク ア (ア) 恐ラク ムシロ 一体				
					イヤ [否]				
オ [御] ゴ [御]									

この表の後に記されている「表14のもとにした基本度は、あくまでも f という操作的概念に基づく；この事を忘れないでもらいたい。」という断りは、本文献の理論的な立場をよく表している。

本文献は、林四郎氏の文献(58)「語い調査と基本語彙」とともに、基本語彙などの用語を付与して、理論的な考察を加えた文献として位置づけることができる。

文献(87) 語彙標準表 (『外国人に対する日本語教育の振興に関する報告集』)

文化庁文化部国語課

京和工業 昭和58(1983)年 8 月15日

B 5 判 293ページ

文化庁文化部国語課が刊行した報告書は、書名に「報告集」と命名されているように、「参考」の2編を合わせると、合計6編の報告が収録されている。以下では、その「報告4. 外国人留学生の日本語能力の標準と測定(試案)に関する調査研究について(外国人の日本語能力に関する調査研究協力者会議報告 — 昭和57年2月 —)」(67~278ページ)を取り上げる。その構成は、次のとおりである。

はしがき

I 調査研究の概要(細目は省略) 75ページ

1. 調査研究の目的及び経過 2. 標準の設定 3. 測定方法 4. 今後の課題

別添1. 外国人の日本語能力に関する調査研究協力者名簿

別添2. 外国人の日本語能力の標準と測定に関する作成部会について

II 各言語要素別の標準設定の内容(「3. 語彙」だけ、細目次を掲げた) 89ページ

1. 音声 2. 文字 3. 語彙 4. 文法 5. 言語活動

(1) 標準設定の基本的な考え方 (2) 標準設定の手順

(3) 標準表の取扱い 第1水準 第2水準 (4) 語彙標準表

III 日本語能力の適切な測定方法(1~5の項目分けは、IIに同じ。) 245ページ

まず、「はしがき」によると、本報告4は「外国人の日本語能力に関する調査研究協力者会議」(主査：林大)が、「大学(教養課程)で勉強しようとする外国人留学生に必要な日本語能力の標準と測定」についての試案をまとめたものである。

次に、「I 調査研究の概要」の「2. 標準の設定」の「(3) 語彙」の①及び②を引用しておきたい。

①理解 国立国語研究所の日本語教育のための基本語彙6,000語(第1次集計)から選定した約3,600語を第1水準とする。これより重要度の劣るその他の約1,500語を第2水準とする。なお、このほかに、高校の教科書などから選定した181の専門用語を提示したが、これらは水準以外のものである。

上記の語彙の中には、「非-」「不-」「反-」「-者」「-屋」などの語構成要素を含むから、これらを使うことにより、また複合語を作ることにより、上述の語彙数はもっと増大するはずである。

②使用 理解の項の第1水準の語を適切な文脈とともに使用することを第1水準とする。

次に、IIの「3. 語彙」の「(1) 標準設定の基本的な考え方」の①は、次のように記されている。

① 日本の大学に入学し、日本人学生とともに大学の課程を受けようとする外国人留学生が、大学生としての学習活動並びにそれに付随する日常生活において耳にし目にする語彙のうち、専門のいかに関係なく共通に必要とされる基本的な語の範囲を設定する。これは、言語行為における二つの部面、表現行為と理解行為のうち、表現能力はともかくとして、この範囲の語はかんたん⁽⁷⁷⁾な文脈の中で理解できるという

理解能力の標準を示すものである。(第2水準)

更に、大学生として、理解だけでなく表現行為においても適切な文脈とともに使用できることが望まれる重要語句を選定する。これは理解・表現いずれにおいても可能な語彙能力の標準を示すものである。

(第1水準)

次に、「(3) 標準表の取扱い」の前置きの本文を引用しておきたい。

以上述べたような観点から標準語彙集が選定されたが、ここに掲げた語をすべて同列に扱うわけではない。適切な文脈とともに使用できることが望ましい語(表現可能語彙)を第1水準として設定し、また、進んで表現に使用するまでには習得していないが、簡単な文脈の中でなら理解できることが望まれるやや重要度の低い語(理解のみ可能な語彙)を第2水準としてその下に置く。

次に、「(4) 語彙標準表」の「摘要」の1～2は、次のように記されている。

- 1 総語彙数 5,167語
 第一水準(水準欄A) 3,621語
 第二水準(水準欄B) 1,546語
 専門語(高校教科書までに現われるもの) 181語
- 2 語彙表は五十音順とし、各語彙の後に文献(49)『分類語彙表』の分類番号を付した。

次に、その語彙表の最初の20語を掲げてみよう。なお、参考のために、水準(AかB)を表示した横に文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』の2,000語(◎)、6,000語(○)を付けてみた。

水 準	語 彙	分 類	水 準	語 彙	分 類
A ◎	ああ<指示>	3100	A ○	アイデア	13061
A ◎	あい(愛)	13020	A ○	あいにく	3165
A ○	あいかわらず(相変わらず)	3165	A ○	あいま	11610
A ◎	あいさつ(挨拶)	13121	A ○	あいまい	3306
A ○	あいじょう(愛情)	13020	B ○	アイロン	1454
B ○	アイスクリーム	1434	A ◎	あう(会う)	2351
A ◎	あいする(愛する)	2302	A ◎	あう(合う)[一致]	2112
A ◎	あいず(合図)	13121	A ◎	あう(合う)[結合]	21550
A ◎	あいだ(間)	1176	A ◎	あう(逢う)	21556
A ◎	あいて(相手)	1220	B ○	あえて(敢えて)	3346

次に、専門語181語には「圧力 アルカリ アルコール 飲料水 引力」など理科系の用語が多くて、社会科の用語も「革命 貨幣 憲法」などが含まれている。

本文献は、文献(69)『日本語教育基本語彙 第一次集計資料 — 六千語 — 』に収めた語彙を日本語教育の立場から編み直し、第一水準、第二水準に分類するなどの整備を加えて使いやすくした語彙表であるということができる。

文献(88) 新教育基本語彙

阪本一郎

学芸図書 昭和59(1984)年1月15日

A 5 判 279ページ

〔目次〕(細目・参考文献を省略)

はしがき	1～2ページ
凡例	4～7ページ
教育基本語彙表	1～271ページ
あとがき	272～276ページ

まず、「はしがき」では阪本一郎氏が語彙調査に取り組み始めたときの経緯から説き起こして、『幼年基本語彙』(本報告書の文献(23))。「はしがき」に記載された書名による。)について説明し、次に22,500語の「段階別教育基本語彙表」ができあがったことを述べた上で、段落を改めて、次のように述べている。

これを五十音順に配列したのが『教育基本語彙』で、1958年に牧書店から刊行した。しかし幾度か版を重ねるうちに、読者からも御異見や御提案が寄せられ、改版をしないうちに牧社長が不埒の客となり、絶版となってしまった。

その後20年余り経っている。この間、1946年の「当用漢字表」(1850字)発表、1948年「当用漢字音訓表」、1981年10月には当用漢字表に代わるものとして「常用漢字表」(1945字)が発表された。また小・中学校用「学習指導要領」も今日まで、そのときどきの時流に根ざした改訂を重ねており、ことに1980年度実施の小学校学習指導要領の学年別漢字配当表では996字を計上している。これは1971年実施のものに比べて115字の増となっている。

これを機として本書の改訂に踏み切ることとした。さいわい学芸図書株式会社が出版を引き受けられたので、本書が世に出ることとなった。

このたびは、多少の新機軸も加えて、内容の充実に意を用い、表題も『新教育基本語彙』と改めた。本書の編集については、学芸図書株式会社編集部の方々の一方ならぬ御協力があつたことを申し添えたい。

次に、「凡例」の(3)として収録語の語数が示されている。外枠を設けて、引用しておきたい。

段階	小学校		中学校1～3年
	低学年1～3年	高学年4～6年	
数 量	A 1 2,570語	B 1 2,364語	C 1 2,444語
	A 2 1,730語	B 2 1,979語	C 2 2,344語
		B 3 1,600語	C 3 2,139語
			C 4 2,101語
計	小計 4,300語	5,943語	9,028語
	総 計		19,271語

A 1 と A 2 とは小学校低学年段階に理解させるべき単語で4,300語, B 1 から B 3 までは小学校高学年段階に理解させるべき単語で5,943語, C 1 から C 4 までは中学校段階で理解させるべき単語で9,028語, 総計19,271語を挙げてある。

次に、「教育基本語彙表」は、以下に例示するように五十音順に配列されている。

見出し語	品詞	段階	文献(40)の段階	
あ(っ) (驚いた時の声)	感	A 2	A 2	①左の表の枠は引用者が施したものである。
ああ (承知した時の声)	感	A 2	A 2	②表の右端の欄は、文献(40)の扱いを参考のために引用者が掲げた。
ああ(する) (あのように)	副	A 1	A 1	③その欄の「—」は、文献(40)に取り上げられていない語であることを表す。ここから「アーケード、アート、アームチェア、愛玩」の4語が追加されたことがわかる。
アーケとう ~灯④	名	C 4	C 4	
アーケード	名	C 3	—	
アース (earth)	名	C 2	C 2	
アーチ (arch)	名	C 1	C 1	
アート (art, 芸術, 美術)	名	C 3	—	
アームチェア (ひじかけつきのいす)	名	C 4	—	
アール [仏] (a, 面積の単位)	名	B 2	B 2	④「あ」~「あいきょう」の語で、文献(40)にあって、本文献にない語はない。
あい 相④ (いっしょに)	頭	A 2	C 2	
あい 藍	名	B 1	B 1	⑤見出し後の漢字表記の後の○付き数字は、各漢字の配当学年を示す。数字のない○は、それ以外の常用漢字を表す。
あい(する) 愛④	名動	B 1	B 1	
あいいく 愛育④③	名	C 2	C 2	
あいうち 相討ち④⑥	名	B 3	B 3	
あいかぎ 合い鍵②	名	B 3	B 3	
あいかわず 相変わ④④	副	A 2	A 2	⑥「段階」で両文献がくい違っているのは「あい (相)」で、C 2がA 2になっている。こういう事例は多くない。
あいがん 愛玩④	名	C 4	—	
あいがん 哀願④④	名	C 2	C 2	
あいぎ 合着②③	名	B 3	B 3	
あいきょう 愛嬌④	名	B 1	B 1	
あいきょう 愛郷④⑥	名	C 3	C 3	

本文献の「あとがき」は、阪本一郎氏の語彙調査に全生命を捧げた半生が回顧されている。ただ、その内容は「はしがき」と同じく文献(23)『日本語基本語彙 — 幼年之部』及び文献(40)『教育基本語彙』の2冊に関する記述が多い。その他として、「六才児の親近語彙のリスト」2,392語、「幼児の親近語彙集」2,342語を発表したことなどをつけ加えている。そして、本文献に関する記述は一切見られない。なおまた、「はしがき」の記述について学芸図書のかつての担当者に確認を求めたが、原稿は整えられたかたちで持ち込まれた、特に作業を手伝った記憶はないとのことである。

本文献は、文献(40)『教育基本語彙』の信頼の上でよく引用されている。しかし、その見出しの選定について、どういう調査を行い、どういう資料に基づくのかに関して記されていないのが、心残りである。

文献(89) 作文の語彙(『文教国文学』第14号)

井上一郎・児童言語ゼミナール

広島文教女子大学国文学会 昭和59(1984)年2月29日

A5判 101ページ

〔構成〕

1. 調査の目的と方法	1～5ページ
1.1 調査の目的と方法	
1.2 調査の対象	
2. 調査結果と考察	5～30ページ
2.1 品詞的観点から見た考察	
2.2 拡充的観点から見た考察	
3. 児童作文の使用語彙一覧表	31～101ページ

本文献は、井上一郎氏が、広島文教女子大学の児童言語ゼミナールの学生と共同で行った作文使用語彙の調査をまとめたものである。以下、本文を引用しながら紹介することにした。

1.1 調査の目的と方法(引用者注：次の本文に趣旨が記されている。)

本報告は、児童の語彙能力の構造とその発達過程を明らかにするため、作文に見られる使用語彙を調査・考察しようとするものである。従来、児童期における語彙の調査は、内省法による理解語彙を中心としたものであった。使用語彙については、「確実にとらえるとなると、スピーチや作文の分析が大きな意味をもつ」と言われながらも、「方法として位置づけるのは難しい」とされ、総合的・系統的な調査はあまり行われていない現状にある。そこで、本報告では、同一課題の作文を用いることによって、小学校六年間にわたってどのように使用語が変化し、発達していくのか、を調査・考察することにした。そのことによって、従来ほとんど明らかにされていない、児童期における語彙能力の構造と発達を捉える基礎的・実証的な資料を得たいと考える。

1.2 調査の対象(引用者注：次の(3)～(4)は、(1)～(2)にそろえて本文をまとめたものである。)

- (1) 横断的調査として、一小学校の児童全員に対して課題を与え、一枚時の時間内に書かせる。
- (2) 文章様式の相関性を考察するために、記事的文章として、課題「べんきょう」(1976年11月)、叙事的文章として、課題「日曜日のできごと」(1977年3月)を同一児童に書かせる。
- (3) これらの資料から、各学年記事文・叙事文それぞれ50作文、合計600作文を分析する。
- (4) 単位認定の基準として、原則として国立国語研究所のW単位を採用したが、子供の使用語彙を調べるという目的から、できるだけ長い単位を考えて分析するようにした。

次に、「2. 調査結果と考察」の「2.1.1 語彙量の学年別発達傾向」は、興味深い調査結果を提示している。それは、1作文あたりで見ると、記事文、叙事文のどちらの作文も、文数、語数の上で学年が進むに伴って数量の増加が認められるということである。例外は、記事文の6年生だけである。

次に引用する「語彙量の増加」の表は、表1-1、表1-2の二つの表から、「1作文あたり」の文数、異なり語数を、小数点以下を四捨五入して単純化して表示したものである。例えば表1-2は、異なり語数、延べ語数の両方が50作文あたりと1作文あたりの2点に分けて提示されている。また、文献(49)『分類語彙

表』の分類に従って、体、用、相、その他の4類に分けた語数も提示されている。

「1作文あたりの文数と異なり語数を整数で示した表」

		1年	2年	3年	4年	5年	6年
記事文	文の数	8	10	17	17	21	18
	異なり語数	9	10	18	20	22	19
	述べ語数	43	63	107	126	162	132
叙事文	文の数	12	14	20	28	26	30
	異なり語数	16	20	28	34	39	41
	述べ語数	63	82	140	177	188	209

この表から、記事文の各学年の文数と異なり語数がほぼ同様の数値になるといった興味深い事項を見ることができる。

次に、本文献は、「各学年における初出語の割合」「初出語の高頻度語」「学年間にわたる共出現語」「6学年間にわたる共出現語」などといった調査を行っている。ここでは、その一つ「表11 学年間にわたる共出現語」から、合計欄の異なり語数を引用してみたい。

	6学年間	5学年間	4学年間	3学年間	2学年間	1学年のみ	合計
記事文	171	108	132	192	389	1,495	2,487
叙事文	226	220	203	358	720	3,154	4,881
合 計	397	328	335	550	1109	4,649	
累 計	397	725	1060	1610	2719		7,368

さて、「3. 児童作文の使用語彙一覧表」は、次のように構成されている。

- (1) まず、記事文と叙事文に分けて提示する。
- (2) 各語は、文献(49)『分類語彙表』に従って、体、用、相、その他に大きく4分類した上で五十音順に配列している。
- (3) 記事文と叙事文に分けた各一覧表は、横に、見出し語、『分類語彙表』による分類番号、1～6学年の各延べ語数、そして、延べ語数の合計という枠を設けている。

この一覧表の「叙事文」の「その他の類」を見ると、「きっと、けれど、さすが、しかし、しかも」などの接続語が4年生以上で初めて使われているといったことを知ることができる。

本文献に続く「作文の語彙Ⅱ」(昭和60(1985)年2月 『文教国文学』第15号 1～12ページ)は、この一覧表を更に「共出現語」の観点から分析した内容を提示している。

本文献は、児童の書き言葉の使用語を調査した最初の試みとして位置づけることができる。この成果としての「6学年間にわたる共出現語」などは、基本語彙を検討する上で意味をもつものと考えられる。

文献(90) 日本語教育のための基本語彙調査 (『国立国語研究所報告78』)

国立国語研究所

秀英出版 昭和59(1984)年3月30日

B5判 275ページ

〔目次〕

刊行のことば (細目を省略)

I 解説	1 ページ
1 調査の概要	2 語彙表の性格〔説明〕
II 語彙表	33ページ
1 日本語教育基本語彙 五十音順語彙表	34ページ
2 資料 日本語教育基本語彙 意味分類体語彙表	141ページ
〔付録〕 意味分類項目一覧	266ページ

まず、「刊行のことば」から、本文献刊行の位置付け等についての記述を引用しておきたい。

国立国語研究所では、日本語教育センターの設置にともない、昭和50年度から57年度まで、このような基本語彙設定のための基礎資料の作成を目的として、日本語教育の専門家に協力を依頼し学習すべき日本語の基本度意識調査を行ってきました。

この調査の結果は、すでに「日本語教育基本語彙 第一次集計資料 ― 二千語」「同 ― 六千語」「同一 索引」(以上日本語教育センター第一研究室内部資料)、また「日本語教育基本語彙七種比較対照表」(日本語教育指導参考書9)として刊行してきましたが、この「報告78」はこれらをまとめて報告するものです。

「I 解説」の「1. 調査の概要」の「1.2 目的と方法の概要」によると、この調査の目的は、「留学生等外国人の日本語学習者が、専門領域の研究または職業訓練に入る基礎としてはじめに学習すべき日本語の一般的・基本的な語彙について妥当な標準を得る」ことを判定の共通理解とし、これにかなった語彙を選定することを目的としている。

次に、「1.4 調査の手順」は、「予備調査の後、『第一次選定』、その結果に基づく『第二次選定』の大きく二段階に分けて行われ」た。以下、その「1.4 調査の手順」についての記述を整理しておきたい。

〈第一次の基本語彙の選定〉 上記に掲げた目的に関する「共通理解のもとに、『分類語彙表』を判定材料として、これに所載の一語一語について専門家による基本度の判定を行」た。

具体的には、『分類語彙表』所載の約32,600語、36,000項目について、日本語教育学・国語学・言語教育等の専門家22人に次の三段階の判定を求めた。

第一判定：「六千語」を目安に選定。(得点：1点)

第二判定：第一判定で選定されたものから、最も基本的と考えられるもの「二千語」を選定。(2点)

0判定：第一判定及び第二判定いずれにも判定されないもの。(0点)

そして、上記()内における得点を集計し、「得点の高い順に「六千語」を基準に採りだし、次にこの語彙のうちでより上位得点を得ている語を、「二千語」を基準に採りだし」ている。

①「第一次集計資料 — 六千語」 得点集計結果9点以上 7,196 語項目

②「第一次集計資料 — 二千語」 ①のうち得点集計結果25点以上 2,090 語項目

〈第二次の基本語彙の選定〉

〈選定台帳の作成〉 「二千語」の第二次選定のために、「第一次集計資料 — 二千語」所載語彙と文献(81)『日本語教育基本語彙七種比較対照表』に取り上げられた7種の文献をはじめとする12種の文献とを比較対照させた選定用台帳を作成して、4種以上に取り上げられている650語を補った。

次に、「六千語」の第二次選定のために、「第一次集計資料 — 六千語」所載語彙と文献(59)『外国人のための基本語用例辞典』所載語彙とを比較対照させて約1,300語を補い、文献(55)『電子計算機による新聞の語彙調査』の頻度上位「六千語」と比較対照させて、約300語を補っている。

〈第二次選定〉 第二次選定は、一部改めた21名の選定委員により、上記の選定用台帳を検討し、第一次選定の判定を尊重しつつもその偏りや、判定材料の不備による問題点を修正し、より有効で合理的な基本語彙資料を得るために行われ、次の数値が得られた。

〈収録語彙数〉

- ① 「基本語六千」 6,880項目 6,060語
 ② ①のうちより基本的な「基本語二千」 2,249項目 2,030語

〈五十音順表の形式〉 次に例示するように、二千語の見出し語はゴシック体、六千語の見出し語は明朝体で表示。そして、分類番号を付け、他の語彙表にどのように現れるかをコード番号1～7及びa、bで表示している。なお、その一覧表の1～7のコード番号は、次の文献である。文献番号と書名を掲げておきたい。

あ→あ(っ)						
^b ああ(副・感)	* 3100		3	4	5	7
———	4310					
あい(愛)	* 1302 ₀	1	3	5	6	7
あいかわず(相変)	3165			5		7
あいさつ(挨拶)	* 1312 ₁	1	2	3	4	5
あいじょう(愛情)	1302 ₀			5	6	7
あいず(合図)	* 1312 ₁	1	3	5		
アイスクリーム	1434			4		
あいする(愛)	2302					7
あいそう(愛想)	1303 ₀			5		7
^b あいだ(間)	* 1176	1	2	3	4	5
あいて(相手)	* 1220	1	3	5	6	7

コード1 文献(26)『日本語基本語彙』

コード2 文献(47)『日本語教育における基礎学習語』

コード3 文献(56)『Practical Japanese-English Dictionary』

コード4 文献(65)『A Classified List of Basic Japanese Vocabulary』

コード5 文献(59)『外国人のための基本語用例辞典』

コード6 文献(57)『留学生教育のための基本語彙表』

コード7 文献(37)『総合雑誌の用語 前編』

また、見出し語の上に付した「a」は文献(74)『日本語教育語彙資料 — 低学年初級500語 — 』,「b」は文献(76)『日本人の知識階層における話しことばの実態 — 語彙表』である。分類番号の上の「*」は、その見出し語が当該意味領域において「基本語二千」に選定されたことを示している。

本文献は、以上に見てきたように、参考の二種を含めて9種の文献の成果を元に作成した文献であるので、日本語教育界で最も信頼されていて活用されることも多い。

文献(91) 学習基本語彙 (研究報告 第25冊)

財団法人 中央教育研究所

財団法人 中央教育研究所 昭和59(1984)年 9 月30日

B 5 判 234ページ

〔構成〕(付記を略す)

「学習基本語彙」の選定にあたって (倉持保男)

1 ～ 3 ページ

1. 選定の目的

2. 選定の基準

3. 選定の方法

学習基本語彙

5 ～ 234ページ

まず、『学習基本語彙』の選定にあたって」の「1. 選定の目的」の結びの一節を引用しておきたい。

ここでは、「学習基本語彙」として4,323語を選び出し、その個々に学習対象とすべき意味・用法の範囲を判断する目安として用例を付した。なお、この語数4,323という量については、直接国語科の教材に反映させうるか、何らかの学習活動を通して指導しうる数にとどめるべきかという観点に立って選んだ結果によるものである。

次に、「2. 選定の基準」では、「児童が将来健全な社会人として豊かな言語生活を営む上で、その的確な理解と使用に欠かせないものだと考えられる語を選び出すこと」が基本だと述べた上で、a～gの項目を掲げている。ここでは、それらの中から、積極的な基準を示すa～cの3項目を引用しておきたい。

- a 口頭語・文章語の両面においてそれぞれごく日常的に用いられ、その使用頻度が高い語。
- b 使用頻度は必ずしも高くなくても、語彙体系の面からみて重要度が高いと判断される語。
 - ア 論理的な思考に欠かせない抽象的概念を表す語や、一群の語の上位概念を表す語。
 - イ 二個ないし数個の語が互いに意味的に対立してある意味領域を構成している語。
 - ウ 口頭語対文章語、常体対敬体など、文体上の対立があり、指導上の配慮が必要とされる語。
 - エ 専門語として定義付けのある語を除き、各教科の学習内容を理解するための基礎となる語。
- c 造語力の活発な造語成分 (接頭語・接尾語を含めて)。

次に、「3. 選定の方法」の「具体的な語の選定」に関するa～cの説明を引用しておきたい。

- a 「分類語彙表」(国立国語研究所, 昭和46年)に収録された約30,000語を基礎資料として、そこから上記「2. 選定基準a～c」に該当する語を選び出した。その数は約6,000であった。
- b aの段階で選出した約6,000語に、「学習基本語彙の基礎調査」(中央教育研究所研究報告7, 昭和51年)から約300語,「新明解国語辞典」(三省堂, 第2版, 昭和49年)の重要語の指示のある語から約200語を同じ基準で選出して補った。
- c a, bの作業を通じて選び出された約6,500語について、d～gの条件を考慮しながら、その適否を一語一語検討した。(引用者注; d～gの条件は、難易, 規範, 品位, 社会生活との関係など)

さて、こうして選定された4,323語は、「学習基本語彙表」に五十音順に配列され、個々の語は、「見出し表記 品詞 学習段階」の形式で示されている。

ここで、本文献の特性を確認するために、東京書籍及び中央教育研究所から刊行されている次の2種の文献を比較対照させてみよう。これらは、①語数の上で近似している、②倉持保男氏が文献(73)と文献(91)の解説

を書いている、③文献(62)と文献(91)は同じ中央教育研究所から刊行されている、という関係にあるからである。なお、いずれの文献も漢字仮名交じりの表記で引用する。

文献(62)『学習基本語彙の基礎調査』	4,363語	中野洋氏解説	中央教育研究所
文献(73)『学習基本語彙表 小学校国語科用』	4,161語	倉持保男氏解説	東京書籍
文献(91)『学習基本語彙』	4,323語	倉持保男氏解説	中央教育研究所

	文献(62)	文献(73)	文献(91)		文献(62)	文献(73)	文献(91)
○	上	上	上	○	動き	動き	動き
・		植木		○	動く	動く	動く
・			飢える	・		うさぎ	
○	植える	植える	植える	○	牛	牛	牛
○	魚	魚	魚	○	失う	失う	失う
・		うがい		○	後	後	後ろ
○	伺う	伺う	伺う	○	薄		
△		窺う	窺う	△		渦	渦
○	浮かぶ	浮かぶ	浮かぶ	○	薄い	薄い	薄い
△		浮かべる	浮かべる	△		薄暗い	薄暗い
△		受かる	受かる	・		渦巻き	
○	浮く	浮く	浮く	△		埋まる	埋まる
・		うぐいす		・		薄める	
・			受け入れる	○	埋める	埋める	埋める
△		受付	受付	○	嘘	薄める	嘘
・			受け付ける	・		嘘	
○	受け取る	受け取る	受け取る	○	歌	嘘つき	歌
△		受け持つ	受け持つ	○	歌う	歌	歌う
○	受ける	受ける	受ける	・	疑い	歌う	
○	動かす	動かす	動かす	○	疑う	疑う	疑う

これら40語を並べると、3種共通(○印)は20語、2種共通(△印)は8語、1種だけ(・印)は12語という結果が得られる。その2種共通では、文献(73)と文献(91)の共通性が8語で、文献(62)と文献(73)の共通、及び、文献(62)と文献(91)の共通が0という結果になった。ここから、3種の文献の特徴を引き出すことができそうである。対照させた文献(62)は、他2種の原資料であるが、頻度調査中心に選定されたままであること、また、文献(73)は動物などの選定から判断して、小学生の使用語彙を配慮して選定されているなどのことが導かれてきそうである。

この40語の中で独自の語が12語見られたが、文献(91)の独自の語はわずかに「飢える、受け入れる、受け付ける」の3語だけで、これは、複合語2語を含んでいるが、社会人であれば保有すべき語ということになる。文献(73)にある「うぐいす」「うさぎ」など身近の動物は選定から除いている。動物は「牛・馬・犬・ねこ・ねずみ・にわとり」ぐらいしか入れていない。植物名は皆無である。そこから、本文献は、教育的観点だけでなく、一般社会における重要性を加味して選定していると言いうことができる。

文献(92) 豊かな文章表現力を育てるための基礎研究（研究報告書）

— 小学3年生の作文340編での使用語彙調査からの考察 —

生稲陽一（1984年千葉県長期研修生） 昭和60(1985)年3月5日

B5判 80ページ

〔構成〕

本文

I. 研究主題について II. 研究の目的 III. 研究の仮説 IV. 研究の内容と方法

V. 研究の概要 1. 基礎研究 2. 調査研究 3. 個別事例研究 4. まとめと今後の課題

別冊資料（資料1～資料10）

本文献は、千葉県館山市立館山小学校3年生の1学級（児童数35名）で1年間に10回書かせた作文の使用語彙を調査したものである。作文の長さは、平均すると400字詰原稿用紙で2枚と5行、文の数は35.7文である。ここで、それら10回分の作文の指導項目等を紹介してみよう。なお、表の「～」は、引用の部分的な省略を表す。

No.	月	指導項目（課題作文と自由作文）	文数	語数
1	4	3年生になった日のことを思い出して書こう	16.8	108.8
2	5	でき事をよく思い出して、あったことをあったとおりに ～ 書こう	27.2	148.9
3	6	ある日ある時のできごとで、心にのこったことを時間の順序に ～ 書こう	25.1	145.6
4	7	説明するように書こう（「ぼく（私）のカバン」「うえ木ばちのへちま」）	11.2	73.3
5	9	夏休みのできごとで、一番心に残った事をよく思い出して書こう	42.7	250.9
6	10	書きたい場面を切り取って、そこだけくわしく書こう（「運動会」）	26.1	159.2
7	11	体を動かして、力いっぱい遊んだり働いたりしたことを書こう	48.8	269.0
8	12	学習旅行でわかったことや思ったことを ～ 小見出しをつけて書こう	49.9	275.1
9	1	年のおわり・年の始めのできごとで、心に残ったことを書こう	36.1	198.1
10	2	気持ちを書き表わす（マラソン大会）	68.7	152.3
平均文数と語数			35.7	178.1

この作文の使用語彙調査の語の単位は、国立国語研究所の α 単位を採用している。本文献では、次の例を掲げている。

α 単位：型紙／どおりに／裁断して／外出着を／作りました。

具体的には、次の方針を採用している。（引用者注；必要だと考える項目だけを引用する。）

6) 資格の体言に、じかに接続するサ変動詞は、切りはなさない。

7) 本・歌などの題名は切りはなさない。

8) 通常、結びつきがつよく、ひとまとまりの意味を持つと考えられる語については、切りはなさない。

9) 接頭語・接尾語は、原則として、原文どおり、つけたまま語と認めた。

11) 助詞、助動詞は、調査対象から外した。

そうした見方で、調査した結果、3年生の作文に使用されている異なり語数は、5,495語であった。なお、

延べ語数は提示されていない。

品詞	異なり語数 (%)		形容詞	139	2.5
			形容動詞	97	1.8
普通名詞	2447	44.5	副詞	298	5.4
数詞	764	13.9	連体詞	20	0.4
固有名詞	623	11.3	接続詞	34	0.6
動詞	990	18.0	感動詞	83	1.5

次に、資料1～資料10の題目を引用しておきたい。

資料1 調査作文の指導項目、題材、文種、一覧表

資料2 調査方法、語の認定方針

資料3 作文の長さ 集計表

資料4 1作文毎の文数と語数 集計表

資料5 1作文毎の単位語数 集計表

資料6 個人別・品詞別・使用語数

資料7 高頻度使用語彙表

資料8 共通高頻度使用語彙表

資料9 MVR 集計表／児童作文例

資料10 小学3年生作文使用語彙表

さて、資料10の「小学3年生作文使用語彙表」は、品詞ごとに提示されている。ここでは、動詞の最初の部分を掲げておきたい。

No.	語		人数	頻度	No.	語		人数	頻度
1	*あう	会	9	17	7	*あきる		11	20
2	*あう	合	2	3	8	*あく	開	7	10
	*あおぐ	仰			9	*あく	空	5	5
	*あおぐ	扇				*あけっぱなす			
	*あおむく					*あけはなす			
	*あおむける				10	*あける	開	13	25
	*あかす	明				*あける	空		
3	*あがる	上	19	64	11	*あける	明	4	5
4	あがる	揚	3	3	12	あげおわる	揚	1	1
5	あきあきする		1	1	13	*あげる (あたえ)		25	85
6	*あきらめる		5	5	14	*あげる	上	13	27

ここに五十音順表の動詞の最初の14語を提示した。この一覧表の中には、NO. の付かない語が掲げられている。それらは、文献(88)に取り上げた阪本一郎氏の『新教育基本語彙』のAランクに掲げられている語である。Aランクの語は語頭の「*」で示されている。

本文献は、個人的に行った作文使用語彙調査としての意義をもつ報告書である。

文献(93) 教育基本語彙の体系化とその指導方法の究明(昭和59年度 特定研究報告書)

神戸大学教育学部語彙指導研究会

神戸大学教育学部 昭和60(1985)年3月25日

B5判 110ページ

〔目次〕(序を除く。見出しは本文の表現に従った)

I 理論編	1～16ページ
一 研究の目的と課題	
二 語句・語彙指導の意義	
三 語句・語彙指導の内容と方法	
四 教育基本語彙表・試案の作成	
五 語彙指導の研究史	
II 実践編(細目1～細目10を省略する)	17～76ページ
III 語彙表編	77～107ページ
一 教育基本語彙表・試案	
二 五十音順教育基本語彙表	
三 『分類語彙表』による意味分類	
おわりに 共同研究のあゆみ	108～109ページ

本文献は、神戸大学教育学部の学部と附属小・中の各教官、そして、大学院生が5年間の長期にわたって教育基本語彙の研究に取り組んできた成果である。この研究の目的は次のように述べられている。

〔研究の目的〕語彙を豊かにしていくことを直接の目的としている国語科ではどれだけの語彙量を教えたらよいのであろうか。学年別の語彙習得の実態はどのようになっているのであろうか。教育基本語彙を学年別に配当するにはどのようにすればよいか。一つの語句を習得させたり、語群をある観点から語彙として習得させたりするにはどのようにすればよいか。このような問いを踏まえて、わたしたちは、研究目的をつぎの二つとした。

- 1 教育基本語彙の構造を感情語彙と論理語彙の面から明らかにし、指導の系統を究明して体系化する。
- 2 選定された教育基本語彙の指導内容と指導方法とを、教育実践を通して明らかにする。

次に、I・四・2の「(2)教育基本語彙選定の経過」に提示される8項目をそのまま引用しておきたい。

〔教育基本語彙選定の経過〕

- 1) 語彙を生活習得語彙と教育基本語彙との二つに大きく分ける。
- 2) 小・中学校の文学教材の語彙分析 → 感情語彙の選定と分類
- 3) 小・中学校の説明文教材の語彙分析 → 論理語彙の選定と分類
- 4) 「話題語句」「説明語句」という概念の導入
- 5) 『新教育基本語彙』(阪本一郎, 1984.1, 学芸図書)からわたしたちの考える論理語彙を、まず2,342語選出。
- 6) 論理語彙の構造化と系統化(この段階で約1,500語にしほり、教科書の語彙を勘案して必要と思われる論理語彙を加える)
- 7) 「感情語彙」と「論理語彙」を統合して「教育基本語彙 試案」を作成。
- 8) 語彙の系統化にあたっては、つぎの四つの先行調査に依拠した。(引用者注; 文献番号を補充。)
 - 文献(62)林四郎他『学習基本語彙の基礎調査』1976.5 中央教育研究所
 - 文献(79)福沢周亮・岡本まさ子『小学校における効果的な語彙指導』1981.2 教育出版

- 文献(80) 甲斐睦朗『小学校国語教科書の学習語彙表とその指導』1982.1 光村図書
- 文献(88) 阪本一郎『新教育基本語彙』1984.1 学芸図書

次に、「Ⅲ 語彙表編」の「一 教育基本語彙表・試案」の前書きから、3項目を引用しておきたい。

- 1. 本表は、小学校・中学校において教えた基本語を選定し、分類して配列したものである。
- 2. 1736語を選定している。
- 3. 分類の観点とは、意味と発達の二つである。

次に、「Ⅲ 語彙表編」には3種の一覧表が掲げられている。まず「一 教育基本語彙表・試案」は、次に例示するように、縦に「意味の観点」を並べ、横に「発達の観点」を立てて、各語句を配置している。

			a, 小・低	b, 小・中	c, 小・高	d, 中学
1 自然	1 空間	01	所 上 下 中 右 左	場所 場面 左右 前後 上下	空間	方位
		02	向き 東 西 南 北	方角 方面 方向		
		03	外 内 奥 横 縦			
		04	点 線 間 端 傾き 側		間隔 層	軌道 軌跡
		05		距離 幅		
		06	前 後 先 表 裏	面 表面		

次に、「二 五十音順教育基本語彙表」は、1,736語を五十音順に配列した表である。例えば、上の01の「上」は、「上 11. 01a」という「試案」の分類番号が与えられている。

そして、「三 『分類語彙表』による意味分類」は、例えば、次のように各語が配列されている。

1.1110	関係 関与 関連 相関
1.1111	起源 基礎 基本 根源 根底 根本 源
1.1112	生きがい 因果 影響 結果 原因 効果 効用 条件 成果 提案 要因
1.1113	目的 根拠 手段 証拠 為 目当て めど 目標 理由 論拠 わけ
2.111	関する 従う 属する 対する 基づく 依る
3.111	合理 なぜ

神戸大学教育学部の共同研究は、本文献刊行後も続けられ、『小学校語彙指導の活性化』『中学校語彙指導の活性化』（浜本純逸編 明治図書 平成2（1990）年）としてまとめられている。これら両文献のいずれにも「Ⅶ 教育基本語彙表」が掲載され、また、巻頭には、浜本純逸氏の「Ⅰ 語彙の構造化と活性化」（小学校）、「Ⅰ 語彙指導と教育基本語彙」（中学校）が掲載されている。また、浜本純逸氏には「教育基本語彙の選定」（『国語語彙史の研究8』和泉書院 昭和62年11月）もある。

本文献は、国語教育の理論的立場だけでなく実践的立場も重視した貴重な資料ということができる。

文献(94) 学習基本語彙の選定に関する研究Ⅰ — 語の熟知度による語彙の実態 —
(研究紀要 小国 第35号)

財団法人 教育調査研究所

教育出版 昭和60(1985)年 6 月10日

B 5 判 313ページ

〔構成〕

はしがき	4 ページ
1. 目的	6 ページ
2. 方法	6 ページ
3. 結果	14ページ
4. 今後の方向	15ページ
5. 学年別・男女別 調査対象語の熟知度	25ページ

まず、「1. 目的」は、次のように述べられている。

学習基本語彙選定のための基礎資料の作成を目的として、児童における語彙の実態を調査する。ただし、結果として示される語彙の実態は、各語の熟知度 (familiarity) の高低によっている。

次に、「2. 方法」の「(3) 調査対象語の選定」は、次のように記されている。

先行研究をもとにして、調査対象語約 5,750語を選定した。図1は、使用した文献相互の関係を示すとともに、調査対象語の位置を示している。

本文献は、「2. 方法」の「(3) 調査対象語の選定」について、このように記した上で、次の1ページを丸ごと使って「図1 調査対象語の位置」を掲げている。その「図1」はこみいってたいへん難解な図である。そこで余分な情報を除外して、単純化すると、次のように整理できそうである。ただし、「図1」だけが掲げられていて、その説明が一切ないので、例えば1,972語をどのように「補充」したのか、それは、東京書籍版の「学習基本語彙表」収録の語とどういう関係にあるのか、といったところは理解できない。なお、括弧の中の記述は、引用者の注記である。

- (1) 文献(73)東京書籍「学習基本語彙表」(1979)の4,160語を資料に採用。
- (2) この資料について、梁田小の児童の熟知度を調査し、梁田小の「学習基本語彙」3,790語(1981)を設定。(注記；この3,790語の設定が、文献(79)『小学校における効果的な語彙指導』の成果である。)
- (3) 更に熟知度の検討を進めて「段階別学習基本語彙」3,782語(1983)を提示。(注記；これが、文献(79)に関連して紹介した『定着をめざした学習基本語彙の指導 小学校』の成果である。)
- (4) 別の5種以上の文献から(注記；どのように検討したのかは不明。)1,972語を補充。
- (5) 「調査対象語」5,754語を設定。(注記；ここまでの説明は皆無で、すべて推測するしかない。)
- (6) 全国熟知度調査を行う。(注記；ここからは詳細に記される。参考になる調査である。)
- (7) 調査結果の報告書Ⅰを作成。これがこの文献(94)である。

ところで、(4)で提示されている文献は、林四郎氏の「教育基本語彙」以外は本報告で取り上げているので、文献番号と文献名だけを掲げ、林四郎氏の論文だけに書誌情報を付けることにする。

- ・文献(47)「日本語教育における基礎学習語」
- ・文献(77)「教育基本語い・関連重要語い分類表」
- ・文献(81)『日本語教育基本語彙七種比較対照表』
- ・文献(85)「小学校低学年用国語教科書の用語」
- ・林四郎「基本語彙はきめられるか」(『新・日本語講座 1 現代日本語の単語と文字』第2章 昭和50(1975)年4月 汐文社) 37～54ページ

調査用紙の形式は、見出し語について、「知らない(わからない)」「知っている(わかる)」のどちらかを選ぶ形式になっている。その多くは当該語をそのまま提出しているが、同音異義語などの場合は「かねのとお」のように言葉を補って誤解を避けるようにしている。

「被調査者の学校」は、北海道から沖縄までの全国10地域の10校で、調査対象語1語について、被調査者70～80人が確保されている。

次に、「3. 結果」の「(2) 調査対象語ごとの熟知度」の記述を引用しておきたい。

(2) 調査対象語ごとの熟知度

表10に、学年別・男女別・調査対象語のグループ別で、調査対象語の熟知度を示す。

表中、語頭につけた番号は、処理を円滑にするための通し番号である。

「熟知度」は、語ごとに、「知っている(わかる)」に2点、「知らない(わからない)」に1点を与えて、それぞれの反応率を乗じ、更に両者を加えた結果を反応数の計(被調査者数)で除したものである。従って、これは数値の高いほうが、よく知っていることになる。

次に、表10の見出し語(40語)を引用しておきたい。

1 ああ 嗚呼	11 あいず 合図	21 あう 合う	31 あか 垢
2 アーケード	12 アイスクリーム	22 あう 会う	32 あか 赤
3 アース	13 アイスホッケー	23 アウト	33 あかい 赤い
4 アーチ	14 あいする 愛する	24 あえて 敢えて	34 アカデミック
5 アール〔単位〕	15 あいだ 間	25 あお 青	35 あがなう 贖う
6 あい 愛	16 あいて 相手	26 あおい 青い	36 あかり 明かり
7 あいかわらず	17 アイデア	27 あおぐ 仰ぐ	37 あがる 上がる
8 あいさつ 挨拶	18 あいにく	28 あおぐ 扇ぐ	38 あかるい 明るい
9 あいじょう 愛情	19 あいまい 曖昧	29 あおむけ 仰むけ	39 あかんぼう 赤ん坊
10 アイス	20 アイロン	30 あおる 煽る	40 あき 秋

これら40語には、①外来語が多い、②「あいにく」「あえて」「あおる」「アカデミック」「あがなう」などの小学生には難解な語が含まれている、という二つの問題が見られる。先に、1,972語の「補充」を行ったことについて、どういう語をどのように補ったのか不明と指摘したが、これら二種の語を補充したことが導かれてくる。また、例えば古語あるいは古い言い回しの中でしか使わない「あがなう」の学年間の熟知度を6年生の数値(1.161)を基準にして見ると、編者も指摘しているように1年生の1.125だけでなく、2年生以上の1.093, 1.114, 1.189, 1.092のどの数値も信頼度があるとは言いがたい。

本文献は、文献(42)に始まる文部省の一連の語彙調査と似た方法を採用しているが、「熟知度」という名称を付与したことで国語教育の分野で迎えられている。今後は、その理論化を図る必要がある。

文献(95) 小・中学生の作文の用語調査

財団法人 日本児童教育振興財団

財団法人 日本児童教育振興財団 昭和60(1985)年7月15日

本冊 B 5 判 まえがき等 3 ページ 本文49ページ

別冊 A 4 判 資料編(1) 434ページ 資料編(2) 410ページ

〔目次〕(細目を省略)

〈本冊〉

まえがき

1. 調査の性格

2. 調査の手順

3. 調査結果の概要

別冊・資料編の活用にあたって 〈表の見方〉

〈別冊〉

資料編(1) 五十音順語彙表

資料編(2) 使用頻度順語彙表

児童・生徒の理解語彙の調査は、幾種かが求められるが、使用語彙の調査はきわめて少ない。この文献は、小・中学校9年間の合計846編の作文の用語調査を行った資料である。そこで、義務教育9年間の語彙量の増加などを調査する上で貴重な資料だと言うことができよう。

「まえがき」によれば、財団法人日本児童教育振興財団は、昭和20年代から「全国児童生徒作文コンクール」を実施し、小・中学生のすぐれた作文を顕彰してきた。各都道府県で一位に入選した作品が、30余年にわたって保存されている。その貴重な資料を活用するために、用語調査が行われた。調査分析を行ったのは当時の国立国語研究所員である野村雅昭、齋岡昭夫の両氏である。

調査対象の作文は、昭和50(1975)年度と昭和55(1980)年度の2年度の「小・中学生作文コンクール」で各都道府県の第一位に入選した作品で、具体的には次の846編である。

	小学生	中学生	計
50年度	282(47×6)	141(47×3)	423
55年度	282(47×6)	141(47×3)	423
計	564	282	846

各作文の分量は、400字詰原稿用紙で5枚を基準として執筆されている。内容は、生活文、感想文、報告文など多岐にわたっている。

次に、語としての調査単位は、「この調査の目的が、児童の基本語の調査をすることよりも、むしろ児童の語彙の発達、専門的な用語の習得などの方にあった。」ということで、長い単位が採用されている。

次に、別冊の資料編は五十音順語彙表、使用頻度語彙表の2冊ともに、同じ形式が採られている。左側から順に番号を打って提示すると、次の各欄が設けられている。

1. No. 2. 見出し語 3. 代表形 4. 品詞 5. 注記(例えば「擬態語」「擬声語」など)
6. 頻度合計 7. 小学校頻度 8. 中学校頻度 9. 頻度順位

次に、この調査では、次に示す語彙量を採取している。

学年	延 べ		異なり	
小 1	23,588	183,091	3,158	13,332
小 2	26,293		3,639	
小 3	29,233		4,153	
小 4	33,059		4,891	
小 5	35,422		5,579	
小 6	35,496		5,581	
中 1	39,258	127,379	6,490	13,485
中 2	44,638		7,059	
中 3	43,483		7,214	
合計	310,470		20,492	

この学年別語彙量の一覧表は、児童・生徒の使用語彙の増加の状態をよく示している。小学校1年生の3,000語に始まって、3年生の4,000語、そして、6年生の5,500語という語彙発達状況がとらえられている。また、中学3年生の7,000語強の使用は、学習基本語彙のあり方を指し示しているように思われる。

次に、本文献の本冊の主要な項目である「3. 調査結果の概要」は、「3.1 語彙量の分析」「3.2 品詞別の語彙量の分析」「3.3 共出現語と非共出現語の分析」「3.4 語彙発達の分析」で構成されている。その「3.4」は、○語種の比率、○接続詞の分析、○副詞の分析、○コソアドの使用状況、○父母の呼称の推移、の小見出しが立てられている。その中の「副詞の分析」では、よく使用される副詞、小学校の使用順位が中学校のそれを上回るもの、中学校の使用順位が小学校のそれを上回るもの、という三種の考察が提示されている。

ところで、資料編(2)の使用頻度順語彙表の、例えば高頻度500語の中で、小学校と中学校の使用頻度が500以上食い違っている語を漢字仮名交じり表記で引用してみると、次のようになる。

小学校の 頻度が 高い	おにいちゃん(1368 134) うし(3660 134) 餌(698 161) 羽(862 217) 切る(827 225) 草(900 233) 高い(1189 228) 鳴く(862 243) 夕方(900 249) ごはん(1009 257) それで(1111 249) 赤ちゃん(2959 243) 巢(965 270) 土(862 278) 赤い(1189 286) おなか(2959 278) 大声(900 325) 偉い(1189 316) 匂い(900 347) 回る(900 347) 叩く(1057 339) プール(1189 331) 通り(1009 357) 我慢する(1189 347) 背中(1606 333)
	中学校の 頻度が 高い
生活(154 783) 思い(209 879) 対する(179 1307) 全く(225 763) 小学校(234 1062) 彼(189 7171)	

本文献は、児童・生徒の優れた作文の用語調査の成果を示したものであって、言語発達などを調査・考察する上で重要な価値をもつ資料になっている。今後の更なる活用が期待される文献である。

文献(96) 日本語教育映画 基礎編 総合語彙表

国立国語研究所

日本シネセル 昭和61(1986)年 1月31日

B 5判 228ページ

〔目次〕

「日本語教育映画基礎編 総合語彙表」について	1 ページ
0. はじめに	1 ページ
1. 見出し語と使用文例の総数、配列等について	3 ページ
2. 見出し語の設定について	4 ページ
3. 見出し語のための付加情報について	7 ページ
4. 見出し語内の下位区分について	10ページ
日本語教育映画基礎編 総合語彙表	15ページ

国立国語研究所日本語教育センター日本語教育教材開発室では、次の3種の日本語教育用映像教材を作成してきている。そして、それらの映像教材を有効に活用するために、そのシナリオ集及び語彙表を作成している。それらの語彙表は、本文献を含めた3冊で、その語彙の内訳は次の一覧表のとおりである。

文献(96) 日本語教育映画 基礎編 総合語彙表 昭和61(1986)年

文献(105) 日本語教育映像教材 中級編 伝えあうことば 2 語彙表 平成3(1991)年

文献(120) 日本語教育映像教材 初級編 日本語でだいじょうぶ 語彙表 平成9(1997)年

文献番号・略称	見出し総数	自立語総数	固有名詞	形式名詞	接 辞	付属語	補 助	空見出し
(96) 基礎編	1,230	1,008	66	4	30	104	13	5
(105) 中級編	1,869	1,501	90	12	44	92	3	121
(120) 初級編	1,339	1,089	80	3	41	64	14	48

本文献は、他が中級編、初級編であるのに対して、基礎編としての意味をもっている。

さて、本文献の概要は「前書き」に示されている。その第2段落を引用しておきたい。

「日本語教育映画基礎編」は、日本語を母語としない学習者が日本語を学ぶための初級用映像教材で、1巻5分から8分の作品30巻で構成されています。各巻、独立した学習内容と主題を持っているので、日本語の授業で教科書と併用する副教材として個別的に利用することもできますが、また基礎的日本語能力を実践的に身につけるための教材として、系列的に順次利用することも可能です。

次に、「0. はじめに」には、この語彙表について、次のような説明がある。

この「日本語教育映画基礎編 総合語彙表」は、国立国語研究所日本語教育部、ついで日本語教育センターにおいて昭和49年度から昭和58年度にかけて作成した「日本語教育映画」30巻に現れた全ての語を一覧表にし、そこに使用文例を並べたものである。(中略)

日本語教育映画のための語彙資料としては、今までに映画各巻別に作成した「日本語教育映画解説」に添えられた資料1.の語彙表があるが、この映画解説は、作成済みが22巻までで、まだ30巻全部がそろって

いない。30巻全体を通覧できる総合語彙表の方が一足先にできあがったわけである。(中略)

この資料の作成にあたっては、関連教材・資料のひとつである「日本語教育映画基礎編 シナリオ集」を定本として利用した。ただし、「シナリオ集」における漢字使用のふざろいや句読点等の問題で目についたところは、多少の修正をくわえた。当然のことながら、語や文についての変更は加えていない。

次に、「1. 見出し語と使用文例の総数、配列等について」では、次のような記述が見られる。

1. 1. この語彙表の見出し総数は1,230語であるが、同一語を何度か見出しにしている場合があるので、実際の異なり語数はそれよりいくらか少ない。この映画30巻に現れた異なり語数は1,189語、また延べ語数は11,281語になる。語の認定については、できる限り初級日本語教育の立場に立ち、また語彙表として利用価値の高いものとなることを考慮した。映画30巻における文の総数は2,239文であるから、一文は平均約5.0語で構成されていることになる。(以下、2文省略。)

1. 2. 見出し語はアイウエオ順に配列し、そこにその使用文例を全て並べた。使用文例は、各巻ごとの出現順に並べ、見出し語内に下位区分がある場合は、同じ下位区分の中でそれに従った。

次に、「2. 見出し語の設定について」は2. 1. から2. 8. までの記述が見られる。全体的な事項、品詞に関する事項等を取り上げているからである。ここでは、全体的な内容に関する2. 1. を取り上げておきたい。

2. 1. 見出し語の設定については、すでにふれたように初級日本語教育における指導要素をとりあげる立場に立っているが、この語彙表の多面的な利用を願って、いわゆる学校文法の品詞論的分類をも取り入れ、使用文例がより小さい単位から眺められるようにした。

次に、総合語彙表から「あかい〔赤い〕」の箇所を引用してみよう。

あかい〔赤い〕(7)

11第6巻 2-036 きれいな あかい こいですね。

第14巻 5-079 この グラフは、青い せんが プラントン、赤い せんが えびです。

12第13巻 2-032 この 赤いのと 白いのに しませんか。

第13巻 2-033 じゃあ、この 赤いのを 4本と、白いのを 3本、ください。

21第16巻11-093 夕ぐれには、みずうみが 赤く 見える ことが あるんですよ。

22第15巻 3-031 赤く なります。

第15巻 4-037 赤く になりました。

これらの例について、少し説明を加えておきたい。まず、最初の1行に仮名・漢字による見出しと用例数を掲げている。次に、2行目から一例ずつの用例を掲げている。「第6巻2-036」は、順に、映画30巻における巻の通し番号、各巻の映画中での場面番号、そして、各巻の映画中の文の通し番号を示している。それぞれの意味・用法が各文脈で確かめられるようになっている。なお、各用例の頭に付されている数字(例えば、「あかい」の最初の「11」)は、順に活用形と意味を表している。

本文の語彙表は、シナリオ集における台詞の言葉で、話し言葉的性格と書き言葉的性格の両方を合わせてもっている。他の2文献と合わせて、日本語教育の基本語彙を検討する上で、一つの位置を占めるものと思われる。

文献(97) 中学校教科書の語彙調査Ⅰ (国立国語研究報告87) (Ⅱとの関係で仮にⅠを加えた)
 中学校教科書の語彙調査Ⅱ (国立国語研究報告91)

国立国語研究所

秀英出版 I B 5 判 432ページ 昭和61(1986)年 3 月

II B 5 判 391ページ 昭和62(1987)年 3 月

〔目次〕(『中学校教科書の語彙調査Ⅰ』の目次だけを記す。「刊行のことば」を省く)

I 調査の概要	1～31ページ
1. 調査の目的	2. 調査の規模
3. 調査の手順	4. 調査単位について
5. 同語異語判別	6. 機械処理システム
II 語彙量	32～36ページ
III 五十音順M単位語彙表	37～220ページ
1. 本表 (自立語)	2. 付表
IV 度数順M単位語彙表 (全教科)	221～292ページ
V 度数順M単位語彙表 (各教科別)	293～432ページ

まず、文献(97)のⅠの「刊行のことば」(3段落構成)の最初の段落の前半を引用しておきたい。

昭和55年に着手した中学校の社会科・理科教科書を対象とした語彙調査が、このたび、作業を終了しましたので、ここに語彙表を公表します。本調査は、昭和58年、同59年に公表した高等学校の社会科・理科教科書を対象とした語彙調査に続くもので、知識体系を記述する基礎的な語彙を明らかにすることを主たる目的としています。

以下、本文献の概要を理解する上で必要な事項を紹介する。

I・1. 調査の目的 (引用者注：本文から、調査の目的を明示する箇所を引用する。)

現代日本語の用語用字の実態を明らかにするために、国立国語研究所では、これまで、新聞、婦人雑誌、雑誌九十種、新聞三紙、高校教科書(理科・社会科九教科)を対象として、語彙調査を重ねてきた。とくに、昭和41年の新聞三紙を対象とした調査は、電子計算機を使用した、最初の大規模な調査であった。この調査のあとを受けて高校教科書調査が行われた。この調査は、国民の一般教養として、各分野の専門知識を身につける時に必要と思われる語彙の実態を明らかにすることを目的として行われた。

中学校教科書調査は、このあとを受けて、それより一段階前の、義務教育の最終段階である中学校で身につける知識体系を記述する語彙の実態を明らかにすることを目的としている。

I・2. 調査の規模 (注：文献の基本語彙表を理解する上で最少必要な2項目だけを掲げておきたい。)

(1) 調査対象の教科 — 当時使用されていた中学校教科書のうちの、社会科・理科の全教科の中から、次の7教科を調査対象とした。(教科書名等は省略)

理科 — 理科1上・理科1下・理科2上・理科2下

社会 — 社会科歴史的分野・社会科地理的分野・社会科公民的分野

(2) 調査対象の箇所 — 各教科書の本文部分を調査対象とした。

I・4. 調査単位について — 本調査でも、高校の調査と同じくM単位、W単位を用いている。『中学校教科書の語彙調査Ⅰ』が短いM単位語による調査、『中学校教科書の語彙調査Ⅱ』が長いW単位語による調

査の結果をまとめたものである。

次に、「II 語彙量」の「表1. 語種別の語彙量」(延べ・異なり)と「表2. 共出現の語数」の2種類の表から、本報告に最少必要な情報だけを引用しておきたい。(表1は、自立語だけに絞った表である。)

表1. 語種別の語彙量

	和 語	漢 語	外来語	混種語	人 名	地 名	自立語合計
延 べ	65,216	57,485	2,480	589	764	5240	131,774
異なり	1,944	4,536	397	50	399	665	7,991

表2. 共出現の異なり語数 (固有名詞を除いた自立語だけを掲げる)

共通度	1	2	3	4	5	6	7	理科	社会科	理社共通
異なり	3,709	1,381	791	366	237	198	242	374	1,075	1,621

次に、ここには引用しないが、「III 五十音順M単位語彙表」は、「それぞれの語に、7教科全体での使用度数・比率・全体順位のほか、理科系、社会科系各教科の使用度数、および理科系・社会科系ごとの合計使用度数と比率」を示した一覧表である。

次に、「IV 度数順M単位語彙表 (全教科)」に関する説明を引用しておきたい。

この表は、自立語について、その使用度数の高いものの順に並べたものである。付属語・数字・記号については、度数順語彙表は出さない。(中略)

この度数順語彙表は、最も度数の高い「する」にはじまり、度数1のもので終わる。

ここで、上位100位までで、全7教科すべてに使用されている自立語57語を順に掲げてみよう。

する 居る 有る 成る こと この その 人 言う 又 物・者 これ できる それ 因る 年
為 見る 中 作る 大きい 取る 無い 多い 来る 時 力 生活 場 行く しかし 持つ
行う 色 間 高い 起こる 使う 大きな 入れる 出す 図 調べる 強い 頃 中心 運動
変化 所 同じ 多く 受ける 対する 呼ぶ 組み 世紀 発達

次に、『中学校教科書の語彙調査II』は、同じ資料を、W単位語で調査したものである。M単位語の語彙表との違いは、延べでは、W単位語のほうが、250,572語に対して197,343語というように語数の上で少なくなるが、異なりでは、8,139語に対して17,774語というように増えることになる。これは、単位語の求め方に応じた語数の増減である。このことは、学習基本語彙を検討する上で大きな意味をもつ。

本文献は、文献(83)『高校教科書の語彙調査』とともに、中学校から成人までの学習語彙を検討する上で貴重な資料を提供している。この後、担当した研究員の個々の研究成果をまとめた『高校・中学校教科書の語彙調査 分析編』(国立国語研究所報告99 B 5 判 231ページ)を刊行している。

文献(98) 基礎日本語学習辞典〔英語版〕(BASIC JAPANESE-ENGLISH DICTIONARY)
 特殊法人 国際交流基金 (THE JAPAN FOUNDATION)
 凡人社 昭和61(1986)年12月10日
 A 5 判 958ページ

〔構成〕(本文献の「はしがき」～「凡例」は先に英語による表現, 続いて日本語による表現という編集形式になっているが, 本報告では日本語による表現だけを掲げる)

はしがき	国際交流基金日本研究部	11ページ
はじめに		12ページ
凡例		13～16ページ
本文		1～923ページ
付録 (AN INTRODUCTION TO JAPANESE GRAMMAR)		924～958ページ

まず, 「はしがき」で, 「ここ10年来海外で日本語を学ぶ人の数」が「増大の一途をたどってい」るのに, 「日本語の学習を始めようとする外国人にとって, 自国語の訳がついた使い易い辞書」がほとんどないことを指摘した上で, 次のように述べている。全6段落中の第3段落の本文を引用しておきたい。

国際交流基金では, こうした初級の日本語学習者にとって使い易い辞典を各国語版で刊行する必要があると考え, 本「基礎日本語学習辞典」の編集を進めてまいりました。日常使われる言葉から基礎語彙を選定し, その語のもつ意味の分類を行い, それぞれの意味ごとに語の使われ方を語例や文例の中で明示しました。振り仮名およびローマ字表記も添えましたので, 初めての学習者も利用できるものと確信しております。

次に, 「はじめに」全6項の本文を引用しておきたい。

1. この辞典は, 日本語を学習する外国人が, 比較的初期の段階において使用することを目的として編集されたものです。
2. 見出し語として, 2873語を収録しました。各日本語教育機関などにおいて初期の段階で多く取り扱われる語が中心になっています。
見出し語は日本語の教材や語い調査, 辞書などを参考にして, 日本語教育に関係している方々の合議によって決めました。
3. 学習者が自習するのに便利のように見出し語はローマ字で示し, それに日本語の標準的な表記を併記しました。
語例および用例には, すべてローマ字の表記を併記し, また漢字にはすべて振り仮名をつけました。
4. 見出し語の意味や用法がよく理解できるように, また, 文章を書くときに役立つように, 用例を挙げ, さらにその語に関連した複合語や慣用的な語句も挙げました。また, 必要に応じて, 意味分類するとともに注を付してその用法について解説を加えました。
なお, 反対語や参照語なども示しました。
5. 学習者が日本語を英語と比較して学習できるように, 日本語に対応する英語による翻訳を添えました。
6. 見出し語の意味分類は, この辞典の性格から基礎的なものに限りましたが, やや高い段階の学習にも利用できるように少し詳しい分類を行ったものもあります。

次に、例文の少ない見出し語を選んで、本文を引用してみよう。

aku ^あ く Ⅰ Ⅱ ♪このアパートには、今 ^{いま} 空 ^あ いた部屋 ^{へや} はあ りません。(Kono apāto ni wa, ima <i>aita</i> heya wa arimasen.) ♪汽車 ^{きしや} がこんでいて、空 ^あ いている席 ^{せき} は ありませんでした。(Kisha ga konde ite, <i>aita</i> iru seki wa arimasen de- shita.)	aku [[v I]] become empty, not be in use ♪ There are no vacant apartments now in this apartment building. ♪ The train was crowded, and there were no empty seats.
akushu ^あ くしゅ 握手 ^{あいくしゅ} Ⅰ Ⅱ 友達 ^{ともだち} と握手 ^{あいくしゅ} する (tomodachi to <i>aku- shu</i> suru)	akushu [[n, ~suru]] a handshake shake hands with a friend
amai ^あ まい Ⅰ Ⅱ ♪このお菓子 ^{かし} はとても甘 ^{あま} いです。(Ko- no okashi wa totemo <i>amai</i> desu.) ♪わたしは甘 ^{あま} い物 ^{もの} より辛 ^{から} い物 ^{もの} のほうが 好き ^{すき} です。(Watashi wa <i>amai</i> mono yori karai mono no hō ga suki desu.) ⇔karai ^{から} 辛 ^{から} い	amai [[adj]] to be sweet ♪ This candy [[cake, etc.]] is very sweet . ♪ I like salty [[sharply flavored]] foods better than sweet ones.
amari ^あ まり Ⅰ Ⅱ ♪魚 ^{さかな} の余 ^{あま} りをねこにやりました。(Sa- kana no <i>amari</i> o neko ni yarima- shita.)	amari [[n]] the remaining, the rest, surplus ♪ I gave the leftover fish to the cat.

この例をもとに「凡例」の一部を紹介すると、左側には日本語、右側にはそれに対応する英語による訳文を載せている。ローマ字表記は、内閣告示「ローマ字のつづり方」の第二表（ヘボン式）によっている。

「はじめに」に示されているように、見出し語は2,873語であるが、例えば、次に例示するように、見出し語を使った複合語なども掲げられている。また、例文には見出し語以外の語句も使われている。それらを含めると、本文献に取り上げられている語数はかなりの数になるものと思われる。

aki 空^あき Ⅰ Ⅱ
 空^あき家^か (akiya) 空^あき箱^{はこ} (akibako) 空^あきびん (akibin)
 annai 案内^{あんない} Ⅰ Ⅱ
 案内人^{あんないにん} (annainin) 案内所^{あんないじょ} (annaijo)
 yubi 指^{ゆび} Ⅰ Ⅱ (注：次の各語のローマ字表記は省略する。)
 親指^{おやゆび} 人指^{ひとゆび} 中指^{ななゆび} 薬指^{くすりゆび} 小指^{こゆび} 指輪^{ゆびわ}

この2,873語の基本語彙がどういう資料を用いて選定されたかは記されていないが、「はじめに」の2の後半の記述「日本語の教材や語い調査、辞書などを参考にして、日本語教育に関係している方々の合議によって決め」という言葉が確かに受け取れる内容になっている。

本文献は、見出し語数が3,000語以下に押さえられているので、入門書としての価値を持っている。

文献(99) 日本語教育基本語彙2570語
 (『日本語教師養成通信講座 日本語の語彙・意味(1)(2)』)

玉村文郎

アルク 昭和62(1987)年9月

A5判 (1)86ページ (2)120ページ

文献『日本語教師養成通信講座 日本語の語彙・意味』の(1)及び(2)の目次は次のとおりである。

〔目次〕(索引等を除く。また、細目は原則として省略する)

(1) 第1章 語彙と語彙体系	5ページ
第2章 語の形	16ページ
第3章 語の数	39ページ
第1節 基礎語・基本語 ●専門語 ●基礎語・基本語	
第2節 計数的に見た語彙	第3節 表記と語形
第4章 語種	70ページ
(2) 第1章 語構成	5ページ
第2章 語の意味	22ページ
第3章 語彙史	50ページ
第4章 辞書と語彙資料	89ページ
日本語教育基本語彙2570語(玉村文郎選定 1987)	100ページ

目次に掲げたように、(1)の「第3章 語の数」の「第1節 基礎語・基本語」では、「基礎語」と「基本語」の説明があり、文献(44)『現代雑誌九十種の用語用字』をふまえて、日本語教育の基本語彙の選定の方法が具体的に提示されている。その結論の部分を引用してみよう。

さて、無数の言葉の中から、このような手続きで使用頻度順に並べて、上から500番目、あるいは3000番目、5000番目までというように切ったものを、基本語3000語とか基本語5000語とか言いますが、基本語の数は用途・その他の要素によって変わるので、一概には言えません。文字の場合は「漢字200」のように限定しても意味がありますが、単語の世界の場合は200や300の小さい数値に限ったものではどうしてもコミュニケーションの役に立ちません。どんなに小さく見積もっても1000語は必要でしょう。土居氏の基礎語では1100語です(『基礎日本語』改定稿, 1943)。しかし、日本語では、1100語でもなかなか実際のコミュニケーションの役を果たさないと考えられます。(以下、省略。)

次に、同じ章の「第2節 計数的に見た語彙」では、「中心語彙」という小見出しを掲げて、「語彙調査で基本語彙を選んでいくと、前から2000番目までに「おばあさん」は入ったが「おじいさん」は入らないというようなことがしばしば起こります。」という問題を取り上げて、次のように指摘している。

言葉を教えるときには、まとめて教えたほうが効果的だし、当然教えなければならない言葉のセットがあります。「東」「北」「南」は教えたけれども「西」はまだだというときは、教科書に出てこなくても「西」をそこでついでに教えるべきでしょう。それから反意語の場合、「父」が出てきたから「母」を、「高い」と一緒に「低い」「安い」を教えるということが必要です。そういうセットになる言葉は教えるときには当然一緒に教えるか、教育プログラムの中で終着点に着くまでに教えるかしなければならないと思います。つまり、基本語のリストにはひずみがあるので、その是正をする必要があるわけです。基礎語で

は初めから理論的に作ってあるので、そういう問題はほとんど起こりません。

以上、日本語教育基本語彙2570語の基本的な考え方を本文献から引き出してきた。この考え方に関係するものとして、第1節の末尾に掲げられている次のタスクがある。このタスクから、本文献の姿勢をとらえることができる。

〈タスク3 — 1〉 次のうち、基本語2000語に入ると思うものに○印を付けなさい。(例の10語は省略)

〈タスク3 — 2〉 既刊の語彙調査資料のどれかを見て、基本語上位2000語はどんな語（または語彙成分）か調べなさい。品詞別・意味別に考えること。

さて、巻末の「日本語教育基本語彙2570語（玉村文郎選定 1987）」は、五十音順に配列されているだけで、「凡例」に相当する解説がない。そこで、まずは「ア」の最初からの50語ほどを引用してみよう。

ああ	赤ん坊	味	当たる
愛	秋	アジア	あちら
あいさつ	明らか	あした	厚い
合図	あきらめる	預かる	熱い
間	あきる（飽）	預ける	暑い
相手	開く	汗	扱う
あう（合・会・逢う）	握手	あそこ（指示）	あっち
青	あける（開・明）	遊ぶ	集まる
青い	あげる（上・揚・挙）	与える	集める
赤	朝	あたたかい（暖・温）	あてる（当・充・宛）
赤い	浅い	あたためる（暖・温）	あと
あがる（上・揚）	あさって	頭	穴
明るい	あし（足・脚）	新しい	あなた

本文献は、全体として次のように整理することができそうである。

- (1) 「日本語教育基本語彙2570語」は、2000語を目安として、文献(44)『現代雑誌九十種の用語用字』や文献(68)『日本語教育基本語彙(1) — 上位二千語 — 』などを原資料に用いて選定している。
- (2) 基礎語的な見方で、それらの資料の一語一語を洗い直している。
- (3) 日本の大学への留学生を対象としているので、次の関係の語彙は欠けるところなくすべて備えている。
 - ① 都会の日常生活で必要とする語群
 - ② 大学の授業で必要とする語群（認識・思考・論理関係の語彙、文房具類など）
 - ③ 衣食住関係の語群
- (4) 次の特徴があるので、これら2,570語は何倍かに増加しうる。
 - ① 助詞・助動詞、接辞を含んでいる。
 - ② 動詞の同音語は、1語にくくられている。

本文献は、資料名に「基本語」という用語を使用しているが、基礎語的配慮に富んでいるので、土居光知氏に始まる基礎語研究の先端的なところに位置づけることができそうである。

文献(100) 日本語教科書語彙リスト(科学研究費補助金研究「パソコンによる外国人のための日本語教育支援システムの開発」報告書 昭和62年度暫定版, 1990年最終版)

国立教育研究所

暫定版 昭和63(1988)年3月 最終版 平成2(1990)年3月

A 4判 122ページ B 5判 325ページ

〔構成〕(平成2(1990)年最終版による)

研究経過報告	1 ~ 22ページ
研究報告(全7論文中関係する論文は次の1編)	23 ~148ページ
6.「日本語教科書語彙リスト」の分析(藤田正春・吉岡亮衛)	103 ~112ページ
日本語教科書語彙リスト	149 ~325ページ

本文献は、昭和62年度から3年計画で進められてきた科学研究費補助金による研究「パソコンによる外国人のための日本語教育支援システムの開発」の報告書である。その「研究目的」を、具体的かつ明確に述べている「暫定版」から引用しておきたい。

本研究は外国人のために行なわれる日本語教育で用いられている教材、試験問題などの各種資料をデータベース化し、それらのデータベースを利用するためのソフトウェア開発を行ない、パソコンを用いた日本語教育を支援するためのシステムを構築することを主な目的としており、具体的には以下ようになる。(引用者注；以下の①～④は見出しだけを掲げ、説明は省略する。)

- ① 各種資料のデータベース構築
- ② データベース利用ソフトウェア開発
- ③ CAI コース開発
- ④ データベース、ソフトウェアの流通促進

次に、平成2(1990)年刊の「最終版」の「日本語教科書語彙リスト」の巻頭の言葉を引用しておきたい。

本語彙リストは、初級の日本語教育に多く用いられている17種類(別表参照)の教科書について、それぞれの教科書の索引をもとにして使用されている語彙を収集したものである。教科書ごとに索引の作り方(例えば、英語訳の有無、品詞の表示など)が異なるため、必ずしも統一した規準で語彙を選定することはできなかったが、初級日本語教科書で使用されている語彙の大まかな実態についての把握は十分可能であると思われる。本語彙リストが、新しい教科書の作成などに基礎資料として役立てば幸いである。

本文献は、次の17種類の日本語教科書が資料として採り上げられている。参考までに発行所名を添えておきたい。

- | | | |
|-------|---|-----------------------------------|
| 01~04 | Learn Japanese vol. I ~ IV | University of Hawaii Press, 1968. |
| 05 | An Introduction to Modern Japanese | The Japan Times, 1977. |
| 06 | Intensive Course in Japanese -Elementary- | ランゲージ・サービス, 1971. |
| 07~08 | Beginning Japanese part 1~part 2 | Tuttle, 1974. |
| 09 | 日本語初歩 | 国際交流基金, 1987. |
| 10 | 外国学生用日本語教科書 — 初級 — (改訂版) | 早稲田大学語学教育研究所, 1977. |
| 11 | 日本語 I | 国際学友会, 1986. |

- 12 Nihongo no Kiso I 海外技術者研修調査会, 1974.
 13 Japanese – a Basic Course – Sophia University, 1981.
 14 Business Japanese 日産自動車国際課, 1987.
 15～16 生活日本語 I～II 文化庁, 1983, 1985.
 17 Japanese : The Spoken Language – Part 1 – Kodansha International, 1987.

次に、「最終版」の「日本語教科書語彙リスト」は、見出しごとに8つの情報が付けられている。ここでは「秋, 秋休み, 秋祭り」を例に、それらを紹介してみよう。なお、①～⑧の番号は引用者が付けた。

	各欄の事項	秋	秋休み	秋祭り
①	番号	0042	0043	0044
②	かな見出し	あき	あきやすみ	あきまつり
③	漢字表記	秋	秋休み	秋祭り
④	品詞	n	n	n
⑤	広辞苑		★	
⑥	英語訳	autumn ; autum ; fall	autumn vacation	autumn festival
⑦	頻度	10	1	1
⑧	教科書番号－課番号	01-11, 05-18, (以下略)	08-25	10-36

- ①「番号」は、見出し番号で、325ページの最後の「ん」が5,629番である。
 ②「かな見出し」は、五十音順配列のために必要で、子見出し（例「秋休み」など）は1字下げの扱い。
 ③「漢字表記」には、漢字仮名交じりの表記だけでなく、外来語などの片仮名表記も含まれる。
 ④「品詞」は『広辞苑第3版』に基づいている。
 ⑤『広辞苑第3版』にない見出し語には「★」を付けている。
 ⑥「英語訳」は、該当する英単語だけでなく、解説を付したものも見られる。
 ⑦「頻度」は、全17冊の教科書の何冊に使用されているかの冊数の意味で、⑧と連動している。

本文献の見出し語の特徴は、「遊ぶ(have a good time ; play)」を例にすると「遊びに(to play)」「遊びます(formal form of “asobu” play)」「遊べる(be able to play)」も見出しに立てていることである。

「6.『日本語教科書語彙リスト』の分析」には、次のような指摘が見られる。(1)各教科書の語彙は、全用語調査でなく、教科書巻末や別冊の語彙リストに基づいている。(2)全体の延べ語数は14,545語、異なり語数は4,076語である。(引用者注：語彙リストの5,629語をどのようにして4,076語に整理したのかの明確な説明はない。)(3)各教科書の異なり語数は、625語から1,888語までの開きがある。(4)頻度を見ると頻度1が1,751語、頻度2が571語、頻度3が347語、頻度4が238語、頻度5以上が1,169語である。(5)品詞構成を見ると、頻度が下がるにつれて名詞の割合が高くなる。6)異なり語4,076語中の1,660語が文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』の「基本語二千」に採用されている語と一致する。

本文献は、17冊の日本語教育関係の教科書の使用語彙を調査した資料として貴重である。いくらかの欠陥があるにしても、例えば頻度6以上の基本語(989語)を抜き出すといった調査を行う上では十分な資料になっている。これまで活用されてこなかったことが惜しまれる文献である。

文献(101) 小学校国語教科書(学図・61年版) 総索引

落合一郎

昭和63(1988)年4月2日 謄写印刷 袋綴

B5判 凡例3ページ 五十音順表252ページ あとがき4ページ

〔構成〕

凡例

I 内容

II 用語採集の範囲

III 単位語の決定

IV 見出し語・表記・配列

V 見出し語の注記

VI 見出し語の所在

五十音順表

あとがき

まず、「凡例」のI～IIIの全文を引用しておきたい。

I 内容

本書は、「小学校 国語」(学校図書・61年度用見本版)全12巻中、下記の範囲に出現する全ての自立語の所在を示した“小学校国語教科書総索引”である。

II 用語採集の範囲

(1) 各巻とも以下のものを用語採集の対象・範囲とした。

- ・本文 ・学習のてびき ・言葉のきまり ・言葉の泉
- ・欄外単元目標 ・脚注(※印)
- ・口絵および本文中の絵・図・写真等の解説
- ・絵・図・写真中に読める文や語

(2) 用語採集の対象・範囲としなかったもの

- ・表紙(表・中・裏) ・目次
- ・巻末新出・読みかえ漢字等一覧
- ・本文下部欄外語句(理解語句・使用語句等)
- ・4年上・下巻ローマ字学習のページ

III 単位語の決定

上記範囲内の文については、全てそれを文節に区切り、そこから助詞・助動詞を除いたものを、単語として独立して出現するものはそのままの形を単位語とした。

- ・単元名・書名・作品名等は分解せず、そのままの形で採録した。
- ・複合語は全てそのままとし、派生語も接辞を付けたまま単位語とした。
- ・二つ以上の単語がきりはなしがたく結びついて使用されているものは「連語」として単位語相当とした。
- ・言葉の泉等で、特定の一字を補って一語を完成させるようなものは、完成された形を単位語とした。
- ・ページ・行・順番などを示すための、助数詞のつかない算用数字は単位語としなかった。
- ・単位語の決定には「学研国語大辞典」を参考にした。

次に、語彙表の第1ページの上半分を複写の形式で掲示しておきたい。これは、謄写印刷による特殊な記号が使用されているので、活字では十分に表現できないからである。

【ア】													
あ (感) ㊴	三	33.2	36.9	45.7	四	90.8							
	四	40.4	五	13.2	六	65.7	六	131.8	六	7.1			
ああ (副) ㊴	四	53.6											
ああ (感) ㊵	一	91.10	二	112.7	三	50.7							
		54.5	三	7.3	四	111.4	五	62.2	六	98.8	四	3.3	
		37.4	七	87.4	八	103.2	九	36.4	十	44.11	六	7.1	
		五	17.4	六	79.3	七	87.4	八	89.15	九	12.10	五	12.10
		六	15.5	七	90.15	八	117.3	九	123.8	十	129.10	六	7.1
あああ (感) ㊴	五	69.12											
あーあ (感) ㊴	四	102.5											
アーモンドチョコレート (名) ㊴	五	112.12											
ああん (感) ㊴	四	74.8											
あい (藍) (名) ㊴	五	24.4											
あい色 (名) ㊴	六	6.3											
相変わらず (副) ㊴	五	123.12	五	10.11									
あいきょう (名) ㊴	六	84.3											
あいさつ (名) ㊴	一	28.1	二	42.3	三	20.7							
		38.1	三	39.2	四	40.3	五	41.7	六	42.9	七	43.8	
(あいだ) 一	44.2	二	86.3	三	38.3	四	2.1						
間じゅう (名) ㊴	四	21.5	六	41.7									
愛知県 (地名) ㊴	四	67.12	六	54.2									
愛知県犬山市 (地名) ㊴	六	105.5											
あいつ (名) ㊴	三	99.3	五	82.14	八	87.3							
		五	15.12										
相手 (名) ㊴	四	24.2	五	97.5	六	8.9							
	四	81.10	五	122.6	六	123.8	七	66.12	八	106.9			
	六	22.2	七	75.10									
(あい手) 三	116.8	四	94.8										
(あいて) 一	68.2	二	72.8	三	73.1	四	99.2						
		117.4											
あいどり [相取り] (名) ㊴	一	60.4											
アイヌ (名) ㊴	六	103.6	七	13									
アイヌ民話 (名) ㊴	六	70.7											
あいまい (形動) ㊴	六	48.10	八	85.11	八	86.1							
アイマイ病 (名) ㊴	五	83.1											
あいよ (感) ㊴	五	78.2	六	91.5	七	92.6							
合う (動) ㊴	三	24.7	四	27.5	五	31.2	六	9					

次に、「凡例」のⅣ以下から、この一覧表に関係する事項を整理しておきたい。

Ⅳ 見出し語・表記・配列

全ての異なり語を見出し語とし、原文通りの表記で五十音順に配列した。

- (1) 接辞「お」の付いた名詞・動詞をはじめ、全ての派生語はそのまゝの形で見出し語とした。
- (2) 表記は原文通りとし、二通り以上に表記された語については漢字の最も多く使用されたものを主見出しとし、他は一段下げて小見出しとした。仮名どうしの場合、平仮名を先にした。
- (3) 動詞・形容詞は終止形を、形容動詞は語幹を見出しにした。
- (4) 同じ語であっても品詞を異にする場合は別に見出しを立てた。
- (5) 同音語の配列は品詞に応じ、活用しない語を先にした。品詞が同じ場合には、漢字で表記されたものを先にあげるのを原則とした。

Ⅴ 見出し語の注記

見出し語には、品詞・出現回数その他を注記した。(以下、省略)

次に、本文の「あとがき」には、「本書作成の手順」が詳しく述べられている。それによれば、カード法が採用されている。「一語一枚で、品詞・所在(学年・巻・ページ・行)その他」を必要に応じて記入していた。それも、5名の小学校の教諭が「日々の授業の合間をぬって」行った成果であるという。

本文には、全用例の延べ語数、異なり語数が掲げられていない。したがって、品詞などに分けた数量も提示されていない。しかし、小学校の国語教科書(学校図書・昭和61年版)の全用語が五十音順に配列されていて、しかも、それぞれの用例数が示されている。また、上に引用したように、すべての見出し語の学年、巻、ページ、行が示されている。それで、整理すれば基本語彙の資料として活用できそうである。

文献(102) 小学校教科書教科別語彙資料 理科・本文編・索引編

京極興一・細川英雄

信州大学教育学部国語学第一研究室 平成元年(1989)3月15日

B5判 はしがき・凡例・目次7ページ 本文129ページ 索引143ページ

〔構成〕(本書は、理科本文編と理科索引編を1冊に合綴した体裁になっている)

はしがき

〈理科・本文編〉

本文編 凡例

りか1ねん	りか2ねん	理科3年
理科4年上	理科4年下	理科5年上
理科5年下	理科6年上	理科6年下

〈理科・索引編〉

索引編 凡例ほか

索引

1～143ページ

「はしがき」の本文の前半を引用する。

本資料は、現行小学校教科書における語彙について教科別・学年別に使用状況を調査したものである。

従来、国語教科書語彙についてはすでに様々な調査が行われているが、子供の言語能力と学習言語との関連から見た場合、学校教育の全教科における言語使用の実際を考える必要があると思われる。そうした観点から、本資料では、下記の教科書を調査対象とし、これに使用されているすべての文における語彙を教科別・学年別に分類することを計画した。今後、本文編及び索引編の形で順次刊行する予定である。

本報告書は、以上のような目的・趣旨で、まずは次の理科の教科書を調査対象としたものである。

理科 「理科」1～6年 (信濃教育会・昭和60年検定版) 9冊

次に、「本文編 凡例」の「1」を引用する。

1. 当該教科書の中から文の形として認められるものをすべて抜きだし、出現順に排列した。各文には、学年別の文番号を付し、あわせて上記のすべての文に文節句切り記号を付した。

例：

单元名→9 もののとけ方

学 年→4-203 * 石けんは、／水に／とけると／だんだん／小さく／なり、

↑	↑	↑
文番号	本文	文節句切り記号

次に、本文の単位切りの例として、4年下の「11 てんびんのはたらき」から2文を引用してみよう。

11 てんびんのはたらき

4-271 * てんびんを／使うと、／物の／重さを／はかる／ことが／できます。

4-272 * かんたんな／てんびんを／作って、／その／はたらきを／調べて／みましょう。

次に、「索引編」からは「索引編 凡例ほか」の本文を引用しておきたい。

1. 本書は、『小学校教科書教科別語彙資料 理科・本文編』（1988年3月刊）の文節索引である。
2. 当該資料中の学年別の文番号を付したすべての文を文節に句切り、これをアスキー五十音順(カタカナ)に排列した。

次に、索引の本文の第1ページの右側の下半分の各見出しを引用してみよう。なお、外枠は引用者が施した。また、右側に引用者のまとめた見出し語を漢字仮名交じり表記で提示してみた。

見出し	漢字表記	巻・ページ	引用者のまとめた見出し語
アオイロ	青色・	6-208	青色
アオイロノ	青色の	6-201	
アオイロノ	青色の	6-215	
アオイロリトマスシヲ	青色リトマス紙を	6-202	青色リトマス紙
アオイロリトマスシヲ	青色リトマス紙を	6-211	
アオイロリトマスシノ	青色リトマス紙の	6-203	
アオク	青く	6-218	青い
アオムシ	(あおむし)	4-148	青虫
アオムラサキイロニ	青むらさき色に	4-025	青むらさき色
アオムラサキイロニ	青むらさき色に	5-154	
アカイ	赤い	5-122	赤い
アカイ	赤い	5-124	
アカイ	赤い	5-172	
アカイロ	赤色・	6-201	赤色
アカイロ	赤色・	6-215	
アカイロノ	赤色の	6-208	
アカイロリトマスシヲ	赤色リトマス紙を	6-218	赤色リトマス紙

ところで、このような操作で、この「索引編」の最初の4ページ分（上に掲げた17項目を含む317項目）を整理すると、次の50語近くが得られる。これらは、国語教科書では得がたい用語を含んでいる。

開く 間 青色 青色リトマス紙 青い 青虫 青むらさき色 赤い 赤色 赤色リトマス紙 赤インキ
あかり 明るい 明るさ 上がる 上がり始める 上がり方 あきかん 秋 あきばこ 明け方 あける
あげる 朝 朝顔 足 味 あそぶ 当たる 与える 暖かい 暖かさ 暖まる 暖まり方 温める 頭
新しい 辺り 当たり方 あちらこちら 暑い 厚い 厚紙 厚さ 集まる 集める 当てる 後

（引用者注；これらの異なりは、更に整理出来るが、ここでは第一次整理にとどめている。）

本文献は、例示したように、見出し語としての整理ができていない。しかし、本文献を資料として上に少し示したように、第一次整理、そして第二次整理というように順次手を加えていけば、見出し語（頻度、範囲）を導き出すことができそうである。

文献(103) 児童の作文使用語彙 (国立国語研究所98)

国立国語研究所

東京書籍 平成元(1989)年 3 月25日

B 5 判 567ページ

〔目次〕〔刊行のことば〕を省略)

第1章 研究の目的	5ページ
第1節 児童の語彙使用	第2節 語彙に関する先行研究の検討
第3節 本研究の目的	
第2章 調査の概要	11ページ
第1節 調査の構成	第2節 研究の形態
第3節 調査の経過	
第4節 調査の担当者	第5節 研究発表
第3章 調査の方法	16ページ
第1節 調査対象の確定とその収集	第2節 語彙調査システム
第3節 使用語彙資料の構成と語彙表の構成	
第4章 結果 — 語彙表の分析	27ページ
第1節 概括的な把握	第2節 付加情報に基づく分析
第3節 学年の間の変化	
第4節 使用人数	第5節 結果の要約
本表1 作文使用語彙表 — 五十音順表	63ページ
本表2 作文使用語彙表 — 出現度数順表	365ページ

まず、「第1章 研究の目的」に、これまでの「幼児・児童の語彙研究」は、産出語彙、理解語彙、環境語彙、規範語彙の4種類に分類できること、その中の「幼児・児童が自ら話しことば・書きことばの中で使用した」産出語彙の調査を取り上げる趣旨が説明されている。その理由として、産出語彙の調査の語彙資料が少ないこと、その中でも話しことばを対象とした研究が多く、児童期の書きことばを対象にした研究で公表されたものがない、という2点が指摘されている。

次に、「第4章 結果 — 語彙表の分析」の「第5節 結果の要約」の全文を引用しておきたい。

本調査は、地域文集に掲載された2320編の小学生の作文（小学1年～4年は各400編ずつ、小学5・6年は360編ずつ）を調査対象に、 α 単位を調査単位として計量語彙調査を行い、延べ474,243語、見出し語の数20,849の語彙資料を得た。主な結果は以下のとおりである。

- ① 語彙量は学年とともに増加を見せ、停滞・逆転は見られない。
- ② 初出語は、1年生で約4,000語あり、2年生から6年生までのあいだに3,000から4,000まで増加する。初出1年の4,000語が延べの9割近くを占める。
- ③ より多くの学年に共出現する語ほど繰り返し使用される。全学年に共出現する約2,000語が延べの8割以上を占める。
- ④ 6学年を通じて類似した品詞構成比が見られる。しかし初出については、初出の7割は名詞であり、語の増加を名詞が担うことが確認された。
- ⑤ 語種については、延べの8割、異なりの5割が和語であるが、和語は学年が上がるにつれて延べ・異なりとも減少し、漢語が増加する。

- ⑥ 和語名詞が学年とともに減少し、漢語名詞が増加する。また、和語動詞が減少し、混種語動詞が増加を見せる。
- ⑦ 阪本ランクのAランク語は学年とともに減少し、BおよびCランクの語が増加する。出現頻度の高い段階にはAランク語が多いが、低出現頻度の段階ではAが少なくなり、B・Cの占める割合が高くなる。

ここで、「本表1 作文使用語彙表 — 五十音順表」の一部を引用しておきたい。

見出し	表記	品詞	阪本	出現度数						使用人数						注記
				1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	
サシコム	差し込む	動	A 2	1	2	-	2	-	4	1	2	-	2	-	3	動物
サシシメス	指し示す	動		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
サシズ	指図	A 1		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
サシダス	差し出す	動	A 2	-	-	1	-	3	2	-	-	1	-	3	2	
サシツカエル	差し支える	動	B 1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	
サシノベル	差し伸べる	動		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
サシミ	刺身	B 1		-	-	1	5	-	1	-	-	1	3	-	1	
サス	指・刺・差・挿す	動	A 1	16	24	23	15	16	36	12	16	19	13	15	20	
サス	射す	動	A 1	-	1	1	1	-	1	-	1	1	1	-	1	
サスガ		ダ		1	3	-	6	10	11	1	3	-	6	10	9	
サスガ		副	A 1	1	-	3	2	8	1	1	-	3	2	7	1	
サズケル	授ける	動	B 1	-	-	-	1	-	1	-	-	-	1	-	1	
サスル	際る	動	A 1	-	-	1	2	-	4	-	-	1	2	-	3	
ザセキ	座席	A 2		-	4	-	1	3	5	-	2	-	1	3	3	
サソイ	誘い	A 1		-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	1	2	
サソウ	誘う	動	A 1	1	3	2	4	6	4	1	2	2	3	6	4	
サゾカシ		副	A 1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	-	
サソリ		C 4		-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	
サソリザ	サソリ座			-	2	2	-	1	-	-	2	2	-	1	-	
サダメル	定める	動	B 1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	
サツ	札	A 1		-	-	1	3	-	1	-	-	1	1	-	1	
サツエイ	撮影	B 2		-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	-	-	
ザッカ	雑貨	B 1		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
ザッカー		C 1		-	1	-	1	11	13	-	1	-	1	3	4	
サッカーキチガイ	サッカー気違い			-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	
サッカークラブ				-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	
サッカーゲーム				-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
サッカーゴール				-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
サッカーショウネンダン	サッカー少年団			-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	1	
サッカーズキ	サッカー好き			-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	
サッカーブ	サッカー部			-	-	-	-	7	8	-	-	-	-	2	1	

次に、「第4章 結果 — 語彙表の分析」の第1節の「1-4 出現度数の分布」の表「4-9 使用度数の分布」の上半分を引用してみよう。(なお、異なりの累積は引用者が加えたものである。)

使用度数	順位	異なり	延べの累積	異なりの累積
～128	1～518	523	68.64	523
127～60	524～1034	525	78.72	1048
59～23	1049～2036	1053	86.42	2101
22～14	2102～2869	917	89.77	3018
13～9	3019～3821	1099	92.26	4117
8～6	4118～4867	1293	94.12	5410

この表から、出現度数の高い1,000語、2,000語、3,000語、などという活用ができそうである。ただ、上に引用した五十音順表に明かなように、本表には出現度数の合計数が記載されていない。このデータベースが用意されていれば、今後の活用に便利であろう。

児童の使用語彙の大規模な調査は、文字言語、音声言語のどちらの分野も多いとは言えない。その中で、本文献は、児童の文字言語の分野の使用語彙の調査を大規模に行った資料として高い価値を有している。本文献を活用した基本語彙の調査研究が行われていないことが惜しまれる。

文献(104) 小学校教科書漢字別語彙表

国立国語研究所

平成元(1989)年 6 月 (簡易製本)

B 4 判 はじめに等 1 ページ 一覧表332ページ

本文献は、電子計算機で印字したB 4 判の用紙332枚に一枚の凡例等を添えて一冊に綴じた資料である。

まず、最初の 1 葉の「はじめに」全 2 段落構成の第 1 段落の本文を引用しておきたい。

この資料は、文部省科学研究費助成による特定研究 (1)「常用漢字の学習段階配当のための基礎的研究」(1982～1984年度)、一般研究 (A)「漢字情報のデータベース化に基づく常用漢字の学習段階配当に関する研究」(1986～1988年度)の研究成果の一つである。小学校教科書(「国語」を除く 6 教科)に使われている語がどのように表記されているかを、漢字を単位にして整理したものである。

次に、「資料の内容」は、「1. 調査対象」「2. 資料のみかた」で構成されている。その「1. 調査対象」は、算数、理科、社会、図工、音楽、家庭の 6 教科の教科書の異なる語彙を調査対象としたこと、そして、その教科書名及び出版社名、発行年月日がそれぞれ記されているが、ここでは省略する。

次に、「2. 資料のみかた」は、そのまま引用しておきたい。(引用者注；例は削った箇所がある。)

資料はつぎの枠で示した 5 つの項目からなる。									
〈見出し漢字〉〈配当学年〉〈見出し語〉〈出現形〉〈学年・教科別表記形〉									
				1 年		6 年			
				算理社図音		算理社図音家			
研	3	ケンキュウ	研究	-----	(中略)	---	●●●●	---	

ここで、先に本表の最初の 1 ページの一部を縮小して掲げてみよう。

見 出 し 語		出 現 形	1年 算理社図音	2年 算理社図音	3年 算理社図音	4年 算理社図音	5年 算理社図音家	6年 算理社図音家	学年 1 2 3 4 5 6
画 *	アエン	おえん	-----	-----	-----	-----	-----	-○-----	-----○
	アリュウサン	ありゅうさん	-----	-----	-----	-----	-○-----	-----○	-----○
	アイスル	愛する	-----	-----	-----	-----	-----●-	-----○-	-----●●
愛 4	アクシュウ	悪しゅう	-----	-----	-----	-----	-△-----	-----△-	-----△
	アッカ	悪化	-----	-----	-----	-----	-----○	-----○	-----○
	ヨシアシ	よしあし	-----	-----	-----	-----	-○-----	-----○	-----○
擅 *	ワルイ	悪い	-----	-----	-○--○	-●○--	-●○-○●	-●○-○	--○●●●
	アクシュ	あく手	-----○	-----	-----	-----	-----△-	-----△-	○-----△
	ニギリメシ	にぎりめし	-----	-----	-----	-----	-----○	-----○	-----○
圧 5	ニギル	にぎる	-----	-----	-----	-----	-----○	-----○	-----○
	アツバク	圧迫	-----	-----	-----	-----	-●-----	-----○	-----●
	アツエン	圧延	-----	-----	-----	-----	-●-----	-----○	-----●
扱 *	アツエンキ	圧延機	-----	-----	-----	-----	-●-----	-----○	-----●
	アツリョク	圧力	-----	-----	-----	-----	-●-----	-----○	-----●
	キアツ	気圧	-----	-----	-----	-----	-●-----	-----○	-----●
安 3	アツカイカタ	あつかい方	-----	-----	-----	-○-----	-----△	-----△	-----○△
	アツカイヤスイ	あつかいやすい	-----	-----	-----	-○-----	-----△	-----△	-----○△
	アツカウ	あつかう	-----	-----	-○--	-○--	-○--	-○--	--○○○○
安 3	トリアツカイ	取りあつかい	-----	-----	-----	-○-----	-----△	-----△	-----○△
	トリアツカイカタ	とりあつかい方	-----	-----	-----	-○-----	-----△	-----△	-----○△
	アンシン	安心	-----	-----	-●--	-●--	-●--	-●--	-●●●●
安 3	アンセイ	安政	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----○
	アンゼン	安全	-----	-----	-●--	-●--	-●--	-●--	--●●●●
	アング	安打	-----	-----	-----	-----	●-----	-----	-----○
フアン	アンテイ	安定	-----	-----	-----	-----	-●-----	-----○	-----●
	フアン	不安	-----	-----	-----	-●-----	-----○	-----○	-----●○

さて、この例示に基づいて説明を引用することにしたい。

- ① 「配当学年」の「＊」は、小学校の学習漢字でないことをあらわす。
- ② 「見出し語」の「S」は数詞をあらわす。
- ③ 「出現形」は、教科書で用いられている表記形を、1つないし複数の表記形で代表させたものである。
- ④ 「学年・教科別表記形」は、教科書でもちいられている実際の表記形を記号であらわしたものである。
- ⑤ 記号があらわす内容は以下のとおりである。
 - ：かな（ひらがな・カタカナ）のみでかかれている。
 - △：「見出し漢字」の部分がかな表記のまぜがき。
 - ▲：「見出し漢字」の部分が漢字表記のまぜがき。
 - ：漢字のみで書かれている。
 - ◎：「出現形」にルビがついている。
- ⑥ 「見出し漢字」「出現形」「学年・教科別表記形」の3つをくみあわせてみることによって、実際の表記形がわかるようになっている。（以下、省略。）

本文献から、次の事項を導き出すことができる。

- (1) 本文献の見出しに掲げられている漢字は、①学年別配当漢字、②それ以外の常用漢字、③表外漢字の3種で、その内訳の説明はない。試みに「ア・イ」で始まる全8ページ分の音訓の漢字は、次のように整理される。

- ① 学年別配当漢字 — 愛・悪・圧・安・暗・案 以 位 囲 委 意 易 異 移 胃 衣 遺
医 域 育 — 印 員 因 引 飲 院
- ② 常用漢字 — 亜・握・扱 維 緯 違 井 稲 芋 陰 隠
- ③ 表外漢字 — 闇 夷 （「闇」は平仮名表記、「夷」は「征夷大將軍」として）

- (2) 例えば「育」は、次の見出し語として使用されている。漢字仮名交じりの表記で提示してみよう。

育児 育びょう いくびょう器 生み育てる 教育 飼育 育ち そだちかた 育ちにくい そだちはじめる 育つ 育てる 体育 体育館 体育着 保育所

これらの各語は、「育」が3年配当の漢字であるので、四年から漢字表記になり、音「イク」を用いた見出しは例外1例を除いて、すべて4年以上に出ている。例えば「体育 —」（体育・体育館・体育着）は、学年順に掲げてみると「—○—●●—」のようになる。

- (3) 本文献の全「出現形」数を数えてみたところ、12,581語であった。その「出現形」の中で、見出し語が同じもの（例えば、「暗算」と「あん算」、「糸電話」と「いとでんわ」、「桜」と「サクラ」など）は、253語を数える。そこから、本文献の見出し語は、これら253語を差し引いて、12,328語であるということが出来る。しかし、例えば、「扱」の見出し語「アツカイカタ・アツカイヤスイ・アツカウ・トリアツカウ・トリアツカイカタ」を、基本語彙の見地から整理してみると、「アツカウ」1語に収まる。そういう意味で、本文献の「見出し語」12,000語強は活用するためには更に整理が必要である。

本文献は、小学校の各教科の教科書に、どういう漢字を基にする語が使用されているか、また、小学校の漢字をどう考えるか、などの問題を検討する上で重要な意味をもっている。

文献(105) 日本語教育映像教材 中級編 伝えあうことば 2 語彙表

国立国語研究所

大蔵省印刷局 平成3(1991)年3月30日

B5判 246ページ

〔構成〕

『日本語教育映像教材 中級編』について

1. 作成の経緯
2. 概要
3. 内容
4. 『語彙表』について

日本語教育映像教材 中級編 語彙表

国立国語研究所日本語教育センター日本語教育教材開発室では、次の3種の日本語教育用映像教材を作成してきている。そして、それらの映像教材を有効に活用するために、そのシナリオ集及び語彙表を作成している。それらの語彙表は、本文献を含めた3冊で、その語彙の内訳は次の一覧表のとおりである。

文献(96) 日本語教育映画 基礎編 総合語彙表 昭和61(1986)年

文献(105) 日本語教育映像教材 中級編 伝えあうことば 2 語彙表 平成3(1991)年

文献(120) 日本語教育映像教材 初級編 日本語でだいじょうぶ 語彙表 平成9(1997)年

文献番号・略称	見出し総数	自立語総数	固有名詞	形式名詞	接 辞	付属語	補 助	空見出し
(96) 基礎編	1,230	1,008	66	4	30	104	13	5
(105) 中級編	1,863	1,501	90	12	44	92	3	121
(120) 初級編	1,339	1,089	80	3	41	64	14	48

本文献は、他が基礎編、初級編であるのに対して、中級編としての意味をもっている。なお、本文献の名称は、表紙等に表示されている「日本語教育映像教材 中級編 関連教材 伝えあうことば 2 語彙表」の「関連教材」を省いている。これは、「映像教材に関連する教材」の意味である。

さて、目次の「2. 概要」「3. 内容」から主要な事項を抜き書きしておきたい。

2. 概要 『日本語教育映像教材 中級編』は、日本語を母語としない学習者が日本語を学ぶための中級用映像教材で、ビデオテープに録画された映像素材がその本体となっている。全体は4ユニットから成り、それぞれのユニットは、5分程度の長さのセグメント6つで構成されている。

3. 内容 国立国語研究所が以前に制作した『日本語教育映画 基礎編』（全30巻）が基本文型の学習を目的としていたのに対して、この『中級編』は、学習者のコミュニケーション能力を高める学習に役立てるために、ことばの働きや聞き手に対する働きかけといった各種の発話機能をテーマとして構成されている。

ユニット1 初めて会う人と — 紹介・あいさつ —

ユニット2 人に何かを頼むとき — 依頼・要求・指示 —

ユニット3 人のことばにこたえて — 承諾・断りと注目表示 —

ユニット4 意見の違う人に — 問いかけ・反論 —

次に、「4.『語彙表』について」は、「この『語彙表』は、『中級編』のすべてのせりふで用いられた語・表現を五十音順に配列し、それが用いられた文の全体とともに示したものである。」と述べた上で、次に引用するように、具体的に説明を加えている。

〔表示の形式〕(引用者注；全7項目中の2項目だけを引用する。)

○この語彙表では、シナリオに含まれるすべてのせりふを、原則として単語に分割し、そのひとつひとつを見出しとして、それが用いられたせりふの文とともに示している。

○各見出し項目は、はじめに見出し語をかなで示し、続いて、同音語などから区別するための判別情報が必要な場合、それを付している。判別情報は、品詞名などの場合は〔 〕、意味内容などの場合は〔 〕を用いて示されている。(引用者注；以下に続く「品詞などの略号」などの記述は省略。)

〔見出しのたて方〕(引用者注；全6項目中の2項目だけを引用する。)

○原則として、語が見出しとされている。すなわち、複合語・派生語も、原則としてその全体が見出しとしてたてられている。

○形容動詞は語幹とグ/デスを切り離し、それぞれ見出しとしている。また、漢語動詞など、名詞的な語幹にスル、デキル等が接続してできる動詞は、語幹とスル、デキル等をそれぞれ見出しとしている。

〔見出し項目内部の分類〕

○用例数の多い見出し語については、用法の種類ごとにその内部を分類して示したものがある。

○分類の基準となる形や、慣用句などの決まった形を、各用例の文番号の前に()を用いて示した場がある。

○用例数が極端に多い機能語などについては、いくつかの典型的な用例を挙げた後、その他の用例については本文の掲載を省略し、文番号のみを列挙したことがある。省略された原文を知る必要がある場合は、『シナリオ集』を参照されたい。

次に、語彙表から「ばっかり・はっきり・はつげん」の箇所を引用してみたい。

ばっかり

seg.14④-085 こればっかりは。

seg.19②-023 あらあ、新人だなんて、うそ**ばっかり**。

はっきり

seg.14③-057 なんか、仕事のこときいても、はっきりしないし。

seg.22②-056 おかげさまで、なんとかイメージもはっきりしてきましたようで。

はつげん 発言

seg.24④-054 言語学のお立場から、新しく形づくられる人間関係についてお話いただきましたが、この敬語ということについて、他の先生方から、ご**発言**がございましたでしょうか。

本文献の語彙表は、シナリオにおけるせりふの用語を調査した内容である。シナリオにおけるせりふは、十分に計算された話し言葉とすることができる。つまり、話し言葉としての性格と書き言葉としての性格を合わせ持っている。

本文献は、他の2文献と合わせて、基本語彙を検討する上で、一つの位置を占めるものと思われる。

文献(106) 日本語初級教科書によく使われる語 (『日本語教育機関におけるコース・デザイン』)

社団法人 日本語教育学会

凡人社 平成3(1991)年5月25日

A5判 373ページ

見出しに掲げた文献「日本語初級教科書によく使われる語」は、『日本語教育機関におけるコース・デザイン』の「まえがき」に、「掲載した資料は、日本語教育学会のコース・デザイン研究委員会が、文化庁の委嘱を受けて行った日本語教育機関での調査に基づいている。この研究は昭和61年度から63年度の3年間にわたるもので、すでに3冊の報告書として発表されている。本書は、それらの報告書をまとめ、いくらか手を加えたものである。」という説明が行われている。

ここでは、目次から関係する部分だけを抄出して掲げる。

〔第3章〕シラバス・デザイン

1. 構造シラバス

3) 語彙

(72～73ページ)

資料3 日本語初級教科書によく使われる語

(106～112ページ)

まず、「3) 語彙」の第2段落以下の本文を全文引用しておきたい。なお、引用に際して、内容ごとに行空けを行っている。

今回の調査対象となった5機関は、大学進学の前備教育を主としているところと、大学進学者もいるが一般の目的の人も多いところがあった。また職業上の必要から日本語を習う人が多いところもある。各機関では、このような学習者のニーズに合わせて教科書を作成ないし選択しているわけである。

ここでは、もしも初級に共通な語があるとすればどんな語か、そしてその数はどのくらいかを知るためのひとつの方法として、5機関で使っている教科書をそれぞれひとつずつ選んで語彙調査を行った。

扱った教科書は次の5種類である。

- | | |
|--------------------------------------|--------------------|
| 1. 『日本語Ⅰ』 | (国際学友会日本語学校) |
| 2. 『COMMUNICATION JAPANESE STYLEⅠ・Ⅱ』 | (言語文化研究所附属東京日本語学校) |
| 3. 『楽しく学ぶ日本語』 | (インターカルト日本語学校) |
| 4. 『日本語Ⅰ』 | (東京外国語大学附属日本語学校) |
| 5. 『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』 | (文化外国語専門学校) |

これらの教科書に出てくる語を調べたところ、数の上では次のような結果が出た。

5種類の教科書に共通の語	370語(11.9%)
4種類の教科書に共通の語	336語(10.8%)
3種類の教科書に共通の語	338語(10.8%)
2種類の教科書に共通の語	587語(18.8%)
1種類のみにある語	1490語(47.7%)
計	3121語

各教科書の編集意図による違いが、1種類のみにある語の多さとなって表れているのだと思われる。

文献(107) 品詞別・レベル別 1 万語語彙分類集

専門教育出版編集部テスト課

専門教育出版 平成 3 (1991) 年 10 月 30 日

B 5 判 545 ページ

〔目次〕(「はじめに」を省略)

凡例	5 ページ
第一部 1 万語五十音順原票	11 ページ
第二部 品詞別・レベル別語彙分類表	237 ページ
名詞 — する 動詞 い形容詞 な形容詞 接統詞	
副詞 擬声・擬態語 その他 カタカナ語	(各ページ数省略)

まず、「凡例」の冒頭に掲げられている本文献刊行の趣旨を引用しておきたい。

本書は専門教育出版主催の『日本語学力テスト』のレベル A, B, C それぞれの基準を定めるための内部資料であり、公表を前提として企画されたものではない。ただし、本書のように、一つの語彙を品詞別にレベル設定したものは他に類例を見ないため、その重要性に鑑み、刊行に踏み切ったものである。

この記述は、全 4 段落で構成される「はじめに」の次に引用する第 3 段落の本文と強く関係している。

すでに、日本語教育の基本語彙に関する資料は存在しておりますが、それらはいくまでも統計的な資料であって、教育の現場からはなお隔たりがあると判断せざるを得ません。日本語能力試験すら、結果の詳細について満足に公表されていない現状にありますので、あえて専門教育出版編集部テスト課の内部資料を世に問う次第です。

次に、「凡例」の「II 作業手順、方法」の「1)」の記述を引用しておきたい。

専門教育出版編集部テスト課に、現場の日本語教育専門家からなる『日本語学力テスト』基準検討委員会を設け作業にあたった。また随時同テスト作問委員会も作業に加わった。二次にわたって相互の意見を交換し、最終的には基準検討委員会が決定した。

本文献は、次に引用するように、語彙選定基準資料として、4～5 種の文献を取り上げている。なお、本報告で紹介している文献に関しては、文献番号及び書名を提示するにとどめる。

2) 語彙選定基礎資料として次の文献を取り上げた。

- ・文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』
- ・文献(87)「語彙標準表」
- ・文献(49)『分類語彙表』
- ・『旺文社国語辞典』(旺文社)(品詞のチェック資料として使用)
- ・専門教育出版編集部日本語課並びにテスト課の各資料(各種日本語教科書、問題集、辞・事典など)

※既に、上記資料において語彙選定の一次作業は成されていると判断し、本書編纂に当たっては、まず基礎資料をチェックすることから始めた。(中略)なお、基礎資料において、種々の辞典や事典については調査されているため、品詞のチェック資料として、基本語彙を含むごく一般的な辞書として「旺文社国語辞典」を任意に選択した。

次に、1万語の選定の作業手順は、次の①～③に始まり、作問委員会のチェックや作問用資料として使用したりして、最終の⑦まで続けられる。(④～⑥の手順は、引用を省略する。)

- ① 上記2)の資料に基づき、基準検討委員会が基本語彙約1万語を選定。
- ② 選定された語彙を上記『旺文社国語辞典』に基づき、各品詞に分類。
- ③ 品詞分類された語彙を各レベルに分類。〔第一次分類〕
- ⑦ 第二次チェックをもとに基準検討委員会が全体を再検討、最終稿を作成した。

次に、「第一部 1万語五十音順原票」は、次の形式で1万語が提示されている。

No.	レベル	読み	漢字	名詞	動詞	い形容詞	な形容詞	接続詞	副詞	擬声・擬態	その他	文化庁	国研
1	C	あ									1		6
2	B	ああ							1		1	3	2
3	C	あい	愛	1	1							3	2
4	B	あいかわらず	相変わらず						1			3	6
5	C	あいさつ	挨拶A*	1	1							3	2
(中略)													
10086	A	わん	〈腕〉	1									
10087	A	わんぱく	〔腕白〕	(1)			1						
10088	B	ワンピース		1									6
10089	A	わんりょく	腕力	1									

なお、レベルAは日本語能力試験1級を、レベルBは2級を、そして、レベルCは3級をそれぞれ目指す学習者を想定している。例えば、No.5「あいさつ」の「漢字」の欄には「挨拶A*」とある。その「A」は漢字で「挨拶」と表記すると、レベルAになるという意味である。そして、「*」は、その「挨拶」という漢字が常用漢字表に含まれていない表外字であることを表している。また、「〈腕〉」の括弧は表外漢字であることを、「〔腕白〕」は熟字訓の類であることをそれぞれ表している。その名詞欄の「(1)」はそのレベルの妥当性を欠くことを表す。

次に、「第二部 品詞別・レベル別語彙分類表」は、「構成」に示したように、「第一部 1万語五十音順原票」を品詞及びレベル別に分割して提出した各一覧表である。

本文献は、日本語能力出題基準の公表を受けて、『改訂 品詞別・A～Dレベル別 1万語語彙分類表』(1998年7月29日初版)と版を改められた。その改版では「700余りの新規登録があり、630弱の項目が旧版から除かれ」た。また、本文献の1万語に入っていないくても文献(113)の「日本語能力試験出題基準」1級から4級に含まれる語は、「No.」を付さない形で掲げられている。

これまで、1万語以上を提示した基本語彙の文献としては、文献(40)『教育基本語彙』及び文献(49)『分類語彙表』の2文献しかない中で、本文献が刊行された意義は小さくない。

文献(108) 児童作文の語彙に関する研究 ― 語彙表 ― (『愛知教育大学研究報告』第41輯 (人文科学))

中田敏夫

愛知教育大学 平成4(1992)年2月20日

B5判 11～27ページ

本文献は、「従来の研究の中で、児童の実際に使用した語彙の全資料を提示した」文献が極めて少ないことから、「他の研究者が比較対照」できる児童作文語彙資料を提示している。その作文は「1987年7月(夏休み直前)、石川県石川郡美川町立湊小学校(実施児童総数268人)、同美川小学校(実施児童総数427人)の2校の全校生徒(695人)を対象に実施して得」たものである。

筆者は、作文を書かせる前に、次の4項目の指示を与えている。その本文を引用しておきたい。

- 1 テーマの違いにより生じる文体上の差を防ぐため、「ほくのゆめ」「わたしのゆめ」という統一題目での課題作文にする。
- 2 分量としては3年生以上は四百字詰め原稿用紙1枚を、1・2年生は特別に用意したます目の大きい百字詰めの用紙1枚を目安とする。ただし、それにこだわらず、書けるものは何枚でも書いてよいことにする。
- 3 作文である以上読み手を想定することになるが、読むのは全児童が同じ程度の改まりの気持ちをもって叙述するであろう「担任の先生」のみであることを児童に知らせる。
- 4 資料の統一性を保つため担任の先生は作文を書かせるに当たって特別な指示(例えば、丁寧に書くこと、できるだけ大きな夢を書くこと、など)を与えないことにする。

次に、語彙資料については、次のように説明している。

品詞別、頻度順に示してある。品詞認定については三省堂国語辞典第三版(1982年刊)に概ね準拠しているが、複合名詞を中心に筆者の判断によったものもある。また、本研究の視点にことばの男女差があるため男女別の形で示してある。

筆者は、この語彙表の統計的考察を「児童作文の語彙に関する計量的研究」(『国語国文学報』第52集 平成6(1994)年3月 愛知教育大学国語国文学研究室)にまとめている。そこから、取り上げる項目等を絞ってみたのが、次の表である。

		1年	2年	3年	4年	5年	6年	総数
全 体	異なり語	229	666	834	1,194	1,596	1,217	3,120
	延べ語	880	2,915	3,921	6,389	8,999	6,108	29,212
初 出 語	異なり語	229	523	476	659	792	441	3,210
	延べ語	880	1,025	741	986	1,201	606	5,439

ここに示すように、全体の異なり語数は3,120語である。

本文献は、文献(89)「作文の語彙」(『文教国文学』14号)と対比させるかたちで語彙及びその数量などを取り上げている。対比的記述に徹する意向が強いために、本文献が独立しがたい印象を与えるほどである。しか

し、この作文の用語分析の対比は面白い意味や問題点を提供している。

次に、この一覧表の形式を示すために、接続詞の表のすべてを掲示してみよう。なお、外枠は引用者が付けたものである。また、「計」欄の数字を改めたところがある。

接続詞	1M	1F	2M	2F	3M	3F	4M	4F	5M	5F	6M	6F	計
そして	10	9	16	31	26	39	42	34	58	16	41	9	331
でも	0	4	3	28	9	29	31	51	31	74	22	35	317
だから	2	0	2	7	10	13	15	21	19	13	8	9	119
それに	0	1	2	8	16	9	19	13	11	13	6	6	104
それから	1	0	1	4	6	3	2	7	6	6	2	3	41
だって	1	2	0	9	2	2	4	12	0	4	0	1	37
だけど	0	0	1	1	1	1	7	4	4	6	8	3	36
それで	0	1	1	3	1	1	2	3	6	2	1	3	24
それとは	2	1	3	1	1	0	1	1	3	4	1	5	23
そしたら	0	0	0	2	3	2	8	2	2	0	0	0	19
けど	0	0	0	0	0	0	6	3	3	2	1	3	18
また	0	0	0	0	1	0	1	0	5	2	1	3	13
それでも	0	1	0	0	0	1	1	1	2	3	0	1	10
それか	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	1	1	6
なぜなら	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1	0	1	7
けれど	0	0	0	0	0	0	1	1	2	3	0	0	7
しかし	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	3	0	5
そうしたら	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	3
で	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	3
なぜって	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3
つぎに	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	3

頻度 2 2 M ; 2 F そうして 3 M ; 5 M どうしてって、 3 M ; 4 F そうすれば

4 M ; 5 F が・けれども・とはいっても 5 M ; んで

(引用者注：「頻度 1」は省略。)

この表から、次のような事項を引き出すことができそうである。

- ① 中学年で使用率が高くなる接続詞として、「そして」「だから」などがある。
- ② 高学年で使用率が高くなる接続詞として、「また」「なぜなら」「しかし」などがある。
- ③ 高学年で使用率が減少する場合、女子と男子では 1 学年ほどのずれが認められる。

本文献は、少し検討してみたように、それぞれの語の学年発達などを確かめる上で貴重な資料といえることができる。

なお、筆者は、本文献を資料として「児童作文の語彙に関する研究 2 — 『分類語彙表』相の数 — 」(愛知教育大学研究報告 第42輯)、「児童作文の語彙に関する計量的研究」(『国語国文学報』第52集)などの考察を加えている。

文献(109) 簡約日本語の創成と教材開発に関する研究

国立国語研究所日本語教育センター第二研究室分室

第1版 平成4(1992)年7月 第2版 平成6(1994)年3月

B5判 まえがき1ページ 目次1ページ 本文217ページ(第2版)

〔目次〕(以下、全て第2版を引用する。まえがき、目次は略す)

I 研究の目的

II 研究の方法

研究の手順

ステップI～ステップXXについて

以上のものの説明

語彙について

資料1 調査した現行日本語教科書一覧(全17種)	2 各教科書の初めのテキスト及び文法説明一覧
3 文法事項・文型のデータバンク(サンプル)	4 簡約語彙登録カード及びKWIC資料
5 教科書に現れた場面の一部と用例	6 語彙の意味分布
7 『JAPANESE FOR TODAY』の文型一覧	8〔暫定〕簡約日本語語彙表
9 簡約日本語第一次千語の分類語彙表	10 ステップI～ステップXXの項目一覧

まず、「まえがき」全4段落中の第3段落の本文を引用しておきたい。

実は1992年7月に「簡約日本語の創成と教材開発に関する研究」というタイトルで、国立国語研究所日本語教育センター第二研究室分室の名により小冊子を出した。今回のこの報告は分量は約二倍となって、また前の報告をすべて含んでいるので、前回の報告はその任務を終えたものとする。

次に、「I 研究の目的」の全文を引用しておきたい。

国際共通語としての日本語を世界により広く進めるためには日本語のむずかしい点を取り払いエッセンスとしての日本語を創り出す必要がある。これを「簡約日本語」と称する。本研究はこの「簡約日本語」を創成し、その教材化を図ることを目的とする。

このような考え方から、学習時間のきわめて少ないことが定まっている人に対して最初の段階からこの「簡約日本語」による学習を開始する。また学習時間の十分な人は、これを出発点として、ステップを重ねていって最終的には日本人の日本語と同じものを目指す。この場合も、「簡約日本語」から出発したものは全過程を「簡約日本語」と称することとする。

具体的には次の三原則によって作成中である。

- ・文法及び文型はできるだけ基本的なもののだけを取り上げることとし、現行の初級日本語教科書の中から基本的なものを選び出す。
- ・語彙は第一次千語、第二次千語、計二千語とする。そのうちの多義語について、どの語義の使用度が高いかを調査しそれぞれの語の基礎的な意味がどれであるかを原則として三義までを決定し登録する。
- ・上の結果作成された語彙表及び文法書をもとに、より覚えやすく、より習いやすい日本語教材(原稿)を作成する。

次に、「II 研究の方法」の頭に置かれている「研究の手順」では、(1)基本文型の決定、(2)文法の決定、

(3)語彙の決定、(4)教材作成、という4種の領域にかかわる研究手順が、それぞれ「手順」「データソース」「産出される資料」に分けて提示されている。ここでは、その「(3) 語彙の決定」に焦点を当てて紹介する。その「語彙の決定」の「手順」の説明を引用しておきたい。

- ①暫定的に選出した2,000語*のうち多義語について意味の設定**をし文脈付き用例を採集・分析する。
- ②動詞と形容詞について実際の話しことば・書きことばではどの活用形の使用度が高いかを調査する。
- ③研究の手順(1)－①、(3)－①、②などから得られたデータを総括し一語一語の登録カード(データバンク)を作成しKWICの原データとともにファイリングをする。
- ④多義語の意味を決定する。

この説明の①に付けられた注記2項目も引用しておきたい。

*暫定2,000語選定のために参考とした文献は、『日本語教育基本語彙七種比較対照表』(国立国語研究所, 1982),『分類語彙表』(資料集6, 1964),『基礎日本語』(土居光知, 1933)を主とし、他各種国語辞典類である。

**多義語についての意味の設定(暫定)

暫定2,000語の一語一語について、『新明解国語辞典 第3版』『岩波国語辞典 第4版』『講談社国語辞典 新版』から意味説明部分をカード化した。これに検討を加えながら、簡約日本語としての意味の刈り込みを行っていく。

暫定2,000語のうちの多義語 822語 (内訳) 第一次千語 455語 第二次千語 367語

次に、IIの最後に置かれている「語彙について」の本文を、2項目に整理しておきたい。

- 1 この二千語は、Basic Englishの850語、VOA放送Special Englishの1,400語より多い。
- 2 語数を制限しても、多義語をそのままにしていたのではむずかしさは残る。そこで、一語について最大三義ということに制限して、最初の二千語については決めてしまうことを考えている。

「資料8〔暫定〕簡約日本語語彙表」は、次の形式で、第一次千語、第二次千語に分けて提示されている。

	見出し	意義	品詞1	品詞2	語種	分類番号
71	痛む	3	動詞	名詞	和語	2300
72	イタリア		地名		外来語	1259
73	一〔いち〕	2	名詞		漢語	11950
74	いつ〔何時〕	1	名詞		和語	11611
75	いっぱい	2	副詞	形容動詞	漢語	3195

次に、「資料9 簡約日本語第一次千語の分類語彙表」が掲げられている。その表から、この簡約日本語の特徴の一つに、「2 人間活動 — 主体 —」を指摘することができる。すなわち、アジア、アフリカ以下、北九州、名古屋までの地名等が約50語、伊藤から鈴木までの姓が15語選定されている。

本文献は、野元菊雄氏が昭和63(1988)年に取り組みはじめた調査研究の成果で、頭に「暫定」を掲げてあるように、現在もなお調査・検討を加え続けている。その完成が待たれる研究である。

文献(110) 日本語指導教材 にほんごを まなぼう 教師用指導書 (以下「1」と略称)

日本語指導教材 日本語を学ぼう 2 教師用指導書 (以下「2」と略称)

文部省

ぎょうせい 「1」平成4(1992)年9月 「2」平成6(1994)年9月

B5判 350ページ

B5判 344ページ

〔目次〕 「1」(Vを省略する)	「2」
I はじめに	I はじめに
II 「にほんごを まなぼう」を使った日本語指導法	II 「日本語を学ぼう2」を使った日本語指導法
III 各課別指導事項	III 各課別指導事項 (第1課～第36課)
IV 語彙等インデックス	IV 語彙等インデックス
1 50音順語彙インデックス	
2 品詞活用別語彙インデックス	
3 新出文型インデックス	

まず、『にほんごを まなぼう』『日本語を学ぼう2』2冊の編集の目的・意図を紹介しておきたい。

「1」の『にほんごを まなぼう』は、次の「ねらい」で編集されている。

この教材は、日本語を第一言語(母語)としない外国人児童に対する導入段階の日本語教材、すなわち、日本語が全く話せない児童に学校生活で必要とされる最も基本的な日本語を指導するための教材である。学校生活場面に軸に全体が構成されているので、児童が日本の学校生活の様子を理解し、それに慣れるようにするための適応指導教材としての役割も合わせ持っている。

小学校の高学年の児童を念頭において作成したが、発達段階に応じて話題や表現を修正すれば、小学校低学年でも中学校でも使えると思われる。指導時間は100時間程度を目安としている。

次に、続いて編集された『日本語を学ぼう2』は、次の「ねらい」で編集されている。

『日本語を学ぼう2』は、小学4年までの算数・理科・社会の学習に必要な語彙や表現を中心にまとめられている。ただし、社会については、算数・理科と比べて、教科で扱われる範囲が広く、必要とされる語彙が多いといった理由から、「近所のようす」「町のようすと地図」といった身近な題材を極めて限定的に取り上げるに止めてある。

まず、「1」の『II にほんごを まなぼう』を使った日本語指導法の「2 日本語指導における指導のポイント」の「(4) 語彙」全2段落の第1段落の本文を引用しておきたい。

音声や文法と違って、語彙、いわゆる単語は数が非常に多いのが特徴である。そこで、日本語教育でも他の外国語教育の場合と同様に、特に重要度の高い基本的な単語を基本語彙として選定し指導することとしている。外国人児童が学ぶべき語彙を標準化したものはまだないが、この教材では学校生活を送る上で基本的に必要な語彙約920語を学校生活場面に応じた会話や例文で提示している。

また、「2」の「(4) 語彙の指導」には、次のように記述されている。

「日本語を学ぼう2」では、「にほんごを まなぼう」で学習した基本的な生活語彙の定着を図る一方、

学習言語能力を伸ばすための基礎となる語彙，教科内容に必要な語彙の習得が重要となる。

本教材では，算数・理科・社会の3教科の学習で重要と思われる語彙を精選している。この中でも使用頻度が高く，使用範囲の広い語彙をできるだけ多く身につけることが大切である。

さて，「2」の「Ⅳ 語彙等インデックス」は，次の5種の索引で構成されている。

- 1 50音順新出語彙対訳リスト
- 2 品詞別語彙インデックス
- 3 漢字インデックス
- 4 文型インデックス
- 5 「にほんごを まなぼう」「日本語を学ぼう2」50音順語彙インデックス

ここでは，「1」及び「2」の全語彙を名詞，動詞，形容詞，形容動詞，副詞，接続詞，指示詞，助詞，表現，付属語の10種に分けてそれぞれの掲載課及び掲載ページ数を掲げた「2 品詞別語彙インデックス」の「名詞」の最初の部分を引用してみよう。

語 彙	掲 載 課	語 彙	掲 載 課
(あ)		(い)	
あいさつ	I (1)	いえ	I (12), II (8, 9, 17, 19, 22, 26, 30, 33, 35)
あいだ	I (12), II (12, 18, 19, 20, 33)	いか	I (32P)
あお	I (3), II (20)	いき(息)	I (6)
あか	I (3)	いきおい	II (33)
あかぐみ	I (31)	生き物	II (18)
赤ちゃん	II (19)	いくつ	II (4, 7, 9, 16)
あかり	II (23)	いくつか	II (10)
あがり	I (12P)	いくら	I (33), II (6, 8, 21, 24)
あき	I (29), II (17, 18, 36)	池	II (16, 18)
空かん拾い	II (36)	いけん	I (27)
アゲハ	II (11)	石	II (9, 33)
あさ	I (1), II (17, 34)	石だん	II (22)
あさがお	I (24), II (1)	いす	I (3, 15)
あさのかい	I (12, 13)		

次に，これら2冊に取り上げられている語数は，次のように整理することができる。

教科書	収録語概数
『にほんごを まなぼう』	920
『日本語を学ぼう2』	1,300
合 計	2,220

ここに取り上げられている各教科の用語は，外国人児童のためだけでなく，日本の国語教育に重要な意味をもつように考えられる。

なお，『日本語指導教材 日本語を学ぼう3 教師用指導書』（平成7(1995)年8月 ぎょうせい）が刊行され，算数・理科・社会科各教科専門用語約616語を「1」及び「2」と同様の形式で提示している。しかし，『日本語を学ぼう3』の用語は文節単位で提示されていて，活用語は終止形を見出しに掲げる方針の本文献2冊とは取扱いが違っている。整理が十分でないので，本報告書では取り上げない。

文献(111) 絵本の語彙

中曽根仁・川又瑠璃子

国立国語研究所 平成6(1994)年3月

A5判 207ページ

〔目次〕〔まえがき〕〔引用・参考文献〕〔調査絵本リスト〕等は省略)

調査のあらまし 1 ページ

調査の目的 調査の手順 調査単位

語彙量の分析 8 ページ

1. 異なり語と延べ語の使用度数の分布 2. 品詞別語彙量 3. 語種別語彙量

4. 出現話数と頻度数 5. 頻度の高い語の意味分類 6. 結果の要約

絵本の語彙の特徴 43ページ

1. 使用頻度の高い語 2. 絵本の外来語 3. 絵本の副詞 4. その他の特徴

語彙表 64ページ

本文の内容を概観するために、「語彙量の分析」の「6. 結果の要約」の全文を引用する。(なお、「項目の末尾には例えば「8 ページ参照」といった注が施されているが、ここでは省略した。)

- ・ 調査対象絵本 138冊 全144話
- ・ 見出し語総数 異なり 6,709語 延べ 70,187語
- ・ 異なり全体55.2%は度数1・2の低頻度語であり、延べ全体の53.3%は度数50以上の高頻度語だ。
- ・ 品詞別では 連体詞 代名詞 などともに語彙量の少ないものの使用率が高い。
- ・ 分類語彙表による分類で他の調査とくらべてみると、児童用のものは大人のそれに比べて名詞の類が少なく、形容詞の類 その他の類が多い。中でも絵本の語彙はとりわけ動詞が多いのが特色だ。
- ・ 語種による分類では使用頻度の高いものほど和語が多い。
- ・ 混種語のうち 漢語が組み合わさるものが86.2%もあった。
- ・ 出現話数 全144話 出現話数の最高は137話「いる」で、以下、する(129話) ゆく(128話) くる(125話) と続く。
- ・ 出現話数と使用頻度をクロスしてみると1話対1回以上のものが多い。^(ママ)
 主題によりその話だけにしか扱われなかった語であるが、なかでも登場人物名や主人公の動物につけられた名前が多い。日本語ではそれが何か、だれかがはっきりしている場合、主語を省略すること多いが、絵本では、文の長さが短いこともさることながら「だれ」の部分も重要なのか、省略されずにくりかえし使われることが多いように見受けられた。
- ・ 頻度が高い語の意味分類では、抽象的関係の語が多い。次に精神および行為の語、人間活動の主体とつづく。
- ・ 複数の分類番号を持つ語については用例をチェックしてみると次のようであった。

*なくなる	滅亡	23	*やさしい	易	1
	死亡	0		優	21
関連語	「死ぬ」	27	*とる	除去	14
*あげる	上下	49		所有	100
	授受	113			

以上、「結果の要約」の全文を提示したが、このように140冊近い絵本の語彙を分析し、異なり語として6,700語余りを提示している資料はまだ刊行されていない。なお、参考目録に従って選定した140冊の絵本の書名は巻末に提示されている。翻訳絵本がその半数を超えている。そのことが本文献『絵本の語彙』の特徴を形作っていると言えよう。

次に、「3. 語種別語彙量」の表5「品詞別語種分類」を引用しておきたい。

異なり語数	和語 4586	漢語 884	外来語 372	混種語 867
名詞 4041	2027	857	372	740
代名詞 58	52	2		4
動詞 1528	1432			96
形容詞 164	154			10
副詞 746	713	23		10
連体詞 16	15			1
接続詞 37	37			
感動詞 119	111	2		6

この表から、語種では和語が多いが、漢語も少なくない、品詞では名詞が多いが、動詞、副詞も少なくないなど、いくつもの特徴を見ることができる。この漢語の例として、次の表が用意されている。

漢語の例							
名詞	今度	信号	新聞記者	大活躍	りんご	など	857語
代名詞	諸君	僕				の	2語
副詞	一体	早速	始終	丁度	全然	勿論	など 23語
感動詞	失敬	南無三宝				の	2語

語彙表は、次に示す構成になっている。(語彙表の2ページ目の最初の部分を引用しておく。)

見出し	品	種	延べ	話数	備考
あき(秋)	名	和	13	10	
あきあきする	動	和	1	1	
あきかん(空き缶)	名	混	4	2	
あきねずみ(秋ねずみ)	名	和	1	1	
あきばこ	名	和	4	1	

本文献は、五十音順表だけであるので、使用に当たっては各種の操作が必要である。全体として、6,700語余りが提示されているが、先に指摘したように、翻訳絵本が半数を超えているので、特殊な幼児語や俗語、地域語が少なく、共通語に近い語句が多くなっている。

文献(112) 教科語彙一覧・学校生活語彙一覧

(『帰国生はこうして学ぶ ― 帰国子女教育学級15年のあゆみ ― 』)

お茶の水女子大学附属中学校

お茶の水女子大学附属中学校 平成 6 (1994) 年11月18日

B 5 判 193ページ

お茶の水女子大学附属中学校の教官が、平成 4 (1992) 年から平成 6 (1994) 年までの 3 年間、調査研究を行って、帰国子女の未学習領域、未学習事項の診断に用いる語彙表を作成した。

特に語彙調査については、次の構成になっている。

1. 語意調査の内容と結果

- (1) 教科語彙調査の目的と内容
- (2) 教科語彙調査の分析
- (3) 学校生活語彙調査
- (4) 帰国生の言語教育における学習用語の位置づけについて

まず、「(1) 教科語彙調査の目的と内容」から引用してみよう。

<目的>

- ・小学校基本語彙についての理解度を図ることで、未学習領域、未学習事項を診断する方法とする。
- ・小学校学習基本語彙についての理解度を図ることで、帰国生全体の、あるいは個人の傾向をとらえる。
- ・日常生活語彙と学習語彙習得の一つの手だてとする。

<調査内容>

この語彙調査は、教科語彙に関するものである。教科ごとに、中学校の学習を行う上で基礎となる語彙を小学校学習指導要領や教科書などから選択し、帰国子女教育学級…1 T の生徒を対象として実施した。

回答は、

回答は、	A 「聞いたことがない」
	B 「聞いたことはあるが意味がわからない」
	C 「意味がわかる」

の中から選択する形式とし、A・Bのついた

語を中心に、全体の傾向・個人の傾向などを診断する。1 学期の調査で入学した時期の実態を把握し（編入生は編入時に行う）、3 学期の調査によって 1 年間学習したことによる変化をみる。また、学年による違いもみることとした。

次に、「(2) 教科語彙調査の分析」では、「全体の傾向」の第 1 項目の「一般生との差」を引用しておきたい。

○一般生との差

帰国生と一般生との調査結果に相違点があるかどうかは、教科によって異なる。帰国生で A B をつける生徒が多いのは国語・理科・社会・保健・家庭であった。例えば、国語では 177 語のうち、3 割以上の帰国生が A B をつけた語は 85 語、一般生がつけたのは 29 語である。社会科では、一般生との相違が大きく、特に歴史や地理的分野では帰国生が A をつけることが多い。音楽では、帰国生は「わかる」か「わからない」に分かれる傾向があるとしている。

なお、一般生でわからないとされる語は、帰国生もわからないことが明らかになった。この語は、一般的に、教科の学習の上で習得されにくいものであると考えられる。その他に帰国生だけに特徴的な語もあ

る。これは日本では学習していないことによるものであると予想される。

次の「付記」は、語彙指導として大きな意味をもっている。

語彙調査を分析することは、結果的に教科の特性を互いに認識しあう機会となった。語彙調査を実施することによって、「語彙」を意識して授業を行うようになり、調査結果をいかして指導にあたるのはもちろんのこと、調査によって測れない部分を別の方法でとらえようとする試みを行う教科も出てきている。

次に、「(3) 学校生活語彙調査」では、最初の部分を引用しておきたい。

帰国生にとって、日常の学校生活に用いる語彙も、意味がわからずとまどうことの一つである。日本の小学校で過ごした一般生であっても、中学校独自の語彙、本校独自の語彙に慣れるまでは時間がかかる。帰国生の場合、入学から1年ほどたっても、まだ語彙の意味を飲み込んでいないケースが見られる。

そこで、平成4年度3学期、1Tの生徒に、学校生活の中の語彙の中から、「わからないもの」「始めはわからなかったが今はわかるもの」をあげてもらい、それをもとに学校生活語彙調査を作成した。

次に、「(4) 帰国生の言語教育における学習用語の位置づけについて」では、日常生活用語、学校生活用語、学習用語の3種の用語についてまとめを述べている。それぞれ一行ずつの言い換えだけを引用しておきたい。

＜日常生活用語＞ 日常のさまざまな場面で用いる言葉。

＜学校生活用語＞ 日常生活用語の中でも、主として学校生活で用いられる特殊な言葉。

＜学習用語＞ 主として教科の学習場面で用いられる言葉。

次に、「(付) 資料」として提示されている、「教科語彙一覧」及び「学校生活語彙一覧」を紹介することにした。

教科	国語科	社会科	数 学 科	理 科	音楽科	家庭科	保健・体育科	学校生活
全体	178	328	158	177	65	131	201	178
領域		① 59	数と計算28	地学 45		食物 62	体育 90	
		② 34	量と測定39	生物 56		被服 59	保健 111	
		③ 24	図形 66	化学 27		住居 6		
		④ 93	数量関係25	物理 21		家族 4		
		⑤118		実験・観察 28				

この表の社会科の①から⑤までは各分野・領域に関係している。①は、歴史分野の用語、②は同じく歴史分野の人名、③は公民的分野の用語、④は国名・都道府県名その他、⑤は地理的分野の用語である。

なお、国語科では、「国語科学習基本語彙」を作成中である旨の注記が見られる。ここに取り上げられている178語は、文法関係、語彙関係、発音・発声関係、敬語関係などというように分野別に配列されている。そうした目で各分野の用語を見ると、なおその精度を増す必要がありそうである。例えば、広く発音・発声関係で拾ってみると、42五十音、43清音、44濁音、45半濁音、46よう音、113朗読、169発音、170音読、171間(ま)、172暗唱、176息つき、177調子、178発声練習の13語が取り上げられている。

本文献は、帰国児童・生徒の習得すべき学習語彙を整理しようとしたもので、文献(66)『学習語彙表』をはじめとする中学校の試みの一つとみることができる。

文献(113) 日本語能力試験 出題基準

特殊法人 国際交流基金・財団法人 日本国際教育協会

凡人社 平成6(1994)年11月30日

B5判 230ページ

本文献は、書名に明示されているように、日本語能力試験の出題基準を、領域別に取り上げている。その領域は、文字・語彙、文法、聴解、そして、読解の4種である。本報告では、最初の「文字・語彙」だけを取り上げる。その「文字・語彙」は「3・4級」と「1・2級」に分けられている。以下、その目次を提示する。

〔目次〕

文字・語彙（3・4級）

- | | |
|----------------------|--------|
| I. 総説 | 3 ページ |
| 1. 基本的方針 | |
| 2. 調査資料の選定基準および調査の方法 | |
| II. 文字（細目は省略） | 5 ページ |
| III. 語彙 | 11 ページ |
| 1. 語彙の選定基準 | |
| 2. 4 級語彙表 | |
| 3. 3 級語彙表 | |
| 4. 3, 4 級「あいさつ語等表現」 | |
| 5. 留意事項 | |

文字・語彙（1・2級）

- | | |
|---------------|--------|
| I. 総説 | 37 ページ |
| 1. 基本的方針 | |
| 2. 調査対象資料 | |
| II. 文字（細目は省略） | 39 ページ |
| III. 語彙 | 50 ページ |
| 1. 語彙の選定基準 | |
| 2. 1, 2 級語彙表 | |
| 3. 留意事項 | |

本文献の「まえがき」に、日本語教育には「学習指導要領」に相当するものがないので、「出題基準」の基本的性格を箇条書きの形で示すという意図を述べた上で、7項目を提示している。その中から語彙に関係する次の2項目を引用しておきたい。

2. 試験問題の概ね80％は原則として「文字・語彙」と「文法」について掲げられているリストから出題されるが、20％は各年度の問題作成者の判断によってほぼ同等の水準にある文字・語彙・文法が出題される。
4. 「文字・語彙」「文法」の基準は類ごとに分けて記述されているが、原則としては同じ級のどの類の出題にも適用される。

次に、「文字・語彙」の概要について、「1・2級」の「1. 基本的方針」を引用しておきたい。

そこで、「3・4級文字・語彙の出題基準」の作成にあたっては、現在、国の内外で使用されている初級用日本語教科書のなかから使用機関数に基づいて複数の日本語教科書（11種）を選定し、それらの教科書に提出されている文字・語彙を調査・集計して、これまでになされた日本語教育に関する語彙調査資料をも参考に3, 4級の出題基準を作成した。

まず、「3, 4級語彙」の選定は、上に引用したように、日本語教育機関でよく使用されている日本語教科書11種の用語調査を行った。その異なりの語数は4,487語である。そこから、4種以上の教科書に使用されている語1,307語を候補とする。その中から、特に4級の範囲で使用されている語を選定し、3級の候補から補

充して4級の679語を選定した。次に、3級は、その4種以上に使用されている語を中心に、3種の教科書に使用されている語からいくらか補って1,315語を選定した。

次に、1・2級の「語彙の出題基準」を定めるために選定した調査対象資料は、次のとおりである。

1 文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』	6,060語
2 文献(76)『日本人の知識階層における話しことばの実態』	5,341語
3 ——— 「3・4級出題基準」作成のための提出語彙調査により得られた語	4,487語
4 文献(87)『外国人留学生の日本語能力の標準と測定に関する調査研究について』	5,167語
5 文献(49)『分類語彙表』	32,600語
6 文献(97)『中学校教科書の語彙調査Ⅱ』	3,290語
7 文献(83)『高校教科書の語彙調査Ⅱ』	3,067語

これらの文献を参考にして、1級の語彙は、7,800語を含む10,000語としている。また、2級の語彙は、4,833語を含む6,000語としている。この4,833語の中には、3級の1,315語が含まれている。そこで、ここでは、1・2級語彙表から32語を引用し、参考として、各語の後に何級であるかを記してみよう。

見出し (漢字・品詞)	4	3	2	1	見出し (漢字・品詞)	4	3	2	1
あ～ (重)				○	あいま (合間)				○
あ (っ) [感]		○			あいまい			○	
ああ [指・感]	○	○			アイロン			○	
あい (愛)			○		あう (合・会・遭)	○	○	○	
あいかわらず			○		アウト			○	
あいさつ (挨拶)		○			あえて (敢)				○
あいじょう (愛情)			○		あお (青)			○	
あいず (合図)			○		あおい (青)	○			
アイスクリーム			○		あおぐ (仰)				○
あいする (愛)			○		あおぐ (扇)			○	
あいそう (愛想)				○	あおじろい (青白)			○	
あいだ (間)		○			あか (赤)			○	
あいだがら (間柄)				○	あか (垢)				○
あいて (相手)			○		あかい (赤)	○			
アイデア/アイディア			○		あかじ (赤字)				○
あいにく			○		あかす (明)				○

この一覧表の、例えば「あう (合・会・遭)」は、4級「会う」、3級「合う」、2級「遭う」を1語にまとめている。なお、この一覧表に掲げられた漢字、例えば「挨拶」「垢」は表外漢字であり、「敢えて」「扇ぐ」は常用漢字の音訓から外れている。したがって、1級漢字は、1級の語彙に比べてかなり難解になっている。

本文献は、これまで日本語能力の測定基準として大きな影響力を発揮してきている。

- 文献(114) テレビ放送の語彙調査Ⅰ — 方法・標本一覧・分析 — (国立国語研究所報告 112)
 テレビ放送の語彙調査Ⅱ — 語彙表 — (国立国語研究所報告 114)
 国立国語研究所
 秀英出版Ⅰ 平成7(1995)年10月 B5判 412ページ
 Ⅱ 平成9(1997)年3月 B5判 892ページ

〔目次〕

第Ⅰ巻 (各部の細目は略す)

刊行のことば

第1部 序論 (全5章)

第2部 方法編 (全7章)

第3部 資料編

第4部 分析編 (全13章)

第Ⅱ巻 (「刊行のことば」を略す)

解説

凡例

語彙表〔1〕～〔20〕

まず、第Ⅰ巻の「刊行のことば」の前半部を紹介しておきたい。

国語研究所は、これまで、雑誌・新聞・教科書などを対象とする大規模な語彙調査を行ってきましたが、テレビ放送の語彙を対象とするのは、今回の調査が初めてのことです。この調査は、音声による語彙と画面文字による語彙の両方を対象とするということ、また、話し手など言語の運用的な側面と語彙との関係を探るということにおいて、これまでの書きことばの語彙調査にはない特徴をもっています。と同時に、そのような調査にふさわしい方法論を開発することにも、主眼を置いています。

次に、第Ⅰ巻・第1部の「第3章 調査の対象」の最初に箇条書きの形式で提示している要旨を、文として続けたかたちで紹介することにしたい。

この調査は、1989年4月2日(日)から同年7月1日(土)までの3か月間に、全国放送網のキー局である6放送局の7つのチャンネルが、0時から24時までの一日をとおして放送した、すべての放送で、視聴可能であった、日本語の、音声および文字によって、表された語彙を対象(母集団)として行う、標本抽出調査である。

この結びの「標本抽出調査」については、第Ⅱ巻の「解説」の「調査の要点」に詳しく記されている。

調査方式は標本抽出調査であり、標本(番組)は、母集団となる放送を5分間の幅をもつ抽出単位に分割し、それらを週・曜日・時間帯・チャンネルごとに等しくなるよう構成した集団から、無作為に抽出したものである。5分間の抽出標本の数は全部で364、総時間数は30時間20分である。

さて、調査における「単位の切り方」では、次に引用するように長い単位を採用している。

文を構成する上で、かかり・うけなどの構文的な機能をになう、連続した、最小の構文的成分(＝文節)を、1単位とする。

この「長い単位」は、音声言語を調査する上で必要かつ有効な単位であった。

その成果である語彙量について、第Ⅱ巻の「解説」の「(表1) 標本語彙量」を引用しておきたい。なお、表の外枠は引用者が付けた。

	延べ語数		異なり語数	
	本編	CM	本編	CM
音声	103081	9235	17647	3455
画面	20246	9413	7970	3591

次に、第Ⅱ巻には、目次に記したように全部で20種類の語彙表が掲げられている。「本編」の語彙表である〔1〕～〔3〕以外は、番組のジャンル別、チャンネル別、曜日別、時間帯別、番組の長さ別、視聴率別、話者性別、媒体別、CM、という見出しをもつ度数順語彙表が、それぞれ、音と画面に分けて掲げられている。ここでは、〔2〕本編〔音声〕度数順語彙表について詳しく紹介することにした。

なお、〔1〕本編五十音順語彙表は、記号を含めて合計26033項目の見出しを五十音順に提示している。そして、〔3〕本編〔画面〕度数順語彙表は、画面に現れた度数5以上の見出しを度数順に配列している。

さて、〔2〕本編〔音声〕度数順語彙表は、度数10以上の見出し1,186項目を度数順に配列している。その一覧表は、B4判の用紙を横いっぱいを使用した横長の表になっていて、その右の方には、上に紹介した「番組のジャンル」「チャンネル」「曜日」以下7項目の見出しをもつ欄があって、例えば「曜日」の欄は月～日の7つに区切られている。それぞれが詳細な情報を提示している。本報告では、その全体は転写できないので、左ページに絞って紹介してみよう。

全体 番号	見出し	期・部 注記	本編				CM	番組のジャンル										チャンネル					
			順位	度数	比率	出現 標本		音楽・ 情報・ 娯楽	一般 教養	児童・ 学生	科学・ 技術	スポーツ	社会・ 政治	経済	文化・ 芸術	その他	NHK 総合	NHK 教育	日本 テレビ	TBS	フジ テレビ	テレビ 東京	テレビ 朝日
02287	ええく「え」も	W4	1	3268	31.703	276	26	1.18	0.95	1.51	0.73	0.69	0.25	1.08	0.24	1.05	1.51	1.00	0.77	0.77	1.02	0.89	
18373	はい	W4	2	2346	22.759	237	26	0.47	0.43	1.51	1.32	1.21	0.56	1.31	0.17	0.89	1.21	0.90	0.96	0.85	1.01	1.19	
02178	うんく「ん」も	W4	3	1922	18.646	214	28	1.05	0.77	1.16	1.31	1.24	0.63	0.64	0.31	0.85	1.20	0.78	0.79	0.95	1.50	0.81	
00568	あの	W3	4	1517	14.717	228	15	1.01	0.67	1.42	1.29	0.99	0.38	1.00	0.39	1.11	1.05	1.08	0.74	1.01	1.01	0.97	
00001	ああく「あ」も	W4	5	1404	13.620	243	47	0.49	0.74	0.99	1.14	1.46	1.40	0.71	0.71	0.66	0.84	1.14	0.94	1.38	1.04	0.94	
12952	そう	W3	6	1348	13.077	243	23	0.50	0.74	1.29	1.26	1.25	0.83	1.05		0.76	1.19	0.98	0.92	0.78	1.09	1.23	
07628	事	W1	7	1325	12.854	270	29	1.19	1.34	0.99	0.67	0.77	1.21	0.55	0.90	1.22	1.18	1.02	0.99	0.77	0.95	0.91	
12018	する	W2	8	1230	11.932	282	62	0.99	1.27	0.97	0.87	0.92	1.30	0.53	0.97	1.10	1.29	0.93	0.89	0.96	0.93	0.93	
07914	これ	W1	9	1181	11.457	247	50	0.84	1.14	1.00	0.59	1.30	0.76	1.00		0.79	1.35	1.04	0.79	0.90	1.03	1.06	
07699	この	W3	10	1120	10.865	279	69	0.98	1.35	1.03	0.68	0.85	0.68	1.37	1.60	1.02	1.19	0.96	1.10	0.92	0.80	1.06	
13235	それ	W1	11	1053	10.215	256	21	0.82	1.23	1.05	0.90	1.16	0.98	0.64		1.16	1.29	1.08	0.71	0.70	1.15	0.87	
21936	まあく「ま」も	W4	12	1023	9.924	212	4	1.17	0.77	1.39	0.52	0.81	0.45	1.26		1.01	1.25	1.15	0.67	0.63	1.03	1.21	
17073	なるく成・為	W2	13	989	9.594	271	91	1.45	1.13	1.05	0.45	0.66	0.98	0.82	0.80	1.20	1.06	1.11	0.93	0.95	0.94	0.83	
00908	言う	W2	14	939	9.109	250	22	0.84	0.98	0.90	1.44	1.23	1.21	0.67	1.06	1.11	0.79	1.07	1.01	1.04	0.99	0.98	
24121	よいく「いい」も	W3	15	911	8.838	249	110	0.52	0.69	0.91	1.28	1.32	1.66	0.78	2.18	0.70	0.71	1.20	1.07	1.18	1.08	0.99	
00754	あるく有・在	W2	16	905	8.780	270	43	0.97	1.07	1.08	0.94	1.11	0.82	0.76	0.66	1.20	1.05	0.96	0.81	1.07	1.00	0.92	
13192	その	W3	17	836	8.110	221	16	1.00	1.13	1.23	0.34	0.94	0.66	1.05	0.24	1.23	1.15	1.15	0.72	0.80	0.92	1.02	
16978	何	W1	18	814	7.897	231	32	0.58	0.97	0.59	1.70	1.49	1.95	0.37	0.49	0.60	0.81	0.90	1.13	1.31	1.17	1.03	

これら度数10以上の1,186項目の見出しは、上引の表にいくらか見られるように、次の特徴をもっている。

- ① この1,186項目は、度数だけで選ばれていて、出現標本数は考慮されていない。(出現標本数1のものには、順に「アイアイ」く猿、「値切る」「課長」「気体」「質量」などがある。)
- ② 人名・地名・組織名などを含んでいる。(「組織名」は自民党、巨人など。)
- ③ 例えば「とる(取・採・執・捕・撮)」などの動詞は1項目にまとめられている。
- ④ 「遊びことば」(「うう・う」「いい・い」など)も採り上げられている。

本文献は、話し言葉特有の語を確実に拾い上げているという意味で、例えば、日本語教育のための学習基本語彙を選定する上では必須の資料になると考えられる。

文献(115) 児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査

工藤真由美

横浜国立大学教育学部 工藤真由美研究室 平成8(1996)年3月31日

A4判 206ページ

〔目次〕〔まえがき〕及び中項目以下の見出しを略す)

I 調査の概要	1 ページ
II 六種対照語彙表 (五十音順語彙表)	9 ページ
III 調査の結果《1》— 共通度の分析	95ページ
IV 調査の結果《2》— 成人対象の基本語彙との比較	100ページ
V 調査の結論と今後の課題	107ページ
リスト1～リスト7 (細目は抄出する)	111ページ
リスト3 「基本語二千」と「基本語A」に共通する語	1,559語
リスト6 専門家の判定の対象となる語 (五十音順)	851語
リスト7 専門家の判定の対象となる語 (意味分類コード順)	

〔I 調査の概要〕の「1 調査の目的」の全文を引用する。

この調査の目的は、外国人児童生徒を対象とする日本語教育における基本語彙を設定するための基礎資料を提示することである。

留学生等成人を対象とする日本語教育のための基本語彙調査としては、『日本語教育のための基本語彙調査』(国立国語研究所 1984年)が出版されているが、児童生徒を対象とする日本語教育のための基本語彙調査は、まだ本格的に行なわれていない。

1993年より、児童生徒対象の日本語教育基本語彙設定のための基礎的資料を得ることを目的として調査を続けてきた。(中略)

この調査では、「外国人児童生徒が、日本の小中学校(特に、小学校)での教育を受けるにあたって、はじめに学習すべき日本語の基本的な語彙についての妥当な標準を得る」という目的を設定した。この報告書は、この成果の一部である。

本文献は、次の6種類の資料を対象として、共通度を調査している。

- | | |
|---|---------|
| (1) 文献(90) 『日本語教育のための基本語彙調査』の「基本語二千」 | 2,030語 |
| (2) 文献(109) 『簡約日本語の創成と教材開発に関する研究』の「[暫定] 簡約日本語語彙表」 | 2,000語 |
| (3) 文献(110) 『にほんごをまなぼう(1)』 | 約920語 |
| (4) ——— 『幼児のこくご絵じてん』(大久保愛編 三省堂 1971) | 1,350語 |
| (5) ——— 『はじめての国語じてん』(林四郎編 NHK出版 1991) | 2,600語 |
| (6) ——— 『こどもことばえじてん』(村石昭三編 角川書店 1982) | 約4,000語 |

これら6種の対照語彙表に収録された語数は、6,001語である。

本報告のIIには、その6,001語の五十音順の一覧表を掲げている。これは貴重な資料であるので、表の形式で提示しておきたい。なお、「意味分類」は文献(49)『分類語彙表』の番号であり、資料コードの番号は、上に掲げた資料の番号である。

見出し語	意味分類	資料コード	見出し語	意味分類	資料コード
あお (青)	1.502	1 3 6	あおぞら (青空)	1.520	6
あおい (青)	3.502	1 2 4 5	あおむけ (仰向)	1.1730	6
あおぐ (扇・煽)	2.3393	5	あおむし (青虫)	1.565	4 6
あおぎめる (青)	2.502	5	あか (赤)	1.502	1 3 6
あおしんごう (青信号)	1.3114	6	あか (垢)	1.5111	6

次に、「Ⅲ 調査の結果《1》— 共通度の分析」では、6種類の資料の3種類以上に共通する語1,757語、子供用資料4種中の2種以上に現れる語653語に着目している。上記の10語で言うと「青・青い・赤」の3語が3種類以上に共通する語、「青虫」が子供用の資料の2種以上に現れる語ということになる。

そして、「Ⅳ 調査の結果《2》— 成人対象の基本語彙との比較」では、「基本語A」と名付けた3種類以上に共通する語を文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』の基本語二千と比較し、両者に共通する1,559語(リスト3)と基本語Aにのみ現れる198語に着目している。

次に、「Ⅴ 調査の結論と今後の課題」では、基本語Aの1,757語を下限とし、子供資料の653語を合わせた2,410語を上限とする範囲で「児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙」が選定されることが望ましいと提案している。そして、問題点として、リスト3の1,559語の中には、「児童生徒にとっての基本語彙とはいえない『化粧、追う』等の語彙が若干入っている。従って、(中略)1,559語の内容についても、関係者の判断が必要であろう。」と指摘している。その結果、用意されたのが、リスト7である。これは、1,559語と851語を意味分類コード順に従って次のように配列してある。

意味分類項目	「基本語二千」と「基本語A」に共通する語	専門家の判定の対象となる語
2.125 保有・除去	ずてる (捨・棄) とる (取・採・撮) はずす	のぞく (覗)
2.130 整備	そろう (揃) そろえる (揃)	ちらかす (散) みだれる (乱)
2.131 でき・利き	できる (出来)	きく (利)
2.132 はずれ・損じ	こわす (壊)	あらす (荒) はずれる

なお、本文献の続編『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査Ⅱ』(A4判125ページ)が木幡智美氏の努力で同じ横浜国立大学工藤真由美研究室から平成10(1998)年3月に刊行された。これは、6種の文献から成人向けの基本語彙である(1)(2)の2種を除いた残りの4種に、次に掲げる子供用の資料A～Cの3種を追加して、「子ども用語彙資料七種比較対照表」(見出し語数7,442語)を作成したものである。

- | | |
|---------------------------------|--------|
| A 文献(88)『新教育基本語彙』のA1(小学校低学年の前半) | 2,570語 |
| B 文献(85)「小学校低学年用国語教科書の用語」 | 2,191語 |
| C 文献(111)『絵本の語彙』 | 2,444語 |

これら正編、続編2種の本文献は、児童生徒の日本語教育のための基本語彙を調査した貴重な資料として評価することができる。なお、本文献(正編)は、『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』(工藤真由美著 A5判 209ページ)として平成11(1999)年5月にひつじ書房から刊行された。

文献(116) 算数教科書使用語彙一覧

(『帰国子女適応教育教室 研究調査報告書 平成7年度』)

財団法人 波多野ファミリースクール 帰国児国際学級

財団法人 波多野ファミリースクール 平成8(1996)年3月31日

A4判 80ページ

〔目次〕

はじめに

- | | | | | |
|-----------------|----------------|-----------|-----------|--------------|
| I. 研究調査概要 | 1. 研究調査目的 | 2. 研究調査主題 | 3. 主題設定理由 | 4. 研究調査の方法 |
| II. 語彙調査結果 | (1.～8.の見出しは後掲) | | | |
| III. 教材作成の基本理念 | (1.～3.の見出しは省略) | | | IV. 試用教材例 |
| V. 算数教科書使用語彙一覧表 | | | | VI. 本年度の学級概要 |

まず、「I. 研究調査概要」の「4. 研究調査の方法」の(1)～(4)から、本調査の内容を的確に伝える表現箇所を引用・紹介しておきたい。見出しだけを提示した項目もある。

(1) 教科書で使われている語彙の調査

海外で生活してきた子どもが苦勞する教科の一つである算数に絞って調査した。

教科書は東京書籍版のものに絞り、6カ年分の語彙を調査した。

(2) 自立語を中心に学年別に抽出・五十音順に並べ換え

(3) 算数教科書の語彙の特徴を把握

算数の教科書で使われている語彙と生活レベルの最重要語とを比較し、どんなギャップがあるのかを明らかにした。

(4) 教材の作成と試用

次に、「II 語彙調査結果」の小見出しを提示・引用しておきたい。

- 1 算数の教科書に使われている語は約1400
- 2 生活用語の指導では34%しかカバーできない
- 3 高学年になるにしたがってカバー率が低下 / 6年ではわずか26%に
- 4 日常生活になじみの薄い語が多い
- 5 同じような意味でもいろいろな言い方で登場
- 6 助数詞が多い
- 7 最初に覚えておくと便利な漢字がある
- 8 初歩の段階でも、生活レベルの日本語だけ指導していたのではいけない

次に、「V 算数教科書使用語彙一覧表」について取り上げると、全20ページが当てられている。初めの1ページに凡例相当の解説が置かれていて、2ページ目から19ページにわたって一覧表が掲げられている。

まず、その解説を全文引用しておきたい。

1. 調査対象とした教科書と語

東京書籍「新しい算数」(平成4年2月発行)の各学年で使用されている語のうち、自立語を抽出した。助詞・助動詞のような付属語は、語彙の問題より文法の問題と深くかかわってくるものである。

これらまで含めると、今回の調査の趣旨から遠ざかってしまうため除外した。

2. 抽出の基準

①辞書形で抽出 活用語については「辞書形」(終止形)で抽出した。

②複合語の抽出 「食べ始める」は「食べる」と「始める」に分けたが、「繰り上げる」は分けずに掲載した。分解したら本来の意味が極端に薄れてしまうおそれがあるものや、「切り取る」「切り抜く」のように分解は可能だが、その形で登場する頻度の高い語は、そのまま掲載した。

不統一の謗りは免れないが、語の分類に関する学説・議論に深入りする時間より、実際に抽出し、それを基に教材を作り、指導してみる時間を大切にしたいと考えたからである。

③除外した自立語 固有名詞については汎用性の低さから、形式名詞、一部の接続語については単独で意味をなさないことから、除外した。

3. 掲載の仕方

抽出した語は、『広辞苑』を参考に五十音順に掲載した。

なお、「m」や「g」などの単位や「+」や「×」などの記号は、最後のページにまとめて掲載した。

4. 表記の仕方

教科書ではひらがなで書かれている語も、一覧表では「見やすさ」を重視して漢字で表記した。

5. 重要語彙

本財団の帰国児国際学級で、生活用語として優先的に指導している語、算数指導のときに重視している語に☆を付した。☆が多いほど優先順位が高いことを示している。

次に、その1,400項目を五十音順に配列した一覧表の「くらい」以下の9語を引用してみよう。

使 用 語	使 用 学 年						生活用語	学習用語	備 考
くらい・ぐらい(大体)		2	3	4			☆	☆	
位(十の位)	1	2	3	4	5	6		☆☆	
位取り			3	4		6			
グラフ		2	3	4	5	6		☆☆☆	
比べる	1	2	3	4	5	6	☆☆	☆☆	
栗			3						
繰り上げる		2	3					☆	
繰り返す		2	3						
繰り下げる		2						☆	

次に、この一覧表に掲載された使用語は、学年別に次のようになっている。

	1	2	3	4	5	6
教科書語彙数	146	454	582	565	536	685
最重要語彙数	125	199	224	187	160	178

本文献は、算数教科書の用語を分析した貴重な資料ということができる。

文献(117) 初期指導基本語彙（研究紀要『場面を重視した日本語指導の改善 — 初期指導における場面・語彙・文型を中心に — 』）

東京都目黒区立東根小学校 日本語学級

東京都目黒区立東根小学校 平成9(1997)年3月25日

A4判 84ページ

〔目次〕〔はじめに〕「おわりに」及びⅥ、Ⅶを省略する）

I. 研究の概要	3ページ
II. 研究の内容	6ページ
1. 児童の実態 2. 場面学習の役割と内容 3. 学校生活場面の精選	
4. 場面に必要な語彙と文型（表現） 5. 語彙教材の開発	
III. 研究授業	19ページ
IV. 研究のまとめ	30ページ
V. 今後の課題	30ページ
VII. 資料 初期指導基本語彙（試案）	55ページ

まず、「II. 研究の内容」の「4. 場面に必要な語彙と文型（表現）」の「(1) 初期指導基本語彙と場面語彙」の説明を引用してみよう。

初期指導で取り上げる語彙については、試みとして2年程度で学びとる語彙を、「初期指導基本語彙」として4,391語を選定した。選定した語彙は、児童が学校生活を送る上で必要な生活言語を中心とし、算数や社会、音楽、体育などの初歩的な学習語彙を若干加えて、A、Bの水準設定を行った。A水準は1年程度で習得するのに必要な語彙、B水準はそれ以降1年程度で習得することが望ましい語彙とした。語彙選定とその水準分けは、各種語彙調査のデータに、経験的な判断を加えたものである。このうち、名詞については、指導と教材化の便宜を図り49の分野に分類した。

また、「場面表」の語彙項目として、初期指導基本語彙に基づき、これに含まれない語彙を含めて、名詞、動詞、形容詞、形容動詞638語を選定した。（場面語彙は、紀要別冊「場面表」に収録。）

以上の記述は、次の3項目に整理することができる。

- ① 低学年の学校生活に必要な4,391語を選定した。
- ② それらは、A水準、B水準に二分した。
- ③ 名詞については、49の分野に分けた。

この語彙選定に際して、次の文献を参考にすることが述べられている。ただし、どのように活用したかの具体的な記述はない。なお、本報告で取り上げている文献は、文献番号と書名だけを掲げた。

- ① 文献(90) 『日本語教育のための基本語彙調査』
- ② 文献(110) 『日本語指導教材 にはんごを まなぼう』『日本語を学ぼう2』
- ③ — 『たのしいがっこう』（東京都教育委員会編 1993）
- ④ 文献(40) 『教育基本語彙』
- ⑤ 文献(88) 『新教育基本語彙』
- ⑥ 文献(116) 「算数教科書使用語彙一覧」

次に、「品詞別語彙数一覧」を左に掲げ、右には名詞の分類項目を例示しておきたい。

	A水準	B水準	合 計		分類項目	A	B	合計	Aの語例
名 詞	835	2,118	2,953	1	文房具	26	38	64	あかえんぴつ
動 詞	258	489	747	2	持ち物	5	16	21	かき／かばん
形容詞	92	54	146	3	教室にあるもの	27	41	68	いす／えほん
形容動	16	32	48	4	身につけるもの	25	50	75	あかしろぼう
副 詞	56	232	288	5	学校にあるもの	27	22	49	おくじょう
接続詞	10	27	37	6	学校で働く人等	13	10	23	いちねんせい
感動詞	41	31	72	7	学校生活	28	94	122	あいさつ／あいだ
接頭語	0	2	2	8	給食	14	9	23	おかず／おたま
接尾語	30	45	75	9	掃除	6	6	12	ごみ／ごみばこ
指示語	15	6	21	(中略)					
連体詞	0	2	2	47	自然等	27	84	111	あき (秋)／いけ
合 計	1,353	3,038	4,391	48	地理	6	32	38	アメリカ／がいこく
				49	災害	4	6	10	あんぜん／かじ

本文献の4,391語は、小学校低学年の習得すべき基本語彙としては、数がやや多いが、これらは、大きく、次の3種の語で構成されている。つまり、内容的に豊かになっているのである。

第1種 いわゆる基本語彙

第2種 学校生活や教科の学習に関係する語彙

第3種 児童の遊びや日常生活などに関係する語彙

ここで問題とすべきは、第3種の日常生活などの語彙である。例えば文献(51)『児童・生徒の語い力の調査 低学年の学習語 (昭和37年度)』では「小学校の第1学年の児童の大半が知っていると考えられる語」を除いている。その「第1 やさしい語の表」には、外国人児童が日本の学校や家庭などで生活する上で必要な言葉が数多く含まれている。それらが、上記の第3種に該当しうるのである。

ここで、例として「29. 家にあるもの等」のAの36語を取り上げてみよう。

1	いえ	7	かぎ	13	こずかい	19	たたみ	25	はこ	31	びん
2	いた	8	ガス	14	コップ	20	テープレコーダー	26	はり	32	ふた
3	いと (糸)	9	カセット(テープ)	15	さいふ	21	でんわ	27	ひきだし	33	ふとん
4	うち (家)	10	かね(おかね)	16	じしょ	22	でんわばんごう	28	ビデオ(テープ)	34	ぼう
5	え (絵)	11	カメラ	17	しゃしん	23	と	29	ビニールぶくろ	35	まくら
6	かがみ	12	かん (缶)	18	じゅうしょ	24	ドア	30	ひも	36	れいぞうこ

本文献は、日本語学級に入ってきた児童にどうすれば一日も早く学校生活に慣れてもらえるかに心をくだいた東根小の先生方の配慮で作成されたものである。今後は、上記の3種の語彙、考え方を展開するとともに、教育実践の場で実践的に精選することが期待される。

文献(118) 国定読本自立語見出し一覧 (『国定読本用語総覧 12 総集編』)

国立国語研究所

三省堂 平成9(1997)年6月

B5判 784ページ

国立国語研究所国語辞典編集室は、昭和55(1980)年度から国定読本の用例採集を開始し、平成9(1997)年に最終巻である第12巻「総集編」の刊行を見た。その第12巻の「後記」の最初の本文を引用しておきたい。

1～6期の国定読本の文脈付き用語索引が最初に刊行されたのが昭和60年11月であり、昨年7月に巻11(第6期後半)が刊行されて、一応の完成を見た。ただしこれらの索引は期ごとに五十音順配列となっているため、全体を通して見るには不便である。それを使いやすくするとともに統計処理にも対処できるよう語彙表形式にしたのが本書である。

そして、「後記」の最後の段落に、次の説明がある。

国定読本全体の見出し語数、用例数は下記の通りである。教科書だけあって、延べ語数の割に異なり語数が小さい。

見出し	32,008
参考見出し(後要素)	1,574
用例	577,332

次に、同第12巻「総集編」の「刊行のこぼし」の第3段落の本文を引用しておきたい。

ここで国定読本というのは、明治37年4月から昭和24年3月までの間に使用された文部省著作の小学校用国語教科書6種のことである。その6種を使用時期に従って示すと次の通りである。

- 第1期 明治37年より使用『尋常小学読本』(今日イエスシ読本と俗称) 一～八
- 第2期 明治43年より使用『尋常小学読本』(今日ハタタコ読本と俗称) 巻一～十二
- 第3期 大正7年より使用『尋常小学国語読本』(今日ハナハト読本と俗称) 巻一～十二
- 第4期 昭和8年より使用『小学国語読本』(今日サクラ読本と俗称) 巻一～十二
- 第5期 昭和16年より使用『ヨミカタ』一～二 『よみかた』三～四 『初等科国語』一～八
(今日アサヒ読本と俗称)
- 第6期 昭和22年より使用『こくご』一～四 『国語』第三学年(上下), 第四～六学年(各上中下)(今日みんないいこ読本と俗称)

この『総集編』は、次に例示するように、第1期から第6期までの国定読本のすべての異なり語を五十音順に配列している。(なお、表の縦線などの線は引用者が補ったものである。)

見出し番号	見出し語	漢字注記	品詞	各 期 頻 度						計
				一	二	三	四	五	六	
010960	あわてる	慌	下	1	2	2	9	8	1	33
010970	あわび	鮑	名	0	2	3	0	0	0	5
010980	あわめし	粟飯	名	0	0	1	0	0	0	1
010990	あわや		副	0	0	1	0	2	0	3
011000	あわれ	哀	形状	0	2	3	1	0	7	13

ここで、国語辞典編集室の木村睦子氏の「国定読本自立語見出し一覧」(五十音順並びに頻度順、頻度 5 以上)を取り上げることにしたい。

実は、これら国定読本の異なり語である32,008語には、付属語も人名も含まれている。文語形もあれば口語形もある。国の内外の地名や人名、また、科学用語も含まれている。そこで、これらの異なり語から基本語彙を選定するために、次の条件を加えている。

- 1 自立語だけを残し、付属語類を削除する。
 - 1) 助詞・助動詞、意味のない文字列など。
 - 2) 接尾語の付いた自立語から接尾語を取り除く。('伯父さんたち'は「伯父さん」にする。)
- 2 人名、地名などの固有名詞を削除する。
「ドイツ ―」を例にすると、「ドイツ」「ドイツ医学」「ドイツ語」「ドイツ兵」など。
- 3 文語、口語の両方にまたがる語を 1 つにまとめる。
 - ・あいさつする 挨拶 サ変 1 2 0 1 4 0 8 (口語形)
 - あいさつす 挨拶 サ変 1 0 0 0 0 0 1 (文語形)
 - あいさつする 挨拶 サ変 2 2 0 1 4 0 9 (1つにまとめる)
 - ・あおい 青 形 10 9 10 16 30 26 101 (口語形)
 - あおし 青 形 1 1 0 1 1 2 6 (文語形)
 - あおい 青 形 11 10 10 17 31 28 107 (1つにまとめる)
- 4 助数詞の付いた語を整理する。('三人」「三羽」は「三」と「―人」「―羽」に分ける。)
- 5 全体の頻度を 5 以上の語に限定する。

以上の操作の結果、頻度 5 以上の見出し語は、次表のように、6,702語になる。

頻 度	見出し語数
100以上	434
50以上	853
30以上	1422
20以上	2000
12以上	3157
9以上	4019
7以上	5018
5以上	6702

次に、「国定読本自立語見出し一覧」(頻度順、頻度 5 以上)をながめると、様々な特徴を引き出すことができる。そこから 3 つの項目を掲げておく。

- 1 高頻度の見出しの中にも「ござる」22,「わが」53などのように、文語調の文脈で使用される見出し語が出ている。
- 2 外来語の数が少ない。上位2,000語までに10語、3,000語までに19語が見られるだけである。

ボート マッチ トンネル ランプ ガラス ゴム など。

- 3 高頻度の見出しの中に、いらっしゃる187, いただく254, ごらん339などの敬語が含まれている。

なお、『国定読本用語総覧 CD-ROM 版 (Windows95対応・検索ソフト付き)』が平成 9 (1997)年12月に三省堂から刊行された。その「ご利用の手引き」の「4 語彙表の形式」を引用しておきたい。

語彙表は用例 KWIC の中の見出し項目だけを集めて一つのファイルにし、品詞番号を除き、頻度の合計と参照見出しを付け加えたものである。

本文献(全 6 期に共通して出現する見出し語のリスト)は、これからの基本語彙を検討する上で大きな意味をもつものと考えられる。

文献(119) 入門日本語辞典

京都橘女子大学・海外に日本語教材を送る会

平成9(1997)年10月

B5判 104ページ

本文献は、ローマ字見出しによる和英と英和辞典を合綴したものである。本報告では、和英の部分を取り上げるが、まず、添付されている案内状の一部を紹介しておきたい。

いま、世界の各地でおおくの人が日本語の勉強をしていますが、なかには教科書も満足にそろわない、まして辞典など到底手がとどかない、という地域や人も、すくなくありません。一方、日本国内では、毎年中学や高校で使った英語の辞典が大量にすてられています。その辞典を海外の学習者に送ってあげれば、よろこばれるのではないかと考えて、わたしたちは、ささやかな活動をはじめました。(略)

ところが、辞典を海外に送ってみると、予想しなかった反応がありました。初歩的な学習者には、ひらがなの見出しでは使えない、ということです。日本人にはローマ字見出しよりも、ひらがなの方が便利だし、いまの和英辞典は、ほとんど、ひらがな見出しになっています。やがては日本語が読めるようにならなければいけないのだから、早くひらがな見出しに慣れるべきだ、という意見もあるでしょうが、ほんとうの初心者には、やはりローマ字の方が楽だし、その段階で学習を終わる人もいます。外国人むけにはローマ字見出しの辞典もありますが、こういう希望をもっているような人には、到底手のでない値段です。

そんなことを考えた末に、わたしたちは、思いきって自分たちの手でかんたんな辞典をつくって、海外に送ろう、と決心しました。こうして作りあげたものは、見出し語5000語、原則として1語に1つの訳語をつける、というささやかなもので、ほとんど辞典ともよべないような「間に合わせ辞典」です。しかし、例文のついた本格的な辞典を作る力はわたしたちにはないし、大きなものを作ると金もかかります。仲間のカンパでなんとかなる、この程度のもので、きっと利用してくれる人たちがいるはずです。数十部くらいならお送りできますので、適当な送り先を教えてください。もちろん、内容的にも不十分な点は数おおくあるでしょうから、ご指摘いただければ、さいわいです。

長々と引用したが、実は、凡例も解説もなく、ただ、和英・英和が配列されている文献であるので、添付された案内状の一部をそのまま紹介したのである。なお、この文献は、宮島達夫氏の発案によっている。

ここで、初版における「((Japanese-English))」の最初の12語を紹介してみたい。なお、本文献は、紙数を節約するために、例えば、最初の「ああ」で示すと、「aa/ああ/[副] so」のように語間を詰めて提示している。本報告では、その語間をゆったり取り、「/」を省いて引用している。

aa	ああ〔副〕	so
abareru	あばれる	riot(v.)
abekobe	あべこべ	reverse(a.)
abiru	あびる	bathe
abunai	あぶない	dangerous
abura	油	oil(n.); fat(n.)
aburae	油絵	oil-painting
achikochi	あちこち	here and there
achira	あちら	there

achirakochira	あちらこちら	here and there
aete	あえて	boldly
afureru	あふれる	overflow (v.)

この表について、いくつかの解説を付けてみよう。

- ① 見出しをローマ字で提示している。ローマ字表記はヘボン式である。
- ② 次に、漢字、平仮名、片仮名による表記を付けている。なお、上に掲げた10語は和語中心であるために平仮名が目立つが、次の「棒～帽子」に明らかなように漢語、片仮名も少なくない。
(例) 棒 膨脹 防衛 貿易 妨害 ボーイ 防火 冒険 ボーナス ボール 暴力 紡績 帽子
- ③ 訳語は、1語に1義を原則としている。複数の訳語をもつ見出し語を最初から順に調べると、上掲の「油」(oil; fat)以外に、「あいだ」(among; between; during), 「あいて」(opponent; partner), 「あかり」(lamp; light), 「あける」(open; dawn)などが続く。これは決して多いとは言えない。
- ④ 5,000弱の見出し語は、基本語・基礎語や語彙分析による頻度の高さなどの観点からでなくて、日常の言語生活の面、それも話し言葉中心に必要な語という観点で選ばれている。そのことを、上掲の例で説明してみよう。
(ア) 「あべこべ」などの俗語が採り上げられている。
(イ) 「あちこち・あちら・あちらこちら」など似た形の語が採り上げられている。
(ウ) 「あご」「ぶどう」「ボタン」「ほっちゃん」などの生活語が取り上げられている。
- ⑤ 「ーする」の形になる漢語は「募集する」「暗記する」などの形で提出している。
- ⑥ 「いらっしやいませ」「ごちそうさま」「おやすみ」などのあいさつの言葉を入れている。

本文の見出しがアルファベット順に配列されていることで、例えば「P」の箇所の見出しに外来語が集中していることがわかる。「パーセント、パーティ、パイプ、パン、パンフレット、パンツ、パスポート」をはじめ27語が並ぶ中で、外来語でないのは「ぱったり、ぺこぺこ、ぴかぴか」の3語である。

本文の語彙の選定がどのようになされているか明記されていないが、宮島達夫氏によれば、
『The Japan Times' 6-Language-Dictionary』(『日本語中心六カ国語辞典』第二輯 原書房
昭和34(1959)年5月 A4判 704ページ)

をはじめとする何冊かの和英辞典、また、文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』をはじめとする国語研究所刊行の文献類を資料として、日常の言語生活にどういった語彙が必要かに関する基準を立てて選出しているということである。

以上、本文の特徴をみてきたが、選定基準の上で大きな特徴を有しているといえることができる。

なお、この『入門日本語辞典』には、「ローマ字見出しによる和英辞典」「ひらがな見出しによる和英辞典」などのフロッピー版が用意されている。平成10年の秋には、携帯に便利なB6サイズの縮刷版も作成された。また、本文は「教材を送る会」のホームページ

<http://cai4.tachibana-u.ac.jp/nihongo/nihongo.htm>
から自由にダウンロードできるようになっている。

文献(120) 日本語教育映像教材 初級編 日本語でだいじょうぶ 語彙表
国立国語研究所
国立国語研究所 平成 9 (1997)年11月30日
B 5 判 142ページ

〔構成〕(「刊行のことば」を略す)

『日本語教育映像教材 初級編「日本語でだいじょうぶ」語彙表』について	1 ページ
1. 見出しの単位	
2. 見出しの表示形式と配列	
3. 用例の表示形式	
日本語教育映像教材 初級編「日本語でだいじょうぶ」ユニット・セグメント一覧	3 ページ
ユニット 1 よろしくお願ひします	ユニット 2 よくわかりました
ユニット 3 とてもいいですね	ユニット 4 また会いましょう
日本語教育映像教材 初級編「日本語でだいじょうぶ」語彙表	5 ページ

国立国語研究所日本語教育センター日本語教育教材開発室では、次の3種の日本語教育用の映像教材を作成している。また、それらの映像教材を有効に活用するために、それぞれについてのシナリオ集及び語彙表を作成している。それらの語彙表は、本文献を含めた次の3冊で、その内訳は次の一覧表のとおりである。

- 文献(96) 日本語教育映画 基礎編 総合語彙表 昭和61(1986)年
文献(105) 日本語教育映像教材 中級編 伝えあうことば 2 語彙表 平成3(1991)年
文献(120) 日本語教育映像教材 初級編 日本語でだいじょうぶ 語彙表 平成9(1997)年

文献番号・略称		見出し総数	自立語総数	固有名詞	形式名詞	接 辞	付属語	補 助	空見出し
(96)	基礎編	1,230	1,008	66	4	30	104	13	5
(105)	中級編	1,863	1,501	90	12	44	92	3	121
(120)	初級編	1,339	1,089	80	3	41	64	14	48

さて、「刊行のことば」によると、国立国語研究所日本語教育センターでは、平成5年度～7年度に、ビデオ教材『日本語教育映像教材 初級編「日本語でだいじょうぶ」』全4ユニットを作成した。この『語彙表』は、そのビデオ全体を有効に利用するための基礎的な資料として発行されたものである。

次に、「『日本語教育映像教材 初級編「日本語でだいじょうぶ」語彙表』について」の最初の部分を引用しておきたい。

『日本語教育映像教材 初級編「日本語でだいじょうぶ」』(以下、「初級編」)は、いわゆる初級の前半を終わって基本的な文型等の半数以上を学習した段階の学習者を最も主な対象として、(1)語彙・文法等に関する知識の確認、(2)ことばの機能の場面状況の中での観察、(3)適切な対人行動の例の観察、の3点をはじめとするさまざまな学習目的に利用するために作られた映像教材である。作成の意図、使用方法等の詳細は、教材本体のビデオカセットに同梱の『利用の手引き』、および、この関連教材シリーズとして既刊の『シナリオ集』を参照していただきたい。

『語彙表』は、教材本体である映像中のせりふに用いられた語彙を、それが現れるせりふの全体とともにに列挙した資料である。内容は、以下の基準によって整理されている。

この末尾の文の「以下の基準」が、目次に掲げた「1. 見出しの単位」以下の事項である。これらの事項から、とりわけ重要だと思われる6つの事項を抄出の形式で引用しておきたい。

- 1 原則として、語を見出しとした。
- 2 接頭語・接尾語のうち、比較的自由に種々の要素と結びつく力を持つものは、単独に見出しとしている場合がある。
- 3 形容動詞（ナ形容詞）は、— グ/デスまたはその活用形までを一単位とした。
- 4 各用例には、シナリオ中での出現位置を示す文番号を示した。その文番号は、次のような形式をとっている。

例) seg.26-023 — セグメント26の第23番目のせりふ

- 5 文番号の後に、その見出しが用いられているせりふを示した。この表記は、一般的な表記法に従っている。なお、『シナリオ集』では、使用漢字の制限等をおこなっているもので、この『語彙表』での表記と一致しない場合がある。
- 6 使用頻度の高い見出しの場合などに、() を用いて用法の種別を示したり、番号によって用法区分を示した場合がある。

ここで、語彙表から「あか—」以下の項目を引用しておきたい。

あか 赤

seg.26-023 やはり、あちらの赤の方がおきれいですかしら。

あかい 赤い

seg.04-037 パチャリーさん、顔が赤いわね。

あかまつしょう [圀] 赤松小（架空 ストーリー I で、赤松小学校の略）

seg.01-003 あかまつしょう、ですか。

seg.01-008 ええ、ええ、赤松小。

seg.01-002 あかまつしょうはどこですか。

あき 秋

seg.20-007 秋の虫が鳴いていました。

あきこ [圀] 亜紀子 （架空 村井亜紀子。ストーリー IV に登場。深沢良昭の恋人）

seg.34-002 あ、あのう深沢ですが、亜紀子さん……。

本文献の語彙表は、シナリオ集におけるせりふの言葉で、話し言葉的性格と書き言葉的性格の両方を合わせもっている。他の2文献と合わせて、日本語教育の基本語彙を検討する上で、一つの位置を占めるものと思われる。今後は、各種の語を除去した1,000語ほどの自立語の内部を検討する必要があるが、初級の日本語を検討する上で重要な資料になるものと思われる。

文献(121) 第4期国定算数教科書見出し一覧

国立国語研究所国語辞典編集室（内部資料）

平成9(1997)年12月20日 A4判 57ページ

〔構成〕

凡例

五十音順一覧

国定算数教科書は、国定読本と同じく第1期から第6期までであるが、第1期には児童用がなく、教師用だけである。そこで、国語辞典編集室では平成10年度に、本報告で紹介する第4期の分も含めて、第2～6期の国定算数教科書のすべてについて、全数式の用例データベースを作り、辞書記述資料として使えるようにする計画で進めている。その際の底本は『日本教科書大系』（講談社）を用いる。本文献の調査対象である第4期算数教科書は、昭和8(1933)年から昭和15(1940)年までの8年間に使用されてきた『尋常小学算数』で、本調査の底本としては復刻本（昭和45(1970)年 啓林館発行）を使用している。練習問題を除き、文章の体をなしている部分を人手で入力した。

次に、国定教科書の資料として、国語の次に算数を選んだのは、国定国語教科書と内容的に隔たりがある教科という見方によっている。そうした見方からは、算数以外に、地理や理科などの教科書も考えられるが、地理は地名、理科は動植物の解剖学的名称などというように、専門的な語が多く使われているので、比較的平易で、しかも、広範囲の用語の期待される算数に絞ったということである。

第4期算数教科書の用語は、次の表のように整理することができる。

	用例数
総数	約50,000
異なり語数	3,500
(助数詞)	(247)

左の表の異なり語3,500語の数え方について、簡単に説明しておきたい。

- (1) 数字は、漢数字・アラビア数字ともに、原則として、数の大小に関わらず、すべて「〇」に置き換える。
- (2) その際、例えば「円」を例に説明すると、「5円」「30円」「360円」などはすべて「〇円」という見出しになる。
- (3) 他に、「〇円札」「〇円未満」などの見出しも立てる。
- (4) なお、助数詞に関しては、他にも個々の問題が様々あるが、その紹介は省略する。
- (5) 用言等活用をもつ語には、時代的に口語と文語の両方の形が見られるが、見出し語は、すべて口語形の終止形に統一する。
- (6) この見出しには、助詞、助動詞も含まれている。
- (7) 読本の場合と同様に、例えば「尋常小学校生徒」「昭和〇年〇月〇日」などのように長めの単位が採用されている。

以上のような判断を一語一語に行った結果、総数50,000語から3,500語の異なり語を得ることができた。この3,500語の異なり語は、今後、様々なところで大きな意味を発揮するものと思われる。

次に、この一覧表は、次の形式になっている。ここでは「くい」以下の10語を引用しておきたい。

見出し番号	見出し	漢字注記	品詞	同音語	頻度
10910	くい	杭	名		2
10920	ぐうすう	偶数	名		4
10930	くかん	区間	名		1
10940	くき	茎	名		2
10950	くぎ	釘	名		9
10960	くぎる	区切	五		1
10970	くく	九九	名		3
10980	くくる	括	五		1
10990	くけい	矩形	名		46
11000	くけいのめんせき＝	矩形面積＝	式		2

なお、この一覧表の「品詞」の「五」は五段活用 of 動詞，「式」は計算式を表す。

試みに、異なりの3,500語から、頻度40以上の自立語を五十音順に漢字仮名交じりの表記で掲げてみよう。

間 後 表す 或る 有る 合わせる 言う 家 行く 幾つ 幾ら 要る 居る 入れる 色々 上
内 多い 大きい おかあさん お金 乙 同じ 思う 重さ 買う 掛かる 角 書く 掛け算 数
形 学校 紙 考える 木 距離 切る 矩形 来る 計算 計算する 甲 事 この 米 御覧 これ
下 珠算 調べる 図 する 生徒 全体 その それ それぞれ 対する 体積 高さ 縦 食べる
次 作る 出来る 出る どう 通り 時 所 どちら 取る どれ どんな 中 長さ なさる 何
なる 何人 何倍 何枚 値段 残る 入る 計る 箱 速さ 比 引く 左 人 一つ 表 二つ 平
均 方 本 前 また 周り 右 水 三つ 見る みんな 面積 持つ 求める 物 問題 約 良い
横 寄せる 分かる 分ける 私 割算

この120語の中には、算数用語が数多く含まれている。また、「重い・速い」でなく「重さ・速さ」が使われている。これも、算数問題に関係している。

そこで、仮に四則演算を表す用語を抜き出してみよう。なお、頻度39以下の語も右側に提示しておく。

	頻度40以上に含まれる語	頻度39以下に見られる語
足算	合わせる (43) 寄せる (63)	寄算 (36) 足す (1)
引算	引く (46)	引算 (33) 残る (15)
掛算	掛け算 (56)	掛ける (26) 掛け合わせる (3)
割算	割算 (66)	割る (33) 割り切れる (11) 割り切る (3)

これらから、昭和8年当時は、いわゆる足算が、「足す」「足算」でなく「寄せる」「寄算」という用語であったことが分かる。

本報告は、まだ調査過程の中間報告であるために、十分な考察ができていない。平成10年度の報告書が期待されるところである。

文献(122) 小学校教科書語彙項目一覧

(『外国人子女の日本語指導に関する調査研究《最終報告書》資料集5』)
 外国人子女の日本語指導に関する調査研究協力者会議
 東京外国語大学 平成10(1998)年3月
 A4判 117ページ

〔目次〕

『本冊』(全138ページ)

I はじめに	1ページ
II 日本語指導内容・方法について(3だけを掲げる)	13ページ
3 外国人児童生徒の日本語指導に関する試案((4)だけを掲げる)	
(4) 教科書の語彙・漢字調査	(100~109ページ)
①調査の目的 ②調査の方法 ③調査原資料 ④項目抽出の基準	
⑤表記の仕方 ⑥調査結果の出し方 ⑦調査結果の分析	
III 日本語指導体制について(細目は省略)	110ページ

『資料集』(資料集1~資料集5)

資料5 教科書の語彙・漢字調査	(1~127ページ)
教科書の語彙・漢字調査 ①調査原資料 ②調査の方法 ③項目抽出の基準	
④表記の仕方 ⑤項目一覧 ⑥漢字語彙一覧表	
小学校教科書 語彙項目一覧	(15~101ページ)

まず、『本冊』の「①調査の目的」「②調査の方法」「③調査原資料」について、適宜整理して提示する。

①調査の目的

- ・教科教育に結び付けやすい日本語教育を考える際の基礎資料を得る。
- ・小学校の算数と生活科・理科の教科書における語彙項目が学年別でどのように現れているか、その分布や様相を知る。なお、生活科は、小学校1、2年で行われ、3年からは理科につながる教科である。
- ・この基礎資料から得られる語彙項目(小学校教科書)を日本語カリキュラム・ガイドラインおよび日本語力評価方法試案上に反映させる。

②調査の方法

- ・原則として、教科書で初出のものを学年ごとに1例採取し、異なり語数を調査した。頻度数など量的な調査は行っていない。
- ・語彙項目については、本報告で紹介する次の二つの機関による調査結果との対比を行っている。
 文献(115) 『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』のリスト2,410語と対比させる。
 文献(116) 「算数教科書使用語彙一覧」(波多野)と対比させる。

- ・語彙項目： 名詞 動詞 形容詞 形容動詞 副詞 接続詞 連体詞
 接頭語 接尾語 助数詞 間投詞 擬声語・擬態語 記号

③調査原資料(小学校教科書20冊。以下、教科名、冊数は掲げるが、教科書名、出版社名は省略する。)

算数	——	1種の教科書6年間分	全11冊
生活科	——	1種の教科書1・2年用	全2冊
理科	——	1種の教科書3~6年	全7冊

次に、資料集 5 の「小学校教科書語彙項目一覧」における最初の 4 語及び最後の 4 語を紹介してみよう。

No.	横 国 大	波 多 野	語 彙 項 目	算 数						理 科					
				1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
1			あ（～，かえってきた）〔叫び〕								○				
2			アーム											○	
3		★	アール a （1～）				○		○						
4	☆		あいさつ（する） 〈挨拶〉							○	○				
(中略)															
4045		★	わりびき 割り引き					○							
4046	☆	★	わる （10で～）〔÷，：〕			○	○	○	○					○	
4047	☆		わる 割る												○
4048	☆		われる 〈割れる〉										○	○	○

次に、本冊に掲げられている「小学校教科書-語彙項目統計表」をそのまま引用してみよう。

	算数	理科	合 計	異なり語数	重なり語数	重複率(算数)	重複率(理科)
	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)	(F)	(G)
			A + B		C - D	E / A	E / B
1 年	295	399	694	602	92	31.19%	23.06%
2 年	492	752	1244	1109	135	27.44%	17.95%
3 年	659	686	1345	1174	171	25.95%	24.93%
4 年	870	898	1768	1525	243	27.93%	27.06%
5 年	927	1010	1937	1687	250	26.97%	24.75%
6 年	1107	1153	2260	1955	305	27.55%	26.45%
異なり語数(H)	2098	2798					
重なり語数(I)	961	1104					

本文献の4,048語の見出しを整理したものが「小学校教科書-語彙項目統計表」である。文献(116)「算数教科書使用語彙一覧」との対比を行っていて、重なりの1,438語が4,048語の35%を占めることを指摘している。この35%はどう考えたらいのであろうか。例えば「上がる」関係の語を見ると、「上がり・上がり下がり・（雨が）あがる・（気温が）上がる・（立ち）上がる」のそれぞれが見出しに採り上げられている。また「赤―」を順に漢字表記で示すと、「赤・赤い・赤色・赤組・赤茶色・赤ちゃん・赤土・赤紫色」の8語が挙げられている。これらは、基本語彙を検討する立場で言えば、複合語と単純語、多義語と同音異義語などの側面の処理が十分でないことを表している。他方、児童が学校生活を送る上で学習すべき生活語彙という見地から言えば、それらの一語一語こそが大切になってくる。

本文献は、外国人児童生徒のための日本の学校生活を考慮にいた基本語彙の作成に意が置かれている。なお、本文献はその後『外国人児童生徒のための日本語指導 第2分冊 算数（数学）・理科の教科書 ― 語彙と漢字 ― 』（東京外国語大学留学生日本語教育センター編集 ぎょうせい 平成10年11月 A4判 148ページ）として刊行された。

3 各文献からとらえた基本語彙研究

3・0	はじめに	
3・1	児童・生徒の理解語彙の調査	
3・1・1	新入学児童の理解語彙の調査	(3文献)
3・1・2	文部省の理解語彙の調査	(5文献)
3・2	児童・生徒の使用語彙の調査	
3・2・1	作文の使用語彙	(5文献)
3・2・2	話し言葉の使用語彙	(8文献)
3・3	教科書の用語調査	
3・3・0	教科書の用語調査	
3・3・1	国語科教科書の用語調査	(20文献)
3・3・2	他教科教科書の用語調査	(4文献)
3・4	幼児・児童の読物類の調査	(4文献)
3・5	漢字と語彙の調査	(4文献)
3・6	基礎日本語の選定	(6文献)
3・7	基本語彙の作成	
3・7・0	基本語彙文献の分類	
3・7・1	理論的な試みとしての基本語彙	(2文献)
3・7・2	表現力を支える基本語彙	(10文献)
3・7・3	理解力を支える基本語彙	(3文献)
3・7・4	思考力・認識力を支える基本語彙	(7文献)
3・8	日本語能力育成のための基本語彙	
3・8・0	日本語教育の基本語彙の展開	
3・8・1	一般初級用の基本語彙表	(9文献)
3・8・2	留学生などを対象とした基本語彙表	(9文献)
3・8・3	日本語能力測定のための語彙表	(3文献)
3・8・4	日本語教育映像教材の使用語彙	(3文献)
3・8・5	児童・生徒用の学習語彙	(6文献)
3・9	言語調査のための基礎語彙	(3文献)
3・10	学校生活全領域学習用語	(2文献)
3・11	国立国語研究所の語彙調査	(6文献)

3・0 はじめに

この「3」では、「2」で紹介してきた122編の研究文献が、全体としてどういう傾向をもつかを明らかにしようとする。そのために、122編の文献を目的や内容で分類して、簡単な記述を試みることにした。各文献については、文献番号及び文献名を掲げ、参考までに刊行年月を示している。なお、各文献は、複数の意図や成果をもつものが少なくないが、ここでは、1文献1種類という分類を行った。

3・1 児童・生徒の理解語彙の調査

3・1・1 新入学児童の理解語彙の調査（3文献）

文献(1)『児童語彙の研究』（大正8年5月）

文献(3)『新入学児童語彙の調査』（大正13年11月）

文献(10)『児童の語彙と教育』（昭和10年11月）

ここに掲げた3文献は、いずれも、新しく入学した児童に対して、予め選んだ調査語について、教師が1語1語質問を行った成果をまとめたものであり、文献(3)は文献(1)を、文献(10)は文献(1)と文献(3)のそれぞれをふまえた調査研究になっている。

具体的に説明してみよう。文献(1)は、大都会である東京の児童についての理解語彙の調査であった。そこで、日本全体を見る資料として、都会以外の調査が望まれた。文献(3)は千葉県の子童を調査したものである。次に、それらを受けた文献(10)は西日本の児童の調査になっている。この文献(10)は、入学時の理解語彙の調査と、その児童が3年に進級した時点での理解語彙の調査と、その年度の6年生の児童の理解語彙の調査とを合わせた内容になっている。

これら3文献の調査研究から、新しく入学した児童の理解語の能力が、平均でほぼ5,000語であることが導かれた。それらの語彙を見ると、家庭を中心とした児童の日常の言語生活の中で使用されるものが多い。その平均5,000語の中の2,000～3,000語は児童全員あるいは8割以上の児童の知る語彙である。そういう語彙のデータベースの作成が、例えば帰国児童生徒の生活語彙として求められている。なお、3種の文献の調査結果が異なるのは、地域などの違いよりも、調査語の数の違いによるところが大きい。

文献番号	調査語	最多	最少	平均	参考（他に次のような調査を行っている。）
文献(1)	6,867	5,162	3,500	4,089	全員が知る語。8割以上が知る語。
文献(3)	11,908	6,072	3,373	5,019	全員が知る語。男児全員が知る語。女児全員が知る語
文献(10)	28,661	6,906	3,338	5,230	全員の共有語。

これら新入学時の児童の理解語彙の調査の文献は、大正から昭和10年代にかけて行われたもので、それ以降、このような一つの学級を単位とするような中規模の調査は実施されていない。その上、残念ながら、すでに指摘したように、これらの調査の成果が全く生かされていない。いわば宝の持ち腐れに終わっている。今後は上掲の表の「参考」欄の例えば「全員が知る語」（全員の共有語）をデータベース化するような試みが必要であろう。

3・1・2 文部省の理解語彙の調査（5文献）

文献(42)	『児童・生徒の語い力の調査 準備調査	(昭和32年度)』(昭和35年2月)
文献(43)	『児童・生徒の語い力の調査 本調査	小学校第6学年(昭和33年度)』(昭和37年3月)
文献(46)	『児童・生徒の語い力の調査 本調査	小学校第4学年(昭和34年度)』(昭和38年2月)
文献(50)	『児童・生徒の語い力の調査 本調査	中学校第3学年(昭和35年度)』(昭和39年9月)
〃	『児童・生徒の語い力の調査 本調査	中学校第1学年(昭和36年度)』(昭和42年5月)
文献(51)	『児童・生徒の語い力の調査 本調査	低学年の学習語(昭和37年度)』(昭和39年9月)

文部省は、児童・生徒の理解語彙の能力を測定するために、文部省内に学習語調査協議会を設け、8年もの歳月をかけて児童・生徒の語彙力の調査研究を行った。その調査語彙の資料としては、森岡健二氏が行った「義務教育修了者に対する語彙調査の試み」(『昭和25年度 国立国語研究所年報 - 2 - 』)の成果が使用されている。森岡健二氏は、昭和25年に東京の高校1年生15人に竹原常太氏の『スタンダード和英辞典』(初版は昭和13(1938)年。調査に資料として使用した版が昭和何年に発行されたものかは明確でない。国立国語研究所の図書館には昭和23年11月30日発行 第36版が収蔵されている。)の見出し37,970語について意味が分かるかどうかについて調査を行った。森岡健二氏の調査では、義務教育修了者の理解する語数は、平均で30,664語、最高が36,330語、最低が23,381語という結果を得た。その中で、80%以上の理解を示した語が約25,000語であった。文部省の学習語調査協議会では、その資料に幾種もの手を加えて14,241語の調査語を得た。そして、その調査語について、東京都区内をはじめとする小学校6年生を対象とした準備調査を行った。その結果をまとめたのが文献(42)『児童・生徒の語い力の調査 準備調査』である。そして、上に掲げた5種の本調査を行ったが、いずれも、児童・生徒の内省法による調査である。これは、①よく知っている、②だいたいわかる、③ぼんやりわかる、④知らない、の4段階に分けて回答させる方法である。なお、この種の質問法は、その後、福沢周亮氏も実施し、「熟知度」という用語を与えている。

その5種類の調査語は、次の一覧表に掲げるとおりである。なお、最後に掲げた中学校1年の文献(国語シリーズ64)は、調査語が文献(50)の中学校3年(国語シリーズ58)と同一であるために、本報告書では、文献(50)の中でふれるにとどめている。

	調査対象児童・生徒	調査語数
文献(42)	準備調査(第6学年)	14,241
文献(43)	小学校第6学年	10,047
文献(46)	小学校第4学年	5,451
文献(50)	中学校第3学年	6,874
文献(51)	低学年の学習語	2,048

なお、現在のように印刷機器の発達していない時期の全国調査では、資料の作成や印刷などの上でたいへんな苦労があったものと推察される。編者の手許には文献(51)の原資料である謄写印刷による『昭和37年度児童・生徒の語い力の調査(小学校第2学年)本調査成績(出題順)』(1963.4.4 文部省調査局国語課 B5判 102ページ)がある。謄写印刷の誤った数字を訂正するといった丁寧な手当てを施している資料である。

る。市、郡、全国の三つの欄に分かれて各語の百分率が、小数点以下2位まで記されている。

これらは、小学校の低学年の児童を含めてであるが、内省法による回答という問題点をもつために、調査結果は一通り報告されているが、その後の発展がほとんど見られない。ただし、文献(51)の「低学年の学習語」などは、その文献の箇所で紹介しているように、基本語彙の策定の資料に用いられている。

3・2 児童・生徒の使用語彙の調査

3・2・1 作文の使用語彙（5文献）

文献(89) 「作文の語彙」(昭和59年2月)

文献(92) 『豊かな文章表現力を育てるための基礎研究』(昭和60年3月)

文献(95) 『小・中学生の作文の用語調査』(昭和60年7月)

文献(103) 『児童の作文使用語彙』(平成元年3月)

文献(108) 『児童作文の語彙に関する研究 — 語彙表 — 』(平成4年2月)

作文を資料とする児童・生徒の使用語彙を調査した5編の文献は、次の3種にまとめることができる。

- ① 研究者が単独で調査したもの …………… 文献(92)(108)
- ② 研究者が研究室の学生を動員して調査したもの …… 文献(89)
- ③ 研究者が共同で調査したもの …………… 文献(95)(103)

①には、自ら担任している学級の児童の1年間の作文を調査した文献(92)、ある小学校の全員の児童の作文を調査した文献(108)がある。文献(108)は、男女の傾向の差異に関心を寄せている。ちなみに、男女の使用語彙の差異に気を付けて調査した文献に文献(3)『新入学児童語彙の調査』がある。このような学級の作文の用語調査、あるいは学校全体の作文の用語調査は、もっと行われていてもいいように思われる。よほど意図的に取り組まなければならないということであろう。

②は、文献(89)で、ある小学校の全員の児童に、記事文、叙事文2種の作文を書かせて、その使用語を調査し、成果として記事文、叙事文2種の語彙表を提出している。これは、実験的な試みとすることができる。これまで、記事文、叙事文については、かなりの共通理解があったが、このような客観的な分析は初めての試みである。

③には、全国児童生徒作文コンクールの1位に入選した作文の使用語彙を調査した文献(95)、地域文集に掲載された作文の使用語彙を分析した文献(103)がある。文献(95)は、中学校3年までの9年間の異なり語が約20,000語で、小学校6年間で約13,000語、中学校3年間でも約13,000語という興味深い語数が提示されている。また、文献(103)は、2,340編の作文(1年～4年は400編ずつ、5年～6年は360編ずつ)を調査対象にして、延べで474,243語、異なりで20,849語の語彙資料を得ている。

この文献(95)及び文献(103)から、小学校6年間の児童及び中学校3年間の生徒の使用語彙の大体が導かれている。これらの中には、児童及び生徒の様々な生活上の語彙が含まれているので、それらからいく種かの手を加えることによって、小学校及び中学校の基本語彙を求めることができそうである。

両文献ともに、刊行されてすでに10年が経過しているが、資料としてほとんど活用されていない。例えば小学校の国語辞典の見出しの選定に活用したといった事例を耳にしていない。その上、調査して10年も経過すると資料的な価値が半減してしまう。

3・2・2 話し言葉の使用語彙（8文献）

- 文献(2)『幼児の言語の発達』(大正13年6月)
 文献(19)『幼児の言語発達』(昭和18年2月)
 文献(24)『児童の語彙と国語指導』(昭和19年3月)
 文献(53)『幼児言語の発達』(昭和42年11月)
 文献(63)『用例集 幼児の用語』(昭和51年11月)
 文献(76)『日本人の知識階層における話しことばの実態』(昭和55年3月)
 文献(82)『就学前幼児の語彙』(昭和57年3月)
 文献(114)『テレビ放送の語彙調査』(平成7年10月)

これら話し言葉の使用語彙の調査を行った8編の文献は、被調査者の年齢等の違いによって、次のように4種に分類することができる。

- ① 幼児の話し言葉の調査を行ったもの — 文献(2) (19) (53) (63) (82)
- ② 小学校の児童の話し言葉の調査を行ったもの — 文献(24)
- ③ 成人(知識層)の1日の話し言葉の調査を行ったもの — 文献(76)
- ④ テレビで流された音声言語・文字言語の調査を行ったもの — 文献(114)

以下、①～④のそれぞれについて簡単に説明してみよう。

①は、大正13年に発表された文献(2)『幼児の言語の発達』から始まる幼児の言語発達の研究である。本文献は、研究者が自らの3人の子供の言語発達を丹念に調べ上げた貴重な内容である。文献(19)は多数の学生を動員して実地に幼児の使用語を観察調査した成果を集積していて、頻度の上から1,500語の基本語を提出している。文献(53)は、録音した幼児の会話を資料として用語調査を行い、頻度等を基準において基本語彙を提出している。文献(63)は、複数の幼児の、ある特定の場面での話し言葉を調査したものである。そして、文献(82)は、文献(53)の延長線上にある調査といえることができる。そういう点で見れば、いずれも基本語彙の選定の基礎資料に供する意図を見ることができる。

次に、②の文献(24)『児童の語彙と国語指導』は、小学校1年、3年、6年の男女各2名の1年間の話し言葉を記録したものである。その際、国語の教科書の本文に用いられているすべての用語は音読される、つまり、口に発するということで、使用語彙に含められている。その結果、1年生が5,000語、3年生が7,500～8,000語、6年生が11,000語という語数を得ている。これは1年間の調査であるから、それぞれ1学年上の状況と見ることできる。結局、小学校では、5,000語で出発して、11,000語に到達することになる。ただし、日常の話し言葉にそれらの11,000語のすべてが使用されているのではない。先述のように、国語教科書の語彙を算入しているという問題があるからである。

次に③の文献(76)は、東京及びその近郊の7名の在住、在勤の調査者の公的生活の場面、私的生活の場面、そして、外出先の場面の各会話を取り上げて調査し、延べ66,329語、異なり5,341語を導き出している。

最後に④の文献(114)は、テレビで放映された音声言語及び画面における文字言語についてはじめての調査で、様々な観点に立つ資料を掲げている。中でも、話し言葉の上で収集された度数10以上の1,187語は、日本語教育などに活用することができそうである。

以上、話し言葉の調査に取り組んだ文献を4種に分けて概観してみた。これまでの調査に欠けているものとして、中学生、高校生の話し言葉の使用語彙の調査を指摘しなければならない。

3・3 教科書の用語調査

3・3・0 教科書の用語調査

教科書の用語調査は、学習者の語彙能力の育成を図るために、教科書の語彙を計画的に取り上げることを目地的として取り組まれてきた。国語教科書の用語調査では小学校の用語調査が多い。特に低学年の教科書の用語調査が多い。他方、例えば中学校の国語教科書の用語調査はまだ全体としての資料をもっていない。それは、用語数が多いことや収録する文学作品の扱いなどの問題があるからである。

ここでは、国語科の教科書と他教科の教科書に分けて検討する。他教科の教科書の用語調査が国語教科書の用語調査に比べるとはるかに少なく、しかも、その少ない文献の多くが帰国児童の学習を目的として行われている。これまでの国語科の語彙指導が、国語教科書に出てくる語句で行うという狭い発想に囚われていたために、他教科への配慮が欠けていたのである。なお、この狭い見方は、国語科における語彙指導だけでなく、小学生用の国語辞典の見出し語の採択にも現れている。小学生用の国語辞典の見出しには、各教科の用語も掲げる必要がある。

3・3・1 国語教科書の用語調査（20文献）

- 文献(4) 『国語読本 語句教授の指針』(昭和3年6月)
- 文献(6) 『小学国語読本巻一 形象と理會巻一』(昭和8年4月)
- 文献(7) 『国語読本の語彙』(昭和9年2月)
- 文献(8) 『国語教育の諸問題(上)』(昭和9年9月)
- 文献(11) 『基礎日本語』(昭和11年)
- 文献(12) 『基本語彙学 上』(昭和13年6月)
- 文献(13) 『小学校に於ける言語の教育』(昭和14年2月)
- 文献(14) 『小学国語読本 巻一の研究』(昭和14年7月)
- 文献(15) 『小学国語読本 新出語句総覧』(昭和14年12月)
- 文献(18) 「ヨミカタ〜四 総合語彙の品詞別調査」(昭和18年2月)
- 文献(20) 『国民学校教科書の語彙一』(昭和18年3月)
- 文献(27) 『教科書用語集 小学校第一学年の部(草案)』(昭和23年5月)
- 文献(30) 『小学校用 新しい国語 語い調査表』(昭和26年)
- 文献(35) 『小学校の国語教科書の語彙』(昭和29年6月)
- 文献(48) 『しょうがく こくご 1ねんの 1. 2. 3における語い調査』(昭和38年3月)
- 文献(67) 『小学校国語科における学習語彙の調査』(昭和53年2月)
- 文献(80) 『小学校国語教科書の学習語彙表とその指導』(昭和57年1月)
- 文献(85) 「小学校低学年用国語教科書の用語」(昭和58年3月)
- 文献(101) 『小学校国語教科書(学図・61年版)総索引』(昭和63年4月)
- 文献(118) 「国定読本自立語見出し一覧」(平成9年6月)

これら20編の文献は、用語調査を行った教科書の種類及びその調査研究の継続性などによって、大きく次の

3種にまとめることができる。

- ① 同じ出版社の教科書 6 学年分の用語を何版かにわたって調査している文献（教科書の刊行順に配列）
.....文献(118) (30) (80)
- ② 複数の国語教科書の用語を調査した文献.....文献(11) (35) (48) (67) (85)
- ③ 歴史的価値を有する文献その他の12文献

①の3文献は、再度掲出すると、次のもので、それぞれ右に掲げた年代に使用されてきている。

文献(118)「国定読本自立語見出し一覧（頻度5以上）」 明治37(1904)年 ～ 昭和22(1947)年
 文献(30)『小学校用 新しい国語 語彙調査表』 昭和26(1951)年 ～ 昭和32(1957)年
 文献(80)『小学校国語教科書の学習語彙表とその指導』 昭和57(1985)年 ～ 平成11(1999)年

まず、文献(118)は、明治37年から昭和22年までの全6期、約40年間に使用されてきた国定読本の自立語の頻度5以上の見出しを五十音順に配列したもので、文語形の活用は口語形に改めるなどしてまとめている。次に、文献(30)は、昭和30年をはさむ7年間に4回改訂された国語教科書の用語を調査した4冊の語彙表である。そして、文献(80)は、昭和57年を第1冊とし、以後、3～4年ごとの教科書の改訂に伴って調査・編集されたもので、現在で6冊を数えている。これら3種の文献は、今後の基本語彙調査に欠かせない文献になると考えられる。特に、後者の2文献の全見出しからデータベースを作成すれば、国語教科書に限定したものではあるが、その限りでの小学校の学習語彙の確かな資料を得ることができそうである。ただし、児童文学作品の中には、20年以上も掲載され続けている教材があるから、その問題は別に手当てをしなければならない。

次に、②の5文献は、複数の国語教科書の用語を調査したもので、次の3類に整理できる。

- (a) 基礎日本語をもとめようとして、7種の国語教科書の用語を調査する……文献(11)
- (b) 低学年の国語教科書3種の用語を調査する.....文献(48) (85)
- (c) 低学年から高学年までの教科書の欄外などに掲げられた用語を調査する…文献(35) (67)

仮に3種にまとめてみたが、(a)類の文献(11)は、大がかりな用語調査に成果として高く評価することができる。(b)類の(85)は、調査としては小型であるが、調査手続きの正確さをもっている。そして、(b)の(48)、及び(c)類の各文献は、歴史的価値を有するとは言えそうにない。

次に、③は、歴史的価値を有する文献群で、今後の活用に供することはほとんどできそうにない。これらは、次のように5類に細分することができそうである。

- (a) 意味の記述に力を入れている文献(4)
- (b) 意味分類を試みている文献(6) (8) (12)
- (c) 新しい語の認定の考え方を提出している文献(13) (14) (15) (27)
- (d) 品詞の考え方に力を入れている文献(18) (20)
- (e) 小学校6年間の用語を調査している文献(7) (101)

これら5類のそれぞれについての説明は省略する。いずれも歴史的な価値を有する文献である。最後の(e)類について記しておくが、文献(7)、文献(101)ともに6年間の用語を調査してはいるが、統計的な調査にまでは至っていない。個々の見出しの検索（どの学年に何例使われているかなど）は可能であるが、語彙としての検索は困難である。別にパソコンに入力し直して統計をとれば活用できなくはないが、その労力は、新たに用語調査に取り組む労力と比べてどうであろうか。そういう次第で、これらの文献は歴史的価値を有する文献としてまとめたのである。

3・3・2 他教科教科書の用語調査（4文献）

文献(83)『高校教科書の語彙調査』（昭和58年3月）

文献(97)『中学校教科書の語彙調査』（昭和61年3月）

文献(102)『小学校教科書教科別語彙資料 理科・本文編・索引編』（平成元年3月）

文献(121)「第4期国定算数教科書見出し一覧」（平成9年12月）

まず、文献(83)『高校教科書の語彙調査』、文献(97)『中学校教科書の語彙調査』の2文献は、国立国語研究所が、高校、中学校の社会科及び理科の各教科書の用語を調査したもので、初等中等教育期における生徒の学習語彙の実態を知ることができる。特に語種別の語数、度数別の語数などを明らかにしているのも、用途に応じた活用が可能である。これまでは、外国人留学生の日本語能力の育成の基準として活用されてきている。しかし、国語教育の分野で利用された例を耳にしない。

次に、文献(102)は小学校の理科の教科書（全6年間分）1種を取り上げている。その見出しが、すでに本文の解説で指摘したように延べの形でしか提示されていないので、基本語彙の文献としてはそのままの形では活用できない。ただ、個々の異なり語の作業は不可能ではない。6学年分の理科の教科書の用語を提示している点で貴重であるので、異なりに整理する作業の遂行が期待される。

次に、文献(121)は、文献名に明らかなように、戦前の第4期の算数科の教科書の用語調査を行ったものである。これは、最終的には、第4期だけでなく全6期にわたる調査の成果を提出しようとするものである。

なお、他教科の教科書の用語調査としては、以上の他に、次の2文献がある。これらは、本報告では日本語教育に関連させて取り上げている。

文献(116)「算数教科書使用語彙一覧」（平成8年3月）

文献(122)「小学校教科書語彙項目一覧」（平成10年3月）

文献(116)は、算数教科書に用いられている1,400項目の使用語を五十音順に配列し、使用学年を提示した上で、生活用語、学習用語に該当するかどうかを示している。

文献(122)は、小学校教科書の算数科全6学年（全11冊）、生活科全2学年（2冊）、理科全4学年（全7冊）、すなわち大きく括ると算数科と理科の2教科の教科書、合計20冊の用語を調査して、異なり4,048語を求め、五十音順に配列したものである。この資料は年少者の日本語教育のために用意されたものであるが、学校教育としての語彙指導に活用することができる。また、小学校の国語辞典の編集には必須の文献とすることができる。なお、小学校の教科でいうと、社会科の教科書の用語調査がまだ行われていない。それは、人名や地名、また、教科専門用語が多いからであろう。実は、帰国児童生徒の学習のつまずきは社会科によるところが小さくないのである。

以上、他教科の教科書の用語調査が近年になって行われ始めたことの背後には、年少者のための日本語教育の影響もあって、国語科の語彙指導が国語教科書中心から全教科対応へ次第に切り換えられてきたことが関係している。

3・4 幼児・児童の読物類の調査（4文献）

- 文献(22) 「児童読物の語彙調査」(昭和18年10月)
 文献(41) 「基本語彙と語彙調査」(昭和33年4月)
 文献(64) 『絵本の研究 — 6才児の親近語彙集付 — 』(昭和52年2月)
 文献(111) 『絵本の語彙』(平成6年3月)

絵本や児童読み物などの使用語彙の調査は、昭和10年代後半以降現在までにいくつもの試みがある。その中のいくつかには語彙表も作成されているようであるが、公表している研究文献に語彙表までを添付している文献は少なく、本報告では上掲の4編を紹介するにとどまる。そして、その最初の2編は、本発表の前にまずは使用度数の高い語を紹介しておくといった中間発表的な内容になっている。すなわち、文献(22)「児童読物の語彙調査」は「日本語最高頻度語彙」として210語を紹介している。ただ、この文献の語彙カードは、現在まで大切に保存されてきているので、今後の整理が期待される場所である。次に、文献(41)「基本語彙と語彙調査」は「児童読物の用語集」として使用率の高い334語を紹介している。語彙表全体の公表には至っていない。

後半の2文献は、『絵本の研究』『絵本の語彙』という書名に見られるように「絵本」に注目した文献になっている。文献(64)は6才児の親近語彙を選定したものである。幼児のための絵本を執筆する時に標準とすべき語彙表という趣旨で編集されたものである。

文献(111)『絵本の語彙』は、絵本全138冊の用語を調査したもので、延べ約70,000語から異なり約6,700語を整理して、五十音順に配列している。

なお、児童読み物の調査を行った文献には、古くは文献(23)『日本語基本語彙 幼年之部』がある。これは、10種134万冊の幼年及び児童の読み物を調査し、頻度と範囲の2点で「日本語基本語彙」として5,000語を選定した文献である。すでに指摘したように、昭和18(1943)年の成果であるので、その後活用されることがほとんどなかった。なお、「4・12 学会の発表会で紹介された語彙表」で紹介するように、「絵本の語彙研究 — 『第13回よい絵本』(全国学校図書館協議会選定)を中心に — 」では、異なりで、4,701語が整理されている。

3・5 漢字と語彙の調査（4文献）

文献(34)『小学校国語教科書における漢字調査』（昭和28年3月）

文献(70)『小学校における教育用語（国語・社会・算数・理科）の学年別の使用実態』（昭和53年）

文献(75)『漢字語彙資料』（昭和55年3月）

文献(104)『小学校教科書漢字別語彙表』（平成元年6月）

教科書にどういった漢字をどのように使用しているかに関する資料は、教科書の検定に際して文部省に提出するというので、例えば国語教科書の教師用指導書などにまとめて掲げられている。中には、別に配布用として刊行されたものもある。次の例がそれである。

（例）『小学校国語一～六年 提出漢字総さくいん』（学校図書 昭和30(1955)年4月）

この例に掲げた文献は、教科書の使用漢字に関してはよく整理されている。「目次」には、「教育漢字四級分類表について」「教育漢字」「教育漢字以外の当用漢字」「『小学校国語』漢字配当表」「頻度別一覧表」という見出しに明らかなように、教科書「小学校国語」1～6年における漢字の実態に関する情報が十分に整理されている。しかし、本報告書では、そうした漢字使用の実態を表す資料でなく、漢字を語彙的にとらえた資料を紹介することにしている。

上に掲げた4種の文献は、教科書に使われている漢字を中心にすえて、教科書の用語を整理したものである。まず、文献(34)『小学校国語教科書における漢字調査』は、横浜市教育研究所が取り組んだもので、小学校国語教科書11種全77種を対象とし、漢字ごとに、その漢字を用いた語句を提示し、各分冊における使用度数を示している。教科書は当該の漢字がある時期に提出されれば、それ以後は原則としてその漢字を使い続けるので、用語調査として活用できるわけである。「原則として」は、例えば詩歌などのように文字表記までもが表現の手段・意図になっている場合は、教科書に掲載する場合に、その表記を優先させることがあるということの意味している。

次に、文献(70)『小学校における教育用語（国語・社会・算数・理科）の学年別の使用実態』は、いわゆる主要4教科における漢字を用いた語句約6,600語を漢字別、学年別に整理した文献である。これまでは国語教科書の用語調査は行われてきたが、他教科にまで広げた調査はこの文献(70)が最初である。この文献の問題点あるいは限界として、漢字中心に調査しているため、例えば6年生配当の漢字を使った用語の場合、5年生に平仮名で使用されていても一切取り上げていないことが指摘される。

次に、文献(75)『漢字語彙資料』は、当時の小学校の学年別配当漢字881字に関する語句を集めて、学年別に配当している。まず、この881字の漢字を用いている語句を文献(62)『学習基本語彙の基礎調査』に掲げられた4,589語で調査している。次に、国立国語研究所の何種もの文献に当たり、「学習上必要と、林が考える語を集めなおして、増補する一方、不要と思う語を除く」作業を行っている。

次に、文献(104)『小学校教科書漢字別語彙表』は、国語教科書を除く小学校6教科の教科書を対象として漢字別語彙表を作成したもので、合計12,328語が提示されている。

これらの文献は、資料的な価値が高いと思われるが、その普及が図られていないようで、ほとんど活用されていない。例えば国語辞典の見出しの選定や漢字辞典の熟語の選定などに活用されることが期待される。

3・6 基礎日本語の選定（6文献）

- 文献(5) 『基礎日本語』(昭和8年3月)
 文献(9) 『速成日本語読本上巻』(昭和10年9月)
 文献(16) 「基礎日本語の試み」(昭和16年7月)
 文献(17) 「基本簡易ニッポンゴ」(昭和17年4月)
 文献(21) 「基礎語」(『日本語の姿』)(昭和18年6月)
 文献(109) 『簡約日本語の創成と教材開発に関する研究』(平成4年7月)

上記の文献は、次の4種類に整理することができる。

- ①土居光知氏の基礎日本語の提案 ……………文献(5) (16) (21)
- ②基礎日本語に類似する日本語教科書の提案 ……………文献(9)
- ③日本語を最少の語句で話す提案 ……………文献(17)
- ④簡約日本語の提案 ……………文献(109)

① 土居光知氏は、英国の『Basic English』に啓発されて、文献(5)『基礎日本語』で1,000語の基礎日本語を提案し、その後、その修正に力を尽くした。それが文献(5) (16) (21) の各文献である。土居光知氏の提案の特徴は、国定教科書の教材本文を、固有名詞など特殊な用語は別として、選定した1,000語だけで表現することによってその実用性を実証するという具体的な試みにあった。結局、文献(21)「基礎語」では、1,100語にまで増補されているが、2倍の2,000語にというような最初の考え方をすっかり変えてしまう増補ではない。この1,000語程度で日本語を可能にする研究は、その後継承されていない。ただ、文献(109)の「簡約日本語」が後で述べるように比較的類似した発想になっている。

② 文献(9)『速成日本語読本』上巻の付録「語彙表」は、そこに配列されている各語を見ると、土居光知氏の「基礎日本語」の影響を受けていて、最低これだけ身に付ければ日本語の会話が可能だとする提案になっている。語数はほぼ1,500語で、意味別に配列されている。

③ 文献(17)「基本簡易ニッポンゴ」は、わずか300語だけで日本語による会話を可能にする試みである。これは、実際の普及は別として、日本語教育あるいは日本語の語彙を考える上で、各自が一度は試みてみてほしい提案であるように思われる。例えば多くても100時間は充てられない技術研修生のための日本語を考えてみると、円満な形で1,000語を用意すべきなのか、十分に習得できる語数の用語だけを用意すべきなのかの検討が必要になるであろう。

④ 文献(109)『簡約日本語の創成と教材開発に関する研究』のいわゆる簡約日本語は、土居光知氏の基礎日本語の系列に立って、第1次1,000語、第2次1,000語、合計2,000語を選定し、多義語は3義まで設ける、という企画になっている。この2,000語の選定はほぼ確定しているが、研究としては完成していない。

なお、日本語教育の項目に分類している玉村文郎氏の文献(99)「日本語教育基本語彙2570語」は、題名に「基本語彙」という用語を使っているが、語彙選択の内実は基礎語的な着実さと綿密さを備えている。

以上、基礎語に関係する文献について検討を加えてきたが、少なくとも300語、少し増やして1,000語、多くて2,000語あるいは2,600語という語数である。今後は、これらの各語数の可能性を検討すること、例えば大幅に増やして、1万語とするとどうなるか、日本語表現をどこまで豊かにできるか、といった検討が求められる。

3・7 基本語彙の作成

3・7・0 基本語彙文献の分類

日本語教育関係は後回しにして、国語教育関係に限定すると、語彙表を具備する基本語彙の文献は、次の4種にまとめることができる。

- 1 理論的な試みとしての基本語彙
- 2 表現力を支える基本語彙
- 3 理解力を支える基本語彙
- 4 思考・認識力を支える基本語彙

なお、よく知られている「教育基本語彙」という名称は、阪本一郎氏の文献名によっている。学習基本語彙など各種の名称が見られるが、ここでは、それらの用語の意味は特に問題にしないことにする。それは、本報告書がその意味を語彙表自体から帰納的に求める意図をもっているからである。

以下、これら4種についてそれぞれ検討を加えてみよう。

3・7・1 理論的な試みとしての基本語彙（2文献）

文献(58)「語い調査と基本語彙」(『電子計算機による国語研究 III』昭和46年3月)

文献(86)「基本度 f 上位七百語」(『朝倉日本語新講座 2 語彙』昭和58年4月)

文献(58)「語い調査と基本語彙」は、基本語彙研究についての貴重な提案の一つとして受け取ることができる。と同時に、林四郎氏の基本語研究の一環として受け取る必要もある。林四郎氏は、これまでに、次の3種の提案を行っている。

- ① 頻度と範囲の關係に注目して基本語彙の理論を考案する。
- ② 複数の大量の語彙調査の成果を組み合わせ、頻度中心に基本語彙を策定する。
- ③ 教育漢字と基本語彙の關係を考察する。

まず①は、上掲の文献(58)「語い調査と基本語彙」で、林四郎氏の基本語彙の基本的な考え方を示すものである。次に、②としては、国立国語研究所の電子計算機による語彙調査を資料として、文献(62)『学習基本語彙の基礎調査』という成果を得ている。そして、③は、②の成果をふまえての調査であるが、文献(75)『漢字語彙資料』という漢字に注目した成果を得ている。結局、それら3種は、理論的な考察から実際の語彙表の策定へという方向になっている。

次に、文献(86)「基本度 f 上位七百語」は、一方で水谷静夫氏の統計理論に根拠をおいた文献(41)『基本語彙と語彙調査』、他方で林四郎氏の文献(58)「語い調査と基本語彙」との關係でとらえる必要がある。

文献(86)は、林四郎氏の文献(58)と同じく、そこに提出された語彙の実用性よりも、そこに至る理論的な組み立ての提案に価値がある。つまり、これら2編は、基本語彙のとらえ方に関する基本的な考察を行った文献としての価値をもっている。

3・7・2 表現力を支える基本語彙 (10文献)

- 文献(28)「低学年向け基本語い」(『言語教育と言語教材』)(昭和25年9月)
 文献(32)『基本語による国語の学習指導』(昭和27年6月)
 文献(36)『国語科 学習基本語彙 指導の実際』(昭和31年9月)
 文献(39)『国語教育のための基本語体系』(昭和32年10月)
 文献(62)『学習基本語彙の基礎調査』(昭和51年5月)
 文献(73)『学習基本語彙表 小学校国語科用』(昭和54年2月)
 文献(79)『小学校における効果的な語彙指導』(昭和56年2月)
 文献(84)『光村図書版 学習基本語彙表』(昭和58年3月)
 文献(91)『学習基本語彙』(昭和59年9月)
 文献(94)『学習基本語彙の選定に関する研究 I』(昭和60年6月)

これらの文献は、大きく次の5種に整理することができる。

- ① 編者の判断で集められている …………… 文献(28) (32)
- ② 国語教科書の用語調査から導き出されている ……… 文献(36) (39)
- ③ 主として統計的な成果に基づいて作成されている … 文献(62)
- ④ ③の統計的な資料に別の見方を加えている …………… 文献(73) (79) (91) (94)
- ⑤ 表現力を支える語彙として選定されている …………… 文献(84)

以下、それぞれについて順に説明を加えてみよう。

まず、①の2文献は、いずれも昭和20年代に刊行された個人の労作である。自らの言語教育的判断で基本語彙が選定されている。児童書や低学年の国語教科書などの使用語彙を参考にしたかもしれないが、自らの判断を何よりも優先させている。

次に、②の2文献は、国語教科書の用語を分析した上で、頻度、範囲などを参考にして、学習基本語彙を選定している。特に文献(36)は語彙の学年配当及び意味分類に特徴をもっている。

次に、③の文献(62)は、基本語彙研究の流れを通観する上で、大きな意味をもつ文献である。本文献によって、基本語彙の考え方が大きく前進することになった。これは、国立国語研究所の2種の大きな語彙調査の成果をまとめ上げた内容になっている。

次に、④は、その③の研究成果を有力な資料として、別の何らかの手を加えて選定しているものである。そのことについて簡単に説明してみよう。

文献(73) 文献(62)と文献(40)『教育基本語彙』のA1・B1を基礎資料として基本語彙を選定している。

文献(79) 文献(73)を調査資料に採用している。

文献(91) 最初の資料の作成段階では文献(49)『分類語彙表』を使用している。次に、文献(73)から漏れた300語を補って検討を加えている。

文献(94) 文献(79)と同じく文献(73)を調査資料に採用している。

最後に、⑤の文献(84)は、文献(40)の『教育基本語彙』を重要な資料とし、他に2種の資料を加えた上で、表現のための基本語彙を選定している。

今後は、これらの③、④、⑤の各文献での有効性を調べる必要がある。

3・7・3 理解力を支える基本語彙（3文献）

文献(23)『日本語基本語彙 幼年之部』（昭和18年11月）

文献(40)『教育基本語彙』（昭和33年8月）

文献(88)『新教育基本語彙』（昭和59年1月）

基本語彙研究の流れをとらえようとする、阪本一郎氏の果たした功績は看過することができない。阪本一郎氏の教育基本語彙についての調査研究の成果は、上に掲げる通りで、最初の文献(23)と最後の文献(88)の発表時期には40年間という大きな開きがある。なお、阪本一郎氏の業績には他に文献(64)『絵本の研究』があるが、これは、「3・4」に含めた。

文献(23)『日本語基本語彙 幼年之部』は、基本語彙研究史の上では、膨大な資料群を駆使して編集したということで燦然とした光彩を放ちはするが、語彙表としては、昭和10年代の資料に基づく点で、現在では歴史的価値を有するとは言いようがない。わずか5,000語の基本語彙ではあるが、当時の時代的な影響を大きく受けているので、その刊行後2年経過した昭和20(1945)年には、すでに活用できにくい内容になっている。

次に、文献(40)『教育基本語彙』は、第1に原資料を定評ある国語辞典に求めている、第2に語彙選定の上で何十人もの学校関係者の実践的な判断を採用している、第3に最終の語句の確定段階で何人もの優れた研究者の判断を採用しているという語彙選定の手続きの確かさを有している。そのために、理解語彙の能力を育成する目的で作成された語彙表の中でひととき高く信頼されている。学習国語辞典の見出しの選定をはじめとして、これだけ活用された文献は他に例を見ないであろう。しかし、著者が自ら改訂版の刊行を行っているように、古くて使用に適していない語句が数多く含まれている。それは後でふれるように語彙選定の資料に採用した国語辞典の古さに起因している。

次に、文献(88)『新教育基本語彙』は、上の文献(40)『教育基本語彙』の改訂版として刊行されたものであるが、その改訂の方針は明示されていない。この改訂には説得力を欠く部分があり、すでに刊行されて15年が経過しているが、その価値がよくわからないままになっている。そのため、今後も上掲の文献(40)『教育基本語彙』を使用し、時代に合わなくなっている語句を一定の見方を立てて差し替えるようにするほうがよいようにも思われる。この文献(40)『教育基本語彙』も、資料に用いた『言林』（新村出編 全国書房 昭和27(1952)年）の見出しの古さという問題を引きずっていた。阪本一郎氏は、そうした批判に応えようとして、長年、語句の訂正を試みてこられたのではあるまいか。これは想像の域を出ないことである。

しかし、以上に指摘してきたように、阪本一郎氏の文献(40)『教育基本語彙』は、理解力育成のための語彙表として大きな功績を上げてきた。

なお、今後は、阪本一郎氏の方法はそのままよいとして、最新の資料に基づく理解力育成のための語彙表の作成が望まれる。

3・7・4 思考力・認識力を支える基本語彙（7文献）

- 文献(45)『言語要素指導』（昭和37年9月）
 文献(52)『言語要素とりたて指導細案』（昭和40年3月）
 文献(54)『言語要素とりたて指導入門』（昭和45年2月）
 文献(60)『語い指導の系統と方法』（昭和48年2月）
 文献(61)『語句指導と語い指導』（昭和49年4月）
 文献(77)『文字・語句教育の理論と実践』（昭和55年5月）
 文献(93)『教育基本語彙の体系化とその指導方法の究明』（昭和60年3月）

これら7文献は、次の3種に分けることができる。

- ① 児童言語研究会の学習基本語彙の考え方によるもの — 文献(45) (52) (54) (77)
- ② 児童言語研究会の考え方に触発を受けたもの — 文献(60) (93)
- ③ 厳選した極めて少数の語句から語彙指導を展開しようとするもの — 文献(61)

以下、順に説明をしてみよう。

まず、①は、児童言語研究会が長年取り組んできた学習基本語彙の成果を示すものである。昭和37(1962)年に刊行された文献(45)『言語要素指導』は、約1,000語の学習基本語彙を小学校、中学校に分けて五十音順に提示している。「それらを所有していることによって、よりよく思考や認識を活動させる表現・通達することができる語を。」という、ねじれてはいるが、意図はよく伝わる表現に、児童言語研究会の基本語彙編集の目的が示されている。続く文献(52)『言語要素とりたて指導細案』の「学習基本語イ」は、それを少し改訂したものである。また、文献(54)『言語要素とりたて指導入門』は、思考・認識を支える1,000語という枠組みによっているが、新しく作り改めたもの、そして、文献(77)「教育基本語い・関連重要語い分類表」は、再度、新しい検討を加えたものである。これらはいずれも思考力や認識力を支える1,000語程度の基本語彙という見方で一貫している。

次に、②は、考え方の上で①の児童言語研究会の研究を受け継いでいるもので、文献(60)『語い指導の系統と方法』は、中心語彙とそれを取り巻く語群という小グループ的な見方を展開している。文献(93)『教育基本語彙の体系化とその指導方法の究明』は、論理語彙約1,700語を選定している。この提案は今後大きな意味をもつものと期待される。

続く③は、国語科だけでなく、社会科、理科なども視野に入れた広い見方を採用した文献(61)『語句指導と語い指導』である。この文献は、本報告書の「まとまった語彙表を提示している文献」だけを紹介するという方針に合致しているかどうかで問題を残している。しかし、少ないにしても一応の基本語彙は提出されていること、また、その語彙指導の考え方が適切であること、の2点で採用した。本文献は、その趣旨に立って、更に展開・発展させる必要がある。

ところで、この思考・認識力を支える基本語彙という見方は、今後もいつそう検討を加え続けるべき貴重な見方であり、その際、次の3点に配慮すべきである。

- (1) 思考・認識力を支える語彙を、どのように厳選すべきか
- (2) それらを、どのように学年に配当すべきか
- (3) 各語に関連する語のグループを、どのように組み立てるべきか

3・8 日本語能力育成のための基本語彙

3・8・0 日本語教育の基本語彙の展開

日本語教育の語彙表は、昭和8(1933)年に刊行された土居光知氏の文献(5)『基礎日本語』に端を発している。その流れを整理すると、昭和20年以前は、語数を制限する基礎語あるいは基本語として作成される傾向にあった。昭和20年以後の約50年間は、まずは初級用、次に留学生用、就学生用、そして、技術研修生用という展開を見せている。そういう中で、ビジネスマン用という区分も生じるようになった。かつての日本語学習者はビジネスマンや研究者など知識階層に限られていた。それが、さまざまに分化してきたが、まだ成人用が中心であった。平成に入り、帰国児童生徒及び外国人児童生徒が増加することによって、日本の学校生活に役立つ生活語彙という見方が始まってきている。

3・8・1 一般初級用の基本語彙表(9文献)

- | |
|--|
| ① 文献(47)「日本語教育における基礎学習語」(昭和38年3月)
文献(71)『低年齢層を対象とした日本語教育教材のための基礎調査』(昭和53年12月)
文献(74)『日本語教育語彙資料(1)(2) — 低学年初級500語』(昭和54年6月)
文献(100)「日本語教科書語彙リスト」(昭和63年3月)
文献(106)「日本語初級教科書によく使われる語」(平成3年5月) |
| ② 文献(25)『日本語基本語彙』(昭和19年3月 国語協会)
文献(26)『日本語基本語彙』(昭和19年6月 国際文化振興会)
文献(65)『A Classified List of Basic Japanese Vocabulary』(昭和52年)
文献(119)『入門日本語辞典』(平成9年10月) |

これらの文献は、上に二分して掲げているように内容の上で①、②の2種に整理することができる。

① 日本語教科書の使用語彙を調査したもの — これらは、複数の日本語教科書に使用されている用語を比較対照し、頻度の高い語を選定する立場で導き出している。この中で、文献(47)、文献(106)の2編はよく引用されている。文献(47)は早い時期の研究論文で、以降の研究の指針となったところがある。文献(106)は日本語教育学会の事業として取り組まれたものである。他方、価値が高いのにほとんど知られず、したがって活用されていない文献に文献(100)がある。

② 日本語によるコミュニケーションを図るには最低これだけが必要であるという見方で選定している文献である。ただ、土居光知氏の文献(5)『基礎日本語』をはじめとする基礎日本語の文献は、最初に1,000語という枠を用意している点で別に扱っている。②の中で、例えば文献(26)はよく知られているが、逆に文献(25)はその陰に隠れてほとんど知られていない。これは、文献名が同一であり、しかもほぼ同じ時期に刊行されている、文献(25)が単なる語彙表であるのに対して、文献(26)は丁寧な注釈が付けられているという違いによって。次に、文献(65)は、オーストラリアで作成・刊行された文献であるが、日本語教育の語彙を考える上で貴重であると考えて本報告書に含めた。なお、文献(119)『入門日本語辞典』は、文献名に「辞典」という名称を掲げているが、日本語と英語を対比させた初級用の語彙表である。

3・8・2 留学生などを対象とした基本語彙表（9文献）

①文献(56)『実用和英辞典』（昭和45年6月）

文献(59)『外国人のための基本語用例辞典』（昭和46年8月）

文献(98)『基礎日本語学習辞典』（昭和61年12月）

②文献(57)「留学生教育のための基本語彙表」（昭和46年3月）

③文献(68)『日本語教育基本語彙 第一次集計資料（1）— 上位二千語 —』（昭和53年3月）

文献(69)『日本語教育基本語彙 第一次集計資料 — 六千語 —』（昭和53年8月）

文献(81)『日本語教育基本語彙七種比較対照表』（昭和57年3月）

文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』（昭和59年3月）

④文献(99)「日本語教育基本語彙2570語」（昭和62年9月）

これらの文献は、上に掲げたように4種に分けることができる。以下、順に説明してみよう。

①の3文献は、本格的に日本語学習に取り組む学習者のために用意された基本語彙の学習辞典である。3文献ともに公的機関あるいはその委嘱によって編集作業が行われたということで信頼がもたれている。例えば、文献(59)『外国人のための基本語用例辞典』は、刊行後も改訂作業が着実に進められて、すでに第3版までが刊行されている。ただ、これらの各文献の見出しの語数が、入門者用として3,000語～4,000語という少なさであるため、意味用法を詳しくしても物足りなさが出てくる。

文献(56)『実用和英辞典』は大幅な改定作業を行った結果、9,000語を超える見出しを備えた本格的な日本語学習辞典になっている。これは、そういう種類の日本語学習辞典がないことに関係している。

②の文献(57)「留学生教育のための基本語彙表」は、高等学校の理科、社会科の教科書の使用語彙から必須の語彙を厳選した語彙表で、日本語教育で言えば、中級あるいは上級に属する用語が配列されている。

③の初めの3文献は、4つめの文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』に大きく集約される過程で調査検討された資料で、それぞれの公表段階では活用されたが、文献(90)が刊行された時点で使命が終了したというべき文献である。

④の文献(99)「日本語教育基本語彙2570語」は、それを掲載する文献が通信講座のテキストである関係で、広くは知られていないが、その2,570語の選定は、子細に調べてみると、留学生が日本で生活する上で最低必要とする用語が着実に拾い上げられている。そういう意味で、この語彙表を、具体的な解説を付けて改めて公表してほしいものである。なお、この文献に関しては、「3・6 基礎日本語の選定」でも関連させてふれておいた。

3・8・3 日本語能力測定のための語彙表（3文献）

文献(87) 「語彙標準表」(『外国人に対する日本語教育の振興に関する報告集』)(昭和58年8月)

文献(107) 『品詞別・レベル別1万語語彙分類集』(平成3年10月)

文献(113) 『日本語能力試験 出題基準』(平成6年11月)

日本語能力をどのように測定すべきかは大きな問題である。ここでは、日本語能力を測定するために選定された3種の文献を取り上げている。

まず、最初の文献(87)「語彙標準表」であるが、文化庁国語課では、日本語教育の専門家及び学識経験者の協力を得て『外国人に対する日本語教育の振興に関する報告集』を作成した。そこに収められている「語彙標準表」は、第1水準3,621語、第2水準1,546語、専門語181語の3種合計5,348語を提示したものである。この語彙表は、国立国語研究所で作成した文献(68)『日本語教育基本語彙第一次集計資料(1) — 上位二千語 —』、文献(69)『日本語教育基本語彙第一次集計資料 — 六千語 —』の2文献を重要な資料としている。文献(68)は2,183語を選定している。文献(69)は全体として6,000語を目安に選定している。そこで、文献(87)は「大学で勉強しようとする外国人留学生に必要な日本語能力の標準」という見方で、それら2文献に収録されている語をつぶさに検討して、いくらかの語を補足したものである。

文献(107)『品詞別・レベル別1万語語彙分類集』は、先行文献としては文献(87)「語彙標準表」(『外国人に対する日本語教育の振興に関する報告集』)、文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』、文献(49)『分類語彙表』の3文献を参照し、その他、小型の国語辞典や自社で作成した問題集などの語彙を資料として、標題に掲げた10,000語を選定している。日本語教育の分野では、今後、本文献のように、10,000語とか20,000語、30,000語といった語数の語彙表の作成が必要になると考えられる。

次に、文献(113)『日本語能力試験 出題基準』は、日本語能力試験の出題基準を提示したもので、語彙の内容では、1・2級の語彙と3・4級の語彙の選定の上で異なった方法及び資料が採用されている。

まず、3・4級の語彙の選定は、日本語教科書11種中4種以上に使用されている語彙を選定している。これは、「3・8・1 一般初級用の基本語彙表」の①で取り上げた日本語教科書の用語調査と同様の方法によっている。問題は、調査者が異なるために同様の調査を改めて行っていることで、先行の成果が生かされていないことである。次に、1・2級の語彙は、文献(107)『品詞別・レベル別1万語語彙分類集』と同様に先行文献を資料に用いて全体で7,800語を選定している。

なお、文献(107)『品詞別・レベル別1万語語彙分類集』は、平成10(1998)年に改版を刊行するに際して、文献(113)『日本語能力試験 出題基準』の1～4級の語彙のすべてを掲載するように改めている。

この種の語彙は、外国人留学生が大学生活を送る上で必要とするという見方で選定されている。今後は、この種の語彙を本格的に調査検討して策定する必要がある。たとえば、日本語能力試験に10,000語を出題するとすれば、約20,000語を準備して、そこから出題するといった語彙表の選定を考えるべきである。外国人のための20,000語の選定が、例えば中学生の国語辞典の語彙とどのように違うのか、共通する部分はどのような部分かといった検討が必要であるが、そういう検討はまだほとんど行われていない。

3・8・4 日本語教育映像教材の使用語彙（3文獻）

文獻(96)『日本語教育映画 基礎編 総合語彙表』（昭和61年1月）

文獻(105)『日本語教育映像教材 中級編 伝えあうことば 2 語彙表』（平成3年3月）

文獻(120)『日本語教育映像教材 初級編 日本語でだいじょうぶ 語彙表』（平成9年11月）

これら3文獻は、国立国語研究所日本語教育センター日本語教材開発室で作成したものである。正確に記すと、日本語教育用の映像教材に使用されているシナリオの用語を調査したものである。シナリオは、映像の中で人物が発する話し言葉として用意されたものであるが、予め書き記されているという点で書き言葉的な性格を有しているというべきである。別の言い方をすると、シナリオの言葉は、前もって十分に考案されているということで純粋な話し言葉とは認めにくく、しかも、話し言葉として表現するという点で純粋な書き言葉とも言えない。これらのシナリオの作成には、何人もの委員の協力があって、例えば難解な響きの漢語をやさしい言い方に和らげるというように書き言葉的な要素を極力なくす方向で努力している。それで、かなりの程度に話し言葉的になっているが、それが裏目に出て、間違っているとかあいまいな言い回しやあいまいな言い方がない、文型なども十分に考慮されているといった問題が出てくる。そこで、これら3文獻は、話し言葉あるいは書き言葉のどちらかの分類に無理に当てはめなくて、一つにまとめることにしたのである。

この語彙表の成果として、例えば「あの、あのう」や「あら」などの感動詞の言葉が有用な話し言葉として適切に位置づけられていることが指摘できる。「あのう」は、人に話しかけるときの注意喚起などの役割をもつ言葉として話し言葉の分野では重要視されているが、国語教育の語彙表にはまったく見出しに採用されていない。例えば『広辞苑第4版』には、「あの」の見出しについて「口語で、すらすら言えない時に挟む、つなぎの言葉。」という説明がつけられている。これは否定的あるいは剰余的な見方に立つ説明であって、これら3文獻で意図的に採用している用法ではない。

これら3文獻は、いずれも各見出しが文脈付きで提示され、用例数の多い見出しは用法別に整理されている。したがって、これら3文獻を一つにまとめると、学習基本語彙辞典に近いものができそうである。

以上、これらの語彙表が計画的に組み立てられたシナリオによるということから、特別な価値を求めることができる。

3・8・5 児童・生徒用の学習語彙（6文献）

- 文献(110)『日本語指導教材 にほんごを まなぼう 教師用指導書』（文部省 平成4年9月）
 文献(112)「教科語彙一覧・学校生活語彙一覧」（お茶の水女子大学附属中学校 平成6年1月）
 文献(115)『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』（横浜国立大学 平成8年3月）
 文献(116)「算数教科書使用語彙一覧」（波多野ファミリースクール 平成8年3月）
 文献(117)「初期指導基本語彙」（目黒区立東根小学校 平成9年3月）
 文献(122)「小学校教科書語彙項目一覧」（東京外国語大学 平成10年3月）

日本語教育は、長い期間、原則として外国人の成人を学習対象者として行われてきたが、平成に入ると、児童生徒への日本語教育をどう行うべきかが大きな課題になってきた。ここに掲げた6編の文献は、いずれも平成に入ってから作成されたものである。この文献欄だけでは編著者名を掲げてある。いずれも小学校、中学校、大学、文部省というように、個人を超えた公的な機関で作成されていることに注意したい。

これら6文献は、次に示すように、内容の上で3種類に整理することができる。

- A 学校生活用語及び教科用語を取り上げている
- ① 学校用語中心に取り上げている ……………文献(110)
 - ② 教科用語中心に取り上げている ……………文献(116) (122)
 - ③ ①と②の両方の用語を取り上げている ……………文献(112)
- B 児童生徒の基本語彙を取り上げている ……………文献(115)
- C AとB両方の用語を取り上げている ……………文献(117)

この3種類の文献はいずれも粗略にできない。以下、順にそれぞれの特徴及び問題点を指摘しておきたい。

まず、A・①の学校生活用語は、まだ正面から一度も調査されたことがない。小学校の低学年の用語は文献(110)で十分であるかもしれないが、中学年以上は大幅な追加が必要であろうし、小学校と中学校とでは大きな違いがありそうである。また、地域による違いも小さくないであろう。次に、A・②の教科専門用語は、例えば「3・10 学校生活全領域学習用語」で取り上げる文献(78)『生徒の言語環境を整えるための重要語い集』などで中学校の全教科の用語が一応拾い上げられているが、何がどれだけ必要かの見極めはまだ行われていない。これは、小学校でもまだ検討されていない課題である。

次のA・③の文献は、①や②ほどの語数を持っていない。つまり、考え方を検討する上でのたたき台あるいは指針としての価値を持っていると言うことができる。

次に、Bの文献(115)は、すでに指摘したように、児童生徒のための日本語教育用にはじめて作成された文献である。6種類の語彙表の出現度数から求められたものであるが、その第1資料の文献(90)『日本語教育のための基本語彙調査』自体が同じ統計によっているという問題点をもっている。これからは、本文献を踏まえながら、児童生徒の学習の実態を踏まえた調査研究が望まれるのである。

結局は、Cの文献(117)のような全用語の調査が必要になるわけであるが、文献(117)にしてもそうした発想が採用されてはいても、語彙表としては十全であるとは言いがたいところがある。

3・9 言語調査のための基礎語彙（3文献）

文献(29)『富山市児童言語調査』（昭和25年12月）

文献(38)『基礎語彙調査表』（昭和32年8月）

文献(72)「全国方言基礎語彙調査項目」（昭和54年2月）

何らかの言語調査を行う上で予め作成された語彙表として、この3種の文献を紹介することができる。これら3種の文献は、それぞれの調査の目的が違っているので、語数にもその性格にも大きな違いが見られる。

文献(29)は、富山市教育委員会が富山市に生まれ育った児童の語彙調査を行うために作成したものである。全8冊で1セットになっていて、1冊は調査の手引きを記したもので、1冊は教科専門用語を配列したもの、他の6冊は語彙調査の用語を品詞に分けて配列したものである。各教科の専門用語を取り上げた文献としては先駆的な文献である。語彙調査として掲げられている語は、全品詞で約2,300語である。それぞれの語について、標準語彙、方言訛語の形を掲げると同時に、その標準語彙の各語が基本語彙であるかどうかを示している。また、各備考欄には例文が掲げられている。本文献は、富山方言の習得の調査に意が置かれている。他の都道府県や市町村にはこうした試みがないので、富山市の独自の調査として評価することができる。

文献(38)は、語彙調査のために基礎語彙457項目を選定している。また、その下位分類も数多く掲げられているので、語数は示されていないが、全体で1,000語をはるかに超えそうである。これらの語彙と、例えば上掲の文献(29)『富山市児童言語調査』の2,300語とを比較するとどうということになるであろうか。また、文献(5)『基礎日本語』の1,000語と比較するとどうということになるであろうか。更に、文献(72)「全国方言基礎語彙調査項目」と比較するとどうということになるであろうか。今後のそういう比較対照が楽しみな選定になっている。

次に、文献(72)「全国方言基礎語彙調査項目」は、約2,500項目が掲げられている。日本に生まれ、日本で育った成人であるならおよそ知っているはずの語が精密な分類に従って配列されている。この中には、動物や植物など、いわゆる基本語としては省かれるべき語も数多く入っている。このことは、基本語彙の検討を行う上で重要な意味をもっている。特に、帰国児童生徒や外国人児童生徒の基本語彙を考える上で大きな意味をもっている。

以上、3種の文献について簡単にふれてきたが、今後、いわゆる入門期の基本語などでなく、日本で生活するための成熟した日本語を考える場合は、これらの文献が必須になるとと思われる。

3・10 学校生活全領域学習用語（2 文献）

文献(66)『学習語彙表 ― 語彙指導のための基礎作業 ―』（昭和52年）

文献(78)『生徒の言語環境を整えるための 重要語彙集』（昭和55年11月）

日本で生まれ育った児童・生徒が、学校の言語生活及びその中核を占める国語教育の中でどのような語彙力を備えていくべきかという問題は重要である。その語彙力を、大人になって社会的な言語生活を円満かつ適切に過ごす上で必要な語彙能力とすると、第1に家庭や地域を中心とする日常の言語生活を円満に送る上で必要な語彙力、第2に中学校の教科学習を行う上で必要になる語彙力、第3に将来実社会で活躍する上で必要になる語彙力の3種が求められる。特に国語科の学習に必要な、あるいは国語科の中で育成される語彙力ということもあるが、それらは第2に含めている。第2の語彙力は結局は第3の社会人として必要な語彙力に成長することになるわけである。なお、第1の日常生活で必要な語彙力は、「3・1・1 新入学児童の理解語彙の調査」で指摘した「全員が知る語」がそれにあてはまりそうである。そして、第3の語彙力は、「3・8・3 日本語能力測定のための語彙表」に掲げられた語ということになる。

ここに掲げた2文献は、その第2の語彙力の育成を念頭に置いて作成されたものである。特に言えば、この2文献は、どちらも中学校の教師が問題意識を抱いて共同で作成した語彙表である。文献(66)『学習語彙表 ― 語彙指導のための基礎作業 ―』は、義務教育9年間の全教科専門用語集と呼ぶことのできる語彙表である。中学校の全職員が、使用している全教科の中学校教科書だけでなく、当地区で使用している小学校の全教科の教科書の各専門用語も調査している。

その文献(66)からわずか3年後に刊行された文献(78)『生徒の言語環境を整えるための 重要語彙集』は、中学校の全教科の重要語彙を教科書の用語を分析することによって整理した文献である。まだ電子計算機などの普及していない時期の成果であるので、教科間の連関などが十分には図られていない。

これらは、「3・8・5 児童・生徒用の学習語彙」で紹介した次の6編の文献と密接な関係をもっている。

文献(110)『日本語指導教材 にほんごを まなぼう』（文部省 平成4年9月）

文献(112)「教科語彙一覧・学校生活語彙一覧」（お茶の水女子大学附属中学校）（平成6年1月）

文献(115)『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』（横浜国立大学 平成8年3月）

文献(116)「算数教科書使用語彙一覧」（波多野ファミリースクール）（平成8年3月）

文献(117)「初期指導基本語彙」（目黒区立東根小学校）（平成9年3月）

文献(122)「小学校教科書語彙項目一覧」（東京外国語大学）（平成10年3月）

これらの文献は、帰国児童生徒及び外国人児童生徒が日本在住の児童生徒と肩を並べて学習を行うために必要な学校生活語彙や教科語彙という発想で編集されている。そして、上記の中学校の2文献は、中学校の学習をとどこおりなく行うために重要な用語という発想で作成されている。

3・11 国立国語研究所の語彙調査（6文献）

- 文献(31)『語彙調査 — 現代新聞用語の一例』（昭和27年3月）
 文献(33)『現代語の語彙調査 婦人雑誌の用語』（昭和28年3月）
 文献(37)『現代語の語彙調査 総合雑誌の用語』（昭和32年3月）
 文献(44)『現代雑誌九十種の用語用字』（昭和37年3月）
 文献(49)『分類語彙表』（昭和39年3月）
 文献(55)『電子計算機による新聞の語彙調査』（昭和45年3月）

国立国語研究所の語彙調査は、すでに他の箇所でも取り上げている文献まで含めると、これは編著者に個人名を立てている文献まで含めてのことであるが、全部で29編を数える。これは、全122編の文献の2割強を占めることになる。それらの学問的な影響力はもっと大きなものになるであろう。

ここで紹介する文献は、他の箇所でも取り上げられなかった文献である。これらの中には、国立国語研究所の大量の語彙調査に取り組みはじめたころの文献が半数を占めている。

これらは、ほぼ次の3種にまとめることができる。

- ① 初期のころの語彙調査の試行的な文献 ……文献(31) (33) (37)
- ② 大量の語彙調査を行った文献 ……………文献(44) (55)
- ③ 意味分類を行った文献 ……………文献(49)

まず①は、上で試行的などと述べたが、当時としては大量の語彙調査というべきである。ただ、後に刊行された文献(44)『現代雑誌九十種の用語用字』や文献(55)『電子計算機による新聞の語彙調査』などに比べると、語数が少なくても試行的とでも評価しなければならないものである。これらの文献は、まずは、どういう資料をどのように調査するべきかといった課題を追究した功績を指摘する必要がある。つまり、必ずしもすっきりした成果の提示になりえていないため、活用しがたいところがある。

次に、②の大量の語彙調査を行った文献としては、文献(44)『現代雑誌九十種の用語用字』及び文献(55)『電子計算機による新聞の語彙調査』の2文献がある。これらは、書き言葉の主要な媒体である新聞と雑誌を調査しているので、その成果は、多方面でよく引用されている。なお、これら2文献の成果を基本語彙の面でまとめたものに文献(62)『学習基本語彙の基礎調査』がある。

③の文献(49)『分類語彙表』は、日本で科学的に構築された初めての分類語彙表である。本文献以前にも分類案を提出した文献としては、例えば文献(36)『国語科 学習基本語彙 指導の実際』などのようにないわけではないが、文献(49)『分類語彙表』ほどに収録語数が多くて、しかも、分類が精密であるものはない。そういう意味で、文献(49)ほどに信頼され活用されてきた文献はないといえることができる。加えて、この文献(49)が①の3編の文献と共に育ち、②の2編の文献を重要な資料として成立していることに注意したい。

4 本報告で取り上げなかった文献

4・0	はじめに	
4・1	国語辞典・日本語辞典等の見出し語	(8文献)
4・2	教科書の巻末につけられた語彙表	(6文献)
4・3	国語・日本語学習者の独習用に編集された語彙表	(5文献)
4・4	漢字との関係で取り上げられている語彙表	(3文献)
4・5	乳幼児の言語発達を取り上げた語彙表	(2文献)
4・6	小学校1年生を対象として作成された語彙表	(5文献)
4・7	生活に密着した児童の語彙表	(3文献)
4・8	古典関係の基本語彙表	(4文献)
4・9	特定の品詞など部分的な領域・分野の語彙表	(5文献)
4・10	外国語の基本語彙表	(8文献)
4・11	調査の目的を異にする語彙表	(3文献)
4・12	学会の研究発表会で紹介された語彙表	(2文献)
4・13	その他の理由で取り上げていない語彙表	(4文献)
4・14	原本が確認できなかった文献	(2文献)

4・0 はじめに

本報告では、すでに「1 研究の目的と方法」で述べたように、言語教育あるいは語彙調査を目的として作成された現代日本語の基本語彙、基礎語彙等の語彙表を紹介することを主要な目的としている。本報告書の編者は、この基本語彙、基礎語彙等の語彙表を採択する上で、原則としてであるが、次の6つの条件を立ててきた。

- (1) 共通語を中心とした現代日本語の語彙表であること
- (2) 基本語や基礎語などというように、選定の考え方や語数に制限を加えた語彙表であること
- (3) 領域や品詞等の上で、部分的でなく全体を取り上げた語彙表であること
- (4) 一覧表を提示していること
- (5) 語彙選定の観点や手順などを記していること
- (6) 言語教育あるいは言語調査を念頭において作成していること

これらの項目についてそれぞれ言葉を補っておきたい。

(1)「共通語を中心とした現代日本語の語彙表であること」は、現代日本の比較的公的な言語生活で使用されている共通語による語彙表という意味で、①外国語の語彙表は対象から除く、②方言や幼児語・児童語などは含めない、③古語や俗語などは含めない、という限定・条件を表している。

(2)「基本語や基礎語などというように、選定の考え方や語数に制限を加えた語彙表であること」は、基本的・基礎的な側面で制限を加えた語彙表に限定するという意味である。語彙表としては、まずは、国語辞典やアクセント辞典など大小各種の辞典の見出し語が思い浮かぶが、辞典のための見出し語といった選定でなく、表現力育成のためなどの目的を先に立てて選定していることを重視している。

(3)「領域や品詞等の上で、部分的でなく全体を取り上げた語彙表であること」とは、例えば感情形容詞の基本語彙とか、児童の遊戯などに使用される語句などというように、ある特定の領域・分野に限定している文献は含めないという意味である。言い換えると、言語教育や言語調査などの制限は設けるが、全体としては幅広くとらえた語彙表を取り上げようとするのである。

(4)「一覧表を提示していること」の意味は、基本語彙や基礎語彙などを理論的に追究している貴重な研究文献であるとしても、語彙表（語彙一覧表）を提示していない文献は取り上げないという意味である。基本語彙の考え方を検討する場合、例えば Peter Mark Roget の Thesaurus（現在は『Roget' International Thesaurus』などとして刊行されている。この「シソーラス」については本報告書の「2」の文献(6)『形象と理會』の箇所で注解をつけている。）を日本に紹介し、日本語に適用しようとした垣内松三氏の『国語の力』（大正11(1922)年）や、語彙体系などについて理論的な考察を加えている泉井久之助氏の『語彙の研究』（昭和10(1935)年）をはじめとする幾冊もの貴重な研究文献は粗略に扱うことができない。しかし、本報告では、それらの理論的に追究した研究文献でなく、具体的に一覧表までを提示している研究文献に光を当てようとしている。

(5)「語彙選定の観点や手順などを記していること」は、例えば、国語辞典類には、重要な語にはマークを付けるとか赤色で見出しを表示するといった扱いが見られるが、凡例などにその説明が行き届いた形で記されているものが極めて少ない。どういう観点で選定しているのか、また、語数は全体としてどれくらいかなど、語彙表として活用できる解説が望まれる。すなわち、語彙表をもつ研究文献を適切に選定し、本報告書で紹介するためにも、語の採否の手順や観点などを明記したものに限定せざるをえないわけである。

(6)の「言語教育あるいは言語調査を念頭において作成していること」は、実用的な見地を大切に作成しているかどうかの問題である。本報告で紹介する研究文献の中にはそうした問題を理論的に追究している

貴重な文献も含まれている。そして、(1)から(6)までを通して、「作成」という積極的な用語を使うことによって、単なる用語索引のような語彙表を除く意図を示してきた。

さて、これら6項目を選定の基準において、数多くある研究文献から適切な文献を選定する場合に、次の4・1～4・11として掲げた11種の文献類を除くことになる。それぞれに見出しを立て、例として文献名を掲げながら、その条件や事情などについて細かに検討してみたい。なお、文献名などがわかっていながら取り上げることのできなかった文献に3種がある。第1種は研究文献としてはまだ公表されていない文献、第2種はその他の理由で取り上げることができない文献、第3種は文献自体が確認できなかった文献である。それら3種は、最後に4・12、4・13、4・14として提示しておくことにする。なお、目次にそれぞれの項目の文献数を示したが、それらは、発行年月順に並べてある。

4・1 国語辞典・日本語辞典等の見出し語（8文献）

①『学習基本語いによる えとき国語じてん』平井昌夫編 光風出版 昭和31(1956)年6月

A5判 366ページ

文献①は、背表紙には『基本語彙による えとき国語じてん』、表紙及び内表紙には『学習基本語いによる えとき国語辞典』とあり、また、表紙には「小学校低学年向き」という小見出しも見られる。ここでは「学習」を付けている表紙の書名を採用した。文献①は、「学習基本語い」約1,600語を見出しに立てて、その下に意味を記し、平均5例から6例の用例を掲げている。また、見出しごとに1葉ずつの絵を掲げている。

ここで、「特に大切な言葉」の印のついた「あかるい」を例示しておきたい。

あかるい (㊤ くらい)

- (1) 月がでたからあかるい。
- (2) ゆきこさんはうれしいことがあったので、あかるいかおをしています。
- (3) のりおさんはあかるい子どもです。いつもにこにこしています。

(引用者注：人形を抱えたゆきこさんの楽しそうな表情の絵が掲げられている。)

ところで、この「学習基本語い」の約1,600語が、どういう資料を使用して、どういう目的や手続きで選定されたかについての記述は見られない。また、品詞あるいは意味の上でどういう配分になっているかについての記述も見られない。また、特に大切な言葉の数も、その選定の基準なども示されていない。巻末に掲げられている索引は約2,000語を数えるが、そこには、付録に掲げてある「動物のえ」「植物のえ」などの欄のそれぞれの語が取り入れられている。

②『新国語学習辞典』興水実監修 光文書院 昭和36(1961)年6月 B6判 672ページ

文献②の興水実氏による序文「この辞典の編集にあたって」を引用しておきたい。全5段落中の第3段落に「学習用国語辞典には、学習すべき語彙（語の集まり）を盛ってなければなりません。小学校修了時までに習得すべき語は何語あるか、どれとどれか、義務教育修了までにはどうであるか、そういう『学習すべき語彙』の選定が必要です。むかしは基本語という考え方が有力で、社会において効用の高い語が、ただちに学習すべき語であるとされました。いまはもう一歩進んで、基本語の上に基準語（学習基準語）が考えられます。」と述べている。

次に、「光文新国語学習辞典の特色」全5項目中の最初の2項目を掲げると、第1項目では、「昭和36年度から使用される新教科書に、どんなことばがでているかを調査して、学習すべき語いの選定に万全を期している。」と記した上で、「語い調査をした新教科書（国語）」として全11社の出版社名と各教科書名を掲げている。

次に、その第2項目では、本報告で取り上げている文献(42)『児童・生徒の語い力の調査 準備調査(昭和32年度)』の14,211語に基づいて、『『級別学習基準語』の裏づけをおこない、国語教育における今後の方向を指向している。』と記している。この第2項目については別に「文部省の調査による級別学習基準語い表」という見出しを掲げ、更に、「学習基準語の調査の目的」と「級別基準語の配列と表記」という小見出しを立てて、説明を加えている。

後者「級別基準語の配列と表記」の本文は「本書では、『児童・生徒の語い力の調査』による“学習基準語い”一万四千二百十一語を、学習の便となり、学習に直結するものとして、級別にして五十音に配列した。語の表記は、調査語を基準にしながら、当用漢字の範囲内の漢字を使っている。」と記している。そして、文献②の40ページ近くを割いて「文部省の調査による級別学習基準語い表」を、「1級語い(小学校4年程度)」から「6級語い(中学校3年程度)」までの6級に分けて、合計14,211語を五十音順に提示している。これは貴重な提案というべきである。ところが、問題点として、文献(42)に掲げてある14,211語を、小学校4年以上中学校3年までの6つの学年に均等に分割できるかということを指摘しなければならない。資料の14,211語は文献(42)で確認できるが、全体として難語句が多いので、かなり難解な語句を小学校4年生にまで配当せざるをえない結果に陥っている。例えば「クン・グン」で始まる語のすべてを掲げておこう。

- 1級(4年) 訓 群 軍歌 軍人 軍用犬 訓練
- 2級(5年) 軍医 軍刀
- 3級(6年) 軍楽隊 軍港 軍使 軍資金 群衆 軍勢 群島 軍馬 軍備 軍部 軍用
- 4級(中1) 君子 君主 郡部 軍法会議 訓令 訓話
- 5級(中2) 薫育 訓辞 軍事 群小国家 くん製 訓読 君命
- 6級(中3) 勲功 軍縮 軍閥

文献(42)は、『スタンダード和英辞典』(竹原常太編 大修館 初版は昭和16(1941)年。国立国語研究所の図書館には昭和23(1948)年11月30日第36版1冊が収蔵されている。)を資料として調査が企画・実行されている。そこから分かるように、上に引用した1級～6級の語群の時代性を見ることができそうである。

なお、文献②の名称を『新国語学習辞典』『光文新国語学習辞典』のいずれに求めるべきかの問題が残る。背表紙には小さな文字で「光文」が付いている。表紙及び内表紙には小さな文字で「光文書院」が付いている。奥付や「凡例」には「光文新国語辞典」とあって「学習」が欠けている。そこで、本報告書では「光文」を省いて『新国語学習辞典』とした。

③『幼児のこくご 絵じてん』全6巻 大久保愛監修 三省堂編修所編 三省堂

昭和46(1971)年12月 B4判 252ページ

文献③は、全6巻を収めるケースの表及び裏に「三省堂がおくる母と子の最初の国語辞典」「初めての誕生日から入学までのことば絵本」「2～5歳の幼児に必要な基本語1350語を収め、楽しみながら、正しく、ことばを覚え、ひらがなを覚えるようになる 画期的な、ことば絵じてん。」という説明が付いている。同じくケースに印刷された「この本の使い方(監修者からひとこと)」には、

わたしが、一児(Y子)の1歳から6歳までの記録を分析した結果(拙著『幼児言語の発達』昭和42)がもとになっています。

という大久保愛氏の説明が掲げられている。

次に、最初の見開き2ページには、

あいさつ あいすくりーむ あいだ あいろん あう あおい あおむし あかい あかちゃん
あかり・あかるい あがる

の12語が、それぞれ、絵あるいは写真を伴って、しかも、例えば「あおい」と「あかい」を並べるようにして掲げられている。脚注は、「あいだ」を例にすると、「あいだ [間] 4歳 ○子どもは、机と本だなのすき間にかくれて遊ぶのが好きです。」というように、親などに向けた説明になっている。

文献③にさし挟まれている全10ページの栞（しおり）に収録されている大久保愛氏の「語の選択と解説を終えて」の1節「語をどのようにして選んだか」には、「見出し語を選んだり解説をするのに参考にした文献のおもなもの（順不同）」として、次の8種の文献が掲げられている。ただし、見出しを選ぶのに『幼児言語の発達』以外に、それらの資料をどのように用いたのかは明確でない。なお、本報告書の「2」で紹介する文献については、文献番号と書名等だけに限ることとする。

- 文献(40) 『教育基本語彙』
- 文献(44) 『現代雑誌九十種の用語用字 第一分冊 総記および語彙表』
- 文献(47) 「日本語教育における基礎学習語」
- 文献(53) 『幼児言語の発達』
- 文献(59) 『外国人のための基本語用例辞典』
- 国立国語研究所『幼児のことばカード集 1－5』（非売品）
- 幼児のことばの資料もろもろ（引用者注；人名等は省略する。）
- Beginner Book Dictionary 1965 初版 by P.D.Eastman (Random House, Inc.)

④『こども ことばえじてん』村石昭三監修 角川書店 昭和57(1982)年11月

本冊A 5判 752ページ 別冊「てびき」A 5判 165ページ

文献④は、文献(115)『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』（工藤真由美著）の資料6種の中の1種に採用されている。文献(115)の解説によると、文献④の収録語数は約5,500語で、その中の約4,000語が五十音順に配列されている。この約5,500語、そして、五十音順に配列されている約4,000語が、どういう資料に基づいて、どのような方針の下に選定されたのかについての説明は一切記されていない。

次に、文献④の監修者村石昭三氏による「このほんは あなたのともだちです」全3段落の第1段落の本文を引用してみよう。なお、本文は総ルビであるが、引用ではそのルビを省いた。

いままで出ていた辞書は、小学校三・四年生から上の子どもがつかうものばかりで、それ以前の子ども用のものは、ありませんでした。当然、小さい子どもにも辞書は必要だったのですが、ここに初めて、幼児から小学校低学年の子どものための絵辞典が、完成しました。

文献④の本冊の「あ」の見出し語を順に20数語引用してみよう。なお、かっこ内の漢字表記は引用者が加えたものである。

ああ アーケード あい（愛） あいこ あいことば あいさつ あいず あいて アイスクリュー
あいだ アイロン あう（遭） あう（会う） アウト あお あおしんごう あおぞら あおむけ
あおむし あか（垢） あか（赤） あかしんごう あかいはね あかちゃん あかとんぼ あかり

これらの中の「あいさつ」は1ページを割いて、「おはよう」や「おやすみなさい」などのあいさつことば15語を提示している。また、「アウト」は反対語「セーフ」を掲げるといった配慮を加えている。なお、それぞれの絵は親しみやすいように配慮されている。これらの「あ」から始まる20数語を見ると、例えば色彩を表す「あお、あか」で言えば、いくつもの複合語は掲げられているが、「あおい、あかい」がなく、また「あおいろ、あかいろ」がない。なぜ選ばれていないのかの理由はつかめない。

次に、別冊の「てびき」は、それぞれの見出しの意味を説明している。「アーケード」や「アイロン」のように絵の提示で十分な語は見出しだけを掲げている。例えば「あい」を紹介すると、「子どもにとって、むず

かしいことばや、わかりにくいことばは、パンダの絵をつかっています。親が子をかわいがることや、おとしよりをたいせつにすること、また、動物をかわいがったり、植物をそだてるきもちなどを例にして、親子で、話しあってみましょう。」という説明になっている。

なお、文献(115)の「収録語数は約5,500語で、その中の約4,000語が五十音順に配列されている」という説明から導かれる残りの約1,500語は、別冊の「てびき」の下段の脚注欄に掲げられている語で、上記の見出し語の範囲では「アイアイ アイスホッケー あいちけん あいびきおくら アイロンだい」の5語になる。これらは、例えば「あいさつ」や「いえでつかうもの」のようにたくさんの語を集めて掲げている「ひろいページ」に出現している語である。

⑤ 『光村学習国語辞典』石森延男監修 光村図書 昭和58(1983)年1月初版 A5判 1151ページ

文献⑤は、見出し語の総数は約25,000語で、その中の約4,000語の見出しを赤字で表記している。その見出しの語数について、「この辞典を使う前に」の中で「見出し語に約二五、〇〇〇語をだしました」という小見出しを掲げて、次のように述べている。

作文を書いたり、人と話をするときに、正しい言葉づかいができ、また、たくさんの言葉を知っていて、それらを自由に使えるのは、すばらしいことですね。あなたがそうなることを願ってこの辞典は作られています。

見出し語には、社会科や理科などで使う特別な言葉や、人の名前、本の名前、短歌などは入っていません。その代わりに、あなたがふだんよく出会う言葉、知っていなければこまる言葉がたくさん入っています。三年生以上の国語教科書はもちろん、他の教科書からも、読むのに必要な言葉を選び出して入れています。ほかに、日本語として大切だと思われる言葉も入れました。そのため、きびしく選ばれた見出し語の数が約二五、〇〇〇語にもなりました。

次に、赤字の見出しを、最初のページから順に20語ほど漢字仮名交じりの表記で抜き出してみよう。

あ ああ あいさつ 間 あいにく あう(会・合・遭) あえて 青 青い 仰ぐ 青くさい

あおる 赤 赤い あがく 赤字 明かす 暁 あからさま 上がり 上がる 明かるい 秋 空き

これらの語例から、赤字の見出しは、基本語彙として選定されていることがわかるが、全体の語数は何語であるのか、どういう手続きで選定したのかなどことは「解説」に一切説明されていない。しかし、実際に、赤字の見出しの各語彙などに割いている行数がほぼ20行と10行の2種であること、また、この報告書の編者自体が実際に語彙を担当した経験からも、語の選定については適切な手続きが取られていたこと、赤字見出しの基本語彙として約4,000語を各種の資料を参考にして選定したことなどは分かるが、その説明は一切記されていないのである。

⑥ 『小学 ことばのつかいかた辞典』林史典・金子博・靄岡昭夫・教育技術研究所編 教育社

昭和59(1984)年10月 A5判 705ページ

文献⑥は、帯に「基本語3,000を採録。コンピュータで小学教科書全出現語を調査・分析して精選しました。」「用例数一万五千。これ以上ない豊富な用例です。」などと記されている。しかし、「小学校の教科書全出現語」としてどの教科を調査したのか、その教科のどの種の教科書を調査したのか、何学年分を調査したのか、その結果、どういう用語が析出されたのか、どのような判断で3,000語が選出されたのか、などについては、例えば「凡例」などに説明が見られない。「見出しのことば」には、「そこで、みなさんがふだん使っている教科書をくわしく調べて、じっさいの例をとっておぼえておいたほうがよいと思う言葉、約三千語をえらんで、この辞書を作りました。」という子供向けの説明はあるが、それ以上の説明はない。辞典類の編集は、

緻密でしかも長期にわたる調査研究の上に成り立つものであるが、その事実を序言などに記述する習慣がない。むしろ、記載しない潔さをよしとする慣習がある。それで、基本語彙等の研究文献として紹介しがたいのである。この古武士的な慣習はぜひとも打破して必要な事項は記すようにしてほしい。なお、教育技術研究所では、『資料 国語教科書文例（小学校編）』（昭和58(1983)年4月 教育社）という基礎調査を行っている。その延長線に、小学校教科書の用語調査があるのであろう。

文献⑥の巻末には「この辞典にのせたことば」として約3,000語の見出しが五十音順に並べられている。この一覧表は軽視できない価値をもっているように思われる。最初の20数語を掲げておきたい。

あい	あいだ	あう	あかい	あき
あいかわらず	あいて	あおい	あかす（開かす）	あきらか
あいさつ	あいにく	あおぐ（仰ぐ）	あかり	あきらめる
あいじょう	あいま	あおぐ（うちわで）	あがる（上・挙）	あきる
あいず	あいまい	あおる	あかるい	あきれる

⑦『はじめての国語じてん』林四郎監修 NHK出版 平成3(1991)年12月 A5判 549ページ

文献⑦は、「筆じゅん」の箇所「小学校三年生までに習う漢字四四〇字を五〇音じゅんにならべ、筆じゅん（漢字の書きじゅん）を示しました。」と記されていることで明らかなように、小学校3年生の児童が使えること、あるいは小学校3年生までの児童でも使えることを目的とした辞典である。「お母さん・お父さん・先生がたへ」の案内中の小見出し「この辞典のねらい」は、次のように記されている。このように見出しの選定の手続きについて記載している辞典が少ないので、引用しておきたい。

この辞典には約2300語の基本語がおさめてあります。見出し語は基本語を選定するという立場から、国立国語研究所編『日本語教育基本語彙七種比較対照表』からまず500語を選びました。次に小学3年生までの教科書と低学年向けの読み物から、基本的な語彙、特に動詞・形容詞・副詞に重点を置いて補充しました。また、「ことばの広場」には、文章を書いたり、本を読むときに、ぜひ知っておいていただきたいことばや慣用的な言い回し約300語を、使い方がわかるような形で示しました。

文献⑦の「この辞典のねらい」は、引用文に明らかなように、本報告で文献(81)として紹介する国立国語研究所編『日本語教育基本語彙七種比較対照表』が500語を選んだ資料として提示されている。しかし、文献(81)に取り上げられている7種の資料をどのように組み合わせたとところから500語を選出したのかが明確でない。文献(81)に掲げられている約6,000語の見出しから、何らかの見方あるいは基準を立てて500語を選出したのであれば、逆に、文献(81)に取り上げられている他の語が文献⑦に含まれないことになるが、そうでもない。ちなみに、文献⑦の「あ」の見出し104語の中の95語までが文献(81)に取り上げられている。その104語の中で文献(81)の見出しに登録されていない語は、漢字仮名交じりで表記すると、

愛嬌 合わせる 味わう あちこち 当て あどけない あべこべ 誤る 荒っぽい

の9語で、これらは口頭表現に係る語が多い。つまり、上に引用した解説では、約2,300語がどのような判断・基準で選定されたのかはよくわからないのである。

文献⑦はその後、見出し語を約100語増補した「新版」として刊行されている。

なお、10数冊まで確かめることのできた小学生用の国語辞典類は、文献⑤のように重要語を赤字で表示するものなどがある。それぞれ独自の調査研究に基づいて重要語を選定しているのであろうが、その見出しの選定

についての明確な記述の見られる辞典に出会うことができていない。

⑨ 『三省堂国語辞典』第四版 三省堂 平成4(1992)年2月 A5判 1,356ページ

文献⑨の最初に置かれている「三 目的に応じた辞典の使い方」の小項目「8 学習重要語の利用のしかた」に、「見出しの上に☆☆のついていることばは、中学卒業のときまでに身につけてほしいことばです。これを学習重要語と呼びます。学習重要語は教室で学ぶときだけでなく、将来おとなの社会にはいり、おとなのことばを身につけると、特にたいせつなことばです。」という説明がある。その二つ星の語を「あ」の最初から「あおー」まで順に漢字仮名交じりの表記で紹介すると、

アーティスト 相容れない 哀歎 哀願 愛護 哀愁 愛唱 哀惜 愛惜 相対する 愛着 哀調

アイディア 哀悼 合の手 曖昧 喘ぐ 敢えて 青息吐息 青写真 煽る

の21語にマークが付けられている。これらの語が「学習重要語」に選定されるためには、何らかの見方に基づく慎重な手続きがあったものと考えられるが、簡便さを旨とする国語辞典であるために、その説明は上記以外のものしかない。そこで、同じ出版社の同じく中学生を対象としている『例解新国語辞典』第5版第6刷（平成11(1999)年1月）で確かめてみると、上記の21語の中では、

哀愁 アイデア 曖昧 喘ぐ 敢えて 煽る

の6語には重要語5,000語のマークが付いている。なお、この重要語は、最重要語1,000語に続く5,000語という意味で、「あおー」までの範囲では、33語（最重要語6語、重要語27語）が数えられる。この文献にも凡例等に説明がない。

次に、同じ出版社から刊行されている『新明解国語辞典』第5版（平成9(1997)年12月）は、3,439語の重要語（※1,019語、※2,420語）を選定していて、「あおー」までの範囲では15語（※6語、※9語）が見られる。上記の21語では「アイデア・曖昧」の2語が求められるだけである。本文献には巻末に重要語に関する詳しい説明がある。しかし、その説明は抽象的であって、それぞれの語の選出に関する具体的な手続きが述べられているわけではない。語の選定に関する具体的な手続きは語彙指導の上で重要であると思われるので、今後は明記するようにしてほしいところである。

本報告書では、こうした理由・意図で国語辞典のすべてを割愛することにしたが、今後の課題として、国語辞典に掲げられているいわゆる「重要語」について対比して、全体のもつ意義を解明しなければならない。特に、重要語には一般に基本語を当てはめているのに対して、『三省堂国語辞典』の学習重要語は、中学生の思考力や認識力に必要な語を選定しているように判断される。そういう選定の方針を重要語として選ばれている語の方面から検討する必要がある。

なお、本報告書では、次の3冊の辞典は公的な機関で何人もの適切な委員の協力を得て編集された点を勘案して「2」で取り上げることにした。

文献(56) 『実用和英辞典』海外技術者研修協会編 海外技術者研修調査会刊 昭和45(1979)年6月

文献(59) 『外国人のための基本語用例辞典』文化庁編 大蔵省印刷局刊 昭和46(1971)年8月

文献(98) 『基礎日本語学習辞典』国際交流基金編 凡人社刊 昭和61(1986)年12月

また、次の1冊は、辞典という名称をもつが、内容は語彙表そのものであるので採用している。

文献(119) 『入門日本語辞典』京都橘女子大学・海外に日本語教材を送る会 平成9(1997)年12月

4・2 教科書の巻末につけられた語彙表（6文献）

- ① 『HOW TO SPEAK JAPANESE ROMANIZED』田尾司六著 福村書店 昭和21(1946)年7月初版 昭和26(1951)年10月10版 B 5判 291ページ

文献①には「Print Edition 1938」「Reprint 1940」などの表示が見られる。ここでは、昭和21(1946)年版を紹介する。本書の前半は、日本語の独習用の教本であるが、後半の133ページ以降は、「APPENDIX II COMMON AND USEFUL WORDS (about 2,000) ENGLISH-JAPANESE」「APPENDIX III COMMON AND USEFUL WORDS (about 2,500) JAPANESE-ENGLISH」になっている。残っている帯には「進駐軍のみなさんに喜ばれる日本語読本 — 日本語の発音から始めて朝晩の挨拶や家庭で車中で美しい日本語は此の一冊から — 常用単語2,500語付き」などと記されている。この日英の語彙表約2,500語は、次に例示するようにアルファベット順に掲げられている。

abiru	…………	to bath
abumi	…………	stirrup
abura	…………	oil
aburami	…………	fat (meat)

文献①の語彙表がどのようにして作成されたかについては記述がない。

- ② 『WORD BOOK Vol. One』長沼直兄著 開拓社 昭和25(1950)年11月初版

昭和39(1964)年12月改訂版 昭和47(1972)年4月改訂版増刷 B 6判 273ページ

文献②は、『再訂 標準日本語読本 巻一』（B 6判 273ページ。第1部はNo.1～No.50、第2部は第1課～第30課）の別冊仕立ての語彙表である。この『WORD BOOK Vol. One』は、大きく前後2部仕立てになっている。前半部は、本冊に使用されている語句を順に掲げて、その発音及び英訳を付けている。発音はアクセント表示に特徴がある。前半部は第1課の本文の順に語句を掲げてあるが、本文のページが示されている。後半部は、ほぼ100ページの「ALPHABETICAL INDEX (Japanese-English)」になっている。その語彙索引は、それぞれ見出しとして、ローマ字、漢字仮名交じりの表記を並べ、英語訳を付け、第何部第何課であるかの所在を示している。その例を最初のページの末尾の3語で示しておきたい。

ainiku	あいにく	unfortunately	II-2
aisatsu(suru)	あいさつ(する)	(v.i.) to greet; salute	II-24
aiso yoku	あいそうよく	affably; amiably	II-29

これは、日本語の学習者に親切な配慮ということができる。なお、『WORD BOOK Vol. Two』は、第1巻に使われていない語句だけを取り上げている。したがって、最終巻である『WORD BOOK Vol. Seven』は、かなり難解な語句がずらりと並んでいる。

なお、文献②の類書に『NAGANUMA'S BASIC JAPANESE COURSE』の別冊仕立ての『GRAMMAR AND GLOSSARY』（昭和25(1950)年11月初版 昭和40(1965)年10月改訂版 開拓社A 5判 291ページ）がある。この巻末に付いている索引は、「Japanese-English (183～224ページ)」と、「English-Japanese (225～285ページ)」の2種で、「Japanese-English」は、文献(47)「日本語教育における基礎学習語」が資料の1種として採用している。その文献(47)によれば、この索引には1,429語の見出し語が配列されている。ここで、文献②とその類書である『GRAMMAR AND GLOSSARY』の見出し語を少し対照させて引用しておきたい。各見出しは、ローマ字表記だけを引用する。

ここに引用してみたように、『WORD BOOK』の語句のほうが多くて、この一覧表の限りでは『GRAM-

MAR AND GLOSSARY』にあって、文献②にない語はわずかに「アイロン／（に）アイロンをかける」だけである。

WORD BOOK	GRAMMAR AND GLOSSARY	WORD BOOK	GRAMMAR AND GLOSSARY
a		ainiku	ainiku
ā			airon
abekobe(ni)			(ni)airon o kakeru
abunai		aisatsu(suru)	
abura	abura	aisō yoku	
achikochi		aisumanai	
achira		ā iu	
achirakochira	achirakochira	aji	
agaru	agaru	(～o miru)	
ageru	ageru	akabō	
(-te)ageru	(-te)ageru	akahata	
aida	aida	akai	akai
aikawarazu		akambo	akambo

③『NIHONGO NO HANASIKATA(HOW TO SPEAK JAPANESE)』国際学会日本語学
校著 国際学会発行 昭和29(1954)年8月初版 昭和48(1973)年7月改訂版第6刷 A5判 185ページ

文献③は、全185ページの後半の90ページ近くを割いて「JAPANESE-ENGLISH VOCABULARY」を掲げている。その見出しは、人名を除くすべての語をアルファベット順に配列し、各用例の意味を英語で与え、その使用される課の数字を提示している。多義にわたる場合は、意味別に英語表現が付けられている。和英辞典的な役割を有している。そういう意味で、文献③は力を入れて語彙表を作成していると評価することができる。しかし、これも文献②などと同じく、前半の82ページ分の本文編全60課に使用されている語や句を拾って整理した語彙表である。例えば、漢字仮名交じりの表記で「かしこまる」以下126～127ページの2ページ分の全見出しを掲げると、

かしこまる 貸して 貸す 方(加藤という方) 買って 買う 川 買わなければ 火曜日
風・風邪 毛 一軒 今朝 消しゴム 消して 消す 本 気 聞いて 機械 聞く 決め(よう)
着物 気持ち 昨日 絹 金曜日 嫌い

の28語である。「買う」の関連では「買って」「買わなければ」も掲げられている。「決め(よう)」は、見出し「決める」が掲げられている。「風・風邪」は「冷たい風、風が吹く、風邪を引く」などが用例として取り上げられている。以上、少し見出しを掲げて紹介したように、この語彙表は、先に作成された本文に基づく語彙表という性格をもっている。なお、文献③は、文献②に関連して紹介した『GRAMMAR AND GLOSSARY』と同じく文献(47)「日本語教育における基礎学習語」が資料の1種として採用している。文献(47)には、文献③に収録されている「見出し語(ゴシック体)」の数は、1,098語である。(あとがきには、931語とある)」と記されている。

④ 『語い表 ― 新篇“新しい国語”による』東京都中野区立仲町小学校

昭和33(1958)年2月 A5判 123ページ

文献④は、「新しい国語」の全用語を単元別、題材別に調査した文献である。その概要を「凡例」全6項目中の前3項目の引用によって紹介しておきたい。

1. 語いの抽出は、現在使用している東書の「新編・新しい国語」に限定した。
2. 語いの配列は、学年別、題材順とした。
3. 軽重の欄に○印のある語いは、特に重視して指導することを示す。

単 元 (一, 日 本 の 国)					
題 材	語 い	軽 重	新 出	指 導 例	反省記録
1. 日本の国 (一) 千年の都	地球儀		○	実物	
	寄りそう	○	○	短文作り 動作化	
	かけ橋		○	図解 意味	
	帆船		○	写真	
	異国	○	○	意味 列挙	

文献④の一覧表の例として、ここでは、第6学年の第1単元の最初の箇所(87ページ)を掲げてみた。この表に明らかなように、各語句は、出現順に配列されている。授業の実際には役立つ組立てになっているが、国語教科書の用語を調査した語彙表としては十分とは言いがたい。

⑤ 『学習基本語彙表』浜松市立上島小学校 昭和57(1982)年 B5判 84ページ

文献⑤は、次の方針で語句が選ばれている。

- 教科書のそれぞれの単元の中から、子供がその文章を読解するにあたって、理解していないと読解が困難になると思われる語句を選ぶ。
- 小学生が作文などに十分使用できる語いとして選ぶ。

文献⑤は、単元ごとに10語程度が選定され、出現順に配列されている。そして、その中から、各単元の重点語句3～5語を選び、○印を点けている。

文献⑤は、文献④と同じく教材に依存した構成になっている。

⑥ 『ビジネスマンのための実戦日本語』社団法人 国際日本語普及協会 講談社 平成10(1998)年3月

B5判 238ページ

文献⑥は、学習者の便宜を考慮に入れて英語表現を前面に出しているが、ここでは併記されている日本語表現で紹介する。第1課～第17課のそれぞれの課に何カ所かずつの「VOCABULARY」のコーナーが用意されている。それらの「VOCABULARY」に取り上げている語句は、既出の語句を別にしても、例文に使われているすべての語句ではない。例えば、第4課「意見を聞く、質問」の「EXAMPLE DIALOGUES」から一組の会話を引用してみよう。下線を施した語句が取り上げられている。

運転手 明日のお迎えは午前7時ということでよろしゅうございますか。

社長 明日は得意先に直行したいから、8時半にしてくれないか。

つまり、本文献では、「運転手 明日 午前 7時」などは既習語として省略している。これは見識ある語句の提示の成果である。

巻末の「Japanese-English Glossary」には、1,000語あまりの語句が五十音順に配列されている。「あ」の

すべての語句を漢字仮名交じりの表記で引用してみよう。誤解しやすい語句には英語を付けた。

間柄 あえて 赤字 挙げる 与える 扱う 悪化する 集める 圧力 あて addressed to 宛先

アプローチ 余る 歩み寄る あらためて 併せて あんた you (informal) アンテナショップ

文献⑥は、このようにビジネスの実戦日本語に使用される語を選定している。本報告の「2」の文献としては採用できなかったが、小・中学校の基本語彙の選定の上で参考になると思われる。

なお、次の1冊は、基礎日本語という発想で選定されているように判断されるので、教科書巻末の語彙表ではあるが本報告書の「2」で例外的に取り上げている。

文献(9)『速成日本語読本』上巻付録「語彙表」昭和10(1935)年9月 在満日本教育会教科書編輯部

4・3 国語・日本語学習者の独習用に編集された語彙表(5文献)

① 『中学国語基本語句3100語』阪本一郎監修 むさし書房 昭和50(1975)年9月 A5判

232ページ

文献①は、内表紙には横書きの書名をはさむように、上側に「正しい用語と用字」、下側に「熟語の組み立て・意味・用例・類意語・同意語・反対語・応用」という説明が掲げられている。「はしがき」の最初の「先生方へ」では、「本書は、小学校高学年から中学生に必要な基本語句三一〇〇語を抽出し、そのおのおのについて、読み・熟語の組み立て・意味・用例・同意語・反意語・類意語・応用例を示したものです。」云々と記されている。どのようにして「小学校高学年から中学生に必要な基本語句三一〇〇語」を抽出したのかに関する記述はない。試みに、最初の2ページ目の全見出しを掲げておきたい。なお、各見出しの表記は、漢字表記の面で教育漢字はゴシック体、それ以外の当用漢字は明朝体で表記し分けているが、ここでは区別しない。

アーチ 哀願する 哀愁 哀調 哀悼 愛護 愛好する 愛郷 愛着 愛唱する あいまいだ

あえぐ あえて あがく 赤字 暁 あからさまだ 悪意 悪評 悪癖 悪化する あくせく

アクセント あざける 浅瀬 あさはかだ

② 『中国語分類単語集』沢山晴三郎編 大学書林 昭和55(1980)年6月 B5判 283ページ

文献②は、日本語を見出しに立てて中国語の発音と漢字表記を確認する日中辞典的な特徴を備えている。まず、「はしがき」の一部を引用しておきたい。

本書は大きく三つの部分に分かれています。第Ⅰ部には一般的な語彙を集中的に収録しました。第Ⅱ部には、精神・感覚・行為等に関連する語彙を集中的に収録しました。この部分の見出し語の選択にあたっては、国立国語研究所編『分類語彙表』(秀英出版)を参考にしました。第Ⅲ部では、この種の参考書がとにかく名詞に傾きがちなので、それを補うために、平素比較的常用される動詞・形容詞・副詞等を集めました。ただ、この部分は分類が困難なのであいうえお順にしてあります。また、この種の語彙には多義的なものが多いので、出来るだけそれにそって訳語をとりいれるようにしました。

次に、この目次の大項目を示しておきたい。なお、括弧内の数字は小項目の番号である。

第Ⅰ部 一般語彙 (1～35)

第Ⅱ部 精神・感覚・行為等に関する語彙 (1～66)

第Ⅲ部 基本語彙 (あいうえお順)

索引

文献②の「第Ⅲ部 基本語彙」は、名詞を省いた基本語彙を五十音順に配列している。そして、最後に置かれている「索引」は、第Ⅰ部及び第Ⅱ部に掲げられた語を五十音順に配列し、その使用ページを記しているが、第Ⅲ部に掲げられた語は取り上げていない。本文献は、基本語彙を検討する上で貴重な意味をもっているように思われる。

③ 『読んで話す日本語ボキャブラリー』Alistair C. G. Seton 他著 北星堂書店

昭和59(1984)年5月 B 6判 228ページ

文献③は、基礎語としての2,000語を含む5,950語を取り上げ、1.家族、2.体、3.健康などというように全体を26項目に分け、それぞれを更にいくつかずつに細分している。例えば、「6.教育」は、教育、言語、文学、数学、科学、歴史、地名、その他の学問の8類に分類して、それぞれに該当する用語を配列している。いわば、学術用語集に類する語彙表である。それぞれの語は、「梅干 umeboshi pickled plum」というように、見出し、ローマ字による読み、英語訳という形をとっている。

④ 『997語で読める日本語』加納千恵子・藤田正春・阿部直美他著 北星堂書店

昭和60(1985)年10月 B 6判 260ページ

文献④は、本報告書の「2」で取り上げている文献(81)『日本語教育基本語彙七種比較対照表』(国立国語研究所編 昭和57(1982)年3月20日 大蔵省印刷局)をもとに700語を選択し、また、8冊の初級日本語教科書の用語を子細に検討して約300語を補充し、最終的に997語を選定するに至っている。これらは、名詞478、動詞198、形容詞117、その他104という構成になっている。選定の観点を「読む」にしているために、あいさつの言葉や日常生活の言葉などは除かれている。程度は高くて日本語能力試験用の2級ないし1級の語を集めたものであるが、全体としては土居光知氏の文献(5)『基礎日本語』的な性格の語彙表になっている。

⑤ 『外国人のための日本語分野別重要単語 1300』K. I. T. 日本語研究所編 凡人社

平成4(1992)年4月 新書判 255ページ

文献⑤は、例えば第1章「これだけは覚えよう! 最重要単語300」などというように、全体が実用的な取り上げ方になっている。

この種の学習参考書は何冊も刊行されているようである。そこで、文献⑤のように、日本語学習のための日本語と外国語とを対照させたような語彙表は、更に資料を収集して、その系譜や傾向を調査する必要があるであろう。ここでは、たまたま近くにあった文献⑤を検討してみただけである。新刊の書店には何冊も並べられている。そういう意味で、これらについては、今後の調査研究に残すことにした。

4・4 漢字との関係で取り上げられている語彙表(3文献)

① 『尋常小学国語読本に現れたる漢字の調査』新潟県佐渡郡小湊尋常高等小学校国語研究部

昭和7(1932)年7月 A 5判 105ページ (謄写印刷 表紙だけ活字印刷)

まず、文献①の「序言」の初めの本文を引用しておきたい。謄写印刷用に鉄筆で記されている「序言」は例えば「随って」などの促音の文字が例外なく小さく表記されている。引用に際しては原文の表記に従うようにした。

尋常小学国語読本に現れたる漢字調査が教授上直接必要になるのは、巻を重ね学年の進むに随って、併

も尋常科五六学年頃に於て最もその必要を感じずと思ひます。私は嘗て尋常科五六学年を割合に多く扱つて見ましたが、国語読本の漢字教授にあたつて、自分勝手の読方が出来なくて、「前にどうならつてゐるか、此の場合どう読むのが正しいか」と云ふやうな疑問に遭遇することが度々ありました。かういふ時に此の漢字調査があると大変便利だらうから自分自身の為ニ調べて見たいと思つてゐました。それで昨年来、寸暇をさいて約一ヶ年を通じて調査に精進し、やうやく一通りの調べがついて出来上がったものが、此の字典的配列です。此の度、当校に於て県下町立小学校校長会議（が）開催されるので、その際、配布してはとの事で、取急ぎ謄写印刷に附した次第であります。それ故に不備な点や注意しながらもなほ多少の誤謬なきをまぬかれなと思ひます。

六	後		常
新	4	21	^{ノチ} 後ニハキツト……
替	4	42	^{アト} 後でみんなにわらわれました
〃	5	58	^{ウシロ} 山のみどりを後に
〃	6	39	^{ニフエイゴ} 入営後
〃	7	40	^{コウビン} 後便
〃	8	8	^{オク} 一騎後れ二騎後れ
仮	7	40	^{あちご} 越後
〃	10	130	^{ごだいご} 後醍醐天皇

八	御		常
新	5	39	^{ゴシンボク} 御神木
替	5	41	^{オン} 御名
〃	7	7	^{ミタミ} 御民
〃	8	45	^オ 御願ひ
〃	8	81	^{ギョ} 御製
仮	10	3	^{ぎょえん} 旧御苑
〃	10	120	^{ぎょえん} 御宴
〃	12	6	^{たけみかづち} 建御雷命

文献①には、新出漢字1,366字、仮名付きにて終る漢字（引用者注；ルビを振る漢字）377字、合計1,743字が取り上げられている。その中から「後」「御」の2字を例に掲げてみた。この一覧表のそれぞれについて、少し説明すると、「後」の上部の「六」,「御」の上部の「八」は、同じ部首「ぎょうにんべん」の6画、8画を表す。また、「常」は当時の常用漢字,「新」は新出漢字,「替」は読替え漢字,「仮」は仮名付き漢字を表す。その他、それぞれの巻、ページが示されている。「凡例」の最後に、「尚取扱上追憶に便するためにつとめて短語又は短文を記し、仮名遣を正確にし、動詞等は終止形を用ひず、読本のまゝに書いておいた。」という配慮が記されている。

② 『新旧読み替えを明らかにした漢字語彙調査表 中等国語(改訂版)』中等国語編修委員会

三省堂出版 昭和28(1953)年11月 B4判 136ページ

〔構成〕

まえがき（再版）	……………	1ページ
凡例	……………	1ページ
使用漢字便覧（索引・初出表）	……………	(1)～(18)ページ
漢字語彙調査表（五十音順）	……………	1～136ページ

まず、文献②の「まえがき」の後半部を引用してみたい。

小学校国語教科書は漢字の新出・配列・ひんどに相当な注意が払われているし、また当然そうあらねばならないが、中学校に置いては、小学校で習得した漢字が基盤となって教科書が作られてあるために、

① 小学校で習得した漢字・語いが不明確である。

② 漢字習得より他の言語経験の習得に重点が置かれている。

といった立場から、配列や新出・ひんどなどがさほどに考慮されていないようである。

現状としては、教科書の漢字使用のありさまを明確にして、その範囲内で漢字指導を計画するより方法はないのである。

ところが、現場は、漢字負担が大きすぎるために、その解決方法に悩んでいるのが、偽りない現状であって、教科書に対してこの考慮を強く要望している。

この意味において、1. 教科書の漢字使用の実態を明らかにし、2. 漢字の読みごとにその初出箇所を示し、3. 漢字ごとに使用語いをまとめ、4. それを教科書に出てくる順に配列し、漢字や語い指導の手がかりとした。

次に、漢字語彙表は、「語い」「ひんど」「初出」の3つの欄で構成されている。ここで、「愛」を例にすると、次の表のようになる。なお、「初出」の欄の「1上14」以下の表示に明らかなように、各見出し語は、巻・ページの順に配列されている。

語 い	頻度	初 出	語 い	頻度	初 出	語 い	頻度	初 出
愛	(81)	教	国語 —	1	" 172	非 — 国者	1	" 144
アイ	77		— 読	8	2上 28	— 慕	1	" 150
— 用	1	1上 14	— 知県	1	" 155	親 —	2	3下 18
— 犬	1	" 40	慈 —	1	2下 98	— 着	1	" 190
— 情	17	" 53	博 — 主義	1	" 111	エ	2	
母性 —	1	" 84	— 子	1	3上 30	— 媛県	2	1上 20
—	14	" 141	最 —	1	" 104	あし	2	
— する	22	1下 142	— 国	2	"上 144	— 鷹山	2	1上 125

「愛」に続く「(81)」は、「愛」の用例が全部で81例であることを表している。次に、その下の「アイ77」は、「愛」の音「アイ」の熟語例が77例あることを示している。「エ2」「あし2」も同様である。文献②は、語数などは示していないが、綿密な調査に基づく貴重な成果であると言える。

◎ 『学習基本語彙表と教育漢字との関連（昭和57年度前期内地留学研究報告書）』長島恵子

B 5判 250ページ 謄写による簡易製本

文献③は、栃木県梁田小学校教諭長島恵子氏が宇都宮大学に内地留学を行ったときの研究報告書である。文献③は「1 目的」「2 方法」「3 分析表」「4 考察」「5 今後の課題」の5部で構成されている。まず、「1 目的」の全文と「2 方法」の主文を引用しておきたい。

1 目的

本研究は、学習基本語彙（梁田小版 1981年）と学年別配当表との関連を明らかにすることを直接の目的とした。

合わせて、今後学習基本語彙表を再吟味し、再整理の機会が到来した際、より基礎的な学習基本語彙を作るための基礎資料となれればと考えたわけである。

※ 本研究に示される「学習基本語彙表」は、すべて梁田小版（教育出版 1981年）である。

2 方法

学習基本語彙表をもとに、次に示す第1表、及び第2表を作成し、多面的な分析を試みる。

次に、「3 分析表」は、第1表「学年別漢字配当表から見た学習基本語彙表」、第2表「学習基本語彙と学年別漢字配当表との関連」で構成されている。ここでは、第1表の第3学年の最初の3つの漢字を紹介しておく。

この第1表は、例示のように、学年別漢字配当表の漢字を学年別五十音順に配列し、それに該当する学習基本語彙を当てている。

語位	漢字	音訓	教科書の語形	学習基本語彙（梁田小版）					
				A		B		C	
1	悪	アク オ わるい	5 善悪 * 悪いと思う	悪口		悪			
2	安	アン やす い	安心 4 安売り	安全		安心		安定	不安
3	暗	アン くらい	4 暗唱 暗い夜	うす暗 い	真っ暗	暗闇			

この第1表の中の「学習基本語彙」欄の「悪」に「わるい」がない、「安」の欄に「やすい」がない、「暗」の欄に「くらい」がないのは、いずれも、本報告書の「2」で紹介した文献(79)『小学校における効果的な語彙指導』の学習基本語彙にそれらが入っていないからである。

次に、第2表は、梁田小版の学習基本語彙表の見出し語を熟知度でA B Cに区分し、それぞれの見出し語に使用されている漢字が第何学年に配当されたものであるかを記したものである。

4・5 乳幼児の言語発達を取り上げた語彙表（2文献）

- ① 『幼児の語彙発達の研究』前田富祺・前田紀代子著 武蔵野書院 昭和58(1983)年12月 A 5判 220ページ

文献①の附表Ⅰは、言葉を覚えた1:6歳から3:0歳までを半年ずつの3期に区切り、採取できた言葉を、文献(49)『分類語彙表』の分類に従って分類している。附表Ⅱは、それぞれの項目の語数を示し、その全体に占める割合を提示している。また、続編『幼児語彙の統合的発達の研究』（平成8(1996)年5月 A 5判255ページ）は附表として「三歳までに出現した動作語一覧」を掲げている。これらは乳幼児の言語発達を研究する上で貴重な資料といえることができる。

- ② 「藤友(1980)による四歳児・五歳児・六歳児の基本語彙」藤友雄暉執筆『子どもの言語心理2』福沢周亮編 大日本図書 昭和62(1987)年4月 「I章 幼児の語彙」の「参考資料」 新書判 219ページ

文献②は、動詞232語をはじめとして各品詞合計635語の基本語彙を提示している。これについては、本文に「この表は、この研究に参加した幼児102名による二一枚の絵カードに対する反応であって、対象児によるかたよりとともに、実験材料によるかたよりも考えられるため、普遍性を持つものとはいいがたく、あくまでも、一参考例ということになる。」と説明されている。

なお、本報告書では、次の3編は、それぞれについて確かな理由があるので本報告書の「2」で取り上げている。

文献(2)「幼児の言語の発達」久保良英著(『児童研究所紀要』(5)(6)(7)合輯号) 大正13(1924年6月)

文献(19)『幼児の言語発達』(愛育会愛育研究所 目黒書店 昭和18(1943)年2月)

文献(53)『幼児言語の発達』(大久保愛著 東京堂出版 昭和42(1967)年11月)

4・6 小学校1年生を対象として作成された語彙表(5文献)

① 『小学校1年生 語い指導の実践研究』札幌市立石山小学校国語研究部 昭和41(1966)年10月

B5判 64ページ 謄写印刷 本文16ページ 資料24丁

文献②は、教育出版発行の1年生の国語教科書の用語を調査すると同時に、29名の児童の夏期休業中の一定期間の使用語彙について、各保護者が録音機を使って調査するという画期的な調査を行ったものである。しかし、文献①の一覧表には、国語教科書の用語だけを掲げていて、せっかくの使用語彙の調査が語数の提示にとどまっている。

② 『小学校1年における国語教科書の語句を中心とした分析と言語化過程に関する研究』『研究紀要』

第16号 通巻第23号 佐々木定夫・福沢周亮編 財団法人教育調査研究所 昭和54(1979)年7月

A5判 183ページ

文献②は、教育出版発行の小学校1年用国語教科書のうち、昭和27年度版、昭和36年度版、昭和55年度版の3種を取り上げて、五十音順に配列してある。見出し語は、自立語を中心に助詞・助動詞などを付けたかたちになっている。例えば「赤ぐみ」は、「赤ぐみ 赤ぐみが 赤ぐみでした 赤ぐみと 赤ぐみの 赤ぐみは 赤ぐみも」の7つの見出しをもつ。これは、用語調査を当時の最新の電子計算機に任せていて、異なり語としての整理を行っていない資料ということになる。

なお、文献②は、先行する『小学校国語『入門期』に関する研究 — 語彙の実態と文献研究 — 』(研究紀要 第13号 昭和52(1977)年7月 財団法人教育調査研究所 A5判 104ページ)をいくらか展開させた内容である。

③ 「日・米・ソ連語いの比較研究」科研費研究「基礎学力を充実発展させるための国語教育に関する

研究」根本今朝男・浜本純逸・森田信義 昭和55(1980)年3月 B5判 79ページ

文献③は、日本、米国、ソ連の入門期教科書の使用語彙の対照研究を行ったものである。名詞、形容詞・副詞、動詞・その他の3種に分けて、文献(49)『分類語彙表』の分類項目に、日本、米国、ソ連の入門期教科書の用語を配列している。日本は『新版・標準国語』(教育出版 昭和45(1970)年)を資料に使用している。この調査研究は、見方や方法において独創的であって学ぶべき点が少ない。例えば「2 名詞語いの構造」は「A 名詞語いの構造表」「B 考察」「C 名詞語いの各国別考察」「D 名詞語いの比較考察」の4項目に分けられている。その「D 名詞語いの比較考察」の「2 生活」を見ると、衣生活、食生活、住生活に分けている。その「食生活」を引用してみよう。

米・ソに共通して多い。とくにアメリカには、主食・調味料・お菓子などの語い(異なり語)が豊富に提出されている。日本に食生活の語の提出が少ないのは食生活を公に語るのを控える感情があるからだろうか。

文献③は、問題の立て方、追究の方向をはじめとして興味深い問題を数多く提供している。ただ、日本の入門期の教科書だけでもかなりの幅があるので、上掲の1冊だけで日本の国語教科書を代表させるわけにはいかないという問題点が残る。それぞれの入門期の教科書の見出し語が大きく異なる問題については、例えば本報告書の文献(85)「小学校低学年用国語教科書の用語」などに明らかである。そういう意味で、この種の調査研究の継続・展開が期待される。

④ 「国定国語教科書巻一（全6期）の用語調査」甲斐睦朗編『国語国文学報』第40集

昭和58(1983)年3月 A5判 41～72ページ

文献④は、国定国語教科書全6期の第1巻の用語を調査し、次に示すように五十音順に配列している。

記号 番号	用 語		品 詞	国定教科書用例数							備考
	見出し語	表記・漢字		I	II	III	IV	V	VI	合計	
	ムラサキ	紫			1			1		2	
メ 1002	メ	目				1	2	1	11	15	
	メ	芽				2				2	
	メイブツ	名物							1	1	
	メガネ	眼鏡		1						1	
	メズラシイ	メズラシイ 珍	形				1	1		2	
	メダカ	目高					2	4		6	★
	メダカ	目玉					1	1		2	

この一覧表は、全1,100語を五十音順に配列している。備考欄の★印は、その見出し語が、動植物名、外来語名などであることを表す。用語数が少ないのでカード法で整理したものである。

文献④は、文献(118)「国定読本自立語見出し一覧」に含まれる小さな情報を扱っているものである。

⑤ 「入門期語彙一覧」『小学校教科書の学習内容に関する用語・用法などの言語表現等に関する調査研究 ― 国語科教科書を中心とした他教科との関連及び発達段階を視野において ―』所収資料4-2-4「上越教育大学言語系国語コース教科書研究プロジェクト」研究 代表者：安西迪夫・鶴岡昭夫・戸田功 平成6(1994)年3月 B5判

文献⑤は、2社の小学校国語教科書第一学年の上巻の用語を五十音順に整理している。その結果の分析・検討に特徴がある。ここでは、その一覧表の最初の一部を例示しておきたい。

単 語	分類 NO	光国	東国	27	36	46	53光	53東	55
あおい	143	1.05	1.04		○	○	○	○	○
赤	586 175 143		1.10	○					
あかい	143	1.05	1.15	○	○	○	○	○	
あかるい	668 691 611 168	1.13	1.04				○	○	
あき(秋)	013	1.06	1.11						
あく(開く)	264	1.05	5.14						
あくび	075	2.04	1.05						
あげはちょう	063	1.06							○

あける（開ける）	236	1.05	1.09				○	○	
あける（明ける）	008 282		1.05	○					

この一覧表については、次のように説明されている。

この資料は、本データの1年国語上の教科書に出現する異なり語彙を見出し語とした。そしてそれと、過去の1年生の教科書(15)や低学年の教科書を対象とした調査(16)のうち一年上巻の教科書の語彙と対照できるようにしたものである。

なお、この注記(15)(16)として、次の2文献が挙げられている。

(15) 上掲② 『小学校1年における 国語教科書の語句を中心とした分析と言語化過程に関する研究』

(16) 文献(85)「小学校低学年用国語教科書の用語」

次に、この表の見出し語について、次のような分析が提示されている。

本データの異なり語彙での意味分類別出現頻度順位は [表4-2-4B]、またその品詞割合は [表4-2-4C] のとおりである。(引用者注；2種の表だけを引用し、その考察は省略する。)

[表4-2-4B]

順位	光村	順位	東書
1	12 数量	1	06 動物
2	10 位置	2	12 数量
3	06 動物	3	10 位置
4	31 往来	4	05 動物
5	15 時間	5	31 往来

[表4 — 2 — 4C]

	名 詞	動 詞	形容詞	形容動詞	全語数
光村	62.0%(206)	30.7%(103)	6.0%(20)	1.2%(4)	100%(332)
東書	67.9%(252)	25.6%(95)	6.7%(21)	0.8%(3)	100%(371)

以上のように、小学校1年生の国語の教科書の用語調査は、語数の少なさもあるので何種か見られはするが、本報告書では原則として取り上げないことにした。

ただし、次の4文献は、第1に時代的な価値を有する、第2に語の分析の方法・手順などの検討に力を入れている、第3に複数の教科書の用語を調査しているといった理由があるので、本報告書で取り上げている。

文献(6)『小学国語読本巻一 形象と理會巻一』垣内松三著 文学社 不老閣書房 昭和8(1933)年4月

文献(14)『小学国語読本 巻一の研究』国語協会教育部 昭和14(1939)年7月

文献(27)『教科書用語集 小学校第一学年の部(草案)』文部省国語課校閲係 昭和23(1948)年5月

文献(48)『しょうがく こくご 1ねんの 1・2・3における語い調査』大島孜編 昭和38(1963)年3月

4・7 生活に密着した児童の語彙表（3文献）

① 『児童言語学』菊地知勇著 文録社 昭和12(1937)年6月 B5判 619ページ

文献①は、教科書の用語だけでなく、児童の生活用語を加えるかたちの学習語彙を提案している。学習語彙に地方語を含めることを主張している点に特徴をもっている。目次を掲げておきたい。

第一篇 児童語の世界（第一章～第二章の各見出しを省略）	………	1ページ
第二篇 児童語の習得（第一章～第五章の各見出しを省略）	………	21ページ
第三篇 児童語の訓練（第一章～第四章の各見出しを省略）	………	123ページ
第四篇 児童語の意味（第一章～第八章の各見出しを省略）	………	139ページ
第五篇 児童の語彙	………	211ページ
第一章 児童の語彙研究の順序		
第二章 言葉の形式から見た児童の語彙		
第三章 内容から見た児童の語彙		
第六篇 児童の語脈（第一章～第四章の各見出しを省略）	………	544ページ
第七篇 児童の心と児童の言葉の距離（第一章～第七章の各見出しを省略）	…	578ページ
第八篇 児童語教育の方向（第一章～第五章の各見出しを省略）	………	591ページ

この「第五篇 児童の語彙」に具体的な語例が掲げられている。例えば「第二章 言葉の形式から見た児童の語彙」は「第一節 児童の名詞」以下各品詞が取り上げられている。その「第四節 児童の形容詞」の小見出しを引用してみると、次のようになる。

児童の形容詞 — 小学読本の形容詞 — 児童生活と形容詞 — 変態形容詞 — 児童形容詞の不正確

この「変態形容詞」は、「地方的に成長した地方形容詞と、時代的に流行してゐる現代形容詞との二つ」の総称である。文献①は、各項目ごとの語例は数多く提示できているが、児童の生活語を優先的に取り上げようとしていること、また、それらを全体の一覧表としてまとめていないという問題がある。

② 『分類児童語彙』上巻 柳田國男著 東京堂 昭和24(1949)年1月 B6判 223ページ

文献②は、地方の子供に伝わるいわゆる児童語彙を集めたものである。目次は、幼な言葉、耳言葉、口遊び、手遊び者、軒遊びの5項目で構成されている。これは、基本語彙とは対極の、子供の生活の広がりを目指す方向にある文献である。例えば、帰国児童・生徒が日本の生活文化を十分に獲得するには、こうした子供に伝承される児童語彙を身に付けることも重要なのではないかと考えさせられる文献である。

③ 『全国幼児語辞典』友定賢治編 東京堂出版 平成9(1997)年6月 B6判 276ページ

文献③は、上の文献②をはじめとする幼児語の調査を辞典としてまとめた労作である。幼児語の全国的な多様性を確かめることができる貴重な文献である。しかし、本文献も、基本語彙の対極にある資料というべきである。

4・8 古典関係の基本語彙表（4文献）

① 『学習基本古語』小西甚一・斎藤慎一共著 大修館書店 昭和41(1966)年11月 A5判 41ページ

文献①は、高校用国語教科書12種及び5年間の大学入試問題を材料として、それらに現れる古語の使用頻度を調査したものである。同文献によると、上記の材料に2回以上現れた古語（助詞・助動詞を除く）は4,238語であった。それらに、別に調査した助詞・助動詞231語を加え、いくつかの補訂を行うことによって、4,438語を「高校での学習および大学入試の際現れるいちおうの基本語彙と考え」ている。そして、それら4,438語を更に頻度によって、次の5種に分けている。

グレイド	語数	修正語数	頻度
A	379	394	頻度数適用不能
B	412	710	頻度11～21
C	678	1117	頻度6～10
D	1465	1726	頻度3～5
E	1304	1891	頻度2

文献①は、これらに質的な考慮を加えることによって、「修正語数」を導き出している。これは、4,438語には変更を加えないで、例えば、入試問題で、その意味を問う設問に取り上げられている語はグレイドを高くするというように、各語の使用状況を勘案している。そして、「グレイド別基本古語一覧表」をそれぞれ五十音順に掲げている。

② 「源氏物語基礎語彙の構成」寿岳章子 『計量国語学』No.41 昭和42(1967)年7月

文献②は、次の構成になっている。

(はじめに)

I 源氏物語においてよく使われる語を抜き出すこと

II 基礎語彙の分類

III 基礎語彙の観察

Iでは源氏物語から使用度数100以上の語として、320語を引き出している。次に、同根の語といった検討を加えて298語を残している。文献②に掲載されている第一表は、それらを使用率の大きいものから小さいものへ順次並べたものである。なお、その表には、調査済みの中世語基礎語彙として、抄物、キリシタン資料、狂言との重なりを表示している。この298語が源氏物語の52.0%～63.3%をまかなっていることから、これらが源氏物語の基本語彙であることを明らかにしている。次に、IIでは、基礎語彙を、1骨組み語、2テーマ語、3叙述語の3種に分ける見方を提案し、IIIではそれら298語を具体的に分類しようとしている。この3種の分類案は貴重な提案になっている。

③ 『古典対照語い表』宮島達夫編 笠間書院 昭和46(1971)年9月 A5判 340ページ

文献③は、「万葉集」以下「徒然草」まで合計14冊の古典の総索引を使って、「古典の中でどの単語が何回ずつ使われているかを、表にしてしめたもの」である。各ページは、左右に分けられ、2作品以上に見られる自立語は左側に五十音順に配列し、その作品の欄には用例数を記入する、1作品にしか見られない自立語は右側にやはり五十音順に配列するようにしている。巻末には「統計表」が掲げられ、(4)上位20語の表、(5)14作品に共通の137語などが掲げられている。この137語は、品詞別に配列されている。名詞、動詞の2品詞の各語は、文献(49)『分類語彙表』の分類に従って細分されている。例えば、副詞は「あまた、いと、かく、さらに、しばし、ただ、なほ、まして、また」の9語である。

なお、この文献③は『フロッピーディスク版 古典対照語い表 および使用法』(宮島達夫・中野洋・鈴木泰・石井久雄編 笠間書院 平成元(1989)年9月)が刊行されている。

これは〔MS-DOS3.5インチ版〕である。

④ 『文法と語彙』大野晋著 岩波書店 昭和62(1987)年2月 A5判 355ページ

文献④の「II 語彙」に収められている論考から最初の3編の目次を掲げておきたい。

1 基本語彙に関する二、三の研究 ― 日本の古典文学作品における ―

はじめに

- 一 代表的古典作品の語彙数
- 二 代表的古典文学における共通語
- 三 古典文学作品のジャンルによる品詞比率の問題

2 奈良・平安時代和文脈系文学の基本語彙表

- 一 基本語彙表の必要性
- 二 基本語彙確定のための資料
- 三 基本語彙選定の方法

3 平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二、三の問題

これらの論考は、基本語・基本語彙研究に大きな意義を有している。特に「2 奈良・平安時代和文脈系文学の基本語彙表」及び「3 平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二、三の問題」の2論考は基本語彙の考え方を提示するだけでなく、その考え方から導き出した基本語彙を五十音順に提示している。

まず「2」は、上掲の文献③として掲げた宮島達夫氏の『古典対照語い表』を資料として、「個々の単語の使用率と、その単語がどのような範囲の文献に使用されるかという分布範囲（レンジ）とを考慮し」て、合計2,448語を選定している。その語彙表は、五十音順に配列され、選定の基準でa、bの2種に分けられている。

次に、「3」は、宮島達夫氏の『古典対照語い表』、武藤宏子氏の『栄華物語語彙総索引』の2種の資料を用いて、使用率0.1パーミル（1万分の1）以上の使用度数をもつ語、つまり、使用度数41以上の単語を選出することで1,321語を得ている。次に、それらの単語を、山本トシ氏の「平安朝和文作品の語彙研究」（『学習院大学国語国文学会誌』14、15号）で使用範囲を確かめている。山本トシ氏の研究は、16作品中の幾つの作品に使用されているかを調査している。そこから、使用度数と使用範囲の関係をとらえ「平安時代の和文脈系文学という特定の一つのジャンルの中では、使用度数一万分の一以上の単語については、使用率の高さは、使用範囲の大きさと極めて高い相関を持つ」ことを明らかにしている。

掲げられている語彙表は「一万分の一以上の使用率をもつ単語一覧（洋数字は使用範囲、和数字は使用度数）」という見出しをもっている。

4・9 特定の品詞など部分的な領域・分野の語彙表（5文献）

① 「新読本に表はれた語彙と低学年語彙との比較研究 ― 我が校一、二年について ―」『実践国語教育』第1巻第9号 富山県大澤野小学校国語研究部 昭和9(1934)年12月 A5判 60～65ページ

文献①は、「新国語読本巻一、二、三名詞分類表」「新国語読本巻一、二、三の形容詞分類表」「一、二学年生の持つ語彙分類表」の3種の表を掲げて、いくらかの考察を加えている。第一、第三の表は、動物、人倫、数量、植物をはじめとして、合計23種に分類している。第二の表は、色、形、状態、感情、感覚、その他に分けてある。

② 『児童の発達に即した学習過程に関する研究（国語科Ⅱ）― 語句の意味論的指導について ―』

神戸市立教育研究所 研究報告第165号 昭和53(1978)年3月 B5判 41ページ

文献②は、小学校の国語教科書1種に使用されている「相の類」の890語を文献(49)『分類語彙表』に従って分類整理している。この一覧表には、文献(67)『小学校国語科における学習語彙の調査』に「集録されている語には、見出し語の左肩に☆を付し明示し」ている。ここでは、「3.1 抽象的関係（493語うち☆289語）」の中から2項目だけ例示しておきたい。

3.121 必然性	しかたない（2下）	かならず（3上）	☆ 必要な（4上）	やむを得ない（6上）
3.123 可能性	☆ むずかしい（2下）	☆ べりりな（2下）	☆ 容易に（5下）	無理に（6上）
	困難な（6下）	☆ 易しい（6下）		

③ 「小学校低学年の教材語彙調査」山本建雄執筆『国語科教育学研究：6 語句・語彙指導の課題と方法』明治図書 昭和55(1980)年1月（105～120ページ）

文献③は、3社（光村・学図・教出）の低学年（1・2年）の国語教科書に採録されている75編の読みの教材を対象として使用語彙の実態調査を行ったものである。延べ語数18,205語、異なり語数2,756語を数えている。その分析は各種の見方を駆使して、語彙指導研究の上で意義の高いものである。ただ、国語教科書の中の読みの教材に限定した語彙表であるということで、「2」に取り上げなかったのである。

④ 「就学前児童の語彙（動詞）力調査」国立国語研究所報告66『幼児の語彙能力』国立国語研究所編 東京書籍 昭和55(1980)年3月

文献④は、基本的な動詞220語を選定して、動詞のテストを行っている。また、性状語、時間・空間語についても調査しているが、部分的な分野・領域の調査になっている。なお、動詞220語の選定は、①複合語はのぞく、②敬語動詞はのぞく、③俗語はのぞく、④自動詞・他動詞は絵になりやすいもの、対の系が明白なものを優先する、⑤使役、可能、受け身動詞は基本形で提出する、⑥多義語は基本的な意味で提出する、などの基準を立てている。

⑤ 『工学部留学生の基礎語彙』豊橋技術科学大学 平成6(1994)年3月 A5判 138ページ

文献⑤について、「作成の目的と内容」から少し引用しておきたい。「この調査で物理のテキストからサンプリングに抽出した811語をもとに、語彙を漢字単位でまとめ、360の漢字を見出しにした。そして、この360の漢字について、以下の1～3の語彙を収録し」ている。

- 1 本調査で物理学のテキスト『基礎物理学上巻』から抽出した語彙
- 2 『基礎日本語』（土居光知氏による）中の漢字語彙について、現在の使用頻度の点から検討し、現在でも基礎語彙として認めた語彙
- 3 上記以外で、筆者が本学留学生に必要だと判断した語彙

参考までに、「足」に関する記述を例として挙げておきたい。

5 足	足	あし	垂線の足
	満足する	まんぞくする	Xの値は(8)式を満足する。
	*足りる	たりる	
	*土足	どそく	
	*不足する	ふそくする	
	*素足	すあし	

なお、上に掲げた図表の「足」の左の数字の「5」はこの一覧表の漢字番号を表す。次に、「足」「満足する」に付けられた右側の例文は上記1のテキストの本文によるものである。また、「足りる」などの前に施された「*」は、上に引用した3項目中の1、2の2項目に該当することを表す。

4・10 外国語の基本語彙表(8文献)

国立国語研究所の図書館に所蔵されている外国語の基本語彙に関する文献は少なくない。外国語の文献は、「2」では取り上げていない。そこで、ここでは、日本語の基本語彙研究に影響をもつと思われる4種8冊の文献だけを掲げておく。

①・『The ABC of Basic English(ベーシックのABC)』C. K. Ogden 高田力訳 研究社
昭和9(1934)年7月 新書判 231ページ

・『The Basic Words: A Detailed Account of Their Uses』Twelfth Printing,
C. K. Ogden The Hokuseido Press 1977 新書判 本冊112, 別冊27ページ

資料①の『The ABC of Basic English』及び『The Basic Words』は、土居光知氏が文献(5)『基礎日本語』で日本語版の1,000語の基礎語彙を選定する上で大きな影響を受けた文献で850語が掲げられている。国立国語研究所図書館の翻訳書『The ABC of Basic English (ベーシックのABC)』には、表紙の裏に850語を掲げた1葉の一覧表が添付されている。その一覧表は、Operations, Things, Qualitiesに3分されていて、そのOperationsはcomeからyesまでの100語ほどが掲げられ、Thingsは、400 generalと200 Picturableが並べられている。そして、Qualitiesは100 Generalと50 oppositesに分けて、それぞれの語が配列されている。

『The Basic Words』の別冊の「解説」の最初の説明から、3項目を引用しておきたい。

- ・THE Basic Wordsは、Basic Englishの組織を知る上で、The ABC of Basic Englishとともに、最も重要な基本図書の一つである。
- ・Basic Englishは僅か850語で、日常のほとんどあらゆる分野にわたり、明快な英語らしい英語が書けるように工夫された、英語の中の英語であり、英語の核とも言える力強い組織である。
- ・Basic Englishは、英国のケンブリッジで長年にわたって研究を続けてきた、心理学者であり、また言語学者でもあったCharles Kay Ogdenが1929年から1930年にかけて発表したものである。

②・『The Teacher's Word Book』Edward L. Thorndike, 1921 Columbia University
A 5判 140ページ

・『A Teacher's Word Book of 20,000 Words』Edward L. Thorndike, 1931 Columbia University

A 5 判 190ページ

・『The Teacher's Word Book of 30,000 Words』Edward L. Thorndike & Irving Lorge, 1944 Columbia University

A 5 判 282ページ

文献②の『The Teacher's Word Book』及びその増補版合わせて3冊は、コロンビア大学教授のエドワード・ソーランドイク氏が、児童読み物、聖書、古典、小学校用教科書などの資料から5,000,000語を超える大量の語彙調査を行って、頻度と範囲を中心に重要語を選定し、アルファベット順に配列した語彙表である。第1冊が10,000語、第2冊が20,000語、第3冊が30,000語を選定している。それぞれ10年前後の開きがある。第1冊は、巻末に500語刻みの基本語を2,500語まで提示している。3冊とも刊行からすでに半世紀以上が経過しているので、語彙選定の手続きや語彙配列などの上では参考になると思われるが、それ以上の資料にはなりにくいと思われる。とは言え、この文献②が日本の基本語彙の調査研究に与えてきた影響は正当に評価する必要がある。

③・『Interim Report on Vocabulary Selection submitted to the Seventh Annual Conference of English Teachers』Harold E. Palmer 文部省内英語教授研究所 開拓社 昭和5(1930)年10月 A 5 判 113ページ

資料③は、ハロルド・イ・パーマー氏が旧制の中等学校用の英語教科書について用語の頻度の調査を行い、中間発表の形で3,000語の表を掲げたものである。この文献については伊村元道氏の『パーマーと日本の英語教育』（大修館書店 1997年2月）に詳細に記されている。同書の182ページには、まず、1930年の資料③にはじまる5年間の「学習語彙」に関する「仕事」を一覧表としてまとめている。翌1931年の4編の文献名を引用しておきたい。

Second Interim Report on Vocabulary Selection(3,000語表)

The First 500 English Words of Most Frequent Occurrence

The Second 500 English Words of Most Frequent Occurrence

Interim Report on English Collocations

伊村氏は、このような文献を年度ごとに記した一覧表を掲げた上で、次のように説明している。

この流れを簡単にまとめると、まず学習語彙の上限を3千語位と考え、この3千語が通常の英語のテキストの95%以上の語彙をカバーすることを確認した。そしてその中最も基本的なものは1千語と考えた。(中略) それらに共通の語は500語前後で、いわゆる structural word とか function word と呼ばれる種類のものであることが分かった。ただし、パーマーの数え方は変化形や派生語をまとめて1語と見なす head-word 方式だから、今の学習指導要領のような word-form 方式の数え方だと3千語は7千5百語位になり、1千語も5千語以上になる。

④・『教科書に現われた英語単語の研究』速川浩著 大修館書店

昭和40(1965)年 B 5 判 127ページ

・『単語・イディオム・文型の統計研究 ― 中学校英語教科書に見る』速川浩著 大修館書店

昭和48(1973)年3月 B 5 判 76ページ

資料④の『教科書に現われた英語単語の研究』は、内表紙に「調査統計」と記されている。『英語教育』の別冊として刊行されたようであるが、刊記が欠けている。「中学用教科書12種、高校用教科書25種についての英単語の全調査」「全語彙の使用度数と、重要語の順位を明示」「日本の語学教育の実状に即した統計データ」といった説明が掲げられている。なお、資料④の中に、資料②の増訂版『The Teacher's Words Book of

30,000 Words』(Thorndike & Lorge)への言及が見られる。その中では、①選定の語例が古くて比較が困難なこと、②日本の英語に合わないこと、の2項目は重要である。

4・11 調査の目的を異にする語彙表（3文献）

①『幼児・児童の連想語彙表』国立国語研究所報告69 東京書籍 昭和56(1981)年3月

文献①は、例えば「楽器」から連想される言葉といった見方の連想語彙が、幼児、小学校2年生、4年生、大学生の4段階に分けて五十音順に提示されている。幼児・児童などの語彙の広がり、つまり、豊かさの方向に向いているので、まとめる方向の基本語彙とは逆の関係になっている。

②「小学生のカテゴリー語規準表」(『兵庫教育大学研究紀要』第4巻) 荒木紀幸

昭和59(1984)年9月 B5判 47～142ページ

文献②は、40語の刺激語に児童がどのように反応するかのリストを提示している。

③『公用文の書き表し方の基準(資料集)』文化庁 昭和49(1974)年3月 B5判 282ページ

文献③に掲げられる「常用漢字表」の「本表」には漢字の各音訓の「例」として1語から3語が掲げられている。最初の3字分を引用しておこう。

漢字	音 訓	例	備 考
亜(亞)	ア	亜流, 亜麻, 亜熱帯	
哀	アイ	哀愁, 哀願, 悲哀	
	あわれ	哀れ, 哀れな話, 哀れがる	
	あわれむ	哀れむ, 哀れみ	
愛	アイ	愛情, 愛読, 恋愛	

これは、中学生あるいは高校生が習得すべき重要語彙のように受け取ることができる。しかし、その解説はどこにも一切記されていない。なお、「備考」欄は、特別な読みなどについて注記している。この「例」の語彙表については、まだ活用されていない。かつて、吉田則夫氏は「語彙指導の系統性の問題」(『国語科教育学研究・第6集・語句・語彙指導の課題と方法』明治図書 昭和55年1月)の中で、この「常用漢字表」の「付表」の熟字訓について言及している。将来、この「例」の語句が五十音順に配列されて、例えば『国語辞典』などにおける中学生の基本語彙などと比較対照できるようになれば、その価値も明らかになることであろう。

なお、次の文献(94)は、同様に目的が異なるために調査語の選定の手続きがはっきりせず、調査結果の分析等が全然行われていないが、語彙表作成の上で引用されているので、例外的に取り上げている。

文献(94)『学習基本語彙の選定に関する研究Ⅰ ― 語の熟知度による語彙の実態』財団法人教育調査研究所編
教育出版 昭和60(1985)年6月

4・12 学会の研究発表会で紹介された語彙表（2 文献）

① 「絵本の語彙研究 —『第13回よい絵本』全国学校図書館協議会選定）を中心に —」

松川利広 第81回全国大学国語教育学会 平成3(1991)年10月

文献①は、全国学校図書館協議会が選定した「第13回よい絵本」から乳児及び幼児を対象とする絵本88冊を抽出してその用語調査を行い、他の4種の語彙表と対照させて考察を加えたものである。語彙表は、次に例示するように、異なり4,701語を五十音順に配列して、品詞、頻度などの情報を付けている。この88冊の絵本は、(a)日本の絵本44冊、(b)日本の絵本(昔話)9冊、(c)外国の絵本19冊、(d)知識の絵本5冊、(e)絵本につぼん賞11冊に分けられる。対照させた語彙表は、次の4種で、いずれも本報告書で紹介している文献である。ここでは、揭示の順に文献名だけを掲げておく。

(a) 文献(80)『小学校国語教科書の学習語彙表とその指導』の1年初出語

(b) 文献(64)『絵本の研究 — 6才児の親近語彙集付 —』

(c) 文献(84)「光村図書版 学習基本語彙表」

(d) 文献(73)『学習基本語彙表 小学校国語科用』

見出し語	品詞	光村 1年 初出	阪本 親近 語彙	光村 基本 語彙	東書 基本 語彙	絵本語彙
あわ(泡)	名詞		1	1	1	47 50
あわす(合わす)	動詞		1			51
あわせる(合わせる)	動詞		1	1	1	23 32 48
あわたてき(泡立て器)	名詞					18
あわてて	副詞					74
あわてる(慌てる)	動詞		1	1	1	7 14 34 43 48 57 80

この語彙表はすでに完成していて、これ以上手を入れる必要があるわけではない。早く学界及び教育界への公表が望まれる。

② 「『マルチメディアによる語彙力調査とその教材化』における語彙調査のための語彙リスト」須藤と

みよ・早川敦子 平成9年度日本語教育学会秋期大会 平成9(1997)年10月

文献②は、「子供たちに必要と考えられる語彙を選択するための判断資料とするために、子供向け教科書として国内で出版されているものの中から下記のものを選び、その中で扱われている単語をリストアップ」しようとしている。

この一覧表に使用している資料は、原文に従って引用すると、次の通りである。ここでは、そのまま引用する。なお、左側に補った文献番号は、本報告書の文献番号である。

文献(113) A:「日本語能力試験出題基準語彙3・4級」 国際交流基金

文献(110) B:「にほんごをまなぼう」 文部省

—— C:「にほんごだいすき1」 むぎ書房刊

- D；「これって、なに？」 チャレンジ日本委員会
- 文献(80) E；小学校国語教科書「かざぐるま・ともだち」1年 光村図書
- F；中学校英語教科書“New Horizon”1年 東京書籍
- G；児童のために選び出した基礎語彙 630語

これらA～F 6種の資料を組み合わせることによって、次に掲げるような形式の一覧表を作成して、合計2,620語の見出しについての情報を掲げている。そして、その2,620語の一覧表から「G；児童のために選び出した基礎語彙」630語を選定している。どのように選定したのかについては特に記されていない。次に掲げる一覧表は、「G；児童のために選び出した基礎語彙」の表である。これら2,620語の表、630語の表の2種は、基本語彙を選定する上で役に立ちそうで、今後の公表が期待されるところである。

ここで、一覧表の一部を掲げてみよう。

番号	語 彙	A 日本語検定		B 日本語を 学ぼう	C 日本語 大好き	D これっ て何？	E 国語教科 書 1年	F 英語教科 書 1年
		4 級	3 級					
210	着物		○		○			
211	キャベツ				○	○		
212	救急車				○	○		
213	給食			○	○	○		
214	給食当番					○		
215	牛乳	○			○	○		milk
216	きゅうり			○	○	○		
217	今日	○		○			○	today
218	教科書			○	○	○		
219	教室	○		○	○	○	○	
220	兄弟	○				○		brother

4・13 その他の理由で取り上げていない語彙表（4文献）

上記1～12以外の理由で除外したものに次の4文献がある。以下、それぞれの文献について内容を紹介するとともに、除外した理由についても簡単にふれておきたい。

①『国定読本第Ⅰ期「尋常小学読本」の用語』昭和59年度・60年度 文部省科学研究費補助金「国定読本の用語の研究」研究代表者；飛田良文 昭和61(1986)年3月 B5判 150ページ

文献①の調査は、昭和59(1984)年度、60(1985)年度の2年間にわたって、「国定読本の用語の研究」という題目で、国立国語研究所の国語辞典編集準備室が中心になって取り組んできたものである。

まず、「はじめに」の第3段落の本文を引用しておきたい。

われわれは、これらの用語の用例集を作成し、その歴史的分析を行いたいと考え、第1期・第2期についてはカードによる手作業で文脈つき用語索引の作成を目ざし準備を進めていた。しかし、3期以降については目途がつかないため、電算機を利用して時間を短縮し、一気に材料を整理し、速やかに全体的、歴史的分析を目ざして、科学研究費を申請した。

次に、文献②の目次は次の通りである。なお、各執筆担当者名及び細項目は省く。

はじめに

I 国定読本第Ⅰ期の調査の概要

(1) 尋常小学読本について	1 ページ
(2) 特色ある用語・表記	7 ページ

II 国定読本第Ⅰ期の各種語彙表

(1) 度数順語彙表	17ページ
(2) 品詞別語彙表	31ページ
(3) 意味分類語彙表	99ページ
(4) 漢字用法一覧表	115ページ

III 電子計算機による用語調査法の開発

付表 国定読本第3期 KWIC 索引見本	149ページ
----------------------	--------

この国定読本第Ⅰ期『尋常小学読本』は、明治37(1904)年から明治42(1909)年まで使用され、俗に「イエスシ本」と呼ばれている。

「目次」のⅡ・(1)「度数順語彙表」は、度数5以上の823語を度数順(同じ度数の語は五十音順)に配列している。

(2)「品詞別語彙表」は、品詞及びそれに準ずるものを使用度数順に配列している。名詞は、「課名 話し手 人名 地名 それ以外の名詞」に分類している。

(3)「意味分類語彙表」は、第Ⅰ期国定読本の語彙(イエスシ語彙)に「分類語彙表」の分類をあてはめたものである。

(3)「漢字用法一覧表」は、「第Ⅰ期国定読本にあらわれるすべての漢字について、個々の漢字ごとに、その漢字がどのような語として用いられているかを示したもの」である。漢字は全部で906字を数える。

この『国定読本第Ⅰ期「尋常小学読本」の用語』は、その後『国定読本用語総覧1 第一期あ～ん』(国立国語研究所編 昭和60(1985)年11月)として、まとめられている。その結果、本文献は、試行的な文献として位置づけられた。しかし、使用度数5以上の度数順語彙表などの価値は失われていない。ただ、本報告書では、文献(118)として『国定読本用語総覧』全12巻の語彙表を取り上げているので、本文献を除いたのである。

②『分類ハタタコ語彙 稿本』林大編 昭和62(1987)年3月 B5判 108ページ

文献②は、凡例1ページ、目次1ページ、語彙表106ページで構成されている。まず、「凡例」全10項目から3項目を引用しておきたい。

- 1 この語彙表は、ハタタコ読本に用いられた語を、『分類語彙表』の分類各項に配当したものである。
- 2 ハタタコ語彙は、『国定読本用語総覧』2及び3に登録される見出し形を単位とし、それぞれの構成要素である語について分類した。ただし、助詞・助動詞を除く。
- 10 この作業は、国立国語研究所辞典編集準備室における『国定読本用語総覧』編集作業の一部である。

次に、「目次」は『分類語彙表』の分類項目が提示されている。まず、例として、2.160の語句を引用してみよう。なお、外枠は引用者が施したものである。

2.160	たつ（経）　すぐ　うちすぐ　すぎゆく　すごす あけゆく　あけはなる くる・くれる　ふける　よふく 長ず　としとる　としおゆ いそぐ　とりいそぐ　せきたつ　はかどる 際す おくる・おくれる　ちこくする まにあう　まにあいかぬ さきんず・さきんじる　つぐ（次） たびかさなる
-------	--

以上、本文献の概要を紹介してきた。本文献は、『国定読本用語総覧2』の語彙を『分類語彙表』に沿って分類した文献ということで、本報告書では取り上げていないのである。

③ 「日本語教科書の語彙分析 ―『中日交流標準日本語』初級Ⅰ・初級Ⅱ―」 馮曉雲編

平成3（1991）年6月3日　B5判　104ページ

馮曉雲氏は、平成4年度の北京日本学センターの研修生で、その研修修了論文として自発的に上記の語彙表を作成して、訪日の際に届けてくれた。原稿用紙に手書きで記した語彙表である。編者は、それを複写・製本して国立国語研究所の図書館に納入した。

まず、文献③の構成を掲げておきたい。

前書き（分析目的）	2 ページ
語彙表（自立語）	6 ページ
別表	88ページ
1　あいさつ言葉	89ページ
2　外来語	90ページ
3　助数詞	93ページ
4　下接語一覧表	94ページ
5　副詞	96ページ
6　日中語彙対照表（1）	97ページ
7　日中語彙対照表（2）	98ページ
8　日中語彙対照表（3）	99ページ
あとがき	101ページ
参考文献	104ページ

この文献の構成は、文献(80)『小学校国語教科書の語彙表とその指導』にならったものである。

次に、順序を入れ替えて、先に本表の最初の部分を引用してみよう。

見出し語	品 詞	初 出		漢字表	語彙表	備 考
		I	II			
ああ	感 副 ☆		35	○	*	あいかわらず
相変わらず			43		*	
あいさつ			30		* N	
間		24			*	
相手	動		47			あいて
アイロン			42			
ー合う			45		*	あう

(注記1) 本表の「漢字表」は、『新版現行の国語表記の基準』(文化庁国語課監修)を指している。

学年別配当漢字945字に含まれている場合は「○」を付けている。

(注記2) 本表の「語彙表」は、本報告書の文献(84)「光村図書版 学習基本語彙表」を指している。その見出し語に含まれている場合は、「*」を付けている。

(注記3) 日中語彙対照表で取り上げる語で、日本語にあって中国語にない語は「N」を付けている。

次に、「前書き」の一部を引用しておきたい。

いま各大学は新しく出版された『中日交流標準日本語』という教科書を採用しはじめた。この教材は中国人民教育出版社と日本光村図書出版株式会社が協力して、編集されたのである。学生は大学に入学したあと、二年間は毎週4時間の日本語の授業を受けて、初級Ⅰ、初級Ⅱを習得する。初級Ⅰに用いる語彙は約800語である。初級Ⅱに用いる語彙は約900語である。ここでは、(中略)この1700語を分析してみたい。

④ 「国語科学習語彙と語彙指導」井上一郎執筆『国語教育の再生と創造 — 21世紀へ発信する17の提案』教育出版 平成8(1996)年2月 A5判 全271ページ 本論13(169～191)ページ

まず、文献④の構成を紹介しよう。

1 語彙指導論の展望	169ページ
2 国語科学習基本語彙の選定と系統化	171ページ
3 理解単元の語彙指導論	174ページ
国語科学習基本語彙一覧表	178～191ページ

文献④は、井上一郎氏が、この20年間ほど取り組んできた学習基本語彙研究の骨子を示すとともに、現在考えている「国語科学習基本語彙一覧表」を提示する内容になっている。井上一郎氏は、まず、論文の3分の1の分量を割いて「国語科学習語彙と語彙指導」に関してどういう問題意識で取り組んできたか、どういう問題点があるか、などについてまとめようとしている。それが、「目次」の1、2で、これまでの研究を簡条書きに整理している。続いて、論文の3分の1の分量を割いて「国語科学習基本語彙一覧表」を掲示している。この一覧表の作成の観点などについては、本文の1、2の箇所の簡条書きの中で様々に説明している。中でも「提案する試案では、五十の文献を参照し、細則を次のように定め、選定した。」という前置きを述べた上で、13項目にわたる選定項目を提示している。

次に、その一覧表の一部を引用してみよう。

意味体系						小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	中学校
対 象	1 現 象	A 人 間	(5) 行 動	a 生 活 行 動	17 動 作	走る 歩く 立つ 立ち上がる 座る 持つ つかむ 挙げる 搔く 吹く	<u>動作</u> かかえる		
					18 行 為	<u>する やる(する)</u> いる おる	行う <u>行動</u> 活動	<u>行為</u> 実行する	実践する

注1 下線は、国語科学習基本語彙を示す。

注2 なお、国語科学習基本語彙には、これらの他に、助詞、助動詞、補助動詞なども含む。

このように、「国語科学習基本語彙一覧表」は、全5層（ある領域は6層）の意味体系で位置づけられている。その第2層は「対象（現象、本質）」に、第3層は「認識（感覚・感情、思考）」に、第4層は全部で12種に分けられ、第5層は更に123類に細分されている。ここでは、その1例として、細分した第17～18領域を紹介してみたのである。

この語彙表は、上に紹介した「構成」に明らかなように研究書と同様の骨太の構成になっているが、全体がわずかに13ページの論文であるので意が尽くされていない。井上一郎氏には、これまでの調査研究を集大成した本格的な研究書の刊行が期待される。

4・14 原本が確認できなかった文献（2文献）

① 「成人読物についての語彙調査」財団法人日本語教育振興会 昭和19年(1944)年

財団法人日本語教育振興会が、文献(22)「児童読物の語彙調査」に引き続いて調査を行った文献。雑誌『日本語』（昭和19(1944)年4月号）の「日本語教育振興会研究部事業報告」（山口正氏執筆）の中に「語彙調査」という小見出しを掲げて「十五万語の児童読物用語彙の調査については、浅野研究員の中間報告が既に本誌上に発表されてゐる。全体の成果は近く一本にして世に出したい。二十五万語の成人用語彙の調査も大分出来上がった。」云々と記されている。この経緯については、文献(22)「児童読物の語彙調査」で取り上げているとおりである。

② 「義務教育終了者に対する語彙調査の試み」『国立国語研究所年報』2号 昭和26(1951)年12月

森岡健二氏が、昭和25(1950)年に東京の高校1年生15人に竹原常太氏編の『スタンダード和英辞典』（初版は昭和16(1941)年。国立国語研究所の図書館には昭和23(1948)年11月30日第36版1冊がある。）の見出し語37,970語について、調査用紙を作成し、被験者が、それぞれの語について、内省によって「○ よく知っているいつも使っていると思う語」「▽ 聞け（読め）ば意味が分ると思う語」「△ 聞いた（読んだ）ことはあるが意味のはっきりしない語」「× ぜんぜん分らない語」の4つから一つを選ぶ調査を行った。また、「問題の

語に関連のある語を書き入れる」こともさせた。この15名から得た成果として平均30,664語, 最高36,330語, 最低23,381語という数値を得た。

この語彙表は, 昭和30年代の文献(42)『児童・生徒の語い力の調査』の基本的な資料として使用されて, 約14,000語の調査語を得ている。従って, 昭和30年代までは, 本報告で何度かふれている語彙表があったわけであるが, 平成12年の現在はどこにあるかはっきりしていない。

次に, 石黒修氏の『ことばと教育』(厳松堂書店 昭和22(1947)年10月 B 6 判 172ページ)の「語彙の調査と選択」には, 次の(a)～(d)の4文献が紹介されている。ここには発行年月に配列する。なお, この4文献は, 巻末の文献索引に掲げていない。

- (a) 「蒙疆の蒙古学院の宮島英男氏の五〇〇語彙」
- (b) 「華南文化協会で設置した昭和18(1943)年の基本単語八百語」
- (c) 「布哇教育会編纂『小学校用読本語彙表』(『日語教育』第7号)」
- (d) 「国語協会の『基礎日本語』第一次調査 昭和13(1938)年 1,776語」

索引

1 研究文献索引

2 編著者名索引

1 研究文献索引

- 1 本報告書に出てくる語彙表に関する研究文献を五十音順に掲載する。
- 2 語彙表作成の資料として紹介する教科書・テキスト類は索引に掲載しない。ただし、文献(110)『にほんごをまなぼう』のように「2 基本語彙研究文献解題」で紹介している文献、及び「4 本報告に取り上げなかった文献」で紹介している教科書・テキスト類は取り上げている。
- 3 辞典類は、原則として取り上げない。ただし、『新明解国語辞典』をはじめとして「4 本報告で取り上げなかった文献」で検討を加えている辞典類は掲載するようにしている。
- 4 類似した名称の文献が少なくないので、編著者名及び出版社名を掲げるようにした。刊行年月は記していない。
- 5 「2 基本語彙研究文献解題」に取り上げた文献に関しては、次のような3種類の異なる形式のページの提示になる。
(例)
日本語能力試験 出題基準 (国際交流基金・日本国際教育協会, 凡人社)
(113), 3・8・3, 5, 233, 318
第1に, 「2 基本語彙研究文献解題」に取り上げた文献を「(113)」のように示す。
第2に, 「3 各文献からとらえた基本語彙研究」で取り上げた文献を「3・8・3」のように示す。
第3に, それら以外の個所に出ているページを順に「5, 233, 318」のように示す。
- 6 「4 本報告に取り上げなかった文献」で取り上げた文献に関しては、次のような2種類の異なる提示になる。
(例) 絵本の語彙研究 (松川利広) 4・12・①, 275
第1に, 「4 本報告に取り上げなかった文献」で取り上げた文献を「4・12・①」のように示す。
第2に, それ以外の個所に出ているページを順に示す。
- 7 「2 基本語彙研究文献解題」及び「4 本報告に取り上げなかった文献」で見出しに掲げていない文献については掲げられている個所のページ数を順に示す。
- 8 「2・1 基本語彙研究文献名一覧」の4ページ分は、索引に取り上げていない。
- 9 文献(80)『小学校国語教科書の学習語彙表とその指導』の右ページに掲載した「本表の最初のページの初めの部分」に掲げてある文献名「阪本・文部・国研・光村」についても補いの意図で索引に取り上げた。

研究文献索引

- 朝倉日本語新講座 2 語彙(水谷静夫 朝倉書店)(86), 3・7・1, 6
 一読総合読みにおける言語事項の系統的指導細案 総説編(林進治 明治図書)127
 岩波講座 日本語 9 語彙と意味(岩波書店)6
 絵本の研究 — 6才児の親近語彙集付 — (阪本一郎 日本文化科学社)(64), 3・4, 280, 318
 絵本の語彙(中曽根仁・川又瑠璃子 国立国語研究所)(111), 3・4, 249
 絵本の語彙研究(松川利広) 4・12・①, 275
 外国人子女の日本語指導に関する調査研究《最終報告書》資料集 5 (東京外国語大学)(122)
 外国人児童生徒のための日本語指導 第2分冊 算数(数学)・理科の教科書 — 語彙と漢字 — (東京外国語大学留学生日本語教育センター ギョウセイ)263
 外国人に対する日本語教育の振興に関する報告集(文化庁)(87), 3・8・3, 245
 外国人のための基本語用例辞典(文化庁 大蔵省印刷局)(59), 3・8・2, 4, 131, 162, 164, 180, 199, 296, 299
 外国人のための日本語分野別重要単語 1300(日本語研究所 凡人社) 4・3・⑤
 外国人留学生の日本語能力の標準と測定(試案)に関する調査研究について(外国人に対する日本語教育の振興に関する報告集 4)(87), 3・8・3, 245
 垣内松三著作集(光村図書)31
 学習基本語彙(中央教育研究所)(91), 3・7・2, 165
 学習基本語いによる えとき国語じてん(平井昌夫 光風出版) 4・1・①
 学習基本語彙の基礎調査(中央教育研究所)(62), 3・7・2, 5, 7, 107, 129, 152, 153, 160, 164, 168, 200, 201, 204, 278, 289
 学習基本語彙の研究(愛知県学習基本語彙研究会) 8
 学習基本語彙の選定に関する研究 I (教育調査研究所 教育出版)(94), 3・7・2, 317
 学習基本語彙表(浜松市上島小学校) 4・2・⑤
 学習基本語彙表 小学校国語科用(『新しい国語』編集委員会 東京書籍)(73), 3・7・2, 5, 176, 177, 187, 200, 201, 206, 318
 学習基本語彙表と教育漢字との関連(長島恵子) 4・4・③
 学習基本語彙文献解題 — 基本語・基本語彙研究(甲斐睦朗 『学習基本語彙の研究』第1集) 8
 学習基本古語(小西甚一・斎藤慎一 大修館書店) 4・8・①
 学習語彙表 — 語彙指導のための基礎作業 — (内子中学校)(66), 3・10, 175, 243
 漢字語彙資料(林四郎)(75), 3・5, 278
 簡約日本語の創成と教材開発に関する研究(野元菊雄 国立国語研究所)(109), 3・6, 248
 帰国子女適応教育教室 研究調査報告書 平成7年度(波多野ファミリースクール 帰国児国際学級)(116)
 帰国生はこうして学ぶ(お茶の水女子大学附属中学校)(112)
 基礎語(土居光知『日本語の姿』改造社)(21), 3・6, 29
 基礎語彙調査表(服部四郎)(38), 3・9, 4
 基礎的語彙と教育漢字学年配当との関連表(林四郎)168
 基礎日本語(土居光知 六星館)(5), 3・6, 3, 34, 37, 50, 51, 53, 61, 130, 142, 237, 282, 287, 304, 314, 315
 基礎日本語(南満州教育会教科書編集部)(11), 3・3・1, 3
 基礎日本語学習辞典(国際交流基金 凡人社)(98), 3・8・2, 299
 基礎日本語の試み(土居光知『国語文化講座 第一巻 国語問題篇』朝日新聞社)(16), 3・6, 16, 29, 61
 基本簡易ニッポンゴ(情報局)(17), 3・6
 基本語彙(樺島忠夫 国語シリーズ別冊 1『日本語と日本語教育 — 語彙編 — 』文化庁 大蔵省印刷局)133
 基本語彙解説第3次試案(国際文化振興会)71
 基本語彙学 上(垣内松三 文学社)(12), 3・3・1, 3, 34, 35, 43, 54, 123, 126

- 基本語彙調査の方法 — 本会研究部の語彙調査について(浅野鶴子『日本語』)62
- 基本語彙と語彙調査(水谷静夫『国語教育のための国語講座 4 語彙の理論と教育』朝倉書店)(41), 3・4, 278
- 基本語彙はきめられるか(林四郎『新・日本語講座 1 現代日本語の単語と文字』汐文社)135, 207
- 基本語彙・基礎語彙(真田信治『岩波講座日本語 9 語彙・意味』岩波書店)6
- 基本語による国語の学習指導(興水実・賀根俊榮 刀江書院)(32), 3・7・2
- 基本度 f 上位七百語(水谷静夫『朝倉日本語新講座 2 語彙』朝倉書店)(86), 3・7・1
- 義務教育終了者に対する語彙調査の試み(森岡健二『国立国語研究所年報』2号)4・14・②, 103, 269
- 997語で読める日本語(加納千恵子・藤田正春・阿部直美・他 北星堂書店)4・3・④
- 教育基本語彙(阪本一郎 牧書店)(40), 3・7・3, 4, 5, 7, 8, 112, 117, 121, 122, 146, 147, 164, 179, 186, 194, 195, 233, 252, 278, 279, 296
- 教育基本語彙データベースの構築(島村直己『平成5年度国立国語研究所年報 — 45 — 』)99
- 教育基本語彙の選定(浜本純逸『国語語彙史の研究 8』和泉書院)205
- 教育基本語彙の体系化とその指導方法の究明(神戸大学)(93), 3・7・4
- 「教育基本語い・関連重要語い」分類表(松山市造・他『文字・語句教育の理論と実践』一光社)173, 207
- 教科語彙一覧・学校生活語彙一覧(『婦国生はこうして学ぶ』お茶の水女子大学附属中学校)(112), 3・8・5, 175, 288
- 教科書に現われた英語単語の研究(速川浩 大修館書店)4・10・④
- 教科書用語集 小学校第一学年の部(文部省)(27), 3・3・1, 310
- 近代国語教育論大系 別巻 I (光村図書)51
- 近代国語教育論大系 別巻 II (光村図書)21, 25, 39
- 形象と理會(垣内松三 文学社 不老閣書房)(6), 43
- 言語教育と言語教材(興水実・沖山光 金子書房)(28), 3・7・2
- 言語研究におけるシソーラスの利用(宮島達夫・小沼悦『研究報告集13』国立国語研究所)117
- 言語表現の構造(林四郎 明治書院)135
- 言語要素指導(児童言語研究会 明治図書)(45), 3・7・4, 7, 122, 126, 127, 139, 172
- 言語要素とりたて指導細案(横浜市奈良小学校 明治図書)(52), 3・7・4, 43, 108, 126, 127, 109
- 言語要素とりたて指導入門(林進治 明治図書)(54), 3・7・4, 16, 43, 109, 122, 123
- 源氏物語基礎語彙の構成(寿岳章子『計量国語学』No.41)4・8・②
- 現代語の語彙調査 総合雑誌の用語(国立国語研究所 秀英出版)(37), 3・11, 103, 116, 169, 199
- 現代語の語彙調査 婦人雑誌の用語(国立国語研究所 秀英出版)(33), 3・11, 4, 73, 93, 103, 116, 169
- 現代雑誌九十種の用語用字 第一分冊 総記および語彙表(国立国語研究所 秀英出版)(44), 3・11, 4, 116, 117, 121, 129, 130, 142, 143, 161, 169, 171, 191, 216, 217, 296
- 語彙指導の系統性の問題(吉田則夫『国語科教育学研究・第6集・語句・語彙指導の課題と方法』317
- 語い指導の系統と方法(安達隆一・豊橋市二川小学校 明治図書)(60), 3・7・4
- 語彙指導の方法 語彙表編(甲斐睦朗 光村図書)(80), 179, 187
- 語い調査と基本語彙(林四郎『電子計算機による国語研究 III』国立国語研究所 秀英出版)(58), 3・7・1, 6, 190, 191
- 語彙調査 — 現代新聞用語の一例(国立国語研究所 秀英出版)(31), 3・11, 4, 98
- 語彙の研究(泉井久之助『国語科学講座 III 国語学』明治書院)293
- 語彙の研究と教育(日本語教育指導参考書12 国立国語研究所 大蔵省印刷局)61
- 語い表 — 新篇“新しい国語”による(東京都中野区仲町小学校)4・2・④
- 語彙標準表(『外国人に対する日本語教育の振興に関する報告集』文化庁)(87), 3・8・3, 232
- 工学部留学生の基礎語彙(豊橋技術科学大学)4・9・⑤
- 高校教科書の語彙調査(国立国語研究所 秀英出版)(83), 3・3・2, 5, 213, 245
- 高校・中学校教科書の語彙調査分析編(国立国語研究所 秀英出版)185, 213
- 光文新国語学習辞典(光文書院)4・1・②
- 公用文の書き表し方の基準(資料集)(文化庁 大蔵省印刷局)4・11・③
- 語句・語彙の指導過程(倉澤栄吉・青年国語研究会 新光閣書店)141
- 国語科学講座 XII 国語問題(明治書院)29, 50

- 国語科 学習基本語彙 指導の実際(田中久直 新光閣書店)(36), 3・7・2, 7, 88, 89, 289
- 国語科学習語彙と語彙指導(井上一郎『国語教育の再生と創造』教育出版)4・13・④
- 国語科教育学研究・第6集・語句・語彙指導の課題と方法(明治図書)317
- 国語科言語教育論(3) 語句・語彙指導論(甲斐睦朗・石黒由香里『国語教育基本論文集成』)6, 7
- 国語教育基本論文集成(飛田多喜雄・野地潤家 明治図書)6
- 国語教育研究大辞典(国語教育研究所 明治図書)74
- 国語教育の基本語彙(甲斐睦朗『日本語学』)186
- 国語教育の再生と創造(教育出版)4・13・④
- 国語教育の諸問題(上)(垣内松三 文学社)(8), 3・3・1, 43
- 国語教育のための基本語体系(大阪市矢田小学校・池原檣雄 六月社)(39), 3・7・2, 7
- 国語教育のための国語講座4 語彙の理論と教育(朝倉書店)(41), 91
- 国語語彙史の研究8(和泉書院)205
- 国語純化と基本語(土居光知『国語科学講座 XII 国語問題』明治書院)29, 50, 51, 61
- 国語読本の語彙(湘南国語研究会 講学社)(7), 3・3・1, 3
- 国語読本 語句教授の指針(内山薫 山口県師範学校附属小学校国語研究会)(4), 3・3・1, 3
- 国語年鑑(国立国語研究所 秀英出版)7, 15, 126
- 国語の世界的進出(石黒修『教育・国語』5月号別冊附録)41
- 国語の力(垣内松三 不老閣書房)34, 293
- 国語文化講座 第一巻 国語問題篇(朝日新聞社)(16)
- 語句指導と語い指導(倉澤栄吉 明治図書)(61), 3・7・4
- 国定国語教科書巻一(全6期)の用語調査(甲斐睦朗『国語国文学報』40)4・6・④
- 国定読本自立語見出し一覧(木村睦子『国定読本用語総覧 12 総集編』国立国語研究所)(118), 3・3・1, 5, 309
- 国定読本第I期「尋常小学読本」の用語(飛田良文 国立国語研究所)4・13・①
- 国定読本用語総覧 12 総集編(国立国語研究所 三省堂)(118), 320, 321
- 国定読本用語総覧 CD-ROM 版(国立国語研究所 三省堂)255
- 国民学校教科書の語彙一(国語協会)(20), 3・3・1, 15, 55
- 古典対照語い表(宮島達夫 笠間書院)4・8・③, 313
- ことばと教育(石黒修 厳松堂)324
- ことばのずかん(福沢周亮 講談社)176, 177
- ことばの誕生(岩淵悦太郎・村石昭三 日本放送出版協会)144
- こども ことばえじてん(村石昭三 角川書店)4・1・④, 248
- 子どもの言語心理2(福沢周亮 大日本図書)4・5・②
- 作文の語彙(井上一郎・他『文教国文学』)(89), 3・2・1, 234
- 算数教科書使用語彙一覧(波多野ファミリースクール『帰国子女適応教育教室 研究調査報告書』)(116), 3・8・5, 5, 252, 262, 263, 274, 288
- 三省堂国語辞典(三省堂)4・1・⑧, 108
- 児言研・国語科教育基本語イ(第一次試案)(『言語要素指導』明治図書)(45), 7, 173
- 実験心理学の原理(ピエロン)96
- 実用和英辞典(海外技術者研修協会 海外技術者研修調査会)(56), 3・8・2, 4, 107, 299
- 児童言語学(菊地知勇 文録社)4・7・①
- 児童語彙の研究(澤柳政太郎・田中末廣・長田新 同文館)(1), 3・1・1, 3, 15, 24, 25, 39, 67
- 児童作文の語彙に関する計量的研究(中田敏夫『国語国文学報』)234, 235
- 児童作文の語彙に関する研究 — 語彙表 — (中田敏夫『愛知教育大学研究報告』)(108), 3・2・1
- 児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査(横浜国立大学・工藤真由美 ひつじ書房)(115), 3・8・5, 5, 8, 16, 262, 288, 296
- 児童・生徒の語い力の調査 準備調査(文部省 明治図書)(42), 3・1・2, 4, 16, 104, 110, 118, 120, 122, 127, 295, 324
- 児童・生徒の語い力の調査(小学校第2学年)本調査成績(出題順)(文部省調査局国語課)269
- 児童・生徒の語い力の調査 本調査 小学校第6学年(文部省 光風出版)(43), 3・1・2, 102, 110, 118,

- 120
 児童・生徒の語い力の調査 本調査 小学校第4学年(文部省 光風出版)(46), 3・1・2, 102, 104, 118, 120
 児童・生徒の語い力の調査 本調査 中学校第1学年(文部省 教育図書)(50), 3・1・2, 102, 104, 110, 120
 児童・生徒の語い力の調査 本調査 中学校第3学年(文部省 教育図書)(50), 3・1・2, 102, 104, 110, 120
 児童・生徒の語い力の調査 低学年の学習語(文部省 教育図書)(51), 3・1・2, 102, 104, 110, 118, 146, 179, 253
 児童の語彙と教育(岡山県師範学校附属小学校 藤井書店)(10), 3・1・1, 21, 25
 児童の語彙と国語指導(長野師範学校男子部附属国民学校教科研究会)(24), 3・2・2, 21, 25, 39
 児童の作文使用語彙(国立国語研究所 東京書籍)(103), 3・2・1, 5
 児童の発達に即した学習過程に関する研究(神戸市教育研究所)4・9・②
 児童読物の語彙調査(浅野鶴子「児童読物の語彙調査を終つて」『日本語』)(22), 3・4, 112, 323
 児童読物の語彙調査を終つて(浅野鶴子『日本語』)(22)
 就学前児童の語彙(動詞)力調査(『幼児の語彙能力』国立国語研究所 東京書籍)4・9・④
 就学前幼児の語彙(大久保愛・川又瑠璃子『研究報告集3』国立国語研究所)(82), 3・2・2
 ジュニア和英辞典(高橋源次 旺文社)112
 しょうがく こくご 1ねんの 1.2.3.における語い調査(大島孜)(48), 3・3・1, 310
 小学校1年生 語い指導の実践研究(札幌市石山小学校国語研究部)4・6・①
 小学校1年における国語教科書の語句を中心とした分析と言語化過程に関する研究
 (佐々木定夫・福沢周亮 教育調査研究所)4・6・②, 310
 小学校教科書漢字別語彙表(国立国語研究所)(104), 3・5
 小学校教科書教科別語彙資料 理科・本文編・索引編(京極典一・細川英雄 信州大学)(102), 3・3・2
 小学校教科書語彙項目一覧(『外国人子女の日本語指導に関する調査研究(最終報告書)資料集5』東京外国語大学(122), 3・8・5, 5, 274, 288
 小学校語彙指導の活性化(浜本純逸 明治図書)205
 小学校国語教科書(学図・61年版) 総索引(落合一郎)(101), 3・3・1
 小学校国語「入門期」に関する研究(佐々木定夫・福沢周亮 教育調査研究所)308
 小学校低学年の教材語彙調査(山本建雄『国語科教育学研究・6・語句・語彙指導の方法』明治図書)4・9・③
 小学校低学年用国語教科書の用語(島村直己『国立国語研究所報告74 研究報告集4』秀英出版)(85), 3・3・1, 207, 249, 309, 310
 小学校用 新しい国語 語い調査表(東京書籍)(30), 3・3・1, 4, 5
 小学校国語科における学習語彙の調査(中央教育研究所)(67), 3・3・1, 314
 小学校国語教科書における漢字調査 — 語彙を中心として — (横浜市立教育研究所)(34), 3・5, 4, 7, 122
 小学校の国語教科書の語彙(田中久直)(35), 3・3・1, 91, 98
 小学校国語教科書の学習語彙表とその指導(甲斐睦朗 光村図書)(80), 3・3・1, 5, 186, 187, 205, 318, 319, 321
 小学校における教育用語(国語・社会・算数・理科)の学年別の使用実態(教育システム普及会)(70), 3・5
 小学校に於ける言語の教育(大槻芳廣 小学出版社)(13), 3・3・1, 3, 49, 59
 小学校における効果的な語彙指導(福沢周亮・岡本まさ子 教育出版)(79), 3・7・2, 204, 206, 307
 小学国語読本 新出語句総覧(兵庫県加古郡加古川町氷丘尋常高等小学校)(15), 3・3・1, 45
 小学国語読本巻一 形象と理會 巻一(垣内松三 文学社 不老閣書房)(6), 3・3・1, 3, 34, 310
 小学国語読本 巻一の研究(国語協会教育部)(14), 3・3・1, 310
 小学 こたばのつかいかた辞典(林史典・金子博・鶴岡昭夫・教育技術研究所 教育社)4・1・⑥
 小学生のカテゴリ—語規準表(荒木紀幸『兵庫教育大学研究紀要』)4・11・②
 小・中学生の作文の用語調査(日本児童教育振興財団)(95), 3・2・1
 初期指導基本語彙(目黒区東根小学校『場面を重視した日本語指導の改善』)(117), 3・8・5, 288

資料 国語教科書文例(小学校編)(教育社)298

新旧読み替えを明らかにした漢字語彙調査表 中等国語(中等国語編修委員会 三省堂出版)4・4・②

新教育基本語彙(阪本一郎 学芸図書)(88), 3・7・3, 7, 8, 99, 165, 203, 204, 205, 249, 252

新国語学習辞典(光文書院)4・1・②, 122, 127

尋常小学国語読本に現れたる漢字の調査(新潟県佐渡郡小木尋常高等小学校国語研究部『実践国語教育』)4・4・①

新読本に表はれた語彙と低学年語彙との比較研究(富山県大澤野小学校国語研究部)4・9・①

新・日本語講座1 現代日本語の単語と文字(汐文社)135, 207

新入学児童語彙の調査(千葉県鳴浜小学校職員研究会 文化書房)(3), 3・1・1, 3, 21, 39, 270

新版現行の国語表記の基準(文化庁国語課)322

新明解国語辞典(三省堂)164, 183, 200, 237, 299

成人読物についての語彙調査(日本語教育振興会)4・14・①, 63

生徒の言語環境を整えるための重要語い集(岡山市丸之内中学校)(78), 3・10

全国方言基礎語彙調査項目(『全国方言基礎語彙の研究序説』平山輝男 明治書院)(72), 3・9, 5

全国方言基礎語彙の研究序説(平山輝男 明治書院)(72)

全国幼児語辞典(友定賢治 東京堂出版)4・7・③

速成日本語読本 上巻 付録「語彙表」(在満日本教育会 教科書編輯部)(9), 3・6, 303

第4期国定算数教科書見出し一覧(国立国語研究所)(121), 3・3・2

楽しい語句・語いの指導(東京都青年国語研究会 東洋館出版社)141

単語・イディオム・文型の統計研究(速川浩 大修館書店)4・10・④

中学国語基本語句3100語(阪本一郎 むさし書房)4・3・①

中学校教科書の語彙調査(国立国語研究所 秀英出版)(97), 3・3・2, 185, 245

中学校語彙指導の活性化(浜本純逸 明治図書)205

中国語分類単語集(沢山晴三郎 大学書林)4・3・②

低学年向け基本語い(興水実・沖山光『言語教育と言語教材』金子書房)(28), 3・7・2

定着をめざした学習基本語彙の指導 小学校(福沢周亮・岡本まさ子 教育出版)177, 206

低年齢層を対象とした日本語教育教材のための基礎調査(藤田正春他 国立国語研究所)(71), 3・8・1, 7

テレビ放送の語彙調査(国立国語研究所 秀英出版)(114), 3・2・2, 5, 16

電子計算機による国語研究 III(国立国語研究所 秀英出版)(58), 3・7・1, 6

電子計算機による新聞の語彙調査(国立国語研究所 秀英出版)(55), 3・11, 4, 142, 143, 169, 199

土居光知著作集 第四巻 言葉とリズム(岩波書店)61

富山市児童言語調査(富山市教育委員会)(29), 3・9

南方への日本語対策(大久保正太郎『教育』第10巻第5号)52

日・米・ソ連語いの比較研究(根本今朝男・浜本純逸・森田信義)4・6・③

日本語基本語彙(国語協会)(25), 3・8・1, 3, 71

日本語基本語彙(岡本禹一 国際文化振興会)(26), 3・8・1, 4, 69, 94, 98, 112, 137, 180, 199

日本語基本語彙 幼年之部(阪本一郎 明治図書)(23), 3・7・3, 4, 95, 98, 146, 194, 195, 275

日本語教育映画 基礎編 総合語彙表(国立国語研究所 日本シネセル)(96), 3・8・4, 228, 258

日本語教育映像教材 中級編 伝えあうことば 2 語彙表(国立国語研究所 大蔵省印刷局)(105), 3・8・4, 210, 258

日本語教育映像教材 初級編 日本語でだいじょうぶ 語彙表(国立国語研究所)(120), 3・8・4, 210, 228

日本語教育機関におけるコース・デザイン(日本語教育学会 凡人社)(106)

日本語教育基本語彙2570語(玉村文郎『日本語教師養成通信講座 日本語の語彙・意味(1)(2)』アルク)(99), 3・8・2, 131, 277

日本語教育基本語彙 第一次集計資料(1) — 上位二千語 — (国立国語研究所)(68), 3・8・2, 166, 167, 179, 180, 181, 198, 199, 217, 284

日本語教育基本語彙 第一次集計資料 — 2000語索引(国立国語研究所)155

日本語教育基本語彙 第一次集計資料 — 六千語 — (国立国語研究所)(69), 3・8・2, 154, 192, 193, 198, 199, 284

- 日本語教育基本語彙 第一次集計資料 — 6000語索引(国立国語研究所)157, 198
- 日本語教育基本語彙七種比較対照表(国立国語研究所 大蔵省印刷局)(81), 3・8・2, 71, 133, 155, 198, 199, 207, 237, 298, 304
- 日本語教育基本語彙六種比較対照表(国立国語研究所)180
- 日本語教育語彙資料(1)(2) — 低学年初級500語 — (国立国語研究所)(74), 3・8・1, 155, 180, 199
- 日本語教育重要語比較表(加藤彰彦 文化庁)112
- 日本語教育における基礎学習語(加藤彰彦『日本語教育』)(47), 3・8・1, 4, 5, 63, 146, 180, 199, 207, 296, 301
- 日本語教育のための基本語彙調査(国立国語研究所 秀英出版)(90), 3・8・2, 5, 7, 8, 155, 157, 181, 193, 219, 232, 245, 248, 249, 252, 257, 284
- 日本語教科書語彙リスト(国立教育研究所)(100), 3・8・1
- 日本語教科書の語彙分析 — 『中日交流標準日本語』(馮曉雲)4・13・③
- 日本語教師養成通信講座 日本語の語彙・意味(玉村文郎 アルク)(99)
- 日本語教授の具体的研究(上甲幹一 旺文社)63
- 日本語指導教材 にほんごを まなぼう 教師用指導書(文部省 ぎょうせい)(110), 3・8・5, 248, 252, 288, 318
- 日本語初級教科書によく使われる語(『日本語教育機関におけるコース・デザイン』日本語教育学会 凡人社)(106), 3・8・1
- 日本語中心六カ国語辞典(原書房)257
- 日本語と日本語教育 — 語彙編(文化庁 大蔵省印刷局)133
- 日本語能力試験 出題基準(国際交流基金・日本国際教育協会 凡人社)(113), 3・8・3, 5, 233, 318
- 日本語の姿(土居光知 改造社)(21), 29, 50, 51, 94
- 日本語文の性格(小泉孝三 立命館出版部)52
- 日本人の知識階層における話しことばの実態 — 語彙表 — (志部昭平 国立国語研究所)(76), 3・2・2, 180, 199, 245
- 入門期語彙一覧(『小学校教科書の学習内容に関する用語・用法などの言語表現等に関する調査研究』上越教育大学言語系国語コース教科書研究プロジェクト)4・6・⑤
- 入門期の言語能力(国立国語研究所 秀英出版)8
- 入門日本語辞典(京都橋女子大学・海外に日本語教材を送る会)(119), 3・8・1, 299
- はじめての国語じてん(林四郎 NHK出版)4・1・⑦, 248
- パーマと日本の英語教育(伊村元道 大修館書店)316
- パソコンによる外国人のための日本語教育支援システムの開発報告書(国立教育研究所)(100)
- 場面を重視した日本語指導の改善(東京都目黒区東根小学校)(117)
- ビジネスマンのための実戦日本語(国際日本語普及協会 講談社)4・2・⑥
- 品詞別・レベル別1万語語彙分類集(専門教育出版)(107), 3・8・3
- 藤友(1980)による四歳児・五歳児・六歳児の基本語彙(藤友雄暉『子どもの言語心理2』大日本図書)4・5・②
- フロッピーディスク版 古典対照語彙表 および使用法(宮島達夫・中野洋・鈴木泰・石井久雄 笠間書院)312
- フロッピー版・日本語研究文献目録(国立国語研究所編 秀英出版)6
- 文法と語彙(大野晋 岩波書店)4・8・④
- 分類児童語彙 上巻(柳田國男 東京堂)4・7・②
- 分類語彙表(国立国語研究所 秀英出版)(49), 3・11, 4, 43, 85, 91, 93, 122, 125, 126, 143, 152, 154, 155, 156, 161, 164, 165, 166, 167, 173, 178, 183, 187, 191, 197, 198, 200, 205, 232, 233, 237, 245, 248, 279, 284, 303, 307, 308, 312, 314, 320, 321
- 分類ハタタコ語彙 稿本(林大 国立国語研究所)4・13・②
- 平安朝和文作品の語彙研究(山本トシ『学習院大学国語国文学会誌』14)313
- 「マルチメディアによる語彙力調査とその教材化」における語彙調査のための語彙リスト(須藤とみゑ・早川敦子)4・12・②
- 光村学習国語辞典(石森延男 光村図書)4・1・⑤, 179, 186, 187

- 光村図書版 学習基本語彙表(甲斐睦朗 光村図書)(84), 3・7・2, 318, 322
- 文字・語句教育の理論と実践(松山市造・小林喜三男 一光社)(77), 3・7・4, 109, 122, 126
- 文部省の調査による級別学習基準語彙表(『新国語学習辞典』光文書院)103, 127, 295
- 豊かな文章表現力を育てるための基礎研究(生稲陽一)(92), 3・2・1
- 幼児言語の発達(大久保愛 東京堂出版)(53), 3・2・2, 23, 146, 183, 296, 308
- 幼児語彙の統合的発達の研究(前田富祺・前田紀代子 武蔵野書院)307
- 幼児・児童の連想語彙表(国立国語研究所 東京書籍)4・11・①
- 幼児の言語の発達(久保良英『児童研究所紀要』中文館書店)(2), 3・2・2, 3, 308
- 幼児の言語発達(愛育研究所 目黒書店)(19), 3・2・2, 23, 77, 95, 308
- 幼児の語彙能力(国立国語研究所 東京書籍)4・9・④
- 幼児の語彙発達の研究(前田富祺・前田紀代子 武蔵野書院)4・5・①
- 幼児のこくご 絵じてん(大久保愛 三省堂)4・1・③, 248
- 幼児のことばカード集1～5(国立国語研究所)296
- 用例集 幼児の用語(岩淵悦太郎・村石昭三 日本放送出版協会)(63), 3・2・2
- ヨミカタ〜四 総合語彙の品詞別調査(廣瀬榮次『コトバ』)(18), 3・3・1, 15, 59
- 読んで話す日本語ボキャブラリー(Alistair C. G. Seton・他 北星堂書店)4・3・③
- 留学生教育のための基本語彙表(樺島忠夫・吉田弥寿夫『日本語・日本文化』)(57), 3・8・2, 4, 180, 199
- 例解新国語辞典(三省堂)299
- 6才児の親近語彙のリスト(阪本一郎『絵本の研究』)(64), 195
- A Classified List of Basic Japanese Vocabulary(ネウストブニー Monash University)(65), 3・8・1, 180, 199
- A Teacher's Word Book of 20,000 Words(Edward L.Thorndike, Columbia University)4・10・②
- Basic English(基礎英語, ベーシック・イングリッシュ, ページック)3, 28, 29, 30, 34, 35, 42, 50, 60, 70, 142, 237, 277
- Basic Japanese Vocabulary(ネウストブニー Japanese Studies Centre)(65)
- Beginner Book Dictionary(P. D. Eastman Random House. Inc.)296
- English-Japanese & Japanese-English Dictionary(Oreste Vaccari)130
- Grammar and Glossary(長沼直兄 開拓社)112, 121, 300, 301
- How to Speak Japanese(国際学友会日本語学校)4・2・③
- How to Speak Japanese Romanized(田尾司六 福村書店)4・2・①
- Interim Report on English Collocations(Harold E.Palmer)316
- Interim Report on Vocabulary Selection submitted to the Seventh Annual Conference of English Teachers (Harold E.Palmer 開拓社)4・10・③
- Nihongo no Hanasikata(How to Speak Japanese)(国際学友会日本語学校)4・2・③, 112, 121
- Practical Japanese-English Dictionary(実用和英辞典)(海外技術者研修協会)(56), 180, 199
- Roget' International Thesaurus 34, 35, 293
- Second Interim Report on Vocabulary Selection(Harold E.Palmer)316
- The ABC of Basic English(C.K.Ogden)4・10・①
- The AOTS Nihongo Dictionary for Practical Use(日本語実用辞典)(海外技術者研修協会)131
- The Basic Words;A Detailed Account of Their Uses(C.K.Ogden)4・10・①
- The First 500 English Words of Most Frequent Occurrence(Harold E.Palmer)316
- The Japan Times'6-Language-Dictionary(原書房)257
- The Second 500 English Words of Most Frequent Occurrence(Harold E.Palmer)316
- The Teacher's Word Book(Edward L.Thorndike, Columbia University)4・10・②
- The Teacher's Word Book of 30,000 Words(Edward L. Thorndike & Irving Lorge, Columbia University)4・10・②
- VOA 放送 Special English 237
- Word Book Vol.One(長沼直兄 開拓社)4・2・②

2 編著者名索引

1 本報告書に掲げた語彙表に関する研究文献の編著者名を中心に五十音順に掲載する。

2 教科書及びテキスト類の編著者名は取り上げない。ただし、例に示すように、「4 本報告で取り上げない文献」として掲げた教科書及びテキスト類の編著者名は取り上げている。

(例)

NIHONGO NO HANASIKATA 国際学友会日本語学校著 国際学友会発行

3 文部省、文化庁、国立国語研究所の3機関の名称については省略する。

4 学校や研究機関、出版社などの場合は、その内部組織は掲載しない。ただし、例に示すように必要に応じて掲載した機関もある。

(例)

言語文化研究所	→	言語文化研究所
言語文化研究所附属東京日本語学校	→	言語文化研究所附属東京日本語学校
東京日本語学校		

5 「財団法人」「社団法人」などの法人を表す呼称は、取り外す。

(例)

恩賜財団愛育会愛育研究所	→	愛育会愛育研究所
社団法人国際日本語普及協会	→	国際日本語普及協会

6 公立学校及び公立の教育研究所は、次に例示するように「立」を外して示した。

(例)

兵庫県加古郡加古川町立永丘尋常小学校	→	兵庫県加古郡加古川町永丘尋常小学校
横浜市立教育研究所	→	横浜市教育研究所

7 「中央教育研究所」のように、編集、刊行の両方を兼ねる機関については、編集と刊行が区別しがたいので、多めの記載になっている。

編 著 者 名 索 引

- 愛育会愛育研究所56, 308
 愛知県学習基本語彙研究会 8
 浅野鶴子62, 63, 323
 阿左美厚子157
 安達隆一138
 「新しい国語」編集委員会164, 165
 阿部直美304
 荒木紀幸317
 安西勉夫309
 P.D.Eastman296
 生稲陽一202
 池原楯雄96
 石黒由香里 6
 石黒修41, 45, 49, 50, 52, 59, 68, 71, 324
 石坂艶治46
 石森延男74, 297
 泉井久之助293
 井上一郎196, 322, 323
 井上越44
 井上敏夫51
 井之口有一46, 68
 伊村元道316
 岩倉具実68
 岩淵悦太郎144
 インターカルト日本語学校230
 Oreste Vaccari130
 上田萬年25
 牛島義友56
 内子中学校150, 175
 内山薫 3, 26
 大石譲46
 大久保愛124, 182, 248, 295, 296, 308
 大久保正太郎52
 大久保忠利108
 大阪市矢田小学校 7, 96
 大島孜114, 310
 大槻芳廣 3, 44, 45
 大野晋94, 313
 岡崎常太郎46
 岡本禹一70, 181
 岡本千万太郎45, 52
 岡本まき子176, 177, 204
 岡山県師範学校附属小学校38, 39
 岡山市丸之内中学校174
 小本尋常高等学校国語研究部304
 沖山光74
 C. K. Ogden(オグデン)28, 30, 34, 42, 70,
 134, 142, 315
 長田新15, 20
 落合一郎220
 お茶の水女子大学附属中学校175, 242,
 286, 288
 小沼悦117
 海外技術者研修協会 4, 130, 299
 海外に日本語教材を送る会(京都橋女子大学)
256, 299
 外国人子女の日本語指導に関する調査研究協力者会議
262
 垣内松三 3, 30, 31, 34, 35, 42, 43, 45, 54,
 75, 82, 122, 123, 126, 293, 310
 甲斐睦朗 8, 178, 186, 205, 309
 加藤彰彦 4, 63, 112, 181
 加藤因46
 金澤庄三郎20, 25
 賀根俊栄82
 金子博297
 加納千恵子304
 樺島忠夫 4, 132, 133, 181
 加茂正一68
 川又瑠璃子182, 240
 蒲原静美86
 菊地知勇311
 北村甫94
 岐阜大学教育学部附属カリキュラム開発研究センター
158
 木村睦子255
 教育技術研究所297, 298
 教育調査研究所206, 308, 317
 京極興一222
 金田一京助108
 工藤真由美 5, 248, 249, 296
 久保良英 3, 22, 308
 熊澤龍68
 倉澤栄吉140, 141
 倉持保男164, 200, 201
 栗本捨次郎48
 言語文化研究所62, 63
 言語文化研究所附属東京日本語学校121, 230
 小泉菱三52
 M. Cohen94, 95
 神戸市教育研究所314
 神戸大学教育学部語彙指導研究会204

- 国語教育研究所74
 国語協会 3, 52, 55, 58, 68, 282, 324
 国語協会教育部46, 310
 国際学会友会日本語学校112, 121, 230, 301
 国際交流基金 5, 214, 218, 244, 299, 318
 国際日本語普及協会302
 国際文化振興会 4, 69, 70, 98, 112, 282
 国立教育研究所218
 奥水実74, 82, 127, 294
 後藤忠彦158
 小西甚一311
 木幡智実249
 小林喜三男172
 五味義武44
 斎藤慎一311
 在満日本教育会教科書編輯部36, 41, 303
 阪本一郎 4, 7, 64, 75, 98, 112, 113,
 117, 122, 141, 142, 146, 161, 164,
 165, 194, 195, 203, 204, 205, 225,
 278, 280, 303, 318
 佐々木定夫308
 札幌市石山小学校国語研究部308
 佐藤孝71
 真田信治 6, 170
 澤柳政太郎3, 6, 15, 20, 24
 沢山晴三郎303
 児童言語研究会(児言研) 7, 108, 109, 122,
 126, 139, 172, 173, 281
 児童言語ゼミナール196
 志部昭平170, 180, 181
 島村直己 7, 99, 188
 下瀬謙太郎68
 寿岳章子134, 312
 上甲幹一63
 湘南国語研究会 3, 32, 33
 情報局52
 新国語教育学会74
 新村出98, 280
 杉原勇46
 杉山彦一郎86
 鈴木磐雄46
 須藤とみゑ318
 Morris Swadesh94, 95
 Alistair C.G.Seton304
 専門教育出版232
 E. L. Thorndike(ソーンダイク)56, 315,
 316, 317
 田尾司六300
 高田力315
 高橋源次112
 高山茂七郎46
 竹原常太103, 269, 295, 323
 田中末廣15, 20, 24
 田中久直 7, 88, 90, 98
 玉村文郎61, 130, 131, 181, 216, 217, 277
 千葉県山武郡方言調査会25
 千葉県鳴浜小学校職員研究会 3, 24
 中央教育研究所 5, 7, 142, 152, 164,
 165, 200, 201, 204
 中等国語編修委員会305
 鶴岡昭夫208, 297, 309
 土居光知 3, 16, 28, 34, 37, 50, 60, 61,
 75, 130, 134, 142, 216, 217, 237,
 277, 282, 304, 314, 315
 東京書籍編集部第一編集課78
 東京外国語大学 5, 6, 262, 286, 288
 東京外国語大学附属日本語学校230
 東京外国語大学留学生日本語教育センター263
 東京都青年国語研究会141
 戸田功309
 富田繁44
 友定賢治311
 富山県大澤野小学校国語研究部313
 富山市教育委員会76, 287
 豊橋技術科学大学314
 豊橋市二川小学校138
 長島恵子306
 中曽根仁240
 中田敏夫234
 中野区仲町小学校302
 中野洋 7, 161, 201
 長野師範学校男子部附属国民学校教科研究会66
 長沼直兄112, 300
 成瀬正行158
 西尾実52
 日本国際教育協会 5, 244
 日本語教育振興会52, 62, 63, 112, 323
 日本語教育学会230, 282, 318
 日本語研究所(K. I. T.)304
 日本児童教育振興財団208
 ネウストブニー(J. V. Neustupný)148, 181
 根本今朝男308
 野上有道46
 野地潤家 6
 野村雅昭208
 野元菊雄237
 Harold E. Palmer(パーマー)96, 316
 畠道夫46
 波多野ファミリースクール 5, 250, 262,
 263, 286, 288

- Buck95
 服部四郎 4, 94
 浜松市上島小学校302
 浜本純逸205, 308
 早川敦子318
 速川浩316
 林大192, 320
 林進治16, 122, 126, 138
 林四郎6, 134, 135, 142, 152, 168, 169, 190,
 191, 204, 206, 207, 248, 276, 278, 298
 林史典297
 ビエロン96
 飛田多喜雄 6
 飛田良文319
 平井昌夫294
 馮曉雲(ひょうぎょううん)321
 兵庫県加古川町氷丘尋常高等小学校48
 平山輝男 5, 162
 廣瀬榮次15, 54, 58
 福沢周亮176, 177, 204, 269, 307, 308
 福田武雄68
 藤井罔彦164
 藤田正春160, 218, 304
 藤友雄輝307
 文化外国語専門学校230
 保科孝一44, 68
 細井房夫68
 細川英雄222
 前田紀代子307
 前田富祺307
 前野慶治46
 松井簡治25
 松岡静雄32, 33
 松川利広179, 318
 松川文太86
 松永立志 7
 松宮一也52, 71
 松山市造122, 126, 172
 水谷静夫 6, 100, 190, 278
 南満州教育会教科書編輯部 3, 40
 箕輪三郎52
 峰間信吉44
 宮川菊芳46
 三宅武郎40, 45
 宮島達夫117, 256, 312, 313
 宮田幸一46
 三好七郎68
 武藤宏子313
 村石昭三144, 248, 296
 目黒区東根小学校252, 286, 288
 森岡健二269, 323
 森田信義308
 森脇要56
 柳田國男311
 山口正63, 323
 山下秀雄62
 山村潔76
 山本建雄314
 山本トシ313
 湯澤幸吉郎46
 湯山清46, 68, 71
 横須賀薫30, 31
 横浜国立大学 5, 248, 249, 286, 288
 横浜市教育研究所 4, 86, 122
 横浜市奈良小学校108, 122, 126, 127
 吉岡亮衛218
 吉田澄夫71
 吉田則夫317
 吉田弥寿夫 4, 132, 181
 リチャーズ142
 Irving Lorge316, 317
 Peter Mark Roget(ロジェ, ローゼット)34,
 35, 42, 43, 293

Study of Vocabulary Lists of Basic Japanese Vocabulary

Purpose and Methods of the Report

This report investigates approximately 200 studies that provide vocabulary lists of basic/fundamental modern Japanese words. These studies were conducted primarily in Japan, either for educational purposes or as surveys. All of these studies were carried out during the past 80 years, beginning with the work done by Seitaro Sawayanagi in 1919 and ending with the research conducted at Tokyo University of Foreign Studies in 1998. A brief sketch of the organization of this report follows. In Part 2, 122 important studies are listed in chronological order, according to their publication dates. Two pages of commentary are provided for each study. In Part 3, these studies are classified into different categories and the characteristics of each category are described. Finally, in Part 4, 60 additional studies, not included in the previously mentioned 122, are listed according to the category to which they belong.

<Contents>

1. Purpose and Methods of the Report
 - 1.0 Introduction
 - 1.1 Purpose of the Report
 - 1.2 The Concepts of "Basic Vocabulary" and "Fundamental Vocabulary"
 - 1.3 Number of Studies Dealt with in the Report
 - 1.4 Places Where the Studies are Stored
 - 1.5 The Production of the Database
 - 1.6 Staff in Charge and Progress of the Research
2. Commentary on Lists of Basic Vocabulary for Educational Purposes
 - 2.1 List of Studies of Basic Vocabulary
 - 2.2 Criteria for Inclusion of the Studies
 - 2.3 Commentary on the Studies of Basic Vocabulary
3. Research on Basic Vocabulary Contained in the Studies
 - 3.0 Introduction
 - 3.1 Research on Vocabulary Understood by Elementary and Junior High School Students
 - 1.1 Research on Vocabulary Understood by Newly-Entering Elementary School Students
 - 1.2 Research by the Ministry of Education on Vocabulary Understood by Elementary and Junior High School Students Using an Introspective Method
 - 3.2 Research on Vocabulary Used by Elementary and Junior High School Students
 - 2.1 Vocabulary Used in Compositions
 - 2.2 Vocabulary Used in Spoken Language
 - 3.3 Research on Vocabulary Items in Textbooks
 - 3.4 Research on Readings Written for Infants and Elementary School Students
 - 3.5 Research on Chinese Characters and Vocabulary
 - 3.6 Selection of Fundamental Japanese Words

- 3.7 Creation of Basic Vocabulary Lists for Educational Purposes
- 7.0 Classification of Studies of "Basic Vocabulary"
- 7.1 Theoretically Motivated Basic Vocabulary Lists
- 7.2 Basic Vocabulary Necessary for Expressiveness
- 7.3 Basic Vocabulary Necessary for Comprehension
- 7.4 Basic Vocabulary Necessary for Thinking and Cognition
- 3.8 Basic Vocabulary for Japanese Proficiency
- 8.0 Basic Vocabulary for Japanese Proficiency
- 8.1 Basic Vocabulary Lists for the General Elementary Level
- 8.2 Basic Vocabulary Lists for Foreign Students
- 8.3 Vocabulary Lists for Japanese Proficiency Measurements
- 8.4 Vocabulary Used in Visual Materials (Scenarios) for Japanese Education
- 8.5 Vocabulary for Elementary and Junior High School Students
- 3.9 Fundamental Vocabulary for Research on Language
- 3.10 Vocabulary Items for All Aspects of School Life
- 3.11 Research on Vocabulary Done by The National Language Research Institute

4. Studies Excluded from this Report

- 4.0 Introduction
- 4.1 Entries in Japanese Language Dictionaries
- 4.2 Vocabulary Lists Provided at the End of Textbooks
- 4.3 Vocabulary Lists Compiled for Self-Study by Native and Non-native Japanese Learners
- 4.4 Vocabulary Lists in Relation to Chinese Characters
- 4.5 Vocabulary List for the Linguistic Development of an Infant
- 4.6 Vocabulary Lists Made for First-Grade Students
- 4.7 Vocabulary Lists Closely Related to Elementary School Students' Lives
- 4.8 Basic Vocabulary Related to Japanese Classical Literature
- 4.9 Vocabulary Lists of Particular Words, such as Parts of Speech
- 4.10 Basic Vocabulary of Foreign Languages
- 4.11 Vocabulary Lists Made for Various Research Purposes
- 4.12 Vocabulary Lists Orally Presented at Conferences
- 4.13 Vocabulary Lists Not Dealt with in this Report for Other Reasons
- 4.14 Studies for Which We Were Unable to Obtain the Originals

(Postscript)

- 1. Bibliography
- 2. List of Editors

国立国語研究所報告116

日本語基本語彙 — 文献解題と研究 —

平成12年 3 月31日

国 立 国 語 研 究 所

〒115-8620

東京都北区西が丘 3 丁目 9 番14号

電話 03-3900-3111 (代表)

UDC 811.521'06-373

(平11-17)

NDC 814.3